

徳丸仲田遺跡 (2)

北関東自動車道(高崎～伊勢崎)地域
埋蔵文化財発掘調査報告書第18集

2002

日 本 道 路 公 団
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

TOKU MARU NAKA DA

徳丸仲田遺跡 (2)

北関東自動車道(高崎～伊勢崎)地域
埋蔵文化財発掘調査報告書第18集

2002

日 本 道 路 公 団
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

北関東自動車道は、群馬県高崎市の関越自動車道高崎ジャンクションから分岐し、茨城県に至る延長150kmの高速道路です。内陸の群馬県から栃木県を経て太平洋側の茨城県に至るルート上には、北関東の主要都市や東北自動車道、常磐自動車道が結ばれ、これらの高速道路網の整備によって首都圏外郭地域の発展に大きく寄与するものと期待されています。

徳丸仲田遺跡は前橋市南部の北関東自動車道建設予定地内にあり、埋蔵文化財保護と開発の調整を図るため工事に先立って発掘調査が行われました。調査は平成9年度から11年度をあしかけ3年にわたり、多大な成果を収めることができました。そしてこの度、その成果を『群馬県埋蔵文化財発掘調査報告書第311集』として刊行するはこびとなりました。

本遺跡の発掘調査では、県内でも最古に位置づけられる縄文土器や石器製作跡をはじめとして、古墳時代の幕開けを解き明かす大水路や古代水田の跡、またこれらを作り上げた古代人たちの住む開拓集落などの存在が明らかにされました。本遺跡のある前橋市南部の水田地帯では、これまでほとんど発掘調査が行われたことがありませんでしたが、この度の北関東自動車道建設に伴う発掘調査の成果によって、古代の文献や記録では明らかにされなかった原始・古代の真の歴史像が、いままさに解き明かされようとしています。本書は、徳丸仲田遺跡の報告書第2冊目として、地中に残された縄文時代から江戸時代までのほぼ6000年にもわたる歴史の足跡を余すところなく記録してあります。ここで得られた貴重な埋蔵文化財や明らかになった歴史的事実は、いうまでもなく国民共有の財産であり、ここにその成果を公表することで広く活用されることを願ってやみません。

おわりに、発掘調査にあたって惜しみないご指導とご協力を頂いた群馬県教育委員会、前橋市教育委員会、そして調査の進捗に多大なるご理解を頂いた前橋市徳丸地区のみなさまに心から感謝の意を表すとともに、調査に携わった担当者と作業員の方々の労をねぎらい序といたします。

平成15年3月

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 小野 宇三郎

例 言

1 本書は北関東自動車道（高崎—伊勢崎）の工事に伴う徳丸仲田遺跡（遺跡略号KT-100）の発掘調査報告書である。本書は縄文時代以降の遺構と遺物を扱い、第2冊目とした。

2 徳丸仲田遺跡の所在地は以下の通り
群馬県前橋市徳丸町74・75・87～90・93～97・103～111・125～130・140・152～156・162～165・171～175・178～183番地

3 遺跡名称は大字「徳丸」と小字「仲田」を組み合わせ徳丸仲田（とくまるなかだ）遺跡とする。

4 事業主体は日本道路公団、調査及び整理事業主体は財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団である。

5 発掘調査期間
平成9年4月1日～平成10年12月31日

6 調査組織
理事長 小寺弘之（平成9年度～10年6月）
菅野 清（平成10年度）
常務理事 菅野 清（平成9年度～10年6月）
赤山容造（平成10年度）
事務局長 原田恒弘 赤山容造
管理部長 渡辺 健
調査研究第2部長 神保侑史
管理部総務課長 小淵 淳 坂本敏夫
調査研究部第6課長 佐藤明人
管理部総務課事務担当 笠原秀樹・須田朋子・

小山建夫・井上 剛・吉田有光・柳岡良宏・岡嶋伸昌・宮崎忠司・大沢友治

事務補助 吉田恵子・並木綾子・今井もと子・内山佳子・星野美智子・羽鳥京子・若田 誠・佐藤美佐子・本間久美子・北原かおり・安藤友美・松下次男・浅見宣記・吉田 茂・狩野真子

調査担当 大木紳一郎・飯田陽一・南雲芳昭・矢口裕之・蜂須賀里佳・西原和久・斉藤幸男

7 整理期間
平成13年4月1日～平成14年12月31日

8 整理組織
理事長 小野宇三郎
常務理事 赤山容造（平成12・13年度）
吉田 豊（平成13・14年度）
事業局長 神保侑史
管理部長 住谷 進 萩原利通
調査研究部長 能登 健 巾 隆之
管理部総務課長 坂本敏夫 植原恒夫
資料整理課長 西田健彦
管理部総務課事務担当 笠原秀樹・小山建夫・高橋房雄・須田朋子・吉田有光・森下弘美・片岡徳男・田中賢一
事務補助 吉田恵子・並木綾子・今井もと子・内山佳子・星野美智子・羽鳥京子・若田 誠・佐藤美佐子・本間久美子・北原かおり・安藤友美・松下次男・浅見宣記・吉田 茂・狩野真子・菅原淑子・山口陽子・山本正司
整理担当 大木紳一郎
整理補助 高橋真樹子・関 正江・萩原由美子・星野春子・宮沢房子・小林恵美子・立川千栄子・伊藤幸代・荻野恵子・須田育美・高梨房枝
遺物写真撮影 佐藤元彦
保存処理 関 邦一・土橋まり子・横倉知子・小材浩一

9 本書の作成は以下の者が行った。
編集 大木紳一郎
執筆 第1～3章 大木紳一郎
第4章 鈴木茂・新山雅広・三村昌史
(パレオ・ラボ)

10 花粉・植物化石・樹種の分析に関しては株式会社パレオ・ラボに依頼した。

11 出土遺物と発掘調査記録資料、記録写真は群馬県埋蔵文化財センターで保管している。

12 下記協力者に厚く御礼申し上げます(敬称略)
群馬県教育委員会・前橋市教育委員会・玉村町教育委員会・飯島静男・中里正憲・石坂 茂

凡 例

1 遺構の位置は国家座標に基づいた数値で示した。数値は、日本平面直角座標系（平成10年度）第IX系の原点である北緯36度0分0秒0000、東経139度0分0秒0000を（0.0）とした。

2 遺構名称は各区のアルファベット名A～J、算用数字、遺構の種類順で呼称する。

3 本書の編集は大まかに時代区分した上で掲載してある。このうち、縄文時代草創期については『徳丸仲田遺跡（1）』2001に掲載した。時代区分は以下の通りである。

縄文・弥生時代 古墳時代前期より古い遺構
古墳時代 4世紀～6世紀の遺構と遺物
古 代 7世紀～12世紀の遺構と遺物
中・近世 12世紀以降の遺構と遺物
時期不明 出土遺物なく、時期認定不可能
時代区分に従って遺構を掲載したため、必ずしも遺構番号は順番にはなっていないので注意されたい。

3 遺構番号は発掘調査時点のものを用いた。そのため、後日遺構と認められないものに関しては欠番とした。

4 遺構の位置に関しては、各節の頭に全体図を掲げて示したが、遺構数の多いH・I・J区については付図として遺構分布図を参照されたい。

5 挿図の縮尺は、住居跡・掘立柱建物跡・井戸・土坑などを1/60としたが、水田跡・水路・河川跡などの大きな遺構についてはこの限りではなく、各挿図に付したスケールを参照されたい。なお、遺物については土器類を1/4、小型石器類や玉・銭貨などの小型品を1/1～2、大型木製品1/6とした。

6 遺構規模の計測については、平面では上端間の最大値、深さは検出レベルからの最大値を記録したが、数値の偏差の大きいものには最大値～最小値を記した。

7 遺構平面図に示した方位記号はすべて国家座

標上の北を指す。

8 遺構断面図には標高値（m）を数値で表記した。

9 遺構図の線種については、上端線を太く、下端線を細くしてあるが、水田の場合は畦の下端線を重視したため、これを太くしてある。また、推定線については破線で表現している。

10 遺物番号は帰属する遺構毎に通番で示したが、井戸・土坑・溝・遺構外出土遺物に関しては一括して通番を付した。

11 遺物の表現では、文様以外に刷毛目・削り・なで・研磨・指押さえ等の整形技法を表し、方向のわかる削りは→を記した。また、塗彩や施釉部分については網目のトーンで表現してある。

12 本書記載に用いたテフラ略称は以下の通り。

As-A：浅間山A軽石（天明3年 1783年）

As-B：浅間山B軽石（天仁元年 1108年）

As-C：浅間山C軽石（紀元300年前後説採用）

As-YP：浅間山板鼻黄色軽石（1.3～1.4万年前）

Hr-FA：榛名山二ツ岳火山灰（6世紀初）

13 本書で使用したテフラの名称や地層層序は以下の文献によった。

矢口裕之 1998「テフラの編年」『群馬県遺跡大事典』付録p2～3

矢口裕之 1999a「群馬県北西部のテフラとローム層の層序」『研究紀要 16』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 p61～91

矢口裕之 1999b「群馬県徳丸仲田遺跡の縄文時代草創期遺物包含層の層序と古環境」『研究紀要 17』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 p13～24

矢口裕之 2001「第1章 5 遺跡周辺の層序」『徳丸仲田遺跡（1）縄文時代草創期編』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 p11～18

14 土層注記の色名は『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 1996）に従って記載した。

序
例言・凡例
目次

目次

第1章 発掘調査の経過

1	調査に至る経緯	1
2	周辺の地形環境	1
3	周辺の歴史的環境	3
4	調査の方法と経緯	7
5	遺跡の基準層序	9

第2章 検出された遺構と遺物

1	縄文時代・弥生時代の遺構と遺物	11
	溝群 陥穴状遺構 立木遺構 河川跡 倒木痕 縄文土器と石器 弥生土器	
2	古墳時代の遺構と遺物	33
	住居跡 掘立柱建物跡 柵列 井戸跡 土坑 水田跡と水路 遺構外遺物	
3	古代の遺構と遺物	132
	住居跡 掘立柱建物跡 柱列 塚 竪穴遺構 井戸跡 土坑 水田跡と水路	
4	中・近世の遺構と遺物	233
	屋敷跡 掘立柱建物跡 柱列 井戸跡 溝 土坑 墓墳	
5	時期不明の遺構	262
	掘立柱建物跡 柱列 周溝遺構 溝	

第3章 遺物一覧表

第4章 自然科学分析

1	徳丸仲田遺跡出土試料の花粉分析（鈴木 茂）	293
2	徳丸仲田遺跡から出土した大型植物化石（新山雅広）	295
3	徳丸仲田遺跡出土材の樹種構成（三村昌史）	299

写真図版
抄 録

付 図 H・I・J区遺構分布図

挿図目次

第 1 図	徳丸仲田遺跡の位置	1	第 62 図	古墳時代の井戸跡 (1)	61	第 120 図	J 区河川跡 1 号河道出土遺物 (6)	
第 2 図	群馬県泉央地域の接峰面図	2	第 63 図	古墳時代の井戸跡 (2)	62		木製品	125
第 3 図	周辺の遺跡	4	第 64 図	古墳時代の井戸跡 (3)	63	第 121 図	J 区河川跡 1 号河道出土遺物 (7)	
第 4 図	調査区分図	8	第 65 図	井戸跡出土遺物 (1)	64		木製品	126
第 5 図	基準層序柱状図	9	第 66 図	井戸跡出土遺物 (2)	65	第 122 図	J 区河川跡 1 号河道出土遺物 (8)	
第 6 図	前橋台地の層序	10	第 67 図	井戸跡出土遺物 (3)	66		木製品	127
第 7 図	弥生時代以前の遺構分布図	11	第 68 図	井戸跡出土遺物 (4)	67	第 123 図	J 区河川跡 2 号河道出土遺物	128
第 8 図	D 区 12・13 号溝断面	12	第 69 図	井戸跡出土遺物 (5) 木製品	68	第 124 図	J 区河川跡出土遺物	129
第 9 図	D・E 区弥生時代以前の溝群	13	第 70 図	I 区 40・44・60・65 号土坑出土遺物	69	第 125 図	遺構外出土遺物 (1)	130
第 10 図	E 区 6・7・8 号溝断面	14	第 71 図	古墳時代の土坑 (1)	70	第 126 図	遺構外出土遺物 (2)	131
第 11 図	E 区 6 号溝出土土器	14	第 72 図	古墳時代の土坑 (2)	71	第 127 図	古代の遺構分布図	132
第 12 図	E 区陥穴	15	第 73 図	古墳時代の水田跡と水路の 分布図	75・76	第 128 図	H 区 1 号住居跡及び出土遺物	133
第 13 図	E 区立木出土状況	15	第 74 図	A・B 区古墳時代の I 期水田跡に 伴う水路	77	第 129 図	H 区 2 号住居跡	134
第 14 図	B 区河川跡断面	16	第 75 図	A 区 9 号溝の堰遺構	78	第 130 図	H 区 5 号住居跡	134
第 15 図	B 区河川跡	17	第 76 図	A 区 9 号溝遺物出土状況	79	第 131 図	H 区 6 号住居跡及び出土遺物	135
第 16 図	D 区河川跡	18	第 77 図	A 区 9・10 号溝土層断面	80	第 132 図	H 区 7 号住居跡	136
第 17 図	A 区倒木痕	19	第 78 図	A 区 9 号溝出土木製品	81	第 133 図	H 区 8 号住居跡出土遺物	136
第 18 図	石器の分布図	20	第 79 図	A 区 8 号溝	82	第 134 図	H 区 8 号住居跡	137
第 19 図	縄文土器	21	第 80 図	B 区古墳時代 I 期水田跡に伴う 水路土層断面	83	第 135 図	H 区 9・10・11 号住居跡及び 出土遺物	138
第 20 図	石器 (1)	22	第 81 図	B 区古墳時代 II 期水田跡	84	第 136 図	I 区 2 号住居跡及び出土遺物	140
第 21 図	石器 (2)	23	第 82 図	C 区古墳時代 I 期水田跡と水路	85	第 137 図	I 区 6 号住居跡及び出土遺物	141
第 22 図	石器 (3)	24	第 83 図	D 区古墳時代の水田跡と水路	86	第 138 図	I 区 10 号住居跡	142
第 23 図	石器 (4)	25	第 84 図	E 区古墳時代の水田跡土層断面	87	第 139 図	J 区 1 号住居跡及び出土遺物	142
第 24 図	弥生土器の分布密度	26	第 85 図	E 区古墳時代の水田跡	88	第 140 図	J 区 2 号住居跡及び出土遺物	143
第 25 図	弥生土器 (1)	27	第 86 図	E 区古墳時代の水田区画略称図	89	第 141 図	J 区 3・8・13 号住居跡	144
第 26 図	弥生土器 (2)	28	第 87 図	F 区水路出土遺物	90	第 142 図	J 区 3・8 号住居跡出土遺物	145
第 27 図	弥生土器 (3)	29	第 88 図	F 区古墳時代の水田跡と水路	91	第 143 図	J 区 4 号住居跡及び出土遺物	146
第 28 図	弥生土器 (4)	30	第 89 図	G 区古墳時代の水田跡	92	第 144 図	J 区 5 号住居跡及び出土遺物	147
第 29 図	弥生土器 (5)	31	第 90 図	I 区古墳時代 II 期水田及び 耕土出土遺物	93	第 145 図	J 区 6・7 号住居跡及び出土遺物	148
第 30 図	弥生土器 (6)	32	第 91 図	G 区 6・8 号溝	95	第 146 図	J 区 9・10 号住居跡及び出土遺物	149
第 31 図	古墳時代の遺構分布図	33	第 92 図	G 区 6・8 号溝土層断面	96	第 147 図	J 区 11 号住居跡 (炭化材出土状況)	150
第 32 図	H 区 3 号住居跡	34	第 93 図	G 区 6 号溝遺物出土状況 A 地点	97	第 148 図	J 区 11 号住居跡電土層断面	151
第 33 図	H 区 4 号住居跡	34	第 94 図	G 区 6 号溝遺物出土状況 B 地点	98	第 149 図	J 区 11 号住居跡掘方及び出土遺物	151
第 34 図	I 区 1 号住居跡及び出土遺物	35	第 95 図	G 区 6 号溝遺物出土状況 B 地点断面	99	第 150 図	J 区 12 号住居跡及び出土遺物	152
第 35 図	I 区 4 号住居跡	36	第 96 図	G 区 6 号溝遺物出土状況 C 地点	100	第 151 図	J 区 15・19 号住居跡及び 15 号住居跡 出土遺物	153
第 36 図	I 区 7 号住居跡及び出土遺物	37	第 97 図	G 区 6 号溝出土遺物 (1) 木製品	101	第 152 図	J 区 19 号住居跡出土遺物	153
第 37 図	I 区 8 号住居跡及び出土遺物	38	第 98 図	G 区 6 号溝出土遺物 (2) 木製品	102	第 153 図	J 区 16 号住居跡及び出土遺物	154
第 38 図	I 区 9 号住居跡及び出土遺物	40	第 99 図	G 区 6 号溝出土遺物 (3) 木製品	103	第 154 図	J 区 17 号住居跡	155
第 39 図	I 区 11 号住居跡	41	第 100 図	G 区 6 号溝出土遺物 (4)	104	第 155 図	J 区 17 号住居跡掘方及び出土遺物	156
第 40 図	I 区 12 号住居跡及び出土遺物	42	第 101 図	H 区 4・6・7 号溝	106	第 156 図	J 区 18 号住居跡	156
第 41 図	I 区 13 号住居跡及び出土遺物	43	第 102 図	H・I 区古墳時代の溝群	108	第 157 図	J 区 20 号住居跡出土遺物	157
第 42 図	I 区 14 号住居跡及び出土遺物	44	第 103 図	H 区 20 号溝出土遺物 (1)	109	第 158 図	J 区 20 号住居跡・掘方	158
第 43 図	I 区 16 号住居跡出土遺物	45	第 104 図	H 区 20 号溝出土遺物 (2)	110	第 159 図	J 区 21 号住居跡	159
第 44 図	I 区 15・16 号住居跡	46	第 105 図	H 区 31・36・37 号溝出土遺物	110	第 160 図	J 区 21 号住居跡掘方及び出土遺物	160
第 45 図	I 区 17 号住居跡	47	第 106 図	I 区 48 号溝出土遺物 (1)	111	第 161 図	J 区 22 号住居跡	161
第 46 図	I 区 18 号住居跡	47	第 107 図	I 区 48 号溝出土遺物 (2)	112	第 162 図	J 区 22 号住居跡出土遺物	162
第 47 図	I 区 19 号住居跡	48	第 108 図	I 区 48 号溝出土遺物 (3)	113	第 163 図	J 区 23 号住居跡	162
第 48 図	I 区 20 号住居跡	49	第 109 図	I 区 48 号溝出土遺物 (4)	114	第 164 図	J 区 24 号住居跡及び出土遺物	163
第 49 図	I 区 20 号住居跡出土遺物	49	第 110 図	I 区 畠跡	115	第 165 図	J 区 25 号住居跡及び出土遺物	164
第 50 図	I 区 21 号住居跡及び出土遺物	50	第 111 図	I 区古墳時代の溝群	117	第 166 図	J 区 26 号住居跡	165
第 51 図	I 区 22 号住居跡	51	第 112 図	I 区古墳時代の溝出土遺物	118	第 167 図	J 区 26 号住居跡出土遺物	166
第 52 図	I 区 22 号住居跡出土遺物	52	第 113 図	J 区河川跡土層断面	118	第 168 図	J 区 27 号住居跡及び出土遺物	166
第 53 図	I 区 1 号掘立柱建物跡	53	第 114 図	J 区河川跡	119	第 169 図	J 区 28 号住居跡	166
第 54 図	I 区 2 号掘立柱建物跡出土遺物	53	第 115 図	J 区河川跡 1 号河道出土遺物 (1)	120	第 170 図	J 区 29 号住居跡及び出土遺物	167
第 55 図	I 区 2 号掘立柱建物跡	54	第 116 図	J 区河川跡 1 号河道出土遺物 (2)	121	第 171 図	J 区 30 号住居跡	168
第 56 図	I 区 3 号掘立柱建物跡	54	第 117 図	J 区河川跡 1 号河道出土遺物 (3)	122	第 172 図	J 区 30 号住居跡電土層断面	169
第 57 図	I 区 5 号掘立柱建物跡	55	第 118 図	J 区河川跡 1 号河道出土遺物 (4)	123	第 173 図	J 区 30 号住居跡掘方及び出土遺物	169
第 58 図	I 区 7 号掘立柱建物跡	56	第 119 図	J 区河川跡 1 号河道出土遺物 (5)	124	第 174 図	J 区 31 号住居跡及び出土遺物	169
第 59 図	I 区 9 号掘立柱建物跡	57				第 175 図	J 区 32 号住居跡出土遺物	170
第 60 図	I 区 2 号柵列跡及び出土遺物	58				第 176 図	J 区 32・33・34 号住居跡及び 34 号住居跡出土遺物	171
第 61 図	I 区 3 号柵列跡及び出土遺物	59						

第177図	J区35号住居跡及び出土遺物	172
第178図	J区36号住居跡・掘方及び出土遺物	173
第179図	J区37・39号住居跡及び37号住居跡 出土遺物	174
第180図	J区38号住居跡及び出土遺物	175
第181図	J区39号住居跡出土遺物	175
第182図	J区40号住居跡及び出土遺物	176
第183図	H区1号掘立柱建物跡	177
第184図	I区6号掘立柱建物跡	178
第185図	J区1・2号掘立柱建物跡の 重複関係	179
第186図	J区1号掘立柱建物跡	180
第187図	J区2号掘立柱建物跡	181
第188図	J区4号掘立柱建物跡	182
第189図	J区5号掘立柱建物跡	182
第190図	J区1号柱列跡	183
第191図	I区1号塚及び出土遺物	184
第192図	I区1号竪穴・3号井戸及び 出土遺物	185
第193図	J区2号井戸及び出土遺物	186
第194図	H区34号土坑及び出土遺物	187
第195図	H区35号土坑及び出土遺物	187
第196図	J区21・25・143号土坑及び25号 土坑出土遺物	187
第197図	J区11号土坑及び出土遺物	188
第198図	J区46号土坑及び出土遺物	188
第199図	J区59号土坑及び出土遺物	188
第200図	J区41号土坑及び出土遺物	189
第201図	J区68・69・73号土坑及び出土遺物	189
第202図	J区122号土坑及び出土遺物	189
第203図	J区154号土坑及び出土遺物	190
第204図	J区155号土坑及び出土遺物	190
第205図	J区181号土坑及び出土遺物	190
第206図	J区191号土坑及び出土遺物	190
第207図	H・J区古代の土坑	191
第208図	B・E・J区古代の土坑	192
第209図	古代の水路分布図(1/2500)	193
第210図	D区8E区5溝及びE区5溝 出土遺物	194
第211図	F区2号溝	195
第212図	G区5号溝	195
第213図	H区10・11・12・13・14号溝	197
第214図	H区5・41・42・43号溝及び42・43号溝 出土遺物	198
第215図	H区5号溝出土遺物	199
第216図	H区21号溝・I区28号溝と As-B下水田区画	200
第217図	H区21号溝	200
第218図	I区28号溝及び出土遺物	201
第219図	I区28号溝土層断面	202
第220図	古代II期水田	203・204
第221図	古代II期水田A～D区概念図	205
第222図	古代II期水田E～H区概念図	206
第223図	古代II期水田A区	208
第224図	古代II期水田B区	209
第225図	古代II期水田C区	210
第226図	古代II期水田C区断面	211
第227図	古代II期水田C区耕土下面	212
第228図	古代II期水田D区	213
第229図	古代II期水田D区大畦断面	214
第230図	古代II期水田E区土層断面	214
第231図	古代II期水田E区	215
第232図	古代II期水田E区耕土下面の状況	216

第233図	古代II期水田E区 (100-580グリッド)耕作痕	216
第234図	古代II期水田F区東部	218
第235図	古代II期水田G区	219
第236図	古代II期水田G区土層断面	220
第237図	古代II期水田G区大畦基部痕跡	220
第238図	古代II期水田H区及び1号溝 土層断面	221
第239図	G区古代II期水田耕土下の耕作痕	224
第240図	I区古代II期水田耕土下の耕作痕	225
第241図	I・J区古代住居域の溝と住居群	226
第242図	H区44号溝	227
第243図	I区2・3・5・8・9号溝	228
第244図	I区2・3・5・8・9号溝 出土遺物	229
第245図	J区11・18号溝出土遺物	229
第246図	J区11号溝	230
第247図	J区18・19号溝	230
第248図	J区19号溝出土遺物	231
第249図	奈良～平安時代の遺構外出土遺物	232
第250図	中～近世の遺構分布図	233
第251図	H・I・J区の環濠屋敷跡	234
第252図	環濠屋敷と周辺地形	234
第253図	H・I区4・4'号溝	235
第254図	I区7・11号溝	236
第255図	I区27・29号溝	237
第256図	I区26・J区17号溝	238
第257図	H区15・18号溝	239
第258図	I区32・33号溝	239
第259図	I区4号溝出土遺物	240
第260図	A区1号掘立柱建物跡	241
第261図	A区1・2号柱列跡	242
第262図	E区1号掘立柱建物跡	242
第263図	F区1号掘立柱建物跡	243
第264図	G区1・2号柱列跡	243
第265図	中～近世の井戸跡	244
第266図	中～近世の井戸跡出土遺物	245
第267図	中～近世の溝(1)	246
第268図	中～近世の溝(2)	247
第269図	中～近世の溝(3)	248
第270図	中～近世の溝(4)	249
第271図	中～近世の溝出土遺物	250
第272図	中～近世の土坑(1)	251
第273図	中～近世の土坑(2)	252
第274図	中～近世の土坑(3)	253
第275図	近世・近代の墓壇	256
第276図	近世・近代墓壇出土煙管・眼鏡	257
第277図	近世・近代墓壇出土銭貨(1)	258
第278図	近世・近代墓壇出土銭貨(2)	259
第279図	近世・近代墓壇出土銭貨(3)	260
第280図	近世・近代墓壇出土銭貨(4)	261
第281図	時期不明の遺構分布図	262
第282図	I区4号・J区3号掘立柱建物跡 とI区1号柱列跡	263
第283図	J区6号掘立柱建物跡	264
第284図	I区38・49号溝	265
第285図	J区円形周溝遺構	265
第286図	時期不明の溝	267
第287図	I区1号井戸試料の花粉化石 分布図	294
第288図	古墳前期出土材における頻出分類群 の器種別構成比	310

表目次

第1表	周辺遺跡一覧	5
第2表	石器一覧	25
第3表	古墳時代の土坑一覧	72
第4表	古墳時代水田計測値	89
第5表	古代の土坑一覧	192
第6表	古代II期水田計測値(1)	222
第7表	古代II期水田計測値(2)	223
第8表	中～近世の土坑一覧	254
第9表	近世・近代の墓壇一覧	255
第10表	墓壇出土銭貨の組み合わせ	261
第11表	産出花粉化石一覧	294
第12表	大型植物化石一覧	297・298
第13表	出土材の時代別樹種構成	310
第14表	近世以降の器種別樹種構成	310
第15表	古墳時代の器種別樹種構成	311
第16表	出土材の樹種構成	312～314

写真図版目次

- P L . 1 徳丸仲田遺跡を上空から望む
 P L . 2 D区12・13号溝全景
 P L . 3 D区12・13号溝断面
 P L . 4 E区6・7号溝全景
 P L . 5 E区6・7・8号溝全景
 P L . 6 E区6～8号溝断面と陥穴・立木
 P L . 7 B区河川跡全景と断面
 P L . 8 B区河川跡断面と材出土状況
 P L . 9 D区河川跡と13号溝
 P L . 10 D区河川跡部分
 P L . 11 H区3・4号住居跡
 P L . 12 I区1号住居跡
 P L . 13 I区4・7号住居跡
 P L . 14 I区8・9号住居跡
 P L . 15 I区11・12号住居跡
 P L . 16 I区13号住居跡
 P L . 17 I区14～17号住居跡
 P L . 18 I区18～20号住居跡
 P L . 19 I区21・22号住居跡
 P L . 20 I区1・2号掘立柱建物跡
 P L . 21 I区5・9号掘立柱建物跡と2号柵列
 P L . 22 A区1・H区1・I区1号井戸
 P L . 23 I区2・4～6号井戸
 P L . 24 I区7～9号井戸
 P L . 25 I区11～15・J区1号井戸
 P L . 26 古墳時代の土坑
 P L . 27 古墳時代の土坑
 P L . 28 古墳時代の土坑
 P L . 29 A区9号溝木製品出土状況
 P L . 30 A区9号溝の堰
 P L . 31 A区8・10・11号溝
 P L . 32 B区古墳時代の水路群
 P L . 33 B区古墳時代の河川跡のくぼみ
 P L . 34 C区古墳時代水路群とI期水田
 P L . 35 D区古墳時代I期水田畦と水路
 P L . 36 E区古墳時代I期水田全景
 P L . 37 E区古墳時代I期水田全景と近景
 P L . 38 E区古墳時代I期水田近景
 P L . 39 E区古墳時代I期水田近景と調査
 P L . 40 E区古墳時代II期水田と土層断面
 P L . 41 F区古墳時代II期水田と水路
 P L . 42 G区古墳時代II期水田全景
 P L . 43 G区古墳時代II期水田と近景
 P L . 44 G区6号溝遠景と断面
 P L . 45 G区6号溝橋状遺構
 P L . 46 G区6号溝木製品出土状況
 P L . 47 H区20・I区48号溝
 P L . 48 I区48号溝遺物出土状況
 P L . 49 I区古墳時代畠全景と近景
 P L . 50 I区古墳時代畠近景
 P L . 51 I区古墳時代II期水田全景
 P L . 52 I区古墳時代II期水田と出土遺物
 P L . 53 I区13・15・16号溝
 P L . 54 J区河川跡
 P L . 55 J区河川跡断面と遺物出土状況
 P L . 56 H区1・2・5～11号住居跡
 P L . 57 I区2・6号住居跡
 P L . 58 I区10号住居跡
 P L . 59 J区遺構群全景と近景
 P L . 60 J区1・2号住居跡
 P L . 61 J区3～10号住居跡
 P L . 62 J区11号住居跡
 P L . 63 J区15号住居跡
 P L . 64 J区16・17号住居跡
 P L . 65 J区20号住居跡
 P L . 66 J区21号住居跡
 P L . 67 J区22～24号住居跡
 P L . 68 J区25・26・30号住居跡
 P L . 69 J区32・33・35・36号住居跡
 P L . 70 J区37号住居跡
 P L . 71 J区40号住居跡
 P L . 72 H区1・I区6・J区1号掘立柱建物跡
 P L . 73 J区2・5号掘立柱建物跡
 P L . 74 I区1号塚
 P L . 75 I区1号竪穴遺構とI区3号井戸
 P L . 76 J区2号井戸及び古代の土坑
 P L . 77 古代の土坑
 P L . 78 古代の土坑
 P L . 79 D区8・E区5号溝
 P L . 80 H区10～14号溝
 P L . 81 H区5・41～43号溝
 P L . 82 H区21・I区28号溝
 P L . 83 H区21・I区28号溝全景
 P L . 84 A区古代水田全景
 P L . 85 A区古代水田畦近景
 P L . 86 A区古代水田畦と水口
 P L . 87 B区古代水田全景
 P L . 88 B区古代水田畦
 P L . 89 C区古代水田全景
 P L . 90 C区古代水田畦
 P L . 91 C区古代水田大畦と基部の状況
 P L . 92 D区古代水田全景
 P L . 93 D区古代水田畦
 P L . 94 D区古代水田大畦基部
 P L . 95 E区古代水田全景と畦
 P L . 96 E区古代水田畦
 P L . 97 E区古代水田断面と畦基部
 P L . 98 E区古代水田畦基部
 P L . 99 E区古代水田畦基部
 P L . 100 E区古代水田耕作痕跡の調査
 P L . 101 E区古代水田耕作痕跡の調査
 P L . 102 F・G区古代水田耕作痕跡の調査
 P L . 103 G区古代水田全景
 P L . 104 G区古代水田全景
 P L . 105 G区古代水田全景と大畦断面
 P L . 106 H・I区古代水田全景
 P L . 107 G区古代水田に伴う耕作痕跡
 P L . 108 H区44・I区2・3・5・8号溝
 P L . 109 J区11・18・19号溝
 P L . 110 A・E・F区1号掘立柱建物跡とA区1号柱列
 P L . 111 H区26・I区4号溝（屋敷堀）
 P L . 112 I区4・11号溝（屋敷堀）
 P L . 113 I区7・11・29号溝（屋敷堀）
 P L . 114 I区4号溝断面
 P L . 115 I区11・27・29号溝
 P L . 116 I区30号溝、C区1・E区1・G区1・H区2・I区16・I区17号井戸
 P L . 117 J区3・4号井戸、G区32・J区62・71・77・78号土坑（墓墳）
 P L . 118 J区79・80・85・96・97・101～103号土坑（墓墳）
 P L . 119 中・近世の土坑
 P L . 120 中・近世の土坑
 P L . 121 中・近世の土坑
 P L . 122 中・近世の土坑
 P L . 123 中・近世の土坑
 P L . 124 中・近世の水路群
 P L . 125 中・近世の水路群
 P L . 126 中・近世の水路群
 P L . 127 中・近世の水路群と円形周溝遺構
 P L . 128 I区4・J区3号掘立柱建物跡
 P L . 129 E区6号溝出土の縄文土器
 P L . 130 縄文土器
 P L . 131 石器類（1）
 P L . 132 石器類（2）
 P L . 133 弥生土器（1）
 P L . 134 弥生土器（2）
 P L . 135 弥生土器（3）
 P L . 136 弥生土器（4）
 P L . 137 I区1・7・12・14号住の遺物
 P L . 138 I区14・16・20・22号住の遺物
 P L . 139 I区1号井戸の遺物
 P L . 140 I区1号井戸と60号土坑の遺物
 P L . 141 I区4～6・12号井戸の遺物
 P L . 142 I区8・12・14・J区1号井戸遺物
 P L . 143 A区9号溝の遺物（杭と矢板）
 P L . 144 F区2・5・G区6号溝とI区古墳時代II期水田耕土の遺物
 P L . 145 G区6号溝の遺物（2木製品）
 P L . 146 G区6号溝の遺物（3木製品）
 P L . 147 G区6号溝、H区20・36号溝の遺物
 P L . 148 I区48号溝の遺物（1）
 P L . 149 I区48号溝の遺物（2）
 P L . 150 J区河川跡の遺物（1）
 P L . 151 J区河川跡の遺物（2）
 P L . 152 J区河川跡の遺物（3木製品）
 P L . 153 J区河川跡と遺構外の遺物（4）
 P L . 154 H区1・11・I区26・J区2・3・7・8・20号柱遺物
 P L . 155 J20～22・24・25・29・32号住の遺物
 P L . 156 J35～38・40号住とI1号塚の遺物
 P L . 157 I1竪穴、H34・J11・25・59土坑遺物
 P L . 158 J41・59・181土坑、E5・H5・J18・19溝の遺物
 P L . 159 J区19号溝、I区17号井戸の遺物
 P L . 160 I17井戸、B2・E1・G6・H3・J5溝の遺物
 P L . 161 J60・77・78・80・101・102号土坑遺物
 P L . 162 J80・85号土坑の遺物（銭貨）
 P L . 163 J85・102号土坑の遺物（銭貨）
 P L . 164 J102・150・32号住内土坑遺物（銭貨）
 P L . 165 I区1号井戸試料の花粉化石
 P L . 166 出土大型植物化石（1種実類）
 P L . 167 出土大型植物化石（2種実類）
 P L . 168 出土材組織断面（1）
 P L . 169 出土材組織断面（2）
 P L . 170 出土材組織断面（3）
 P L . 171 出土材組織断面（4）
 P L . 172 出土材組織断面（5）
 P L . 173 出土材組織断面（6）
 P L . 174 出土材組織断面（7）
 P L . 175 出土材組織断面（8）
 P L . 176 出土材組織断面（9）
 P L . 177 出土材組織断面（10）
 P L . 178 出土材組織断面（11）
 P L . 179 各区作業風景

第1章 発掘調査の経過

1 調査に至る経緯

北関東自動車道（高崎－伊勢崎）の建設に伴い、計画路線に関わる埋蔵文化財の発掘調査について、群馬県教育委員会スポーツ文化部文化財保護課、県土木部道路建設課高速道路対策室、日本道路公団東京第二建設局の三者で協議した結果、本線部分の発掘調査は財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が受託することとなった。平成7年6月1日付けで県教育委員会と本事業団との間で締結された「北関東自動車道（高崎－伊勢崎）地域埋蔵文化財発掘調査」契約に基づき、平成7年から本格的な発掘調査が実施されることとなった。

徳丸仲田遺跡は、前橋市徳丸町の端気川と藤川に挟まれた地区にあたり、総面積は49,460㎡を測る。平成8年6月、県教育委員会によって行われた事前の試掘調査の結果に基づいて、調査期間は面積と予想された遺跡の内容から20カ月と算定された。調査開始時期は平成8年4月からとし、調査担当者3名がこれに当たることとなった。

2 周辺の地形環境

遺跡が立地する前橋市南部の台地は、群馬県のほぼ中央に位置し、北に赤城山、北西に榛名山、西は岩野谷丘陵に接する。この地形面は「前橋台地」と命名され（新井房雄1962）、その形成史や地形区分などの詳細については『徳丸仲田遺跡（1）』（2001群馬文）に記したのでここでは改めて述べない。

本書では縄文時代前期以降の遺構と遺物を扱っており、なかでも古墳時代から中世に関わるものが主体を占める。従ってここでは古墳時代以降の遺跡立地に関わりをもつ地形環境について略述する。

本遺跡は、現在の利根川流路の東方約3km地点に位置する（第2図）。ただし、利根川は16世紀代（天文年間説が有力）に変流しており、それ以前の流路は現在の桃ノ木川－広瀬川にあったと考えられている。従って中世以前における遺跡周辺の地形環境は、榛名山東南麓から続く南東に緩傾斜する前橋台地面を基盤とし、これを流下する幾筋もの小河川と、そこに形成された微高地と沖積低地という地形景観が遺跡形成に大きな影響を与えたと考えられる。前橋台地上を南東に下る小河川は縄文時代以降に形成さ



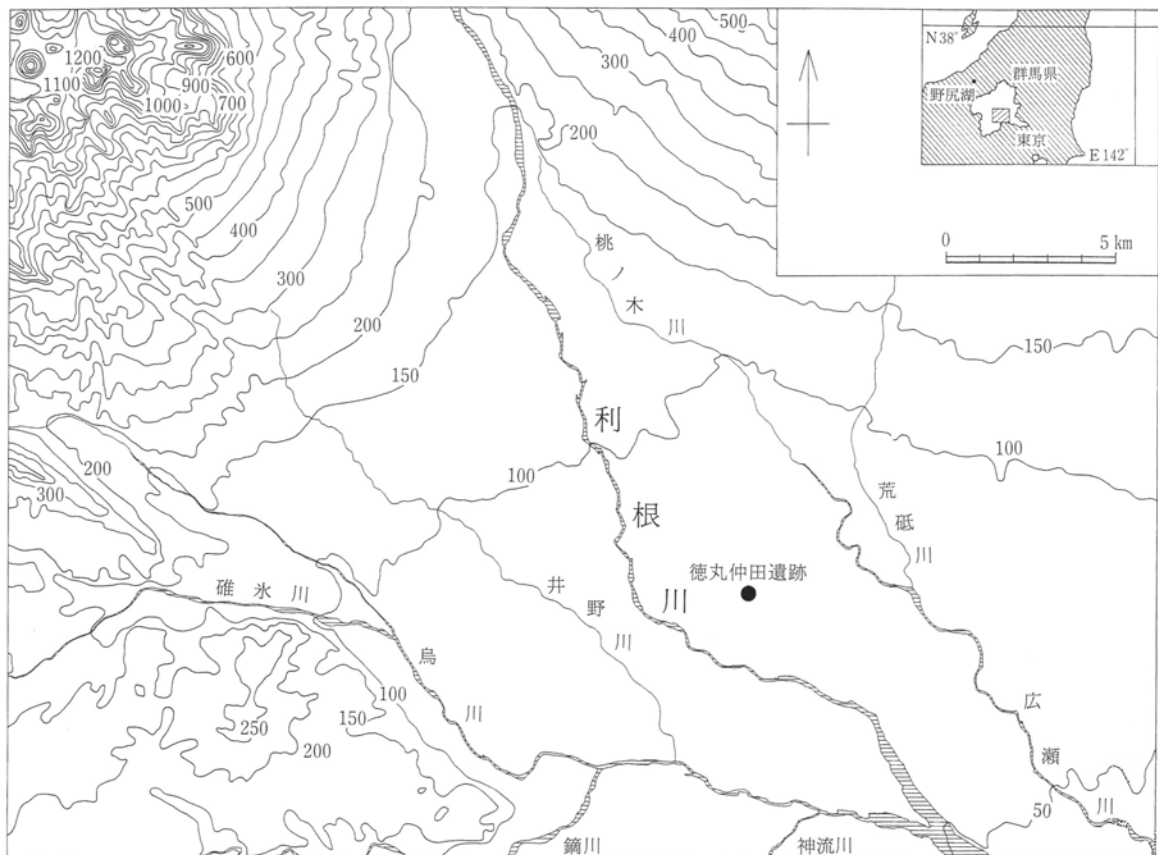
第1図 徳丸仲田遺跡の位置（国土地理院1/5万「前橋・高崎」使用）

れ、堅く締まった前橋泥流を侵食できずに網状の小河谷を発達させたと考えられている。本遺跡で検出された河川跡もこの段階の河道であったと推測され、古墳時代前期ころには埋没するか、わずかな窪地として残る状態であった。一方、東限を流れる藤川の旧河道（J区）は、少なくとも4～6世紀代には水流があったと考えられる。また、遺跡の西約300m地点を直線的に流下する現在の端気川は、左岸の徳丸高堰遺跡及び右岸の鶴光路榎橋遺跡の調査で、河道が確認されておらず、検出された屋敷跡との関連から中世以降の開削と考えられる。現在判明している限りで、本遺跡ののる前橋台地の西方における大きな地形的境界は本遺跡から西約4km地点を流れる井野川だろう。

As-Cの降下（紀元300年前後頃）以前には、前橋台地全体に黒ボク土が堆積しており、本遺跡では縄文前期～弥生後期の遺物が出土している。弥生時代には、小河川を利用した水田経営が可能であったと

思われるが、現段階では本遺跡周辺で弥生水田の検出は知られていない。

古墳時代以降、榛名山東南麓や大河川沿いの地域に大被害をもたらした榛名山の噴火（6世紀代に2回）も、本地域には大きな地形的変化を与えていないようだ。ただし、本遺跡J区で検出された藤川旧河道は6世紀後半以降8世紀以前と思われる洪水層によって埋没しており、その上には8世紀以降の集落が形成されている。その後再び9世紀以降と推定されるある時期に広範囲にわたる洪水層の堆積が認められる。本遺跡基準層序のIV層（層厚15～20cm）としたのがそれで、すでに形成されていた水田や水路を埋め尽くし、微高地との地形変換部分も不明瞭にしてしまったらしい。As-B（1108年降下）直下で検出される水田の耕土はいずれもこの洪水層を基盤としている。As-B降下以降は、天明3年に浅間山噴火で深刻な被害を被ったものの大きな地形的変化はなく、現在に至っている。



第2図 群馬県中央地域の接峰面図（「徳丸仲田遺跡(1)」より転載）

3 周辺の歴史的環境

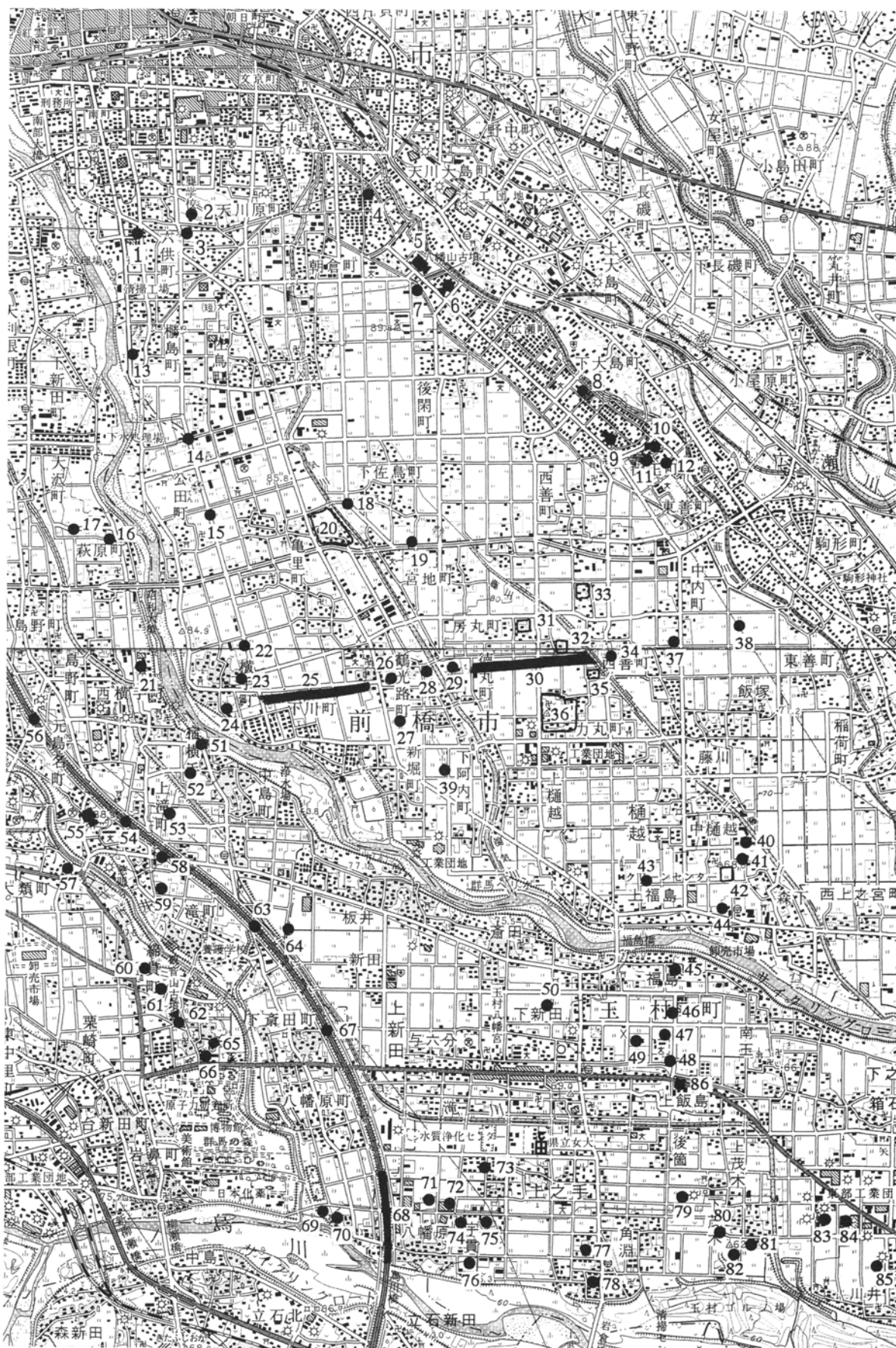
前橋市市街地の南部では、最も居住域としてふさわしいと考えられる広瀬川右岸の南東に長く伸びる台地面が、比較的早くから開発が進んでいたため埋蔵文化財の発掘調査事例が非常に少ない。従って、この地域で盛んに発掘調査が行われ、遺跡の分布状況や個々の具体的な内容について明らかとなってきたのは、高速自動車道路や新幹線などの建設に端を発した大規模な公共開発が始まってからとあってよく、特に本遺跡の存する前橋台地東半に形成された広い低地地域の遺跡分布については、北関東自動車道路建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査成果に負うところが大きい。これは、本地域を横断する大規模なトレンチ調査ともいうべきもので、東西方向における遺跡の分布や密度、時代ごとの偏在性を明らかにすることになった。また、前橋市をはじめ高崎市や玉村町などの近隣地域でも、近年において埋蔵文化財の発掘調査例が増加しており、広域面を対象とした遺跡分布の状況も知られるようになりつつある。その全貌を紹介するのは、調査成果の関連報告書が出そろうまで待ちたいが、ここでは現在までに判明している範囲で、特に本遺跡に関連の深い古墳時代以降を中心に遺跡分布について概観してみたい。

本地域における旧石器時代～縄文時代は遺跡数が極端に少ない。その中で徳丸仲田遺跡から出土した隆起線文土器は前橋地域のみならず県内でも最古に位置づけられる縄文文化の存在を明確にした点でおおいに注目される(註1)。周辺遺跡からは、前橋市勝島川端遺跡で撚糸文土器が出土している以外は、周辺の各遺跡から前期～後期の土器片が少数見られる程度で、遺構やまとまった遺物の出土例は現在のところ知られていない。ただし、少数ながらも土器や石器が広範に分布することから、小規模な集落が点在した可能性は否定できまい。

弥生時代の遺跡については、かねてより分布の空白地帯といわれており、現段階でも数遺跡が点在する程度である。本遺跡から南東に約2.5km離れた玉

村町一万田遺跡の中期後半の土器棺墓とされる遺構が近辺では唯一の遺構である(註2)。西方に約4km離れると、南東流する井野川に沿って弥生時代の集落が濃密に分布する。高崎市の高崎情報団地遺跡、万相寺遺跡、宿大類村西遺跡、鈴ノ宮遺跡、矢島薬師遺跡、元島名遺跡などがそれで、長期定着集落の様相を示す鈴ノ宮遺跡を除いて、いずれも後期初頭～前半に中心をおく集落遺跡である。井野川流域の弥生遺跡群は、西～北毛地域に分布する中期後半の栗林式(竜見町式)と後期樽式土器を主とする主要分布圏の南東限に位置しており、後期末になって赤城山南麓地域に集団的移住したとも推測されている分布圏の変化(註3)を見せた段階でも、本遺跡のある前橋市南部の低平な地域への進出はほとんど見られなかったらしい。今後新たな遺跡調査例が増えたとしても、この分布傾向はおそらく変わることはないと考えられる。一方、本遺跡の南方4km地点にある玉村町上飯島芝根遺跡で発見された中期後半「御新田式」の住居跡(註4)は、同時期の栗林式土器分布圏外に位置しており、それぞれの土器分布圏と相互の関係を考察する上で興味深い事例である。御新田式土器は、栃木県や埼玉県北部に主分布をもち、栗林式と共伴して群馬県域にも点々と分布することが判明している。本遺跡でも遺構は確認されなかったが、かなりの土器片が出土しており、これまで知られていなかった御新田式土器を用いる集団の存在を想定しておく必要があるかもしれない。

弥生時代から大きく様相が変わったのは古墳時代前期である。本遺跡をはじめ、周辺の遺跡からは必ずと言っていいほどにこの時期の遺構や遺物の存在が認められる。この遺跡分布密度の異常な高さは、過疎地ともいえた前橋市南部の低平な地域の新たな大開発を示すと考えて間違いなからう。その担い手となったのはS字甕をメルクマールとする石田川式土器を用いる集団であり、周辺の古墳時代前期の集落遺跡の大部分を占める。集落の分布は、台地縁辺ないしは南東方向に島状に伸びる微高地上に立地しており、現在水田化されている平坦な地点でも今後



第1表 周辺遺跡一覧

1	六供中京安寺遺跡	古墳前期集落・墓、古墳、古代集落	45	福島曲戸遺跡	古墳前期集落、古代集落、古墳～中世水田、近世畠・復旧跡
2	六供下堂木III遺跡	古墳前期集落、古代集落、古墳～古代水田	46	福島久保田遺跡	古墳水田、古代集落・水田、中世屋敷・水田、近世復旧跡
3	六供東京安寺遺跡	縄文土器、古墳前期集落、古代集落・水田	47	福島大島遺跡	古墳後期水田、古代集落・水田、中世屋敷、近世水田復旧跡
4	朝倉II号墳	円、4世紀	48	福島大光坊遺跡	古墳前期畠、古代集落・水田、中世屋敷
5	八幡山古墳	前方後方、4世紀	49	福島飯塚遺跡	古墳前期集落・前～後期水田、古代集落、古代～中世水田、中～近世屋敷、近世復旧跡
6	前橋天神山古墳	前方後円、4世紀	50	斉田竹之内遺跡	古墳前期水田、古代水田、近世畠・復旧跡
7	後閑団地遺跡	古墳前期集落、古代集落	51	西横手遺跡群	古墳前～後期水田、古代集落・水田、近世住居・墓、群埋文調査
8	亀塚山古墳	円、(6世紀)	52	宿横手三波川遺跡	縄文石器、古墳前期旧河道、古墳～古代水田、中世屋敷、近世水田
9	金冠塚古墳	前方後円(7世紀)	53	上滝榎町北遺跡	古墳前期集落?、古墳～古代水田、中世屋敷、近世水田
10	上陽12号墳	前方後円	54	上滝遺跡	古墳前期～奈良集落、中世～近世屋敷
11	文殊山古墳	円、(4世紀)	55	元島名將軍塚古墳	前方後方、4世紀
12	山王若宮遺跡	古墳前期集落	56	元島名B遺跡	元島名城、14～16世紀
13	勝島川端遺跡	縄文土器、弥生集落、古墳～古代集落・墓	57	下大類蟹沢遺跡	古墳～古代集落、古墳
14	公田東遺跡	古墳後期～古代集落・墓・畠・水田、中世屋敷	58	上滝五反畑遺跡	縄文中期土器、古墳前期溝、古墳～古代水田、近世水田復旧跡
15	公田池尻遺跡	古墳前～後期集落・水田、古代集落・水田、中世屋敷	59	下滝天水遺跡	古墳～古代集落・居館?・水田・畠、中～近世屋敷
16	萩原団地遺跡	古墳～古代水田、近世畠	60	綿貫小林前遺跡	古墳前期～古代集落、中世集落・墓
17	萩原上五丁田遺跡	古墳～古代水田	61	綿貫遺跡	古墳前期～古代集落・墓、廃寺跡
18	川曲遺跡	古墳後期集落	62	綿貫観音山古墳	前方後円、6世紀
19	東田遺跡	古墳～古代水田	63	滝川C遺跡	古墳前期土坑群
20	宿阿内城	16世紀城郭	64	上滝社宮司東遺跡	古墳前期土坑
21	西横手遺跡群	古墳前期墓、古墳～古代水田、中～近世畠、高崎市教委調査	65	綿貫堀米前II遺跡	縄文中期土器、古墳前～古代集落、中世墓
22	亀里平塚遺跡	古墳前期水田、古代～中世水田、近世墓	66	不動山東遺跡	古墳前～後期集落
23	横手宮田遺跡	古墳～中世水田、馬鍬痕跡?	67	下斉田滝川A遺跡	縄文土坑、古墳前～古代集落・墓
24	横手早稲田遺跡	古墳前期集落、近世復旧跡	68	下郷遺跡	古墳前期・後期墓
25	横手湯田遺跡	縄文中～後期土器、古墳前期集落、古墳後期～古代水田、中～近世屋敷・水田	69	若宮八幡北古墳	帆立貝、5世紀後半
26	西田遺跡	縄文中期土器、古代集落、古墳～古代水田、近世墓	70	八幡原遺跡	弥生中期土器、古墳前期集落
27	下阿内一丁畑遺跡	古墳前期集落、古墳～古代水田	71	赤城II遺跡	古墳前期墓・土坑
28	鶴光路榎橋遺跡	古墳前期土器片、古代集落、中～近世屋敷	72	宇貫遺跡	古墳前期土坑、古代集落、中世屋敷
29	徳丸高堰遺跡	古墳前期土坑、古代水田、中～近世屋敷	73	上之手八王子遺跡	古墳前期集落、古代集落・水田
30	徳丸仲田遺跡	縄文草創期及び本報告書記載内容	74	上之手石塚遺跡	古墳前期集落・墓、古代集落、中世屋敷
31	房丸東環濠遺構群	中～近世屋敷	75	上之手薬師前遺跡	古墳墓
32	徳丸東環濠遺構群	中～近世屋敷	76	御門遺跡	古墳前期墓、集落
33	旧西善環濠遺構群	中～近世屋敷	77	天神下り遺跡	古墳前期井戸、古代集落・水田
34	西善尺司遺跡	古墳前期集落・墓、古代集落、古墳～古代水田、中世～近世屋敷	78	角淵城遺跡	古代水田、中世城郭
35	徳丸東環濠遺構群	中～近世屋敷	79	軍配山古墳	円、4世紀
36	力丸城	15～16世紀城郭	80	芝根村1号墳	前方後円、6世紀
37	中内村前遺跡	縄文石器、古墳前期集落・旧河道、古代集落、古墳後期～古代水田、中世～近世屋敷	81	オトカ塚遺跡	古墳前期墓・集落、中世井戸
38	前田遺跡	古代集落・水田、中世屋敷	82	梨ノ木山古墳	円、5世紀
39	下阿内前田遺跡	有舌尖頭器、弥生後期土器片、古墳前期集落・水田、古代水田、中世屋敷	83	北原遺跡	古墳前期墓、古代集落、中～近世井戸
40	原浦II遺跡	古墳～古代集落、旧河道	84	街道南遺跡	古墳前期墓、古代水田
41	原浦遺跡	古墳溝、古代集落	85	芝根村7号墳	(前方後方)、前期住居跡、三角縁神獣鏡
42	阿左美館	13～16世紀	86	上飯島芝根遺跡	弥生中期集落、古代集落・水田
43	砂町遺跡	古墳前期溝、古東山道駅路、古代水田			
44	一万田遺跡	弥生中期土器棺、古代官衙的建物群			

見つかる可能性は高い。特記すべき例として前橋市山王若宮遺跡の北陸系土器を含む土器群や玉村町福島曲戸遺跡で石田川式土器の住居跡の前に南関東的

な様相を持つ土器群の出土した住居跡を上げることができ、石田川式とは異なる先駆的な集団の存在を示唆する例として注目される。本地域の大規模な開

発があったことを示す例としては、古墳群の存在も見逃せない。本遺跡の北方3～4kmの地点に、県内でも最古段階に位置づけられる前橋天神山古墳（前方後円126m）、八幡山古墳（前方後方130m）をはじめ、朝倉II号墳（円23m）など4世紀代の古墳が存在する。これらは、水田可耕地となる前橋市南部に広がる低地帯を見下す要ともいえる台地北端に位置し、また背後の北東には広瀬川低地帯が展がる。さらに、西方4kmには井野川左岸に元島名将軍塚古墳（前方後方91～96m）がある。これらは、新たな地域開発を指導した盟主たちの墓と推測されるが、具体的な支配領域や盟主間の関係など、大和政権の地域支配動向と関連した重要な検討課題を投げかけている。前橋天神山古墳の立地する広瀬川右岸台地上には、その後も連綿と古墳が造築され7世紀代まで続く。5世紀代の大古墳が見られないことに、4世紀からの盟主層の断絶が推測されるが、生産地としては安定していたであろうことが古墳分布の状況から十分考えられる。

古墳時代中・後期の集落遺跡は、前期の遺跡に比べて意外といえるほど少ない。ただし、低地部分の調査で、榛名山噴火に伴うテフラ（6世紀初・6世紀中）に覆われた水田跡が広範に検出されているので、本地域が生産域として継続していたことは間違いない。このことから、台地上のように洪水被害の少ない場所に長期定着集落を営んだ可能性がある。その意味で、広瀬川右岸の台地は良好な立地条件を備えていると思われるが、発掘調査例が少ないため存否については明らかにされていない。

奈良・平安時代にはいと微高地に再び集落形成が始まる。本遺跡の東に隣接する西善尺司遺跡では46軒の住居跡、東方に1.5～2km離れた中内村前遺跡と前田遺跡からは、あわせて260軒近い住居跡が検出されている。このことから、居住環境の良好な場所に大規模集落が存在し、他の平坦地ではできる限り水田化した様子を窺い知ることができる。また、南東に2.5km離れた玉村町一万田遺跡では官衙的建物群が発見されたことは注目に値する。平安時代後

期の天仁元年（1108）に降下した浅間山火山灰（As-B）に覆われた水田跡は、台地や微高地を除く平坦地形の大部分で検出されており、本地域における条里形水田研究の格好の資料を提供している。前橋市南部から玉村町にかけての地域は、昭和40年代における耕地整理以前の地割りから、条里地割の存在が注目されており、発掘調査の成果によってAs-B直下の水田面とどのような関係にあるかを明らかにすることが期待される。これまでの検出事例から、一町を基準とする大畦や整然とした東西南北の畦による区画が広範囲に広がることが判明しており、北関東自動車道路関連の調査成果からは、東西方向約5km間の区画の様相が明らかになるはずである。

中・近世については、本地域に数多く見られる環濠屋敷が注目される。本遺跡の南方約500mには、14世紀に大江姓那波氏一族の日向守広宗が居住してから天正18年（1590）に滅亡したと伝えられる力丸城があり、また本遺跡に北接して徳丸東環濠遺構群や房丸東環濠遺構群などが知られている。発掘調査例では本遺跡の西方に隣接する徳丸高堰遺跡及び鶴光路榎橋遺跡、東方では西善尺司遺跡・中内村前遺跡・前田遺跡などで環濠屋敷の一部が検出されている。

<註>

- 1 2001群埋文『徳丸仲田遺跡（1）』参照
- 2 「後期の再葬墓」との記述も見うけるが、誤りであろう。
- 3 若狭徹1998「群馬の弥生土器が終わるとき」『かみつけの里博物館第2回特別展図録 人が動く・土器も動く』など
- 4 これまで、御新田式土器は群馬県内では客体的な存在として知られる。

4 調査の方法と経過

徳丸仲田遺跡の発掘調査は、集落跡などがある微高地部分と水田跡が予想された低地部分に大別して行われた。対象地は東西約1kmに及んでおり、現行地割に基づく南北の道路と水路によって全体を10区分し、北関東自動車道の起点に近い西側から順にアルファベットを付して、A～J区と呼称した(第4図)。事前の試掘調査によって、文化層までの深さを求め、掘削重機によって調査面までの表土部分を全面的に削除する方法をとった。測量については、日本道路公団の基準点(座標系IX: $1T-6 \cdot X=36959.890 \cdot Y=-63796.625 \cdot H=76.189m$ 、及び $1T-5 \cdot X=36912.731 \cdot Y=-64406.986 \cdot H=75.596m$)を借用して、調査地における任意の基準杭の座標値及び水準値を求めて使用した。この基準杭を基に、微高地部分では5m方眼、低地部分では10m方眼で測量杭を設置し、各グリッドは国家座標値(XY値)で呼ぶこととした。検出された遺構は、平面プランが認定された段階で住居跡・溝・土坑・ピット等の名称を与え、これに算用数字を付して登録した。ただし、調査の進捗に従い、推測される性格に応じて呼称を替えたものもある。写真撮影は中型カメラと小型カメラを併用し、被写体にかかわらずモノクロフィルムとカラースライドを用いた。

工事工程に合わせるため、発掘調査は低地にあたるF・G区から開始し、次に微高地にあたるI・J区に移った。平成9年度は、E・F・G・I・J区の調査を実施し、このうちE・F・G区西半を終了。平成10年度はA～D区・G区東半～J区を調査し、終了させた。A～G区は主に水田跡が検出され、中・近世面、As-B下面(12世紀初)、古墳時代後期面(6世紀初～中葉)、As-C混在面(4世紀代)、弥生時代以前の最下面の4～5面の重層調査となった。また、H～J区は微高地と低地部分があり、微高地ではローム上面、低地では水田跡を含めた2～3面の重層調査を行った。

I区は、微高地上で古墳時代前期から中世の遺構

群が密集して検出され、これに多くの時間を費やして調査を行ったが、屋敷跡の堀を調査中にローム層上位から縄文時代以前と思われる石核が出土したため、旧石器時代の文化層確認のための試掘調査を行うこととなった。試掘はローム面の残る約2000m²を対象として、2m方眼にグリッドを再設定して行われた。試掘調査開始から7日目に、As-YP層付近から石器剥片や碎片が30点ほど集中する地点が確認され、以後この地点を中心に本格的な調査を行うこととなった。この調査は、他の調査区と並行して平成9年11月から平成10年4月にかけて行われ、その結果3000点を超える石器、剥片、碎片とともにほぼ完形に近い形で復元できる縄文草創期の隆起線土器が発見され、にわかに注目を集めることとなった。なお、この縄文草創期の遺物分布域に近接して同時代の埋没谷が検出された。これは河川堆積物により埋積されていることから、大型植物遺体や骨などの遺存が予想された。埋没谷の調査は、掘削重機で堆積物の大部分を除去し、谷下底堆積物のみを人力で発掘した。結果的に遺物は出土しなかったが、材化石や放射年代測定用試料、花粉分析試料などを採取することができた。なお、この分析結果については、『徳丸仲田遺跡(1)』(2001群埋文)に掲載してある。

平成10年度における調査体制は、担当者5名の2班体制で臨み、水田跡を主とするA～D区と集落跡を主とするH～J区に分かれて同時進行した。本遺跡における現地での調査は平成10年12月25日で終了した。なお、本遺跡の発掘調査成果について一般市民に公開するため、平成10年5月17日に遺跡見学会を催した。

整理作業は、平成12年度に縄文時代草創期編として『徳丸仲田遺跡(1)』(2001群埋文)を刊行したのち、縄文時代前期～中・近世の遺構と遺物を対象として実施され、平成14年12月をもってすべての作業を終了した。

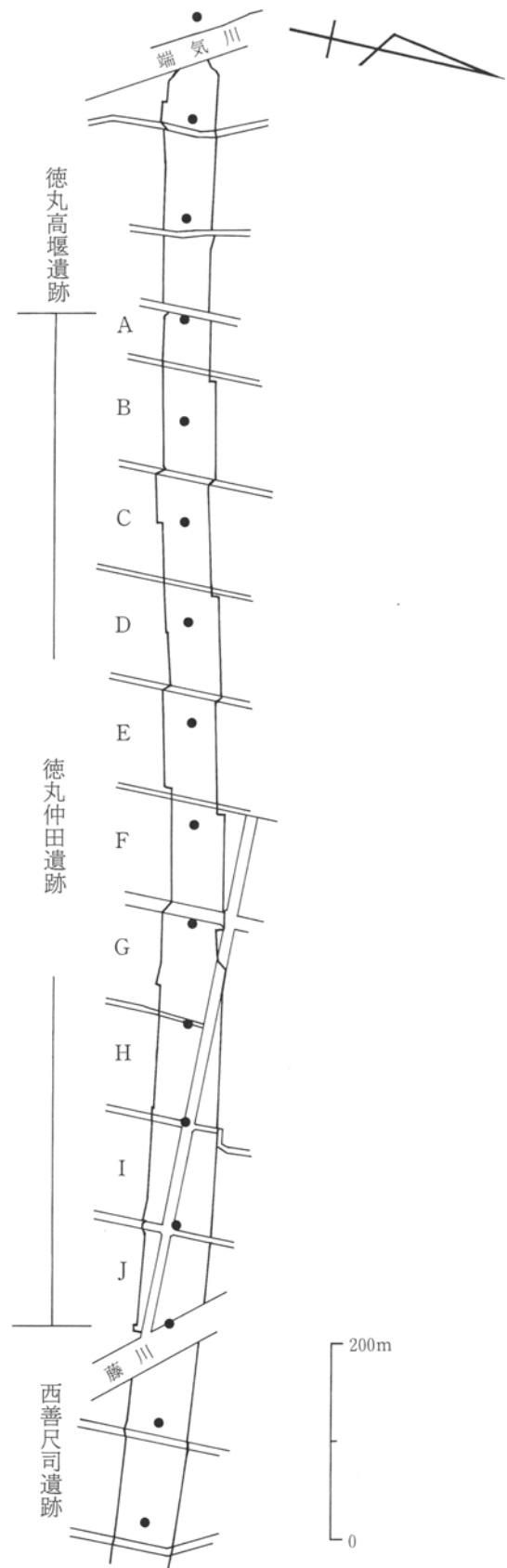
日誌抄

平成9年

- 4月1日 調査開始、トレンチ調査
- 5月1日 F区表土掘削
- 5月7日 As-B下水田検出
- 5月21日 F区遺構精査
- 6月4日 I区表土掘削開始
- 6月5日 I区北半遺構検出（住居跡等）
- 7月1日 G区表土掘削開始
- 8月6日 F区調査終了
- 8月7日 E区表土掘削開始
- 8月11日 E区As-B下水田検出
- 8月27日 G区西半の調査終了
- 11月7日 I区縄文草創期試掘開始
- 11月10日 E区調査終了
- 11月18日 I区縄文草創期の土器出土
- 11月28日 J区表土掘削開始

平成10年

- 1月6日 J区遺構調査開始
- 4月9日 D区表土掘削開始
- 4月20日 G区東半調査開始
- 4月23日 C区表土掘削開始
- 5月1日 I区縄文草創期調査終了
- 5月8日 H区表土掘削開始
- 5月17日 遺跡説明会開催
- 6月11日 D区調査終了
- 7月1日 J区南半で古墳時代埋没河川調査
- 7月8日 G区東半で古墳時代大溝検出
- 8月3日 B区表土掘削開始
- 8月6日 C区調査終了
- 8月10日 J区調査終了
- 8月21日 G区東半調査終了
- 10月27日 H区調査終了
- 11月4日 A区表土掘削開始
- 12月10日 A区で古墳時代大溝と堰検出
- 12月25日 A・I区調査終了



第4図 調査区区分図

5 遺跡の基準層序

徳丸仲田遺跡の基準層序は、第6図に掲げた前橋台地基準層序に従っている。これについては、『徳丸仲田遺跡(1)』(2001群埋文)に詳述している。ここでは、東西延長約1kmにわたる調査区内での特徴及び調査面について記述する。

調査区の地形は、おおまかにA～H区の低地部分と、I～J区の微高地部分に分けられる。第5図は低地部分と微高地部分の層序模式図で、前者をE区、後者をI区で代表させた。それぞれの土層概要は以下の通りである。

I - 暗褐色から灰褐色で、浅間山テフラのAs-AやAs-Bを含むが、攪拌が著しい。表土を形成。

II - As-Bを多く含む暗褐色土で、As-B降下後の耕土と思われる。低地部分にのみ見られる。

III - As-B一次堆積物。上位に暗紫色、下位に灰色の灰層が見られる。

IV - 灰褐色のシルト質。上位は攪拌されており水田耕土と考えられ、その基土は下位のV層であろう。またIII層に覆われた最上位面には、粘性を帯びる黒色土の薄層が見られる。

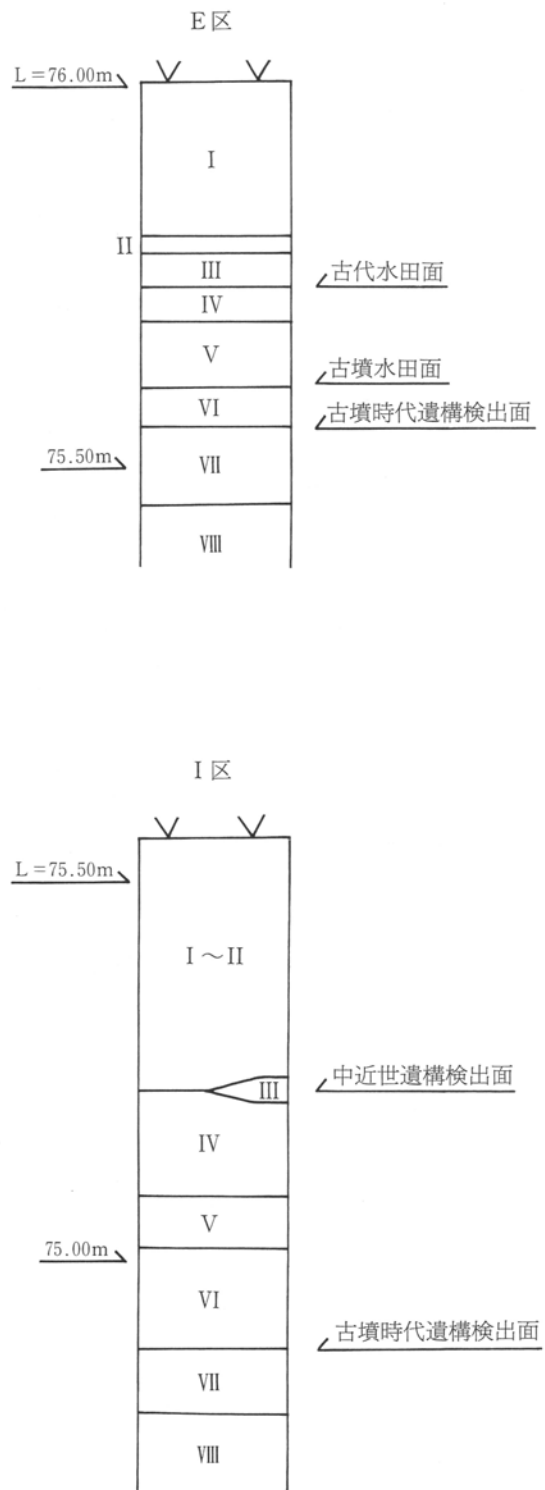
V - 暗灰色の砂質。ラミナ構造がしばしば見られることから、洪水起源堆積物と思われる。また、窪地では最下位に榛名山テフラHr-FAの堆積が見られる。

VI - 浅間山テフラAs-Cを多く含む黒褐色シルト質。As-C降下後の耕土と思われる。

VII - 粘性の強い黒褐色土で、As-Cを含まない。自然河川の旧河道には、この下位にAs-Cの一次堆積物が見られる。

VIII - 褐灰色粘質土。

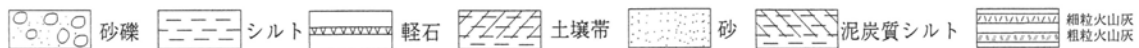
III層下及びV層下では水田面、VII層上面が古墳時代以降の遺構検出面である。微高地ではIV層上面で中世以降の遺構を検出している。なお、地形が東方へ傾斜するため、低地(E区)の標高が約400m離れた微高地(I区)より約50cm高い。



第5図 基準層序柱状図

時代 (文化期)	地層名	柱状図	埋没土壌帯	鍵層 (略称)	フィールドネーム (通称)	層相 (主な色調を一部記載)	埋蔵文化財の調査面
近・現代	表土	Mb0			表土・埋土	灰色～暗灰色シルト質砂を主とする土壌 農地整備による埋め土など	
	近世	Mb1a			A 混じり	灰色～暗灰色の軽石まじりシルト質砂を主とする土壌	
		Mb1b			浅間Aラハール	A 泥流	暗灰色の火山灰質シルト～砂
Mb1c				浅間Aテフラ (As-A)	A 軽石	灰色軽石質火山灰～火山礫	
橋台	Mb2a		前橋A土壌帯			Mb2bを母材にしたシルト質砂からなる土壌 水田土壌帯が見られる場合がある	
	Mb2b				利根川 1H	灰色シルト質砂 利根川起源の洪水堆積物である可能性が高い	
	Mb3a		前橋B土壌帯			Mb3bを母材にしたシルト質砂からなる土壌 水田土壌帯が見られる場合がある	
中世	Mb3b				利根川 2H	灰色シルト質砂 利根川起源の洪水堆積物である	
	Mb4a		前橋C土壌帯			Mb4bを母材にしたシルト質砂からなる土壌 水田土壌帯が見られる場合がある	
	Mb4b				利根川 3H	黄灰色シルト質砂。下底に灰色シルトが見られる 利根川起源の洪水堆積物である	
弥生部	Mb5a		前橋D1土壌帯		B 混じり	灰褐色の軽石まじりシルト質砂からなる土壌	
	Mb5b		前橋D2土壌帯		B 混じり	暗褐色の軽石まじりシルト質砂からなる土壌 下部は暗褐色の軽石まじり砂からなる	
	Mb5c			浅間Bテフラ (As-B)	B 軽石	軽石質火山灰～火山礫層、桃色軽石質火山灰層 暗灰色軽石・スコリア質火山灰～火山礫層の互層	
平安奈良飛鳥	Mb6a		前橋E土壌帯		B 下くろ	暗灰色シルト～砂・シルト質粘土を主とする土壌 水田土壌帯が見られる場合がある	
	Mb6b			榛名二ツ岳伊香保ラハール	F P 泥流	灰色粘土質シルトを主とするラハール堆積物 最大3ユニットに区分でき、下底は下位層にシャープなシルト質層を有する。	
	Mb7			榛名二ツ岳渋川ラハール	F A 泥流	灰色の火山灰質シルト・砂からなるラハール堆積物 前橋台地の北西部で見られる	
古世	Mb8			榛名二ツ岳渋川テフラ (Hr-S)	F A	石質火山灰層、軽石質火山灰層の互層	
	Mb9a		前橋F土壌帯		F A 下くろ	暗灰色シルト～砂・シルト質粘土を主とする土壌 前橋E帯に比べ色調は黒い	
	Mb9b			榛名有馬ラハール		灰色粘土質シルト、火山灰質砂を主とするラハール堆積物	
墳地	Mb10a		前橋G土壌帯		C 混じり	暗灰～黒色の軽石まじりシルト～砂・シルト質粘土を主とする土壌	
	Mb10b			浅間Cテフラ (As-C)	C 軽石	軽石質火山礫層	
	Mb11a		前橋H土壌帯		C 下くろ	暗灰～黒色の軽石まじりシルト～砂・シルト質粘土を主とする土壌 色調は最も黒い	
縄文	Mb11b					暗灰～黄灰色の火山灰質シルト～砂・シルト質粘土	
	Mb12	元総社ラハール堆積物		元総社ラハール	総社砂層	灰～紫灰色火山灰質シルト互層および火山灰質砂層、灰褐色軽石・亜角礫まじり砂層	
	Mb13		前橋I埋没土			暗灰～灰色の火山灰質シルト～砂質シルト	
後新世	Mb14			宮前 (浅間藤岡) テフラ (Mm)		軽石質火山灰～火山礫層	
	Mb15					暗灰～黒色の火山灰質シルト	
	Mb16			浅間総社テフラ (As-Sj)		軽石質火山礫層	
泥炭層	Mb17			浅間徳丸ラハール (Tm) 浅間板鼻黄色テフラ (As-YP)	Y P	暗灰～黒色の泥炭質シルト層 軽石質火山灰、軽石質火山礫層	
	Mb18		前橋J埋没土			暗灰～灰色のシルト、泥炭質シルト層 軽石質火山礫層	
	Mb19			浅間大窪沢テフラ (As-OP)		暗灰～灰色の砂質シルト 灰色火山灰質砂層	
旧石器	Mb20			榛名陣馬ラハール	S P	暗灰～灰色シルト・砂層 軽石質火山礫層	
	Mb21			浅間白糸テフラ (As-Sr)	B P	暗灰～灰色火山灰質シルト・砂層 軽石質火山礫層	
	Mb22	前橋泥流堆積物		浅間板鼻褐色テフラ (As-BP2)		暗灰～灰色火山灰質シルト・砂層 軽石質火山礫層	
Mb23	前橋砂礫層		始良Tnテフラ (AT)		軽石質火山礫層 灰～灰褐色砂礫層 A Tはボーリングで確認		

柱状図の凡例



(2001「徳丸仲田遺跡(1)」より転載)

第6図 前橋台地の層序

第2章 検出された遺構と遺物

1 縄文時代・弥生時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構と遺物のうち、草創期の遺構・遺物については『徳丸仲田遺跡(1)』(群埋文2001)で扱った。

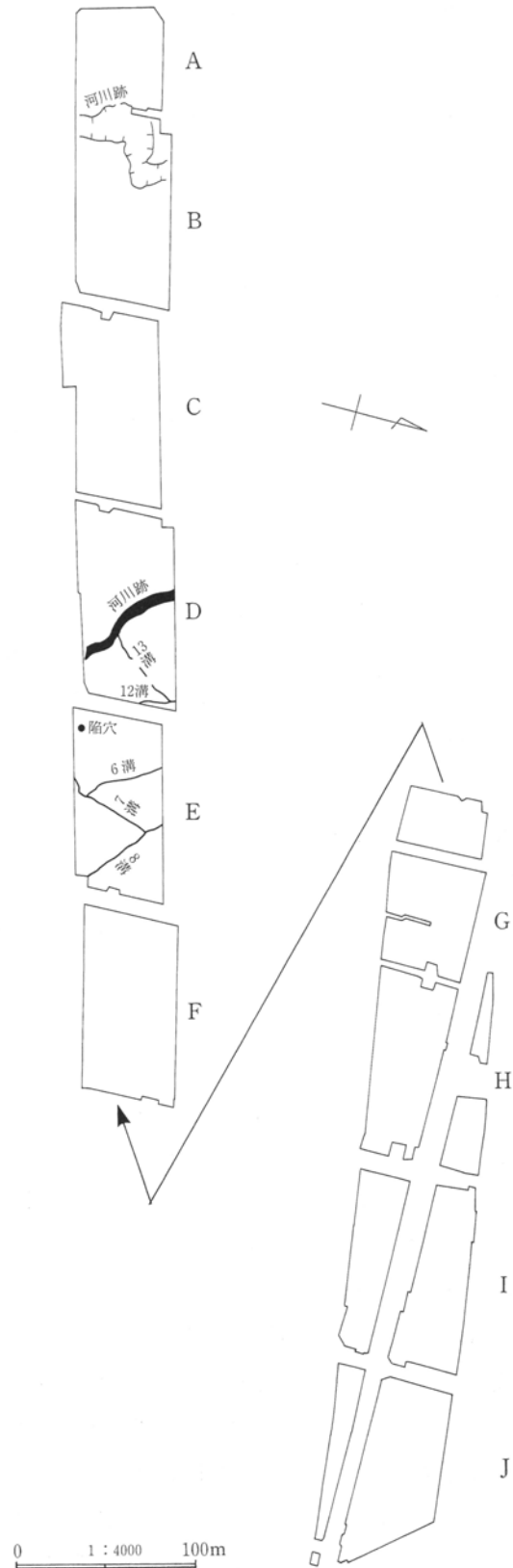
本時期の調査面は、基準層序のⅦ・Ⅷ層中にあたり、実際には灰色粘質土のⅧ層上面で遺構確認作業を行った。その結果、縄文時代に属すると思われる陥穴状の土坑と立木遺構、他にAs-C降下以前のすなわち古墳時代初頭以前と思われる河川跡・溝・倒木痕を検出した。これらは、調査区西半のA～E区で検出され、東半のF～J区では見られなかった。ただし、縄文土器・石器、弥生土器は東部に偏在しており、特に弥生土器の出土は微高地部分のI区に集中する。このことから、遺構は確認されなかったものの、居住地としては微高地が選ばれた可能性が高い。とすれば、A～Hの低地部分は狩猟・採集や食糧生産の場と想定することもあながち不当ではあるまい。

河川跡はB区とD区で2条、溝群はD～E区で5条が検出された。陥穴と立木遺構もE区で検出されている。いずれも、ほとんど時期判定可能な遺物が出土しなかったため、時代限定が困難ではあるが、Ⅶ層下面で検出されていること、As-C降下以前の土層によって埋没あるいは覆われていることから、縄文～弥生時代と判断した。

以下に、検出された各遺構と出土した縄文土器・石器及び弥生土器について詳述する。

溝群

D～E区にかけて網目状に分岐して走る5条の溝群で、これらは走向や形状、埋土の状況から、独立したものでなく相互に関連性をもつ遺構群と考えていいだろう。なお、D13号溝はD区河川跡と重複するが、新旧関係は確認できない。



第7図 弥生時代以前の遺構分布図

D区12号溝 (第8・9図 PL.2・3)

位置 D区北東部隅、100-630~120-635グリッド

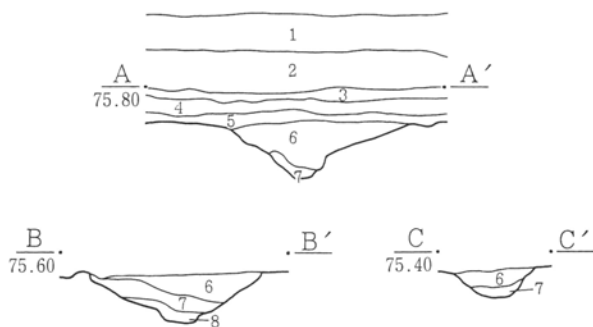
走向 直線部分はN-10°-Wで、北から南流して13号溝が分岐し、東側へ曲流する。南側延長部分は、隣接するE区で検出されなかったため、両調査区間の未調査部分を流下したと考えられる。

規模 幅1.42m、深さ38cm

断面形状 葉研状ないし蒲鉾形

埋土 灰色シルトで埋まり、下位にはロームの流れ込みによる堆積、上位は基準層序VII層に覆われる。

出土遺物 なし



- 1 表土、As-Bを含む。
- 2 灰褐色シルト As-B下水田耕土。
- 3 黒灰色シルト As-Cを含む。
- 4 黒色粘質土 有機物粒を含む。
- 5 暗灰色粘質土
- 6 灰色シルト 中位にラミナが見られる。
- 7 灰色シルト
- 8 黄灰色シルト As-YPを含む。

D区13号溝 (第8・9図 PL.2・3)

位置 D区東半部、080-665・115-635グリッド

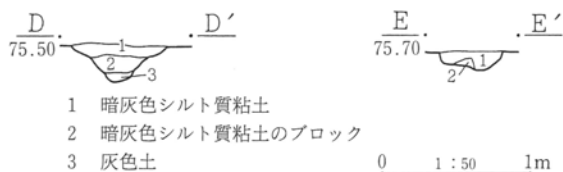
走向 直線部分はN-30~50°-Eで、北から南流して12号溝と分岐し、西端で河川跡に合流する。新旧関係は不明。また12号溝と分岐後約6mで北西方向に2mほど張り出す部分がある。

規模 幅0.70m、深さ12cm

断面形状 台形ないし箱形

埋土 灰色シルトで埋まり、上位は基準層序VII層に覆われる。

出土遺物 なし



- 1 暗灰色シルト質粘土
- 2 暗灰色シルト質粘土のブロック
- 3 灰色土

第8図 D区12・13号溝断面

E区6号溝 (第9・10図 PL.4~6)

位置 D区西半部、075-580~120-575グリッド

走向 直線部分はN-30°-Wで、北から南流してわずかに湾曲し、E7号溝と合流する。

規模 幅0.80m、深さ50cm

断面形状 葉研状ないし蒲鉾形

埋土 灰色シルトで埋まり、下位にはロームの流れ込みによる堆積、上位は基準層序VII層に覆われる。

出土遺物 調査区北界から約13m南流した地点から約6mの距離にわたって縄文土器片が出土した (PL.6)。出土レベルは溝底面から下層部分である。これらの土器片は一個体に接合復元されたことから、地山からの流れ込みか、人為的に廃棄されたと

推測される。ただし、周辺には縄文遺物の包含層はない。故意に持ち込まれたことも想定すべきだろう。

E区7号溝 (第9・10図 PL.4・5)

位置 E区中央部、085-575~120-560グリッド

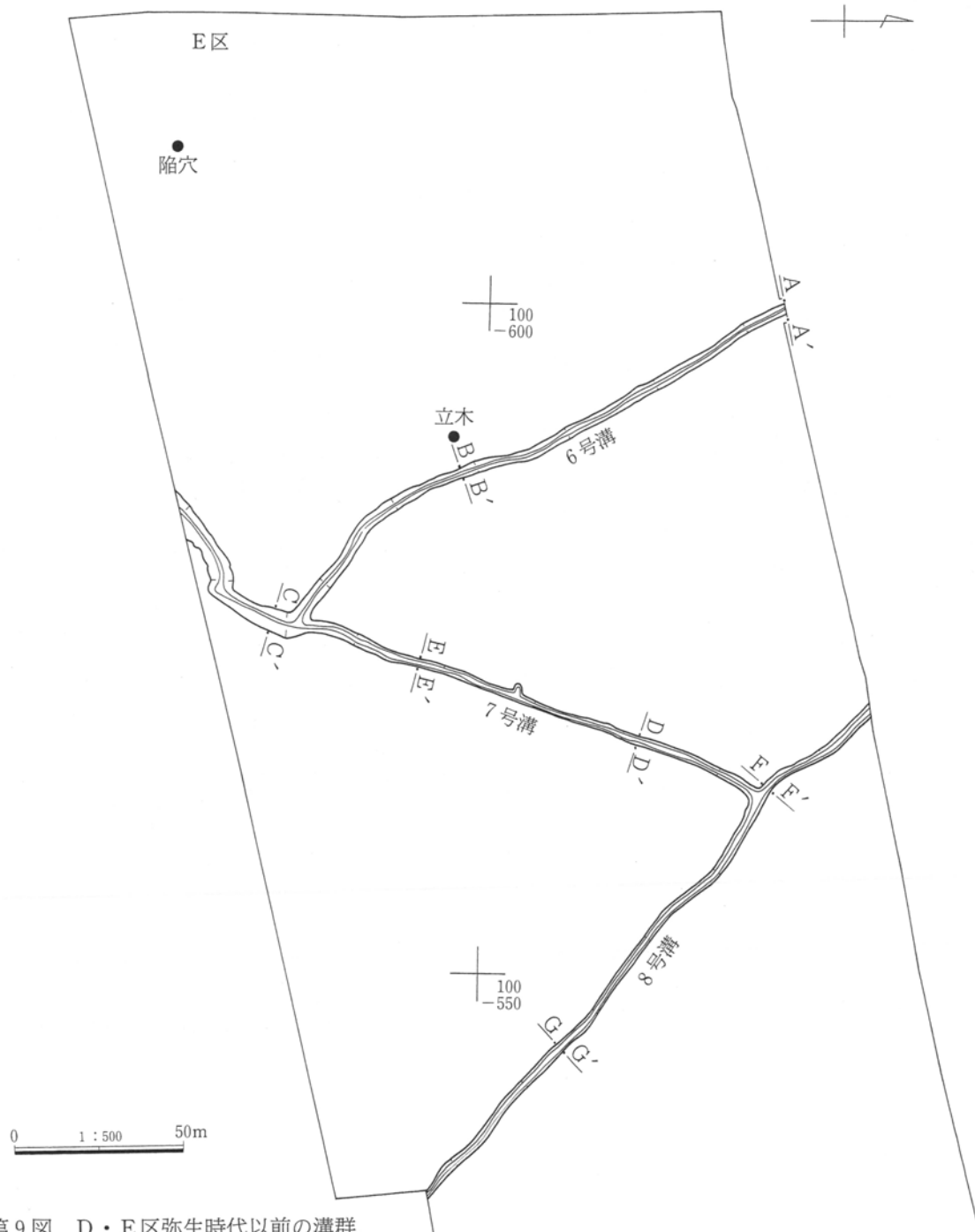
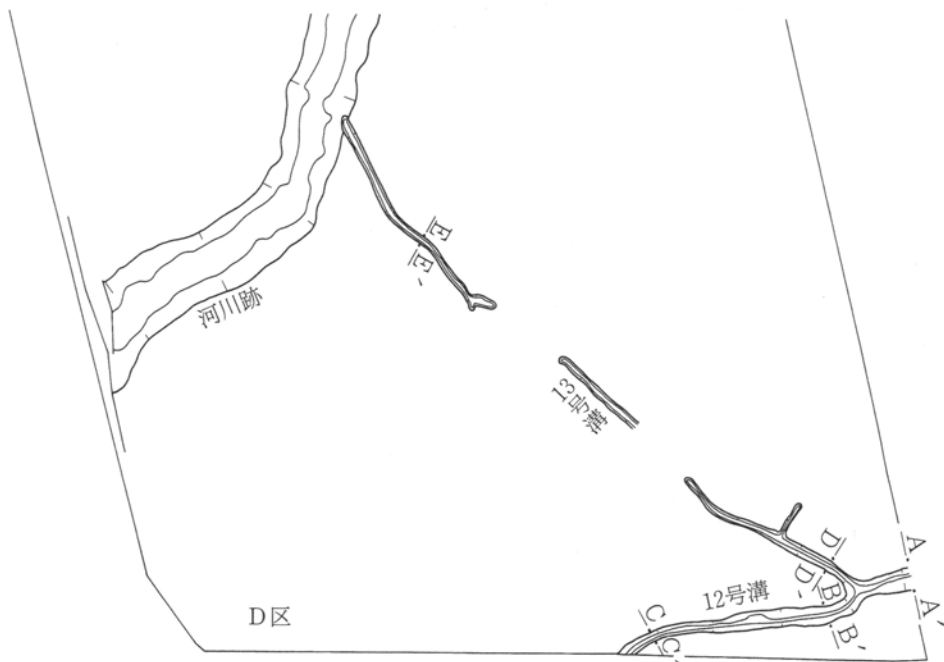
走向 N-18°-Eで、E区8号溝から分岐して南部でE区6号溝と合流、屈曲して南西流する。

規模 幅1.00m、深さ26cm。合流後は幅1.70m、深さ45cm

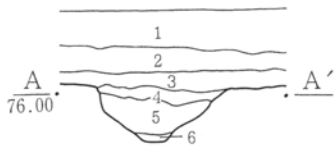
断面形状 葉研状ないし台形

埋土 灰色シルトで埋まり、上位は基準層序VII層に覆われる。

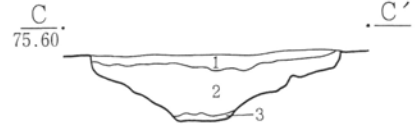
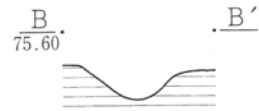
出土遺物 なし



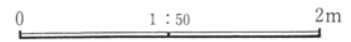
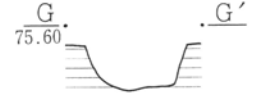
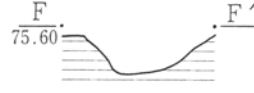
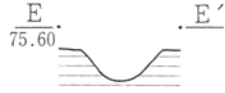
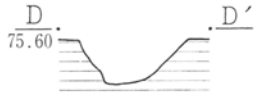
第9図 D・E区弥生時代以前の溝群



- 1 表土
- 2 灰褐色シルト As-B下水田耕土。
- 3 黒灰色シルト As-Cを含む。
- 4 黒色粘質土
- 5 暗灰褐色シルト
- 6 灰黒色砂



- 1 灰黒色粘質土
- 2 暗灰褐色シルト質砂、給源不明軽石含む。
- 3 灰黒色砂



第10図 E区6・7・8号溝断面

E区8号溝 (第9・10図 PL.5・6)

位置 D区北東部、095-530~125-570グリッド

走向 ほぼ直線でN-50°-W

規模 幅0.92m、深さ30cm

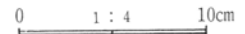
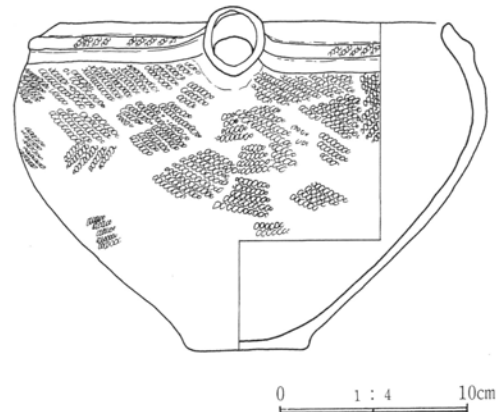
断面形状 台形ないし蒲鉾形

埋土 灰色シルトで埋まる。

出土遺物 なし

E区6号溝出土縄文土器 (第11図 PL.129)

加曽利E4式の注口浅鉢。口径22.5cm、器高17.5cmを測る。口縁と体部の約1/3を欠く。口縁下に縄文を施した隆帯を巡らし、体部中位以上に乱れた羽状縄文を施す。原体はLRで縦横回転。底部附近の外面がやや剝離するが、著しい摩滅痕はない。



第11図 E区6号溝出土土器

E区陥穴状遺構（第12図 P L. 6）

位置 E区南西隅、075-610グリッド

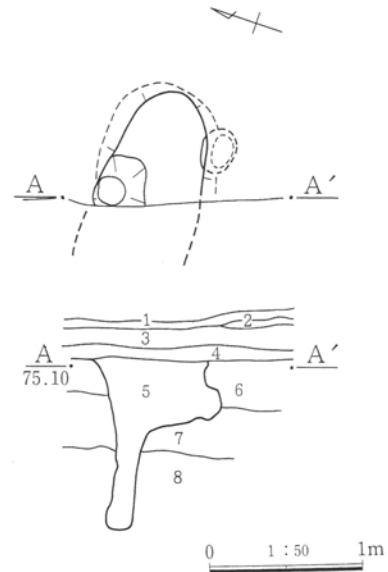
形状 細長い楕円形と思われるが、西半を欠き全形は明らかでない。断面は垂直に掘りこまれた箱形で、ピット1基が北寄りに掘られている。ピットはほぼ垂直で底面は平坦面となっている。また南東壁で内側にえぐり込んだピット様のくぼみがみられる。

規模 長さ85cm以上、幅70cm、深さ45cm、ピット径16cm、ピット深さ66cmを測る。

埋土 黒色シルトが堆積しており、上位を基準層序のVII層が覆っている。ピット内と土坑内の埋土は見かけ上ほとんど差がない。

出土遺物 なし

所見 本来の形状と深さが不明であること、ピットが偏っていることなどから、「陥穴」に限定するのに躊躇する。時期は、地山であるAs-YP含有ローム層を切っており、VII層によって覆われていることから、縄文～弥生時代であるのは間違いないが、それ以上の限定は困難である。また、同類の遺構は他の調査区では確認されていない。



- 1 黒灰色土
- 2 灰黒色土 As-Cを含む。
- 3 灰黒色シルト 粘性強い。
- 4 暗灰色粘質土
- 5 黒色シルト
- 6 黄灰色土
- 7 灰黄色シルト質砂 As-YP層。
- 8 灰黄色シルト

第12図 E区陥穴

E区立木遺構（第13図 P L. 6）

位置 E区西半部、095-585グリッド

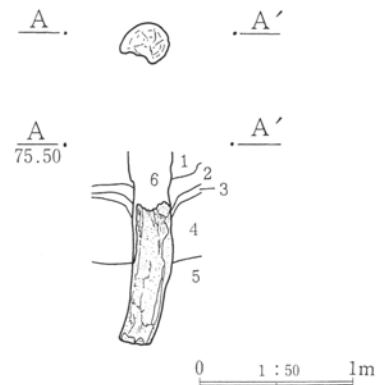
形状 樹木がほぼ垂直に立つ遺構

規模 直径24センチ、深さ95cm

樹木の状況 芯材と樹皮が残っており、下端部は平坦。平坦面は削ったか潰れたかは不明瞭。樹皮の一部に鋭く削られたような痕跡があるが、人為的な加工とも言い切れない。

ピットの状況 樹木の直径とほぼ同径の穴で、人為的な掘削とは考えにくい。土層断面の上位で周囲の地山As-YP層が下に引かれるように下がっていることから、この樹木が大きな力で地中に突き立てられ、押し込まれたと考えたい。なお、ピット上部には灰色粘質土が堆積し、その上をVII層が覆っている。従って時期は縄文～弥生時代と考えられる。

なお、同類の遺構は西方に続く徳丸高堰遺跡でも検出されており、流木の可能性が考えられる。



- 1 黄灰色シルト
- 2 灰黄色シルト質砂 As-YP層。
- 3 灰色細粒火山灰 As-YPに伴う火山灰。
- 4 暗黄灰色シルト
- 5 黄白色シルト質粘土
- 6 暗灰色粘質土

第13図 E区立木出土状況

河川跡

B区河川跡 (第14・15図 P L. 7・8)

位置 B区西端～A区の一部

走向 北方から流下し、S字状に大きく蛇行して南方へ下る。

規模 狭い部分で、幅9.2m、蛇行部分では21.6mと広がる。これは幾筋もの河道の重複のためだろう。深さは、VI層下面から推測される当時の地表面(標高76.1m前後)からおおよそ1.2m(底面標高75.0m)を測る。

断面形状 両岸壁がえぐられ、底面はややくぼんだ平坦面である。

埋土の状況 下層堆積後にAs-C(紀元300年前後)が堆積し、これを切ってA区9号溝が新たに形成されている。この9号溝がほぼ埋没した後にHr-FA(6世紀初)が堆積する。なお、断面ではHr-FAがくぼんだ部分に堆積しているようだが、層厚が均一であることから後世の陥没だと知れる。

出土遺物 流木と思われる材破片が最下層中から出

土するが人為的遺物はない。

所見 時期は下限が古墳時代前期ころと考えられるが、開始期については不明。ただし、古墳時代前期の人工水路であるA区9号溝(第74図)が河川跡中を縦走して掘りこまれていることから(第14図下の8層部分)、それ以前に埋没して蛇行する窪地になっていたと考えられよう。

D区河川跡(第16図 P L. 9・10)

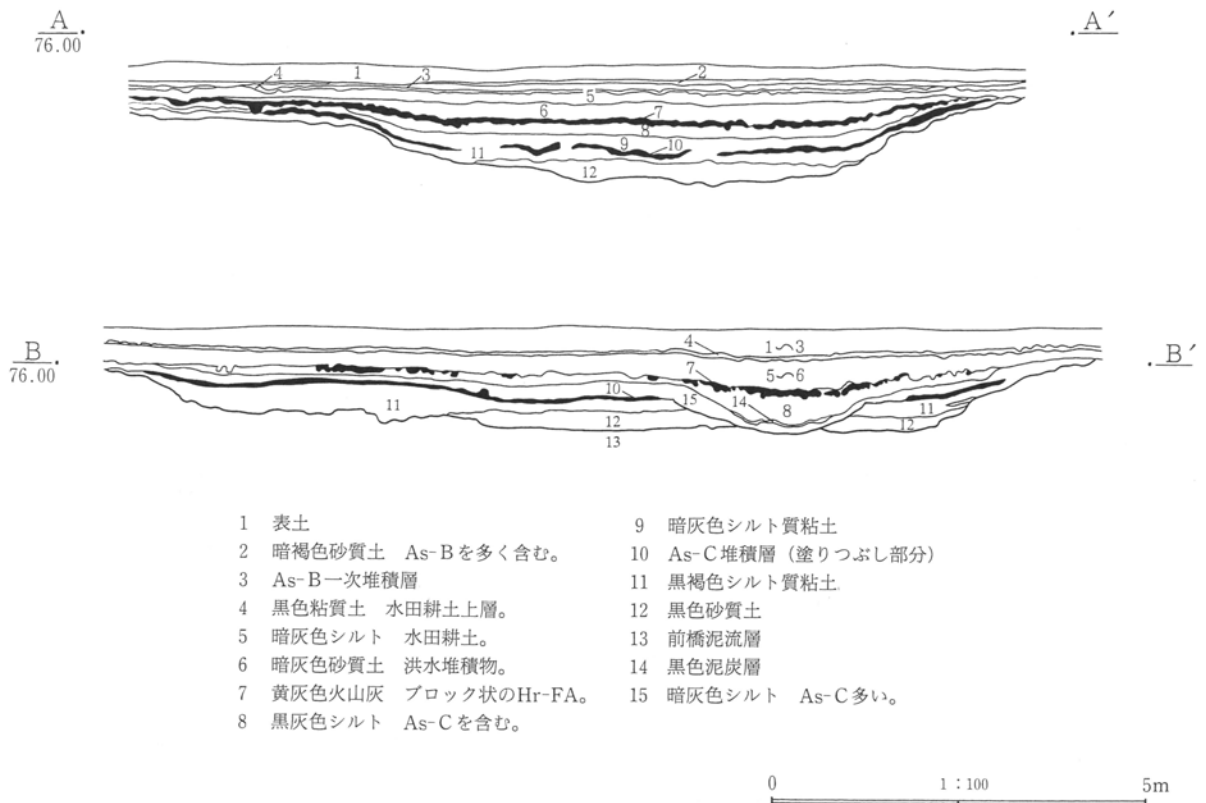
位置 D区中央

走向 北方から緩く蛇行しながら南流する。

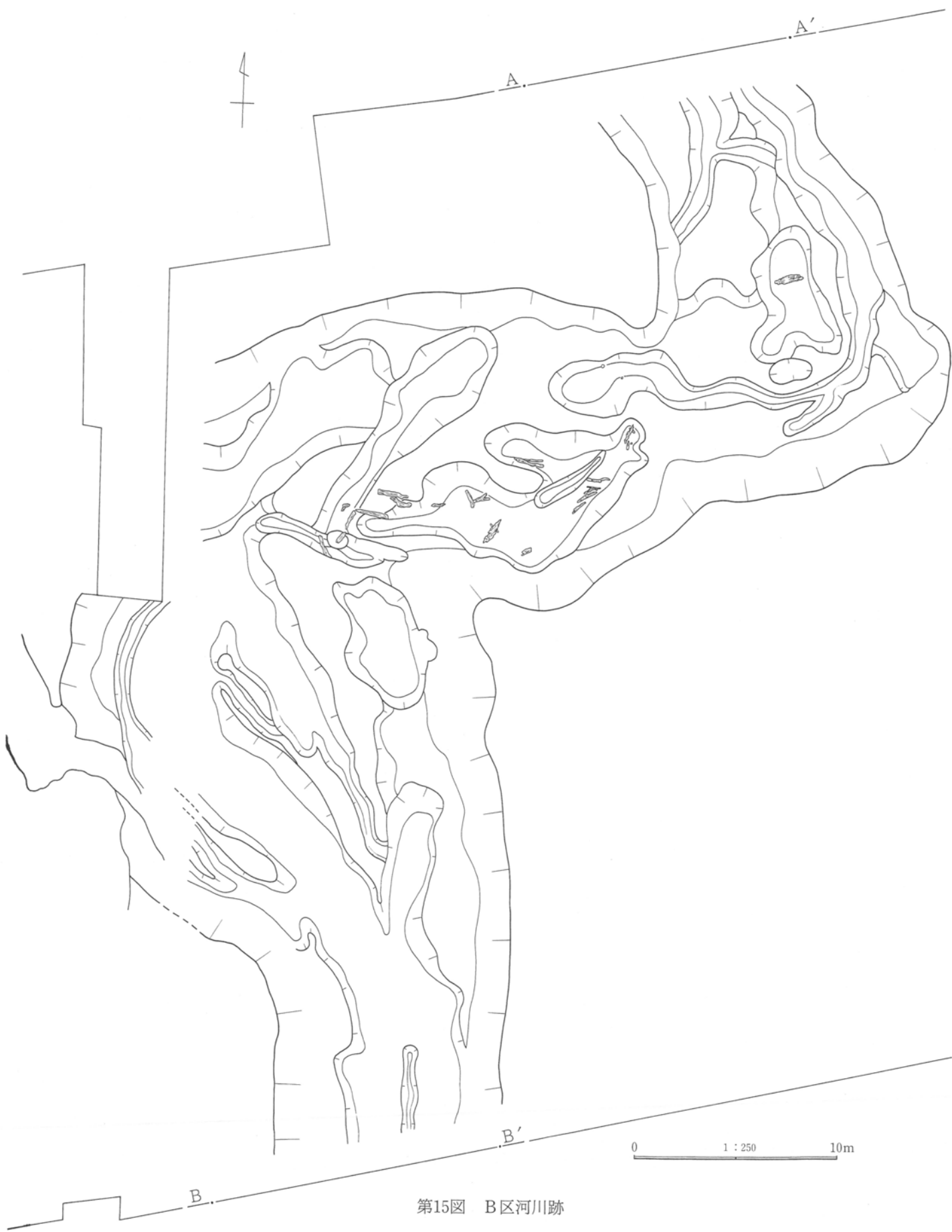
規模 幅3.5～6.2m、深さ60cm(底面標高74.9m)を測る。

断面形状 浅い台形状で、底面は比較的平坦。これは底面の地山が硬質の前橋泥流層のためである。B区河川跡に比べて比較的整っている。

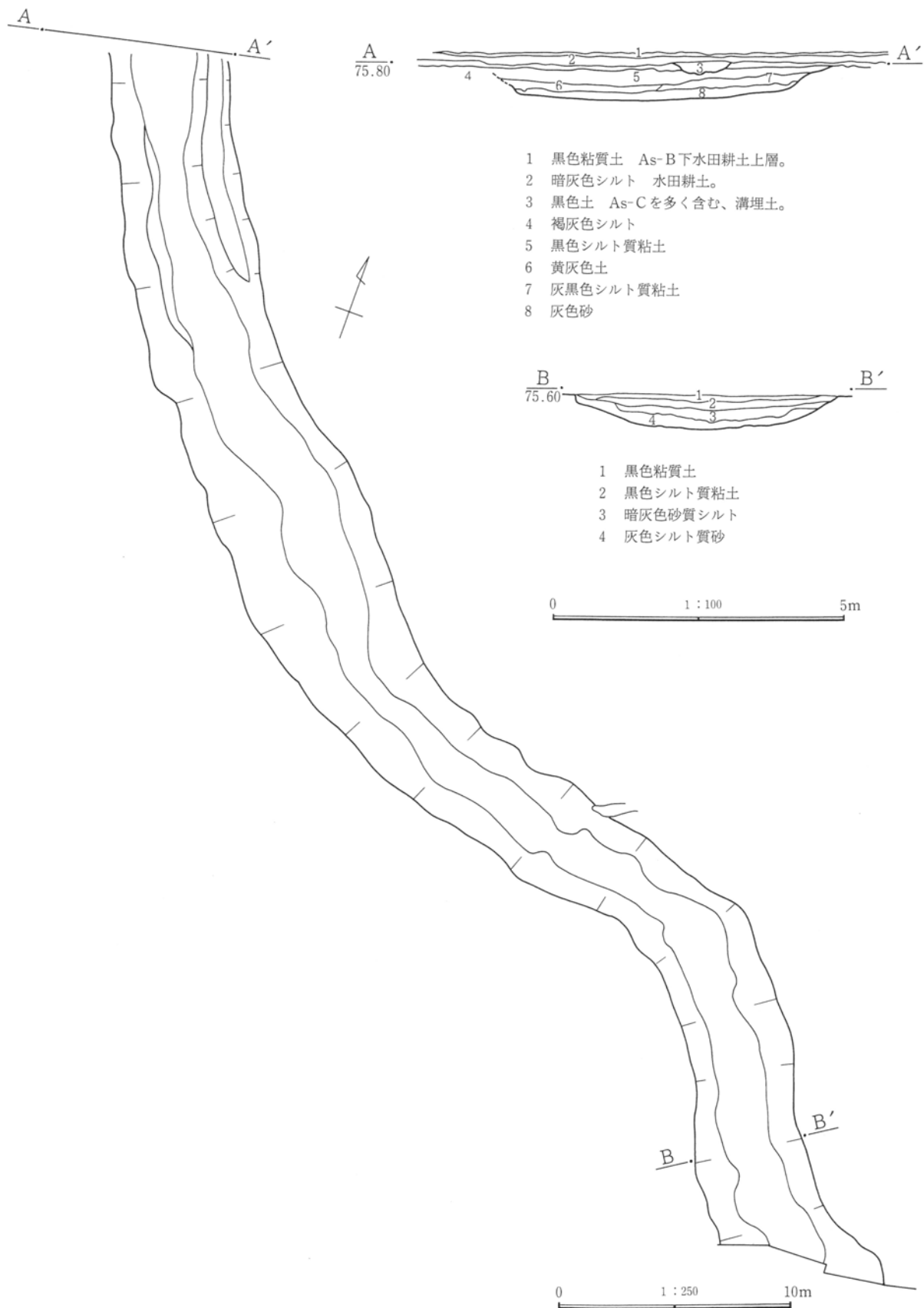
埋土の状況 As-Cを含むVI層が上位を覆い、VII層に相当する土層で埋没する。中位～下層に自然木と思われる腐食有機物が多く含まれる。



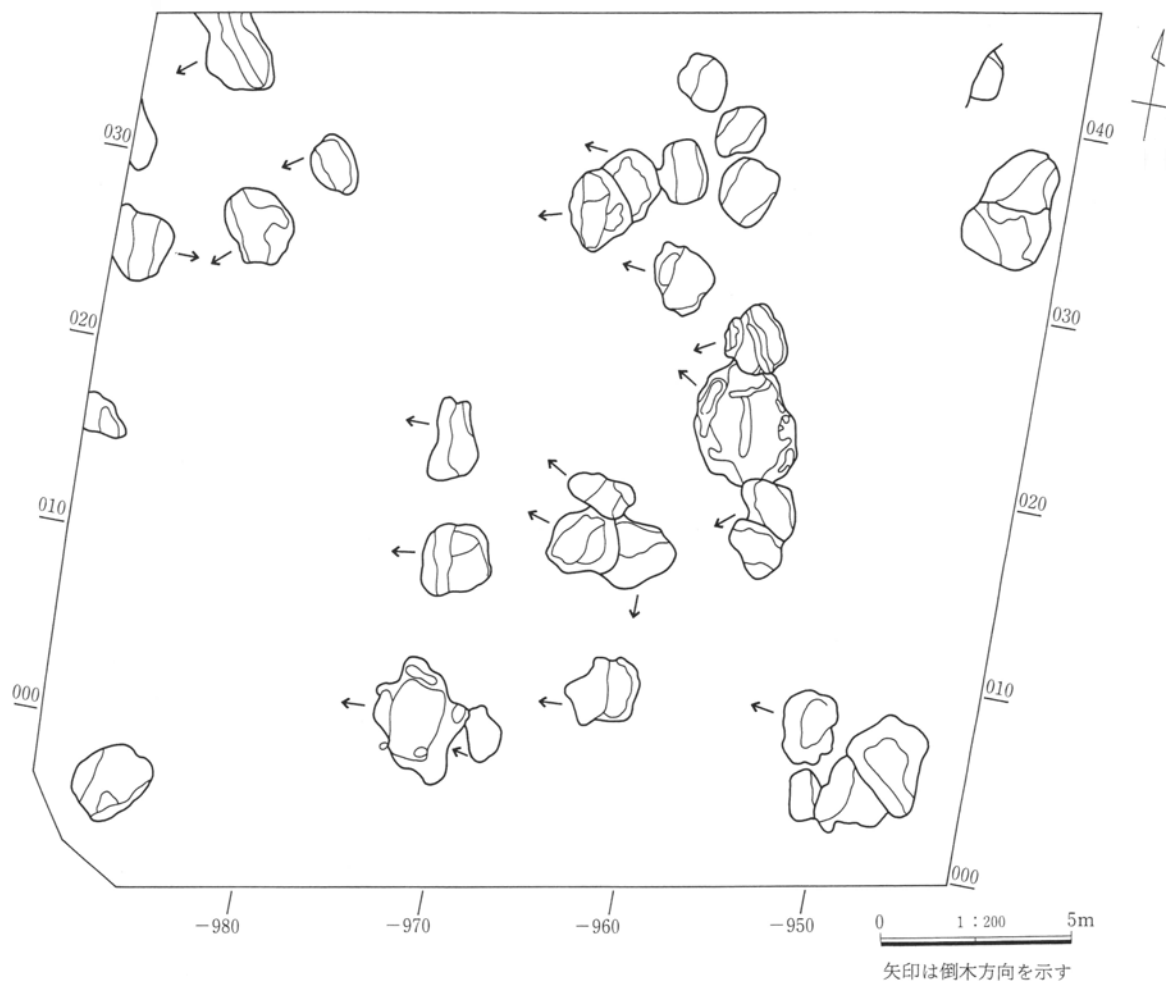
第14図 B区河川跡断面



第15図 B区河川跡



第16図 D区河川跡



第17図 A区倒木痕

出土遺物 なし

所見 D区13号溝と重複するが、新旧関係は不明。埋土に全くAs-Cを含まないことから埋没時期の下限は弥生時代末頃と考えられ、B区河川跡とほぼ同時かやや早く埋没したとしていいだろう。またこれが弥生時代の水路等に利用された可能性は否定できないが、人為的な痕跡は残念ながら検出できなかった。

A区倒木痕 (第17図)

A区で基準層序のⅧ層上面で検出された。他の調査区におけるこの面での調査は、トレンチ調査によって確認された人為的遺構にのみ限定したので、検出していない。A区で確認できたのは33基で、ラン

ダムに分布する。

検出面での根鉢の径は、最大で3.0×2.5m、最小で1.5×0.9mを測る。

平面調査で判明した倒木方向のうち、西側を示すのが84%を占め、東側と南側がそれぞれ1基づつ見られる。地形的には平坦地であり、季節風は冬季から春季にかけて北～西風の強い地域であることから、倒木の要因を強風に求めるならば、強い東風が吹く台風を想定すべきだろう。

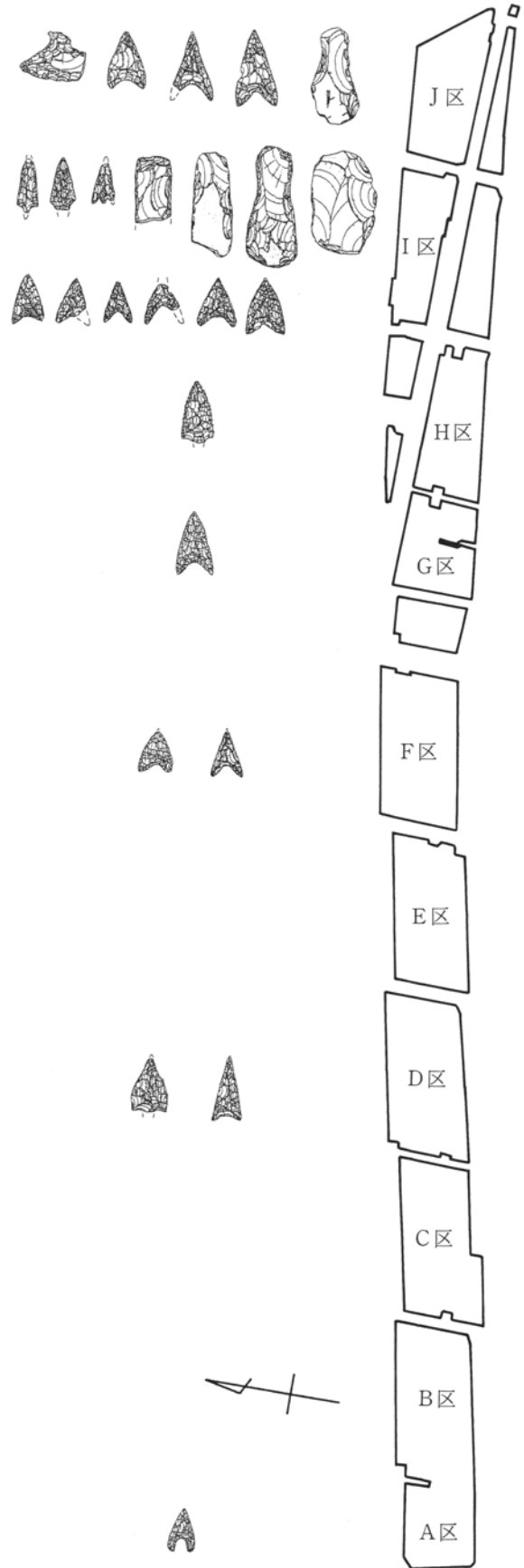
本倒木痕の時期は、As-Cを含まない埋土の状況から弥生時代以前としか判明しない。また炭化物等も確認できないことから、開墾に伴う焼き払いも想定することは難しい。

縄文土器と石器 (第18~23図)

縄文時代の土器及び石器の出土分布は、微高地であるI~J区に偏在しており、前述のE区6号溝出土の注口浅鉢が例外である。第18図には調査区ごとの石器出土例を示した。

第19図には、縄文土器を掲げた。1~5は胎土に繊維を含む。いずれも体部片で、3のコンパス文以外は縄文を施す。1・2はRL0段多条と思われる。4は付加条RL+Rを原体としている。いずれも黒浜式と思われる。6~14は諸磯c式で、いずれも地文に細い集合沈線で横線か斜線を施し、その上から耳状突起及びボタン状貼付文を付加する。6は外面に矢羽根状の刻みを加えた3条の細浮線文を巡らし、上向きの小型獣面把手を付ける。15は半截竹管で横線その上下を矢羽根状に刻む、その下には爪形文を施す諸磯b式と思われる。16は縄文地文に小さな爪形文を巡らす。諸磯bか。17は内傾する面取りの口縁部で細かい刻みを施す。型式は不明。18・19は同一個体で、垂下した隆線で区画し、縄文地に半截竹管で波状文と刺突列を施す。中期五領ケ台式と思われる。20は加曾利E3式の体部片。21は隆線による小さな渦巻き文を重ねた把手部分で、口縁下に2条の横位沈線が見える。堀之内2式と考えられる。22も堀之内2式で細い沈線で横位矢羽根文を描く。23は胎土と焼成の特徴から前期の可能性有り。24・25は他の縄文土器から堀之内式深鉢の底部と考えたい。土器の時期別分布では、諸磯式がI区微高地上に集中し、他はJ区河川跡等に散在する傾向を見せる。遺構は検出されなかったが、H~J区に広がる微高地上に諸磯期の生活跡が存在した可能性は高いだろう。

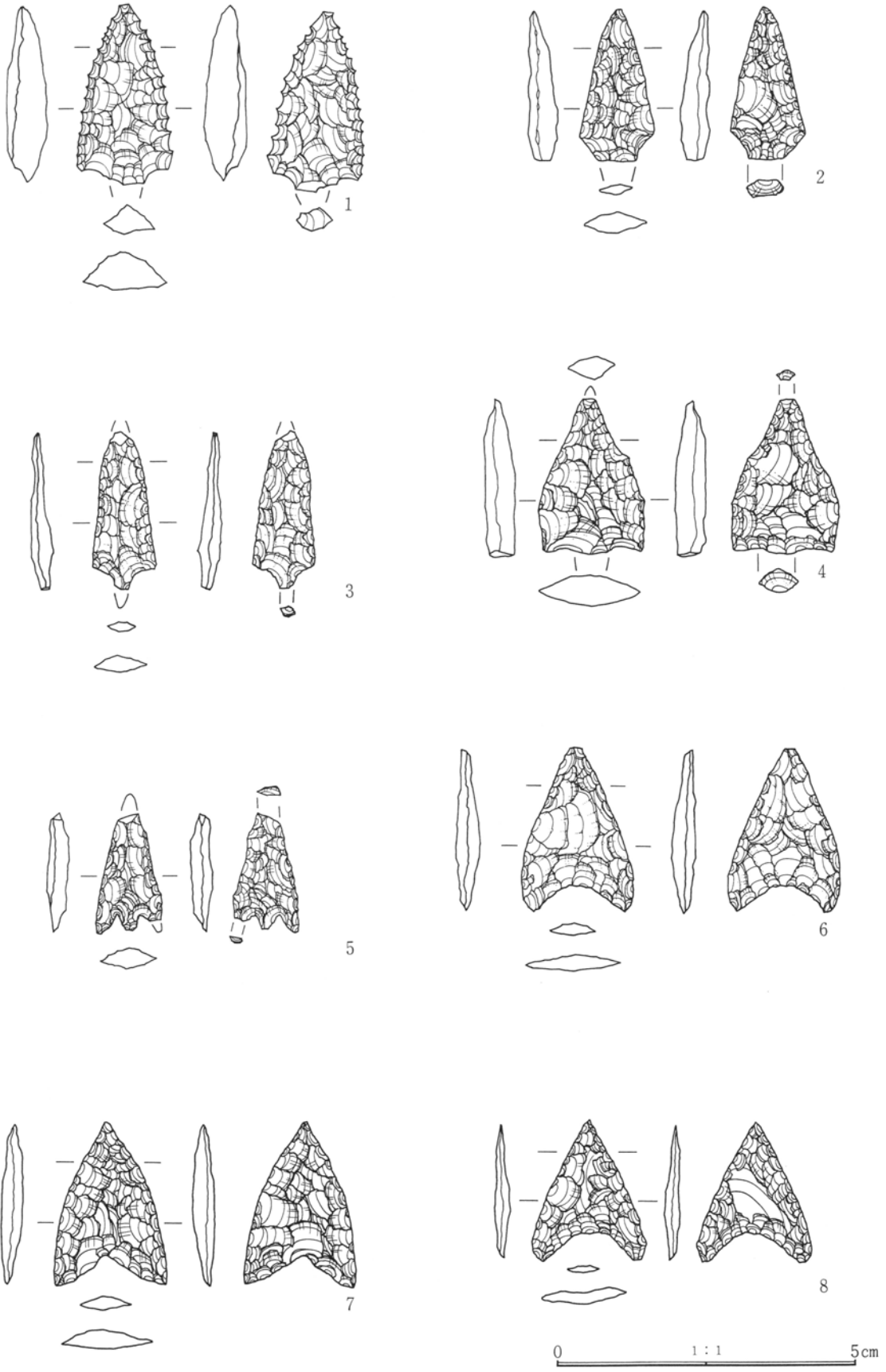
石器(第20~23図)は、有茎尖頭器(1・2)、石鏃(3~19)、石鋏(20)、打製石斧(21~23)、石匙(24)、剝片(25)がある。1は丁寧な調整でやや湾曲した鋸歯状側縁をもち、2は細身の三角形を呈する。2は同大の石鏃に比べて厚みがあり、基部の返しが弱いことから尖頭器とした。3は薄い作りだが基部形状から尖頭器あるいは草創期の有茎石鏃の可



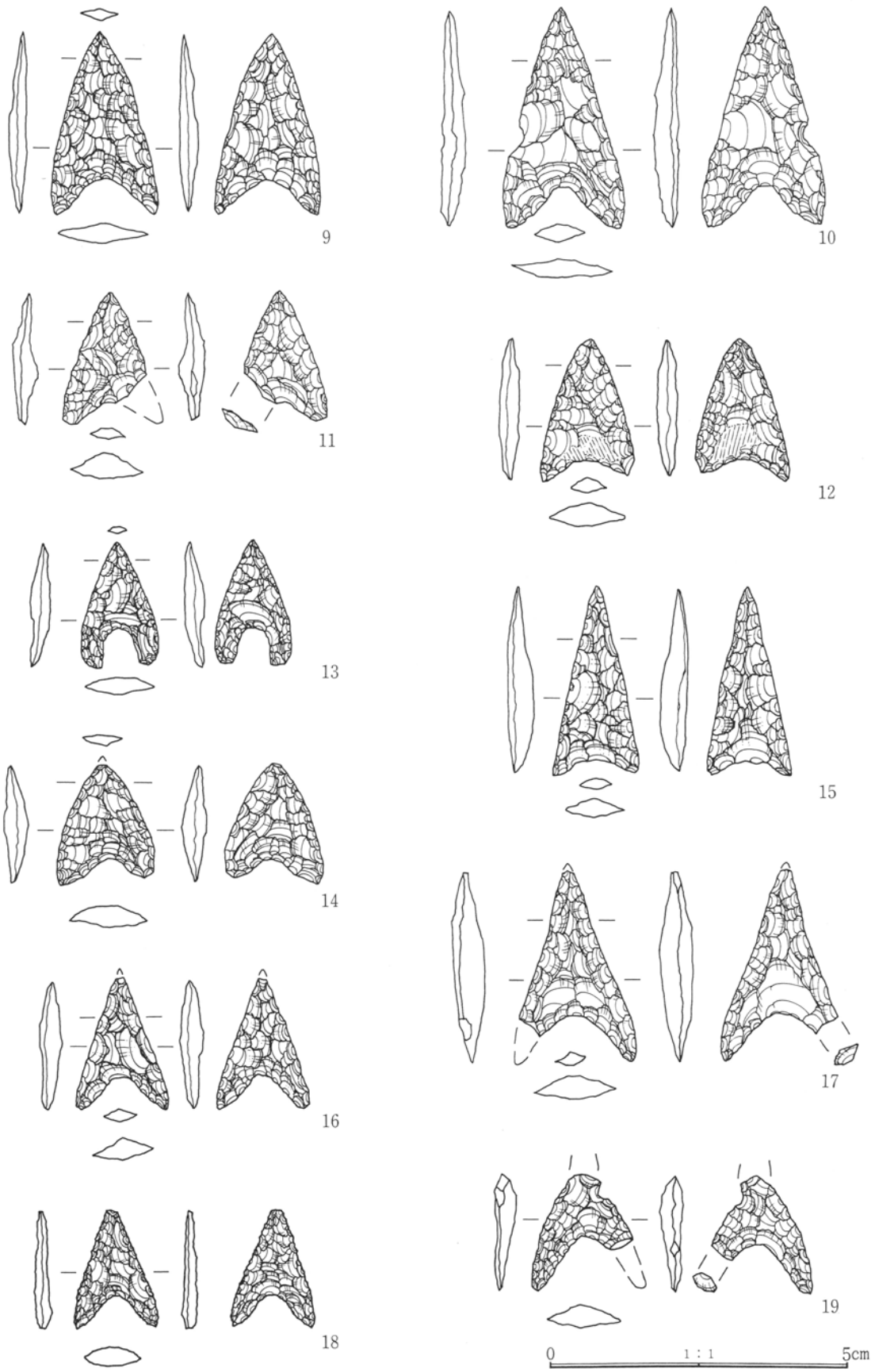
第18図 石器の分布図



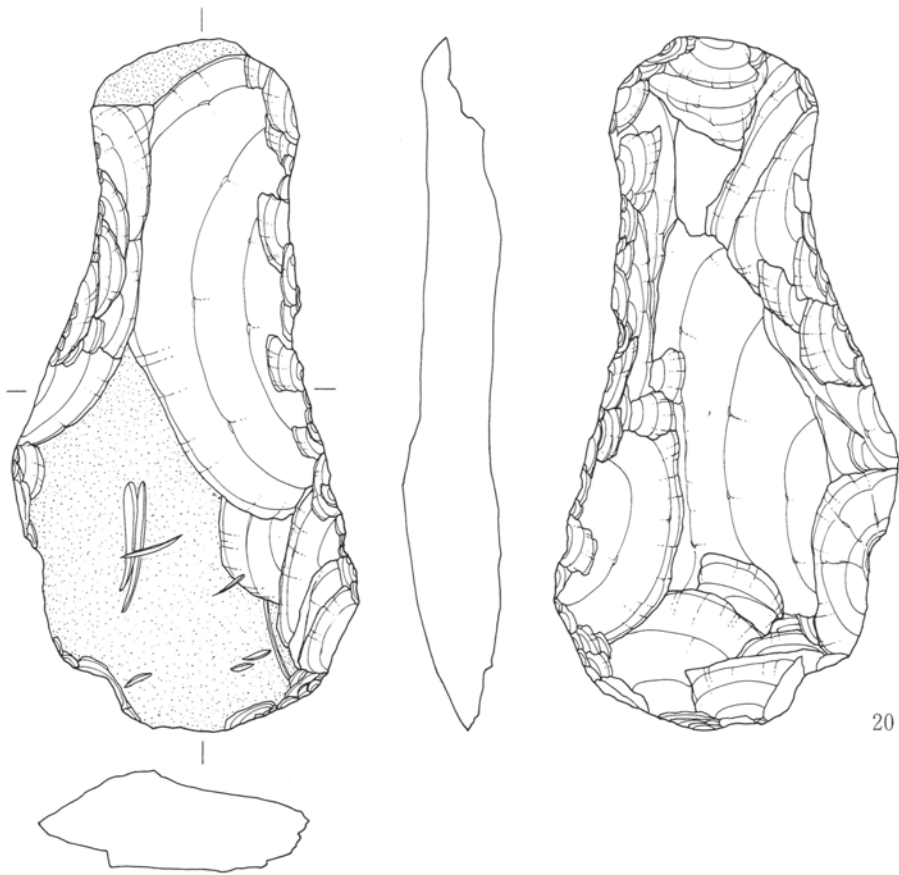
第19図 縄文土器



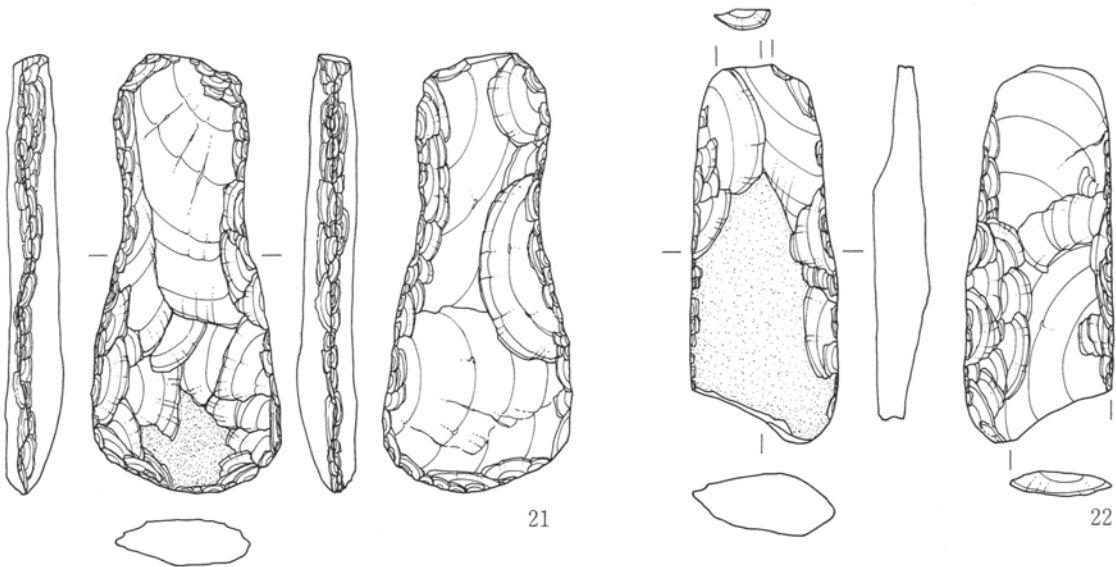
第20图 石器（1）



第21图 石器(2)



20

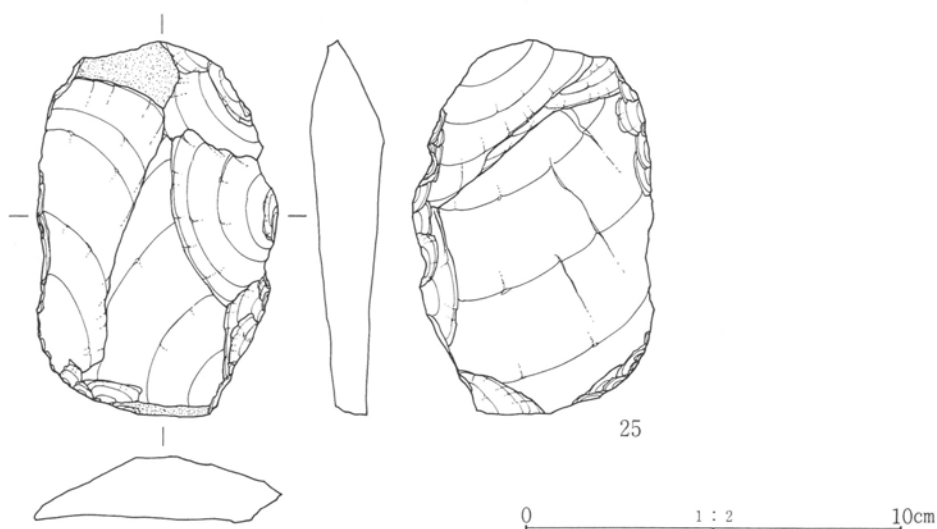
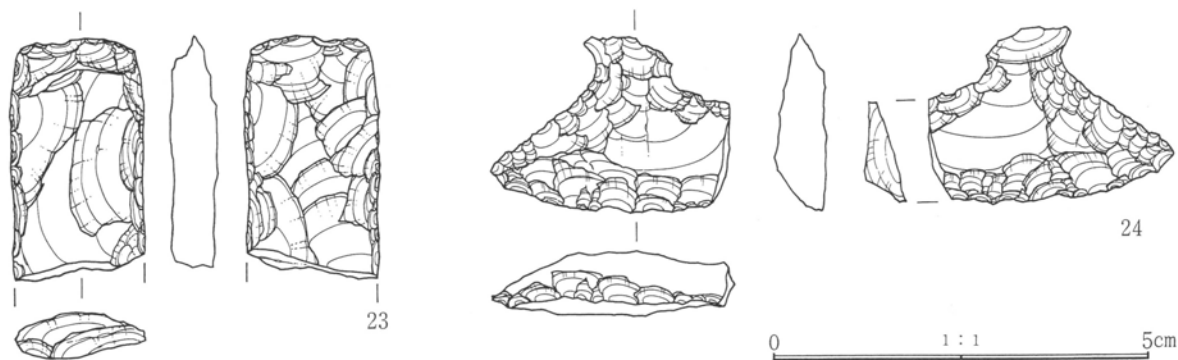


21

22

0 1 : 2 10cm

第22図 石器 (3)



第23図 石器(4)

第2表 石器一覧

番号	器種	出土位置	大きさ(mm)			重量(g)	石材	備考
			長さ	幅	厚さ			
1	有茎尖頭器	H区5号溝	3.0	1.6	0.6	2.5	ガラス質安山岩	鋸齒状
2	有茎尖頭器	I区195-135	2.5	1.2	0.3	1.0	黒曜石	
3	石鏃	I区グリッド	2.6	1.0	0.3	0.8	黒色頁岩	
4	石鏃	D区トレンチ	2.6	1.7	0.5	1.7	チャート	
5	石鏃	I区18号溝	1.9	1.1	0.3	0.5	チャート	
6	石鏃	J区11号住	2.6	1.8	0.3	1.2	黒色安山岩	
7	石鏃	I区試掘	2.7	1.7	0.3	1.1	珪質頁岩	
8	石鏃	I区1号住	2.3	1.9	0.2	0.6	黒曜石	
9	石鏃	G区FP泥流	3.1	1.6	0.3	1.1	黒曜石	
10	石鏃	J区21号溝	3.6	1.9	0.3	2.0	チャート	
11	石鏃	I区15号住	2.2	1.3	0.4	0.6	チャート	
12	石鏃	I区As-C下	2.3	1.5	0.4	0.8	黒曜石	
13	石鏃	A区10号溝	2.1	1.3	0.3	0.6	褐色碧玉	
14	石鏃	F区C混土	2.0	1.6	0.4	0.7	黒曜石	
15	石鏃	D区C混土	3.2	1.3	0.3	1.0	チャート	
16	石鏃	F区2号溝	2.2	1.3	0.4	0.5	チャート	
17	石鏃	J区220-035	3.2	1.9	0.4	1.4	黒色頁岩	
18	石鏃	I区200-150	2.0	1.2	0.3	0.4	チャート	
19	石鏃	I区ローム上	2.0	1.5	0.4	0.5	黒曜石	
20	石鏃	J区7号住	18.3	8.4	2.5	459.0	暗灰色砂質泥岩	自然面に刻線あり、キズか
21	打製石斧	I区グリッド	11.6	5.0	1.5	88.0	凝灰質泥岩	
22	打製石斧	I区グリッド	(10.0)	3.9	1.4	65.0	灰色安山岩	刃部欠損
23	打製石斧	I区48号溝	(6.3)	3.5	1.2	41.0	凝灰質泥岩	下部破片
24	石匙	J区河道	2.3	(3.2)	0.7	4.3	チャート	
25	剝片	I区48号溝	9.9	6.5	1.6	126.0	黒色泥質岩	

能性がある。4は平基有茎で幅広の基部から内湾きみに尖る特徴的な形状を呈する。5は細身の凹基有茎で先端を欠く。6～19は凹基無茎で5類に分けられる。6～12は大きめで幅広の三角形、基部のえぐりが浅い山形を呈する。12は基部を研磨した特殊例である。13はえぐりが深く「鋏形鏃」に近い形状を呈する。14は丸みの強い側縁をもつずんぐりとした形状。15は細く整った三角形でえぐりが浅い。16～19は全長に比べてやや長い脚をもつ。1～3は草創期の可能性が高いと考えるが、同期の遺物が集中した地点（『徳丸仲田(1)』2001）からはやや離れて出土した。

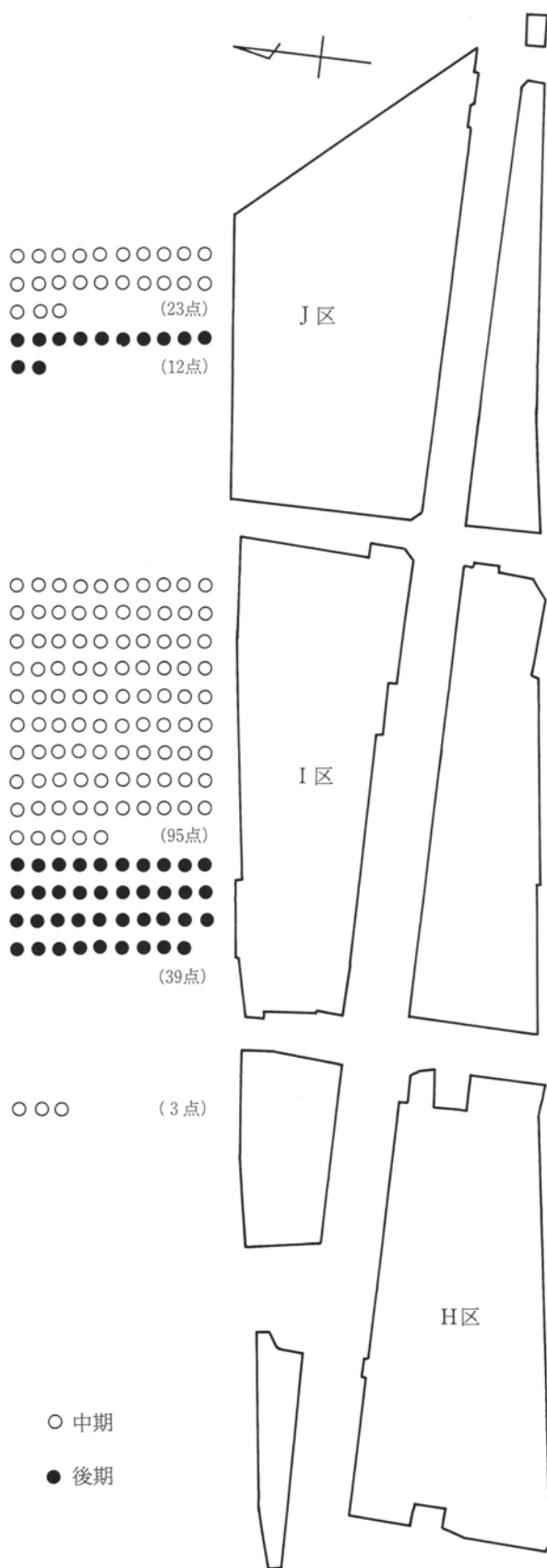
20の石鋏は片面に自然面を残す円刃形状で、刃部はやや摩滅する。これはJ区微高地部分から出土しており、同様に微高地に集中して出土する弥生土器に伴う可能性が高い。

21はやや刃部の広がる撥形、22・23は短冊形の小型打製石斧で、刃部は若干摩滅する程度である。24の石匙は片刃状の剥片素材を両面からの剥離で調整する。25は右側縁を背とした刃器と考えられ、左側縁は使用痕と思われる細かい剥離が見られる。

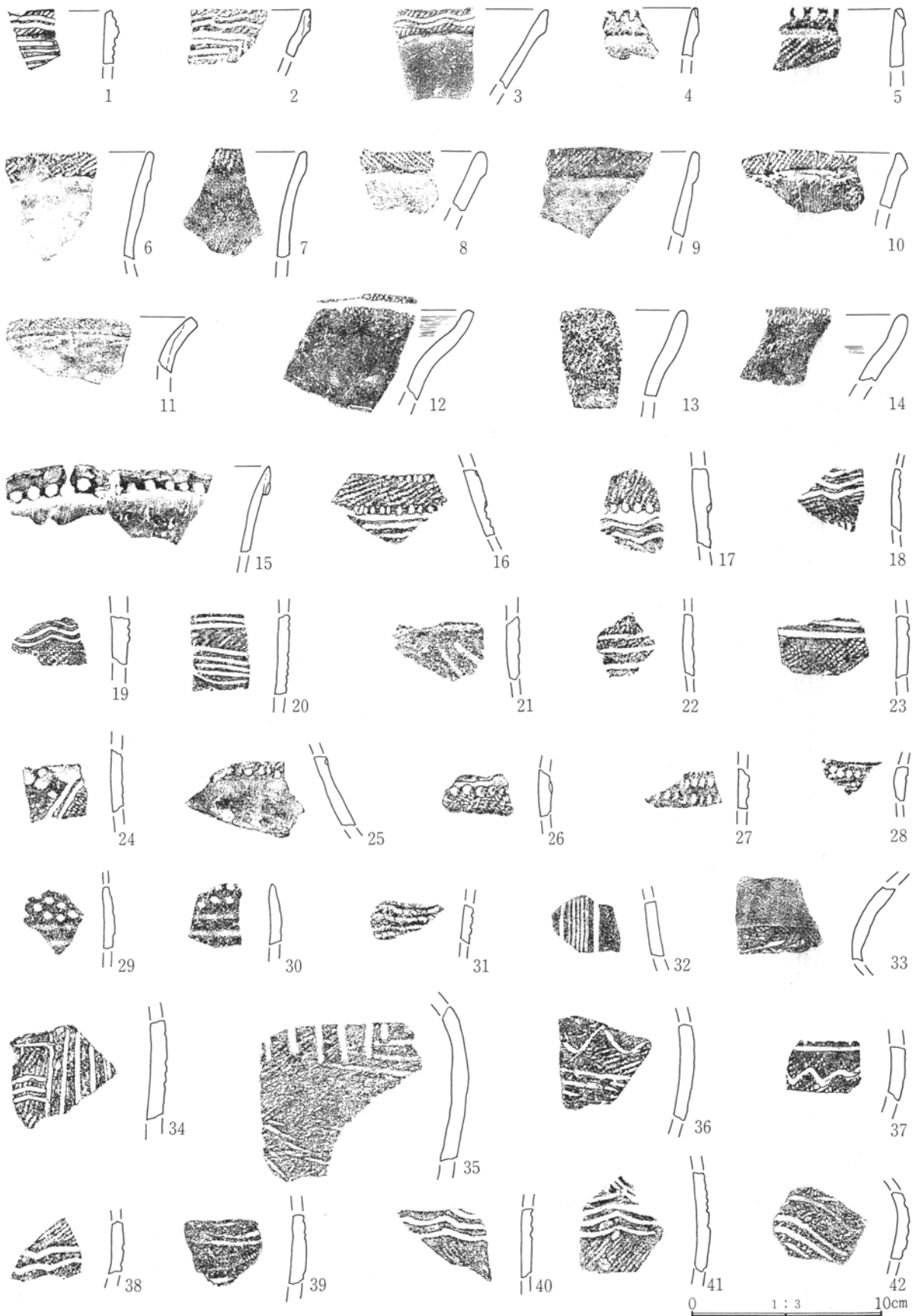
弥生土器（第25～30図）

弥生土器は微高地のI・J区から出土しており、その78%がI区に集中する。J区では河川跡からの出土がほとんどである（第24図）。I区では遺構は確認できなかったが、基準層序のVII層に含まれている場合が多く、後期～古墳時代前期の赤井戸・吉ヶ谷式は古墳前期の遺構に伴う可能性も十分考えられる。ここでは、遺構内外を問わず弥生土器を集成してある。

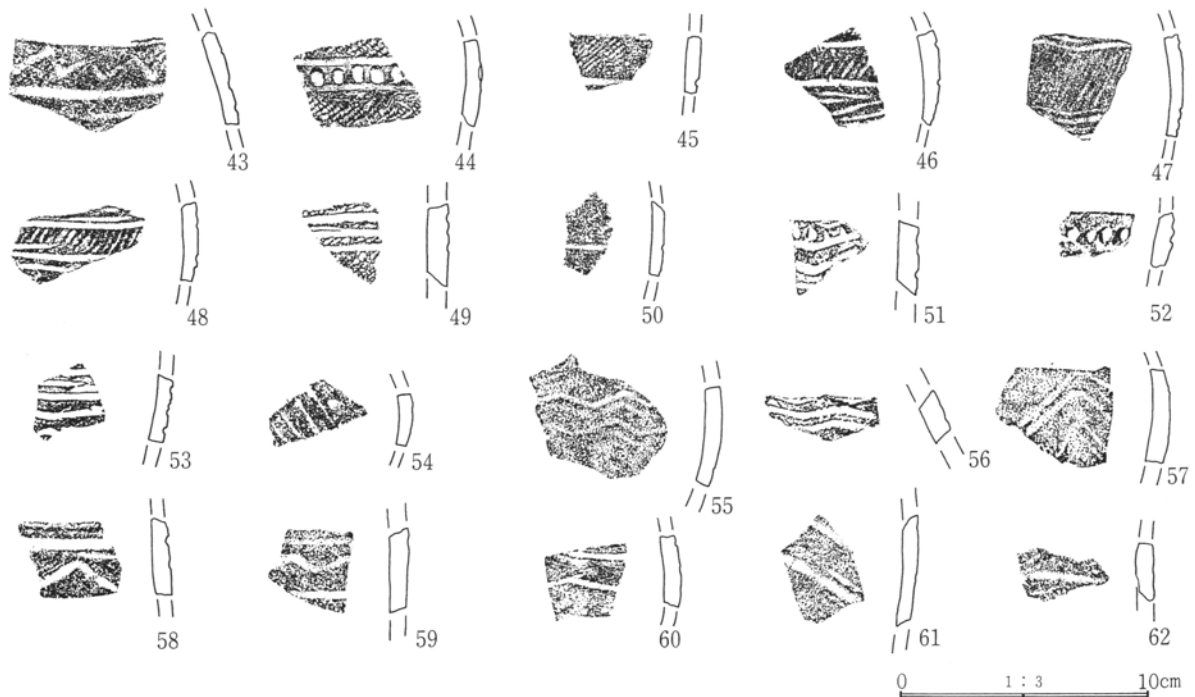
1～15は壺口縁にあたる。1～10は外面にやや肥厚した平坦面をもち、ここに縄文を施す一群で、1～3は2本一組の沈線による波状文、4・5は刻みを施す。また、1・2は口縁下から頸部にかけて重四角文を描いているようであ



第24図 弥生土器の分布密度



第25图 弥生土器 (1)



第26図 弥生土器（2）

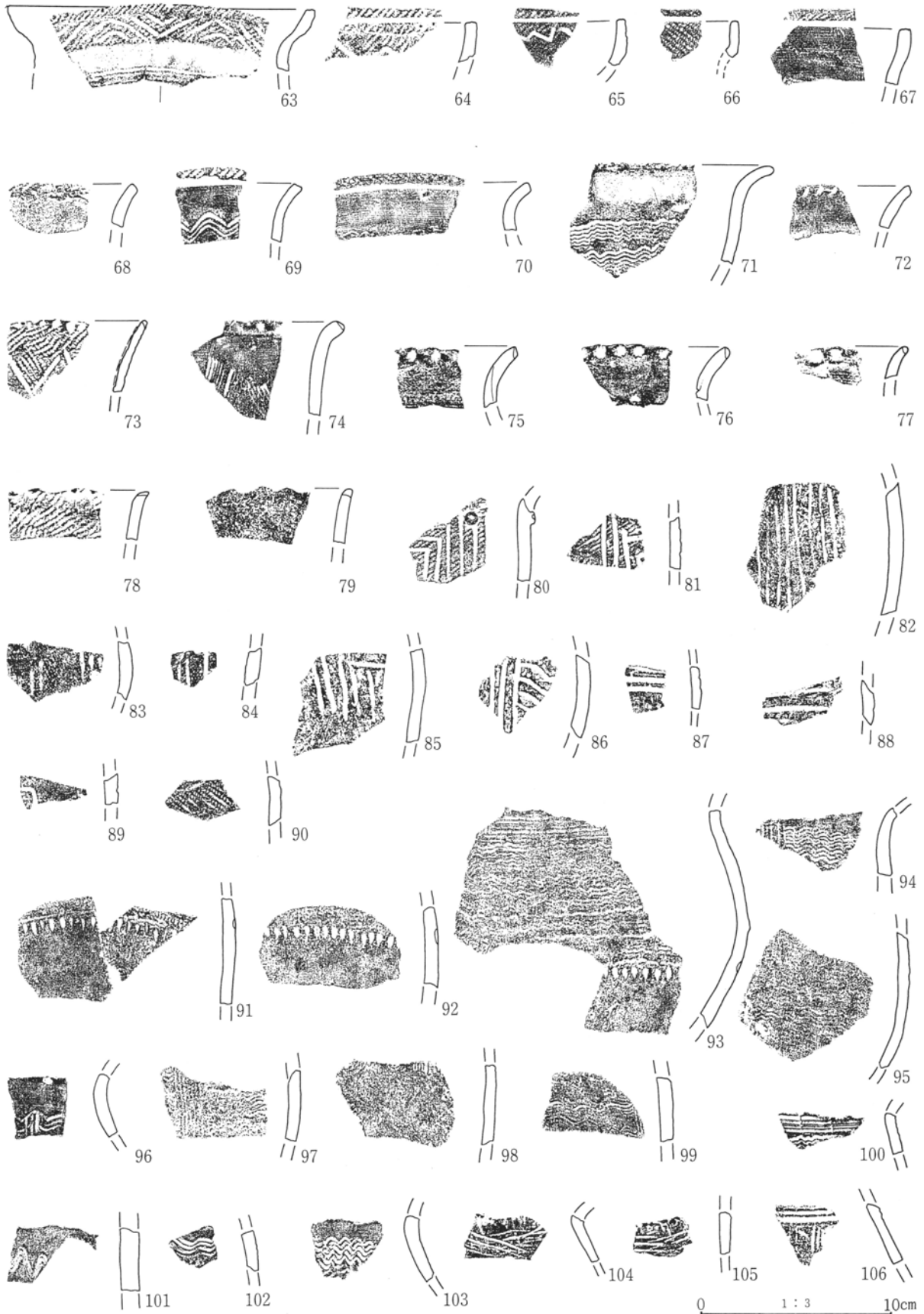
る。5は頸部に縄文（LR）、10は11本単位の櫛状具による細沈線を垂下させている。これらは中期後半で栃木県～埼玉県北部に主分布域をもつ御新田式に近い一群といえる。11は小さく外反し口唇部に縄文を施す。中期後半の栗林式だろう。12～14は内湾きみに開く口縁に縄文を施した例で栗林式の新しい段階のものだろう。15は薄い折り返し口縁の下端に篋状具小口による刻みを加えており、後期樽式の新しい段階と思われる。

16～33は壺頸部片。16・17は肥厚した横帯に縄文と端部に刺突状の刻みを加え、下位に3本以上の平行沈線による横線文ないし連続山形文を施す。18・19は縄文地に3本以上の平行沈線の波状文を施し、18の下端には刺突列が見える。20は縄文地（L）に4本単位の横走平行沈線と下位に連弧文を描く。21～23も縄文地に沈線で横線文を描く。21は右斜下への沈線がある。

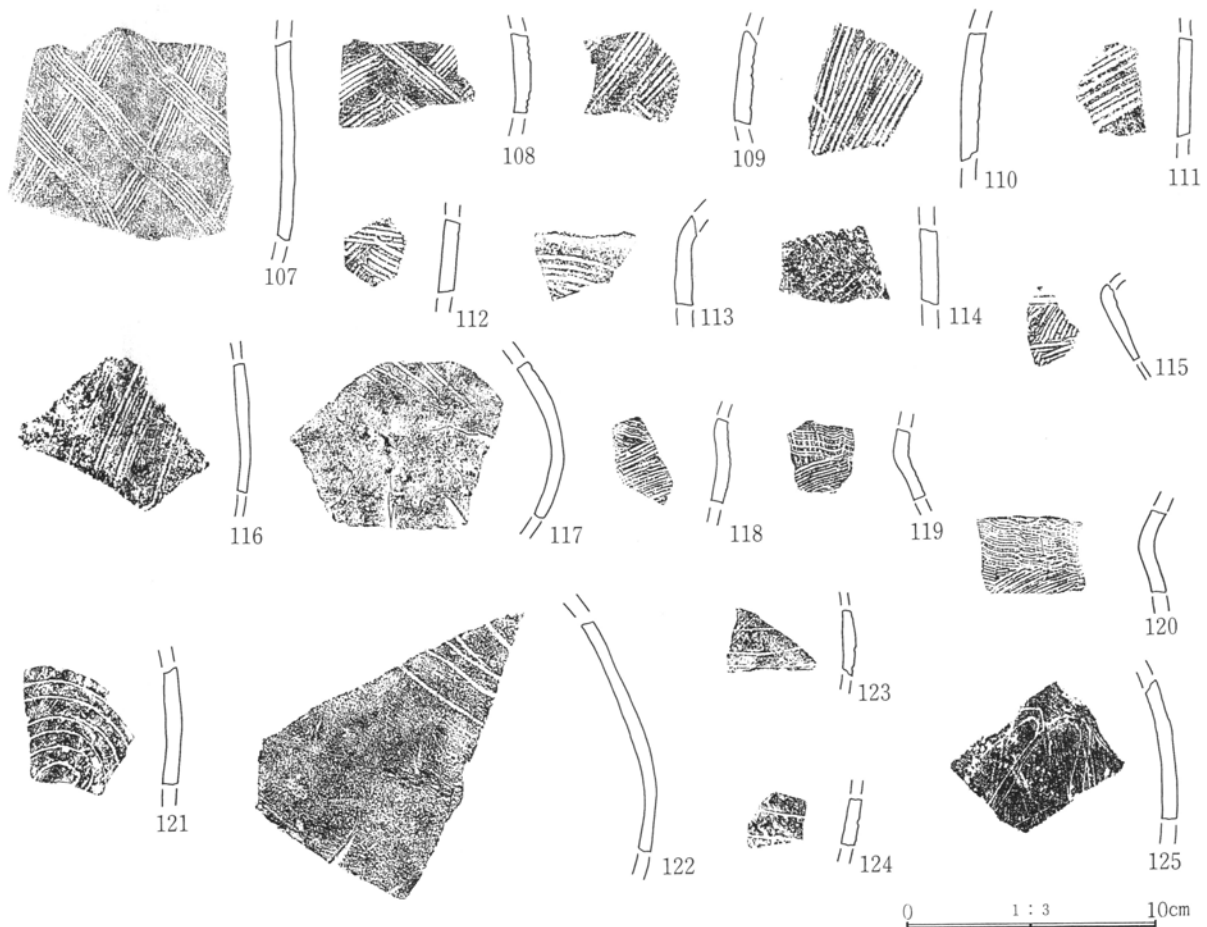
24は2本平行沈線を境に無文部と縄文施文部を分けている。25～28は竹管様の施文具で刺突列を巡らした例である。刺突は爪形（27）と円（28）の2種

が見られる。26では刺突中央に粘土盛り上がりを残し、管状具を用いたことが明らかである。29・30は同じ刺突でも列をなさずに沈線間を充填するものだろう。31は4本以上の沈線による連弧文を描く。32は沈線区画内を櫛描文で埋めた垂下文。33は頸部下半にやや肥厚した縄文帯を巡らした例である。16～18、25～28の刺突列をもつ一群は御新田式と考えていだろう。29・30は池上式の系統をひくものか。32は栗林式新段階と思われる。

34～62は胴部破片。34・35は縄文地（LR）に1本描きの沈線で縦位区画と四角文・重四角文を描き、34では四角文内に3本沈線による横位波状文。36～43は縄文地に1本ないし複数単位の沈線で波状文ないし連弧文を描く一群で、41では上位に円あるいは渦状の沈線文が見られる。44～50は横位沈線と縄文の組み合わせた部位で、44は太めの列点を沈線内に充填する。51・52は沈線とその区画内に棒状具による刺突列を施す。54～62は沈線のみで波状文あるいは連弧文を描く一群である。34～62はいずれも中期後半に位置づけられるが、34・35は池上式の文様



第27图 弥生土器 (3)



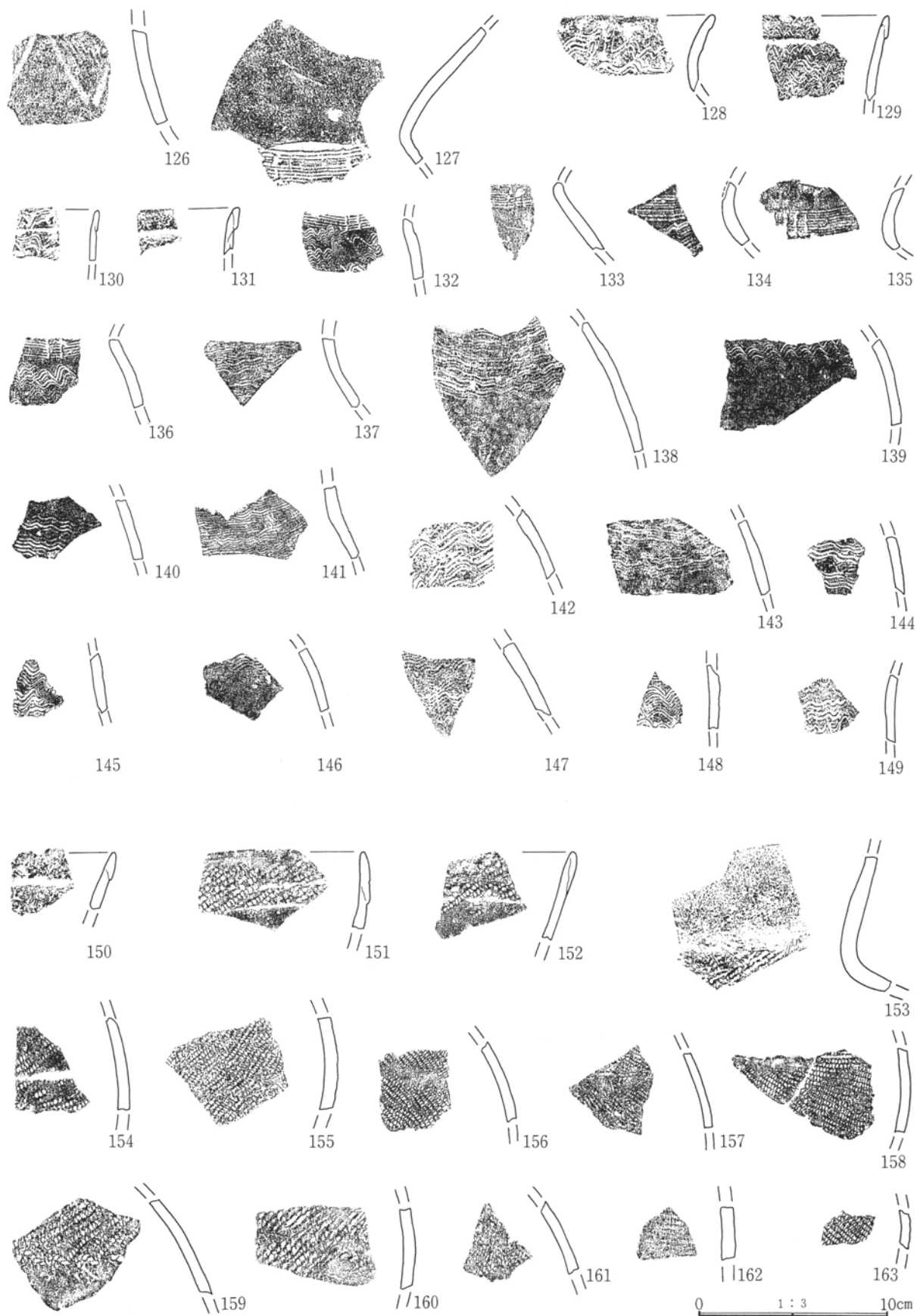
第28図 弥生土器（4）

を受け継ぐ古段階で、他は栗林式古～新段階に相当しよう。ただし、41は南東北系、刺突列をもつ51・52は御新田式の可能性がある。

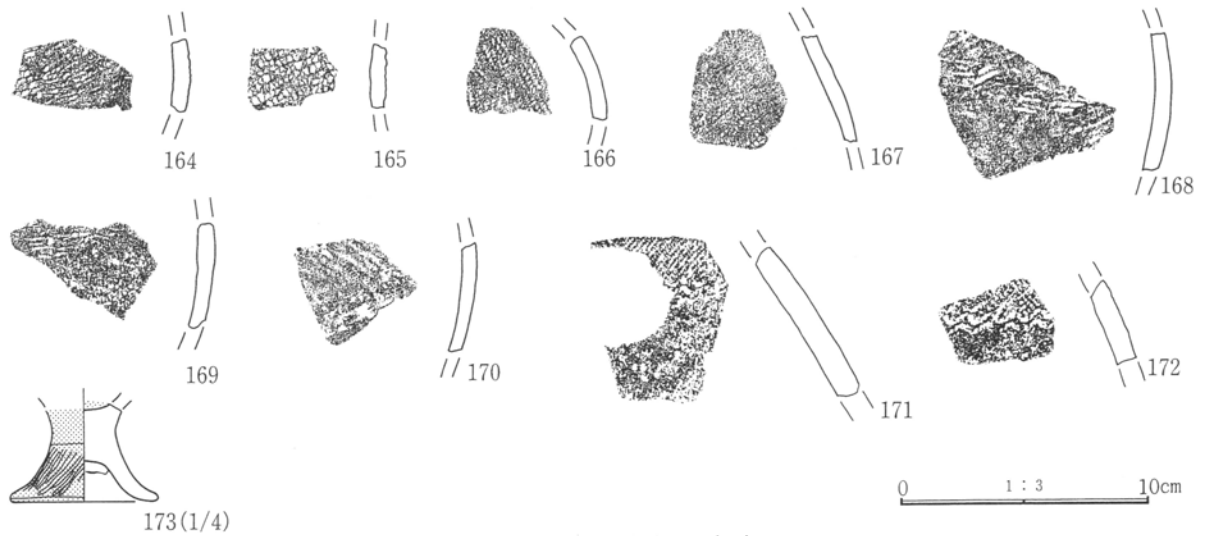
63～79は中期後半の甕口縁。63～67は受け口状口縁で口唇部に縄文を施す一群で、63では口縁縄文地（LR）に2本平行沈線による山形文を上下に重ね、頸部には櫛描横線文を描く。64・65は縄文地に一条の沈線波状文を描く。68～71は短く外反した口縁の口唇部に縄文を施す一群で、69～70では頸部に櫛描波状文を描く。71では体部まで波状文を重ねるらしい。72～79は口唇部に刻みを加える一群で、櫛状具（72）、篋状具（73）、植物茎状具による押圧（74～77）、上からの押圧で波状口縁にする（78・79）などのバラエティーがある。また73は口縁下に沈線鋸歯文と縄文充填、74は体部に縦位の櫛描羽状文を描く。

80～120は甕体部片。80～85は太めの沈線によるコ

の字重ね文で、80・81は縄文地（LR）にボタン状貼付文を配す。86は3本沈線による縦位区画間に4本平行の波状文を描く。87・88は横位沈線を描くが文様構成は不明。91～93・95は文様構成や施文具及び胎土から同一個体の可能性が高い。頸部には櫛描直線文を巡らし、体部上半に横位櫛描波状文6段を重ね、下端の体下半との境に棒状具先端による刺突列を巡らす。94・96～99は同様に波状文を施すが、縦位に区画する櫛描垂下文を描く。器形は93にみるように、中位に膨らみをもち比較的直線的に底部へすぼまる。98では体下半無文部分との境界に刺突列は見られない。100は頸部に等間隔簾状文、肩部に櫛描波状文を施す。101～103は頸部に櫛描波状文の部分である。101は他と比べて振幅の大きい波形で、器壁の厚さから壺の可能性もある。104・105は間隔のあいた櫛状具で横位と斜位に短線文を重ねる。頸部



第29图 弥生土器 (5)



第30図 弥生土器（6）

附近で櫛描横線文ないし簾状文と垂下文を組み合わせた106は壺の可能性もある。107は体部全体に櫛描斜格子文、108～114は櫛描羽状文を施す一群で、このうち112と113は頸部附近に横線文か簾状文を描く。115～117は羽状構成をもつか否か不明。なお、117は棒状具による沈線で描く。118～120は頸部に櫛描波状文、体部に斜線文か羽状文を描く。

121～124は同心円文あるいは渦文を沈線で描く壺胴部片。121・123・124は鋭い2本平行沈線、122は1本沈線で描き、いずれも沈線間の交互研磨は見られない。125は壺の胴部片と見られ、篋状具による2本同時施文で振幅の大きな連弧状の文様を描いた珍しい例であり、部分的なので不明だが、絵画表現の可能性もある。以上の63～125は中期後半（IV期）に位置づけられるもので、栗林式が主体。121～124は、川原町口式など南東北地方の中期後半土器群の影響か模倣品と考えられるが、122では胴部下半が無文であり、文様借用例である。

126～149は後期（V期）の樽式である。126は壺肩部で斜線充填の鋸歯文、127は「く」字状屈曲の頸部に簾状文を施す。128～131は甕口縁部で、やや乱れた櫛描波状文を重ねる。133～149は壺か甕の頸部～肩部で、簾状文（132～136）、櫛描波状文（137～149）を描く。古様相をもつ126と134以外は樽式新段階（V-3期）主体と思われる。

150～163は後期から古墳前期の赤井戸・吉ヶ谷式である。150～153は、頸部無文で壺と思われる。156・157も胴上半の横位縄文帯が無文帯を挟んで2段に施文されており、壺の文様構成の可能性が高い。原体はLRとRLで、160はLの可能性もある。164～170は不揃いの縄文で赤井戸・吉ヶ谷式とは異質な印象を受ける。171と172は胴上半に細縄文と下端に2条のS字状結節文を巡らし、171は無文部分に赤彩を施す。南関東の弥生町式壺かと思われる。173は高杯脚部で、結合部分が厚く小振りで外反する特徴から、中期後半と考えられる。

2 古墳時代の遺構と遺物

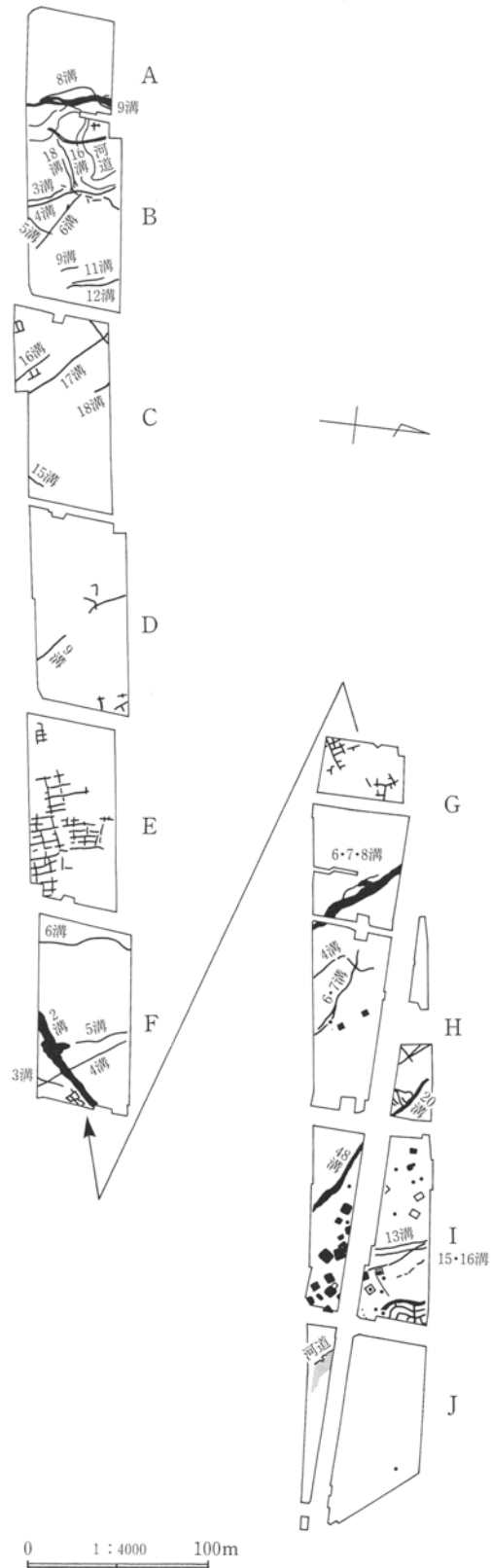
概要

ここでは、古墳時代の遺構と出土遺物について扱う。歴年代では4世紀から6世紀に属するものを対象とし、7世紀代の遺構と遺物は、便宜的に次節の「古代の遺構と遺物」で扱った。本遺跡で検出された遺構は、住居跡19棟、掘立柱建物跡6棟、井戸17基、土坑、柵列、水田、溝である。

遺構の分布は、A～J区の全域にひろがっており、低地部分を占めるA～G区では水田跡2面のほか水路跡などが検出された。微高地部分のH～I区では住居跡や掘立柱建物跡・井戸などから構成される集落跡、現在調査区の東限を流れる藤川右岸のI区東端～J区では旧河道と水田跡が検出されている（第31図）。

検出された遺構の時期は古墳時代前期と後期に限定され、その前後及び古墳時代中期（5世紀中～後）を欠く。ただし、検出された水田跡やこれに伴う水路についてはどの程度の期間継続していたのかを認定することは困難であり、必ずしも集落跡と同じ時間幅に限定する必要はない。

水田跡はAs-Cを含む土を耕土とするI期水田と、Hr-FAに覆われたII期水田の2面が検出されており、前者はおおむね古墳時代前期に営まれ、後者はテフラ年代観から6世紀初頭に埋没したと推測される。部分的な検出であるために水田面の展がり不明であるが、同時存在と思われる水路の存在から、少なくとも東西約700mにわたる低地部分には全面的に存在したと考えられる。一方集落跡の立地する微高地は東西長約400mで、東側を藤川旧河道に限られる。この微高地は北西から南東にかけて長く延びており、居住域はこれに沿って細長く展開していたと考えられよう。居住域と水田とを画する位置には、4世紀代の大水路（G区6号溝）が検出されており、本地域における水田開発過程を解き明かす上で注目される。



第31図 古墳時代の遺構分布図

(1) 住居跡

H区3号住居跡 (第32図 PL.11)

位置 150・155-250グリッド

平面形 (正方形) 柱穴のみを検出

主軸方位 N-57°-E 規模 不明

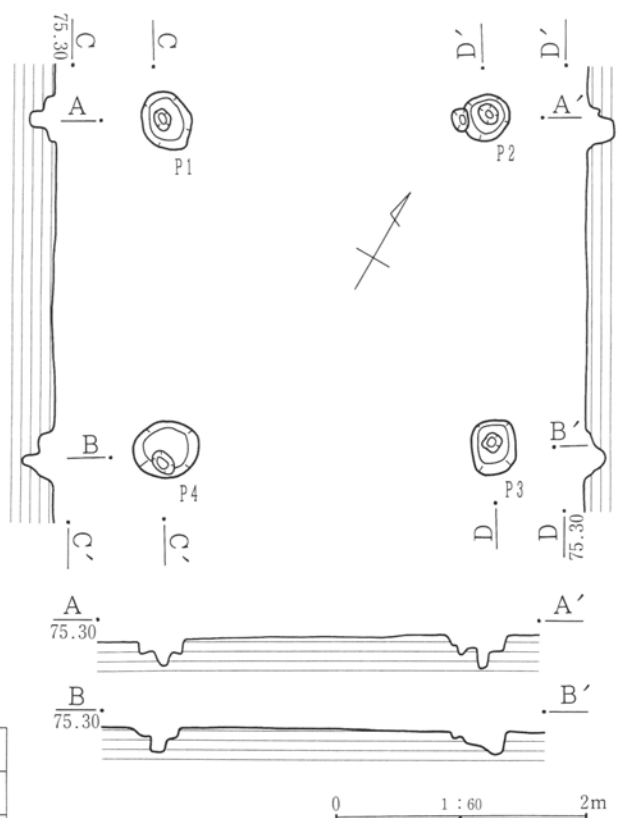
ピット等 主柱穴4基を検出し、その配置は正方形のほぼ対角線上に位置する。柱間寸法はP1-P2とP3-P4とP2-P3が2.60m、P1-P2が2.70mを測る。柱穴掘方はP3が隅丸方形のほかは円形か楕円形。柱痕跡は直径10cm前後の円形である。

出土遺物 古墳前期の土器片が散在する。

重複遺構 なし。

所見 柱穴埋土と配置の類似から古墳前期と思われる。

	径 (cm)	深 (cm)		径 (cm)	深 (cm)
P 1	50×40	21	P 3	43×34	19
P 2	38×38	21	P 4	52×45	25



第32図 H区3号住居跡

H区4号住居跡 (第33図 PL.11)

位置 160・165-260グリッド

平面形 (正方形) 柱穴のみを検出

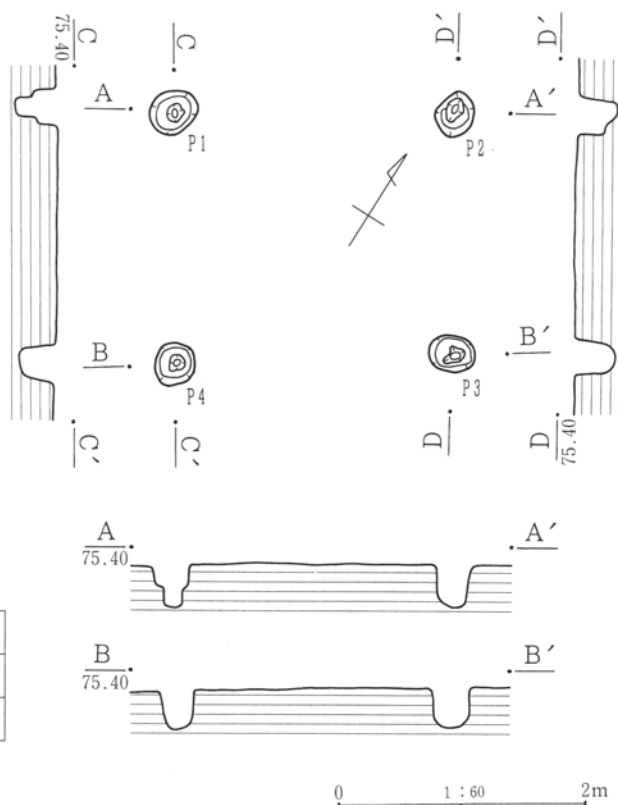
主軸方位 N-56°-E 規模 不明

ピット等 主柱穴4基を検出し、その配置は長方形のほぼ対角線上に位置する。柱間寸法はP1-P2とP3-P4が2.25m、P1-P4とP2-P3が2.00mを測る。東西方向がわずかに長くこれが棟方向だろう。柱穴掘方は円形。柱痕跡は直径5~10cm前後の円形である。

出土遺物・重複遺構 なし。

所見 竈痕跡が認められず、H区3号住居跡と同様に古墳前期と思われる。

	径 (cm)	深 (cm)		径 (cm)	深 (cm)
P 1	40×33	33	P 3	36×30	32
P 2	36×30	33	P 4	32×31	32



第33図 H区4号住居跡

I区1号住居跡 (第34図 PL.12)

位置 200-180・185 グリッド

平面形 正方形 主軸方位 N-35°-E

規模 2.94×2.80m 壁高 5cm

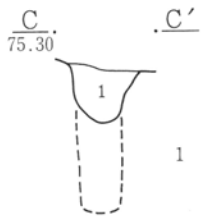
床面 ドーナツ状に掘りくぼめた掘方に埋土して平坦に整える。硬軟の差は不明瞭。

竈 北東辺中央に位置し、燃焼部は壁内に構築される。右袖は30cmほど住居内に張り出すが左袖は基部痕跡のみ検出。掘方は床から10cmほどの不定形くぼみで、火床面は床面とほぼ同レベル。燃焼部奥壁から30cm内側に火を受けた礫あり、支脚と思われる。袖は粘土主体に構築。

ピット等 竈右脇で貯蔵穴検出。径30×27cmの楕円形で、深さは約60cm。自然埋没と思われる。柱穴は検出できなかった。

出土遺物 壁際主体に古墳後期の土器群が出土。本住居跡に伴うとして差し支えない。

重複遺構 3号溝

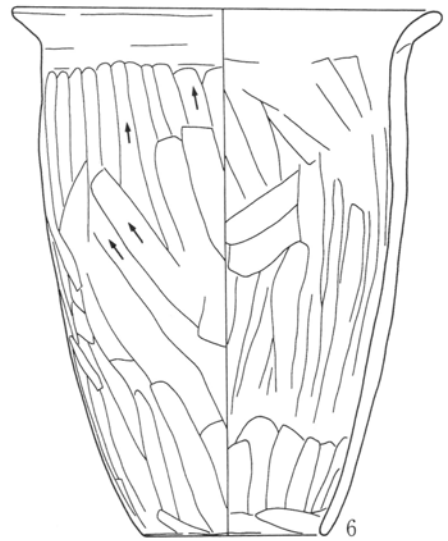
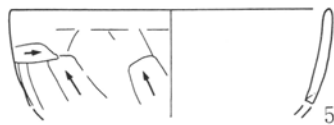
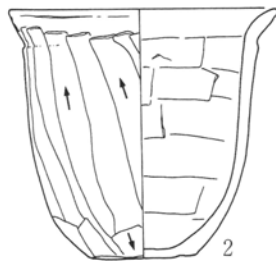
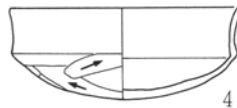
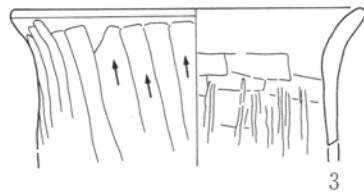
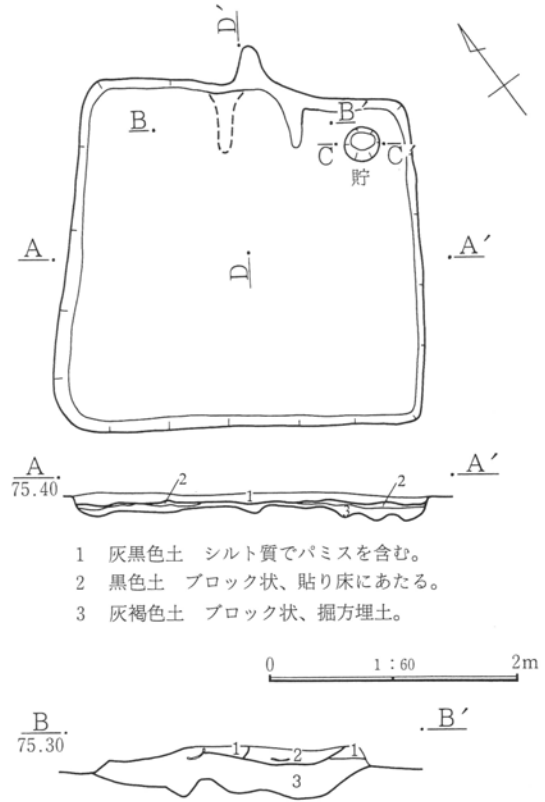


1 暗褐色土 ローム粒を含む。



1 褐灰色土 粘土主体、焼土塊含む。
2 暗褐色土 焼土塊、焼土粒多い。
3 黒褐色土 ローム塊含む掘方埋土。

0 1:30 1m



0 1:4 10cm

第34図 I区1号住居跡及び出土遺物

I 区 4 号住居跡 (第35図、P L.13)

位置 200-190グリッド

平面形 長方形、掘方のみ検出

主軸方位 N-0°-E

規模 2.90×2.52m

床面 中央部が不定形にくぼむ掘方で、少なくとも20cm以上の厚さで埋土を行っている。

竈・炉 痕跡は検出されなかった。

ピット等 北東隅で貯蔵穴、北辺に沿って2基の小ピットが検出された。貯蔵穴は38×28cmの隅丸長方形で、深さは想定床面から40cmはあったと推測される。埋土にはAs-Cを多く含む黒色土が堆積しており、時期認定根拠とした。北辺際の小ピットは、北壁から18cmはなれて並列しており、両ピット間は55cmを測る。ピットの径は8cmと12cmで、深さは東側のものが17cmほど深い。梯子などの出入口施設に伴う支柱穴とも考えられるが、北側に出入口を設ける例はまれなため、別の機能を想定すべきだろう。また、北辺東半と西辺北半に壁溝が検出された。幅15~20cmで、掘方との境界が不明瞭。

出土遺物 埋土から古墳前期と8~9世紀代の土器片が出土。時期認定根拠には難しい。

重複遺構 1・3号溝、6号掘立柱建物跡に切られる。

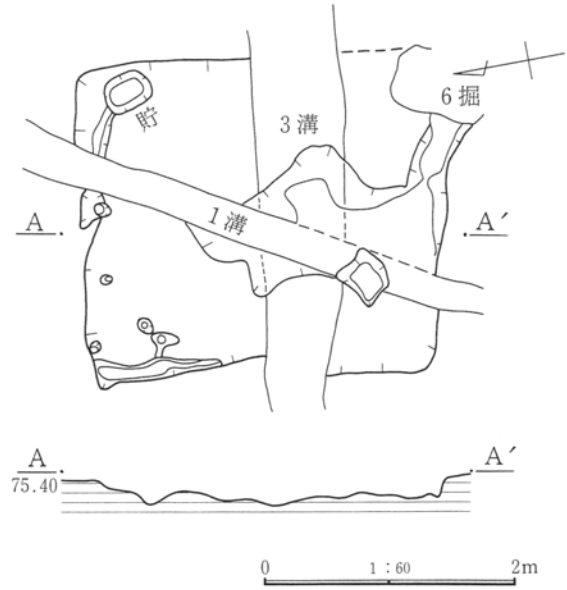
I 区 7 号住居跡 (第36図 P L.13)

位置 185・190-120・125グリッド

平面形 (正方形) 主軸方位 北北西

規模 4.60×-m 壁高 10cm

床面 平面及び断面でも床面と推測される平坦面は検出できなかった。また炉が確認できないことから、検出されたのは掘方部分のみで、床面以上の部分は後世の削平で失われたものか。検出されたのは、26cmほどの深さをもつ断面皿形のくぼみであり、埋土の特徴はブロック状のもので、地山ローム塊を含む。この点は一般的な竪穴住居跡掘方のそれに近似している。



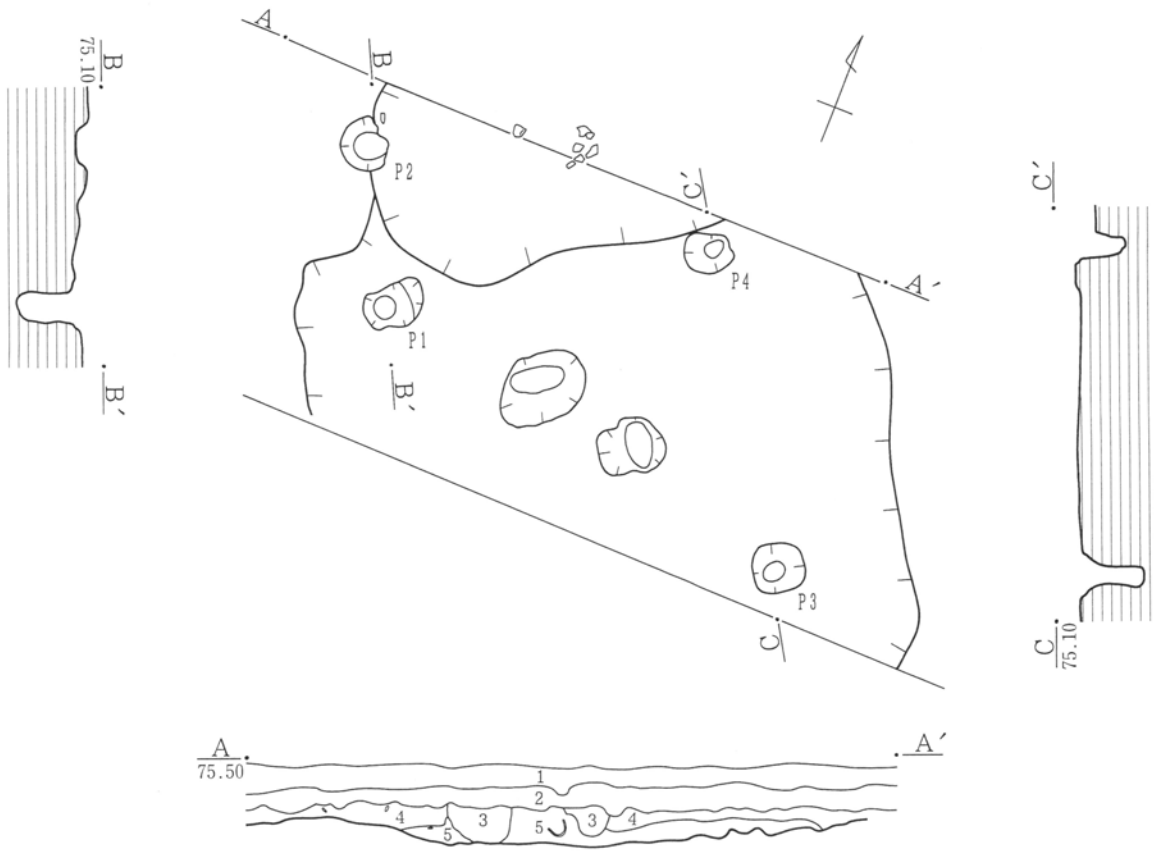
第35図 I 区 4 号住居跡

ピット等 本住居跡に関わるピット6基が検出され、P1・P3・P4は方形プラン内で対角線上に位置し、また規模もそろっているため支柱穴の可能性もある。これらに比べてP2はプラン外側に位置し、きわめて浅いことから、少なくとも柱穴とは認めがたい。無関係の遺構の可能性もある。また、中央の2基のピットは埋土の状況から後世の攪乱坑と考えられる。

出土遺物 中央から北西側の埋土下層から古墳時代前期の土器片が集中して出土した。完形品はなく、一見一括廃棄とも見える状況である。

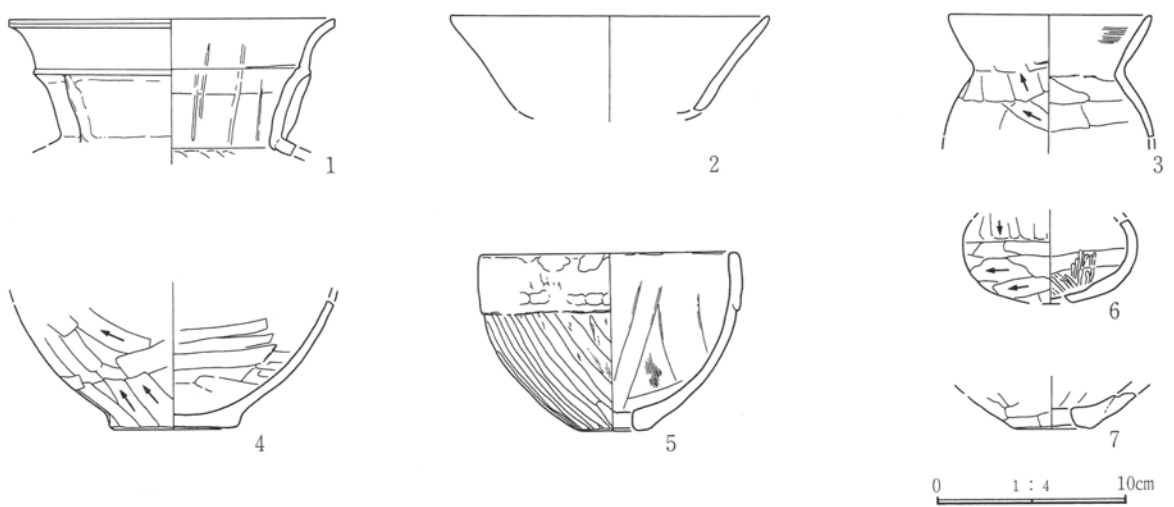
重複遺構 北西側に隅丸長方形の掘り込みが見られ、本住居跡に伴う施設か、重複する別遺構かは判別できなかった。ちなみに古墳前期の5号掘立柱建物跡が北側に隣接する。

	径 (cm)	深 (cm)		径 (cm)	深 (cm)
P 1	50×30	50	P 3	40×40	48
P 2	36×32	9	P 4	42×37	35



- 1 暗灰褐色土 表土。
- 2 暗灰褐色土 As-Bを含む。
- 3 黒色土 As-Bを多く含む、攪乱坑埋土。
- 4 黒色土 榛名二ツ岳給源パミスを少量含む。
- 5 黒色土 軟質で地山のローム塊を含む。

0 1 : 60 2m



第36図 I区7号住居跡及び出土遺物

I 区 8 号住居跡 (第37図 PL.14)

位置 165・170-145・150グリッド

平面形 (正方形) 支柱穴と貯蔵穴のみ検出

主軸方位 N-22°-E

規模 計測不能だが、柱間寸法から一辺4.5~5.0 mの規模を推測できよう。

床面・壁 検出できなかった。このことから、掘方は浅く比較的平坦であった可能性が高い。

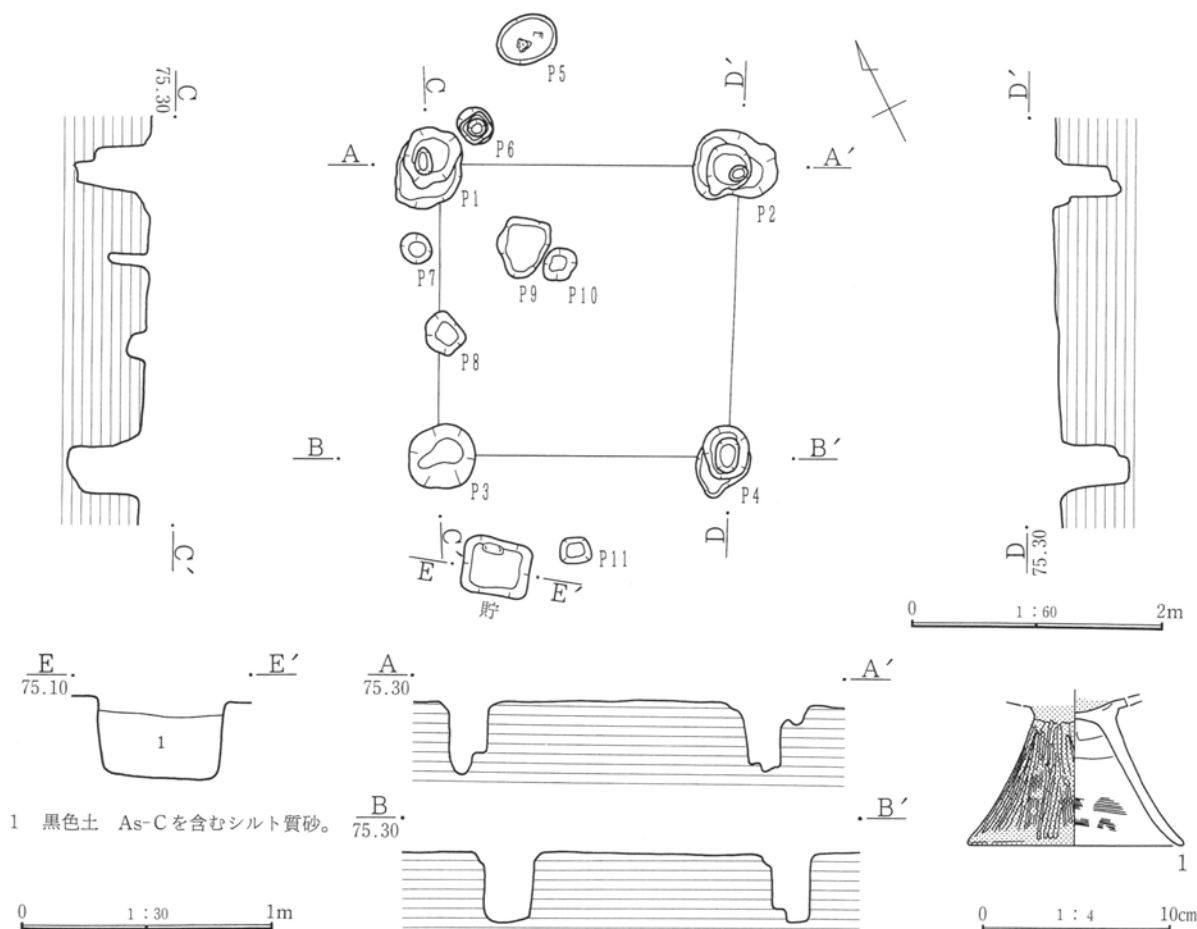
ピット等 P 1~P 4 の 4 基のピットは正方形プランの対角に位置することから支柱穴と認定される。住居平面プランも正方形と想定されよう。柱掘方は楕円形で、底面に残る柱痕跡の径は10~20cm。柱間寸法は P 1 - P 2 が2.58mとやや長く、他は2.30m前後。貯蔵穴は推定住居プランの南西隅に位置し、55×45cmの長方形で深さは30cmを測る。内部からは楕円礫 1 点が出土した。P 5~P 11 はいずれも浅く、配置に規則性が認められず、住居跡との関連は不明。

P 5 は貯蔵穴と対称の位置にあり平面形状も似るが、深さが 3 cm と浅いことから別遺構の可能性もある。

出土遺物 P 5 埋土から弥生後期~古墳前期の高杯片が出土したが、本住居跡の時期認定には用いない方がよい。遺構確認時に前期土器片のみ出土している。

重複遺構 なし。19号住居跡と主軸を同じくして隣接する。竪穴プランの間隔は約2.5m。

	径 (cm)	深 (cm)		径 (cm)	深 (cm)
P 1	65×49	58	P 7	25×22	33
P 2	57×50	54	P 8	31×27	15
P 3	53×50	56	P 9	48×40	9
P 4	59×41	54	P 10	27×25	14
P 5	48×38	3	P 11	25×21	16
P 6	30×26	36			



第37図 I 区 8 号住居跡及び出土遺物

I 区 9 号住居跡 (第38図 P L.14)

位置 165・170-105・110グリッド

平面形 正方形 主軸方位 N-37°-E

規模 5.00×5.00m

壁高 ほとんど検出されなかった。後世の削平で失われたと思われる。

床面の状況 地山のロームをそのまま平坦に削って床面としており、締まっている。

ピット等 P 1～P 4 の 4 基のピットは平面プランの対角線上に位置することから支柱穴と認定される。柱間寸法は、P 1 - P 2 及び P 3 - P 4 が 2.85 m、P 1 - P 4 が 2.93m、P 2 - P 3 が 2.73m で、ほぼ等間隔とっていい。柱穴と壁との間隔は、約 1 m 前後である。掘方は方形か楕円形で、図中網かけ部分は埋土の違いから柱痕跡と考えられる。検出されたピットで P 6・P 7・P 12・P 18 の 4 基も柱痕跡が見られるが、上屋との関係は不明。特に P 12 は 70cm と支柱穴より深く、上屋構造を支える柱穴に類するものと考えたい。貯蔵穴は東隅と南隅で 2 基検出された。1 号貯蔵穴は、径 60×47cm の不整楕円形で深さ 61cm を測る。2 号貯蔵穴は、34×30cm の円形で深さ 27cm を測る。両者とも埋土にはローム塊を含むことから人為的に埋めた可能性も考えられる。壁溝は南東辺の一部を除いて全周しており、幅 20～13cm、深さ 5～10cm を測る。また、南東辺から主軸方向に向かって長さ 1.5m、幅 15cm 前後、深さ 8 cm 前後の溝が掘られており、間仕切り溝と考えられる。南西辺からも長さ 50cm 前後の浅い溝状くぼみが内側に張り出しており、これも間仕切り痕跡の可能性がある。なお、南東辺の南半隅に長さ 2.0m、幅 1.0～0.6m、深さ 5～8 cm のくぼみが検出された。この埋土にはローム塊を含む黒褐色土が堆積しており、これを人為的埋土と考えれば掘方のくぼみと想定していいだろう。

出土遺物 1 号貯蔵穴から高杯脚部 (2)、掘方埋土から古墳前期の土器片が数片出土する。

重複遺構 南東辺を 38・49 号溝と重複するが、新旧関係は不明。

	径 (cm)	深 (cm)		径 (cm)	深 (cm)
P 1	33×29	45	P 11	24×17	10
P 2	23×22	39	P 12	37×30	70
P 3	42×33	33	P 13	40×21	5
P 4	43×38	55	P 14	27×23	5
P 5	23×18	10	P 15	47×43	8
P 6	27×25	30	P 16	43×35	6
P 7	26×26	(9)	P 17	23×19	9
P 8	17×16	5	P 18	23×22	25
P 9	23×21	11	P 19	56×33	14
P 10	35×23	16			

I 区 11 号住居跡 (第39図、P L.15)

位置 160・165-105・110グリッド

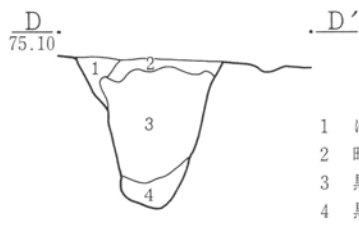
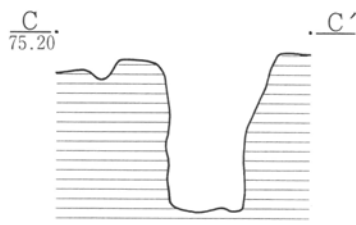
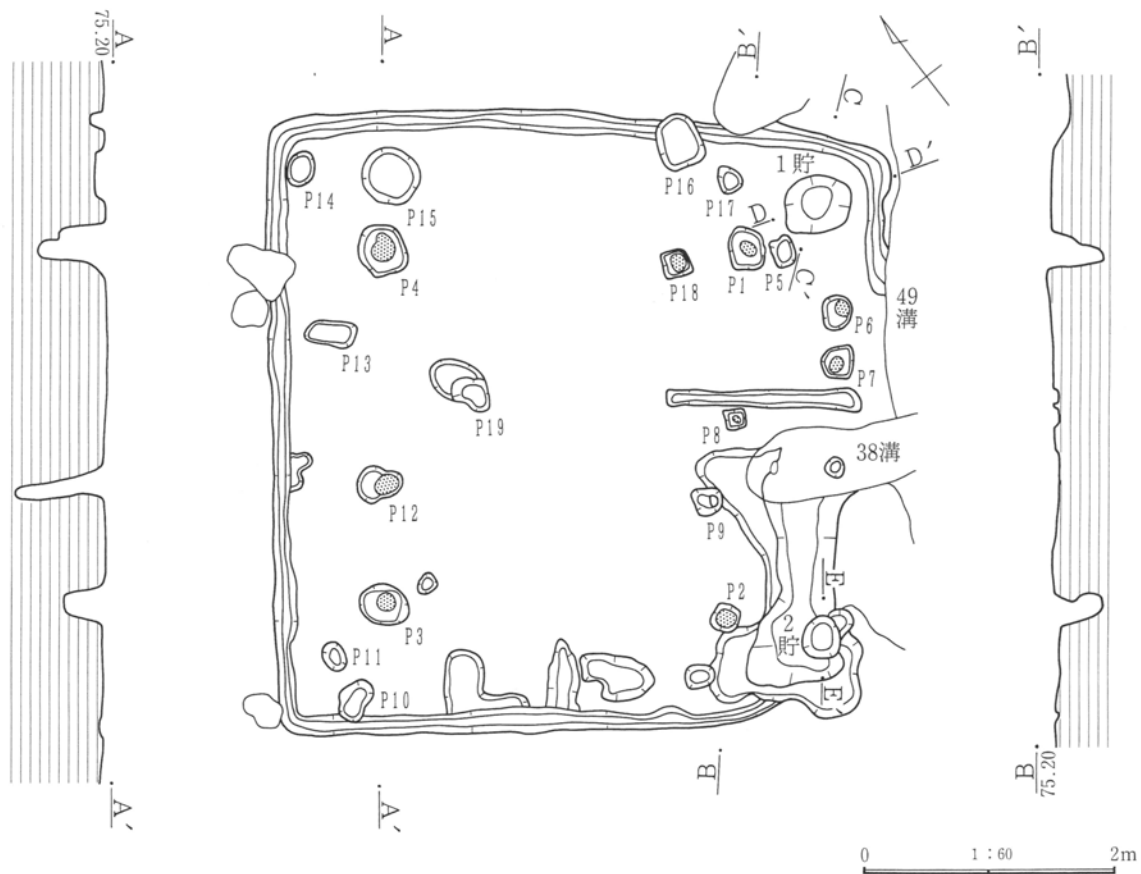
平面形 不明、掘方のみ検出

主軸方位・規模 計測不能

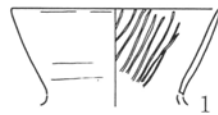
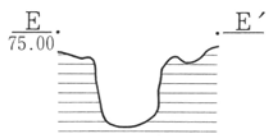
床面 住居プランを想定できる掘方は検出されない。従って、掘方は非常に浅くしかも平坦であり、床面は地山のままか、薄い貼り床であろう。

竈 南東辺の中央付近で煙道と思われる帯状に延びたくぼみを検出した。軸方向は N-40°-W で、長さ 150cm を測る。幅は中央部が 50cm と広く、先端付近では 20cm とせばまる。底面レベルはほぼ平坦なので、煙道は水平にのびて先端付近で急傾斜で立ち上がると想定されよう。また、燃焼部を想定させる掘方が検出されないことから、少なくとも煙道掘方の底面より火床面レベルが高い位置にあったはずで、煙道掘方に埋土を行って煙道形状を整えた可能性が高い。

ピット等 13 基検出されたピットのうち、配置から P 1 と P 5 が支柱穴の可能性はあるが、P 1 は深さ 8 cm と浅い。竈右脇にあたる南隅で貯蔵穴が検出された。径 70×55cm の不整楕円形で、底面形状は隅丸方形を呈する。断面形は箱形で深さ 35cm を測る。埋土には焼土や炭化物を多く含むことから、焼失家屋の可能性ないしは竈附近の流入土の可能性が考えられる。壁溝は南東辺に部分的に残り、幅 25～8 cm を



- 1 にぶい黄褐色土 ローム粒主体。
- 2 暗褐色土 ローム粒多く含む。
- 3 黒褐色土 ローム粒を少量含む。
- 4 黒褐色土 下位ほどローム塊多い。



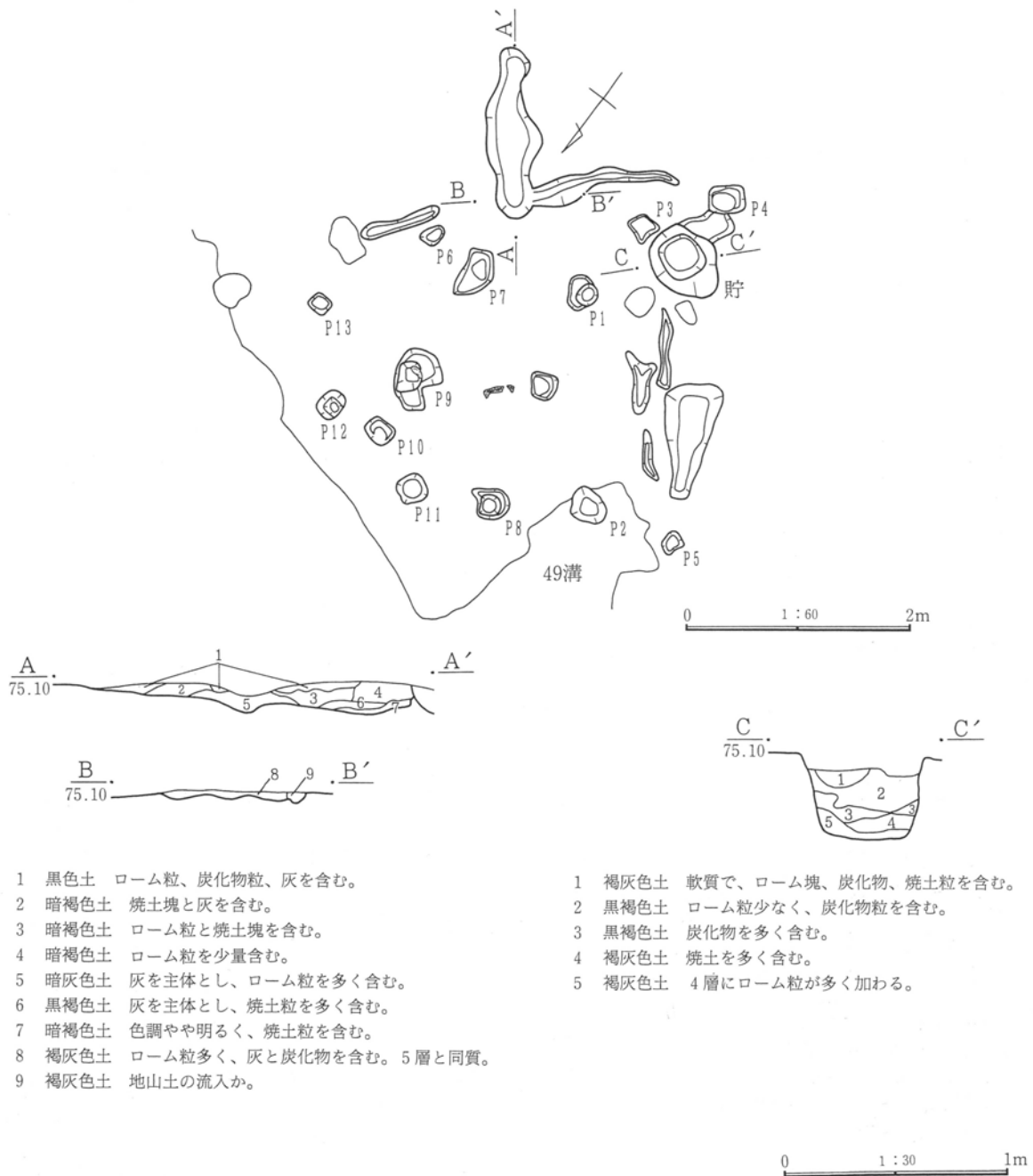
第38図 I区9号住居跡及び出土遺物

測る。南西辺に沿って同様の溝状の浅いくぼみが並行して検出されたが、住居プラン内に位置することから掘方か重複する49号溝と推測される。

出土遺物 掘方埋土から古墳前期の土器小片が出土したが、竈の存在から古墳後期と考えるべきで、本住居跡に伴うとは考えにくい。

重複遺構 北西部を49号溝に切られる。

	径 (cm)	深 (cm)		径 (cm)	深 (cm)
P 1	30×30	8	P 8	37×30	5
P 2	36×30	8	P 9	56×43	(5)
P 3	22×21	2	P 10	25×22	4
P 4	33×26	(11)	P 11	67×65	17
P 5	20×17	22	P 12	26×21	4
P 6	22×15	4	P 13	19×16	6
P 7	50×28	(8)			



- 1 黒色土 ローム粒、炭化物粒、灰を含む。
- 2 暗褐色土 焼土塊と灰を含む。
- 3 暗褐色土 ローム粒と焼土塊を含む。
- 4 暗褐色土 ローム粒を少量含む。
- 5 暗灰色土 灰を主体とし、ローム粒を多く含む。
- 6 黒褐色土 灰を主体とし、焼土粒を多く含む。
- 7 暗褐色土 色調やや明るく、焼土粒を含む。
- 8 褐灰色土 ローム粒多く、灰と炭化物を含む。5層と同質。
- 9 褐灰色土 地山土の流入か。

- 1 褐灰色土 軟質で、ローム塊、炭化物、焼土粒を含む。
- 2 黒褐色土 ローム粒少なく、炭化物粒を含む。
- 3 黒褐色土 炭化物を多く含む。
- 4 褐灰色土 焼土を多く含む。
- 5 褐灰色土 4層にローム粒が多く加わる。

第39図 I区11号住居跡

I区12号住居跡 (第40図、P.L.15)

位置 165・170-115・120グリッド

平面形 (正方形)、柱穴・貯蔵穴のみ検出

主軸方位 (N-42°-W)

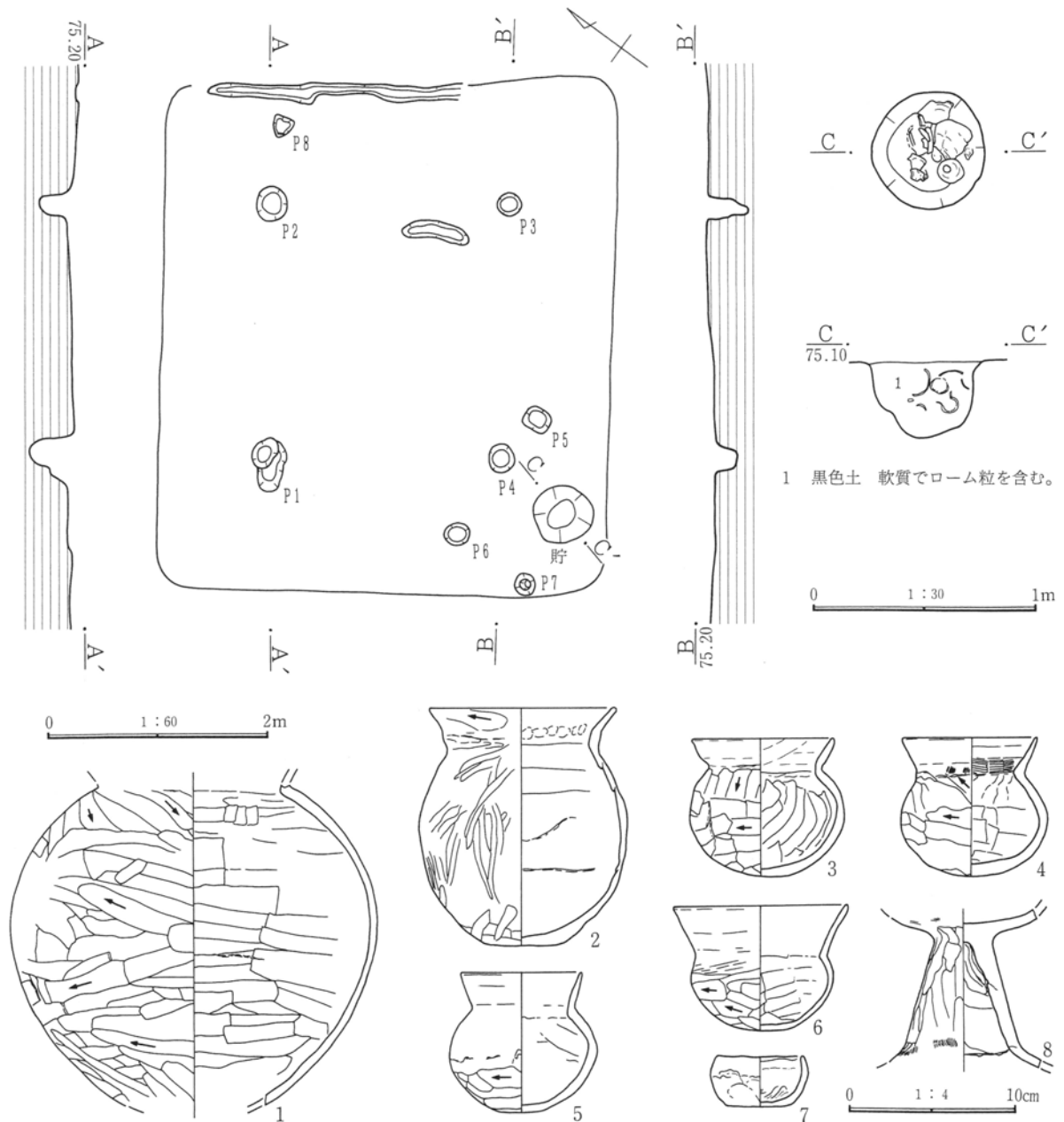
規模 不明 壁 検出できなかった。図中の平面プランは壁溝と支柱穴の配置から復元した。

床面 掘方のくぼみが検出できなかったため、本来の床面は地山そのものか、薄い貼床と推測される。

竈・炉 痕跡は検出されなかった。

ピット等 ピット8基のうち、配置からP1~P4が支柱穴と考えられる。柱間寸法はP1-P2が2.20m、P2-P3が2.15m、P3-P4が2.25m、P1-P4が2.05mを測る。これらの配置はほぼ等間隔の正方形を構成する。壁溝は北東辺にのみ残っており、幅17~10cm、深さ5cm前後を測る。底面には細かな凹凸が連続する。貯蔵穴は南隅に位置し、直径50cmの円形で、深さ34cmを測る。

出土遺物 貯蔵穴から図示した土器群がまとまって



第40図 I区12号住居跡及び出土遺物

出土している。一括投棄と思われる状況を示しており、本住居跡の時期認定のため有力な根拠となる。古墳時代前期（4世紀後半代）に比定。

重複遺構 なし。ただし、9号掘立柱建物跡とは主軸を異にして隣接している。

	径 (cm)	深 (cm)		径 (cm)	深 (cm)
P 1	47×23	39	P 5	25×22	45
P 2	30×28	30	P 6	23×21	7
P 3	22×21	38	P 7	24×20	31
P 4	25×25	20	P 8	20×20	5

I 区13号住居跡 (第41図、P L.16)

位置 165・170-100グリッド

平面形 方形か。 **主軸方位** N-60°-E

規模 東西辺5.5m以上

壁高 北東隅で深さ14cmの壁を検出した。

床面 地山床と思われるが、平坦な掘方面とも考えられる。

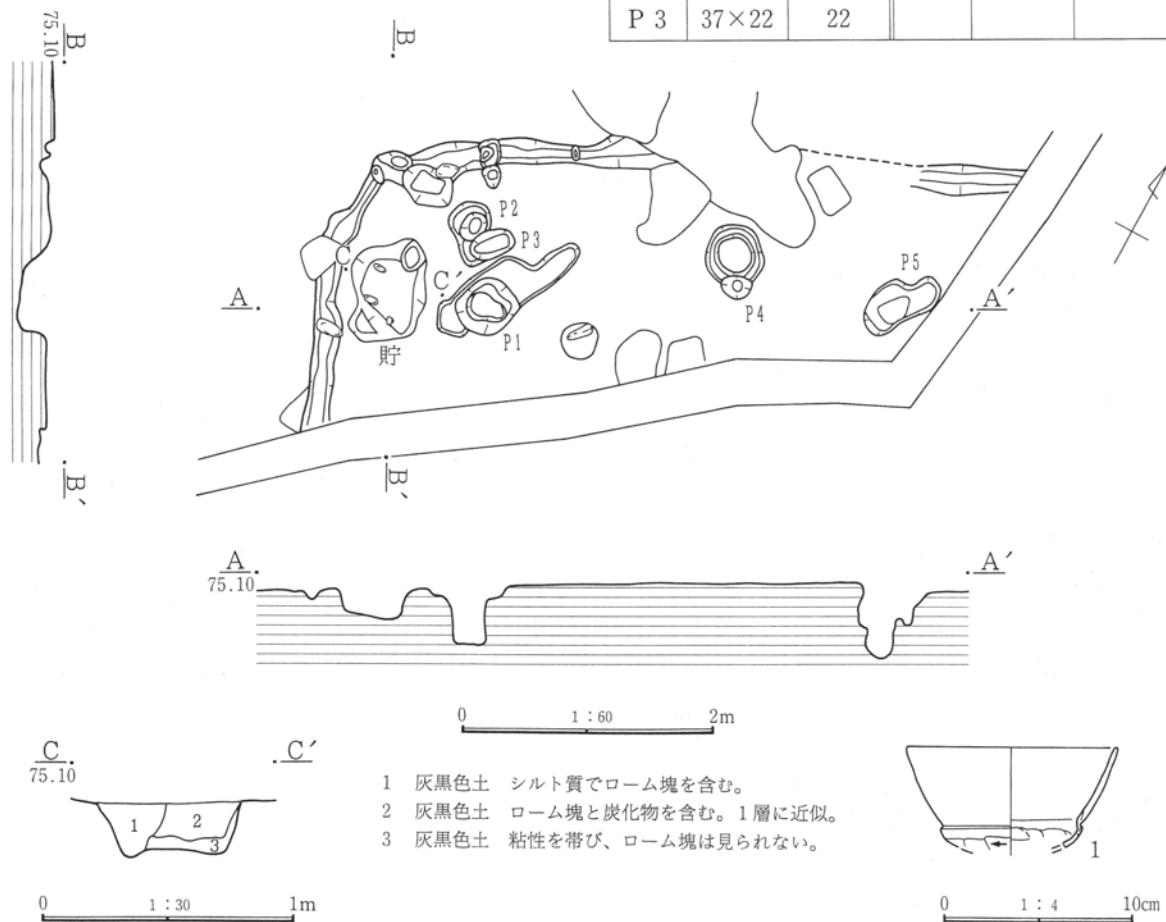
竈・炉 検出された部分において痕跡は確認できなかった。

ピット等 西隅で貯蔵穴が検出された。規模は、68×55cmの隅丸長方形で、深さ24cmを測る。断面形は箱形で、底面はやや凹凸がある。P 1とP 5は北西辺に沿った支柱穴だろう。両ピット間は3.30mを測る。壁溝は幅12cm前後で、底面には小さな凹凸が連続する。北西部では小ピットも見られる。P 2～P 4の性格は不明。P 4の北西側のドーナツ状のくぼみは中世以降の攪乱。

出土遺物 貯蔵穴から古墳前期の埴と小破片出土。

重複遺構 なし。

	径 (cm)	深 (cm)		径 (cm)	深 (cm)
P 1	46×42	46	P 4	24×18	17
P 2	23×18	20	P 5	65×34	60
P 3	37×22	22			



第41図 I 区13号住居跡及び出土遺物

I区14号住居跡 (第42図 PL.17)

位置 165・170-100グリッド

平面形 (方形) 主軸方位 N-49°-E

規模 4.45以上×-m 壁高 5cm

床面 周縁をドーナツ状に浅く掘りくぼめた掘方にローム塊の多い埋土で平坦に整える。埋土は10~20cm。 竈・炉 確認できなかった。

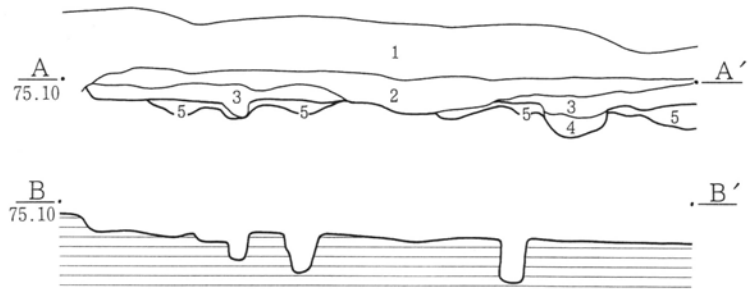
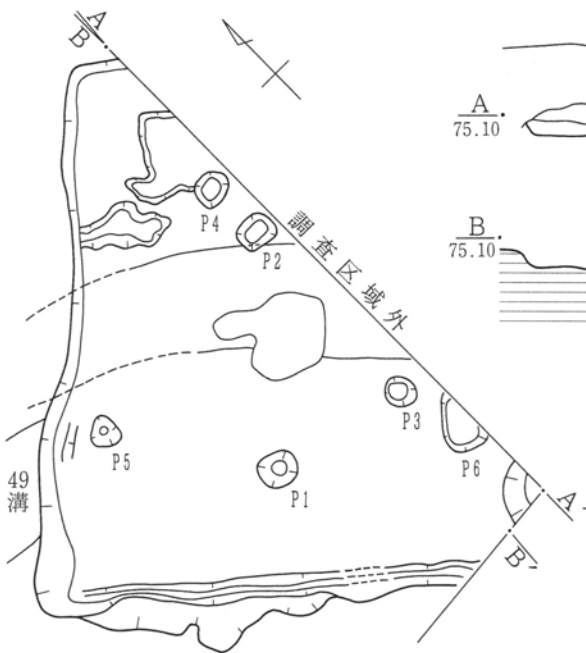
ピット等 P1・P2・P4の3基はいずれも支柱穴となり得るが、住居プランとの配置関係が不明瞭で、認定できない。P1とP2を支柱穴とすれば、

両者間は1.95mを測る。P6は隅丸長方形で南隅に位置することから貯蔵穴とも考え得る。壁溝は全周し、幅15~20cmを測る。

出土遺物 床面及び埋土下層から古墳前期(4世紀後半代)の土器群が出土。完形及び完形に近い形状を示すが、使用時の状態をしめす出土状況ではない。

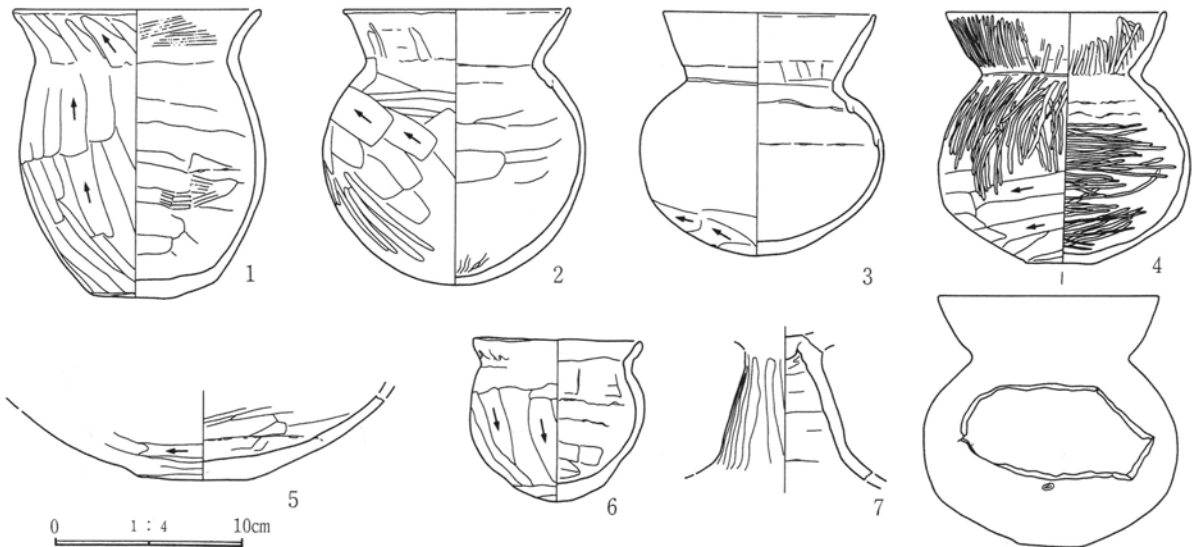
重複遺構 中央を中世以降の攪乱に切られる。

	径 (cm)	深 (cm)		径 (cm)	深 (cm)
P 1	30×27	30	P 4	27×25	22
P 2	30×25	32	P 5	26×24	22
P 3	26×23	34	P 6	-×-	17



- 1 表土
- 2 暗褐色シルト質砂 As-Bを多く含む。
- 3 黒褐色土 粘性を帯び、パミスは含まない。
- 4 暗褐色土 ローム塊を少量含む。
- 5 暗褐色土 ブロック状の人為的埋土、上位は貼り床が覆う。

0 1:60 2m



第42図 I区14号住居跡及び出土遺物

I区15号住居跡 (第44図 PL.17)

位置 165・170-130・135グリッド

平面形 (方形) 主軸方位 N-56°-E

規模 (5.5×5.8)m 壁高 ほとんど遺存せず、掘方の深さは最大値で8cmを測る。

床面 地山をほぼ平坦に削って、全体にローム塊を含む埋土によって床面を整えている。硬質な面は確認できないので床面は遺存しないと考えられる。

竈・炉 確認できなかった。

ピット等 プラン内で9基のピットが検出された。そのうちP1~P4が配置から支柱穴と捉えられる。柱間寸法はP1-P2が2.85m、P3-P4が2.90m、P1-P4が2.60m、P2-P3が2.55mを測る。P2とP3は隣接して柱痕跡が2箇所認められ、柱位置替えが行われた可能性がある。ただし、柱間はさほど変わらないことから、住居の拡張に伴うものではなかろう。貯蔵穴は南隅で南東辺に平行して検出された。平面は隅丸長方形で、58×55cm、深さ67cmを測る。断面形は垂直に掘り込まれた箱形で、底面から細長い楕円礫3点が出土している。また支柱穴以外のピットは、P6のように柱穴としておかしくないほど深く、しっかりした掘方をもつものもあるが、上屋構造との関係は不明である。P8は浅く、南東辺からやや離れた中央付近にあり、出入口施設に関わるものか。

出土遺物 貯蔵穴から古墳前期の単口縁甕破片、掘方埋土から埴及び古墳前期の土器小破片が出土している。

重複遺構 西側でほぼ主軸を同じくして16号住居跡を切っており、また東部は中世以降の屋敷堀である27号溝に切られている。

	径 (cm)	深 (cm)		径 (cm)	深 (cm)
P 1	46×46	50	P 6	45×40	70
P 2	62×53	46	P 7	27×20	8
P 3	44×40	48	P 8	52×25	14
P 4	58×50	74	P 9	43×35	16
P 5	46×32	45			

I区16号住居跡 (第43・44図 PL.17)

位置 170・175-135グリッド

平面形 (方形) 主軸方位 N-47°-E

規模 4.50×-m 壁高 確認できない。

床面 15号住居跡と同様に、遺存せず、平坦な掘方面が検出されたのみである。平坦な掘方面に埋土して床面を整える。掘方レベルは重複する15号住居跡より3~5cmほど高い。

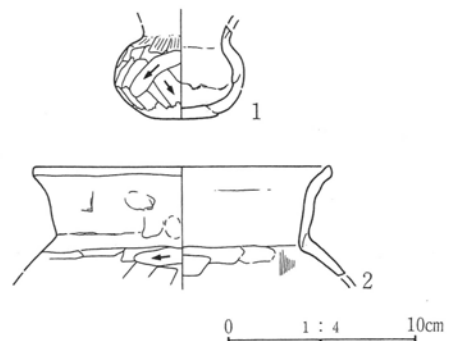
竈・炉 確認できなかった。

ピット等 7基のピットが検出され、そのうちP1~P4は支柱穴と考えられる。柱間寸法はP1-P2が1.75m、P3-P4とP2-P3及びP1-P4が1.85mを測る。貯蔵穴は南隅で検出され、平面隅丸長方形で径58×52cm、深さは20cmを測る。なお、P5は形状・規模とも支柱穴に匹敵するが、性格は不明である。ただし、重複する15号住居跡のP6と同様に、貯蔵穴の北西側に位置するのは、同一の上屋構造に関わる柱穴であることを示唆するものかもしれない。

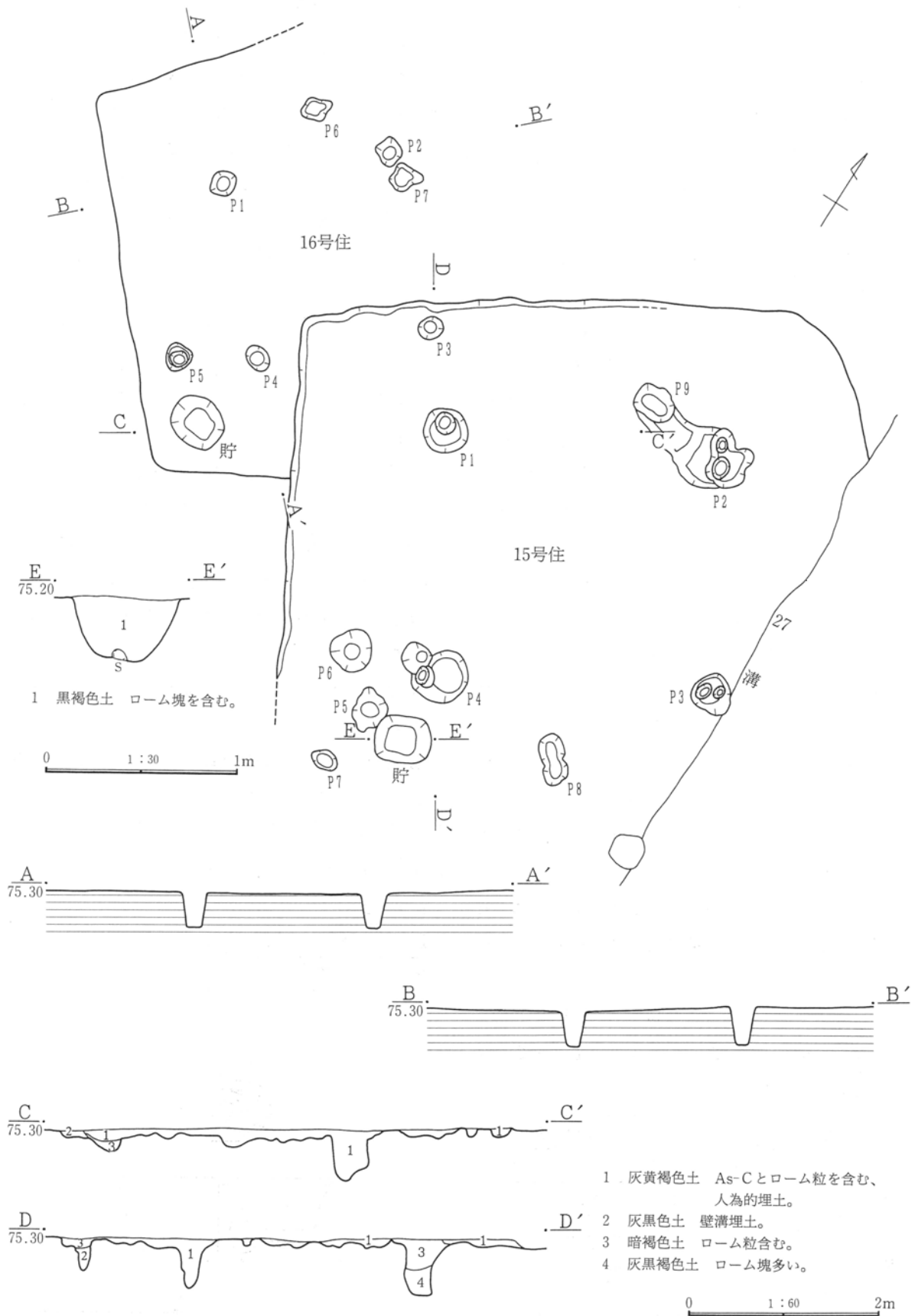
出土遺物 掘方埋土から古墳前期の土器小片が出土している。

重複遺構 東側を15号住居跡に切られる。北部は調査区外に当たるため不明。

	径 (cm)	深 (cm)		径 (cm)	深 (cm)
P 1	28×25	35	P 5	28×28	25
P 2	26×25	40	P 6	25×22	3
P 3	25×23	35	P 7	27×25	12
P 4	27×22	36			



第43図 I区16号住居跡出土遺物



第44図 I区15・16号住居跡

I区17号住居跡 (第45図 PL.17)

位置 170-140グリッド

平面形 (方形) 主軸方位 N-40°-E

規模 3.30×-m 壁高 遺存していない。

床面 掘方のみで、ローム塊や炭化物粒を含む黒色土で埋めて床面を整えている。

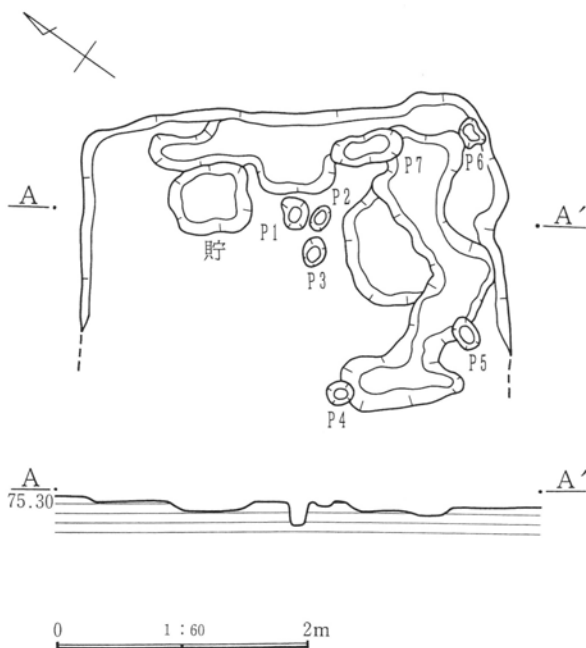
竈・炉 検出されなかった。

ピット等 7基のピットが検出されたが、支柱穴と認定できるものはない。P1は最も深く、住居プランの主軸位置にあるため、中央2箇所の棟持ち支柱穴の可能性があろう。また、P1の北側で径63×55cmの規模をもつ隅丸長方形ピットが検出されたが、整った形状から貯蔵穴としていいだろう。

出土遺物 掘方埋土から古墳前期土器破片が出土。

重複遺構 16号住居跡及び18号住居跡と主軸を同じくして1.8~2.2mの間隔で隣接する。

	径 (cm)	深 (cm)		径 (cm)	深 (cm)
P 1	26×20	18	P 5	26×17	12
P 2	21×15	3	P 6	23×15	7
P 3	22×18	10	P 7	57×25	12
P 4	21×19	9			



第45図 I区17号住居跡

I区18号住居跡 (第46図 PL.18)

位置 170・175-140・145グリッド

平面形 (方形) 主軸方位 N-56°-E

規模 3.95×-m 壁高 遺存していない。

床面 ローム塊を含む黒色土で埋めて床面を整える。

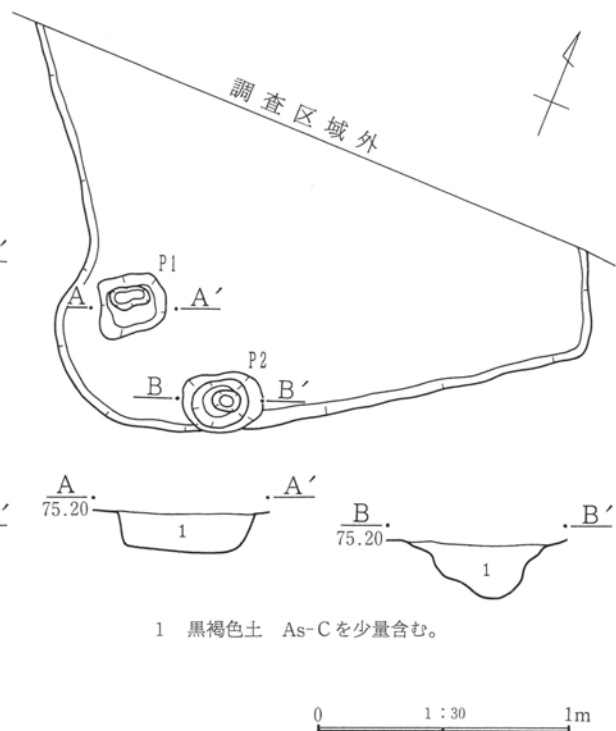
竈・炉 検出されなかった。

ピット等 南隅で2基のピットを検出。P1は不整形長方形を呈し、断面形は箱形。P2は平面楕円形で、断面は中央のくぼむ三角形を呈する。いずれもAs-Cを含む黒色土が堆積しており、掘方埋土のような人為的堆積とは異なる。形状からP1は貯蔵穴の可能性が高い。

出土遺物 掘方埋土から古墳前期土器小片が出土。

重複遺構 南東側に約2.2m離れて17号住居跡が並列する。また、南西には約1m離れて15号井戸が位置している。

	径 (cm)	深 (cm)		径 (cm)	深 (cm)
P 1	53×46	21	P 2	63×47	24



1 黒褐色土 As-Cを少量含む。

第46図 I区18号住居跡

I区19号住居跡 (第47図 P.L.18)

位置 170-155グリッド

平面形 (方形) 主軸方位 N-76°-W

規模 計測不能 壁高 壁は遺存しない。

床面 平坦な掘方を残すのみ。

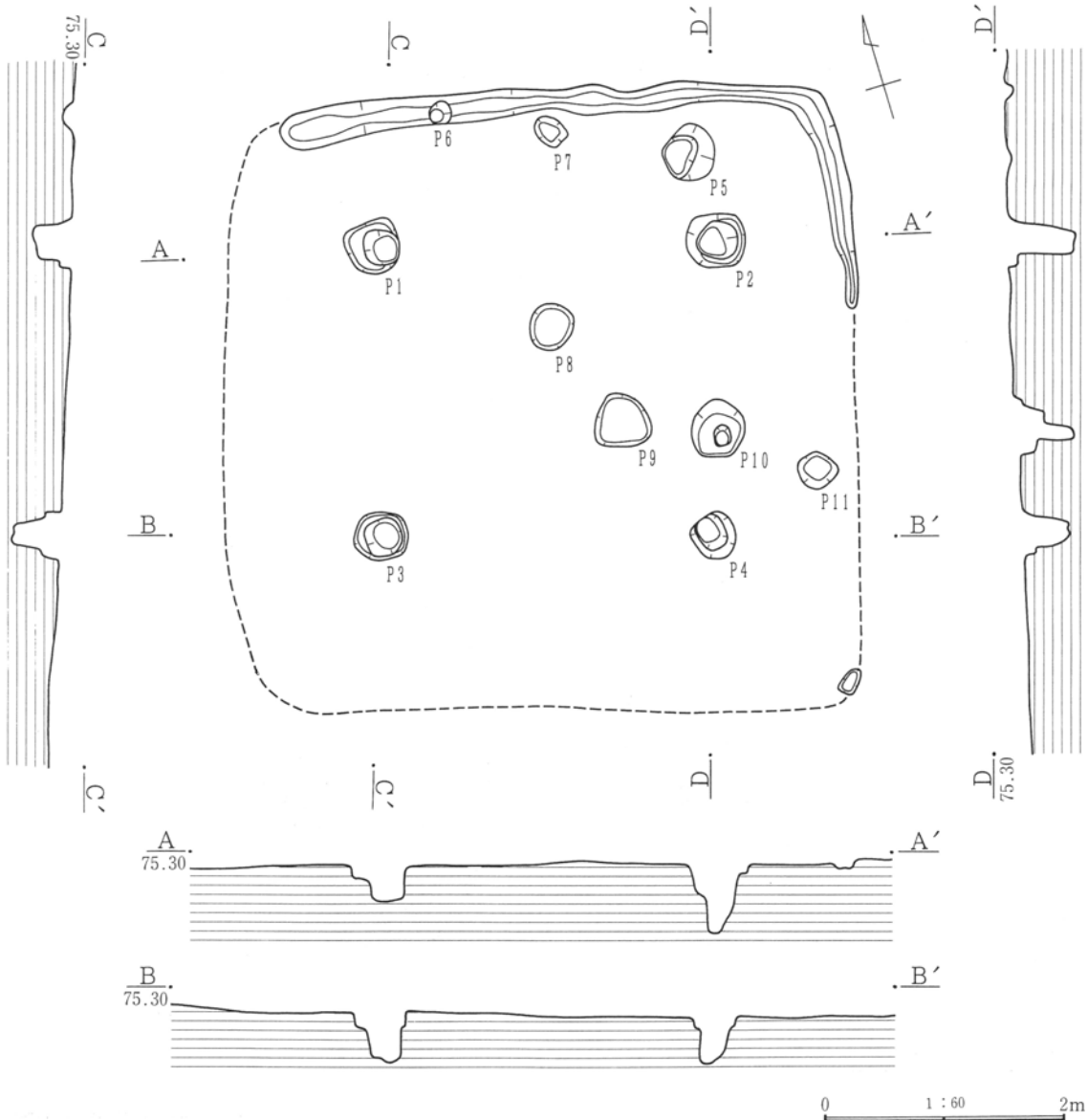
竈・炉 検出されなかった。

ピット等 P1~P4が主柱穴。柱間寸法は、P1-P2とP3-P4が2.70m、P1-P3とP2-P4が2.35mで東西方向がやや長い。P10はP2-P4間の柱穴か。壁溝は幅15cm前後で北半にめぐる。本来は全周したと思われる。

出土遺物 掘方埋土から古墳前期の土器小片が出土している。

重複遺構 東方に3m前後離れて、主軸を同じくする8号住居跡が隣接する。

	径 (cm)	深 (cm)		径 (cm)	深 (cm)
P 1	47×43	32	P 7	27×20	10
P 2	50×45	56	P 8	38×35	9
P 3	44×40	43	P 9	48×43	8
P 4	35×33	40	P 10	46×43	50
P 5	46×45	20	P 11	30×30	23
P 6	18×18	25			



第47図 I区19号住居跡

I 区20号住居跡 (第48図 P L.18)

位置 170・175-105・110グリッド

平面形 (方形) 主軸方位 計測不能

規模 計測不能 壁高 遺存しない。

床面 壁に沿ってややくぼむ掘方に埋土を行って床面を整える。

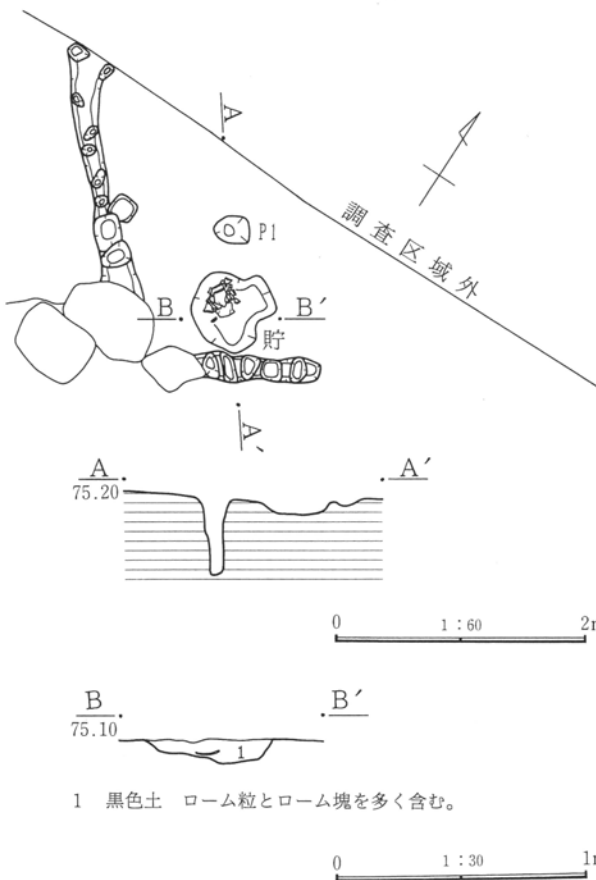
竈・炉 検出されなかった。

ピット等 主柱穴の1基と思われるP 1が南寄りで見出された。また、その南東側で不整形の貯蔵穴が見出された。規模は、63×65cm、深さ8cmを測る。底面は段があり、平坦ではない。壁溝は南西と南東で見出され、幅10~20cmを測る。底面には大小のくぼみが続する。

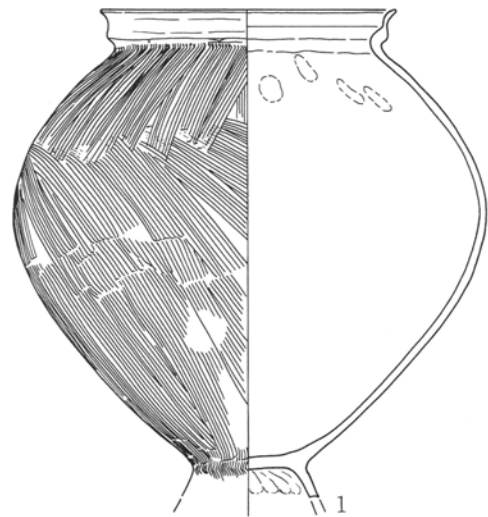
出土遺物 貯蔵穴からS字甕、高杯片が出土した。

重複遺構 南端を時期不明の土坑に切られる。

	径 (cm)	深 (cm)
P 1	30×22	60



第48図 I 区20号住居跡



0 1:4 10cm

第49図 I 区20号住居跡出土遺物

I 区21号住居跡 (第50図)

位置 160-110・115グリッド

平面形 主柱穴配置から正方形と思われる。

主軸方位 N-53°-E

規模 計測不能 壁高 壁は遺存しない。

床面 遺存せず、掘方面がわずかに残る。掘方はほぼ平坦であることから、貼床の埋土は薄かったと考えられる。

竈・炉 検出されなかった。

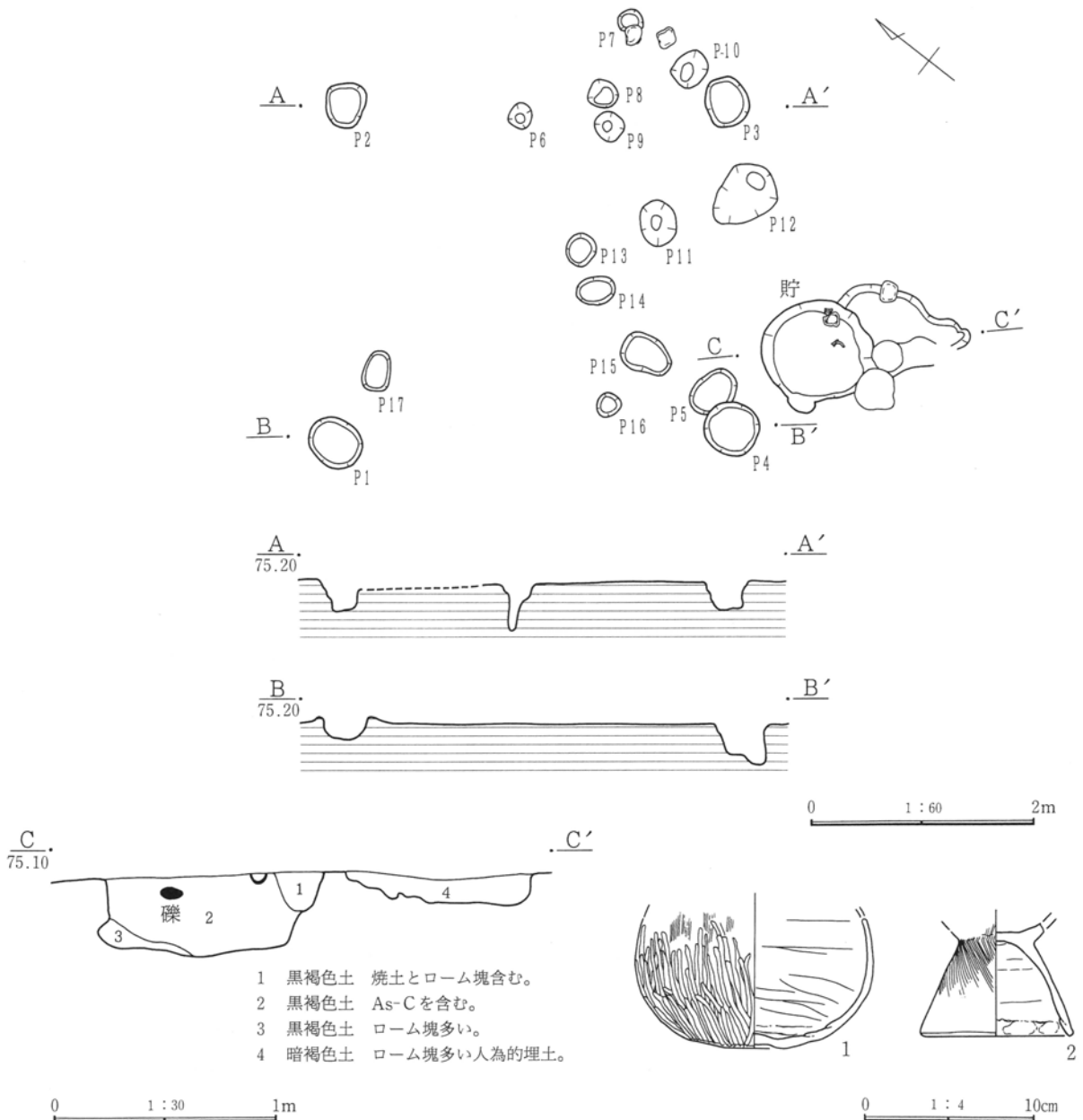
ピット等 想定されるプラン内から17基のピットが見出された。このうち、P 1~P 4が主柱穴と考えられる。柱間寸法は、P 1-P 2が3.00m、P 3-P 4が2.90m、P 2-P 3が2.40m、P 1-P 4が2.50mを測る。P 17はAs-C混黒色土が堆積する。P 6・P 8~P 12は柱痕跡を確認できたが、本住居跡に伴うか否か判断できなかった。貯蔵穴は想定される南東辺に沿って位置し、直径1mの規模を測る。

深さは36cmで、底面は平坦。なお、貯蔵穴の南東側に不整形の浅いくぼみが重なるが、ローム塊を多く含む埋土から掘方と思われる。

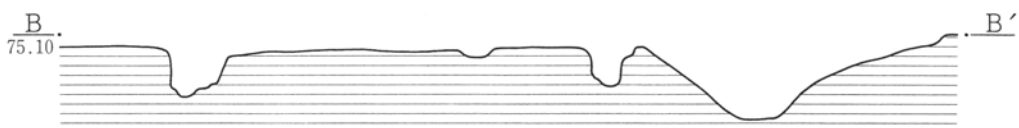
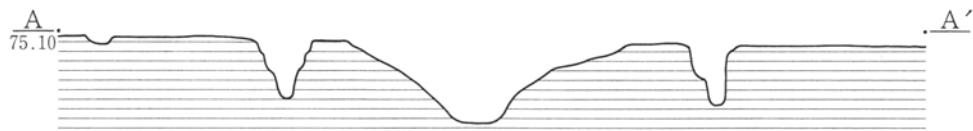
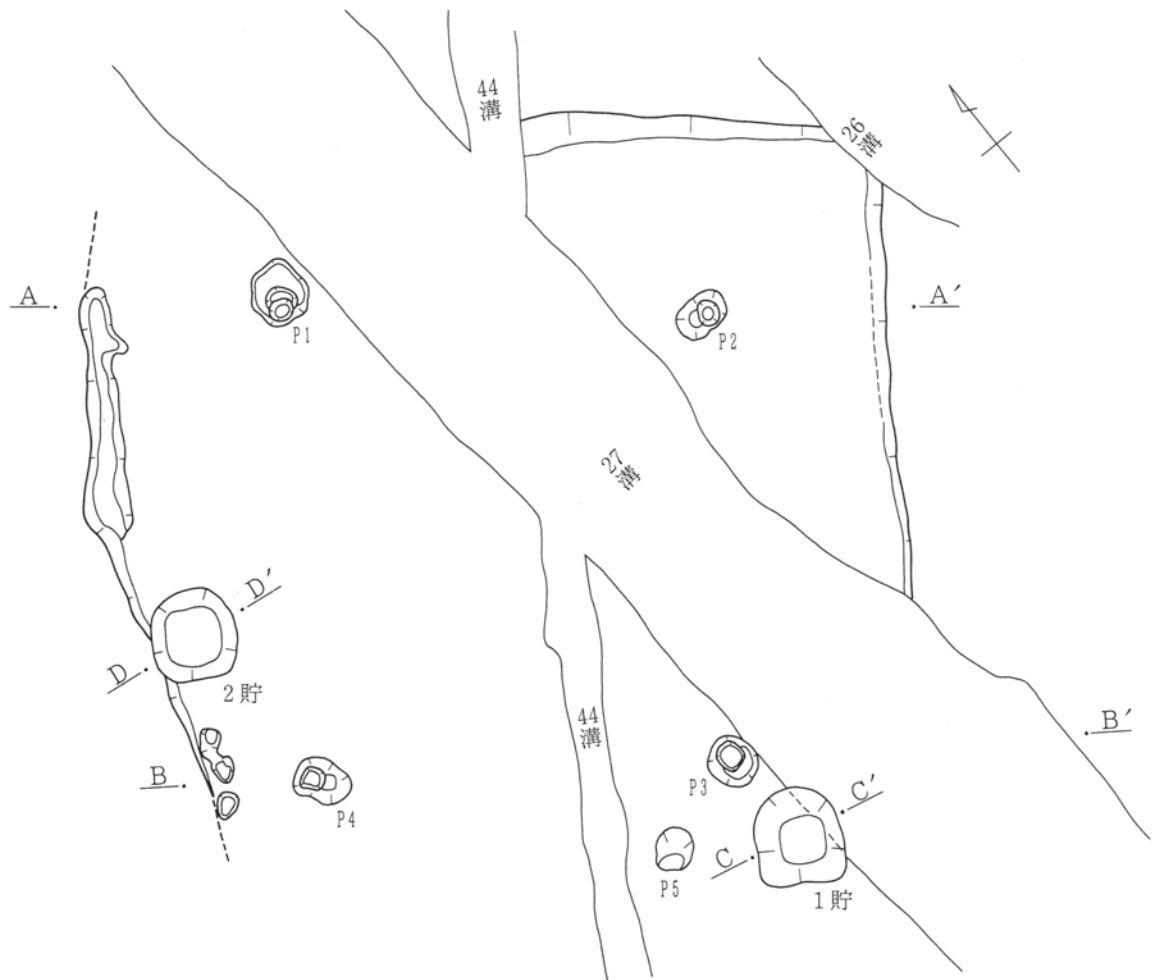
出土遺物 貯蔵穴からS字甕の脚部と直口壺の胴部が出土した。ほかに埋土から古墳前期の土器片が出土する。

重複遺構 重複はしないが、11号住居跡と近接して並列する関係にある。両者の間隔は1m以下と思われる、上屋構造を想定した場合、同時併存は困難だと思われる。

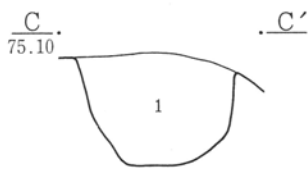
	径 (cm)	深 (cm)		径 (cm)	深 (cm)
P 1	48×41	20	P 10	33×27	(6)
P 2	39×35	30	P 11	40×32	(8)
P 3	43×38	25	P 12	62×47	8
P 4	48×46	35	P 13	29×27	8
P 5	45×35	7	P 14	33×25	5
P 6	22×20	40	P 15	46×35	7
P 7	21×17	7	P 16	22×20	9
P 8	25×24	(8)	P 17	35×22	6
P 9	26×23	22			



第50図 I区21号住居跡及び出土遺物



0 1 : 60 2m



1 黒色土 As-Cを含み、均質。自然堆積か。

0 1 : 30 1m

第51図 I区22号住居跡

I区22号住居跡 (第51図 P L.19)

位置 160・165-125・130グリッド
 平面形 (方形) 主軸方位 N-40°-E
 規模 6.40×-m 壁高 壁は遺存しない。
 床面 掘方埋土がわずかに残る。
 竈・炉 検出されなかった。

ピット等 5基のピットが検出され、そのうちP1～P4は支柱穴と思われる。柱間寸法はP1-P2が3.60m、P3-P4が3.75m、P1-P4とP2-P3が3.40mを測る。貯蔵穴は南東隅と北西辺中央に2基検出され、1号は径76×69cm深さ45cm、2号は径72×69cm深さ36cmを測る。P5は1号貯蔵穴の北西に位置している。

出土遺物 2号貯蔵穴底面から古墳前期の結合器台、鉢、高杯、甕の破片が出土した。

重複遺構 26・27・44号溝に切られ、北側で15号住居跡と隣接する。

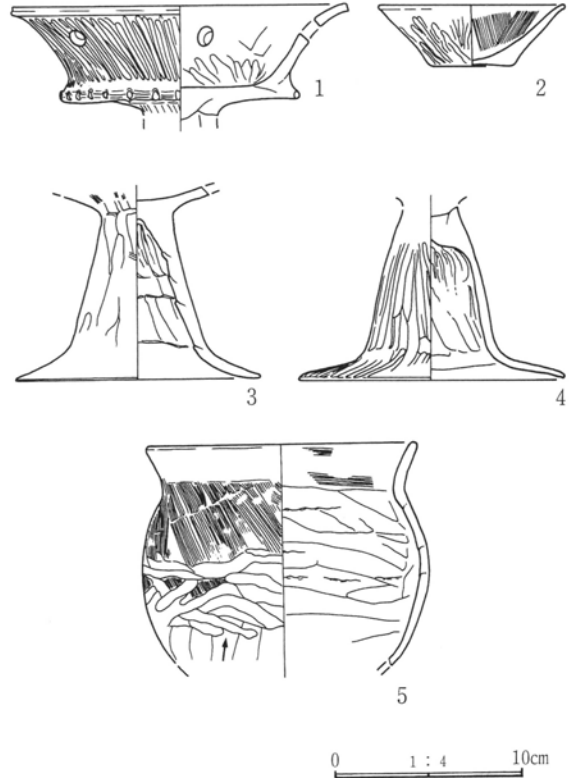
	径 (cm)	深 (cm)		径 (cm)	深 (cm)
P 1	54×45	45	P 4	46×32	37
P 2	42×30	52	P 5	33×30	17
P 3	42×37	29			

(2) 掘立柱建物跡

I区1号掘立柱建物跡 (第53図 P L.20)

位置 205・210-155・160グリッド
 主軸方位 N-17°-E
 規模 2×2間 4.55×3.75m
 柱間寸法 P1-P2 1.88m
 P2-P3 1.90m
 P3-P4 2.04m
 P4-P5 2.40m
 P5-P6 1.78m
 P6-P7 1.86m
 P7-P8 2.30m
 P8-P1 2.17m

P1-P2とP6-P7が6尺と短く、P4-P5及びP7-P8が8尺と長い。



第52図 I区22号住居跡出土遺物

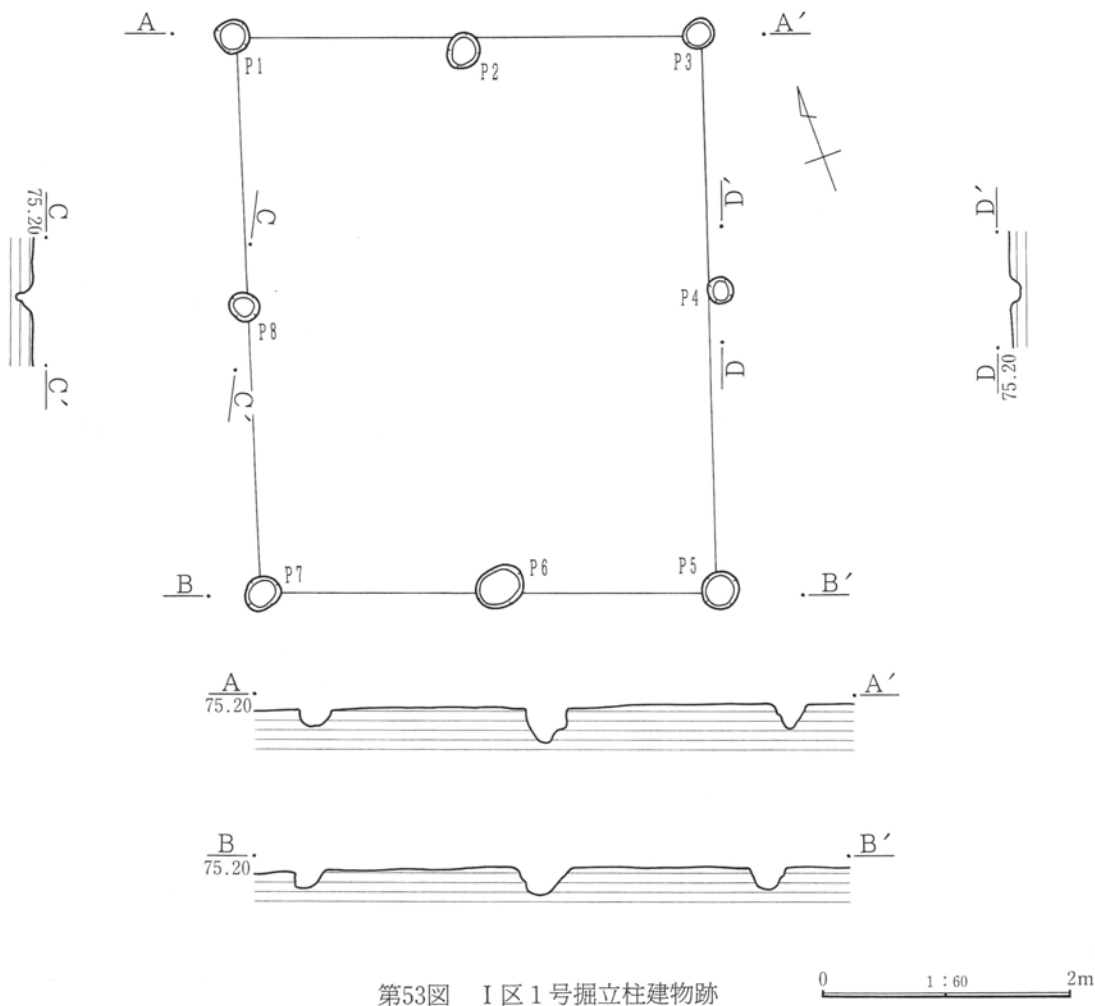
柱穴 柱穴の形状は、いずれも平面が円形。深さはばらつきがあり一定しない。埋土にはAs-Cを含む黒色土が堆積しており、柱痕跡や抜き取り痕などは不明瞭。下端の直径はP8が最小で7cmを測ることから、柱径は太くても10cm前後か。

出土遺物 なし。

重複遺構 同じAs-C混土が堆積する畠遺構と重複するが、新旧関係は確認できなかった。

時期 柱穴埋土の特徴から古墳時代と考えられるが、古墳前期と推定される1×2間構造の掘立柱建物跡との相違が時期差か否か検討の余地がある。

	径 (cm)	深 (cm)		径 (cm)	深 (cm)
P 1	28×27	13	P 5	30×28	17
P 2	29×25	27	P 6	38×32	23
P 3	25×22	20	P 7	29×25	15
P 4	21×21	9	P 8	23×23	13



第53図 I区1号掘立柱建物跡

I区2号掘立柱建物跡 (第55図 P L.20)

位置 205・210-167・170グリッド

主軸方位 N-46°-W

規模 1×2間 4.25×3.20m

柱間寸法 P1-P2 2.25m

P2-P3 1.95m

P3-P4 3.15m

P4-P5 2.10m

P5-P6 2.20m

P1-P6 3.10m

P7-P8 6.25m

柱穴 柱穴の形状は、いずれも平面が円形か楕円形で、深さはほぼ一定。埋土にはAs-Cを含む黒色土が堆積する。P7とP8は棟持柱にあたるだろう。

出土遺物 柱穴埋土から台付甕片1点が出土。

重複遺構 中世屋敷堀の4号溝に切られる。

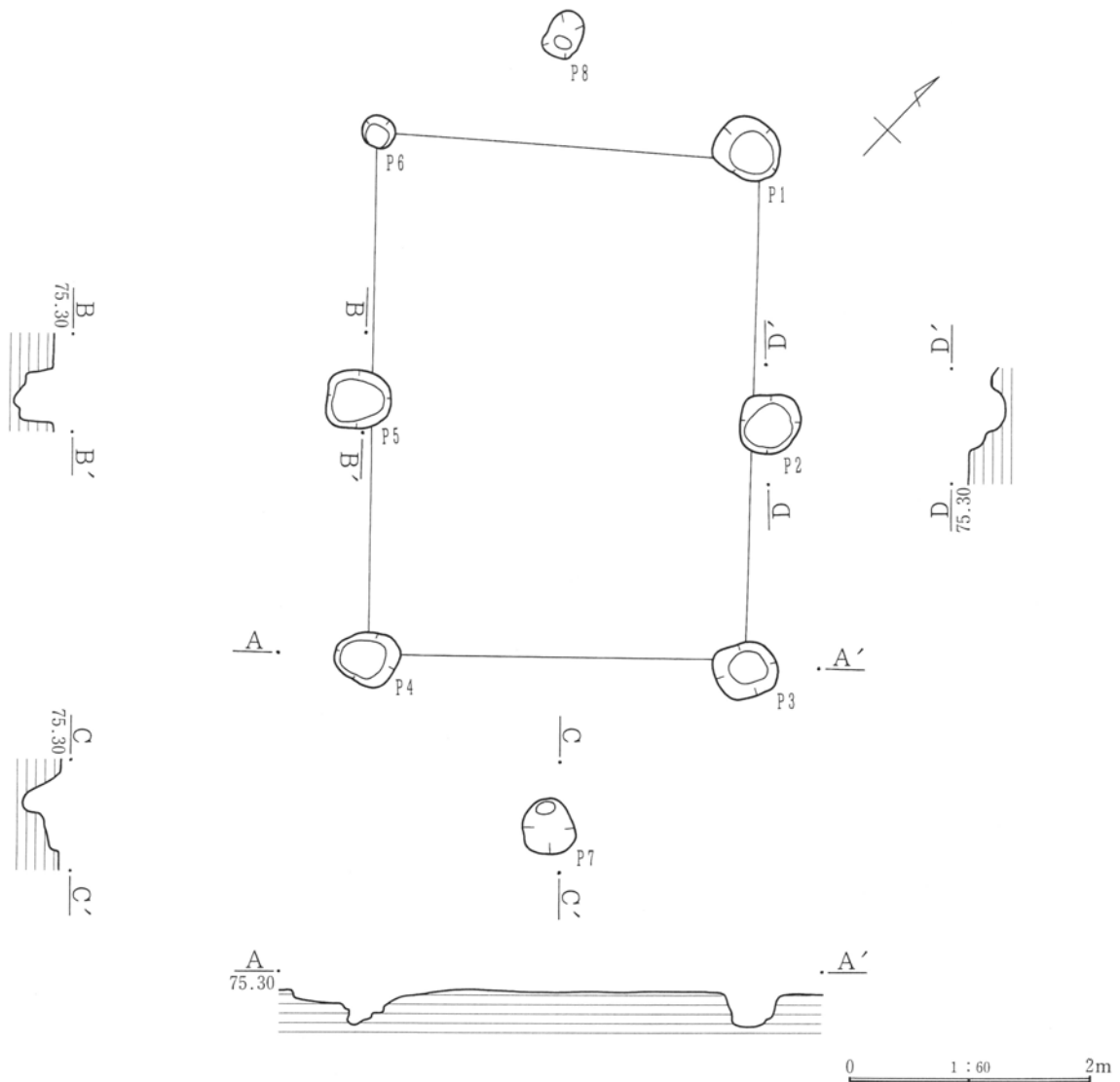
時期 柱穴埋土と出土土器及び平面形態の特徴、重複遺構新旧関係から、古墳前期と考えたい。

	径 (cm)	深 (cm)		径 (cm)	深 (cm)
P 1	56×48	40	P 5	55×48	32
P 2	55×50	36	P 6	27×26	36
P 3	50×44	27	P 7	45×42	39
P 4	55×46	28	P 8	39×29	31



0 1:4 10cm

第54図 I区2号掘立柱建物跡出土遺物



第55図 I区2号掘立柱建物跡

I区3号掘立柱建物跡 (第56図)

位置 190-165・170グリッド

主軸方位 N-39°-E

規模 不明

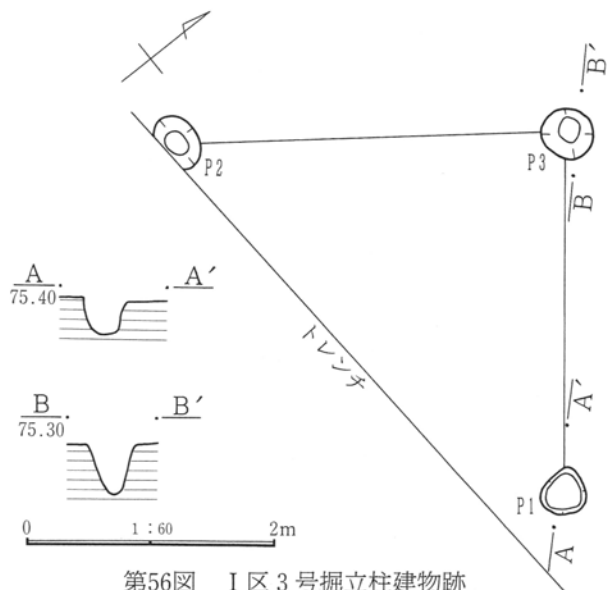
柱間寸法 P1-P3 2.90m

P2-P3 3.15m

柱穴 円か楕円形の平面で、底面には一部に柱痕跡が残る。埋土にAs-Cを含む。

遺物 なし。 重複遺構 なし。

	径 (cm)	深 (cm)		径 (cm)	深 (cm)
P1	38×34	29	P3	43×40	40
P2	47×-	32			



第56図 I区3号掘立柱建物跡

I区5号掘立柱建物跡 (第57図 P.L.21)

位置 190・195-125グリッド

主軸方位 N-25°-W

規模 1×2間 3.06×3.10m

柱間寸法 P1-P2 1.70m

P2-P3 1.36m

P1-P4 3.06m

P3-P6 3.05m

P4-P5 1.52m

P5-P6 1.52m

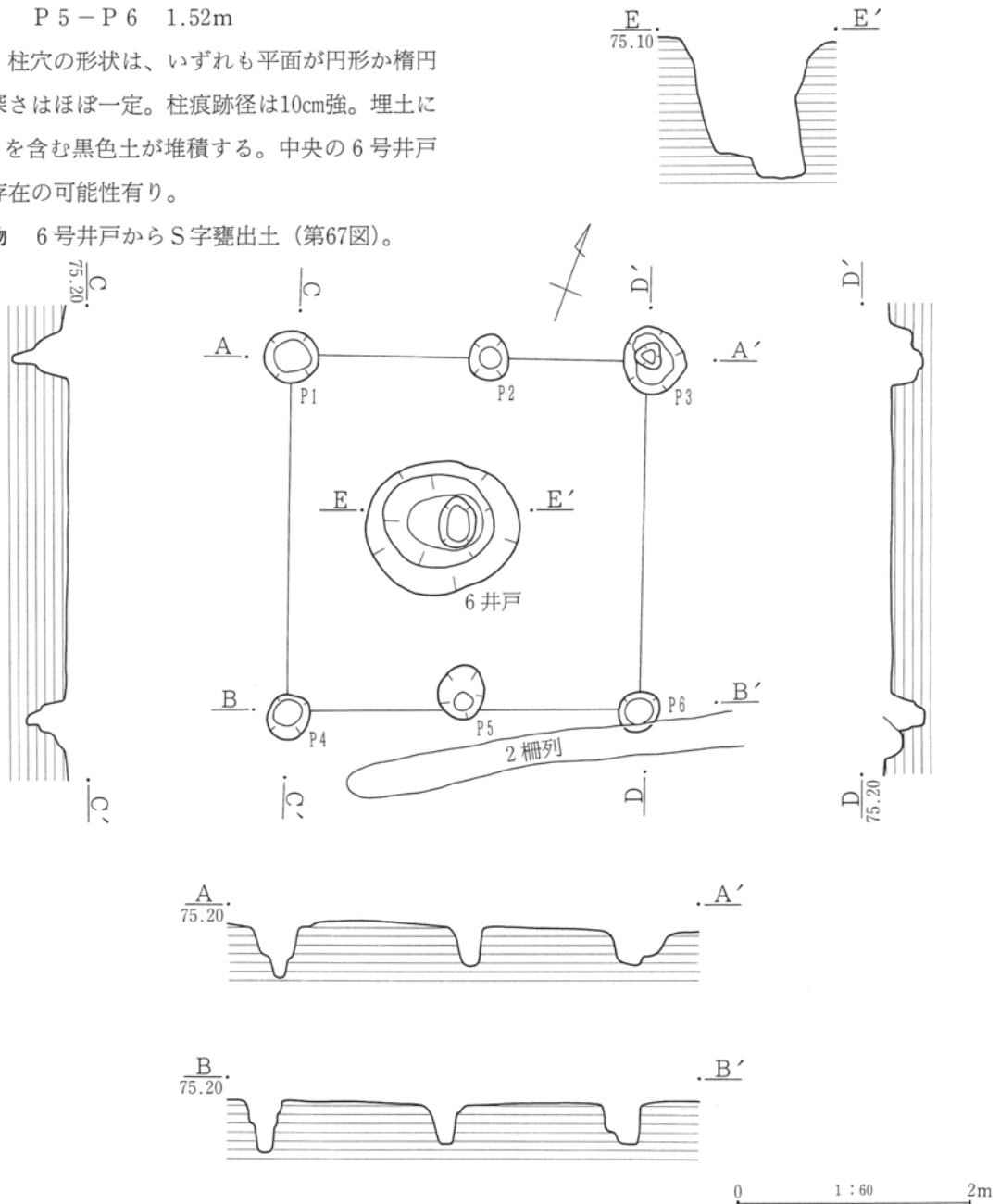
柱穴 柱穴の形状は、いずれも平面が円形か楕円形で、深さはほぼ一定。柱痕跡径は10cm強。埋土にはAs-Cを含む黒色土が堆積する。中央の6号井戸は同時存在の可能性有り。

出土遺物 6号井戸からS字甕出土 (第67図)。

重複遺構 2号柵列にP6が切られる。

所見 6号井戸を主とする覆屋などの上部構造であらうか。

	径 (cm)	深 (cm)		径 (cm)	深 (cm)
P1	46×46	47	P4	39×35	44
P2	40×33	33	P5	47×40	33
P3	58×52	29	P6	40×31	35



第57図 I区5号掘立柱建物跡

I区7号掘立柱建物跡 (第58図)

位置 185・190-110・115グリッド

主軸方位 N-51°-W

規模 (2×2)間 4.60×4.00m

柱間寸法 P1-P7 1.96m

P6-P7 2.02m

P4-P5 2.18m

P4-P10 2.00m

P1-P9 1.92m

P9-P10 2.10m

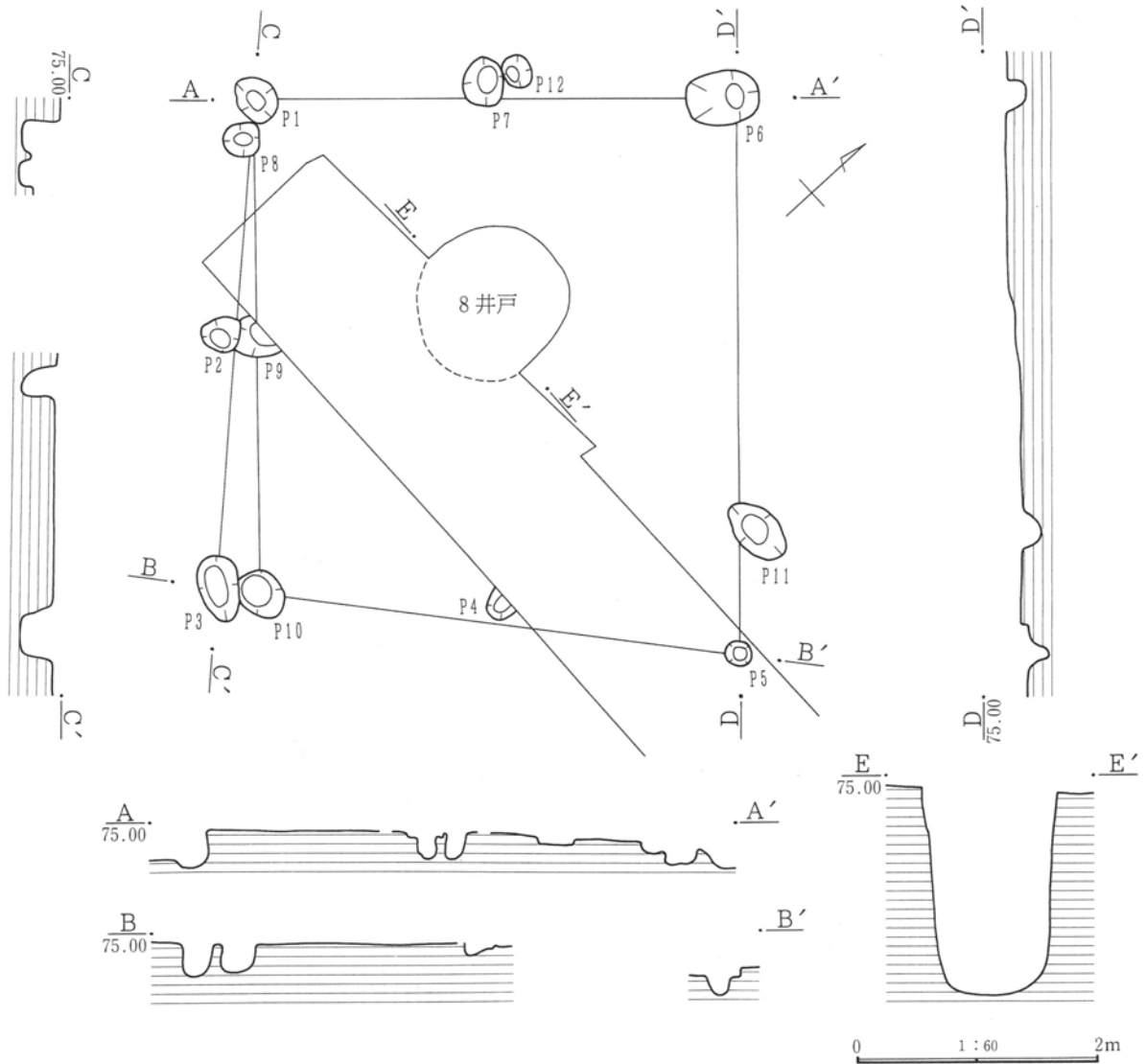
P1・P9・P10に隣接してP8・P2・P3があり、柱の立て替えが想定される。中央の8号井戸は5号掘立柱建物跡と同様に同時存在か。

柱穴 柱穴の形状は、いずれも平面が円形か楕円形で、P4を除けば深さはほぼ一定。埋土にはAs-Cを含む黒色土が堆積する。

出土遺物 8号井戸から井戸枠が出土。

重複遺構 なし。

	径 (cm)	深 (cm)		径 (cm)	深 (cm)
P1	40×32	31	P7	40×32	21
P2	32×30	29	P8	30×28	32
P3	54×34	26	P9	34×-	23
P4	25×-	9	P10	40×34	23
P5	24×22	23	P11	58×35	22
P6	60×22	18	P12	28×22	27



第58図 I区7号掘立柱建物跡

I 区 9 号掘立柱建物跡 (第59図 P L.21)

位置 170-110・115グリッド

主軸方位 N-32°-E

規模 1×2間 2.30×2.40m

柱間寸法 P 1 - P 2 2.30m

P 2 - P 3 1.15m

P 3 - P 4 1.10m

P 4 - P 5 2.10m

P 5 - P 6 1.30m

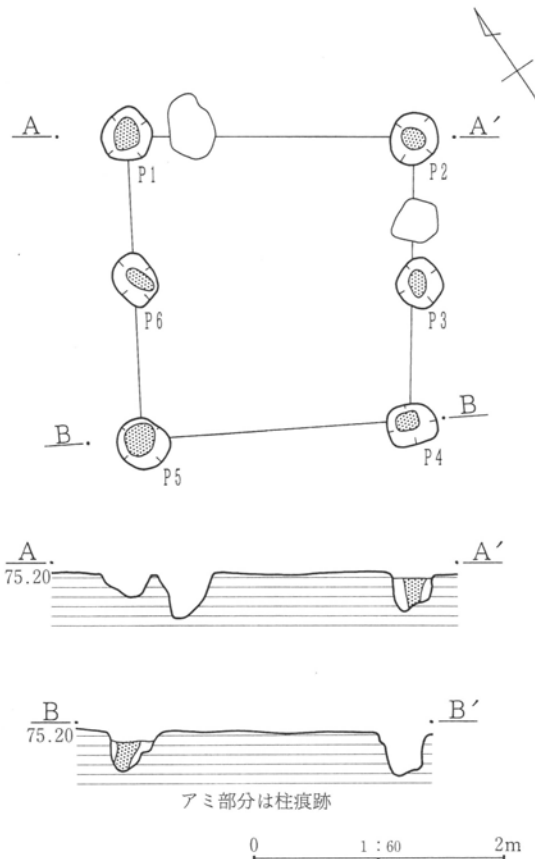
P 1 - P 6 1.15m

柱 穴 柱穴の形状は円形で、深さはほぼ一定。埋土にはAs-Cを含む黒色土が堆積。土層断面に柱痕跡が明瞭に残る。

出土遺物 なし。

重複遺構 9号住居跡が南東側で主軸を同じくして隣接する。同時存在は困難か。

	径 (cm)	深 (cm)		径 (cm)	深 (cm)
P 1	42×42	17	P 4	40×36	32
P 2	43×37	32	P 5	40×40	32
P 3	40×37	35	P 6	43×37	25



第59図 I 区 9 号掘立柱建物跡

(3) 柵 列

I 区 2 号柵列 (第60図 P L.21)

位置 190~200-115~125グリッド

走向 N-56°-E

規模 長さ約17mを検出。溝の幅20~58cm、深さ20cmを測る。

ピット等 溝内に11基のピットが検出され、それぞれのピット間寸法は以下の通り。

P 1 - P 2 0.26m

P 2 - P 3 0.34m

P 3 - P 4 1.90m

P 4 - P 5 1.55m

P 5 - P 6 1.52m

P 6 - P 7 1.72m

P 7 - P 8 3.50m

P 8 - P 9 0.35m

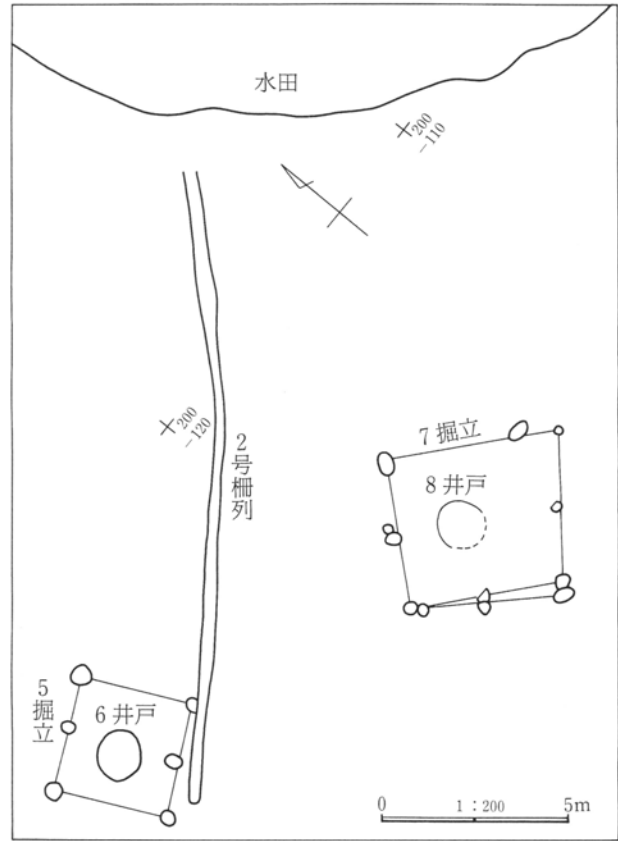
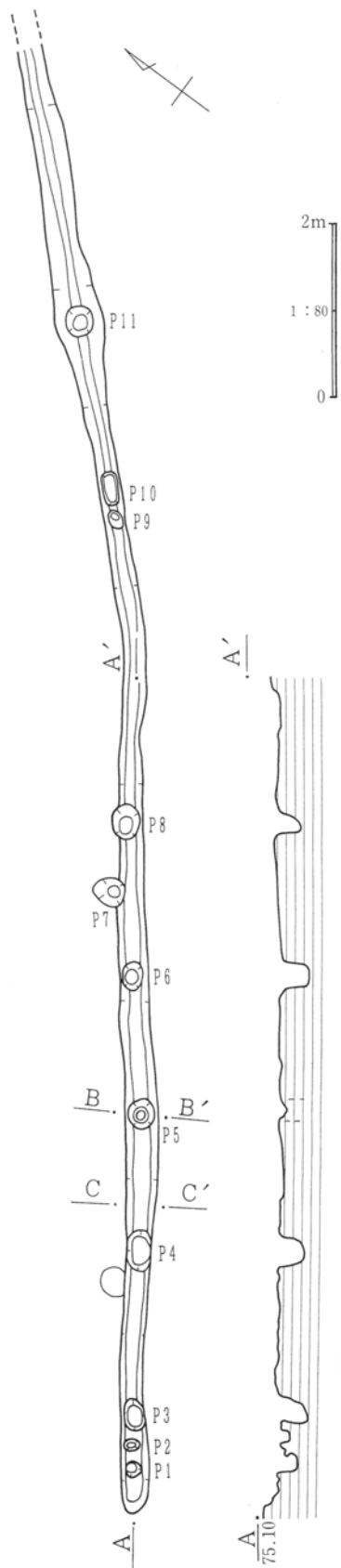
P 9 - P 10 1.90m

埋土の状況 ブロック状の黒色土が堆積しており、人為的埋土の可能性も考えられる。

出土遺物 P 5 内に完形の単口縁の小型甕 (第60図 1) が直立して埋め込まれていた。

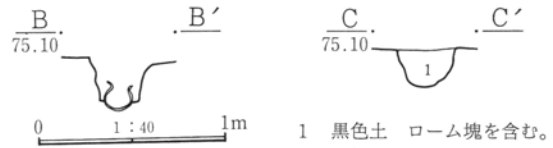
重複遺構 5号掘立柱建物跡を切る。

所見 溝内にピットが並ぶことから、これを布堀状の柵列と考えたが、北東端は蛇行する藤川の河道に達したと思われ、南西末端に6号井戸が位置することから、ここで得られた水を流すための施設とも考え得る。ただしピット内に泥や砂の堆積は見られない。古墳前期の住居の北限であるのも示唆的だ。

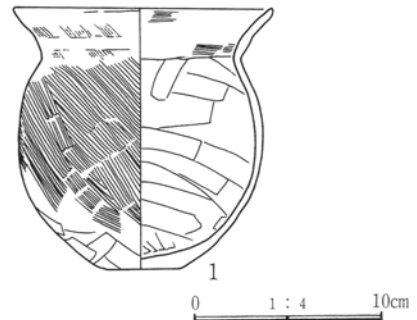


柵列と周辺の遺構配置

	径 (cm)	深 (cm)		径 (cm)	深 (cm)
P 1	18×18	25	P 7	36×32	31
P 2	17×12	16	P 8	40×32	39
P 3	36×24	36	P 9	26×18	(14)
P 4	48×30	30	P 10	38×20	(14)
P 5	34×30	28	P 11	34×32	(25)
P 6	32×25	35			



1 黒色土 ローム塊を含む。



第60図 I区2号柵列跡及び出土遺物

I区3号柵列 (第61図)

位置 185・190-100・105グリッド

規模 長さ5.90m

走向 N-56°-E

柱穴 3基のピットが検出されており、直線上に並ぶ。他に対応するピットが見られなかったため柵列としたが、南東側の調査区外にピットが存在すれば掘立柱建物跡になる可能性も残るが、現地では確認し得なかった。立地は藤川河道と居住域の境界にあたる。埋土にAs-Cを含む。

ピット間寸法は以下の通り。

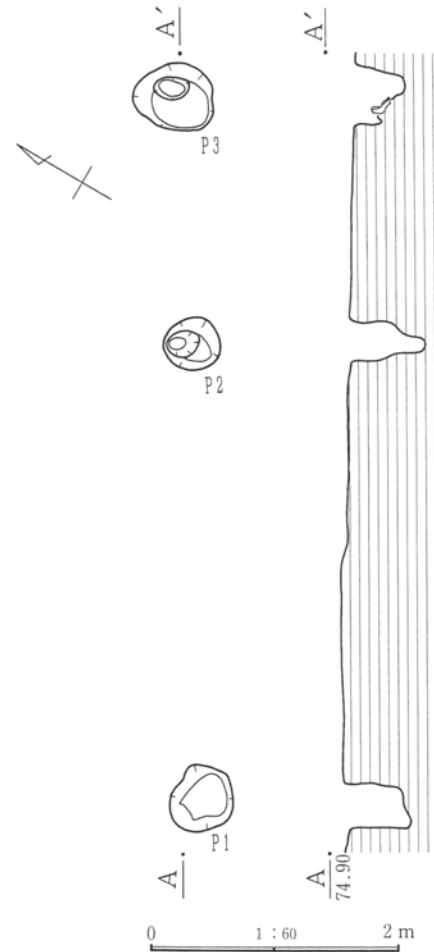
P 1 - P 2 3.80m

P 2 - P 3 2.05m

出土遺物 P 3内からS字甕片1点が出土した。

重複遺構 なし。

	径 (cm)	深 (cm)		径 (cm)	深 (cm)
P 1	54×48	52	P 3	62×54	43
P 2	45×42	62			



(4) 井戸跡

A区1号井戸 (第62図 PL.22)

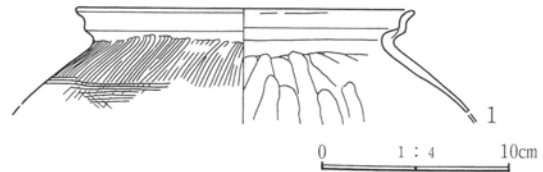
位置 20-945グリッド

形状 平面は楕円形、断面は細長い筒状。

規模 径1.04×0.72m、深さ77cm

埋土の特徴 As-C混黒色土で埋まり、上部のくぼみにはHr-FAが堆積する。

出土遺物 なし。 重複遺構 なし。



第61図 I区3号柵列跡及び出土遺物

重複遺構 なし。3号住居跡が北東に位置する。

H区1号井戸 (第62図 PL.22)

位置 145-250・255グリッド

形状 平面は楕円形、断面は底のくぼむ箱形。

規模 径1.06×0.92m、深さ65cm

埋土の特徴 As-Cを含む黒色土で埋まる。

その他 井戸としては浅いが、現在の時点で地下水位が高いため、湧水は可能。

出土遺物 S字甕と器台ないし高杯の破片が出土。

I区1号井戸 (第62図 PL.22)

位置 200-185グリッド

形状 平面は楕円形、底は歪んだ方形。断面筒状。

規模 径1.30m、深さ108cm

埋土の特徴 下位にローム塊、上位にAs-Cを含む黒色土で埋まる。自然堆積と思われる。

その他 井戸側は見られないが、底面が方形平面であることから、底面付近を木枠等で囲ったものか。

出土遺物 埋土全体から多量の古墳前期土器が出土する。器種は大型壺・小型壺・S字甕・埴・器台（有孔鉢）・高杯が見られる。完形品や故意に穿孔した例は見られない。特殊遺物として「魚」形土製品（65図7）と胴部外面に線刻による絵画の描かれた壺（65図4）があげられる。「魚」形土製品は、頭部と尾部に分断されており、中央部分を欠く。頭部は腹にあたる部位を平坦に、背にあたる部位を円弧状に整形し、円弧状の両側に指押しによるくぼみを造り出して、あたかも両眼を表現したように見える。頭部の左側面には指押しによるくぼみと沈線による3条の平行線が描かれる。尾部は、左側縁の破片で末端部は不明。整形は全体に手捏ねとなで行っており、中実のためか焼成はあまく脆い。頭部形態から、鯉のような頭部の丸く大きい「魚」をモデルにした土製品と想定したが、鰭や鰓など明確な魚の形態の特徴は確認できない。絵画を描いた壺は、口縁と胴の一部を欠き絵画の全体像は不明である。絵画は2箇所があり、肩部には1～2本の横線の中央を3～4本からなる縦線を垂下したモチーフ、胴中位には弧線を3本重ね縦線で区切った半月状のモチーフを描く。前者は欠損部分にまで絵画がのびているため全体像は不明、後者は「弓」ないし「月」を連想させる。「魚」形土製品は類例のみない稀少例で、日常生活に用いる器物類とは明らかに異なる。モデルが何であったかは今後の議論や類例の発見をまつことになろうが、両眼をもつ動物の形代である可能性は高い。これが他の多量の土器とともに投棄されたとすれば、これらは井戸の祭祀行為に関わる遺物群との位置づけも可能だろう。

重複遺構 1号住居跡北西に隣接する。

I区2号井戸（第62図 P L.23）

位置 190・195-180グリッド

形状 平面は隅丸方形、断面は箱形。

規模 一辺1.04m、深さ92cm

埋土の特徴 上位にAs-C混黒色土が堆積する。下位の壁際に井戸側と挟まれた部分の堆積物あり。

その他 井戸側は見られないが、方形の杵木等で底部付近を囲ったと考えられる。

出土遺物 古墳前期の壺片。

重複遺構 2号溝・6号土坑との新旧関係は不明。

I区4号井戸（第62図 P L.23）

位置 205・210-175・180グリッド

形状 上端平面は円形、底平面は隅丸方形、断面は上部が開く筒状。

規模 径1.48m、深さ110cm

埋土の特徴 As-C混黒色土と灰色シルトとの互層。

出土遺物 古墳前期の底部穿孔埴・単口縁甕片・高杯片が出土。

重複遺構 4号溝に切られる。

I区5号井戸（第62図 P L.23）

位置 200・205-175グリッド

形状 平面は楕円形、断面は細長い筒状。

規模 径1.20×0.96m、深さ155cm

埋土の特徴 上位はAs-C混黒色土で埋まり、中位はブロック状、下位に粘性の強い黒色土が堆積する。

出土遺物 古墳前期の壺・甕・器台片が出土。

重複遺構 なし。

I区6号井戸（第62図 P L.23）

位置 195-125グリッド

形状 平面は不整形円形、断面は上部が開く筒状。

規模 径1.30m、深さ112cm

埋土の特徴 上位はAs-C混黒色土、下位にはローム粒が多い。

その他 5号掘立柱建物跡の中央に位置し、上屋構造をもった可能性あり。

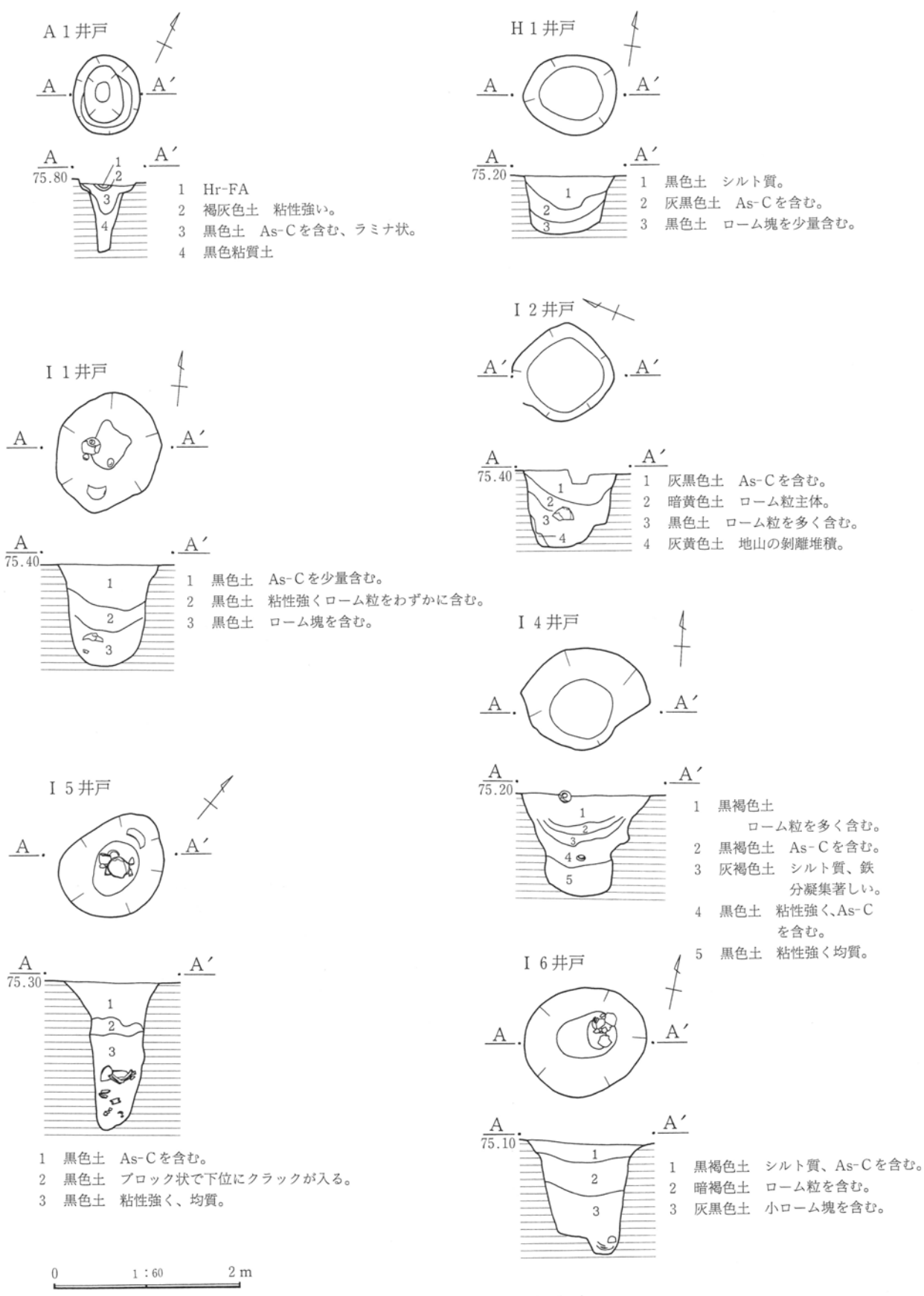
出土遺物 完形に近い状態のS字甕出土。

重複遺構 なし。

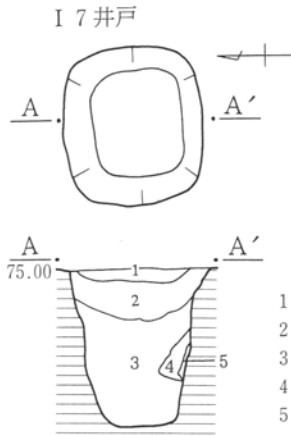
I区7号井戸（第63図 P L.24）

位置 195-120グリッド

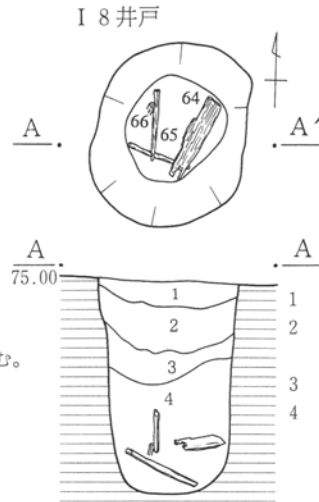
形状 平面、底面ともに隅丸長方形、断面は筒状。



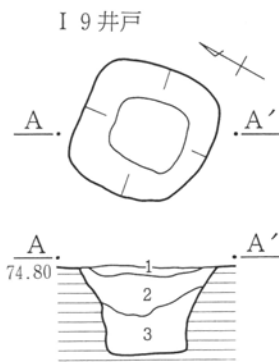
第62図 古墳時代の井戸跡 (1)



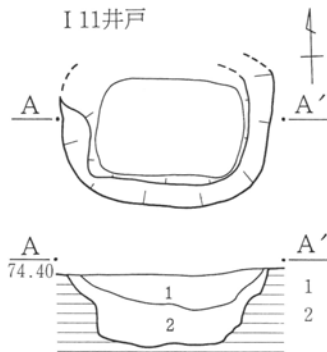
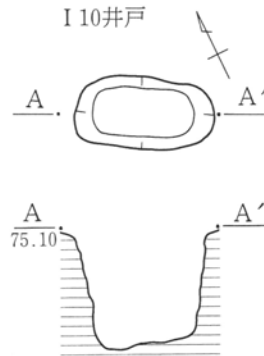
- 1 暗褐色土 As-Cを含む。
- 2 黒褐色土 As-Cとローム塊を含む。
- 3 黒褐色土 ローム銃、粘土塊を少量含む。
- 4 黄灰色土 地山壁の剝離。
- 5 黒色土 井戸側の腐食したものか。



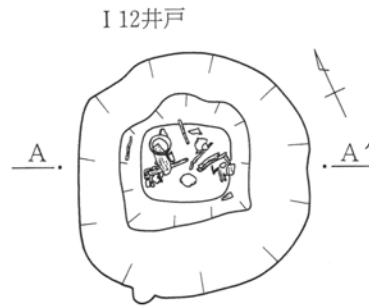
- 1 暗灰褐色土 シルト質。
- 2 暗灰色土 シルト質、As-Cを含む。
- 3 暗灰色土 As-Cを少量含む。
- 4 暗褐色土 シルト質、ラミナ状。



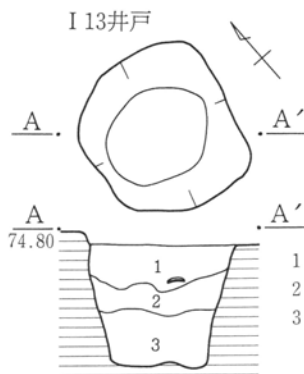
- 1 黒褐色土
- 2 黒褐色土 As-Cを含む。
- 3 灰褐色土 粘土とシルトの互層。



- 1 灰褐色土 シルト質砂。
- 2 黒色土 As-Cを含む。



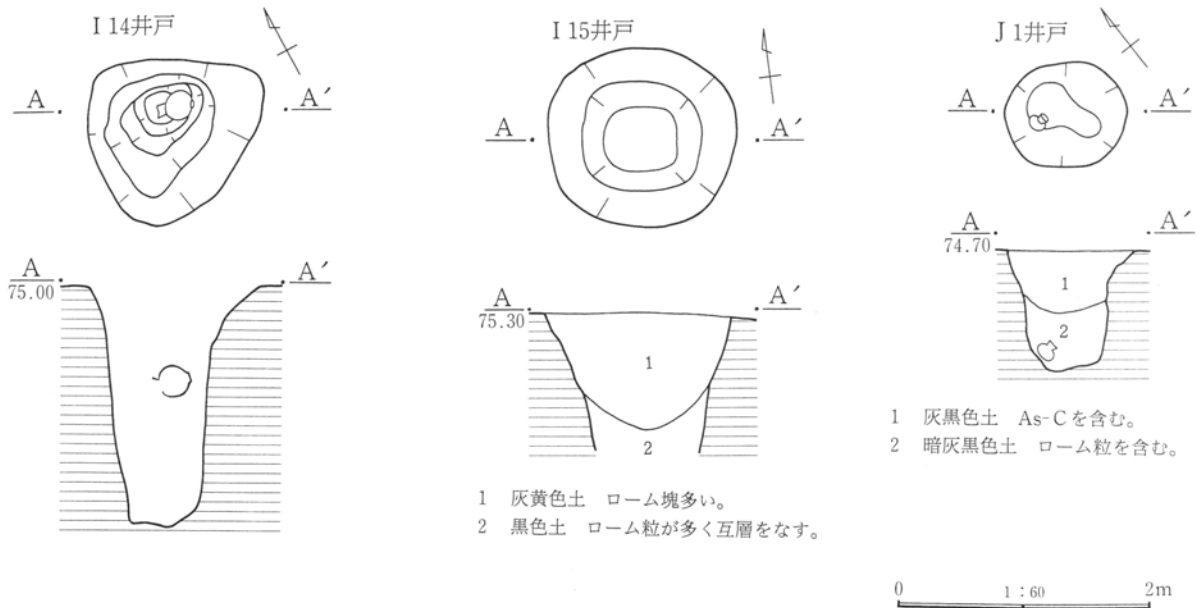
- 1 灰褐色土 シルト質砂。
- 2 黒色土 粘性帯び、As-Cを含む。
- 3 灰褐色砂質土



- 1 黒灰色土 シルト質でAs-Cを含む。
- 2 黒色砂質シルト
- 3 黄灰色土 ローム粒主体。

0 1 : 60 2m

第63図 古墳時代の井戸跡 (2)



第64図 古墳時代の井戸跡（3）

規模 径1.15m、深さ165cm

埋土の特徴 As-C混黒色土で埋まる。

その他 底面は方形の木枠で囲ったものだろう。

出土遺物 S字甕・甕・紡錘車が出土。

重複遺構 なし。

I区8号井戸（第63図 PL.24）

位置 190-115グリッド

形状 平面は楕円形、断面は筒状。

規模 径1.21m、深さ165cm

埋土の特徴 As-C混黒色土で埋まる。

その他 井戸側あるいは底面の木枠と思われる板材と角杭が出土した。7号掘立柱建物跡の中央に位置する。上屋を伴う可能性あり。

出土遺物 土器は出土せず。 重複遺構 なし。

I区9号井戸（第63図 PL.24）

位置 195-115グリッド

形状 平面は方形、断面は上部が開く箱形。

規模 径1.10×1.02m、深さ73cm

埋土の特徴 As-C混黒色土で埋まり、下位にはローム粒が多い。

その他 井戸とするには浅いが、湧水は見られる。

出土遺物 S字甕出土。 重複遺構 なし。

I区10号井戸（第63図）

位置 195-155グリッド

形状 平面は長方形、断面は筒状。

規模 径1.08×0.60m、深さ93cm

埋土の特徴 As-C混黒色土で埋まる。

出土遺物 なし。

重複遺構 8号溝との新旧関係は不明。

I区11号井戸（第63図 PL.25）

位置 195-105グリッド

形状 平面は長方形、断面は上部が開く箱形。

規模 径1.68×-m、深さ67cm

埋土の特徴 ブロック状のAs-C混黒色土が堆積。

その他 浅いのは、河川跡右岸の黒色土で判明せず、地山面まで確認面を下げたためである。

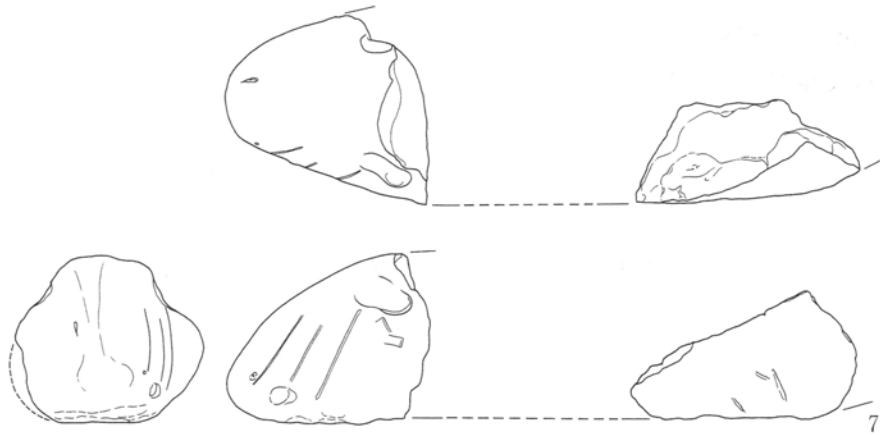
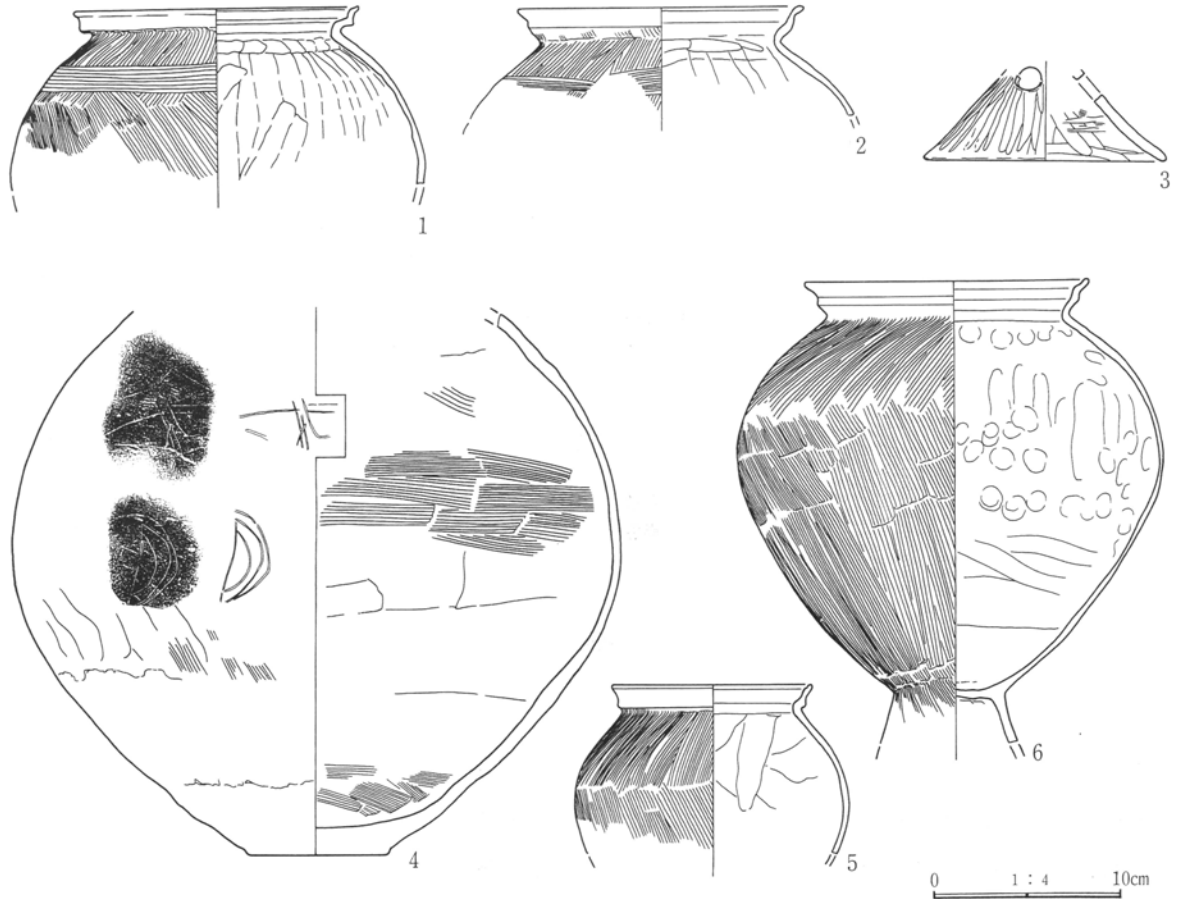
出土遺物 S字甕・底部穿孔壺・結合器台等出土。

重複遺構 上面に古墳II期水田が覆う。

I区12号井戸（第63図 PL.25）

位置 195-105グリッド

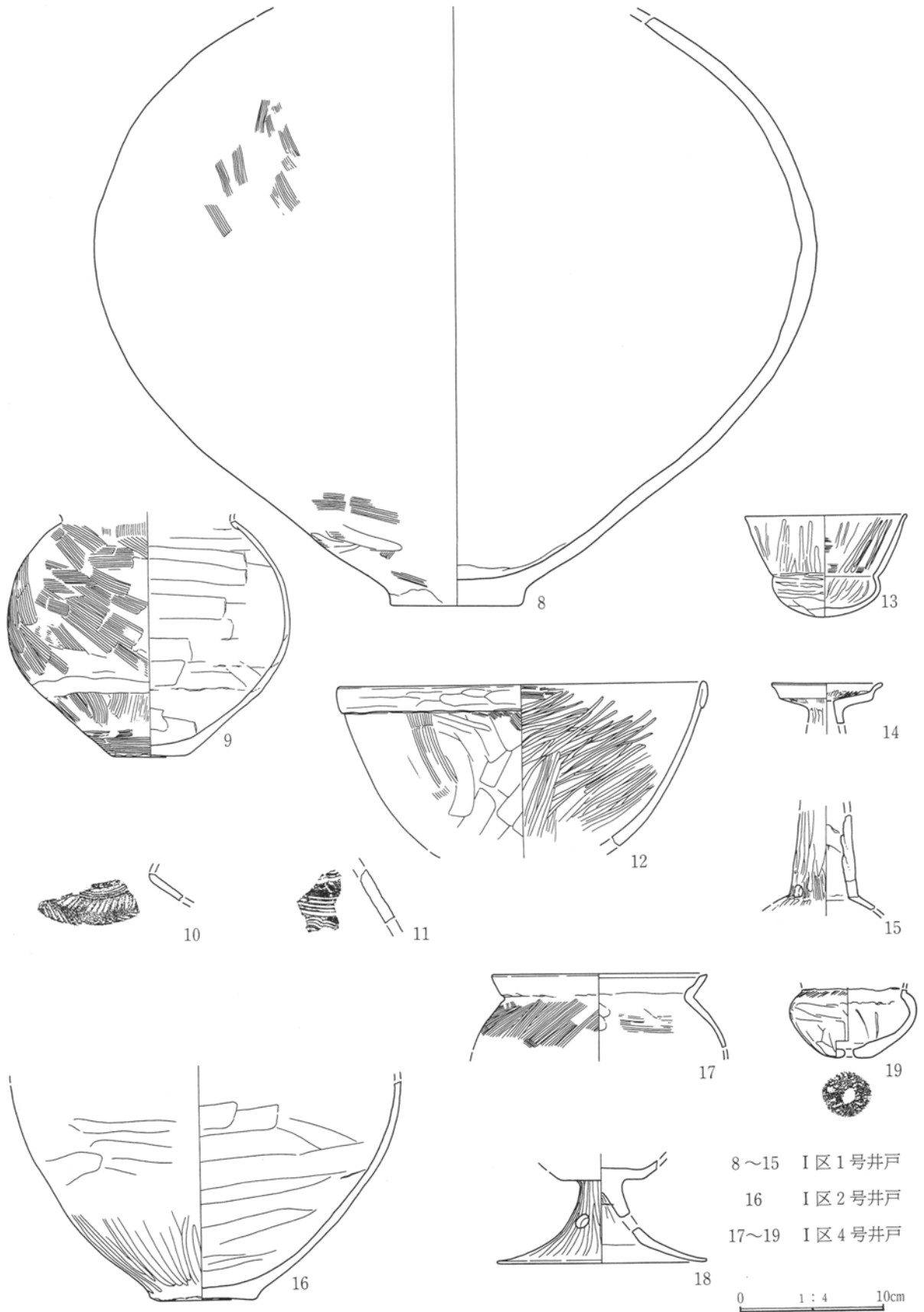
形状 平面は不整形、断面は上部が開く筒状。



1~3 H区1号井戸

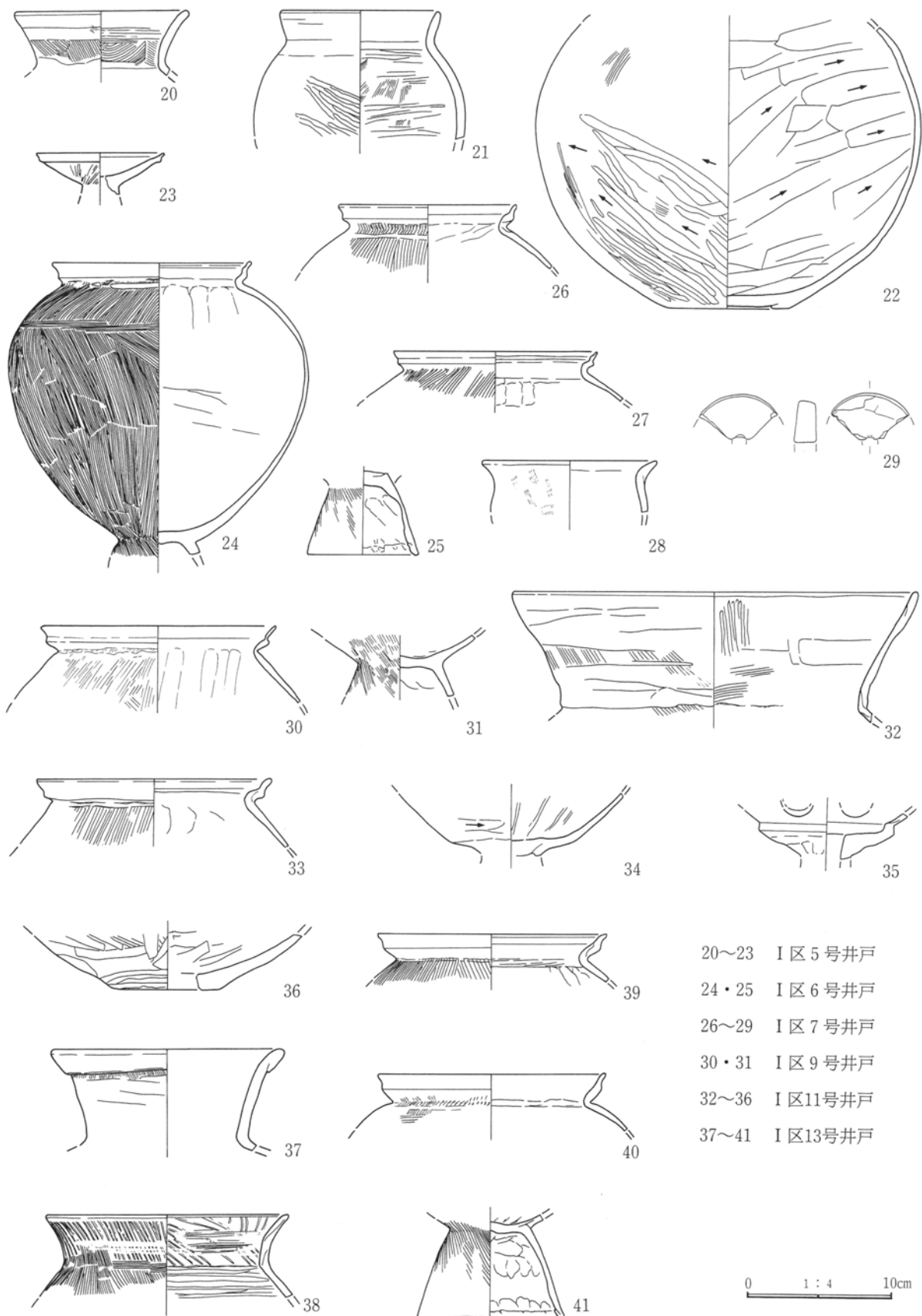
4~7 I区1号井戸

第65図 井戸跡出土遺物 (1)



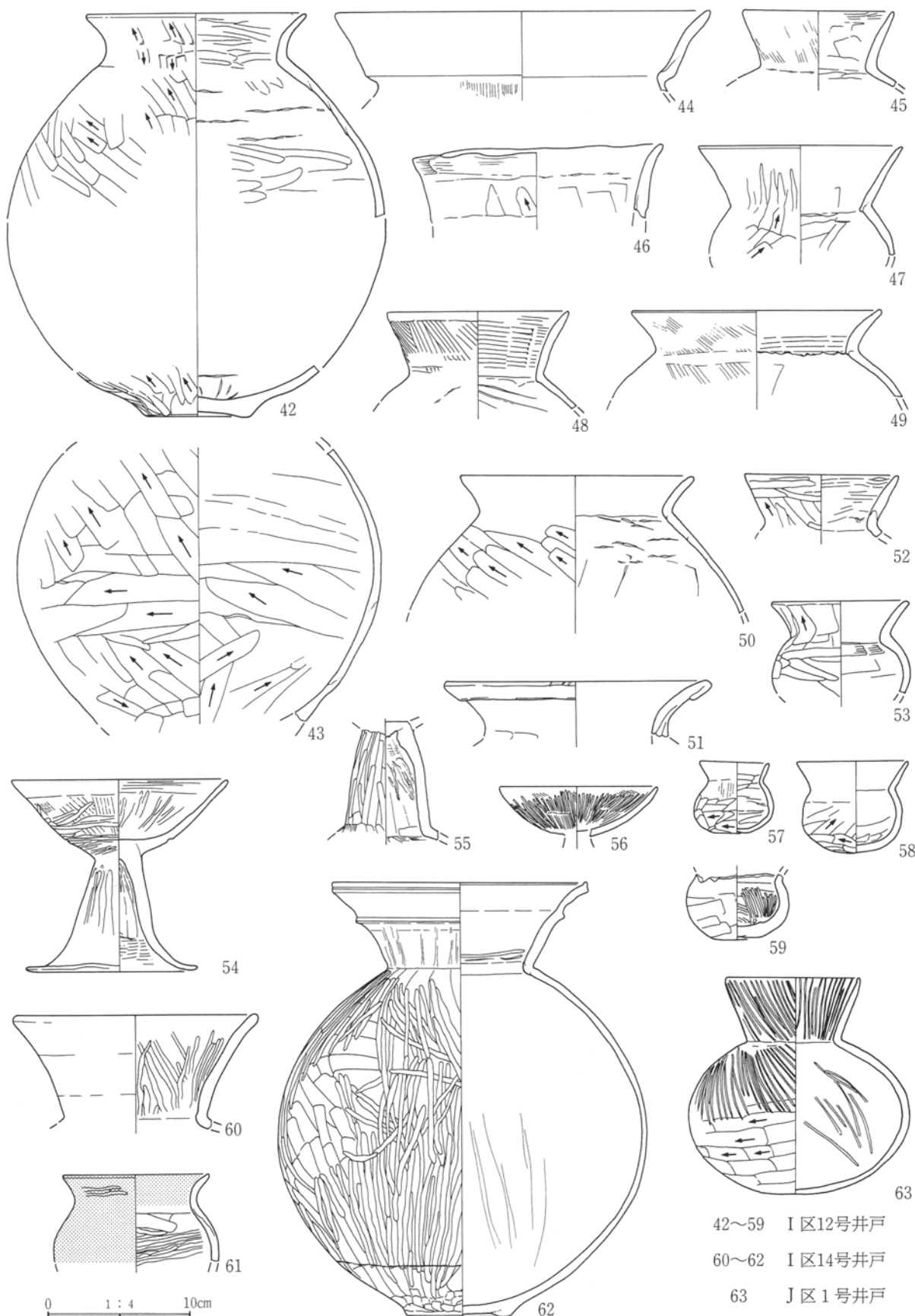
8~15 I区1号井戸
 16 I区2号井戸
 17~19 I区4号井戸

第66図 井戸跡出土遺物(2)



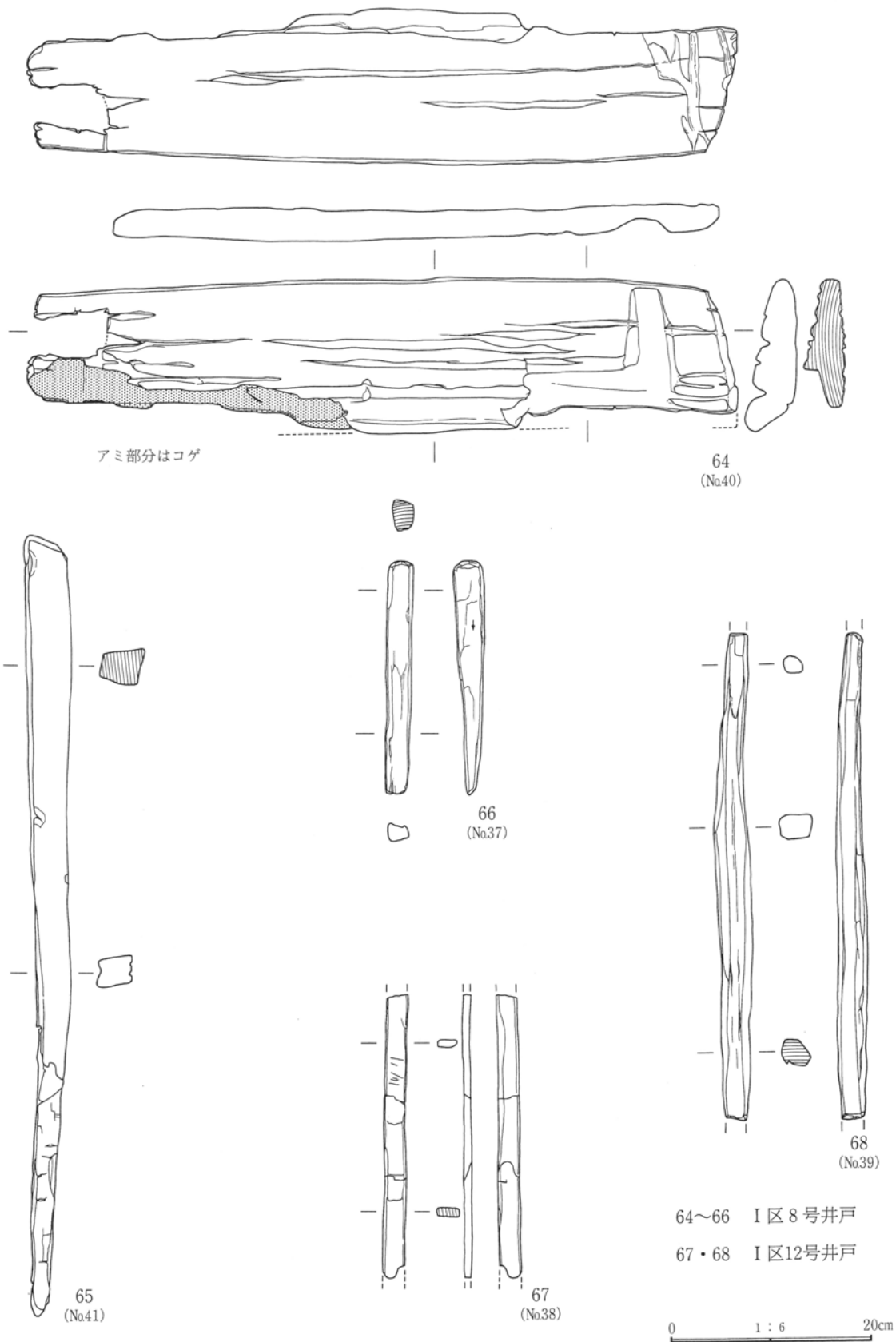
- 20~23 I区5号井戸
- 24・25 I区6号井戸
- 26~29 I区7号井戸
- 30・31 I区9号井戸
- 32~36 I区11号井戸
- 37~41 I区13号井戸

第67図 井戸跡出土遺物(3)



42~59 I区12号井戸
 60~62 I区14号井戸
 63 J区1号井戸

第68図 井戸跡出土遺物(4)



第69図 井戸跡出土遺物（5）木製品

規模 径2.11m、深さ130cm

埋土の特徴 上位はAs-C混黒色土で埋まる。

その他 杭が出土したことから方形の井戸側があったと推測される。

出土遺物 壺・甕・埴・高杯等の古墳前期（4世紀末頃）の土器片がまとめて出土した。

重複遺構 なし。

I区13号井戸（第63図 P.L.25）

位置 185-100グリッド

形状 平面は不整形円形、断面は上部が開く筒状。

規模 径1.31m、深さ110cm

埋土の特徴 上位がAs-C混黒色土で埋まる。

出土遺物 S字甕・壺が出土。 重複遺構 なし。

I区14号井戸（第64図 P.L.25）

位置 195-125グリッド

形状 平面は不整形方形、断面は筒状。

規模 1.47×1.30m、深さ192cm

埋土の特徴 As-C混黒色土で埋まり、下位にはローム粒が多い。

出土遺物 完形の壺と甕・鉢片が出土。

重複遺構 28号溝に切られる。

I区15号井戸（第64図 P.L.25）

位置 170-145グリッド

形状 平面円形、底面方形、断面は上部が開く。

規模 径1.52m、深さ120cm

埋土の特徴 全体にローム塊多い。

その他 湧水で本来の底面は不明瞭、更に深いか。

出土遺物 完形に近い状態のS字甕出土。

重複遺構 なし。

J区1号井戸（第64図 P.L.25）

位置 220-020グリッド

形状 平面は不整形円形、断面は上部が開く筒状。

規模 径1.03m、深さ95cm

埋土の特徴 上位にAs-C混黒色土が堆積。

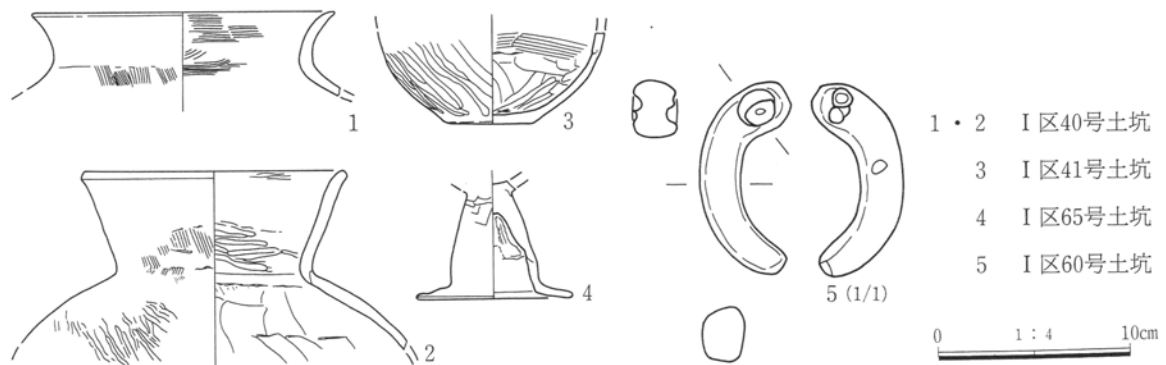
その他 素掘りのままとされる。

出土遺物 完形の直口壺（5世紀代）出土。

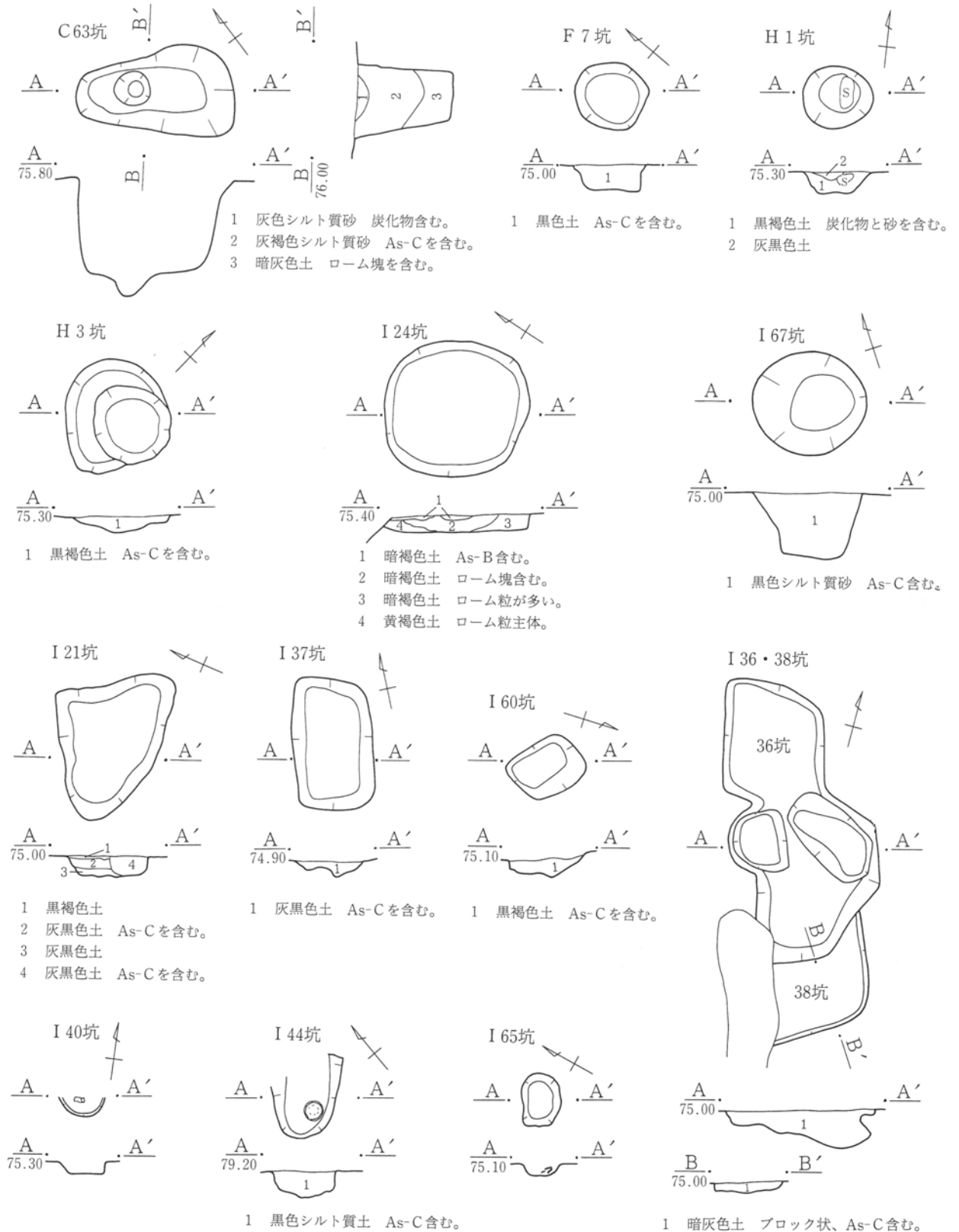
重複遺構 なし。

（5）土坑（第70～72図）

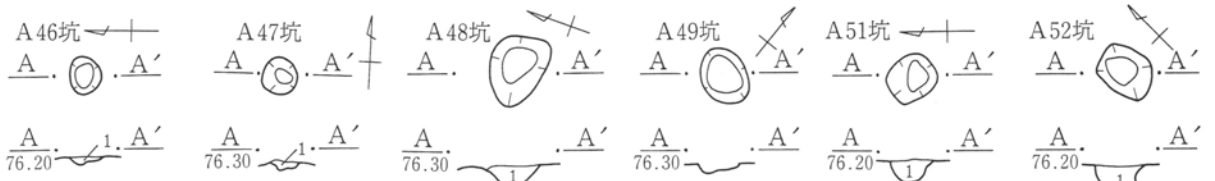
古墳時代に属すると思われる土坑をあげたが、出土遺物がない場合、必ずしも確定できない場合が多い。ここでは、埋土にAs-Cを含んだりHr-FAが堆積したりする土坑も含めた。第71図は出土遺物及び埋土の特徴から古墳前～中期と考えられる。I区の土坑は削平された住居跡の貯蔵穴や井戸の可能性もある。第72図は土坑として登録したが、小規模で浅く、さらに水田検出区域で検出されたことから、古墳時代I・II期水田に伴う耕作痕が多数を占める可能性が高い。計測値等については、第3表に示したので参照されたい。



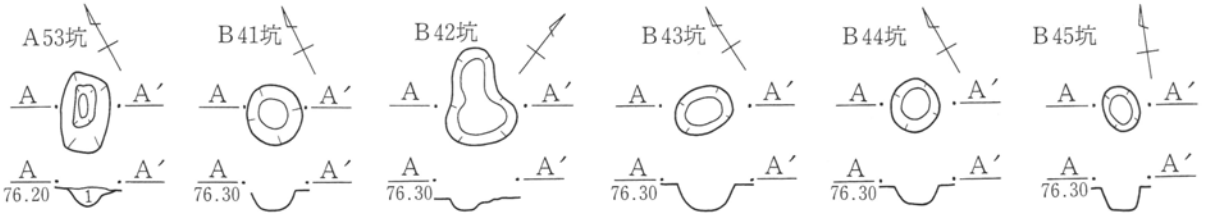
第70図 I区40・44・60・65号土坑出土遺物



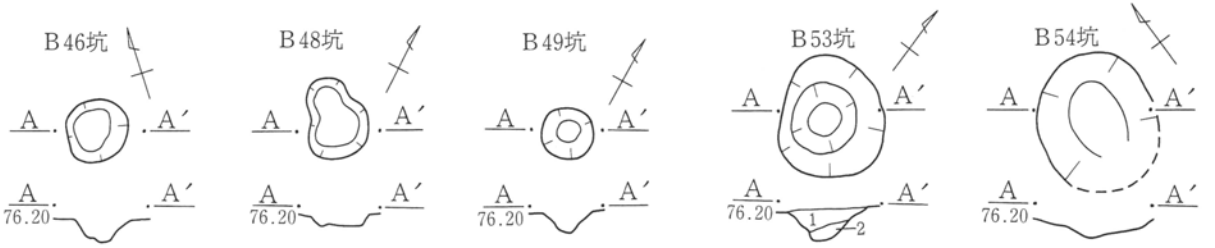
第71図 古墳時代の土坑 (1)



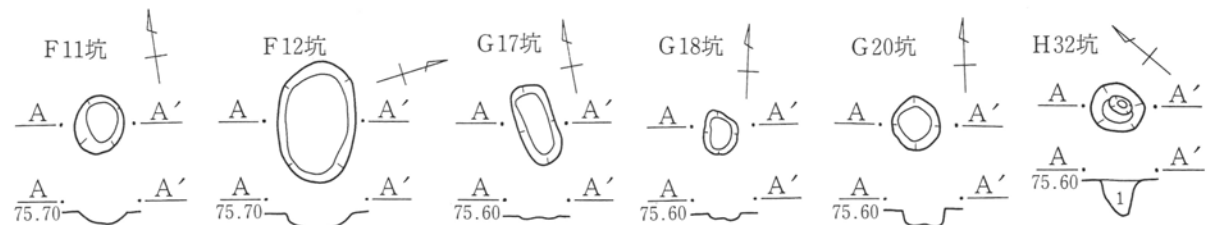
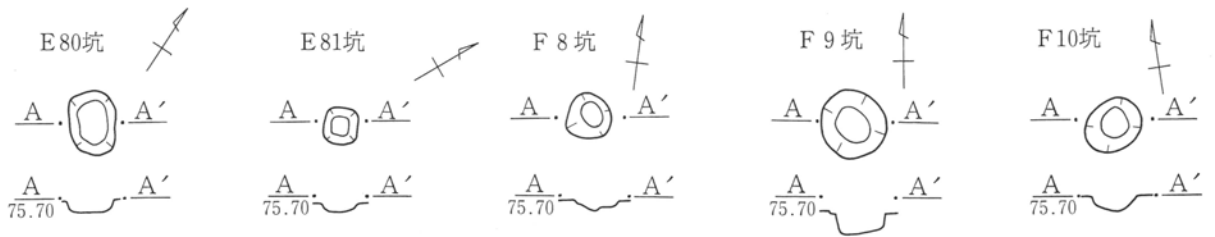
1 灰褐色シルト Hr-FP含む。 1 灰色砂 Hr-FA含む。 1 灰褐色シルト Hr-FP含む。 1 灰色シルト As-Cを含む。



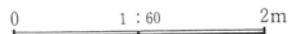
1 灰褐色シルト Hr-FP含む。



1 黒色土
2 灰色シルト As-C多い。



1 黒色土 As-C多い。



第72図 古墳時代の土坑 (2)

第3表 古墳時代の土坑一覧

遺構番号	グリッド	平面形	長軸×短軸 深(深)	出土遺物	備考
C-63号土坑	065-785	長方形	1.65×0.75・1.22		
F-7号土坑	135-445	円形	0.76×0.70・0.28		
H-1号土坑	155-240	円形	0.75×0.65・0.22		
H-3号土坑	145-245	不定形	1.2×1.1・0.16		
I-24号土坑	205-195・200	円形	1.5×1.42・0.15		古代の可能性
I-67号土坑	170-170	円形	1.18×1.08・0.7		井戸か
I-21号土坑	190-120	不定形	1.4×1.0・0.2		
I-37号土坑	210-120	長方形	1.35×0.84・0.17		
I-36号土坑	200-120	不定形	2.9×1.55・0.40		25溝の続きか
I-38号土坑	200-120	—	— × — ・0.11		
I-40号土坑	210-185	(円形)	— × — ・0.13	壺、甕	
I-44号土坑	190・195-145	(橢円形)	— ×0.65・0.27	小型壺	
I-60号土坑	170-125	長方形	0.74×0.59・0.24	勾玉	
I-65号土坑	165-115・120	橢円形	0.55×0.4・0.13	高杯	貯蔵穴か
A-46号土坑	950-010	橢円形	0.32×0.25・0.07		古代か
A-47号土坑	025-960	円形	0.3×0.3・0.08		古代か
A-48号土坑	035-950	橢円形	0.56×0.45・0.18		
A-49号土坑	040-950	橢円形	0.5×0.36・0.07		
A-51号土坑	025-955	橢円形	0.4×0.35・0.18		古代か
A-52号土坑	030-945	橢円形	0.45×0.35・0.22		
A-53号土坑	035-955	長方形	0.6×0.4・0.15		古代か
B-41号土坑	025-885	円形	0.45×0.45・0.15		
B-42号土坑	035-895	不定形	0.78×0.56・0.1		
B-43号土坑	055-845	橢円形	0.48×0.36・0.22		
B-44号土坑	055-845	円形	0.4×0.4・0.15		
B-45号土坑	060-860	橢円形	0.36×0.28・0.18		
B-46号土坑	010-895	円形	0.5×0.5・0.16		
B-48号土坑	020-910	不定形	0.65×0.53・0.08		
B-49号土坑	015-910	円形	0.4×0.4・0.17		
B-53号土坑	015-895	不定形	0.96×0.85・0.25		
B-54号土坑	010-895	(橢円形)	(1.1)×0.94・0.14		
C-61号土坑	065-780	円形	0.45×0.42・0.1		
C-62号土坑	065-785	円形	0.45×0.45・0.17		
E-77号土坑	115-535	円形	0.35×0.32・0.15		
E-78号土坑	120-540	長方形	0.44×0.3・0.06		
E-79号土坑	120-540	橢円形	0.33×0.28・0.1		
E-80号土坑	120-545	長方形	0.52×0.37・0.1		
E-81号土坑	115-540	方形	0.3×0.27・0.07		
F-8号土坑	135-445	円形	0.4×0.36・0.08		
F-9号土坑	135-460	円形	0.55×0.53・0.18		
F-10号土坑	140-500	橢円形	0.48×0.4・0.12		
F-11号土坑	140-505	橢円形	0.45×0.4・0.1		
F-12号土坑	145-510	橢円形	0.95×0.65・0.12		
G-17号土坑	120・125-395	長方形	0.65×0.3・0.04		
G-18号土坑	120-395	橢円形	0.35×0.27・0.06		
G-20号土坑	125-400	円形	0.4×0.4・0.15		
H-32号土坑	190-220	円形	0.42×0.4・0.28		柱穴か

(6) 水田跡

古墳時代に属する水田跡は西からB区・C区・D区・E区・G区・I区で確認された。検出された水田跡は4～5世紀代に造営された水田畦畔の基底部、6世紀初頭の噴火で降下堆積したと推定される榛名山二ツ岳テフラHr-FAに覆われた水田面である。前者は、3世紀末頃の浅間山噴火により降下堆積したテフラAs-Cがその後の水田耕作によって攪拌され、その際に畦基底部には耕作が及ばないため耕土下の地山が残ることがある。それを利用して耕土であるAs-C混土と畦基底部のAs-Cを含まない地山を識別して畦畔による水田区画を検出した。従って、これは広義の「疑似畦畔」であり、本来の水田面でないことは断っておく。またその造営時期についても、As-C降下時～Hr-FA降下時のいずれかに当たり、ここでは4～5世紀と位置付けた。ただし、Hr-FA堆積が極めて薄かったり、なかったりする地域や地点では6世紀以降の水田耕土であることもあり得る。後者はテフラHr-FAに覆われた6世紀初頭の水田面であるが、その耕土はAs-C混土であった可能性が高く、前者との区別が定かでない場合も多い。このように両者を異なる時期のものとして識別するのは容易でないが、畦畔による水田区画のあり方やHr-FA直下水田の畦基底部を調査することで、両者を対比し分別することは必ずしも不可能ではない。後述するように、本遺跡でのHr-FA直下水田は方眼状の極小区画であり、大区画の基準となる大畦以外は畦基底部にほとんど痕跡を残さない。一方、As-C混土の耕土と畦基底部の違いから検出された水田区画は、前者よりはやや規模の大きい小区画で方眼状に並ばないとの所見がある。以上の差異をもって、古墳時代に2段階の水田遺構の存在を認定した。

本遺跡で検出された古墳時代水田跡の分布と検出状況の全容は第73図に示した。ここでその概要を記すこととし、各区における個別の水田跡及び水路については後述する。

古墳時代I期水田跡

As-C混土を耕土とする4～5世紀と推定される水田跡を「古墳時代I期水田跡」と呼ぶ。これはE区で良好な状態で遺存する。更にC・D・G区においても、部分的ながら同期の水田跡を検出した。主幹水路と目されるのはA区9号溝・B区河川跡、G区6号溝(第31図参照)である。自然河川を除いていずれもAs-C混土で埋没しており、As-C堆積後～Hr-FA堆積時のある段階に機能していたことは明らかである。これらの水路は調査区の東西端に存する微高地を画しており、水田跡がその中間の平坦地に検出されていることは、この水田跡を灌漑する主水路としての役割を果たしたと考えても良からう。また、B区からG区にまたがるその中間地域で検出された数条の溝は、おおよそ100m間隔で北西から南東に方向を同じくして走っており、水田内を灌漑するための支水路と考えられる。この場合、古墳時代I期水田跡の範囲は、東西約580mと推定される。東西端の主水路を越えた水田が存在したとしても、地形的制限からその範囲に大差はないものと推測される。なお、主水路と考えられるG区6号溝より東側のH・I区ではほぼ同時期の集落が検出されており、その点からもこの水路付近を境に居住域と水田が分かれていたことが明白である。そして居住域の東側には河川跡(現藤川の旧流路と思われる)が存在して地形的には分断される。以上のとおり、I期水田跡は東西に主幹となる灌漑水路を配し、その間の600m弱の範囲を水田として営んでいたと結論づけられる。これがこの地点における水田の景観単位だったと考えて良からう。

なお、周辺地形の等高線は、北西から南東に向かって緩傾斜(平均0.5%)しており、自然河川や水路の走向もこれに沿って南東流している。水田区画の軸方向の傾きは、この地形にあわせた造成を行ったためと考えられる。

G区6号溝は、後述するように検出面での上端幅が4mを越える比較的大きな水路である。注目すべきは、本遺跡から更に南東へ約2km下った玉村町砂

町遺跡でも同様の溝が確認されたことである。これは、規模・走向・埋没土・出土遺物ともに共通しており、地形に沿ったほぼ延長上に位置することから、同一水路の可能性が高いと考えている。これが首肯されれば、同一水系で灌漑された水田範囲が、少なくとも南北2 km以上にわたって営まれたことは間違いないだろう。

古墳時代II期水田跡

Hr-FAに覆われた水田跡を「古墳時代II期水田跡」と呼ぶ。当地域はHr-FAの一次堆積層が非常に薄く、くぼ地以外ではほとんど見られなかった。標高のやや高い大部分はその後の水田耕作で削平された可能性が高い。従って、水田跡の検出もB・E・I区のわずかな部分でしかない。B区では南北に延びる大畦と極小区画の一部、E区の南西端では方眼状の極小区画、I区東端では埋没谷を利用した曲線的な小区画が見られた。この段階では、I期水田跡に伴う東西端の主水路が埋没していたらしく、B区の大畦は埋没した河川跡の上を交差して築かれている。またG区の主水路（6号溝）をこえて更に50mほど東方に南東流する水路が見られることは、I期水田跡の段階よりもその範囲が拡大したことが明らかである。東西幅は間違いなく700mを越えるだろう。I期段階に見られたH・I区の集落はこの段階には継続していないことから、水田の拡大に伴って、居住域を別の地点に移したことがうかがえる。ただし調査区東端のJ区で検出された河川跡から6世紀段階の土器が出土することから、近隣地点に存在したことは予想しても良からう。

II期水田跡の区画軸方向は、I期と同じくやや北西に傾く。これは、I期に見られた地形的制約からくる水路方向をそのまま踏襲したためと考えられよう。東西南北を基軸とする整然とした水田の出現は、8世紀以降の新たな造成まで待つことになる。

A区水路跡（第74～79図 P L.29～31）

調査区西端のA区では水田畦畔は検出されなかつ

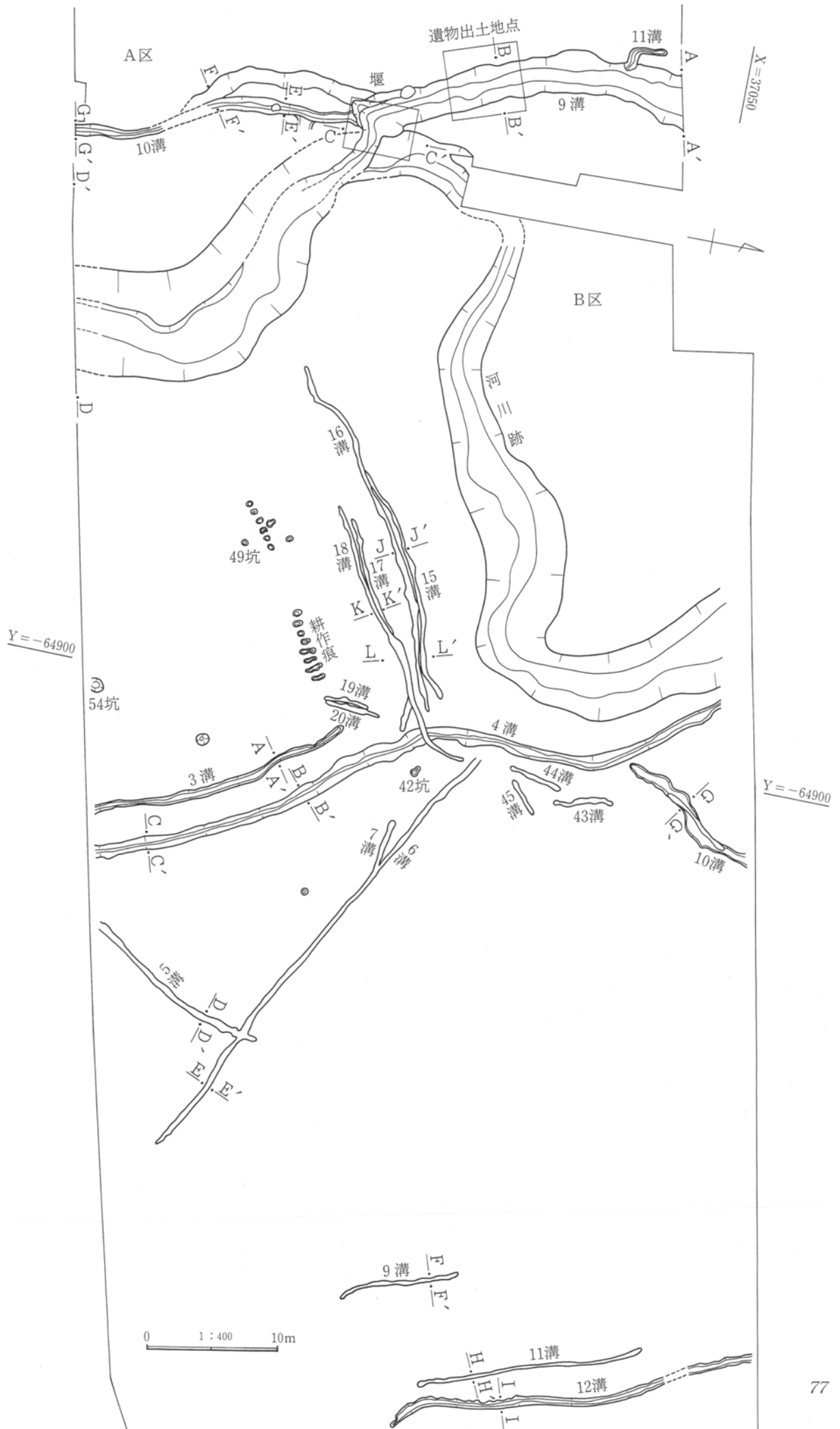
たが、I期水田跡に伴う灌漑用水路とみられる**9号溝**が検出された。北から南に弱く湾曲して延び、蛇行するB区河川跡に合流する。規模は幅3.0m前後、深さは60～70cm。北端から河川跡との合流点までの底面比高25cmで傾斜する。断面形は「逆台形」状で、底面が幅30cm前後の平坦面となっている。埋土は下層にAs-C混土、中～上層に黒色粘質土、その上をHr-FAが覆っている。Hr-FAは若干くぼんだ堆積状況を示しているが、層厚は一定で溝外部分と変わらないことから、堆積時にはすでに9号溝は完全に埋没していたことが推測される。くぼんでいるのは後世の土圧によるものだろう。また一部でAs-C一次堆積層を切っている部分が確認されたことから、9号溝は、4世紀以降に掘削され5世紀後半ころには埋没が進んで機能していなかったと考えられる。

河川跡との合流地点では**堰**が検出された（第74・75図）。ここでは約20～30cmの幅で杭列が打ち込まれていた。杭は矢板と丸太杭が用いられ、深いもので40cmまで打ち込まれている。また横木と思われる角材も見られる。これらは合流点北側に集中しており、洪水層に埋もれて杭頭部も遺存していた。一方溝中央部付近の杭は頭部が欠損し、底面からわずかに突出する状態であった。このことから、洪水層埋積以前に杭列と横木で堰が構築されていたが、洪水後には修復せずそのまま解放していたとの類推も可能である。この堰の位置から南方に延びる10号溝は幅1.0～0.8m、深さ30～20cmで、9号溝から分水した支水路と考えられる。埋土には洪水層と思われるシルトが堆積しており、As-C混土が見られないことから、堰を埋没させた洪水によって埋没、廃棄した可能性が考えられる。さらに同位置から10号溝西側にそって断面皿状の浅い溝が検出されたが、砂質土が堆積し法面や底面が不整なため、人為的な掘削溝ではなくオーバーフローした水流によってくぼんだ溝と推測される。

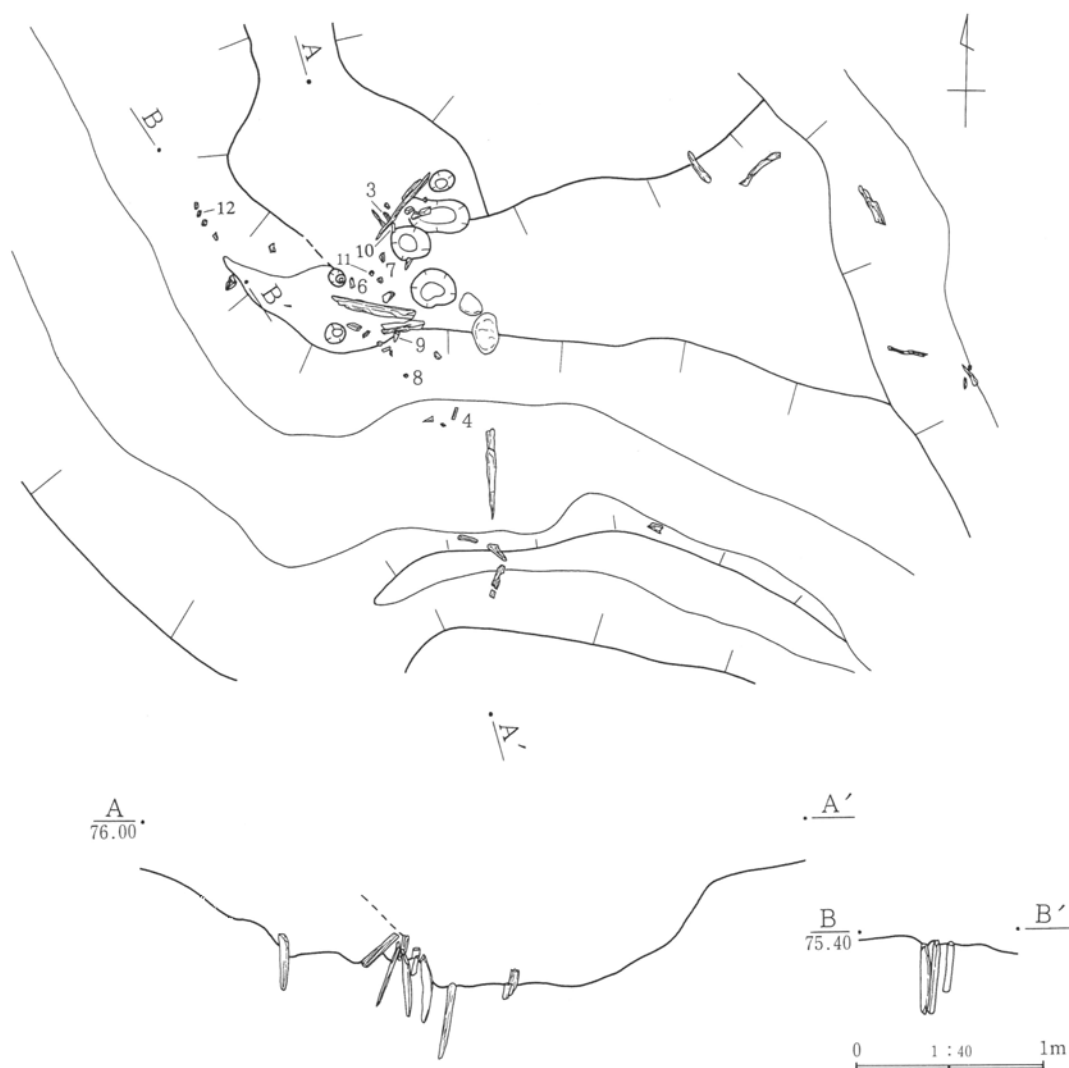
9号溝の北部付近で西側から「L」字状に屈曲して合流する**11号溝**は、西側からの排水として機能したのだろうか。



第73図 古墳時代の水田跡の分布図 S = 1 : 2500



第74図 A・B区古墳時代のI期水田跡に伴う水路



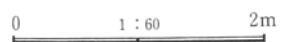
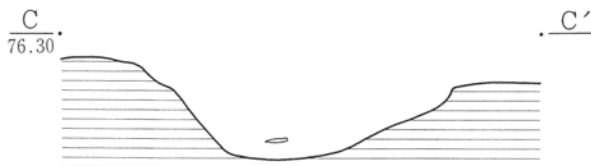
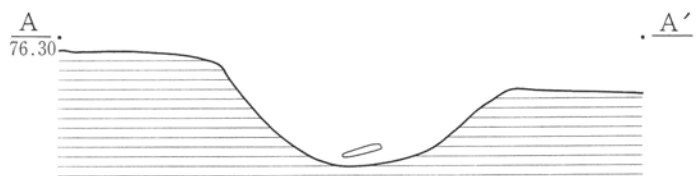
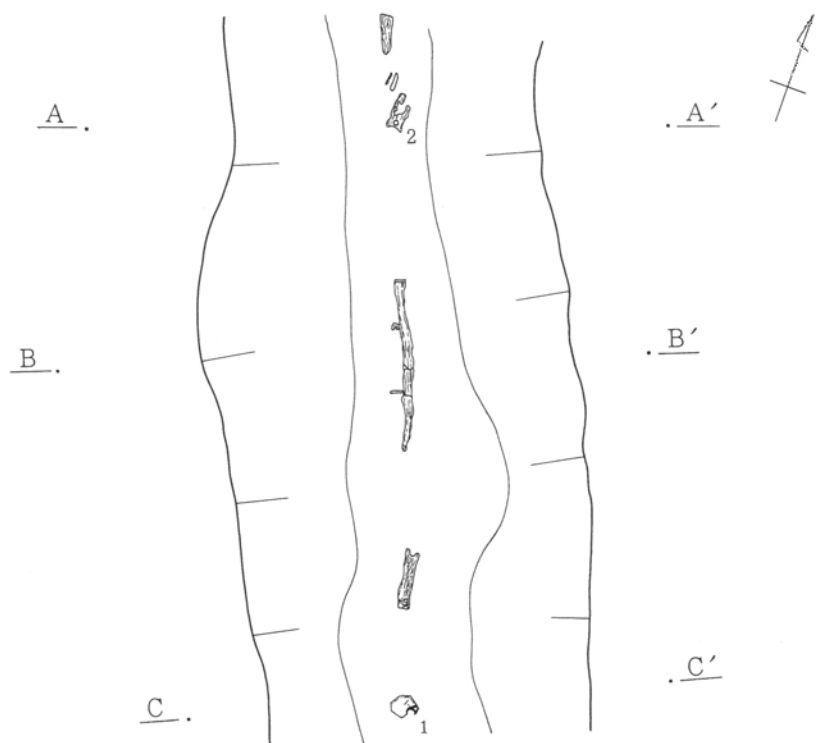
第75図 A区9号溝の堰遺構

9号溝からの出土遺物は、古墳時代前期土器片と木製品である。いずれも底面から埋土下層にかけて出土しており、本溝に伴うものと考えて間違いない。木製品は鋏(第78図2)・横鋏(第78図1)の他に長さ130cm大の割材も見られる(第76図)。これらは水流方向に沿って検出されたことから、上流から流下してきたと考えられる。なお、堰から1~0.5m上流側の左岸法面で6本の杭列が確認された。このうち4本は溝走向と平行に密集して打ち込まれている(第75図セクションA-A')。堰付近の護岸用と考えていいだろう。

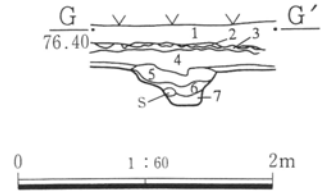
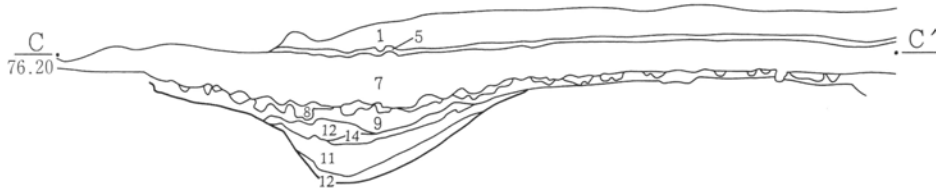
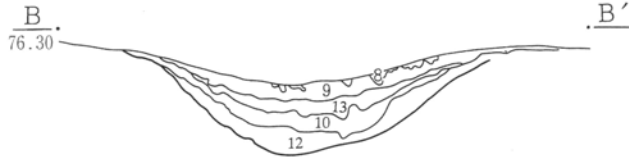
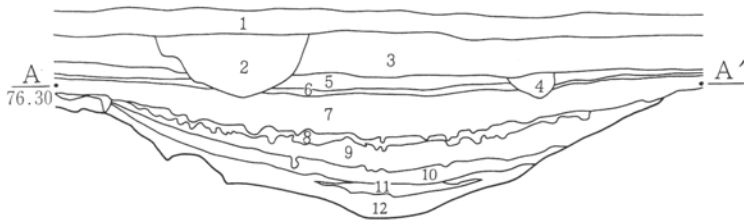
9号溝が合流するB区河川跡は、前述したように古墳時代以前に形成され、As-C堆積時には少なく

とも30~40cmの厚さで下層土が堆積していたことが土層断面から明らかである(第14図)。そして検出面から約70cm下位にAs-Cの一次堆積層がみられるが、その後に堆積したAs-C混土や更に上を覆うHr-FA層が、後世の土圧による陥没で30cm前後くぼんでしまった可能性が高いことから、As-C堆積時の河川跡の深さはさらに浅かったと考えられる。河川跡南壁に見られるAs-C混土の堆積する深い溝断面は、この河川跡を切って掘りこまれた9号溝であった可能性が高い。

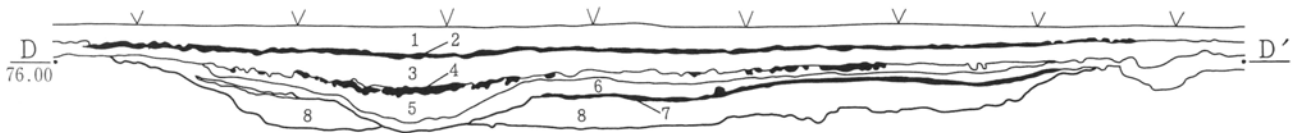
また、9号溝埋没後に掘削され、II期水田跡に伴うと思われるのが8号溝である。これは北から蛇行して南東方向に走る溝で、上幅40~80cm、深さは18



第76图 A区9号溝遺物出土状况

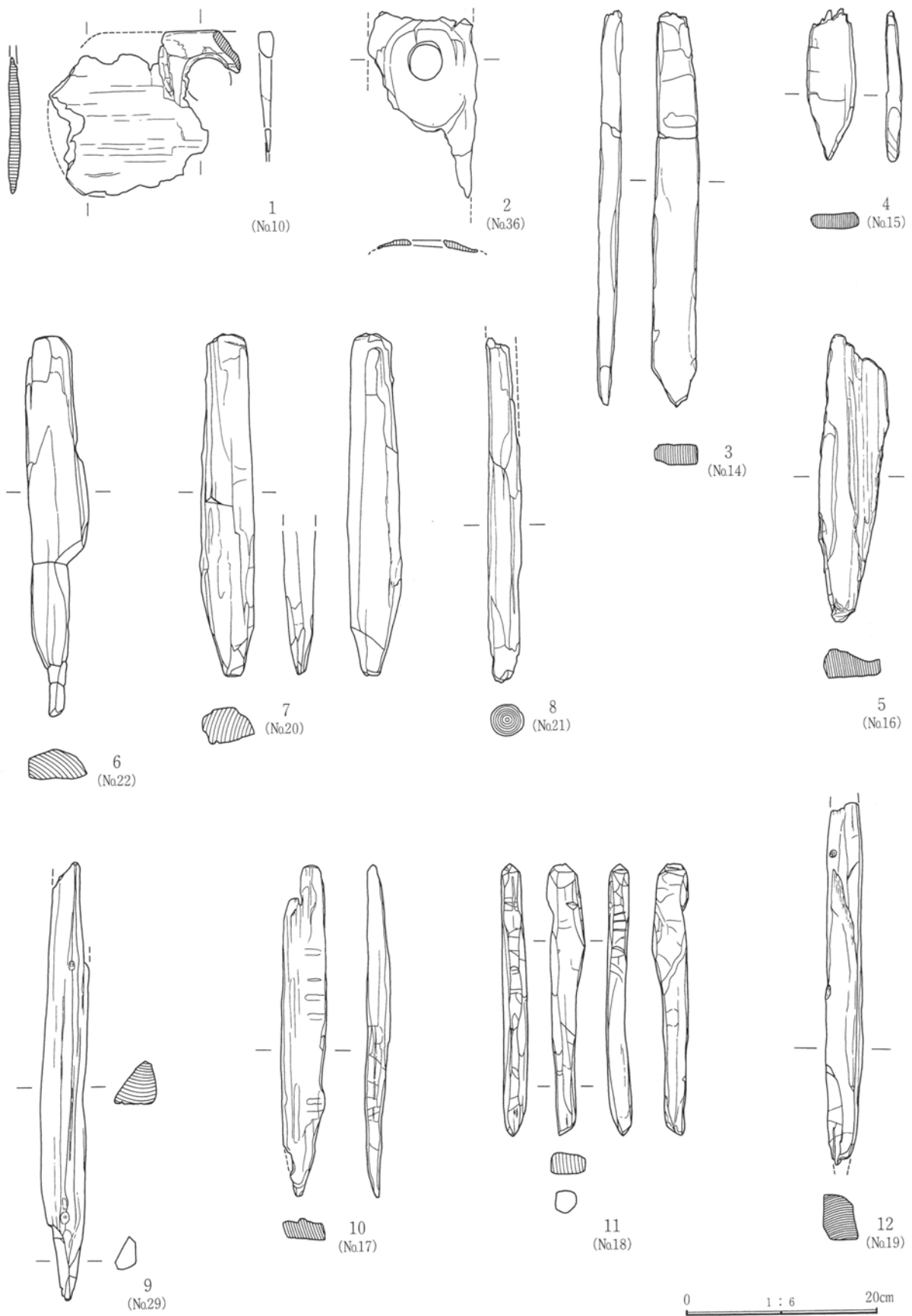


- 1 暗灰褐色土 現水田耕土。
- 2 As-B一次堆積層（1108年降下）。
- 3 黒色シルト質土 As-B直下水田耕土表層。
- 4 灰色シルト As-B直下水田耕土下層。
- 5 褐色土 粘性強く、As-Cを少量含む。
- 6 黒褐色土
- 7 黄灰色砂
- 8 黒色砂 As-Cを多く含む。
- 9 黒色粘質土 パミスを含まない。



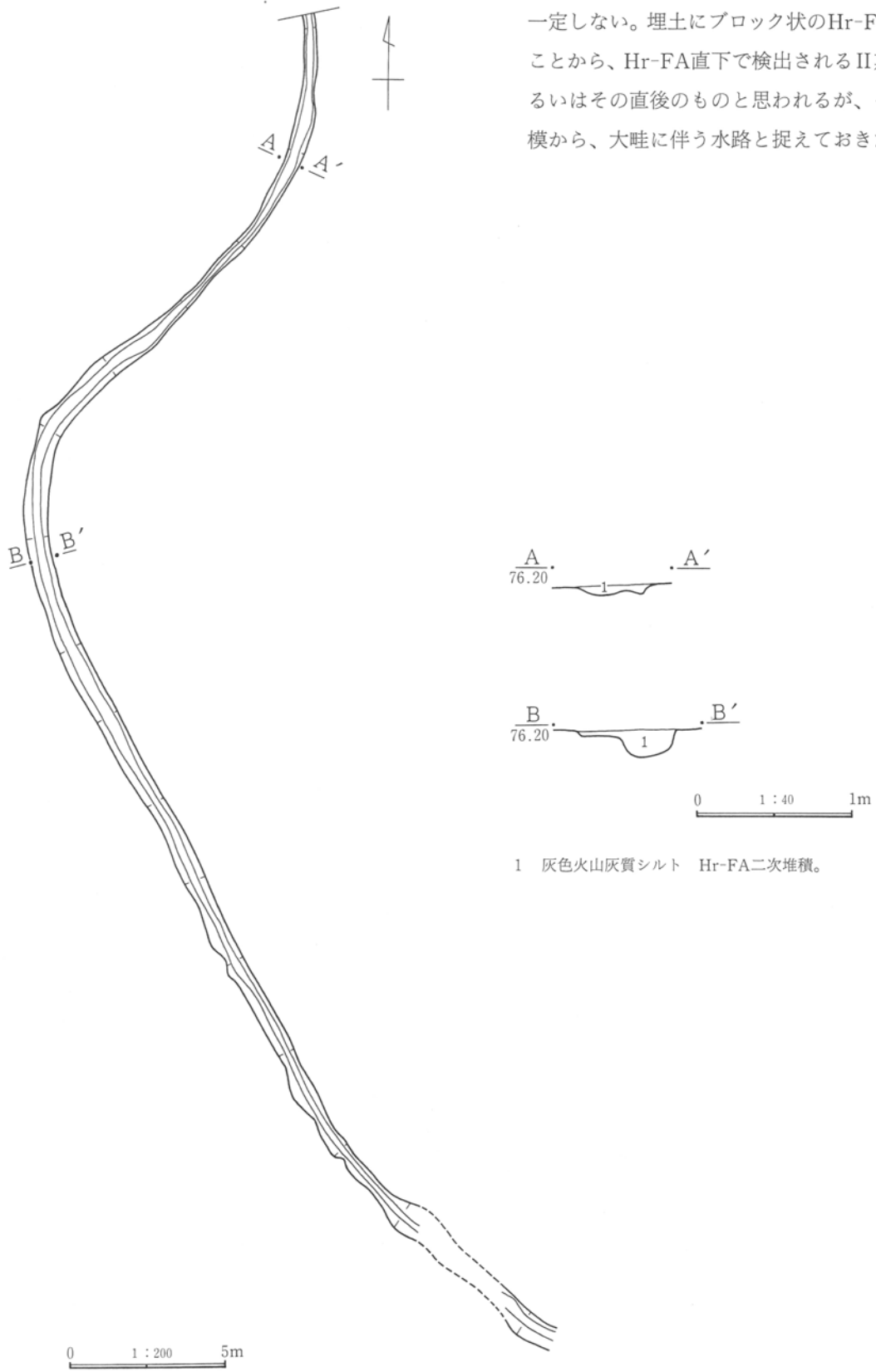
- 1 暗灰褐色土 現水田耕土。下にAs-Bが多く含まれる。
- 2 黒色シルト質粘土 As-B直下水田耕土表層に担当。
- 3 灰色シルト As-B直下水田耕土下層。
- 4 黄灰色火山灰 Hr-FAのブロック状堆積層。
- 5 黒色粘質土 植物遺体を含む。
- 6 暗灰色砂質土 As-Cを含む。
- 7 As-C一次堆積層
- 8 灰色シルト ラミナ発達し、粗砂、円礫を含む。河川跡下層堆積物。

第77図 A区9・10号溝土層断面



第78図 A区9号溝出土木製品

～5 cmを測る。断面は逆台形や皿状であったりして一定しない。埋土にブロック状のHr-FAが見られることから、Hr-FA直下で検出されるII期水田跡かあるいはその直後のものと思われるが、その形状と規模から、大畦に伴う水路と捉えておきたい。

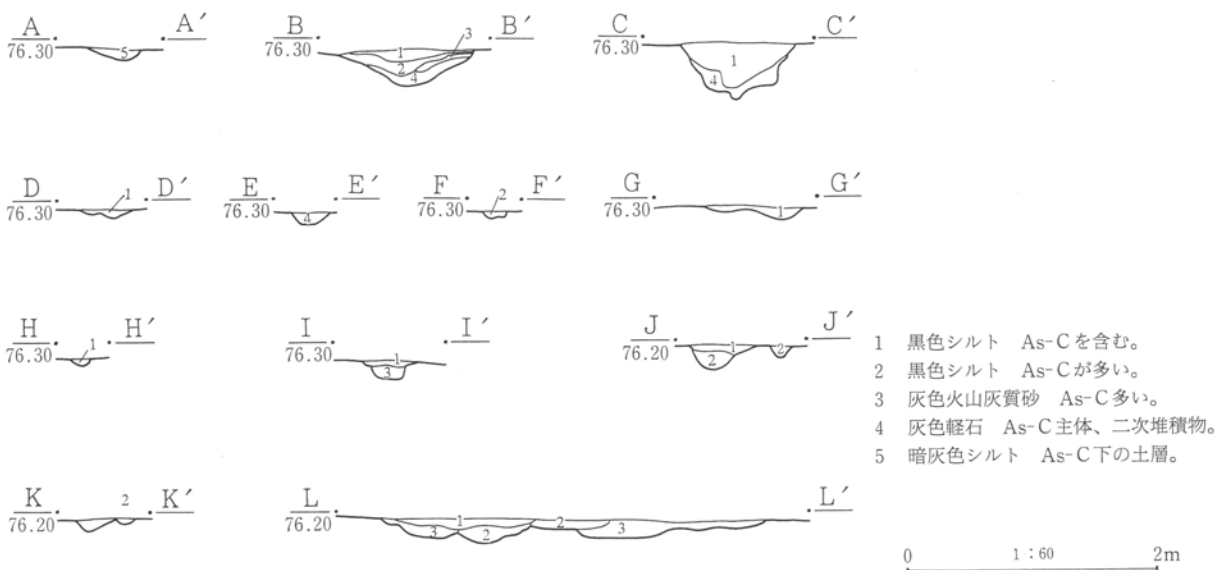


第79図 A区8号溝

B区水路跡 (第74・80図 P.L.32)

B区で検出された河川跡は大きく蛇行し、前述のようにAs-C堆積時には深さ40~50cmであったろうと推測される。この左岸に沿って3号・4号・15~18号溝が走る。これらは、As-C混土が埋積していることから、I期水田跡に伴う水路の可能性が高い。このうち、**4号溝**は河川跡が西へ大きく屈曲する地点で併走をやめ、そのまま南方に直線的に流れる。4号溝の規模は上幅で1.5~0.8m、深さ50cm前後を測る。4号溝の南流部分に併行して西側を走る**3号溝**は、上幅0.7~0.4m、深さ10cm前後と規模が小さい。3号・4号溝の間隔は、検出面で約2mを測る。おそらく、4号溝と河川跡及び3号溝との間に大畦が存在したのは間違いなからう。この場合、4号溝は河川跡から取水した灌漑用水路であり、3号溝は大畦と河川跡に挟まれた幅約30m間にあったであろう水田区画に関連した畦脇の小水路と考えられる。**10号溝**はB区中央北辺から南西に向かって延び、4号溝との交差直前で止まる。この位置関係や、深さは10cm前後と浅いが幅広いことから、これも大畦に伴う水路との見方ができよう。**15~18号溝**は、河川跡の西流部分の南側に平行して走る。これらは、4号溝から分岐し大畦西側の水田区画に配水するため

の水路と考えたい。ただし、18号溝が4号溝を切つて掘削されていることから、両者には時間差があったことは明らかである。とはいえ、後述するII期水田跡の畦や水路が全く異なる方向に築かれて交差することから、それ以前のものであることは間違いなく、あくまでもI期水田跡経営段階における時間差と捉えられる。また、大畦と15~18号溝に囲まれた範囲に、ピット状の耕作痕が東西に並んで検出された。これは、水田造成時ないしは荒起こしの段階で残された耕具掘削痕と思われる。この耕作痕が、南北方向にやや延びることから、やや間隔を空けて南方向に向かって耕作作業を行ったと考えられようか。4号溝の東側には直線的に南東へ延びる6号溝とこれに直交する5号溝がある。更に、B区東半では南北に平行して走る9号・11号・12号溝が見られる。**5号・6号溝**は水田の小区画に関連し、**11号・12号溝**は3号・4号溝と同じく、南北に走る大畦の側水路と考えられよう。以上のことから、B区II期水田跡は、3-4号溝間と11-12号溝間の大畦及び河川跡で大きく東西に区画(大畦間は45mを測る)、10号溝が伴う大畦で南北に区画され、内部を約N-60°-Wを軸とした小区画によって区切られていたと推測される。



第80図 B区古墳時代I期水田跡に伴う水路土層断面

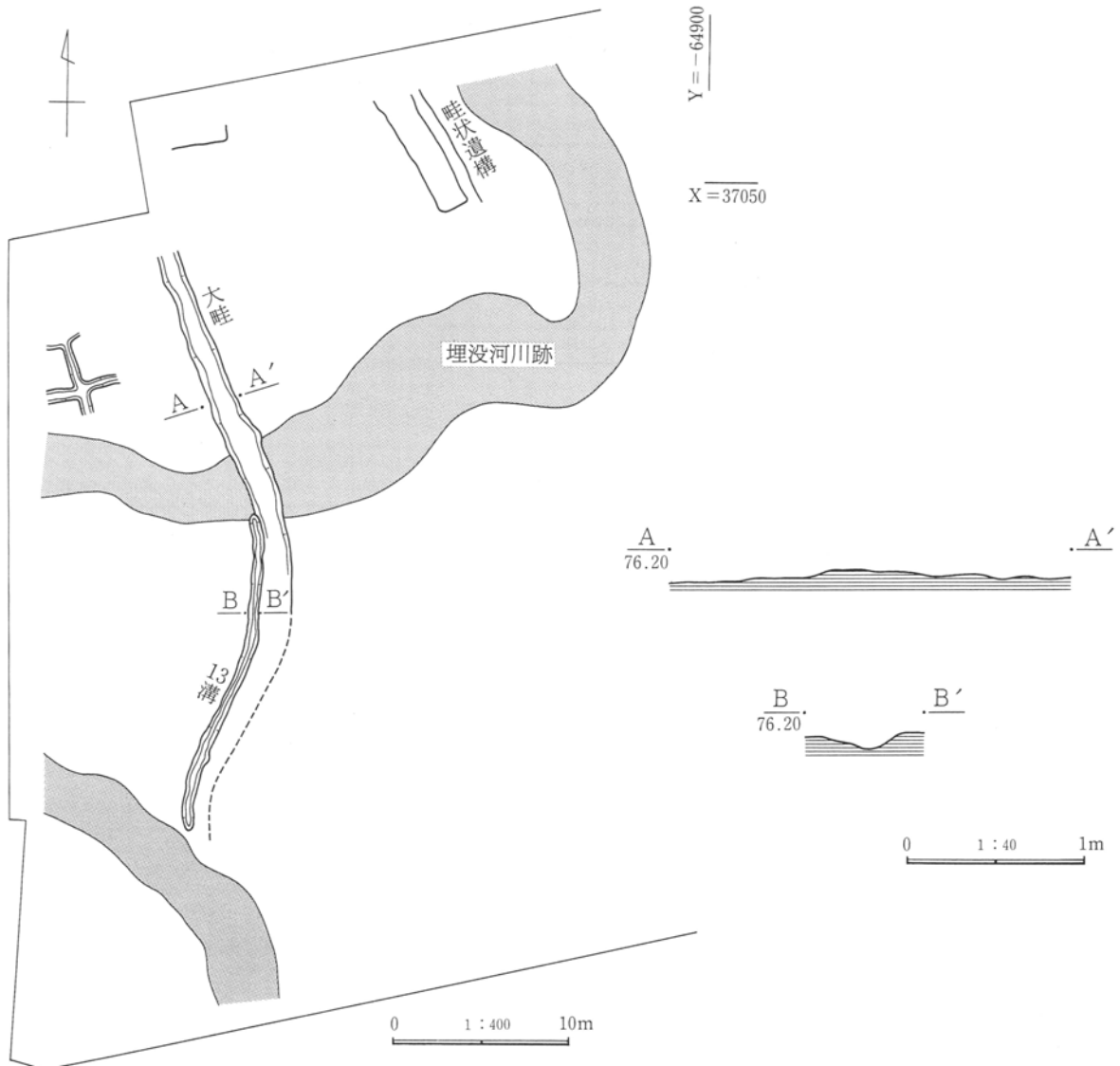
B区水田跡 (第81図)

B区西半部で、古墳時代II期水田跡に相当する大畦と極小区画の一部が検出された。大畦は湾曲して南北方向に走っており、走向はN-20°-WからN-25°-Eに変わる。幅は下端で2~1m、上端で1.5~0.6mを測る。高さは10cm前後だが、後の耕作によって削平されている。大畦の中央部から南半で、西側に沿って浅い溝が付随する。これは、平均幅50cm、深さ10cmほどを測り、その規模から大畦にそって各区画に配水及び区画から排水するための溝であろう。ただし、部分的にしか見られないことや、しっ

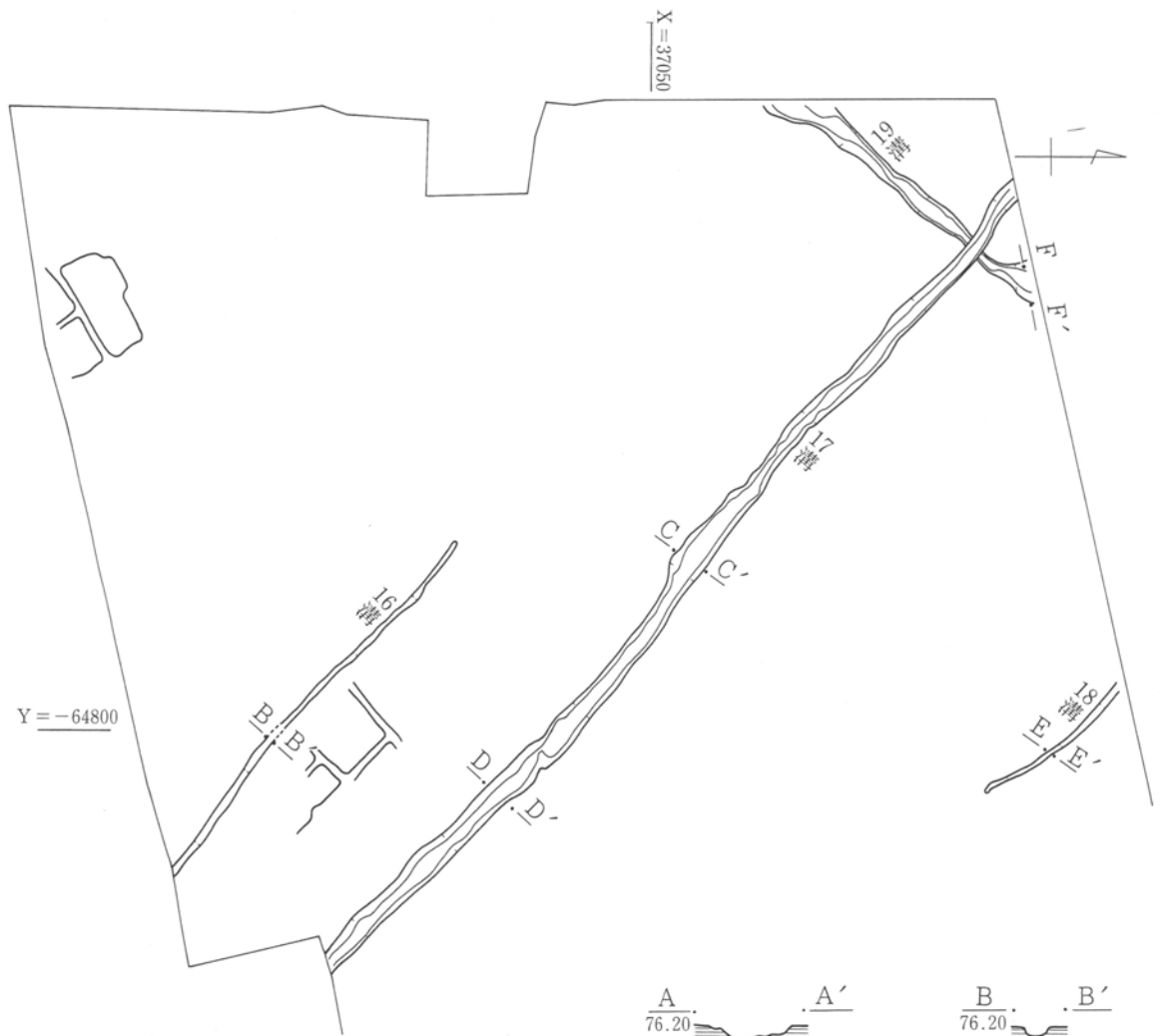
かりした掘りこみの形状を呈していないことから、当初から設計されたものでなく、水流をコントロールするため便宜的に設けられた可能性もある。水田区画は大畦の西側で4区画相当分が検出された。これは南北長2.5mほどの極小区画といえるもので、検出部分で見ると方眼状を呈している。なお、本水田跡は調査時点で10cmほどのくぼ地となっていた河川跡の上に造成されており、当時この河川はすでに埋没して平坦になっていたことが明らかである。

C区水田跡 (第82図 P L.34)

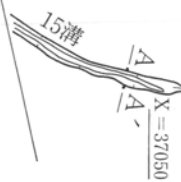
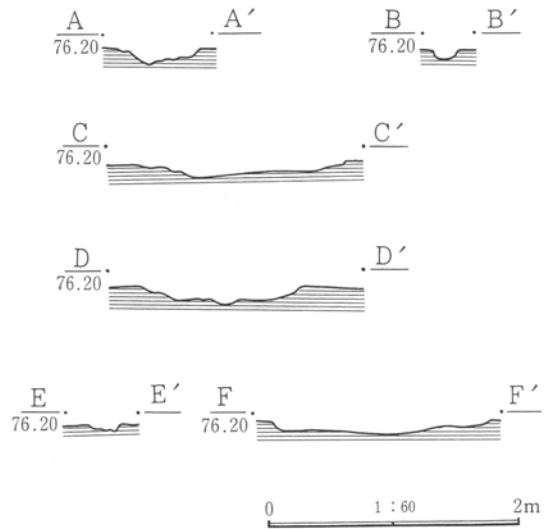
C区南西の一部で、I期水田跡に相当する畦基底



第81図 B区古墳時代II期水田跡



部が検出された。区画は畦間隔が約 5×3 m、約 4×3.6 m と小規模で、さらに分割した部分もある。畦方位は $N-45^{\circ}-W$ で、同一箇所を走る16号溝・17号溝と一致する。これらの溝はAs-C混土が堆積することから、検出された水田跡と同時期か近い時期であり、これを灌漑する水路と考えられる。17号溝は上幅1.6~1.2m、深さ12cm、北西端から南西端の54m間で比高約7cmを測る。16号溝は上幅20~40cm、深さ10cm以下。両者は約5m離れてほぼ平行することから、同一水田区画で機能していたと考えたい。一方、19号溝は17号溝と直交する。同時なのか新旧関係があるのか判明しなかったが、B区でもみられたように水路変更が行われた可能性を考えておきたい。なお、同様の水路と考えられるのは、17号溝と平行する18号溝、東端の15号溝はほぼ直交する角度で延びる。



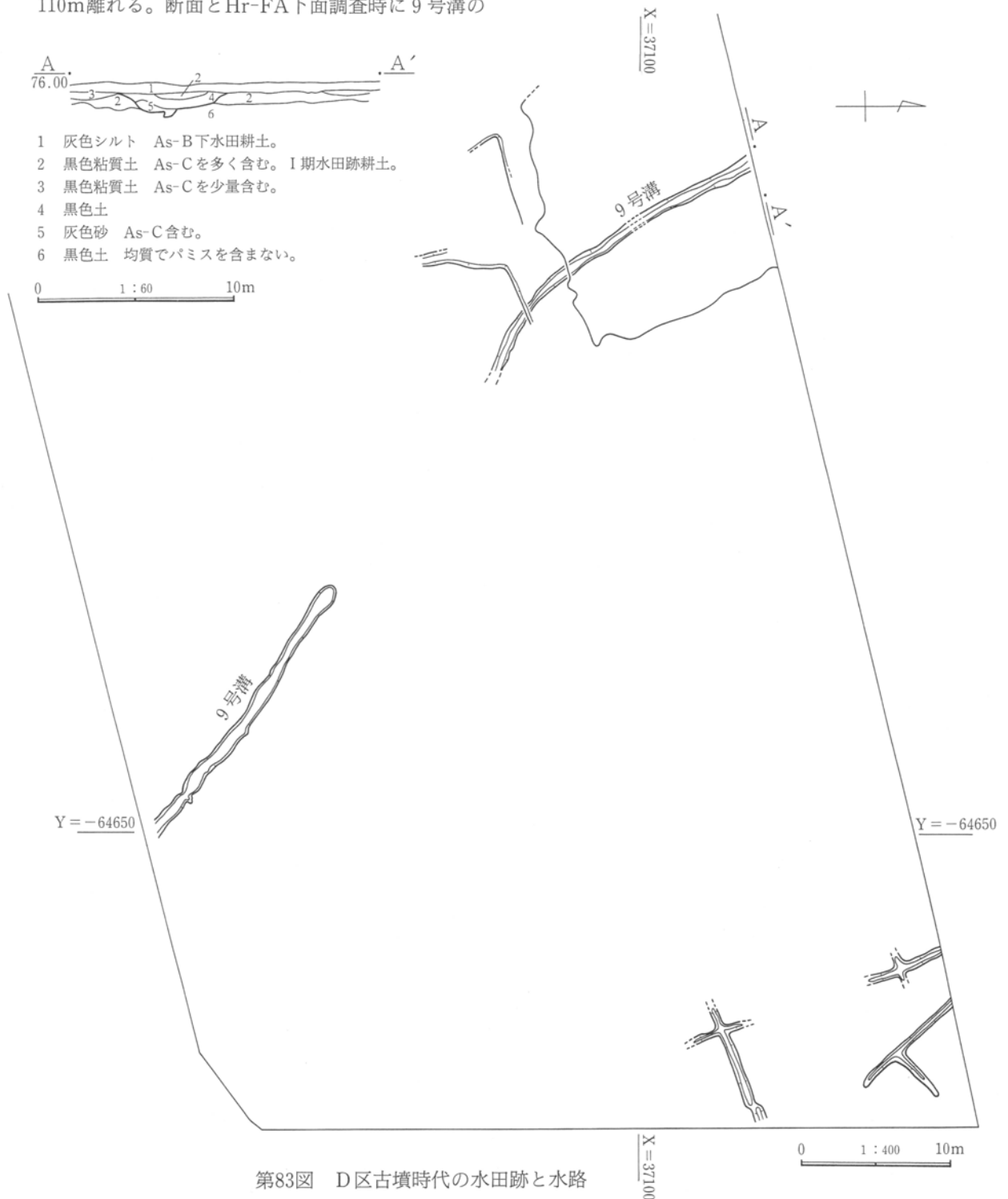
第82図 C区古墳時代I期水田跡と水路

D区水田跡 (第83図 P.L.35)

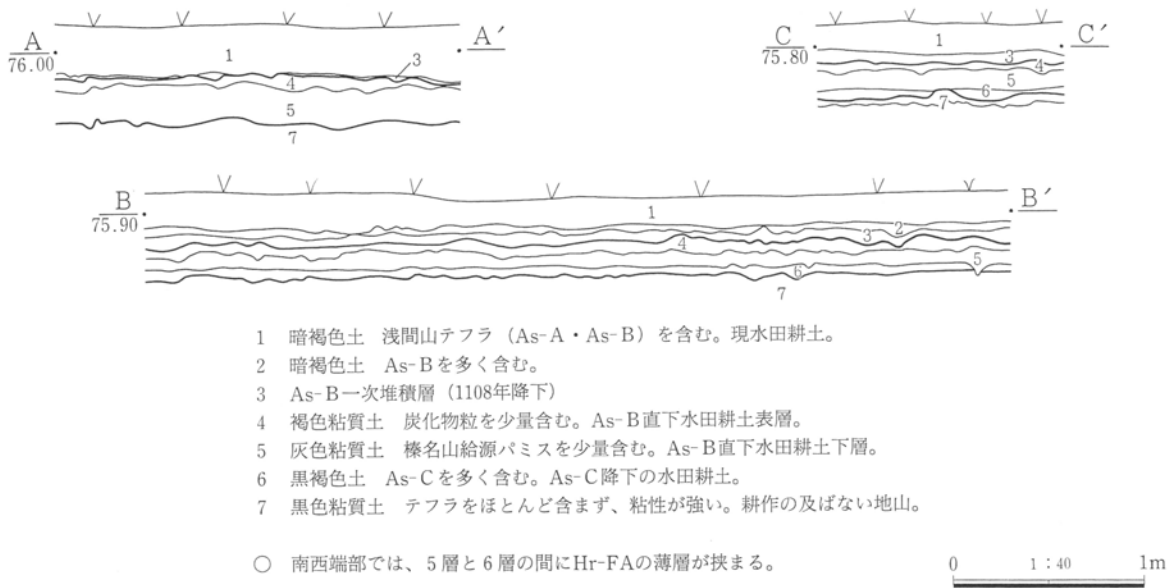
D区中央から東半でI期水田跡に伴うと思われる9号溝と、II期水田跡の畦及び小区画の一部を検出した。9号溝は北からやや湾曲して東南方向へ延びる。上幅1m弱で、深さは10cm前後。西隣するC区の17号溝と走向、規模ともにほぼ共通して、両者は110m離れる。断面とHr-FA下面調査時に9号溝の

上をトレースするように畦状の高まりを確認していることから、大畦に伴う水路と推測される。

D区中央と北東端で検出した畦と小区画の一部はII期水田跡のHr-FA直下面に相当するが、後世の耕作によって遺存状況は悪い。不明瞭ながら、軸をやや西に振る方眼区画を構成したと考えられる。



第83図 D区古墳時代の水田跡と水路



第84図 E区古墳時代の水田跡土層断面

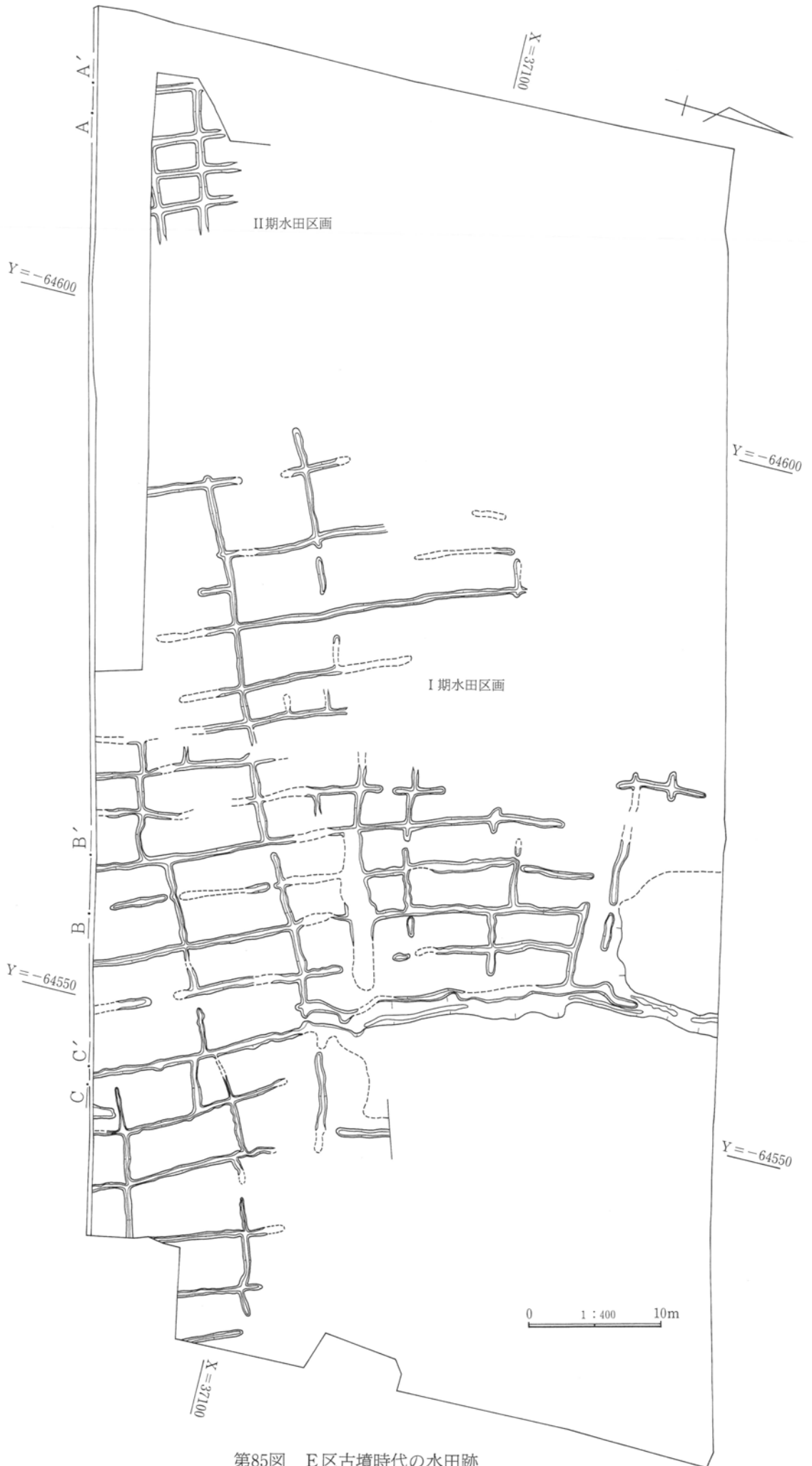
E区水田跡 (第84～86図 PL.36～40)

南西端でHr-FAに覆われたII期水田跡が8区画、中央部でAs-C混土を耕土とする畦基底部の痕跡からI期水田跡76区画が検出された。前者は、縦横の畦が方眼に造成され、一区画の東西長は3.0m及び1.8m、南北長は3.0mを測る。区画あたりの面積は9.2以上～5.4㎡である。方位はN-20°-W。田面のレベルは標高75.55～75.43mで、隣接する区画間の比高は2cmほどである。畦は幅30～50cm、田面からの高さは2～4cmと非常に低い。時期は6世紀初頭に相当する。遺物は出土していない。

後者の畦基底部から確認された区画は、本来の水田面ではなく、いわゆる広義の「疑似畦畔」にあたる。区画は南北方向に細長い長方形で、畦は南北方向を基軸としており、東西方向は部分的に段違いに造成されている。ただし、南から3・4列目の畦(第86図の13・14区画間、44・45区画間)は直線的に通っており、しかも4列目は他と比べて幅が広がっている。このいずれかに東西方向の基軸であった可能性を考えてもいいだろう。南北畦の方位はN-20°-Wではほぼ平行して走る。一区画の規模は、最小が2.5×2.5m、面積6.2㎡(区画23)、最大が7.8×5.2m、面積は37.4㎡(区画74)を測る。ただし、西端

で見られる大きめの区画(区画9～17)や、南北に細長い区画(33・40・46・52など)は、場所によっては田面において更に「手畦」で仕切られていた可能性がある。区画23・24が南北に並んで隣接する区画20とほぼ同規模になることは、これを類推させる。これは、東西畦が部分的に段違いになっていることとも含めて、地形の微妙な高低に応じた田面の湛水を実現するための工夫と考えられ、その後造成されたHr-FA直下水田がほぼ方眼に区画されるのと大きな違いである。

区画の60～62の東辺に沿って南北方向の浅い溝が検出されている。幅は1m強だが、田面では更に広がったはずである。北方から取水して田面に配水するための支水路であろう。この場合、検出されていないが、溝の東側に大区画の畦が築かれていた可能性があろう。「水口」については畦基底部のみの検出であるため判然としないが、区画の17・23・24・64等で見られるように東西畦の一部が切れていることから、南北方向の「懸け流し」であったと想定したい。なお、田面でないことから各区画のレベルは計測していないが、地形の傾斜から配水は北→南へ行ったと考えられる。時期は4～5世紀。遺物は出土していない。



第85図 E区古墳時代の水田跡



第86図 E区古墳時代の水田区画略称図

第4表 古墳時代水田計測値

区画	長辺(m)	短辺(m)	面積(m ²)	形状
1	—	2.9	(3.0+)	—
2	—	3.1	(9.2+)	長方形
3	—	2.0	(3.2+)	長方形
4	3.0	1.8	5.4	長方形
5	—	1.8	(3.5+)	長方形
6	2.9	1.9	5.5	長方形
7	—	—	(2.6+)	—
8	2.6	—	(3.7+)	長方形
9	—	—	—	—
10	6.9	—	—	長方形
11	—	—	—	長方形
12	—	4.5	—	長方形
13	6.7	4.8	32.8	長方形
14	—	4.8	—	長方形
15	—	—	—	—
16	14.1	2.5	—	長方形
17	6.2	4.6	30.7	長方形
18	—	2.5	—	長方形
19	—	3.9	—	長方形
20	6.8	3.9	26.2	長方形
21	—	4.1	—	長方形
22	—	—	—	—
23	2.5	2.5	6.2	正方形
24	2.7	2.1	5.9	長方形
25	—	2.1	—	長方形
26	—	—	—	長方形
27	4.5	2.2	9.3	長方形
28	3.0	—	6.4	長方形
29	—	2.1	—	長方形
30	—	—	—	—
31	3.6	—	—	—
32	7.4	2.4	—	長方形
33	8.2	2.4	22.2	長方形
34	—	2.4	—	長方形
35	—	—	—	—
36	5.8	2.0	—	長方形
37	3.4	2.2	7.7	長方形
38	2.6	2.4	6.4	正方形
39	3.7	2.8	10.5	長方形
40	8.2	2.8	24.6	長方形
41	—	3.4	—	—
42	—	3.0	—	長方形

区画	長辺(m)	短辺(m)	面積(m ²)	形状
43	7.8	2.6	20.6	長方形
44	3.0	3.0	9.0	正方形
45	4.9	2.6	12.9	長方形
46	7.5	2.6	19.8	長方形
47	—	2.4	—	長方形
48	5.1	2.3	12.0	長方形
49	7.4	3.0	20.0	長方形
50	2.8	2.7	6.4	正方形
51	4.0	2.9	10.5	長方形
52	7.5	2.9	23.2	長方形
53	—	3.2	—	長方形
54	6.4	2.3	13.6	長方形
55	5.5	2.3	14.3	長方形
56	3.0	2.5	8.3	長方形
57	3.9	3.2	12.9	長方形
58	7.7	3.1	21.6	長方形
59	—	2.9	—	長方形
60	5.7	2.5	15.3	長方形
61	8.5	3.0	23.7	長方形
62	5.0	1.2	9.8	不定形
63	7.4	3.3	28.3	長方形
64	—	4.2	—	長方形
65	—	—	—	—
66	6.4	3.2	20.9	長方形
67	3.7	2.1	5.9	不定形
68	5.2	3.7	21.1	長方形
69	—	4.1	—	—
70	6.5	3.9	27.1	不定形
71	8.3	3.5	27.6	長方形
72	—	3.7	—	—
73	—	5.6	—	—
74	7.8	5.2	37.4	長方形
75	—	—	—	—
76	—	3.6	—	長方形
77	—	3.6	—	長方形
78	—	—	—	—
79	—	2.7	—	長方形
80	—	—	—	—
81	—	2.2	—	—
82	—	—	—	—
83	—	2.0	—	—
84	—	—	—	—

F区水田跡と水路 (第87・88図 P.L.41)

F区で、7小区画相当分と、これと関連する可能性のある溝5条(2～6号溝)を検出した。この地点ではHr-FAの二次堆積と思われる砂混じりの火山灰層が5～10cmの厚さで堆積しており、当初これに覆われた古墳時代II期水田の検出を試みたが、畦や水田区画は検出できなかった。続いて水田耕土であるAs-C混土と地山の黒色粘質土とのわずかな相違から畦基部を確認したものである。畦の主軸は北東に向いており、N-30°-E前後を測る。

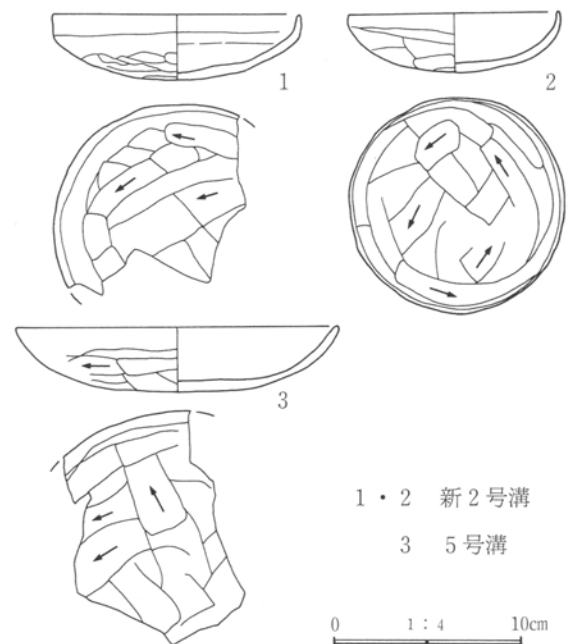
区画はこの方向に長い長方形を基本とするようである。規模は3.5×2.5mが最大で、最小は3.0×2.0mである。検出された区画の規模と方眼状の畦構成から、古墳時代II期水田跡の可能性も考えられるが、畦基部痕跡を残す点ではI期水田跡ともいえる。どちらかを確定する根拠はないが、東隣するG区水田区画と方位や区画構造が共通することから、一連のものとして理解したい。

水田区画と主軸方向を同じくして南西に走る**2号溝**は、掘り直しによって先後二時期に分かれるので、ここでは旧2号溝・新2号溝と呼び分ける。旧2号溝は、Hr-FAの二次堆積層によって埋没しており、古墳時代II期水田跡には伴っていた水路とも解釈されるが、検出された水田区画とは隣接する位置関係にあり、微妙な時期差も考えうる。新2号溝は、Hr-FA堆積後の開削であり、出土遺物が伴うとすれば8世紀前半ころまで機能していた可能性が考えられる。洪水起源と思われる灰色粘質シルトで埋没しており、上位には1108年降下の浅間As-Bで覆われた水田が造成されたと考えられる。新旧とも2号溝の規模は、上幅2.5～2.9m、深さ30～70cmを測る。地形の傾斜から、北東から南西へ水流があったと考えられ、古墳時代I期水田跡と直交する。**5号溝**は上幅50cm前後の蛇行する小規模な水路で、2号溝に合流する。これは旧2号溝を埋没させた下層土と同じ砂質土で埋まっており、Hr-FA堆積時には機能しておらず、新2号溝の段階では埋没していたと考えられる。ここからは8世紀代の杯1点(第87図3)が出

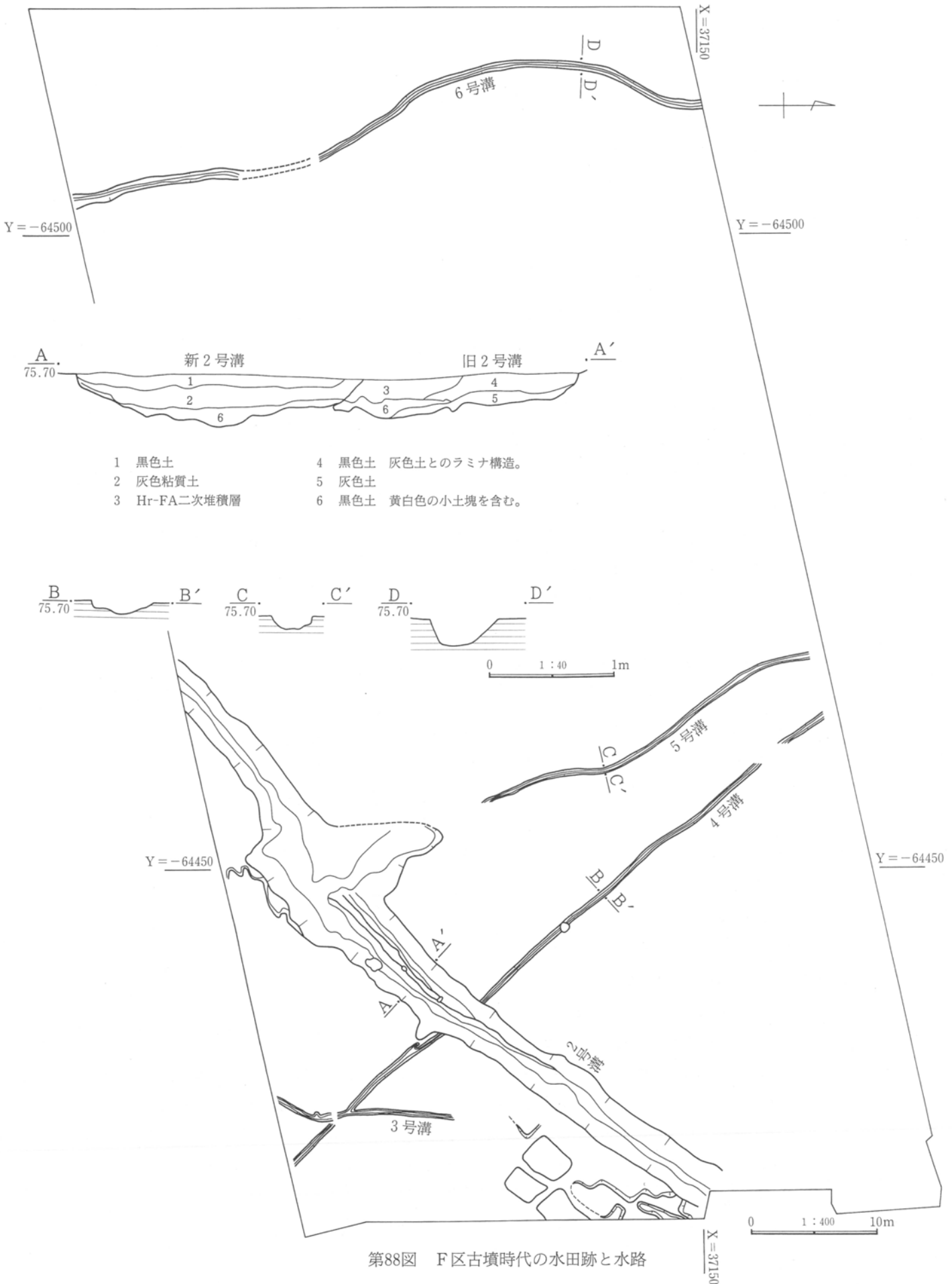
土するが、溝の埋積年代とは序盾する。

水田区画の西側に約8m離れて検出された**4号溝**は、N-40°-Wの走向で、水田区画主軸もほぼ直交して直線的に走る。規模は、上幅50cm前後、深さ10cm前後を測る。埋土はAs-C混土であり、2号溝に切られることから、I期水田跡に伴う水路と考えられる。調査区西端で検出された**6号溝**は、北から南方へ蛇行して走り、上幅1m弱、深さ20cmを測る中規模の溝で、As-Cを少量含む黒色土で埋没する。5号溝堆積土にも近似することからII期水田跡に伴う可能性がある。**3号溝**は、調査区南東端で14mほどの長さで検出された小規模な溝で、4号溝と交わるが新旧関係は確認できなかった。

なお、I期水田跡に伴うとした4号溝は、東側に約100m離れてG区6号溝、西側約200m離れてD区9号溝、更に100m西方にはC区17号溝がほぼ平行して走っており、これらがI期水田跡を大きく区画していたと考えていまいだろう(第31図)。また、新2号溝の北西約800mの地点には後述するE区5号溝が平行して走っており(第209・210図)、埋土を同じくし、また出土土器も7世紀後～8世紀前に限定できる(第87図1・2)。これより両者は7世紀代に営まれていた古代I期水田跡(193頁)に伴う水路と推定される。



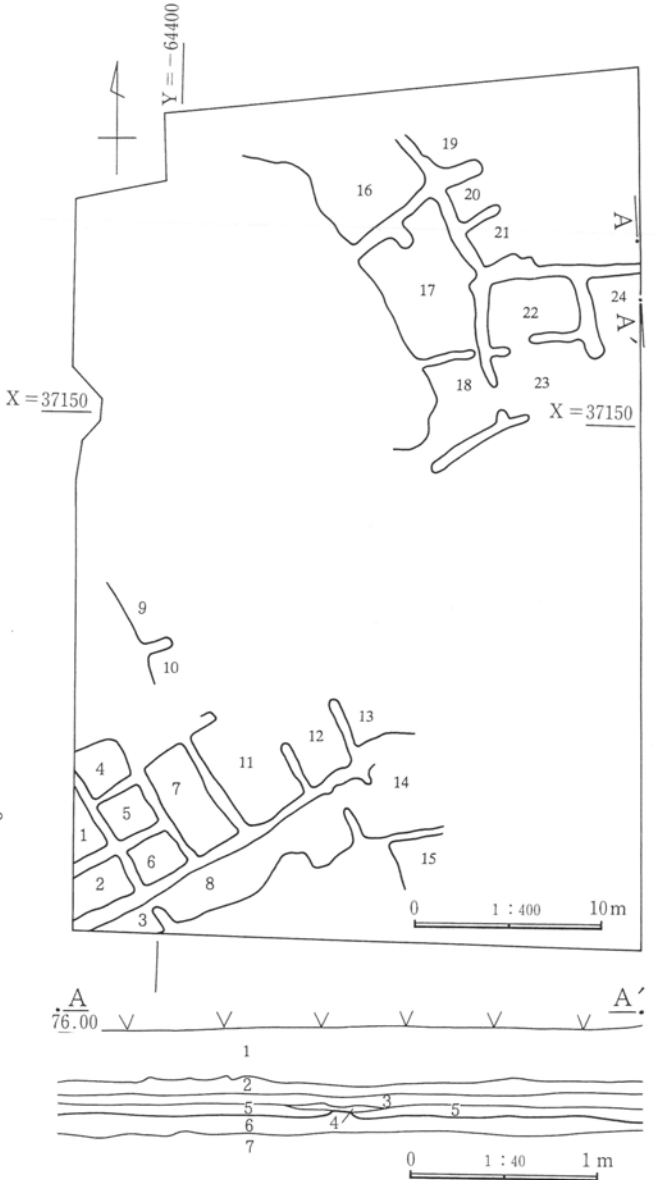
第87図 F区水路出土遺物



第88図 F区古墳時代の水田跡と水路

G区水田跡 (第89図 P L.42・43)

G区西半部でAs-C混土を耕土とする水田の畦基底部を検出した。区画は部分的に残るものも含めて24区画が確認される。区画は、長方形とこれを分割した正方形を基本とし、不定形は微高地形状に沿って屈曲した区画16~18に見られる。区画の規模は、大きいもので6.5×3.8m(区画8)、最小は一辺3.0m(区画5)を測る。方位はN-30°-Wで、約100m西方で検出されたE区の水田跡より若干傾く。畦基底部の規模はいずれも大差ないが、区画3・8・14が横方向に細長く、その北西側の畦が直線で築かれていることから、これがこの地点での基軸となる畦であった可能性が高い。区画の面積は5.5(区画5)~31.9(区画17)m²。区画1~15と区画16~24の間では畦基底部が検出されなかったが、5~10cmほど高い微高地となっており、後の水田耕作によって削平されたか、本来的に水田ではなかった場所だろう。区画16~18が湾曲した不定形を呈しているのは、水田末端の地形変換点にあったせいかもしれない。なお、「水口」と推測される部分が、区画3・8・14の北側に見られることから、前述の基軸となる畦に沿って配水が行われていたと考えたい。時期は4~5世紀代。出土遺物はない。



I区水田跡 (第90図 P L.51・52)

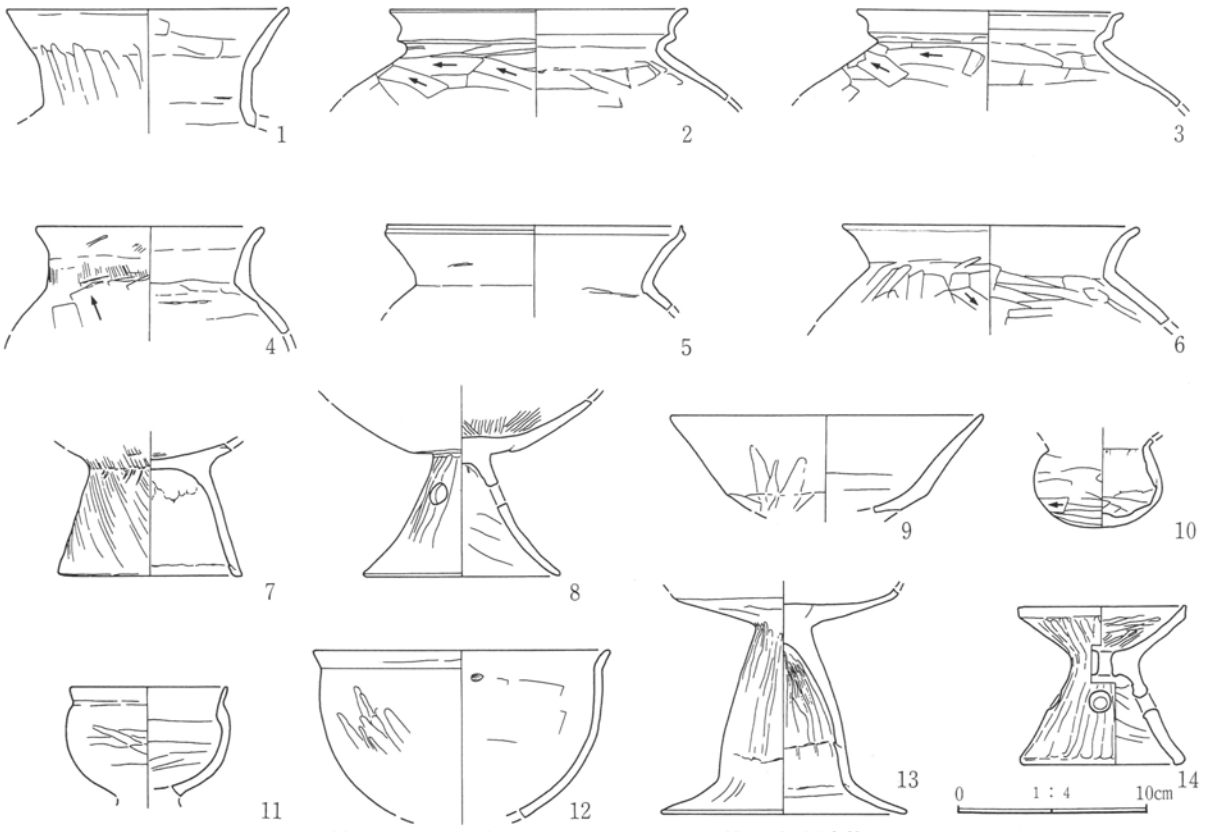
I区の北東端、浅い谷状のくぼ地でHr-FAに覆われた水田面を検出した。区画の平面形は細長く、谷に沿った形状であり、規模は最大9.0×3.0mで、さらに中央付近を区切って極小区画とした痕跡がうかがえる。総じて畦の遺存状況が悪く、幅は60~30cm、高さは約2cmと極めて低い。田面レベルは74.25~74.00mで、中央部がくぼんで畦高は縁辺の田面レベルよりも低い。この状態では十分な湛水が不可能だったはずで、本来はもっと平坦であり、埋没後の土圧によって中央部が沈んだものと考えられる。時期は6世紀初頭に相当する。

水田跡が検出されたくぼ地は、北西から南東にかけて流れる河川跡の蛇行部分縁辺にあたり、その南

- 1 暗褐色土 As-A・As-Bを含む。現表土。
- 2 暗灰褐色土 As-Bを含む。
- 3 灰色シルト質土 榛名山給源パミスを含む。
- 4 暗褐色シルト質土 Hr-FAをブロック状に含む。
- 5 黒褐色土 As-Cを多く含む。As-C降下以降の水田耕土。
- 6 暗灰色シルト パミスをほとんど含まない。耕作の及ばない地山。
- 7 黄灰色シルト

第89図 G区古墳時代の水田跡

東延長部分がJ区で検出されている。ただし、ここでは後述(河川跡)するように埋没層上位が後世の河川(藤川)侵食によって削平されており、水田の存否は不明であった。なお、本水田耕土からは4~5世紀の土器が出土しているが、これらは河川跡出土遺物と同様に水田造営以前に埋没したものと考えられる。



第90図 I区古墳時代II期水田及び耕地出土遺物

G区水路跡

6号溝 (第91～100図 PL.44～46)

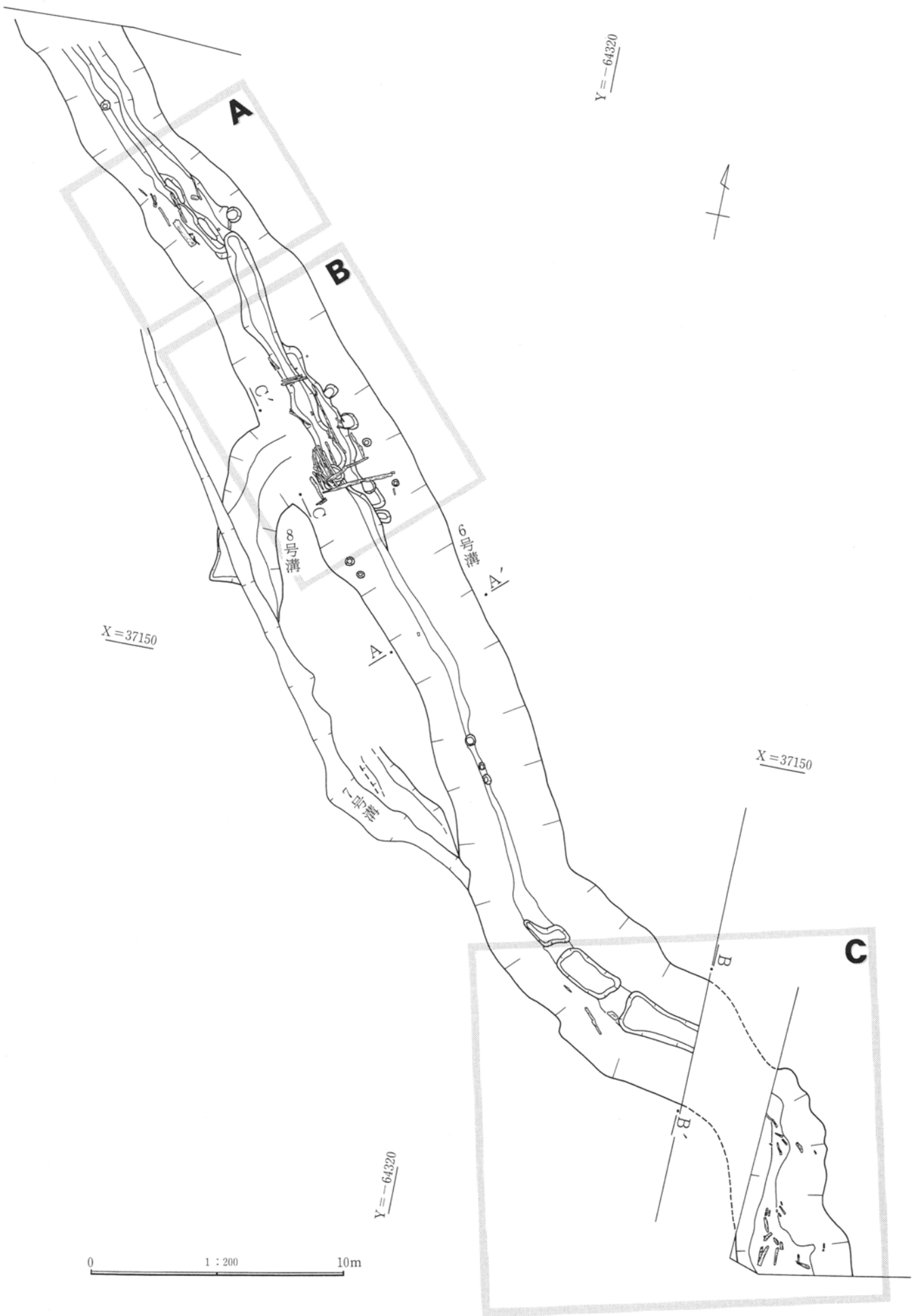
G区からH区にかけて南東に流下する溝を検出した。検出面はAs-C混土層下面である。本溝は東側で緩傾斜する微高地と西側の平坦な低地部との境界に開削されており、調査区外での延長部分においても、この地形変換線に沿っていると思われる。検出された長さは約60m、北側側道部分での前橋市教育委員会調査分を含めると90mに及ぶ。走向は、G区では $N-40\sim 50^{\circ}-W$ でほぼ直線的に延び、H区に入る付近で小さく蛇行する。検出面における上幅は、3.0～5.0m、深さは1.0～1.2mを測る。北西端と南東端では底面比高が20cm(標高74.1～73.9m)あるが、底面はフラットな傾斜面でなく、部分的に凹凸がみられる。断面形は逆二等辺三角形か台形で整っている。堆積土層は洪水起源と思われる砂とシルトの互層が主体を占め、周辺の基準層序にみられるAs-C混黒色土は見られない。この点は、同時期存在とみられるI区の古墳時代前期の遺構群と異なる。堆積土層の上位にはやや窪んだ状態で、ブロック状のHr-FAが堆積しており、この段階ですでに溝は埋没してほぼ平坦になっていたことが推測される。このことから、本溝を埋没せしめたのは、洪水によって上流から流下してきた細粒堆積物であり、底面以外は礫がほとんど含まれないことから、瞬時にではなくひたひたと押し寄せる泥水による被害を被ったといえよう。そして、土層断面に掘り直しの痕跡が観察できないことから、この地点で洪水埋没以降は復旧しなかったと推測される。なお、土層断面A-A'で上層を切り込んだ灰褐色シルトの堆積が認められるが、これは8世紀半ば以降の洪水層で、本溝とは無関係のくぼみである。溝堆積土の最下層は、地山の褐灰色シルト層から流れ込んだとみられる円礫や砂が堆積する。この地山は前橋泥流最上層に相当し、堅く締まっているためか水流による侵食をさほど受けていない。おそらく溝開削時の形状がほぼ残されていたと考えられる。逆に、この締まった地山層を掘り抜いて長大な溝を開削するには、相

応の重労働が強いられたはずで、その掘削作業には木製鋤鉞だけでなく、鉄製鋤先を装着した土木具の使用を想定してもおかしくないだろう。

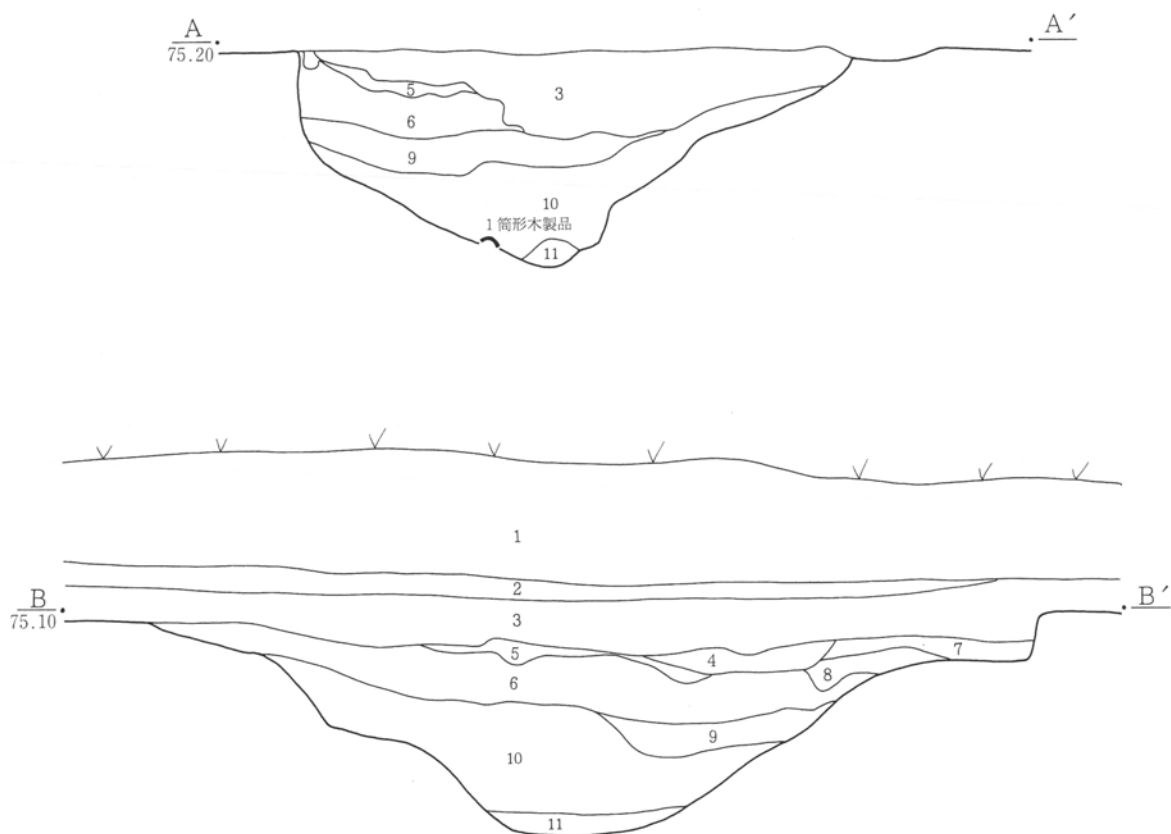
溝のG区直線部分のほぼ中間地点に、溝と平行及び直交して、あたかも組まれたような状態で木材群が出土した。長さ1m前後の丸太材ないし割材を「横木」として溝と平行に密に並べてあり、これと直交して3mと2mの長い割材を「縦木」として渡したものである(第94図)。横木は溝右岸の下半部に沿って、縦木は両岸の中位に接して出土している。これらは底面に密着するのではなく、底面から10cmほど黒泥土～シルト層を挟んでおり、全体を洪水堆積物に覆われている。このことから、洪水によって部分的に破壊され埋没したと考えられる。検出当初は縦横に組まれた見かけ上の構造から「堰」と想定したが、①横木20本のうち杭と認定できるものは1本だけであること、②横木は両端を簡単に削っただけで、長さがほぼそろっていること、③横木が密に並んでいるのに対して、長く太い縦木が2～3本しか見られないこと、④堰とした場合の分流した溝が確認されなかったことを理由に、むしろ「橋」であろうと考えられた。この場合、両岸を渡すのに十分な長さの橋桁を懸架し、そこに1m前後の横木を密に並べた構造を想定できる。橋脚となりうる柱穴は直下には検出されなかったが、これより3m上流側の中央に5本の杭がランダムに打ち込まれている。従って、この「橋」は杭群を橋脚として、そこから3mほど流されたか、あるいは直接両岸に掛け渡しただけの構造を考えることができよう。また左岸側には横木が1本しか検出されなかったが、多くを下流に流されてしまったのだろうか。ただし、それを証するような材の出土は下流側では見られなかったので憶測の域をでない。

またH区の蛇行部分には5本の杭列が検出されており(第96図)、横木は見られないものの、この地点に「堰」の存在が想定できたが、主要部分が現水路下にあるため、調査することができなかった。

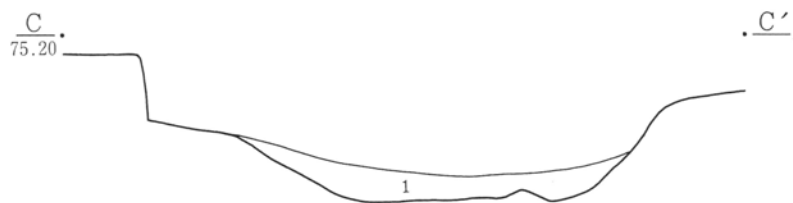
6号溝の「橋」の上流側右岸から弧を描いて南流



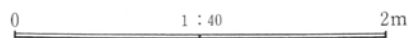
第91图 G区6·8号沟



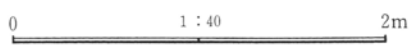
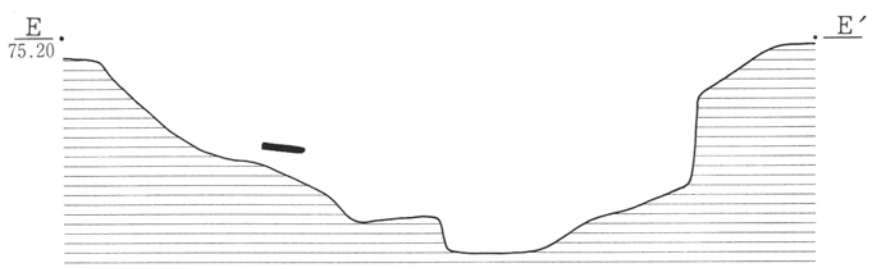
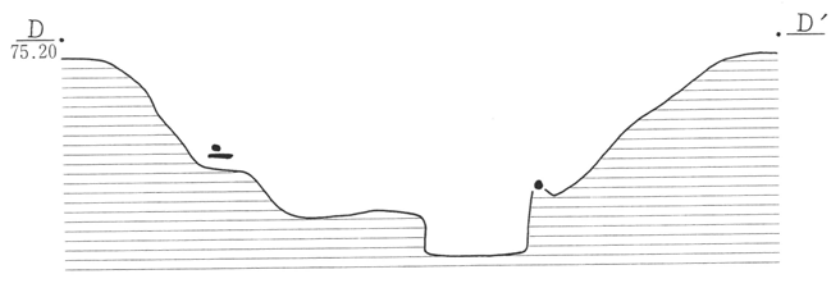
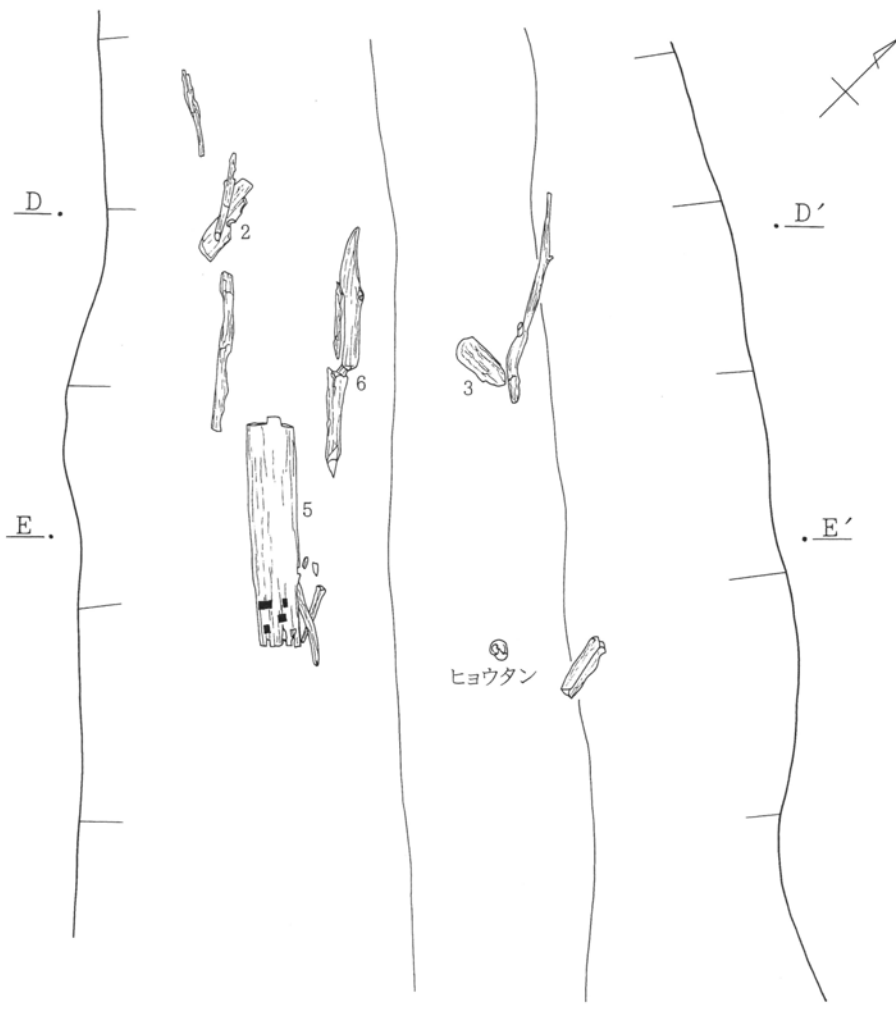
- 1 表土 下位にはAs-Bを多く含む。
- 2 灰黒色土 As-B下水田の耕土と思われる。
- 3 暗灰色シルト 洪水堆積物で、榛名山二ツ岳給源バミスをわずかに含む。
- 4 暗褐色土 砂、Hr-FAを小塊状に含む。
- 5 黄褐色シルト Hr-FA主体で塊状。上層からのすきこみか。
- 6 黒色土 粘性強く、地山土粒の薄層による縞が見られる。
- 7 暗灰色砂
- 8 暗灰色土 粘性強い。6層に近似。
- 9 黒灰色土 シルト質。
- 10 灰褐色土 砂とシルトのラミナ構造。
- 11 黒褐色土 砂と礫を多く含む。



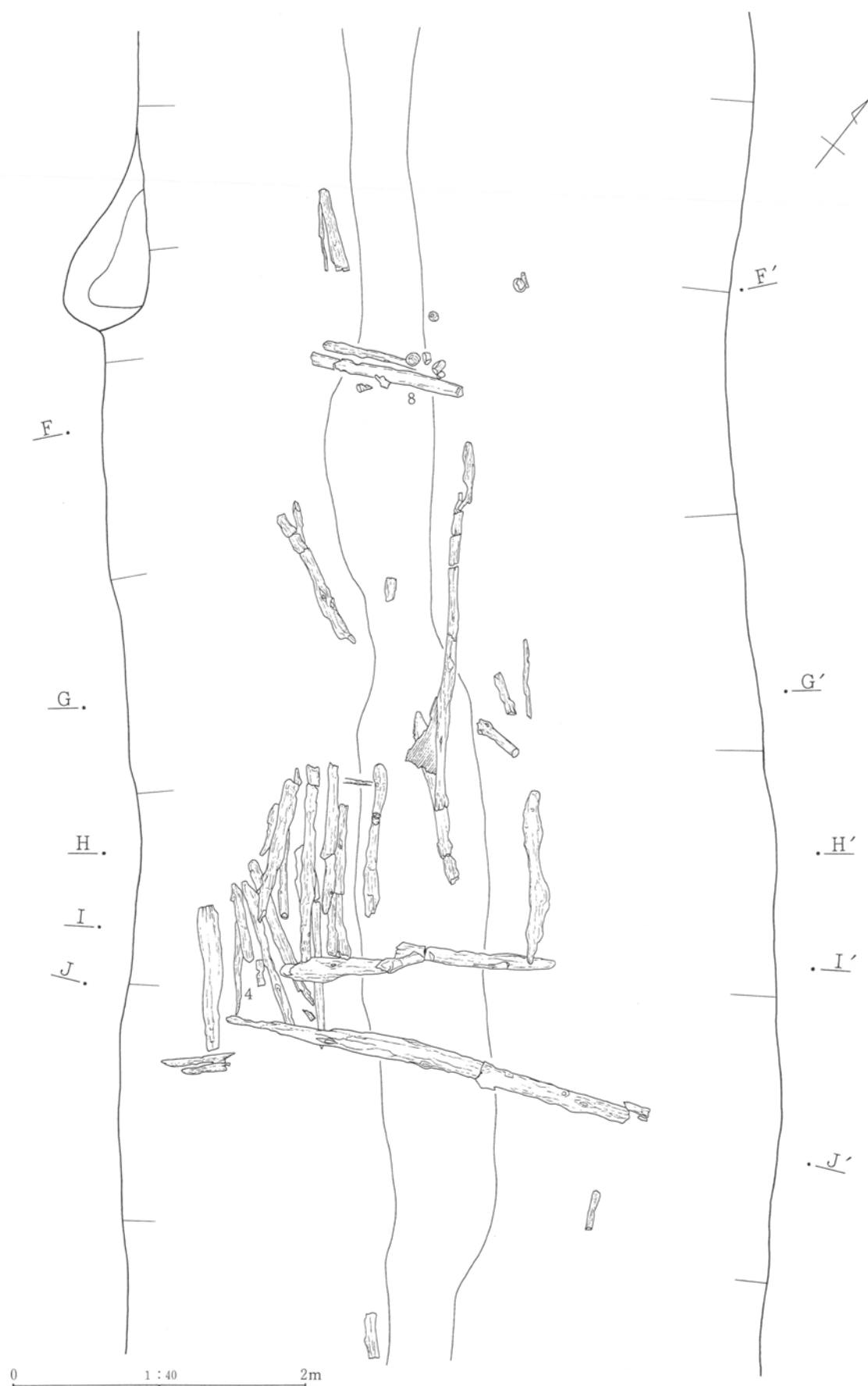
- 1 暗灰色土 シルト質で粘性強い。



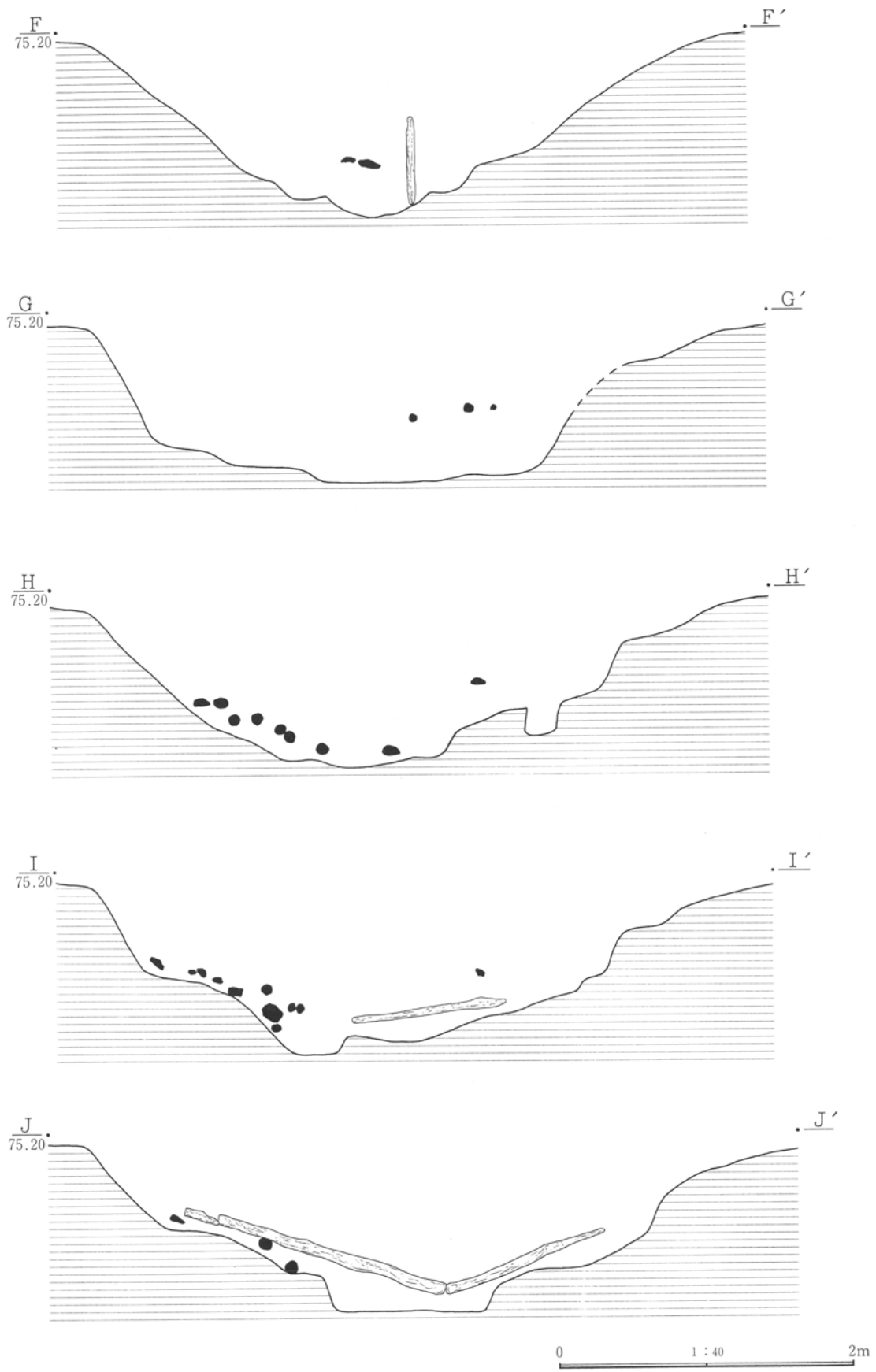
第92図 G区6・8号溝土層断面



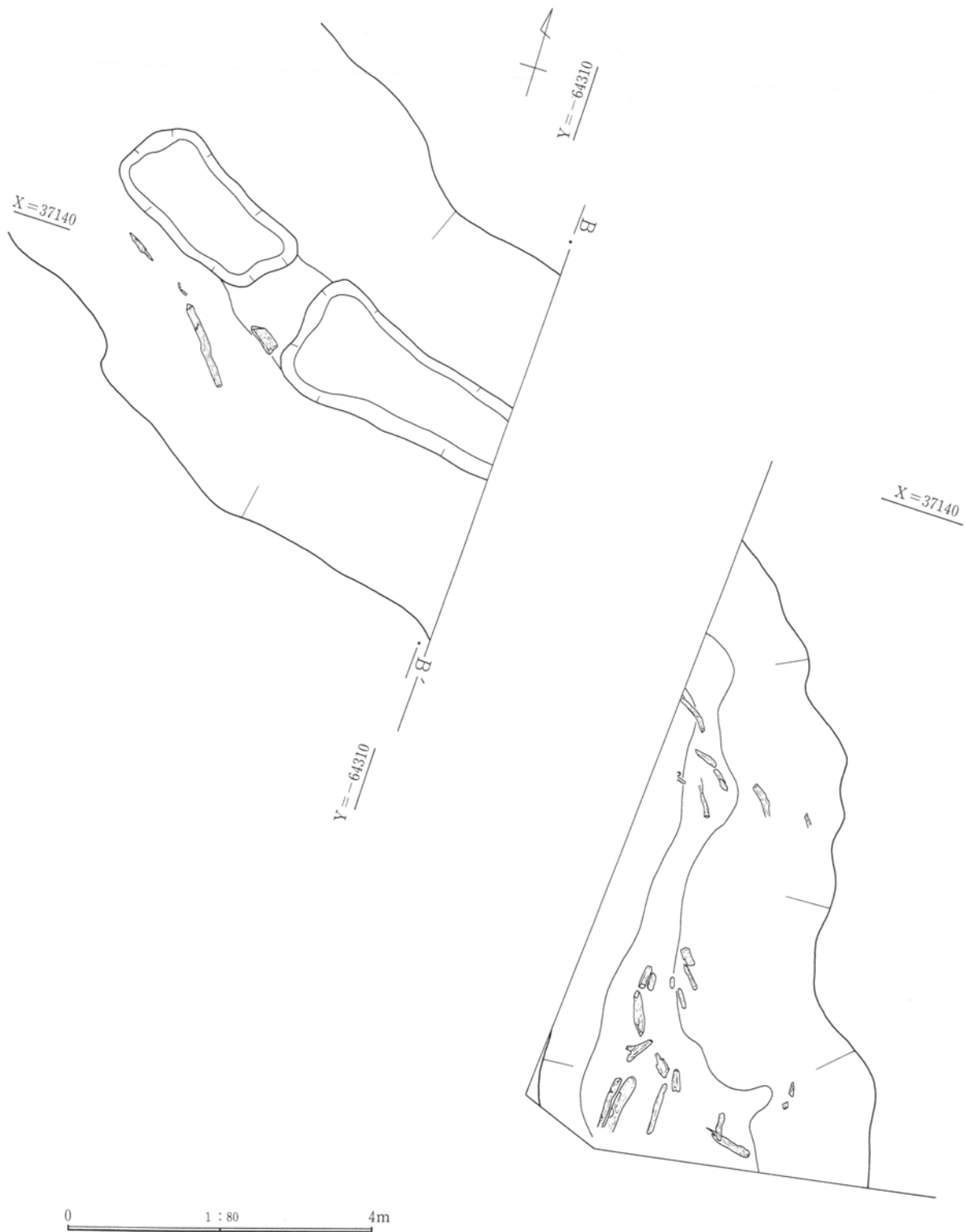
第93図 G区6号溝遺物出土状況A地点



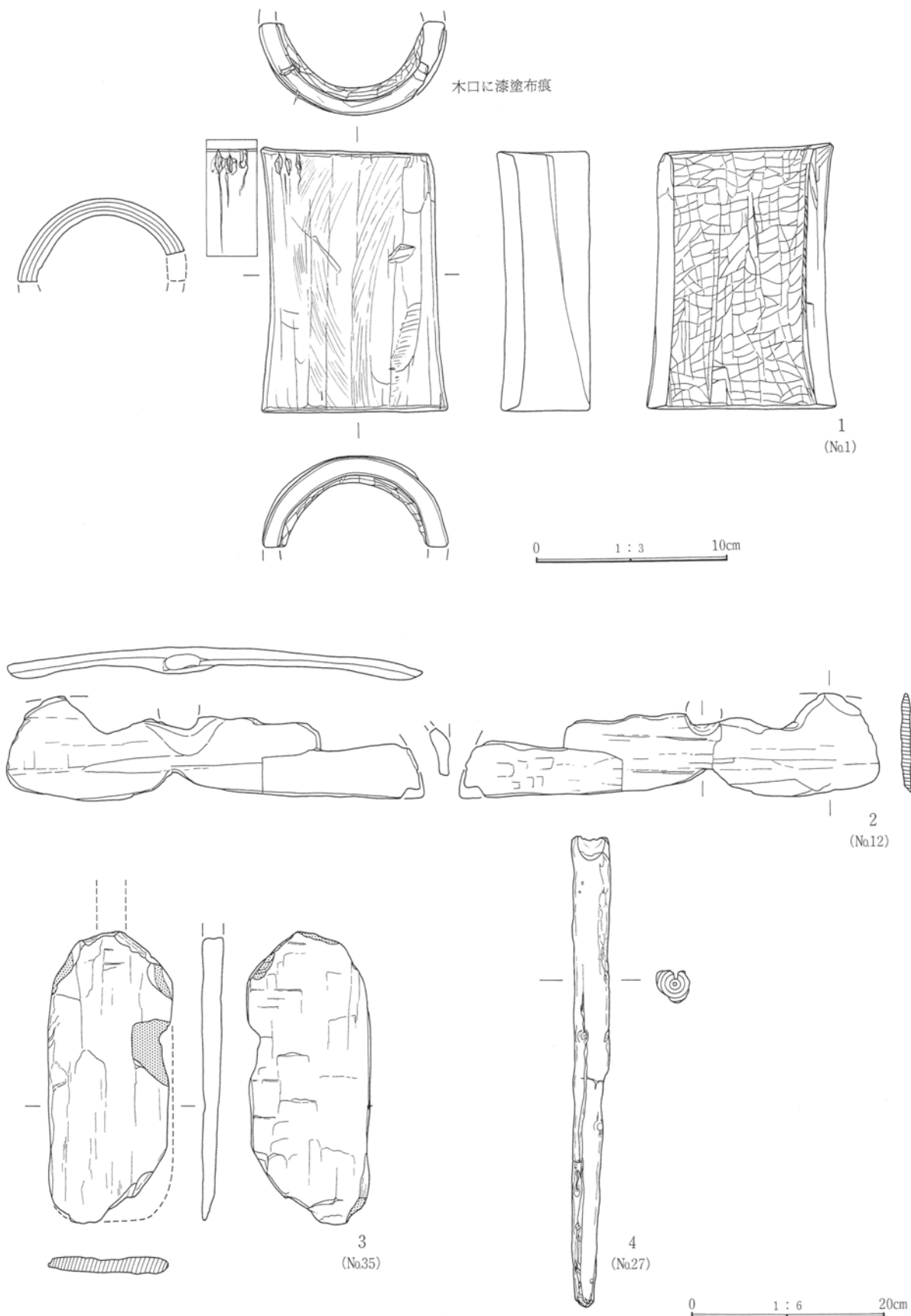
第94图 G区6号沟遗物出土状况B地点



第95图 G区6号沟遗物出土状况B地点断面



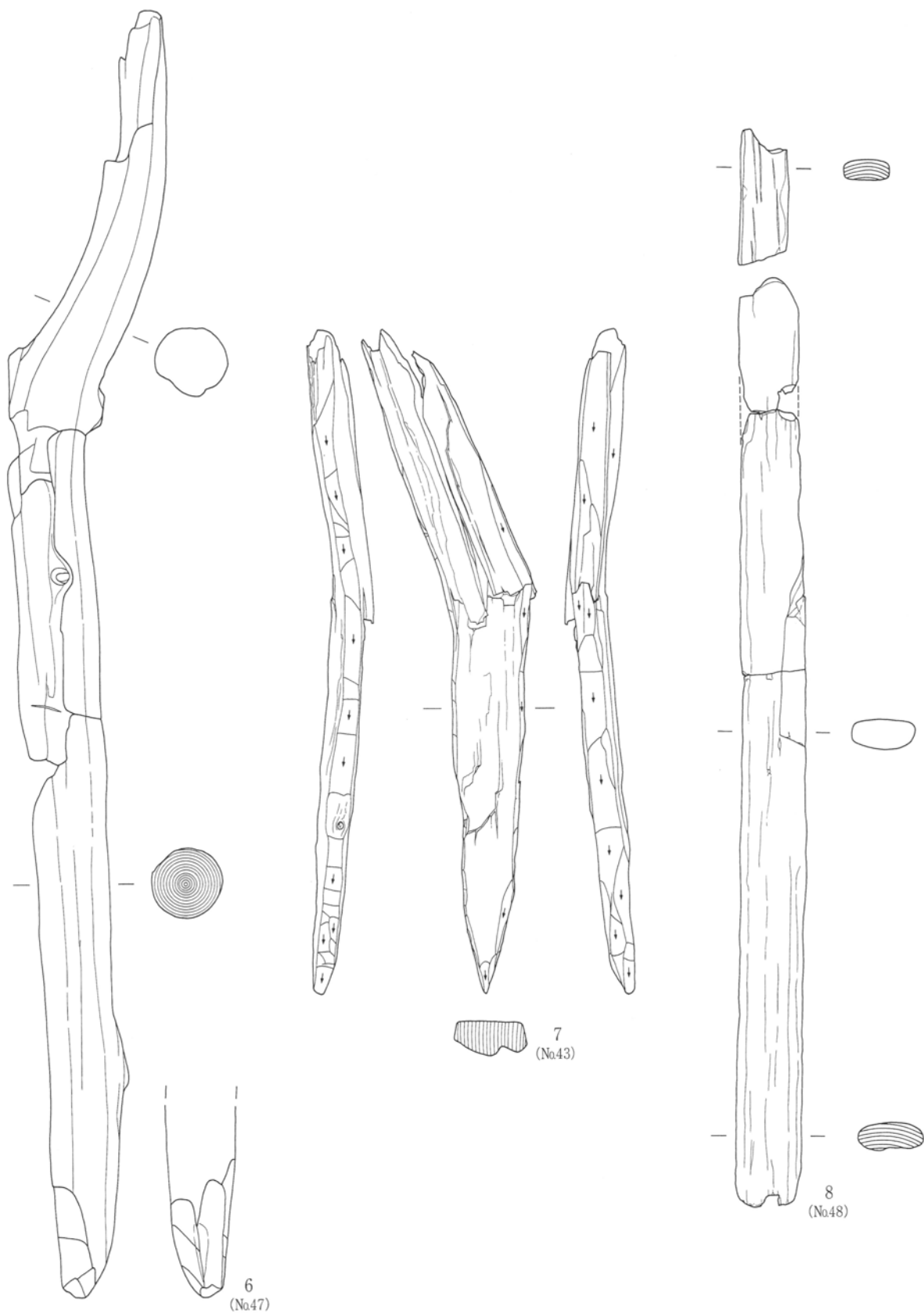
第96图 G区6号沟遗物出土状况C地点



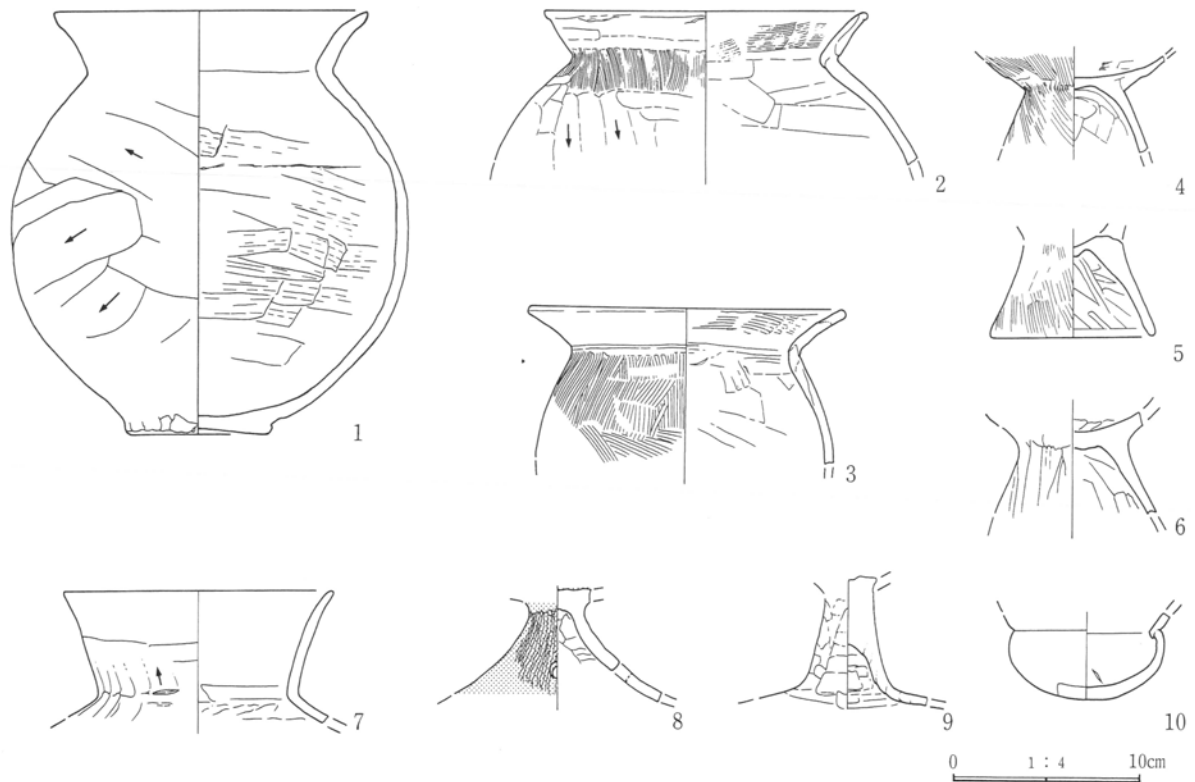
第97図 G区6号溝出土遺物(1)木製品 ()は樹種同定試料番号



第98図 G区6号溝出土遺物(2)木製品



第99図 G区6号溝出土遺物(3)木製品



第100図 G区6号溝出土遺物(4)

し、再び6号溝に合流するのが**8号溝**である。これは、当初「堰」から分岐する水路と想定したが、急激に浅くなって、掘方が不整であり、しかもすぐに6号溝に合流することから、人為的な溝ではないと判断した。6号溝から分岐する地点では、6号溝底面よりも20cmほど高く始まっており、ここには洪水堆積物と思われるシルトが堆積する。このことから、8号溝は先述の「橋」がここに埋没した後、オーバーフローした水流が前橋泥流層の上に乗る黒色土層を侵食した結果と解釈した。

6号溝の性格は、先述のように地形変換線に沿って開削されていること、底面に水流の痕跡が明確であることから、水田灌漑用の水路であるのは間違いないだろう。そして、溝の東方微高地にはH区・I区の住居群が迫っている。最も近いのはH区3・4号住居跡で、約50mの距離をあけて位置する。一方、溝の西方にはG区で検出された古墳時代I期水田跡がある。6号溝は出土遺物と堆積土層の特徴から古墳時代前期と考えられ、これらの集落跡・水田跡と

ほぼ同時存在した可能性が高い。従って、6号溝は東側居住域と西側水田域を画する役割も果たしていたわけで、同様に調査区西端で地形を画するA区9号溝とともに、この中間にある少なくとも東西約580mの水田域を灌漑する主幹水路と位置づけられよう。

遺物は、底面からやや浮いた状態で洪水堆積層から、横楯・建築材の一部、矢板・杭等の木製品、底面からは壺・甕・高杯・埴等の土器類、用途不明の「筒形木製品」が出土した。土器は短い口縁に球形胴をもち、外面をナデ整形する甕(第100図-1・2)の特徴から、4世紀後半代を下限とすると捉えられる。ちなみに、H・I区の集落跡から出土した土器は、4世紀後半代を主体としており、本溝出土土器との时期的な齟齬はないと考えられる。**筒形木製品**は、管見による限り全国14例目、県内では伊勢崎市波志江中屋敷東遺跡例について2例目の稀少品である。これはまだ完形品が知られていないため、その用途についてまだ確定した見解が得られていない。本遺跡例も遺存状態は良好といえるが、半欠品であ

り本来的な形状を知り得ない。材質は他の例と同様にイヌガヤであり、上縁及び外面に黒漆を塗布した可能性が指摘できる。推測される形状から、「コップ状容器」「鼓」「腕甲」などが思い浮かぶが、現状では憶測の域を出ない。

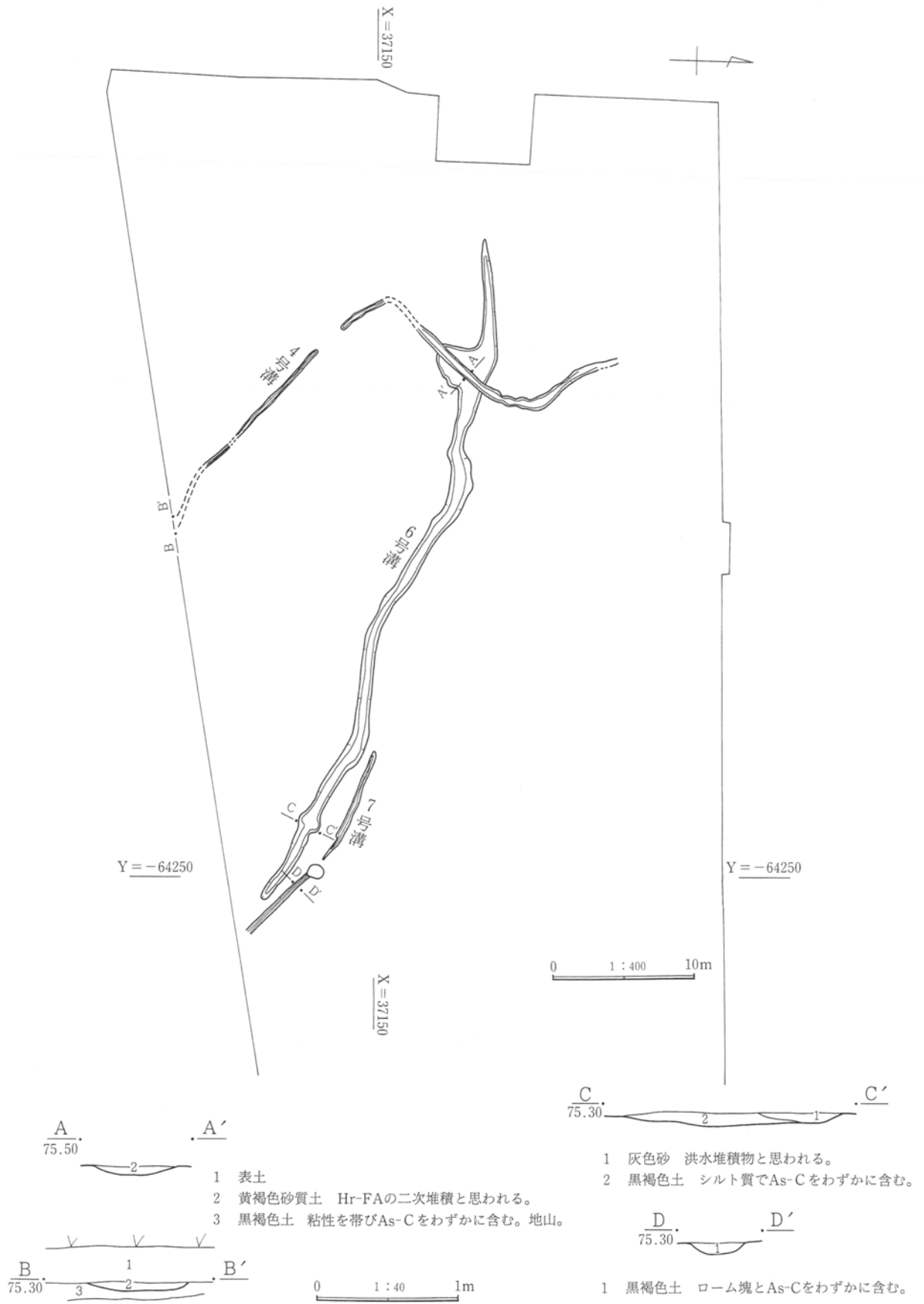
6号溝が埋没した時期については、出土遺物と土層から、4世紀後半～5世紀に限定できるが、開削時期については推測するに足る根拠がない。G区では鍵層となるAs-C一次堆積層が見られないからだ。As-C一次堆積層を切っているA区9号溝と同時期とするならば、4世紀前半以降と考えられるが、同時存在はあり得ても、同時開削とは限らない。6号溝がいつ開削され、埋没したのかという問題は、前橋台地の水田開発の初源、さらに本遺跡の北方約3kmに位置する前橋天神山古墳や八幡山古墳といった群馬県最古級の大型古墳の存在背景とも関わる。また、本遺跡の南方約2.2km地点にある玉村町砂町遺跡から、6号溝とほぼ同規模で同時期と思われる溝が検出されている。(玉村町教育委員会 中里正憲氏よりご教示)。これは同一地形に沿った走向とその延長方向から、同一の溝である可能性が高いと考えている。そうだとすれば、6号溝の上流がどこまで遡るかは確認できないものの、この地域に短くとも2kmを越える南北の大水路が開削されていたことになる。この水路によって灌漑された水田域の範囲は、連続する地形から、前橋市南部から玉村町まで南北約10kmにも及ぶ可能性を考えておく必要がある。

6号溝の西側を平行して走る7号溝は、古墳時代後期に属し、洪水堆積物と思われるシルトと小塊状のHr-FAが堆積する。上幅1.0～0.5mで、深さは20cm前後を測る。北部は削られ、南部は6号溝と合するため、明確な検出はできなかったが、おそらく地形に沿って6号溝と同じ走向で流れると想定できる。検出はできなかったが、この地点に存在したはずの古墳時代II期水田跡を灌漑する水路網の一部であったと推測して間違いのないと思われる。

H区の水路跡 (第101図)

ここで検出された4号・6号・7号溝は、Hr-FAの堆積が認められたことから、古墳時代II期水田跡に伴う可能性のある水路として扱った。4号溝は、N-40°-Wほどで「鍵の手」状に屈曲して東南流すると思われる。規模は、上幅で最大1.0m、最小0.3mを測る。深さは8cm前後と浅く、部分的に断絶する。検出はできなかったが、畦に沿った水路と考えられる。6号溝はN-60°-Wほどで蛇行しながら東西に延びる。これは洪水起源と思われる灰色砂が堆積している。4号溝に切られ、走向が全く異なることから、I期を含めII期水田跡以前の水田跡に伴う可能性を考えるべきか。規模は、上幅1.8～0.7m、深さ10cm前後。西端と東南端の延長部分は検出できなかった。7号溝は6号溝の北側に沿って15mほど検出された小溝で、堆積土は6号溝に近似する。上幅は0.4m、深さ10cm前後。両者は1m前後の間隔で、畦に伴う両側の水路と考えることも可能だろう。なお、7号溝の下位からは、S字甕と器台が出土した4世紀代の井戸(H区1号井戸)が検出されており、本溝がそれ以降のものであることが判明している。6号溝も同時期ならば、I期水田跡以降でII期水田跡以前、暦年代で5世紀代のある段階で営まれた水田跡が存在したことを示唆するものであろう。この間のテフラや洪水層が見られないために水田面の検出は不可能だが、古墳前期のI期水田跡から後期(6世紀初)のII期水田跡へ移り変わる変遷過程を解き明かす上で鍵を握る存在であり、今後に於ける明確な検出が望まれる。

なお、4号溝は同時期と考えられるG区7号溝から30m離れて平行しており、この両者がG～H区のII期水田跡を灌漑する水路網の一部を担っていたと考えていい。一方、6号溝は西端の延長部分でI期水田跡に伴う基幹水路としたG区6号溝と交差する位置関係にあるが、その重複の有無や、新旧関係を明確にすることはできなかった。従って、G区6号溝との同時性も不明である。



第101図 H区4・6・7号溝

H区及びI区の溝(第102~109図 PL.47・48)

古墳時代前期に属すると思われる溝群がH区北東部からI区南西部にかけて検出された。

H区20号溝は、N-60°-Wの走向でほぼ直線的に南東方向へ走る。規模は上幅2.6~1.0m、深さは30~10cmを測る。断面は浅い皿形で、小さな凹凸が著しい。底面レベルはほとんど水平に近く、標高で75.0mを測る。埋土にはシルトと砂、その上にAs-C混土が堆積する。この堆積状況はG区6号溝と共通する。シルト層・砂層からは多量の土器が出土しており、水流があったとしたならば、大いにそれを阻害したろうと思われる。

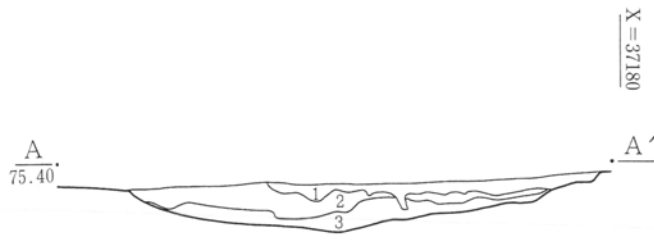
20号溝から派生して南西側に流れる小溝群が検出された。調査段階で**31~40号溝**と命名したが、それぞれが独立した機能を果たしたのではなく、同一の性格をもつと推測される。規模は上幅15~30cm、深さ5~10cmを測る。埋土にはAs-C混砂質土が堆積する。走向は、等高線に直交して南西に延びるものと、蛇行して南下するものの二方向がある。これらはいずれも、20号溝の底面と同一かあるいは底面を削り込んでやや低い位置から流下する。そして、20号溝から10mほど南西に離れた地点で互いに合流し不整形のくぼみになるようである。それ以南については調査区外になるため確認できなかった。出土遺物は古墳前期の土器片と完形の勾玉1点がある。堆積土と出土遺物の対比から、これらの小溝群が20号溝と同時存在した可能性は高い。ただし、以上のような形状から、人為的な目的を果たしたというよりも、オーバーフローした自然流水による侵食溝と考えたい。

H区27~29号溝は20号溝から西方に20m離れて検出された。28・29号溝は20号溝に併走し、27号溝は直交して走る。規模は、上幅35~50cm、深さ10~15cmでほぼ同規模といってよい。埋土は27号・29号溝がシルト質粘土で、28号溝がAs-C混砂層である。遺物は出土していない。規模は小さいが、直線的で掘方がしっかりしていること、等高線と平行して走ることから、人為的な溝と考えられる。ただし埋土

の特徴から、27号・29号溝は古墳時代に後出する8世紀段階に帰属する可能性もあることを付記しておく。

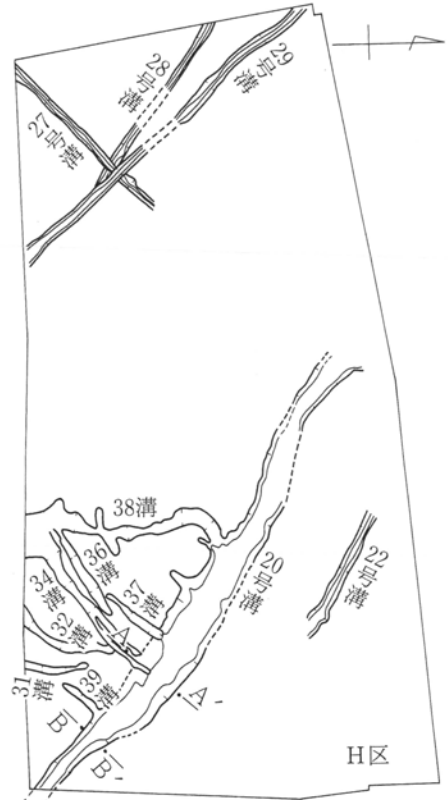
I区48号溝は、I区南半部N-70°-Wの走向で南東流し、途中でN-50°-Wに弱く屈曲する。規模は、上幅1.1~3.9m、深さ50~30cm。断面は浅い皿形や逆台形状で、総じて不整形な印象が強い。埋土は下層にシルトか砂層、上層に黒~暗褐色土が堆積する。土層断面のA-A'では、暗褐色土堆積後に再び浅い溝が形成され、下底部に砂質土が堆積する。これは、一度洪水等により埋没した後に再び溝として復旧したか、浅い溝が残っていたかを示すものだろう。埋土からは、弥生時代中期後半と多量の古墳時代前期の土器が出土している。前者は破片主体であるため、本溝に帰属するとは言い難い。

H区20号溝とI区48号溝は走向の延長方向、規模、形状、埋土、遺物の時期と出土状況の対比から、同一の溝であることは疑いない。本溝は北東側(左岸)が微高地で同時期の居住域となっており、南西側(右岸)は黒色粘質土の堆積する低地である。地形境界に沿っていることを重視すれば、南西の低地を水田域と想定して、その灌漑水路とすることも可能だろう。しかし、西方約150m地点の主幹水路と想定したG区6号溝と比べて、形状が著しく不整形で、底面レベルや規模も一定していないことから、灌漑水路を目的とした溝とするのは疑問である。また、多量の土器堆積は大いに水流を妨げるはずで、その開削期はともかく、後年水路としての機能は持ち得なかったと考えたい。さらに本溝南西側の低地部はG区6号溝西側と比べてやや傾斜面となっており、同時存在と思われる住居跡(H区3・4号住居跡)や井戸が存在している。このことから、本溝とG区6号溝との間は水田ではなかった可能性がたかく、従って本溝の性格は、灌漑水路というよりも、居住域からの排水施設や廃棄場所として、また居住域を圍繞する施設と解釈したい。



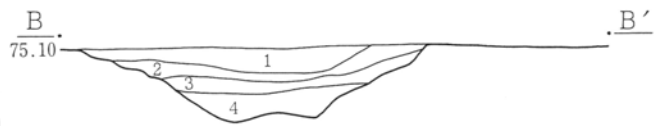
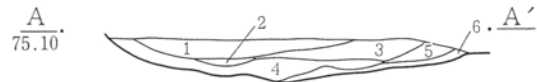
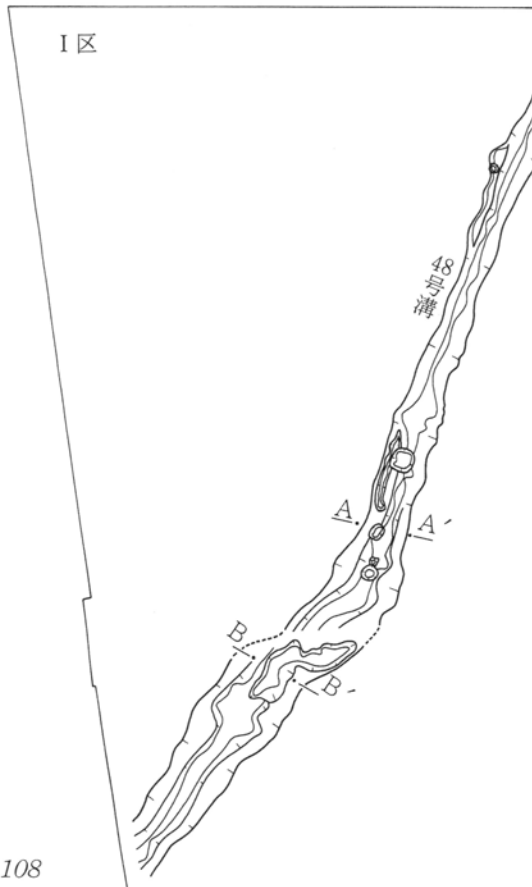
0 1:50 1m

- 1 黒色土 シルト質で、上位にHr-FAがのる。
- 2 暗灰色砂 シルト質～中砂で、As-Cを含む。
- 3 灰褐色砂 粗砂多く、As-Cを含む。土器多く堆積。
- 4 暗灰色シルト質粘土 As-Cを含む。



Y = -64200

Y = -64200



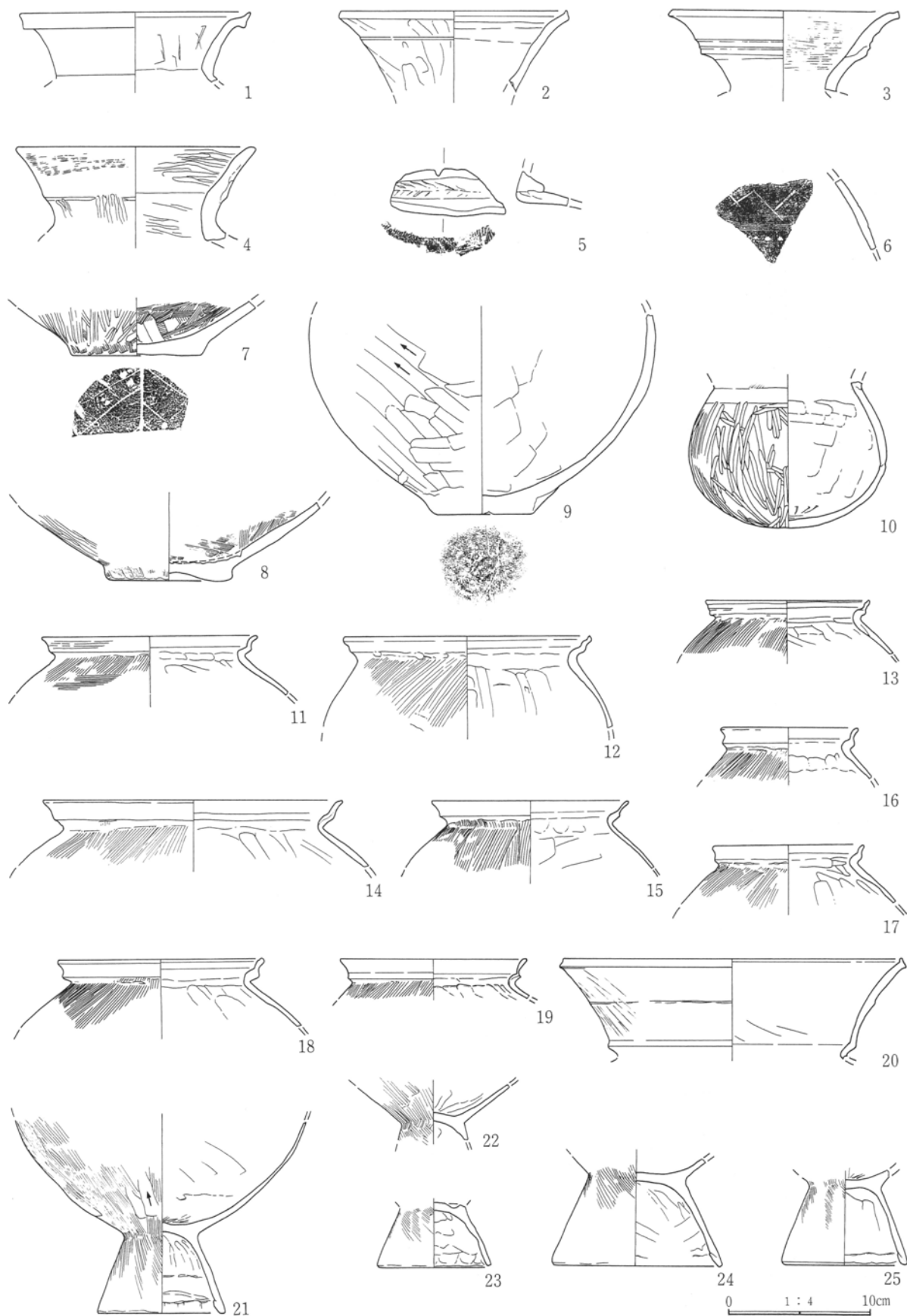
0 1:50 1m

- 1 黒褐色土 As-Cと酸化鉄粒を含む。
- 2 暗褐色土 シルト質で、砂を少量含む。
- 3 暗褐色土 As-Cを多く含む。
- 4 黒褐色砂質土 As-Cを多く含む。
- 5 暗褐色土 シルト質で、As-Cはほとんどみられない。
- 6 暗褐色砂質土 As-Cはみられない。

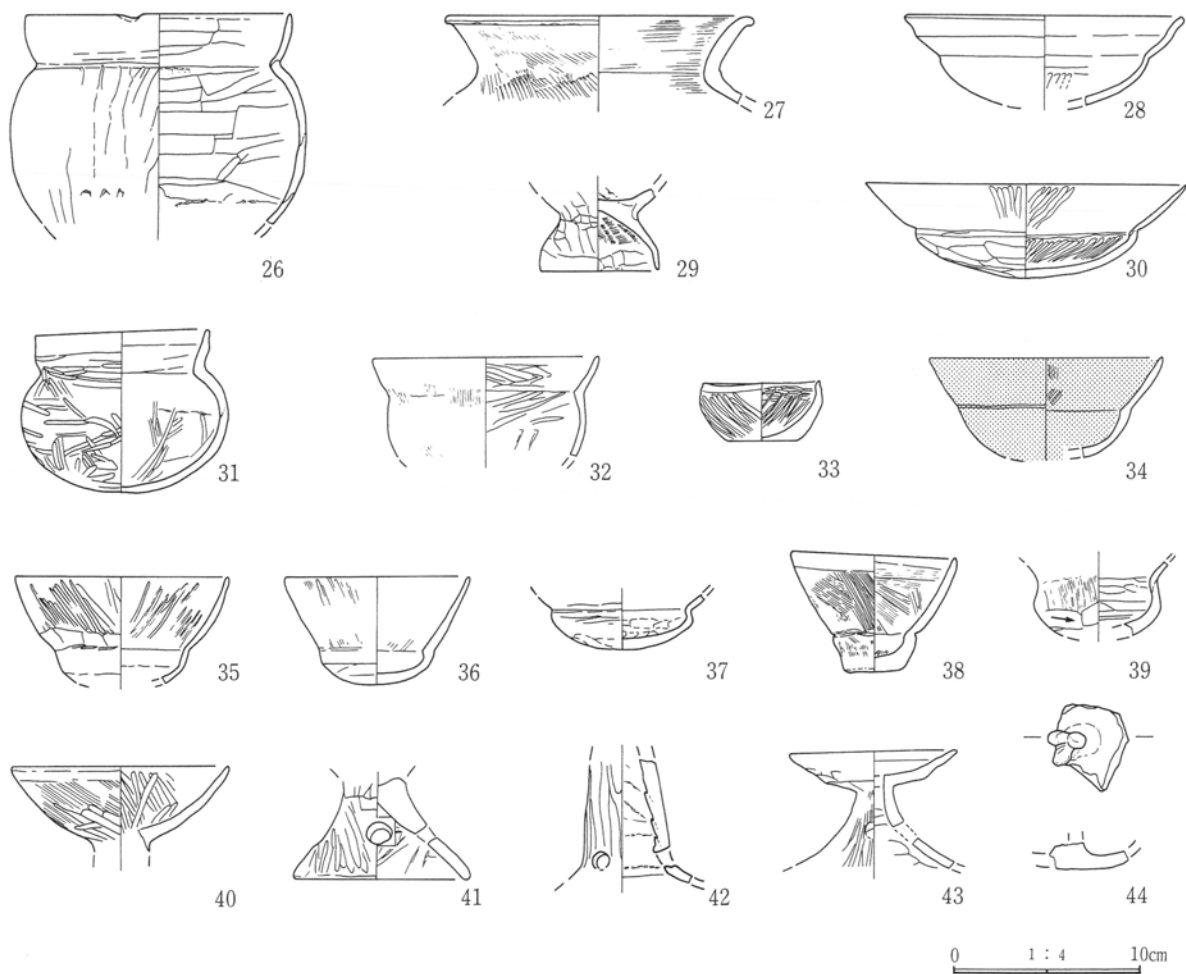
X = 37180

108

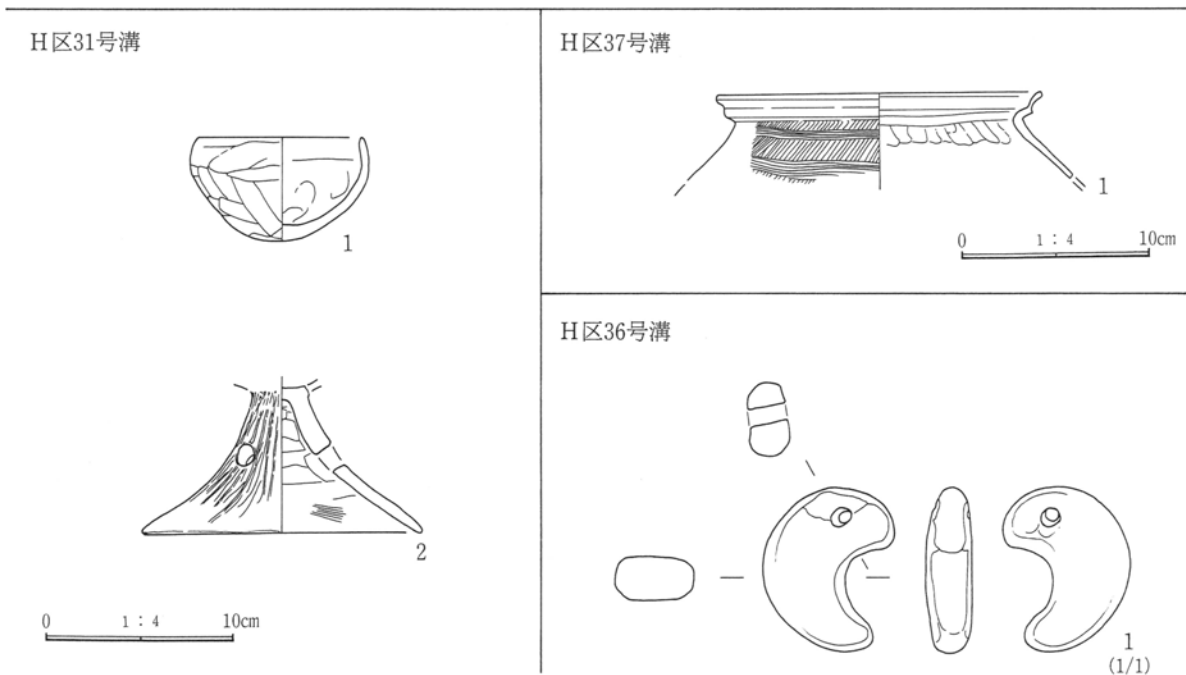
第102図 H・I区古墳時代の溝群



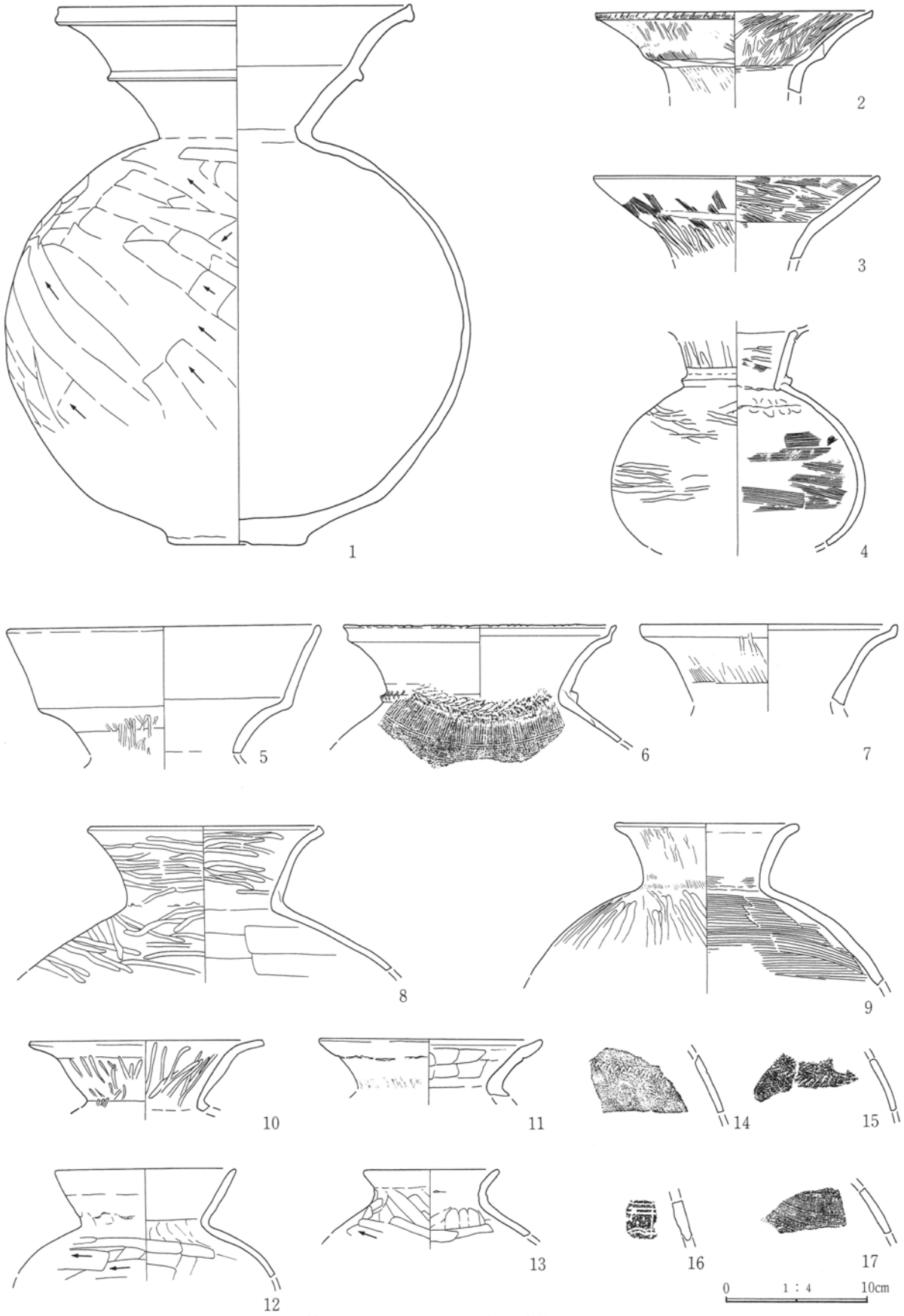
第103图 H区20号沟出土遗物(1)



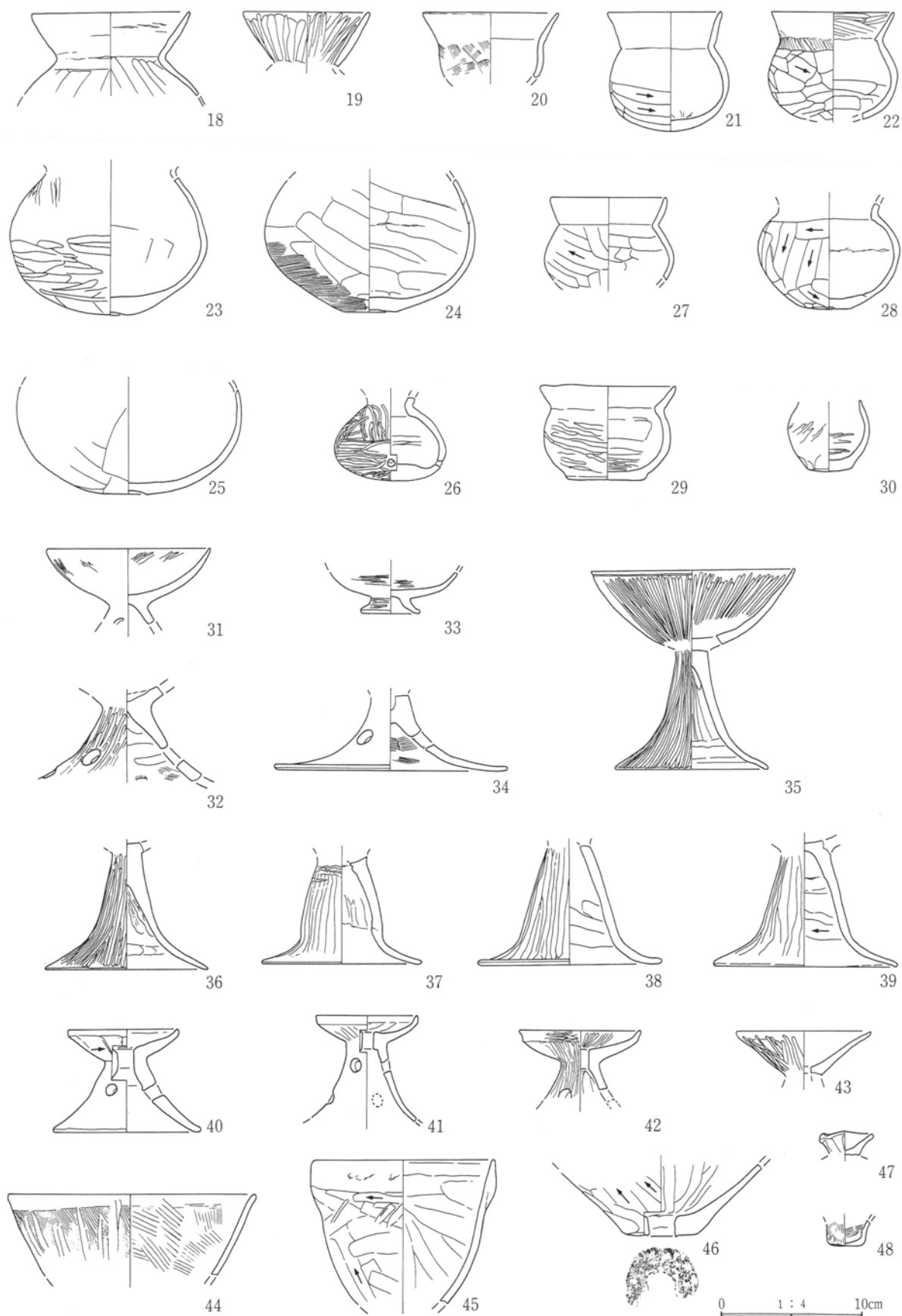
第104图 H区20号沟出土遗物(2)



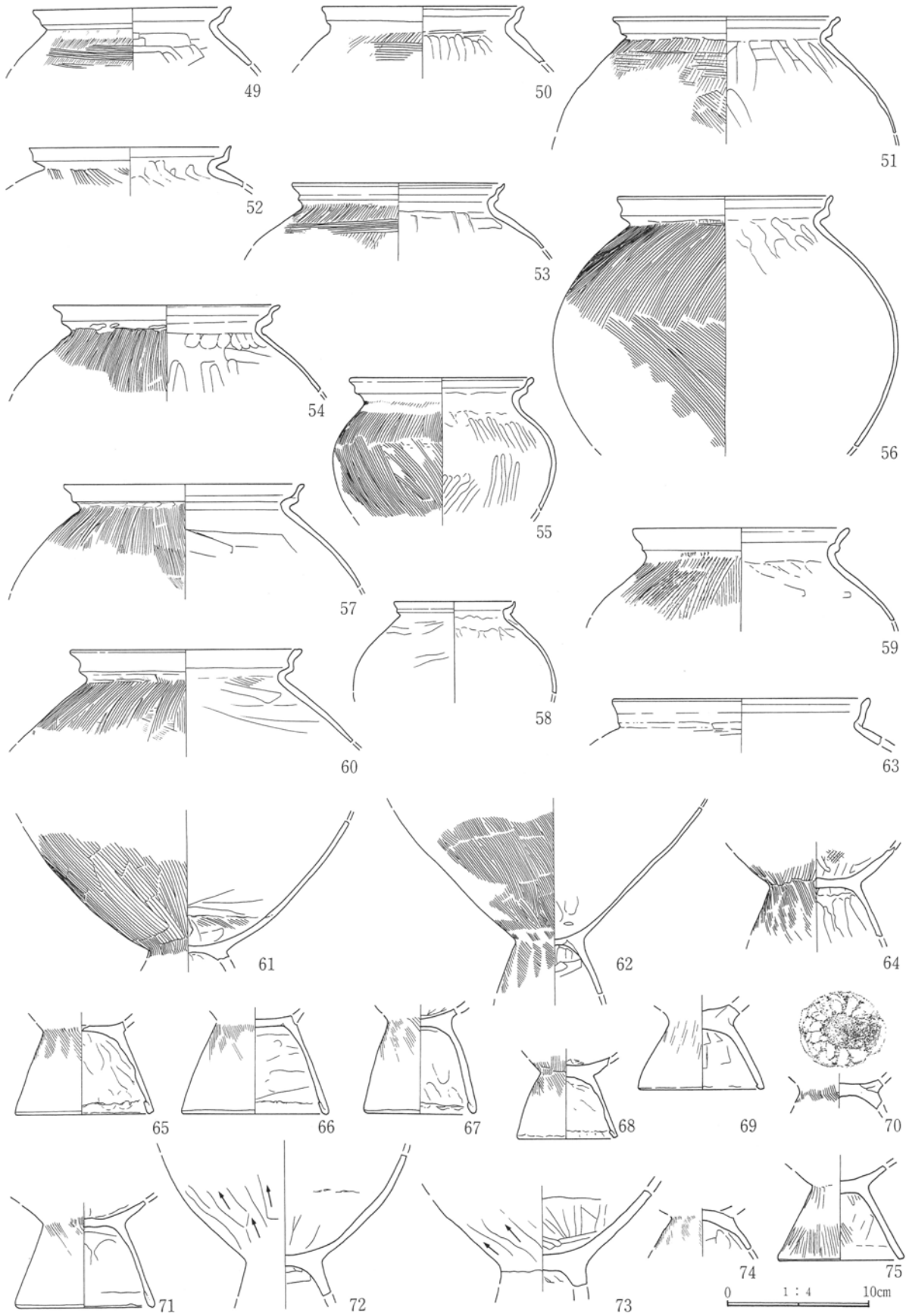
第105图 H区31·36·37号沟出土遗物



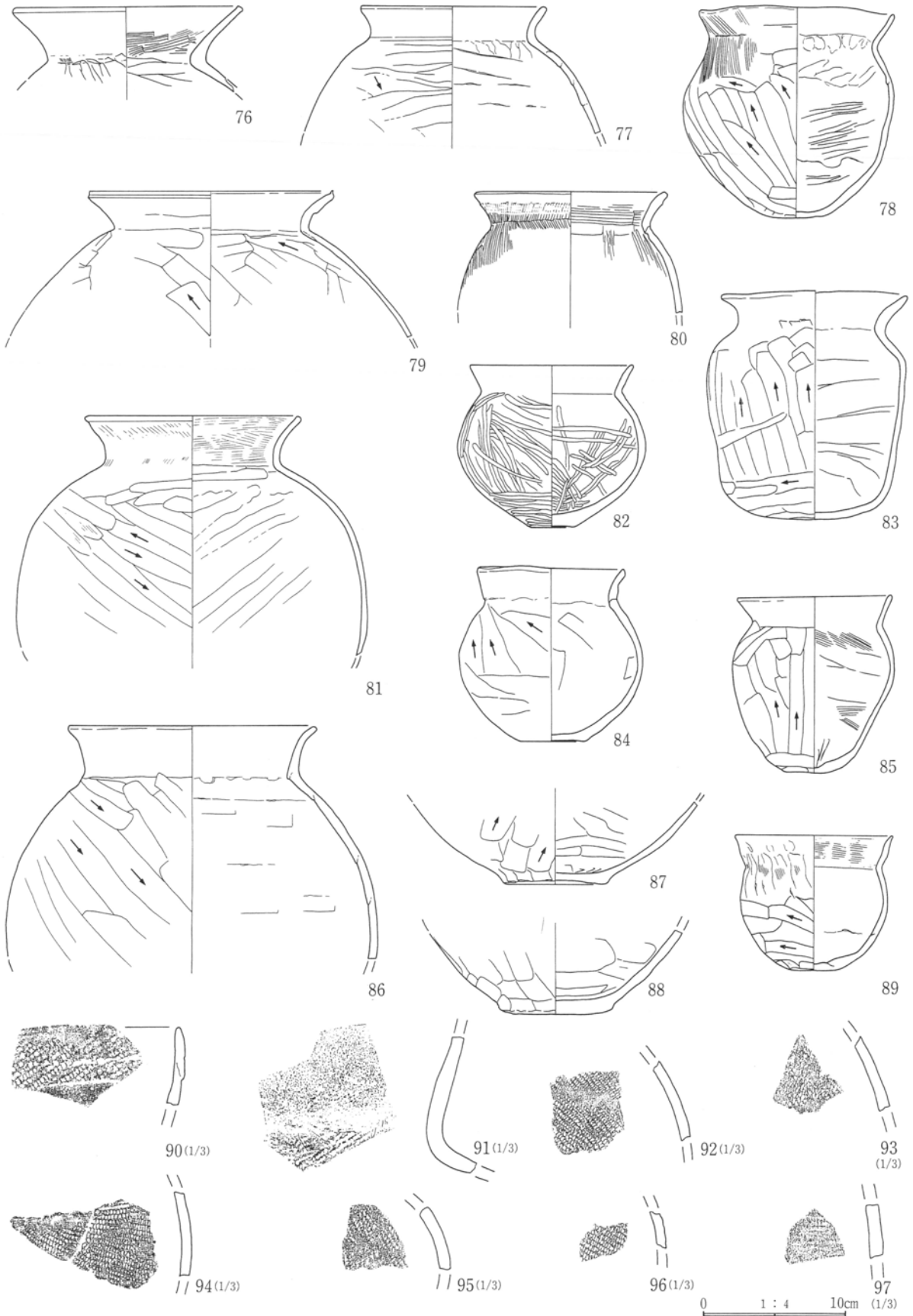
第106图 I区48号沟出土遗物(1)



第107图 I区48号沟出土遗物(2)



第108图 I区48号沟出土遗物(3)

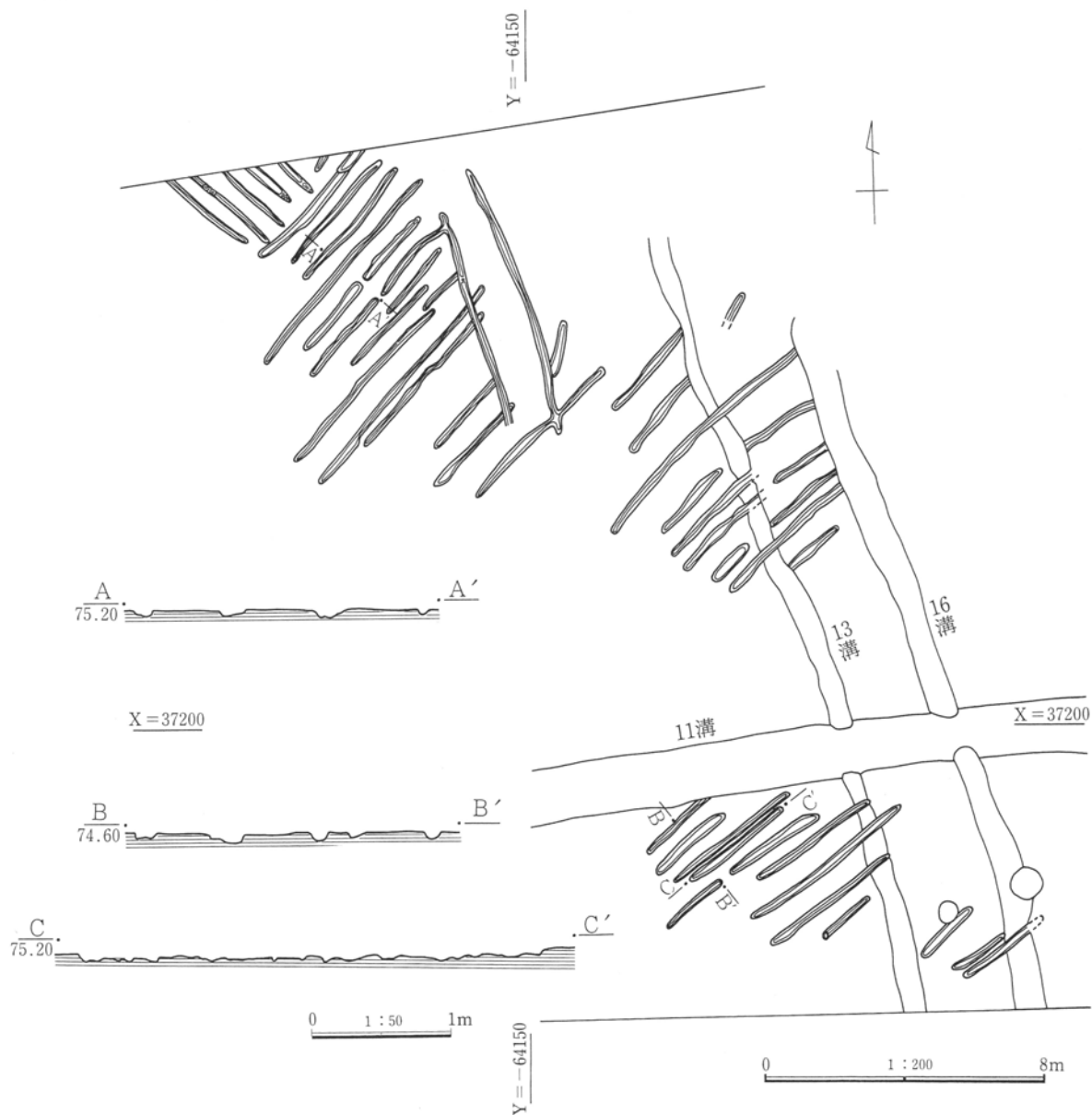


第109图 I区48号沟出土遗物(4)

I 区畠跡 (第110図 PL.49・50)

I 区北半調査区の中央付近に、南北25m、東西20mの範囲で畠の「サク」痕と思われる平行する小溝群を検出した。一条単位の規模は、上幅10~30cm、深さ5cm前後を測る。埋土にはAs-Cを含む黒褐色砂質土が堆積する。溝群の走行は、北西部で5条の溝がN-50°-Wを示し、そこから南東の溝群は、N-40°-Eを示す。両者はほぼ直交方向に配列していることになる。畝部分に相当する溝間距離は50~80cmで、60cm前後が最も多い。また、間隔が10cm以下の部分もみられるが、これは同時に掘られたのでは

なく、時期をずらして掘りこまれた溝と考えられる。なお、溝の長さは最長で7.2mを測るが、調査による削平のため浅い部分は検出できなかった可能性が高く、本来の長さを推測することは難しい。溝の横断面は箱形や船底形など一定しない。縦断面は、角度が一方に偏った浅い三角形の小さなくぼみが連続する。おそらく鋤あるいは鍬によって一定方向からの「サク切り」作業を行った結果と思われる。遺物は出土していないが、埋土の特徴から古墳時代前期と考えておきたい。



第110図 I 区畠跡

I 区の溝群 (第111・112図 PL.53)

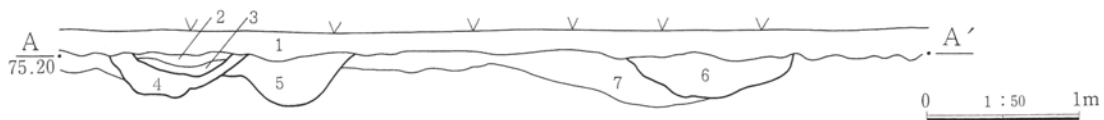
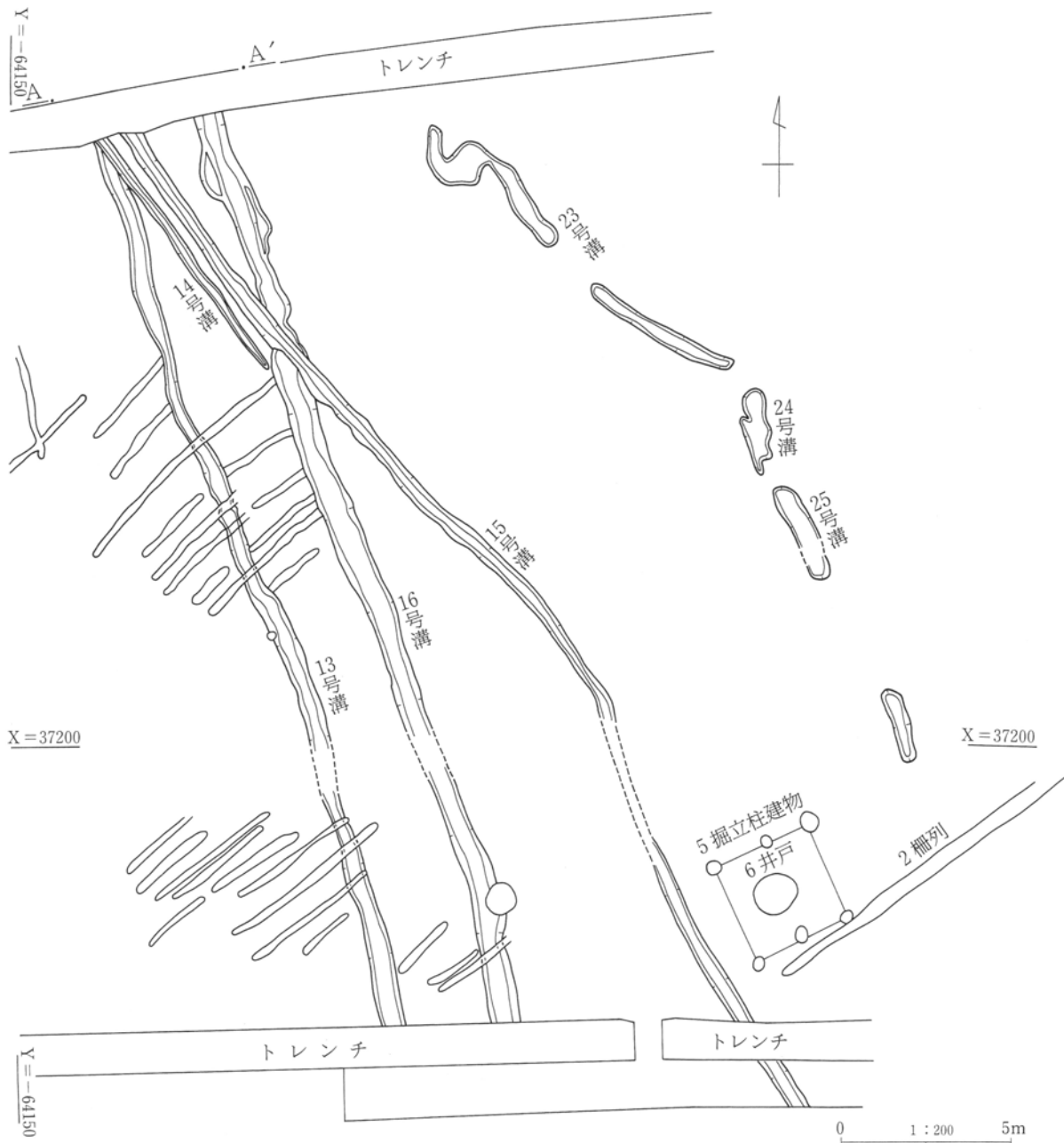
I 区の中央部、比較的標高の高く (調査確認面で 75.15~75.10m) 平坦な地点で、南北方向ないし南西方向に走る小規模な溝が 7 条検出された。ここで取り上げたのは、13号溝・14号溝・15号溝・16号溝・23~25号溝・40号溝・44号溝である。13号溝と16号溝は N-20°-W で直線的にのびる。13号溝の規模は、上幅が 0.3~0.7m、深さは北端の土層断面で 25cm、南側では上端-底面比高差 14cm 前後を測る。実際の底面標高は南北端 28m 間でほとんど差がない。断面形は「蒲鉾」形で、比較的整っている。13号溝の埋土は As-C を若干含むシルト質砂。16号溝は、上幅 0.6~1.0m、深さは北端の土層断面と南側における上端-底面比高差から 30cm 前後と推測される。断面は浅い「蒲鉾」形。底面標高は 74.98~74.83m と南北端 28m 間で 15cm の比高差があり、南側へ傾斜する。埋土は As-C 混在のシルト質砂である。13号溝と16号溝はほぼ同規模で平行して走っており、埋土も近似することから、ほぼ同時存在した 2 条平行溝ととらえることができる。両者はほぼ 3m の間隔をあけて直線的に走っており、この形態からは「道路に沿った側溝」と考えがちだが、本溝の属する 4~5 世紀でかかる側溝を備えた直線道の存在を寡聞ながら知らない。時間的に前後して掘り直された可能性も考えておくべきだろう。23~25号溝はそれぞれが短い溝状土坑だが、本来は断続的に続く一条の溝と考えたい。この場合、走行は蛇行して南東にのび、西側に走る15号溝とほぼ並行する。規模は上幅 50~70cm、深さ 10~15cm を測る。底面は凹凸がありレベルも一定しない。埋土には As-C 混土が堆積する。14号溝と15号溝は N-35°-W でやや屈曲しながら南東に走る小溝で、14号溝は長さ 8m ほどで切れる。14号溝の規模は、上幅 60cm、深さ 15cm を測る。15号溝は上幅 80cm、深さ 30cm を測る。埋土は14号溝が Hr-FA 混土、15号溝が As-C 混土のうへに Hr-FA 混土が乗る。新旧関係は、13号溝→14号溝、16号溝→15号溝が重複関係から判明している。遺物は、16号溝から古墳時代前期に属する S 字甕と弥生土器の

樽式と思われる高杯、15号溝からは 6 世紀代の杯が出土している。

I 区南半調査区では古墳時代に属するものとして 40号溝・44号溝が検出された (付図 2 参照)。40号溝は N-20°-W の走行で、約 8m の長さを測る。規模は、上幅 30cm、深さ 28cm 前後を測る。44号溝は N-34°-E の走行で 19m の長さで直線的にのびる。規模は、上幅 40cm、深さ 25cm 前後を測る。いずれも埋土には As-C 混黒色土とローム塊を含む。

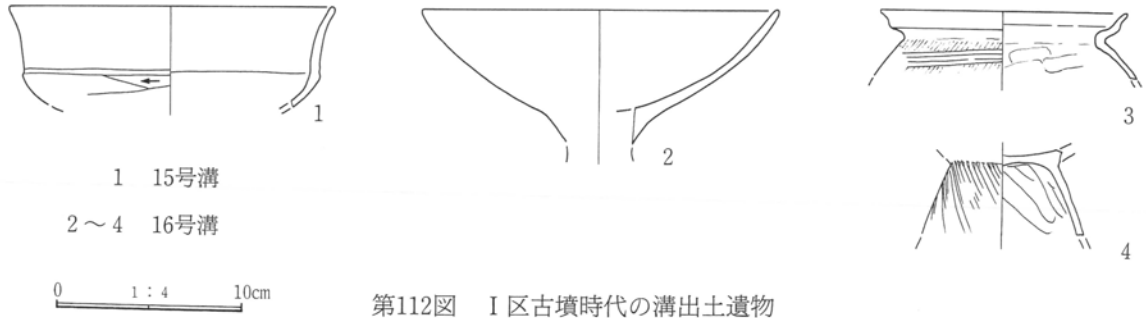
以上の溝のうち13号溝・16号溝・23~25号溝・40号溝・44号溝は 4~5 世紀、14号溝・15号溝は 6 世紀代のものと推測されるが、それぞれが同時存在した証拠は確認できない。また周囲に分布する住居や掘立柱建物跡、井戸等の遺構群との関係も不明である。13号溝・16号溝が畝跡と重複すること、44号溝が 22号住居跡と重複することからすれば、4~5 世紀の居住域と考えられる I 区において何度かの構造的な変遷を遂げたことが推測される。それは住居跡などの建物同士の重複からも判明していることだが、残念ながら重複部分の新旧関係が確認できないため、ここでは同時存在の遺構群を抽出することはできない。従って、4~5 世紀という時間幅のなかで存在した遺構群として図示するにとどめ、その景観復元もこれだけの時間幅を念頭に置いて行う必要がある。

以上の溝群の性格については、水路あるいは集落にともなう区画溝などが考えられるが、長さが短く断絶あるいは断続する 23~25号溝・40号溝・44号溝は、水路というより何らかの施設を区画する溝と考えたい。特に 40号溝・44号溝は規模や走行・埋土が前述の 2 号柵列の溝に近似する点が注目される。13号溝・15号溝・16号溝は、形状や洪水起源の可能性がある埋土の特徴から、水路としての機能を推測させるが、微高地で居住域の中央部を縦断することから、灌漑用水路とは考えにくく、排水や地割りなどの性格を想定した方がよいだろう。



- | | |
|---|---|
| 1 暗褐色土 表土。 | 5 暗灰色土 シルト質で、As-Cを含む。15号溝埋土。 |
| 2 暗黄色土 砂質で、Hr-FAを多く含む。14号溝埋土。 | 6 暗灰色土 シルト質で、0.5~1.5mm大のパミス (給源不明)を含む。16号溝埋土。 |
| 3 灰黄色土 Hr-FAを含む。14号溝埋土。 | 7 灰色土 シルト質砂。古墳時代遺構の地山。 |
| 4 灰黒色土 シルト質で、1~2mm大のパミス (給源不明)を含む。13号溝埋土。 | |

第111図 I区古墳時代の溝群

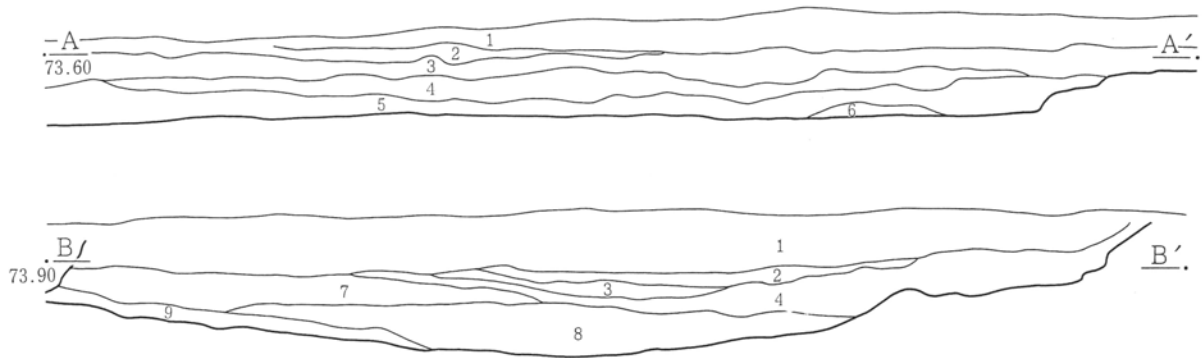


第112図 I区古墳時代の溝出土遺物

J区河川跡 (第113~124図 PL.54・55)

J区の南半調査区で、古墳時代の埋没河川跡の一部が検出された。この地点は昭和40年代以前に藤川が蛇行して流れており、本河川跡も「古藤川」の河道であったと考えて間違いなからう。現藤川は改修工事によって直線的な流路をとっており、J区東端を北西から南東方向に流れる。この改修工事以前の河道は第114図に示したように、J区北半西側（この部分は河川による浸蝕と多量の工事埋土のため発掘調査ができなかった）から大きく蛇行して南東方向へ抜けていく流路をとる。検出された河川跡はこの右岸堆積物によって埋没する。下層には地山の前橋泥流堆積物に含まれる礫やシルト、中位には20~30cmの厚さで黒泥土、上位に洪水堆積物と思われる泥土・シルト・砂の互層がみられ、その上を灰色シルト層が覆っている。この灰色シルト層は、その下位

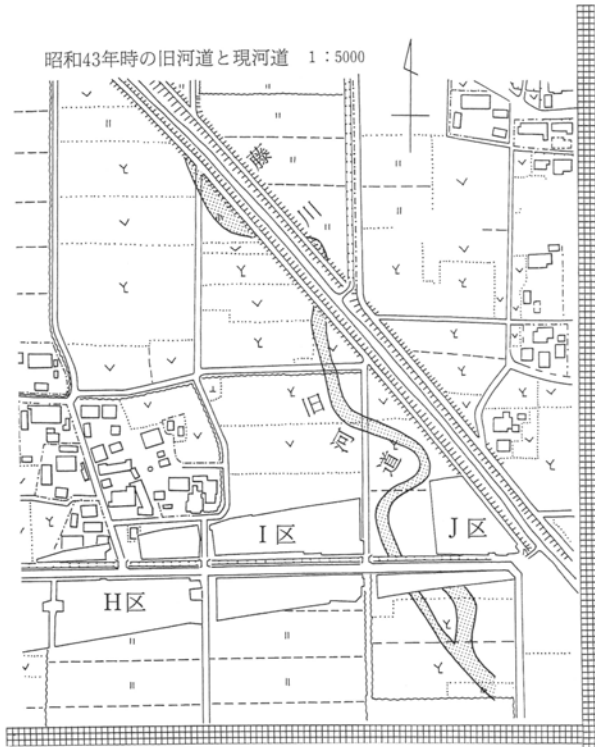
で検出されたE区5号溝出土遺物(第210図)から8世紀以降の堆積であり、それ以前にはすでにこの地点の河道は埋没して別の流路をとっていたと考えられる。なお、主に水流のあった河道は1号と2号の2条認められ、1号は幅15m以上と広く、2号の幅は5~7mできわめて狭い。土層断面から確認される深さは、両者とも1.4mほど(標高約72.90m)である。遺物は、最下層から出土し、特に1号河道の右岸際に集中する。内容は、4世紀中葉~6世紀初頭の土器、鍬・鋤・斧柄・弓状丸木棒・建築材の一部・杭などの木製品、管玉・切子玉・小玉などの玉類、紡錘車、自然遺体としてヒョウタン・モモ・ウリなどの植物種実類がみられる。1号河道では4世紀代の土器が圧倒的に多く、2号河道には6世紀初頭の土器が含まれるという出土傾向を示す。



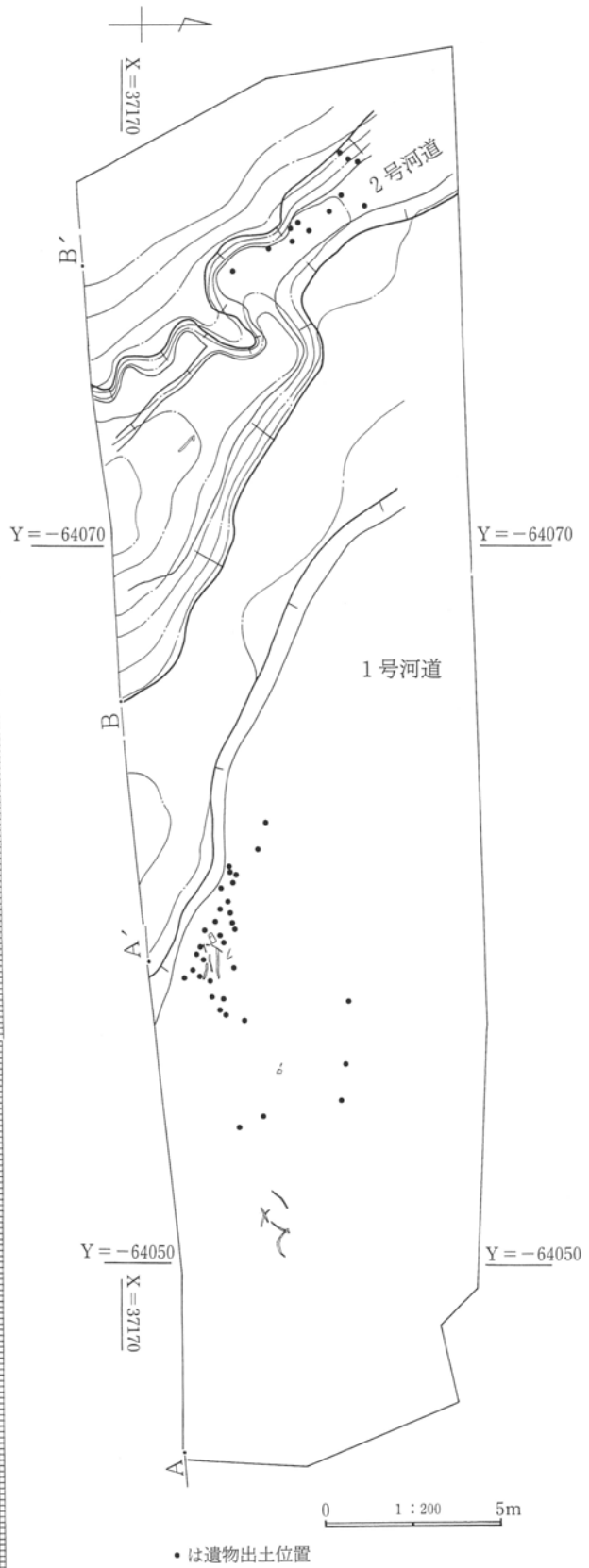
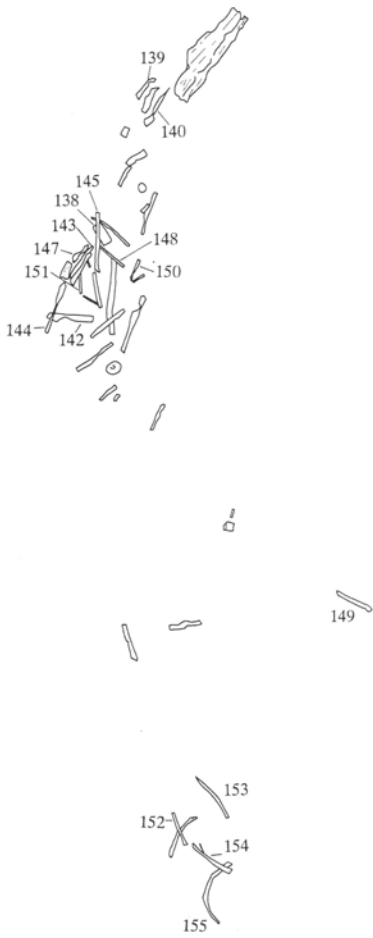
- | | |
|------------------------------------|------------------------------|
| 1 黒灰色土 粘性を帯び、均質。As-B下に相当。8世紀以降の地山。 | 5 黒色土 泥炭質で、下位に砂礫を含む。 |
| 2 暗灰色土 粘性強く、部分的に砂層を挟む。 | 6 青灰色砂礫 河底堆積層で、4世紀代の土器を多く含む。 |
| 3 暗灰色砂 榛名二ツ岳のパミスを含む。 | 7 黒褐色土 砂と榛名二ツ岳のパミスを含む。 |
| 4 黒灰色土 砂・シルト・泥土の互層。洪水堆積物だろう。 | 8 黒褐色土 泥炭質で榛名二ツ岳のパミスを少量含む。 |
| | 9 灰褐色砂礫 川底堆積層。 |

0 1:80 2m

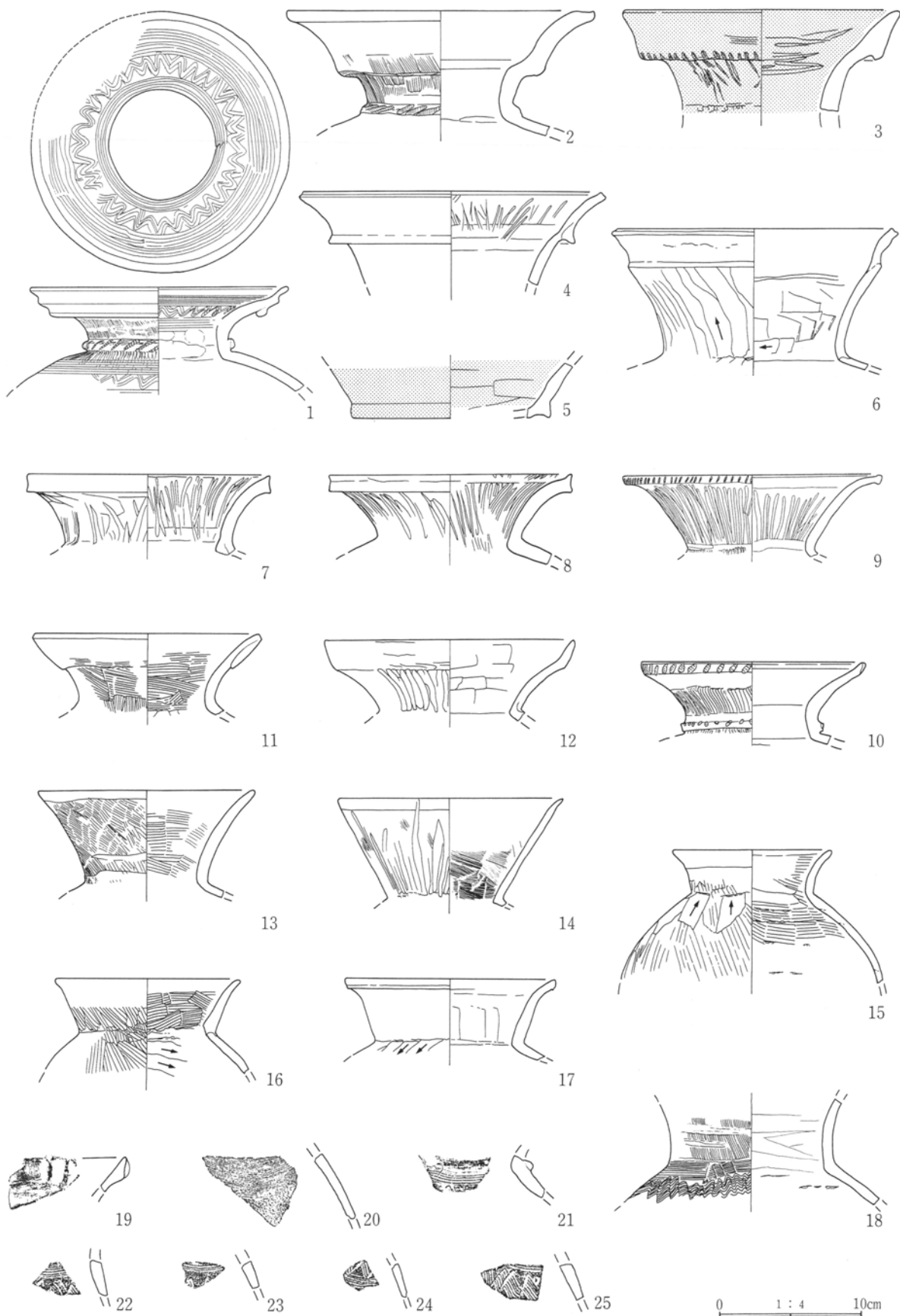
第113図 J区河川跡土層断面



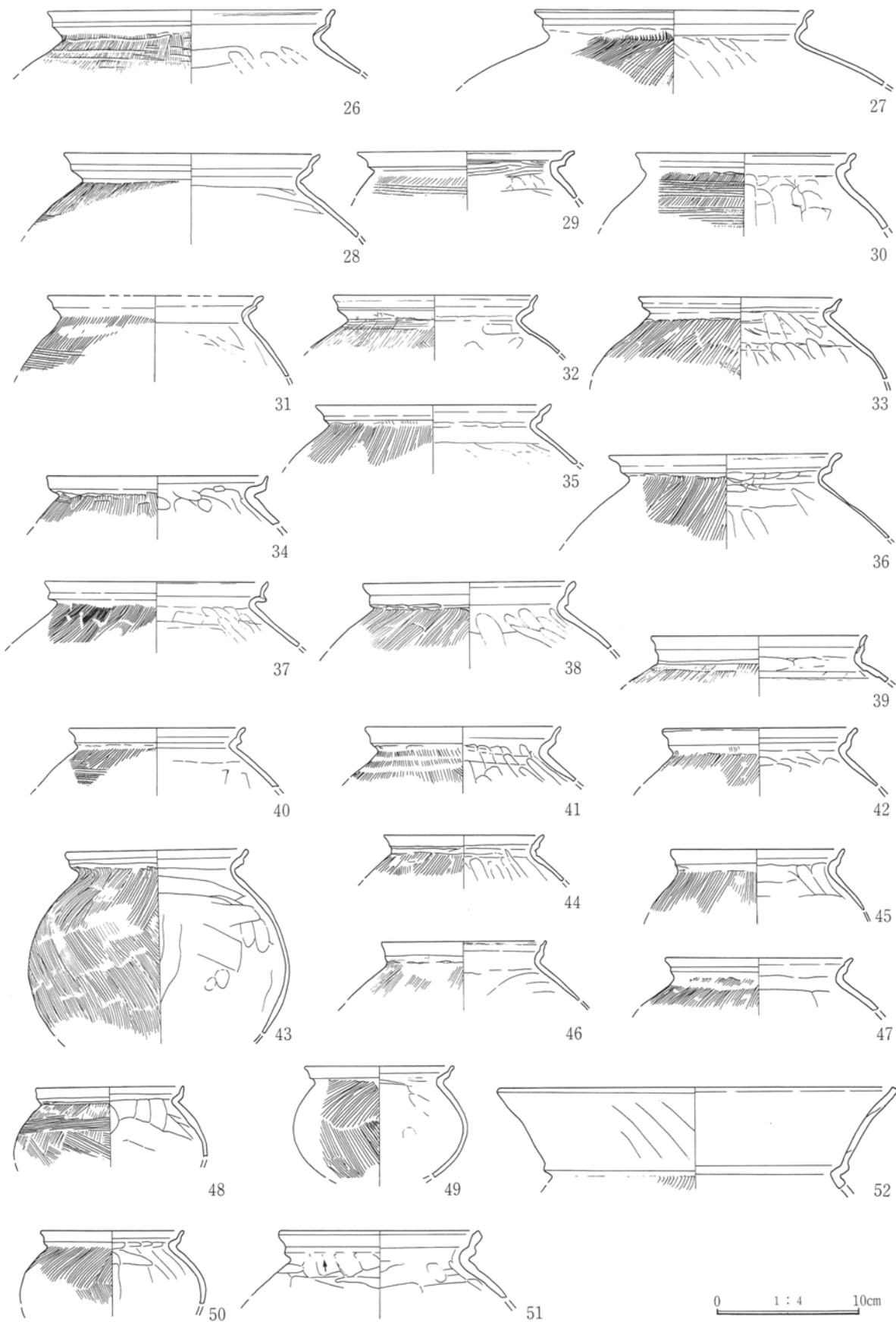
遺物出土状況拡大図 1:100



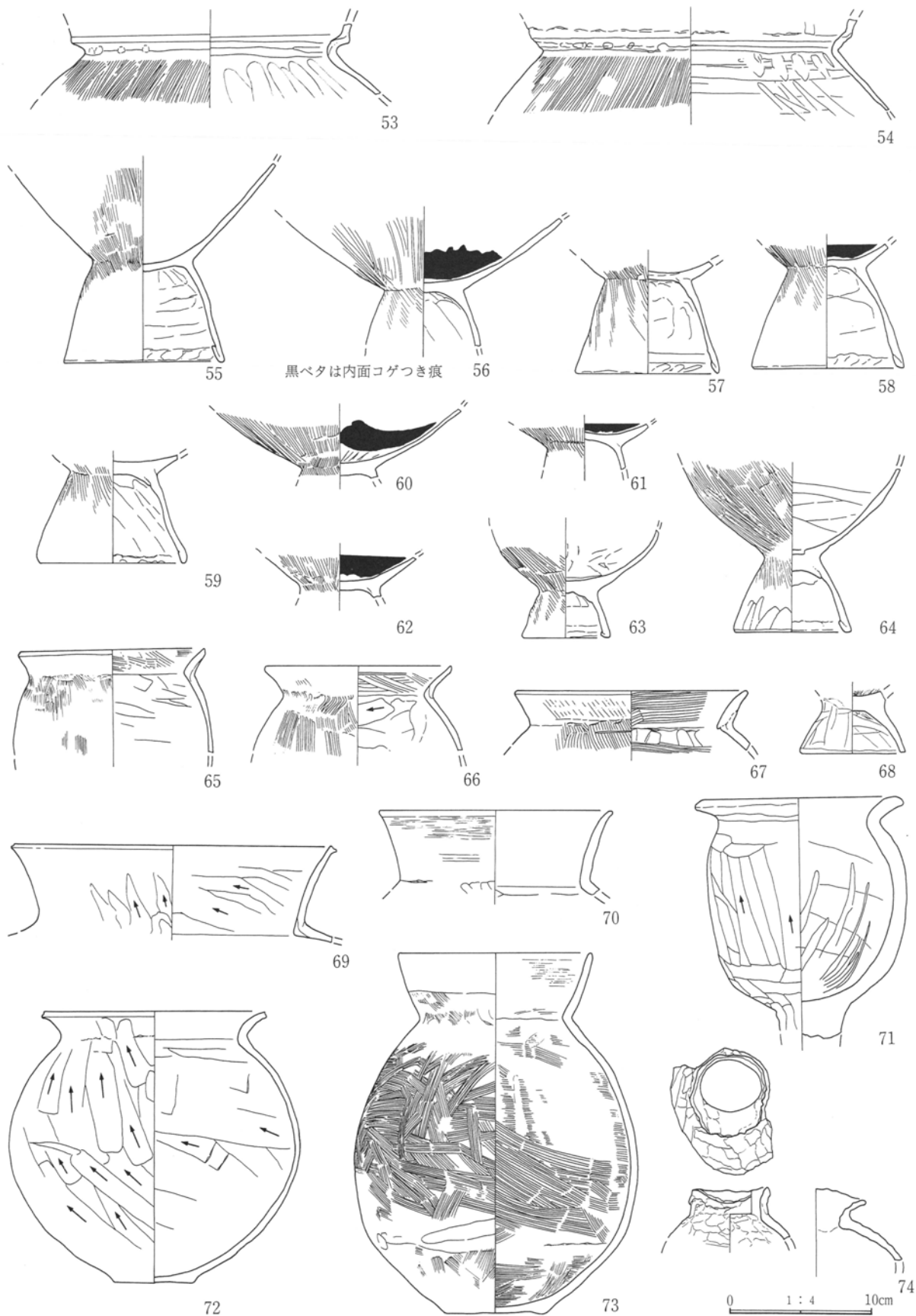
第114図 J区河川跡



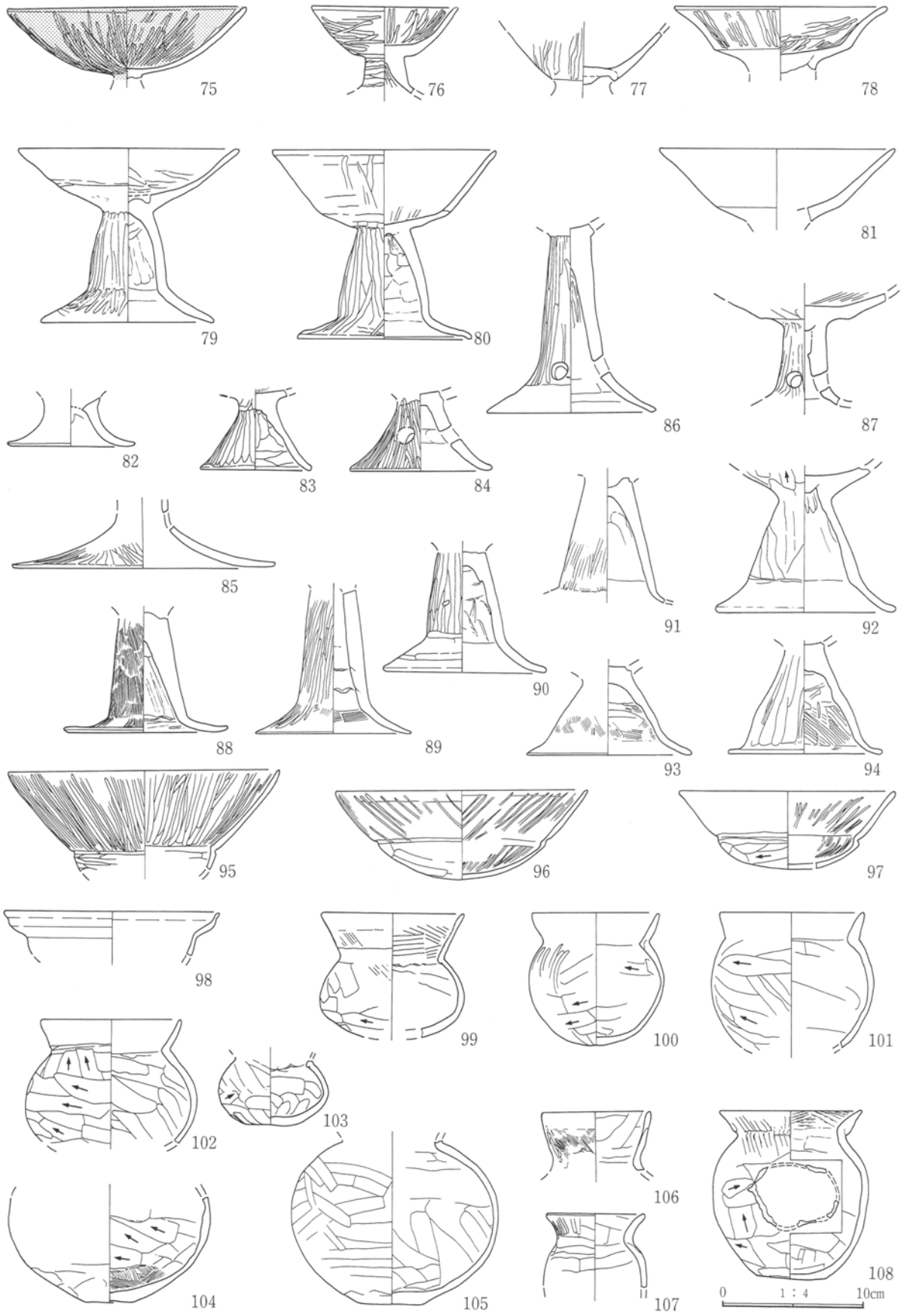
第115图 J区河川跡1号河道出土遺物(1)



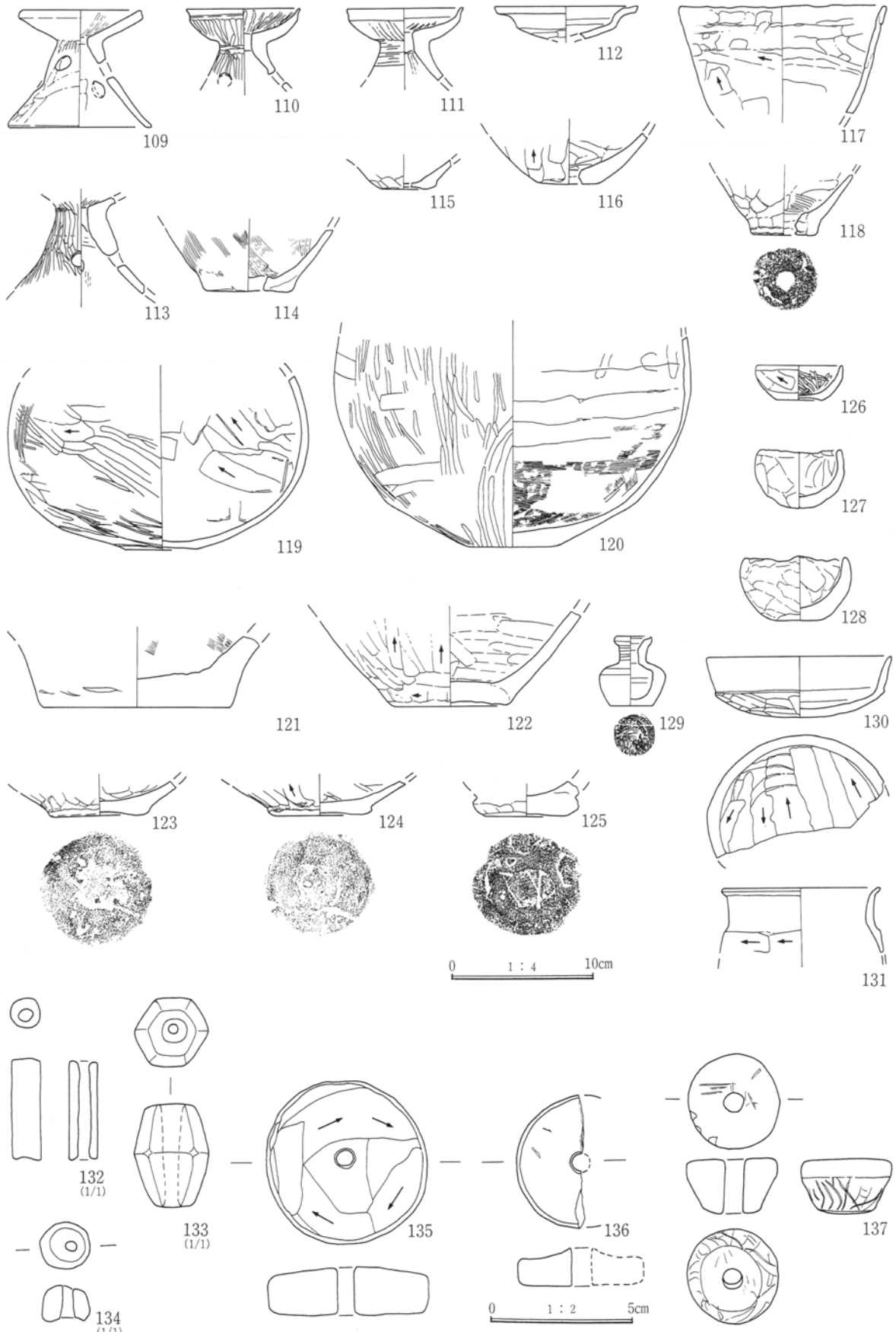
第116图 J区河川迹1号河道出土遗物(2)



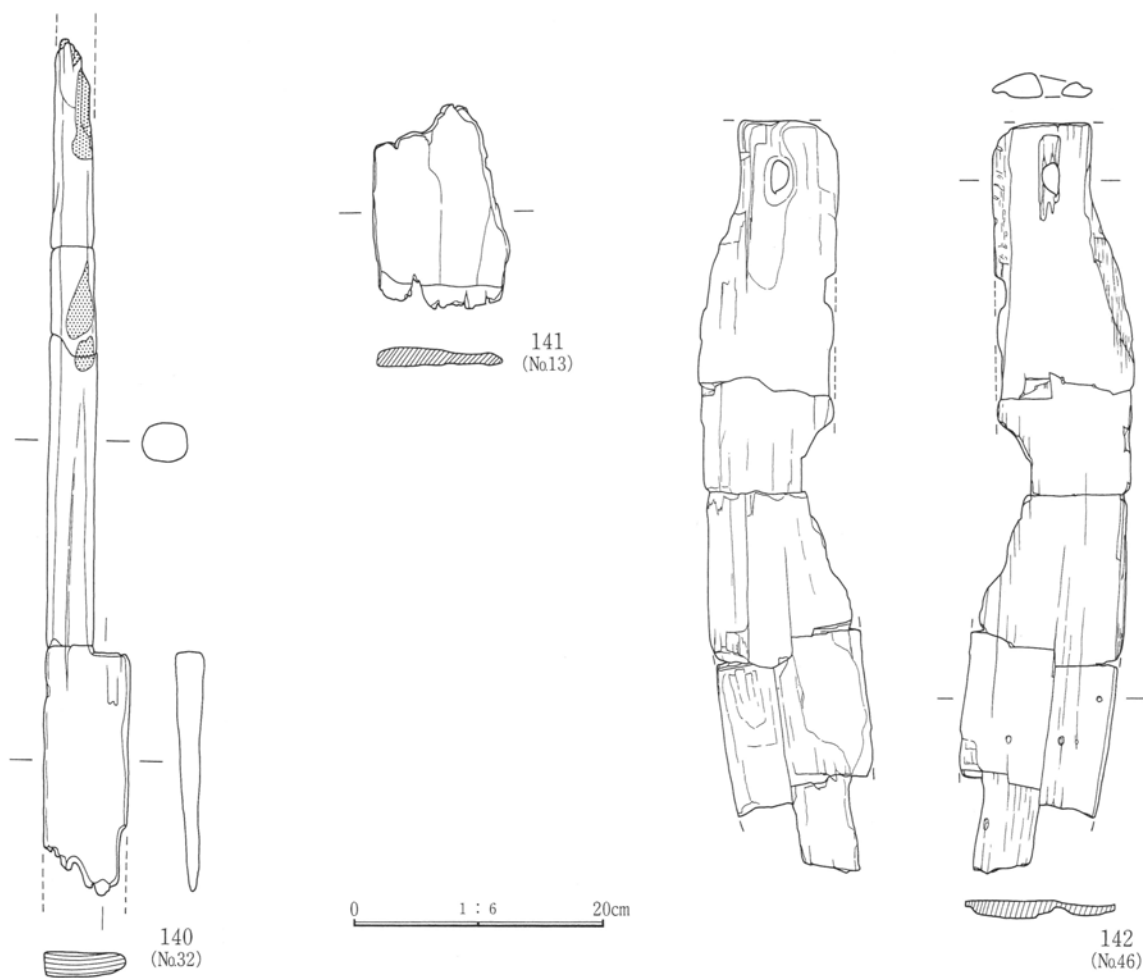
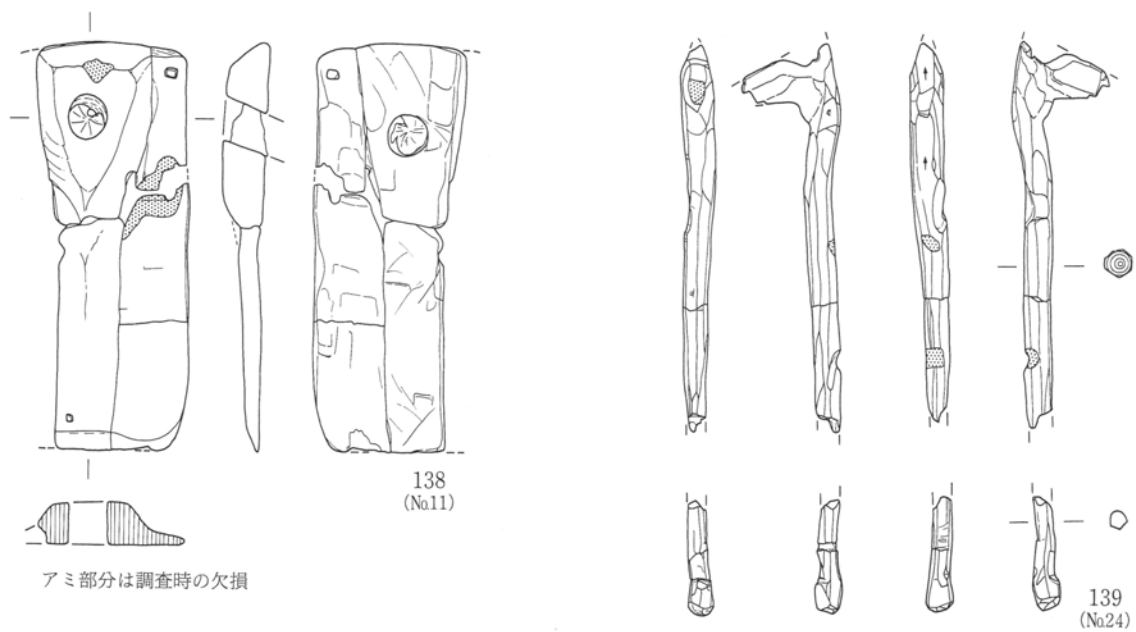
第117図 J区河川跡1号河道出土遺物(3)



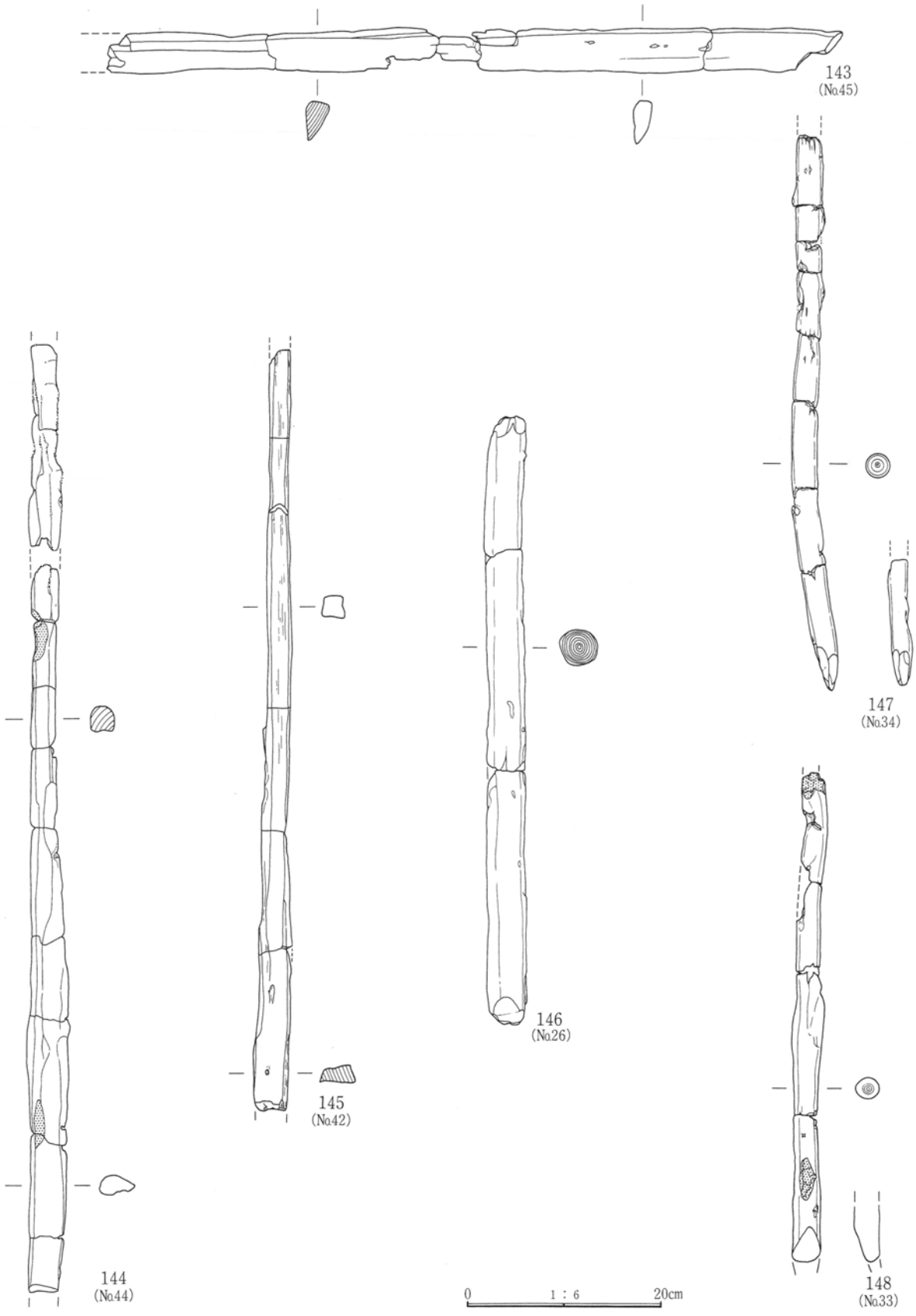
第118图 J区河川迹1号河道出土遗物(4)



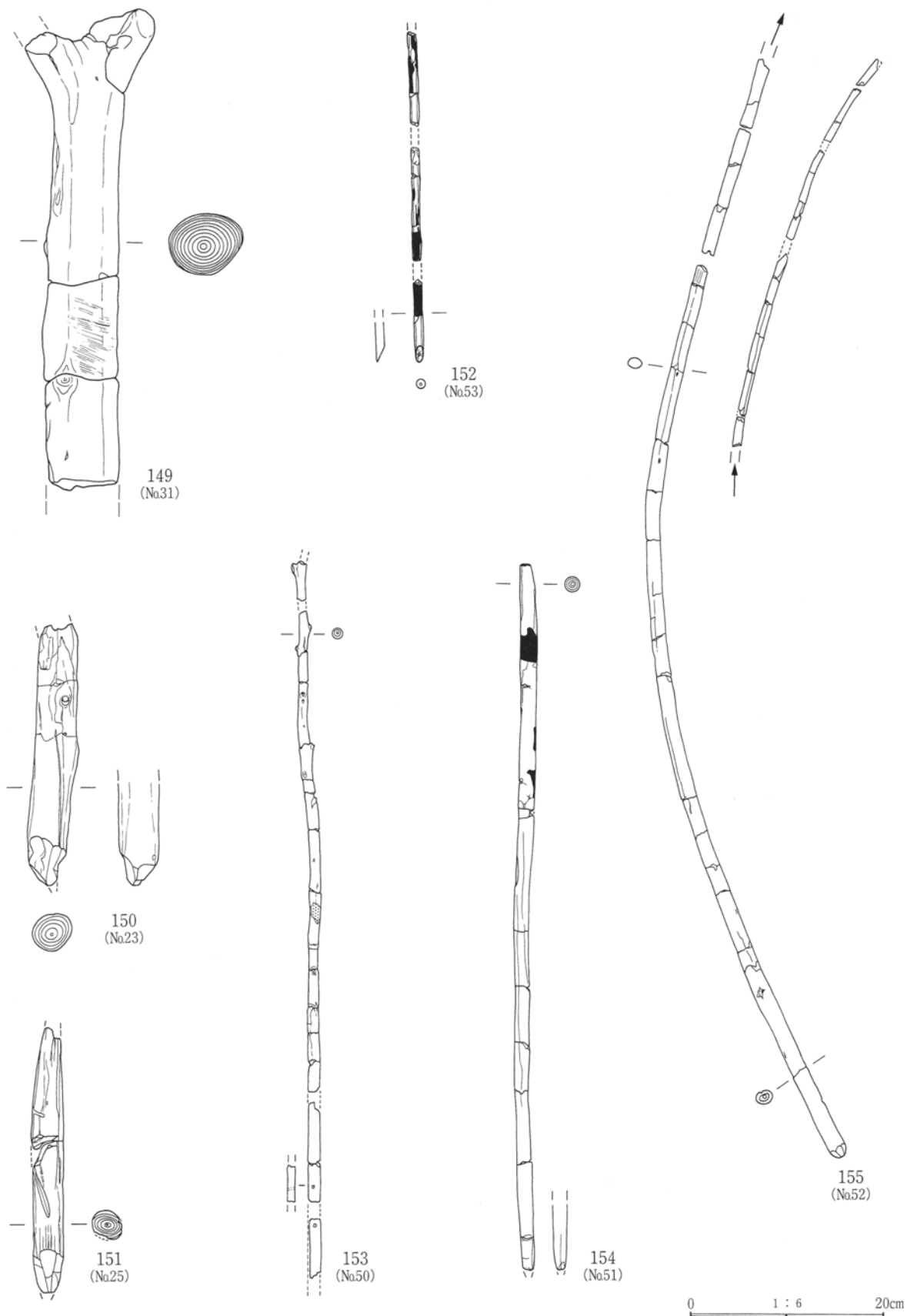
第119图 J区河川跡1号河道出土遺物(5)



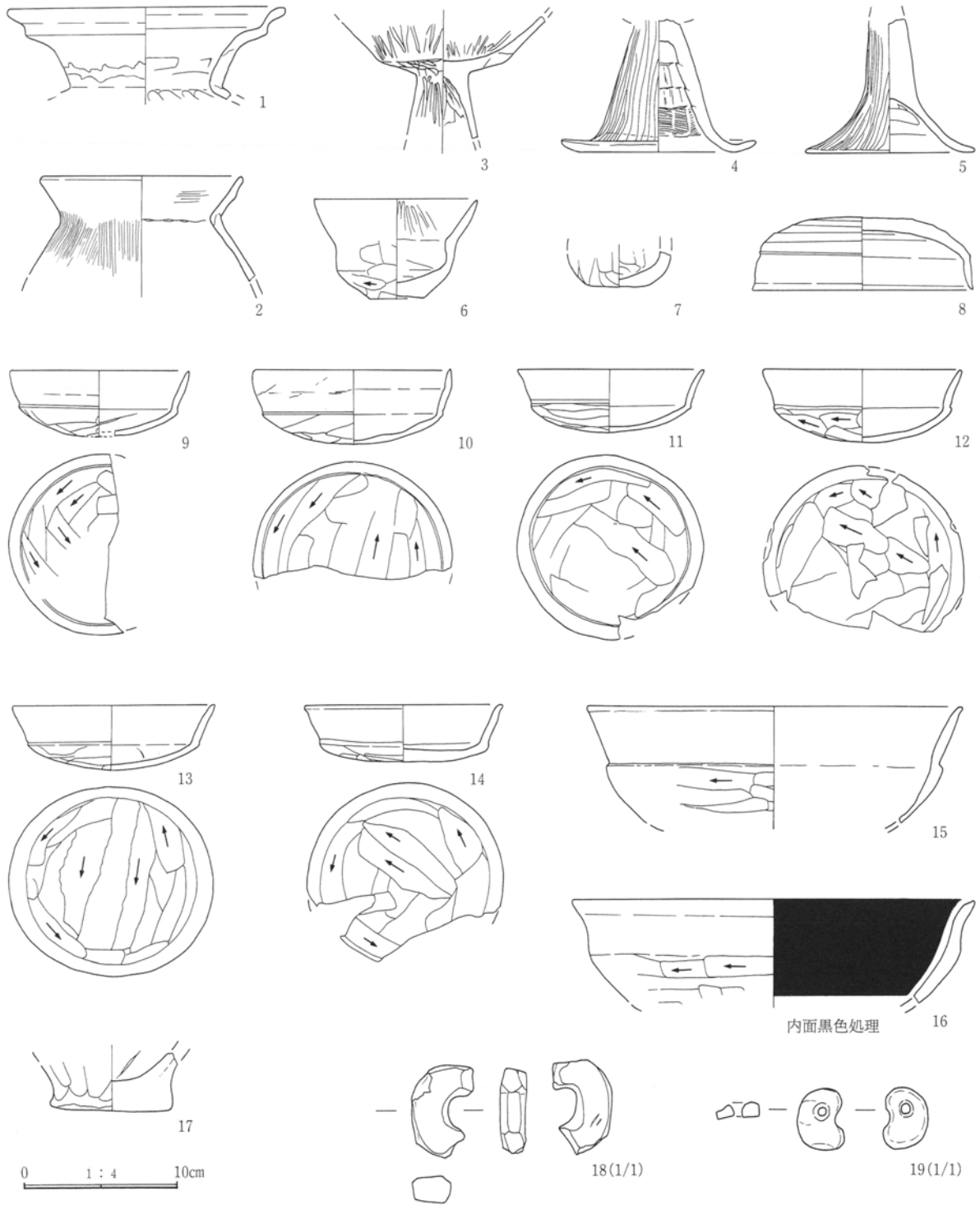
第120図 J区河川跡1号河道出土遺物(6)木製品



第121図 J区河川跡1号河道出土遺物(7)木製品



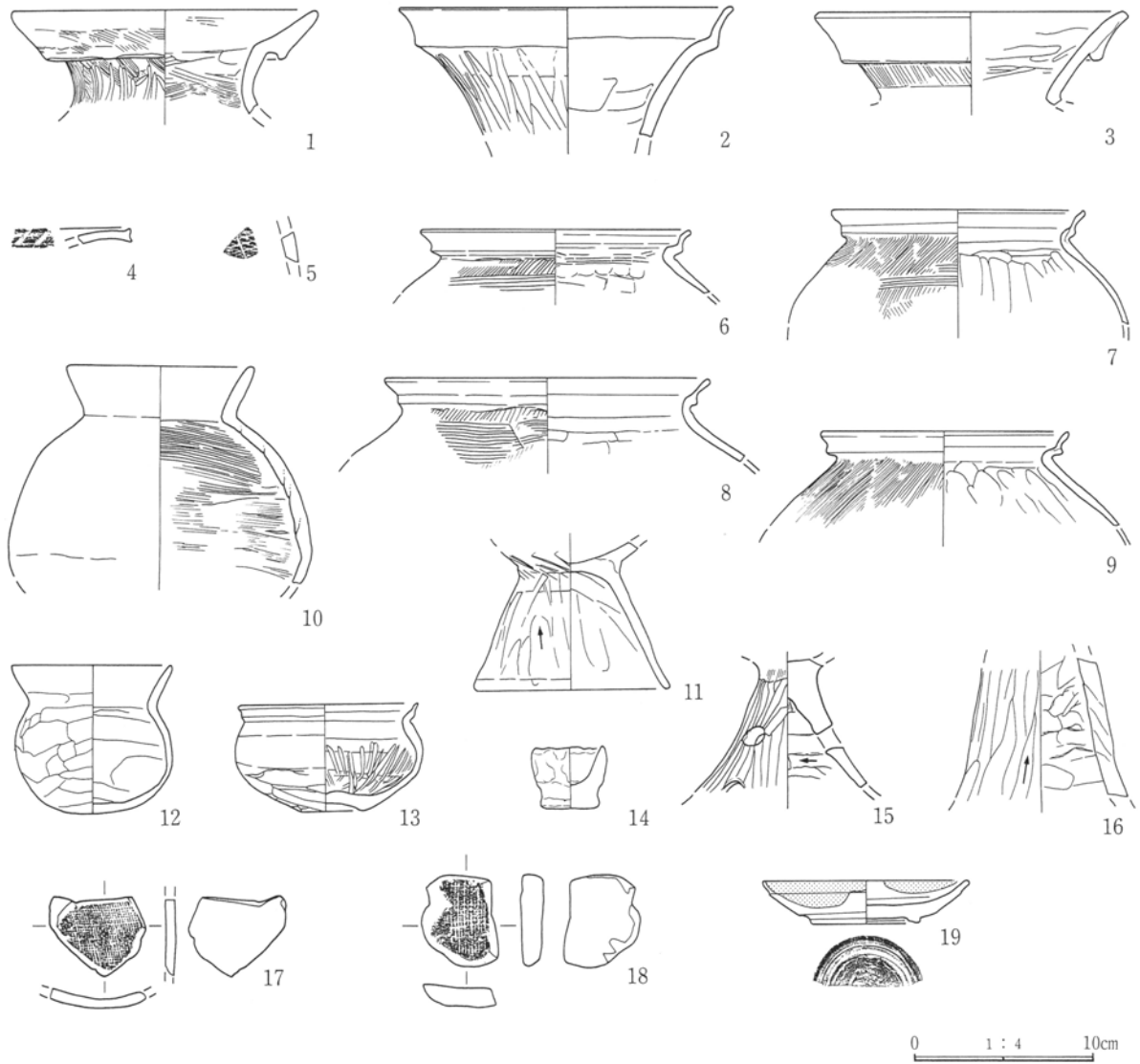
第122図 J区河川跡1号河道出土遺物(8)木製品



第123図 J区河川跡2号河道出土遺物

このことから、1号河道は4世紀代、2号河道は5世紀後半～6世紀はじめ頃に利用されたと考えられる。なお、出土した土器の器種は、1号河道では

壺・S字甕・高杯・埴・器台などで、当地域における該期の一般的な住居跡出土遺物とほぼ同じ組成を示す。しかし、2号河道から出土した6世紀代の器



第124図 J区河川跡出土遺物

種は杯にほぼ限られており、加えて滑石製勾玉2点もみられる。おそらく水辺における祭祀行為に伴うものと考えられる。1号河道出土遺物に関しては、たんなる集落からの廃棄とも推測されるが、わずか1点ながら細い碧玉製管玉(第119図132)が出土したことから、6世紀代に先行する祭祀場の可能性も無視できないだろう。

また、2号河川跡を境にしてJ区北東部の左岸微高地上には、8世紀以降の集落が検出されたが、河道出土遺物に相当する4～6世紀代の遺構は確認さ

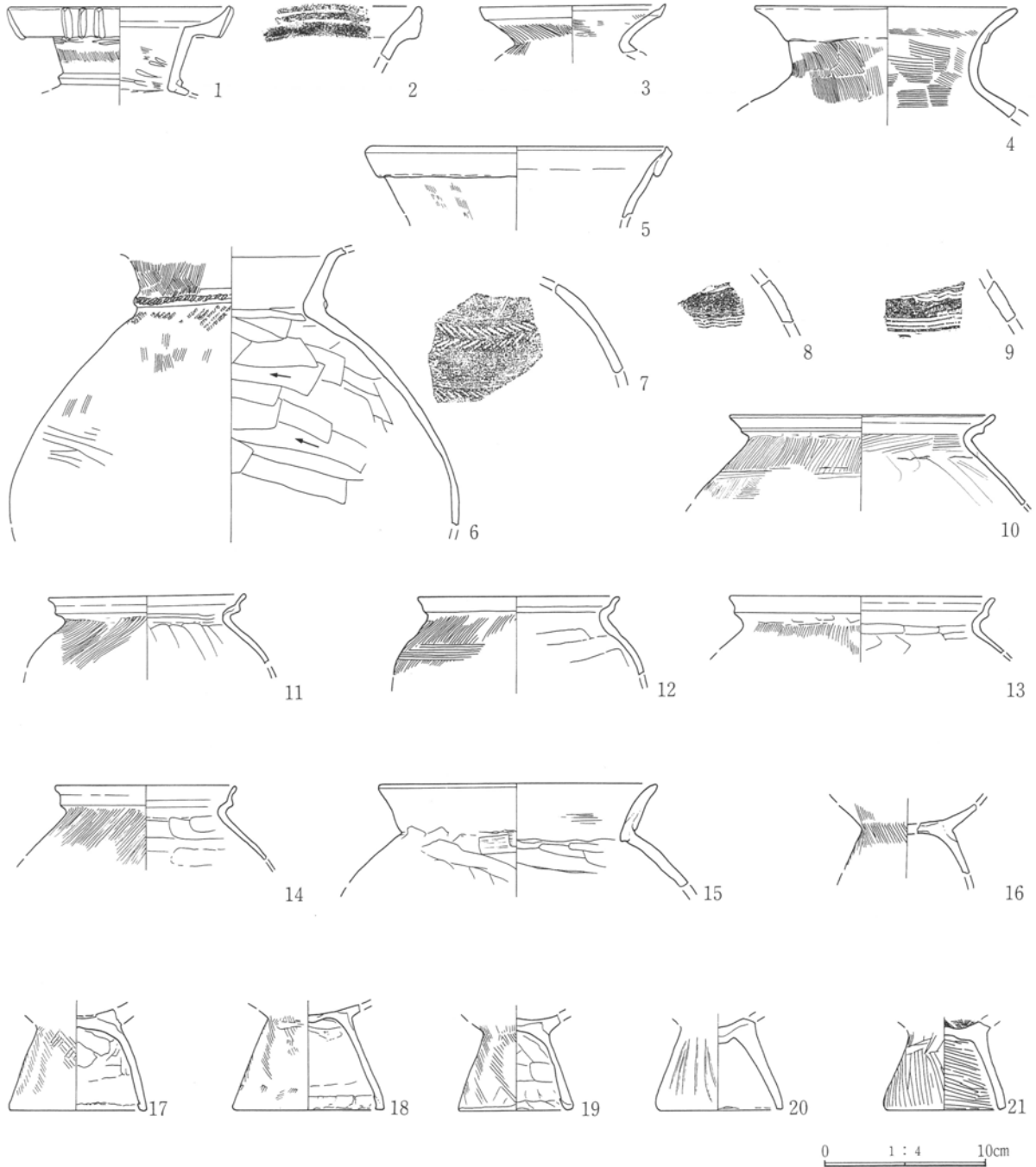
れていない。従って、H～I区で検出された古墳時代の集落跡はこの河道を東限としていたことが知れる。さらに東方約100m地点には、西善尺司遺跡で4世紀代の方形周溝墓群が検出されており(2001群埋文『西善尺司遺跡』)、これが本遺跡の集落跡に伴う墓群と仮定すれば、この河道を境に居住域と墓域が分離されていたと捉えることができよう。

なお、本河川跡上層には部分的に8世紀以降～近代の河川堆積物がみられ、ここから須恵器水注や瓦片、近世陶器等も出土しており、ここに掲げた。

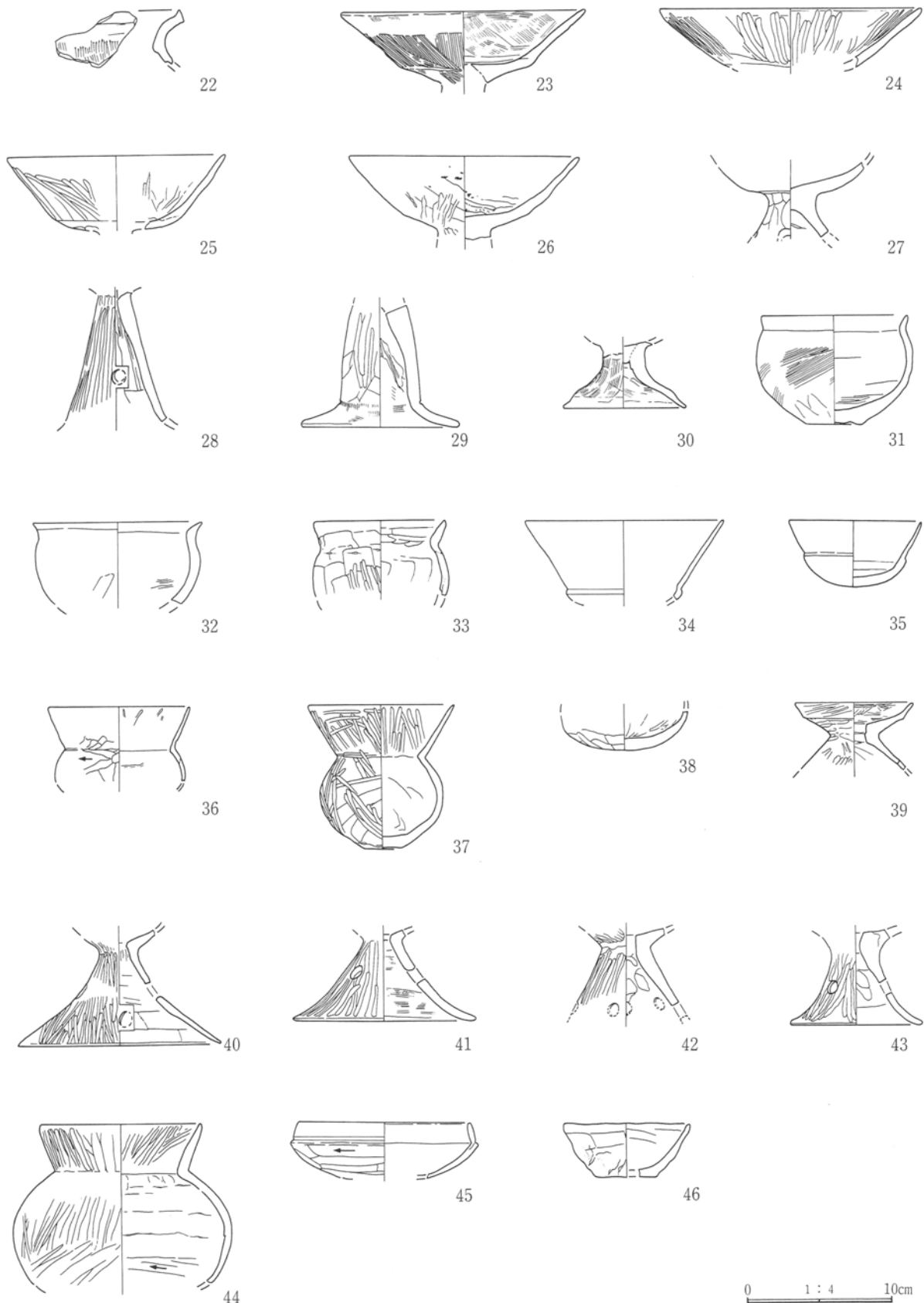
(7) 遺構外出土遺物 (第125・126図)

ここでは、遺構に伴わない出土遺物のうち、古墳時代に属するものを掲げてある。対象地区はA～J区であるが、分布は居住域であるH～J区に集中し

ている。古墳時代前期のものはI区に多く、そのうちの一部は遺構埋土が明確でなかった住居跡や溝に帰属していた可能性が高い。また後期のものは、調査区内で遺構分布が希薄なためか、少数が単発的に出土する状態であった。



第125図 遺構外出土遺物 (1)



第126図 遺構外出土遺物(2)

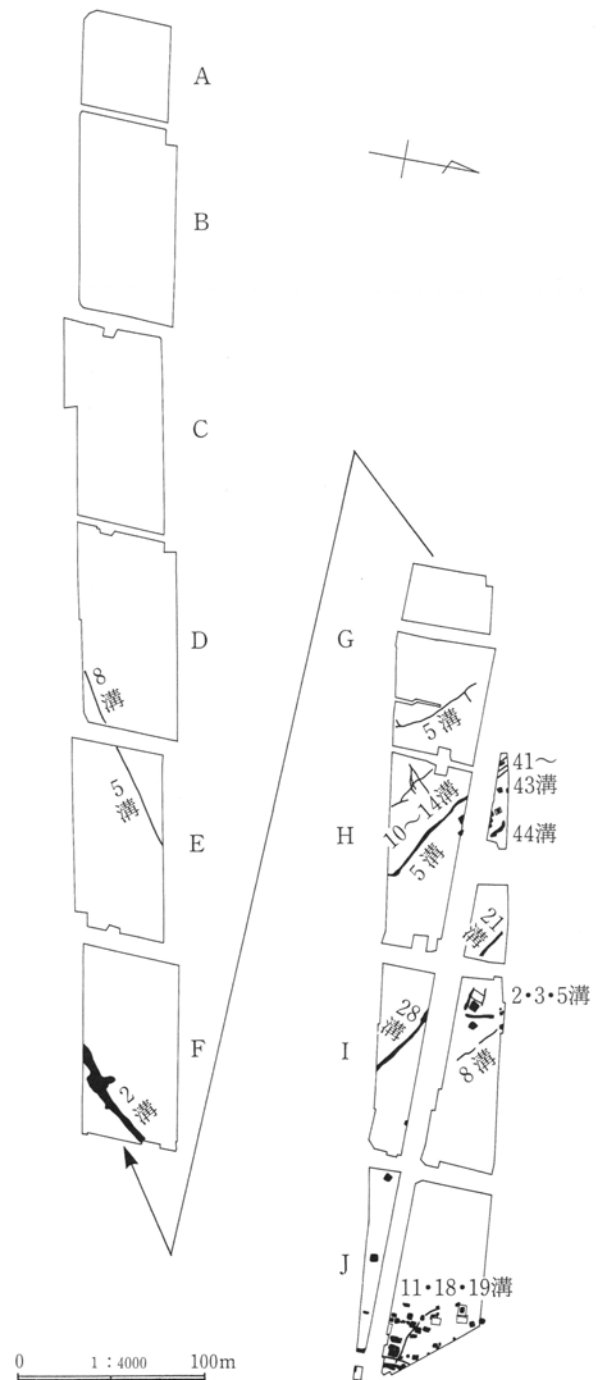
3 古代の遺構と遺物

ここでは、主に7世紀代を上限とし、As-Bに覆われた12世紀初頭の面までに属する遺構及び出土遺物について扱う。検出された遺構は、竪穴住居跡51棟、掘立柱建物跡6棟、塚1基、土坑35基、井戸2基、竪穴遺構1基、溝、水田跡である。遺構分布の全体図は第127図に示した。また、遺構密度の著しいH・I・J区については、付図1～3にそれぞれの位置を示したので参照されたい。遺構群の分布は、古墳時代と同じくH区以東の微高地上に居住域を構成する遺構群が集中し、特に竪穴住居跡は最東端のJ区に集中する。溝と水田跡はA～H区の低地部分に分布する。なお、古墳時代の水田分布と比較した場合、明らかに東西方向に分布域が拡張しており、古墳時代に微高地であった部分が洪水堆積物によって平準化され、また整地造成によって、水田面積を広げたことが推測される。

なお、古墳時代の項で扱ったJ区の河川跡は、旧藤川河道に相当するが、竪穴住居等から構成される集落の形成以前に洪水堆積物によって埋没し、J区西半部に河道の変更があったらしい。この新河道は昭和40年代の河川改修工事まで大きな変化を見せず、ちょうどI区とJ区の境を蛇行しながら南東流していたと考えられる（第114図左上参照）。従って、H・I区の集落とJ区の集落は川を隔てた両岸に分断されていた可能性が高い。なお藤川対岸の西善尺司遺跡では谷が検出されていることから、J区の集落跡は東西幅約150m前後の狭い自然堤防上に立地していたと想定される。

集落跡を構成する遺構の時期は、出土土器で判明する限り、8世紀後半から開始しており11世紀代まで継続的に営まれたと考えられる。

水田跡はAs-Bに覆われた古代II期水田と、その耕土下で検出される古代I期水田の2面が確認される。ただし、古代I期水田は、テフラや洪水層に覆われた田面ではなく、水路群として認定した。



第127図 古代の遺構分布図

(1) 竪穴住居跡

H区1号住居跡 (第128図 P.L.56)

位置 170-270グリッド

平面形 不整長方形 主軸方位 N-48°-E

規模 2.90×2.15m 壁高 23cm

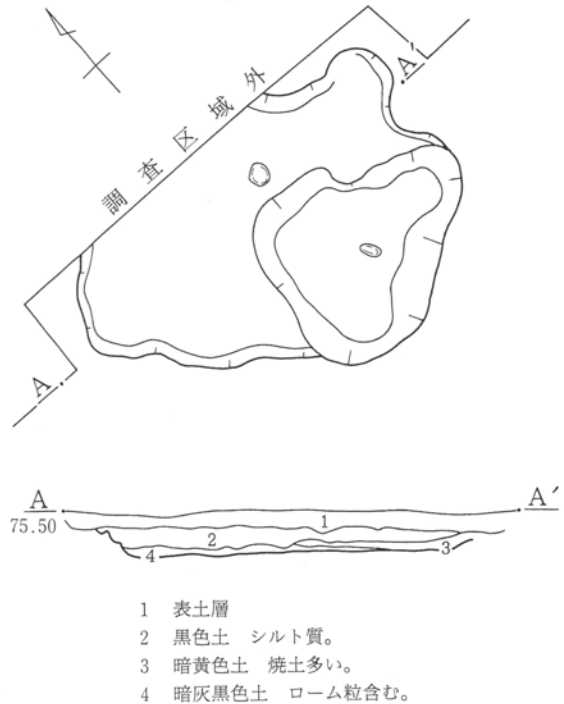
竈 北東辺にあり、燃焼部は半円形に突出する。平面規模は、幅55cm、奥行き60cmを測る。火床面は円形皿状に掘りくぼめたのち、埋土によって整えている。袖部、天井部、煙道部は検出できなかった。

床面 貼り床構造と思われるが、軟質で明確ではない。断面観察からローム塊を含む黒色土を埋土としていることがわかる。

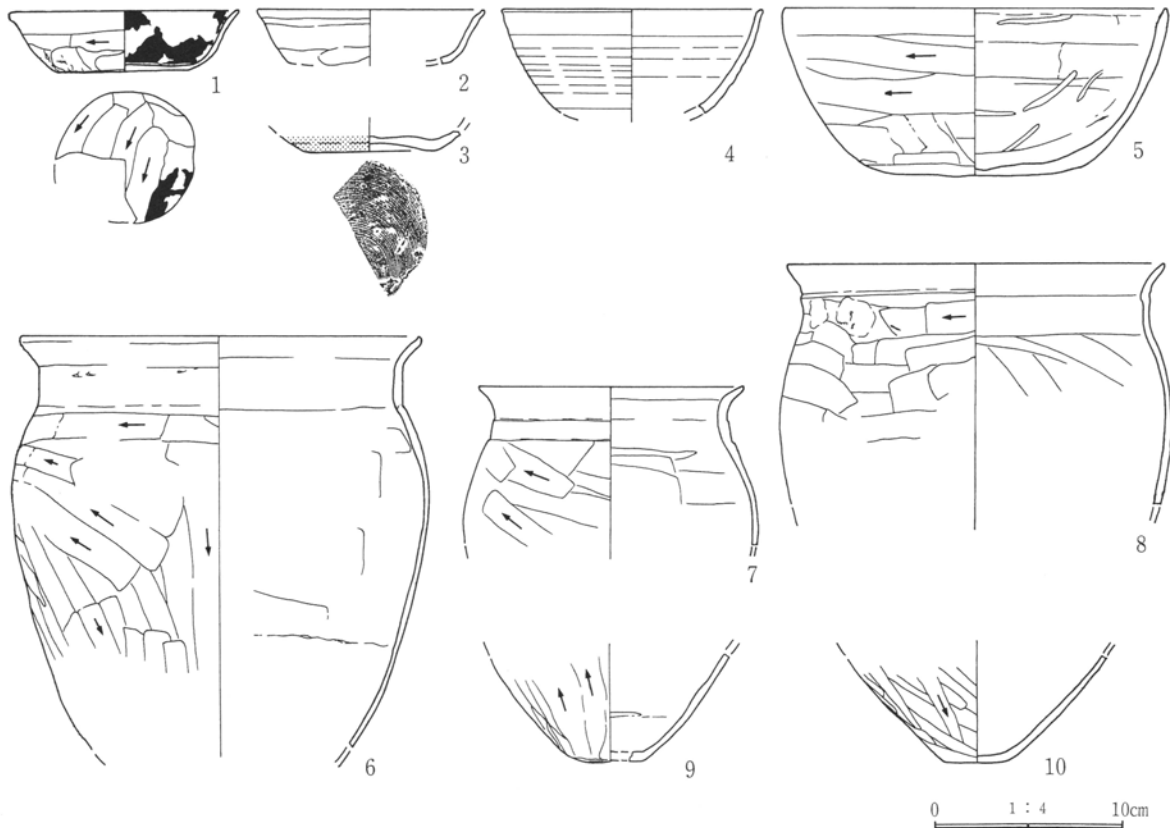
ピット等 住居南東半に掘方のくぼみが検出された。深さは、中央最深部で20cmほど。形状は不整形なので、床下土坑ではないと考える。

出土遺物 竈燃焼部から杯(1・2)、鉢(5)、甕(6・8・9)が一括して出土している。

重複遺構 なし。



- 1 表土層
- 2 黒色土 シルト質。
- 3 暗黄色土 焼土多い。
- 4 暗灰黒色土 ローム粒含む。



第128図 H区1号住居跡及び出土遺物

H区2号住居跡 (第129図 PL.56)

位置 170-275グリッド

平面形 長方形 主軸方位 N-58°-E 規模 4.70×3.55m

壁高 不明。竈 検出されなかったが、焼土の分布から北東ないし北西辺にあったと考えられる。

床面 検出されたのは掘方であり、床面は遺存しない。貼り床構造と思われる、確認面から20cm前後の深さで“ドーナツ”状に掘りくぼめ、ローム塊を多く含む黒色土で埋土している。

ピット等 住居北寄り及び北東隅で、不整形形のピット2基が検出された。前者をP1、後者をP2と呼ぶ。P1は直径145cm強、深さ40cm。底面は平坦で、内部にはパミス(As-Cか)を多く含む黒色土とローム塊が堆積する。床面との関係が不明で、床下土坑か別遺構か不明。P2の規模は径135×110cm、深さ42cm。別遺構の可能性もある。

出土遺物 土師器小破片が掘方埋土から数点出土したのみ。時期の限定は困難。

H区5号住居跡 (第130図 PL.56)

位置 185-310グリッド

平面形 不整長方形 主軸方位 N-33°-W 規模 3.00以上×2.30m 壁高 17cm

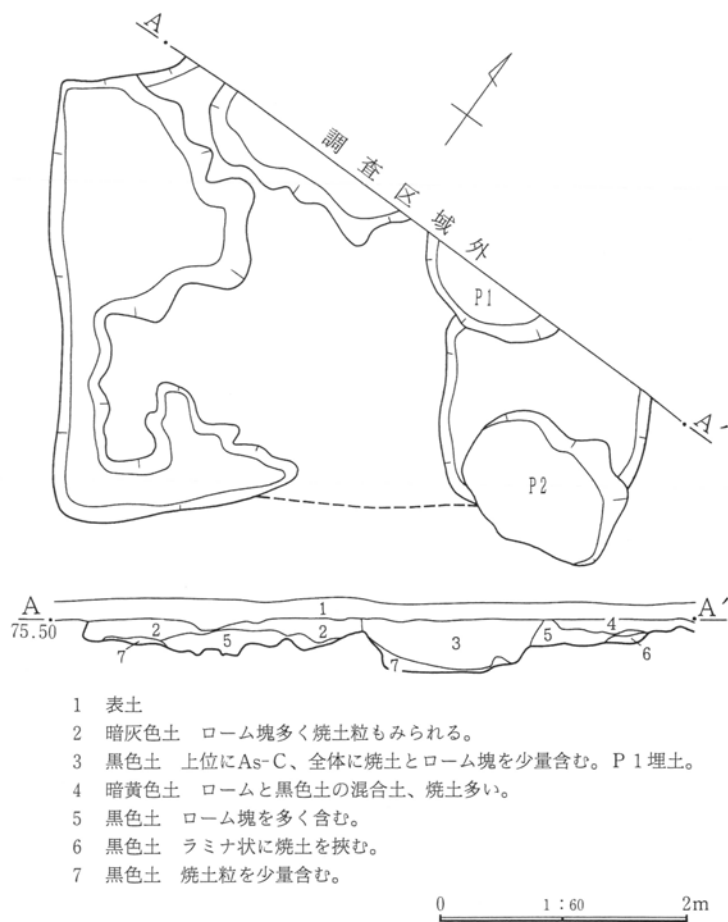
竈 検出されなかった。

床面 凹凸が著しく、軟質。掘方は全体に浅く掘りくぼめて、ローム塊の多い土で埋める。

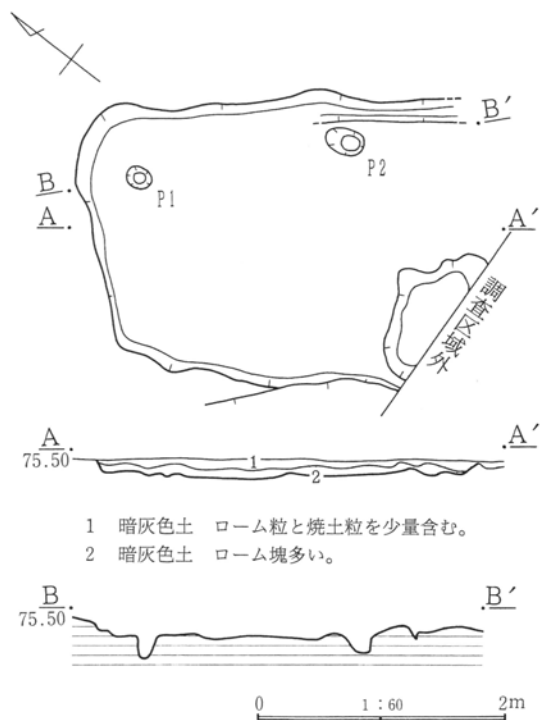
ピット等 北東辺に幅15cm、確認面からの深さ2cmの壁溝が沿う。また円形ピット2基が北東辺に並行して検出された。

出土遺物 埋土から土師器片数点のみ出土した。

	径 (cm)	深 (cm)		径 (cm)	深 (cm)
P 1	20×20	20	P 2	30×20	14



第129図 H区2号住居跡



第130図 H区5号住居跡

H区6号住居跡 (第131図 PL.56)

位置 185・190-295グリッド

平面形 不整長方形 主軸方位 N-65°-W

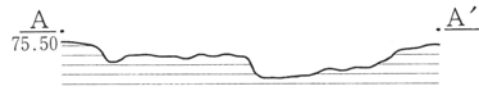
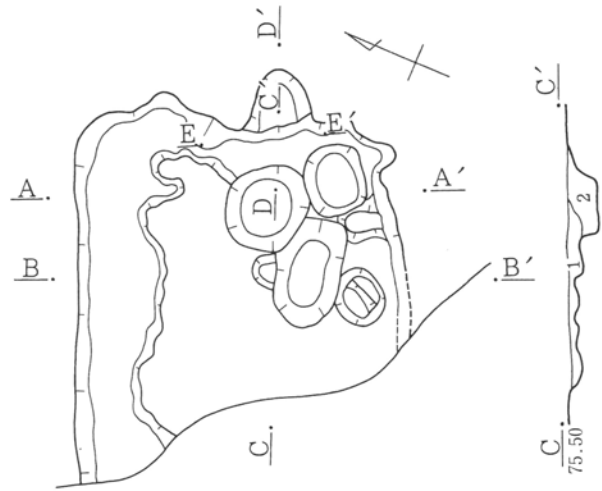
規模 2.90以上×2.60m

壁高 12cm 竈 北東辺にあり、燃焼部は楕円形に突出する。平面規模は、幅50cm、奥行き55cmを測る。掘方は煙道方向に向かって2段の階段状に掘りくぼめ、ローム塊の多い土で埋めて火床面を整えている。火床面は煙道部に向かって緩い勾配をもって立ち上がる。火床面の上位には薄い灰層、焼土と炭化物粒を含む土層の順で堆積し、その上に竈構築材と思われる粘土を含む土が覆う。焚口部、袖部、天井部、煙道部は検出できなかった。

床面 検出されなかった。掘方は北東及び北西辺に沿って帯状に掘りこまれ、ローム塊をまじえた灰褐色シルトを埋土としている。

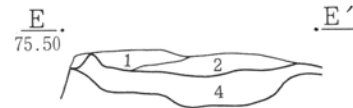
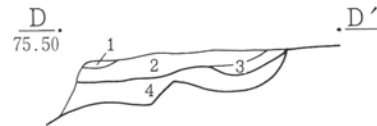
ピット等 竈前面から東半部にかけて6基の集合ピット状に掘りこまれた痕跡がある。このうち竈前面のピットは径74×64cm、深さ24cmの規模を測り、比較的整った楕円形の平面を呈する。埋土には人為的と思われる大ローム塊を含み、その上を床面掘方埋土が覆う。従って、床面構築以前のものといえよう。他については凹凸のある底面形状から掘方面の可能性が高い。

出土遺物 竈燃焼部から杯、床面掘方埋土から須恵器蓋の破片が出土している。



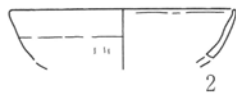
- 1 暗灰色土 ローム塊多く焼土粒もみられる。
- 2 暗黒灰色土 大ローム塊がみられ、木の根の攪乱。
- 3 暗灰色土 木の根の攪乱。

0 1:60 2m



- 1 灰褐色土 ローム塊、焼土粒、粘土粒を含む。
- 2 暗褐色土 ローム塊、焼土、炭化物粒を含む。
- 3 灰褐色土 粘土と焼土主体、竈内崩落土。
- 4 黒褐色土 ローム塊を含む、掘方埋土。

0 1:30 1m



0 1:4 10cm

第131図 H区6号住居跡及び出土遺物

H区7号住居跡 (第132図)

位置 190-295・300グリッド

平面形 (長方形) 主軸方位 不明

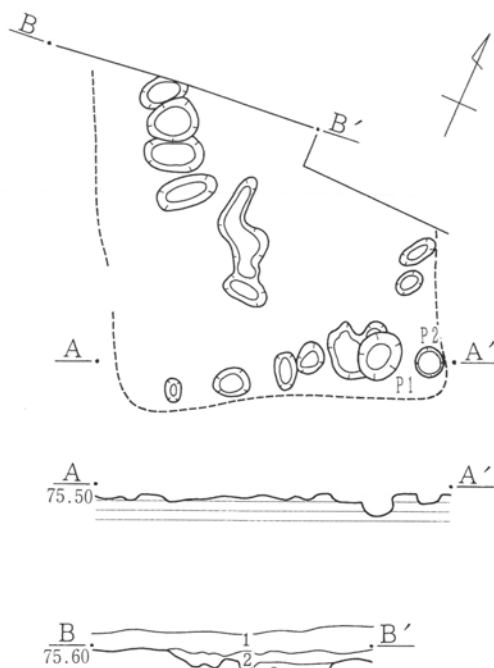
規模 2.70以上×2.50前後m

竈 不明。床面 硬化床面は検出できなかったが、土層断面観察によって、住居埋土と思われる焼土と炭化物を含む土層と下位の掘方埋土との間がほぼ水平で峻別されることから、この面を床面と想定した。おそらく貼り床構造と思われるが、大部分は削平されて明確ではない。検出されたのは掘方埋土のプランで、断面観察からローム塊を含む黒色土を埋土としていることがわかる。

ピット等 住居プランに沿った位置にピット状のくぼみが連続するが東端の2基を除いて、掘方面のくぼみと考えたい。P1とP2の2基は円形で、底面は比較的平坦。柱穴や貯蔵穴とするには配置や規模の点で理解しがたいところがある。

出土遺物 出土していない。

本住居跡は竈と出土遺物が不明であることから、厳密な時期限定は困難であるが、6号住居跡に隣接して平行する位置関係にあること、支柱穴が認められないこと、埋土の特徴が一致することから、平安時代と推測してここに掲げた。



- 1 灰褐色土 表土。
- 2 暗灰色土 焼土粒を含み、炭化物粒も少量みられる。
- 3 暗灰色土 ローム塊多い。掘方埋土。

	径 (cm)	深 (cm)		径 (cm)	深 (cm)
P 1	40×32	18	P 2	22×22	8

第132図 H区7号住居跡

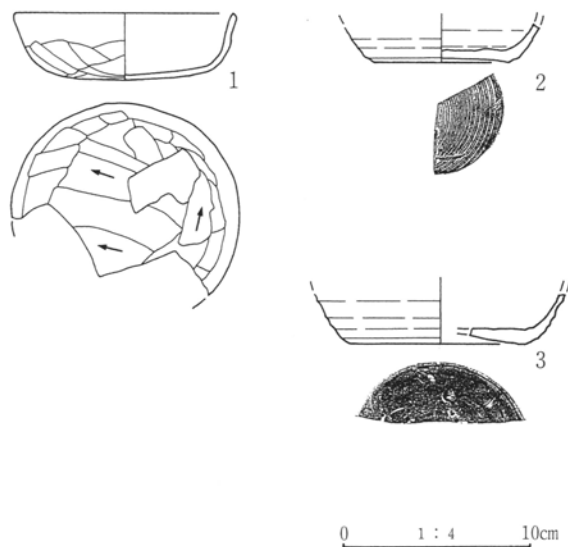
H区8号住居跡 (第133・134図 PL.56)

位置 190-285グリッド

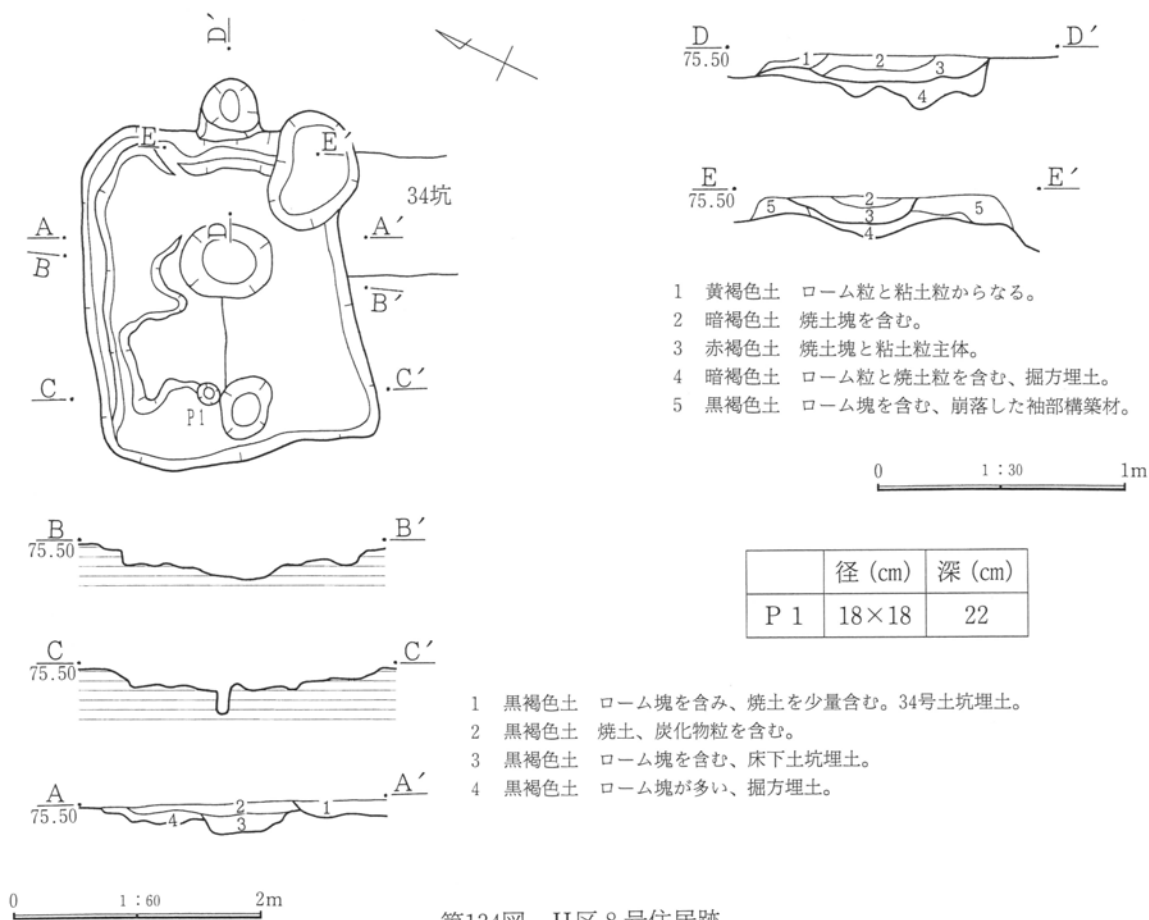
平面形 長方形 主軸方位 N-62°-E

規模 2.75×2.15m 壁高 11cm

竈 北東辺にあり、燃焼部はH区1号掘立柱建物跡の柱穴と重複して形状は不明瞭。燃焼部の平面規模は幅50cm前後、奥行き60cmほどを測る。火床面は浅い皿状にくぼんでおり、焚き口部ではやや盛り上がり、煙道部では緩い勾配で立ち上がる。掘方は若干掘りくぼめて埋土してあり、その上にローム塊を含む黒色土で袖部を構築してある。また、焼土塊と粘土塊が火床面を覆って堆積しており、燃焼部内壁ないし天井部の崩落堆積物と思われる。なお、重複する1号掘立柱建物跡の柱穴のうえに火床面が認めら



第133図 H区8号住居跡出土遺物



第134図 H区8号住居跡

れることから、本住居跡が新しいと推測される。

床面 貼り床構造で比較的平坦。全体的に中央がくぼむ皿状の掘方に焼土、炭化物粒を含むローム塊の多い黒色土で埋め、床面を整えている。特に目立つ硬化面は認められず、また東端部は34号土坑と攪乱坑に切られて不明。

ピット等 竈寄りの中央部で楕円形の床下土坑、南西壁際で円形ピットP1と不整楕円形の土坑を検出した。床下土坑は径75×58cm、深さ25cmの規模で地山である粘質土塊で埋まる。壁際の土坑は径53×42cm、深さ18cmの規模を測る。P1は規模と形状から柱穴の可能性があるが、棟持ち柱として対応する位置に柱穴は検出されていない。

出土遺物 掘方埋土から杯3点が出土。

重複遺構 1号掘立柱建物跡を切り、34号土坑に切られる。

H区9号住居跡 (第135図 P L.56)

位置 185-280・285グリッド

平面形 不整形 **主軸方位・規模** 不明

壁高 15cm **床面** 掘方埋土のみで不明。

ピット等 調査区南壁断面で径90cmの土坑が確認された。深さは推定床面から40cm。埋土は焼土・灰が流れ込んだ状態で堆積する。

出土遺物 土師器の小片数点。

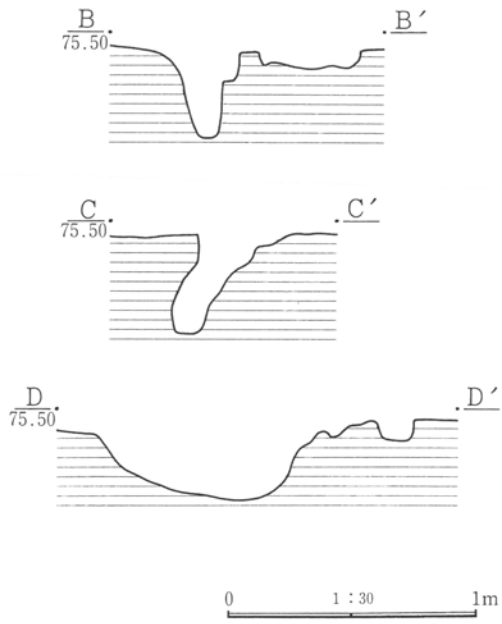
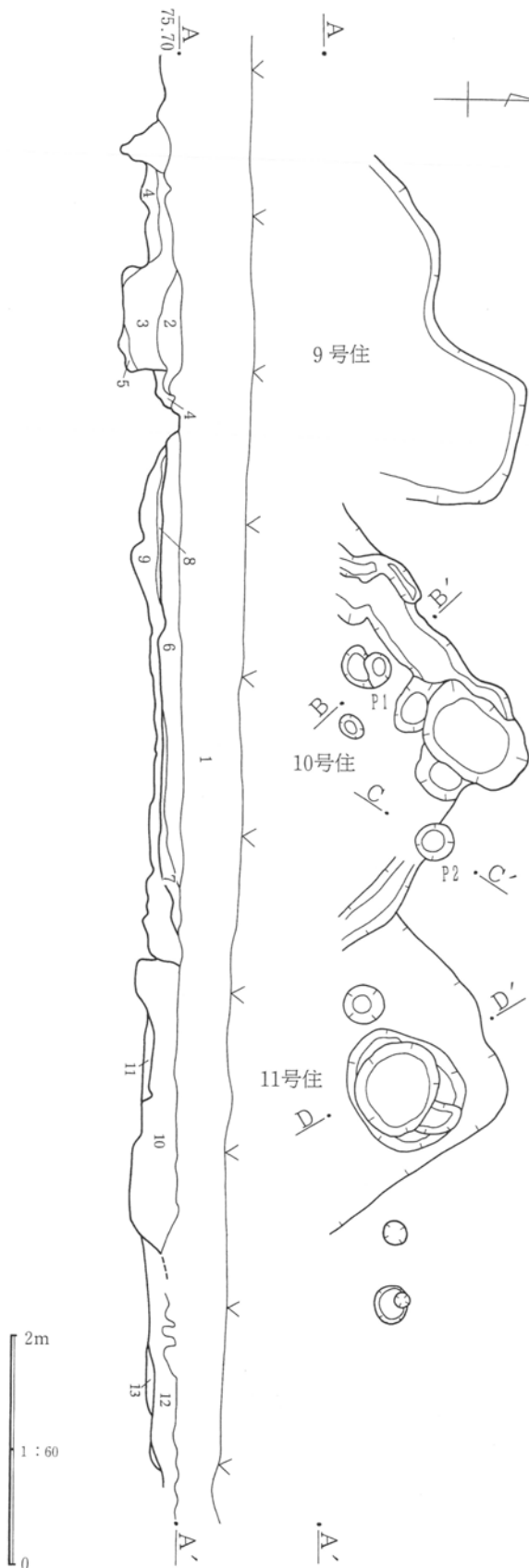
H区10号住居跡 (第135図 P L.56)

位置 185-280グリッド

平面形 (長方形) **主軸方位** N-50°-E

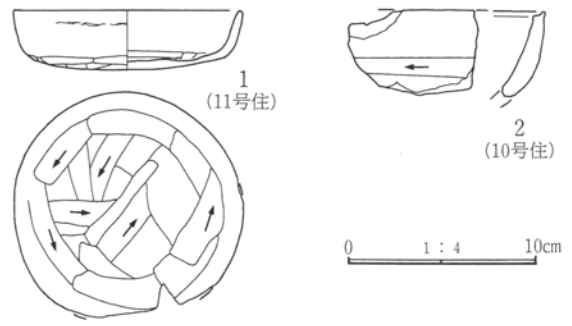
規模 一辺2.50m以上 **壁高** 18cm

竈 土層断面における焼土流れ込みの状況から、北東辺にあると推測される。調査区外のため詳細は不明。 **床面** 掘方に黒色土を埋めて床面を整える。明瞭な硬化面は検出されなかったが、掘方埋土



	径 (cm)	深 (cm)		径 (cm)	深 (cm)
P 1	30×22	34	P 2	32×32	39

- 1 灰褐色土 表土、As-AやAs-Bを含む。
- 2 黒褐色土 As-Cや焼土粒を含む。床下埋土。
- 3 黒色土 ローム粒や焼土粒を含む。レンズ状堆積。
- 4 黒色土 As-Cとローム粒を少量含む。掘方埋土。
- 5 黄褐色土 ローム塊主体の人為的埋土。
- 6 黒褐色土 ローム粒、焼土、炭化物粒を含む。
- 7 暗褐色土 焼土多く、灰もみられる。
- 8 暗灰褐色土 灰を多く含む。
- 9 黒色土 As-Cと焼土を少量含む。10号住掘方埋土。
- 10 黒色土 As-C、榛名ニツ岳バミスを含む。11号住埋土。
- 11 黒褐色土 地山土塊を含む。11号住掘方埋土。
- 12 10層とほぼ同じでローム粒を含む。
- 13 暗褐色土 ローム塊を含む。11号住貼床土。



第135図 H区9・10・11号住居跡及び出土遺物

と竈からの流れ込みと思われる焼土・灰層の境がほぼ水平でそれと判断できる。なお、掘方は壁に沿って帯状に深くほりこまれ、中央部はやや高い。

ピット等 北西壁の内側約50cmでP 1、北東壁と重なってP 2が検出された。P 2は住居内側に傾斜しており、垂直柱のための穴ではない。入り口施設の階段であれば逆傾斜である。垂木をそのまま延長して地山に差し込んだとも考えられるが、1本のみであり、しかも40cm以上も差し込む点に疑問がある。なお、本住居では他に北隅で楕円形土坑状のくぼみやピット状のくぼみがみられるが、形状と埋土の特徴から掘方面のくぼみと考えたい。住居南東半に掘方のくぼみが検出された。深さは、中央最深部で20cmほど。形状は不整形なので、床下土坑ではないと考える。壁溝は北東壁に沿って幅30cmほどで検出されたが、掘方との区別が不明瞭。

出土遺物 住居埋土から盤あるいは蓋と思われる須恵器片が出土している。

重複遺構 H区11号住居跡を切る。

H区11号住居跡 (第135図 P L.56)

位置 185-275・280グリッド

平面形 (長方形) **主軸方位** N-45°-E

規模 一辺2.00m以上 **壁高** 約20cm

竈 不明 **床面** 浅く平坦な掘方に5~8cmの埋土で床面を整えている。硬化面は不明瞭で、特に中央部は軟質なため掘方との識別が困難。一段低いのは掘方面の可能性はある。

ピット等 北東半にあたる位置で床下土坑1基が検出された。

出土遺物 住居埋土から完形杯1点が出土。

重複遺構 H区10号住居跡に切られる。

I区2号住居跡 (第136図 P L.57)

位置 195-185グリッド

平面形 不整形長方形 **主軸方位** N-66°-W

規模 5.40×4.40m **掘方深** 10cm

竈 確認できなかった。炉の痕跡も見あたらない。

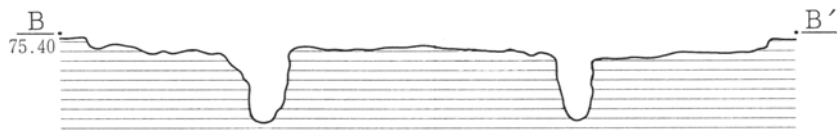
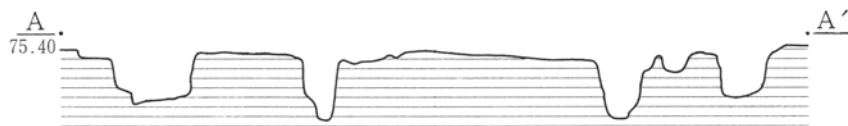
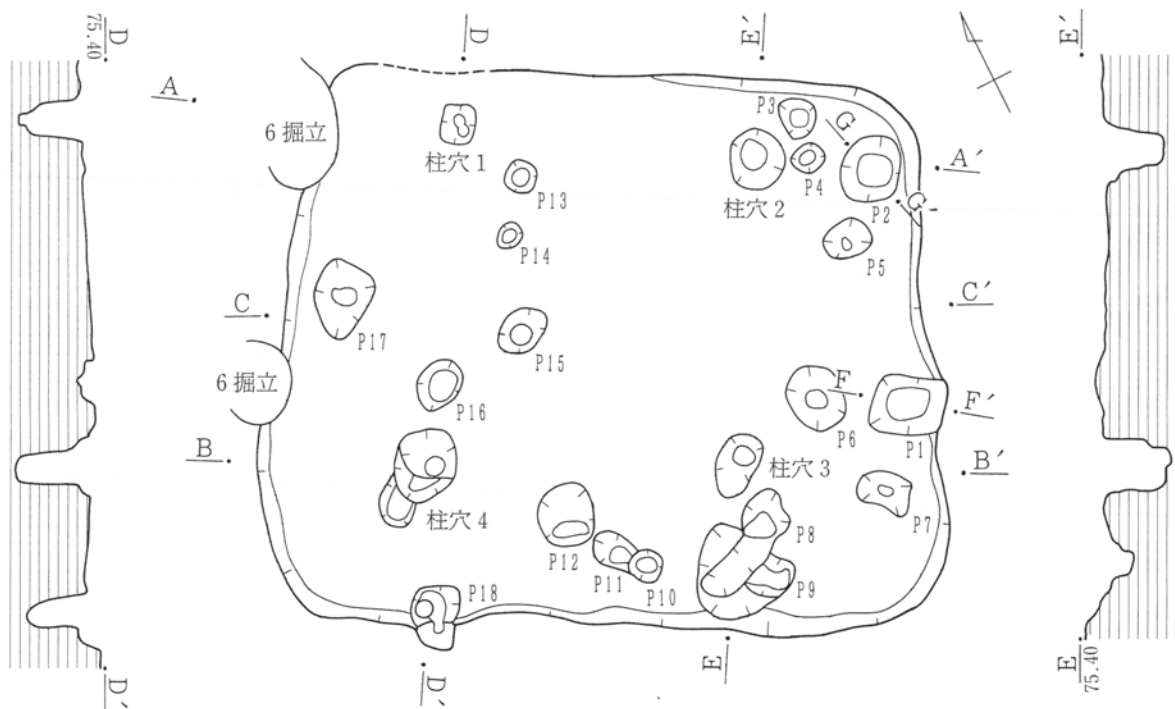
床面 検出されたのは掘方部分のみで床面はすでに後世の削平等によって失われていたと考えられる。掘方面は比較的平坦で凹凸は少ないほうである。中央部がやや高まることから、壁に沿って“ドーナツ”形に掘りくぼめたと推測される。床面は掘方に最深部で深さ10cm強の埋土によって整えられたと思われる。

ピット等 柱穴4基とそれ以外のピット18基が住居プラン内から検出された。柱穴1~4は住居プランの中央にほぼ正方形を構成する対角位置にある。柱間寸法は、2.40-2.40-2.40-2.70mで西辺側がやや長い。柱穴の掘方平面形はいずれも隅丸方形で底面は円形である。深さも別表のとおりほぼ一定している。また、柱穴と壁の間隔は南北方向が約130cm、東西方向が約150cmを測り、柱穴1・2と北壁との間は約50cmと狭いが、この部分は遺存状況が悪く本来の住居壁がさらに北側に存在したことも考えられることから、柱穴配置が北側に偏っていたと即断はできない。東壁際のP 1と北東隅のP 2は断面形が箱形を呈する貯蔵穴と思われる。他のピットはP 10・P 12・P 17が位置関係から出入り口施設関連かと推測されるのみで、性格不明といわざるを得ない。

出土遺物 須恵器杯2点が出土。

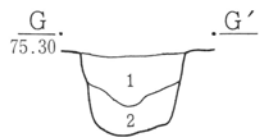
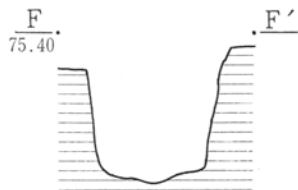
重複遺構 I区6号掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係不明。

	径 (cm)	深 (cm)		径 (cm)	深 (cm)
柱穴 1	35×35	53	P 8	36×34	36
柱穴 2	50×43	51	P 9	-×35	23
柱穴 3	48×33	58	P 10	27×24	17
柱穴 4	54×50	62	P 11	-×28	10
P 1	56×48	45	P 12	55×52	22
P 2	54×50	30	P 13	27×25	10
P 3	34×30	20	P 14	20×18	16
P 4	30×25	15	P 15	34×33	41
P 5	38×34	25	P 16	36×34	12
P 6	48×44	40	P 17	60×50	13
P 7	43×32	33	P 18	-×39	55

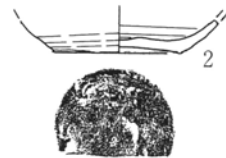
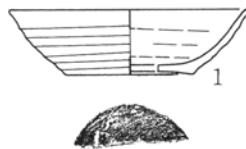


- 1 黒褐色土 ローム塊多い。
- 2 黒褐色土
- 3 暗褐色土 ローム粒多い。
- 4 暗褐色土 As-Cを含む。

0 1 : 60 2m



- 1 黒色シルト As-Cを含む。
- 2 黒色土 ローム粒を含む。



0 1 : 30 1m

0 1 : 4 10cm

第136図 I区2号住居跡及び出土遺物

I区6号住居跡 (第137図 PL.57)

位置 195・200-170・175グリッド

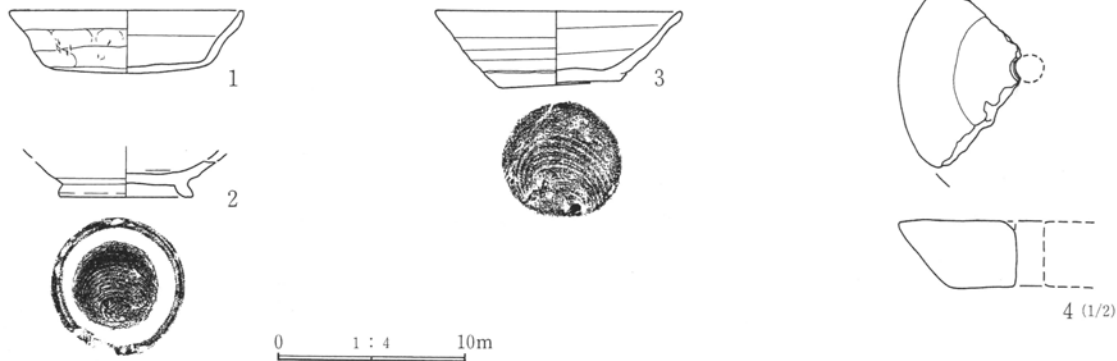
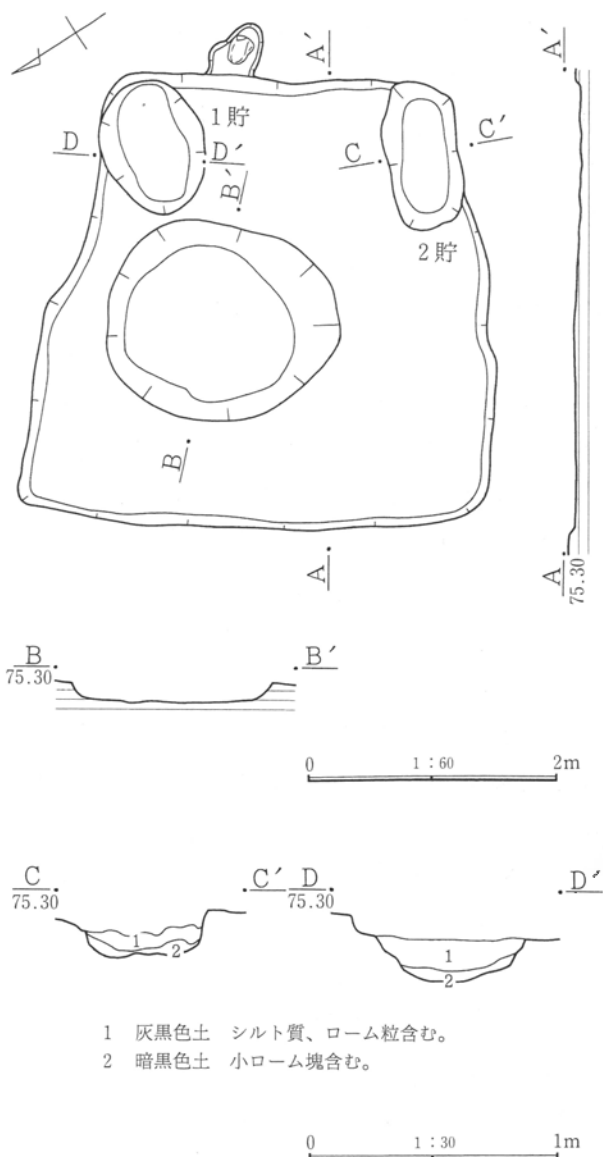
平面形 不整長方形 主軸方位 N-55°-W

規模 3.70×3.58m 壁高 8cm

竈 南東辺の北寄りで検出。竈軸を南に傾けて燃焼部が張り出す。燃焼部は幅42cm、壁外の奥行き52cmを測り、平面は楕円形を呈する。中央に20cm大の礫が検出されたが、支脚か袖や焚き口部の芯材かは判断できなかった。袖部、煙道部は検出できなかった。床面 住居掘方面は比較的平坦で凹凸が少なく、南西側がやや高い。ここに数cmの厚さで黒色土を埋土して床面を整えたと考えられるが、硬化面は検出していない。おそらく後世の削平等によって失われたと思われる。

ピット等 東端と南端で住居プランに沿って楕円形のくぼみが2基検出された。竈の手前左右に位置することから貯蔵穴ととらえ、前者を1号、後者を2号と命名した。1号貯蔵穴は100×80cm、深さ35cm、2号貯蔵穴は110×50cm、深さ18cmの規模を測る。床面がないため、住居廃棄時にどちらが機能していたかは不明。また、住居中央に円形の土坑が検出され、規模は径190×160cm、深さ18cmを測る。これは、床下土坑か重複遺構か不明だが、S字甕片が出土し、埋土の質がAs-C混黒色土であることから、古墳時代前期にさかのぼる可能性がある。

出土遺物 椀・杯は2号貯蔵穴、埋土から紡錘車片が出土している。



第137図 I区6号住居跡及び出土遺物

I区10号住居跡 (第138図 PL.58)

位置 170・175-115・120グリッド

平面形 不整形 主軸方位 N-52°-W

規模 2.48×1.75以上 壁高 20cm

竈 南東辺と南西辺で検出され、後者は煙道部のみであるため居住期間中に廃棄されたと考えられる。新たに造り付けられたのが前者の竈だろう。ここでは前者について記述する。燃烧部は半円形に張り出し、幅60cm、奥行き30cmを測る。煙道は火床面とほぼ同レベルで南東方向にのび、幅12cm、長さ約100cmで上方に立ち上がる。燃烧部本体は粘土少なく黒色土とロームの混合土で構築している。火床面と焼き口床面は、その下に灰と焼土の薄層がみられる。床面 硬化面は不明瞭だが、土層断面で掘方埋土の上位にローム粒の多い薄層がのっており、これが床面土であったと考えられる。なお掘方面は凹凸が著しく竈前面のピット状のくぼみ2カ所は掘方面の深所にあたる。

出土遺物 本住居跡の時期を推定できる遺物は出土していない。

J区1号住居跡 (第139図 PL.60)

位置 205・210-020・025グリッド

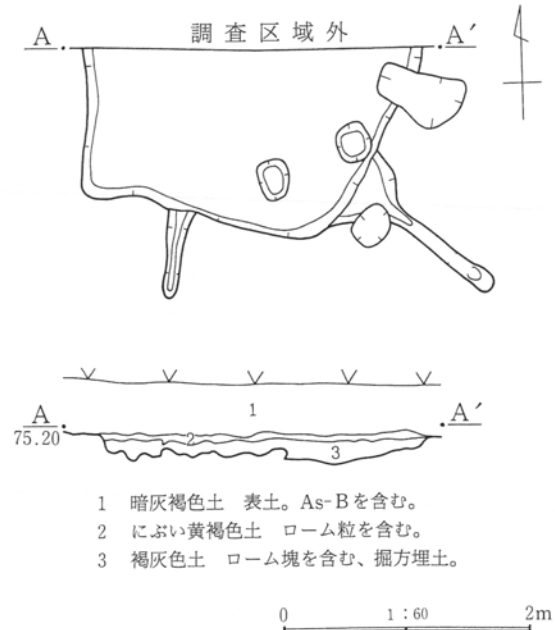
平面形 (隅丸方形) 主軸方位 N-4°-W

規模 2.76以上×3.20m 壁高 8cm

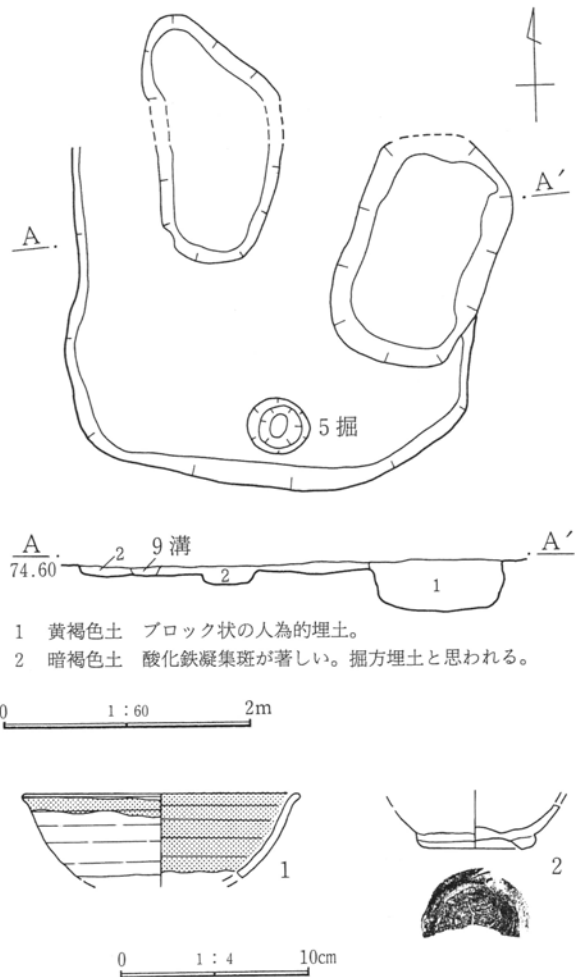
竈 不明。床面 削平されて不明瞭だが、全体に北から南へ緩傾斜する。

ピット等 東壁際と西半部で2基の楕円形土坑、南壁際中央に1基のピットが検出された。土坑2基のうち、前者は185×116cm、深さ40cmの規模で、底面は平坦。埋土はローム塊を多く含む人為的なもので、床下土坑かあるいは住居跡と重複する遺構かは不明。後者は不整形楕円形で200×100cm、深さ7cmを測り、底面が凹凸あり、掘方のくぼみの可能性がある。壁際のピットは径50cm、深さ30cmを測る。これは後の調査でJ区5号掘立柱建物跡の柱穴と判明した。本住居跡との新旧関係は不明。

出土遺物 灰釉碗と須恵器碗が出土。



第138図 I区10号住居跡



第139図 J区1号住居跡及び出土遺物

Ｊ区 2号住居跡 (第140図 P L.60)

位置 210・215-020・025グリッド

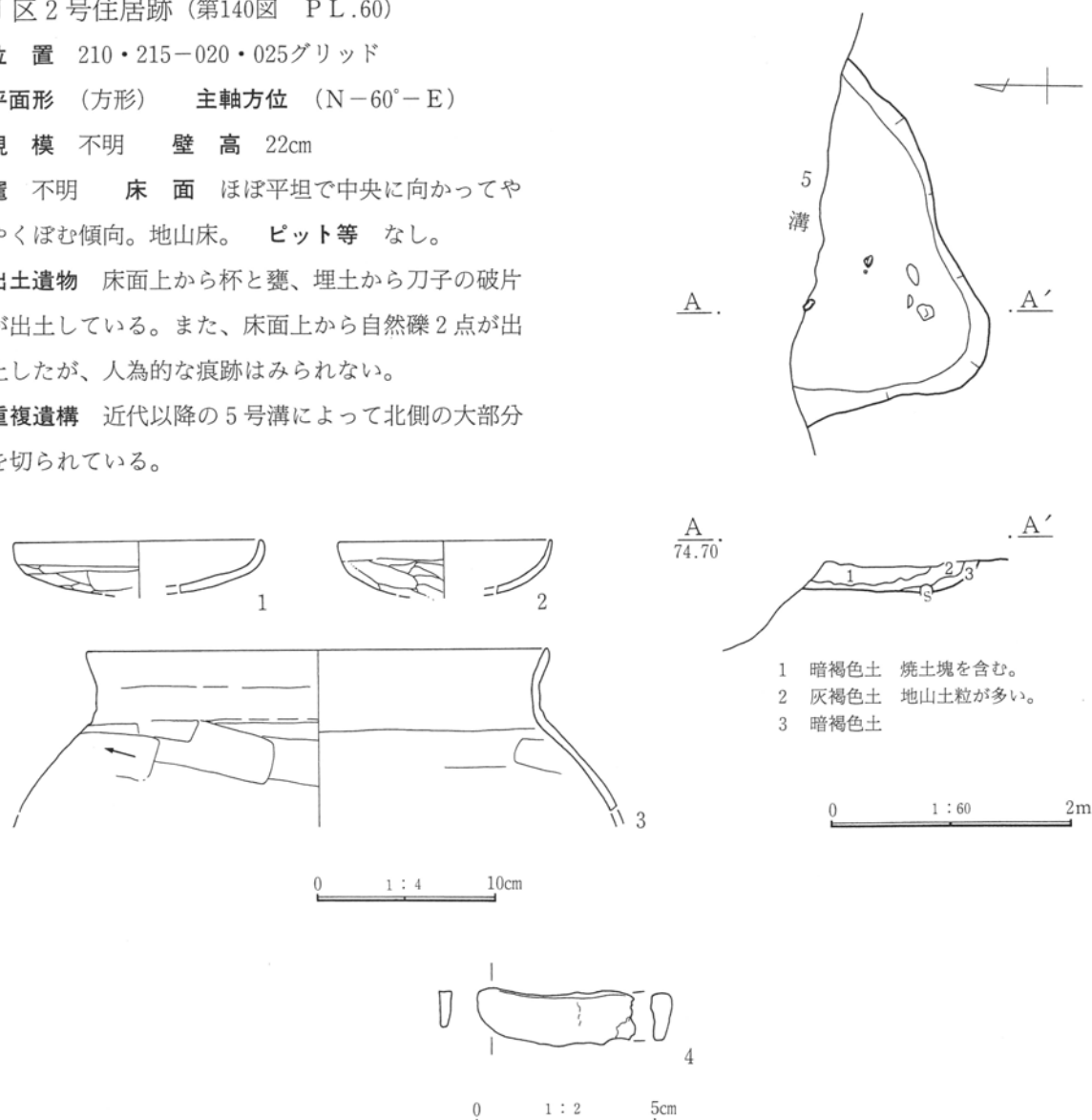
平面形 (方形) 主軸方位 (N-60°-E)

規模 不明 壁高 22cm

竈 不明 床面 ほぼ平坦で中央に向かってややくぼむ傾向。地山床。ピット等 なし。

出土遺物 床面上から杯と甕、埋土から刀子の破片が出土している。また、床面上から自然礫2点が出土したが、人為的な痕跡はみられない。

重複遺構 近代以降の5号溝によって北側の大部分を切られている。



第140図 J区 2号住居跡及び出土遺物

Ｊ区 3号住居跡 (第141・142図 P L.61)

位置 190-005グリッド

平面形 (方形) 主軸方位 (N-90°-E)

規模 -×2.94m 壁高 9cm

竈 焼土の分布から東辺に存在したと推測される。

床面 北側に向かって傾斜する。明瞭な掘方はないが、硬化面も認められない。

ピット等 検出されなかった。

出土遺物 想定された住居跡プラン内の埋土から杯、甕、椀等が出土している。ただし、重複する8・

13号住居跡出土遺物との峻別は不可能。

重複遺構 8号住居跡・13号住居跡と重複するが、新旧関係は明らかにできなかった。

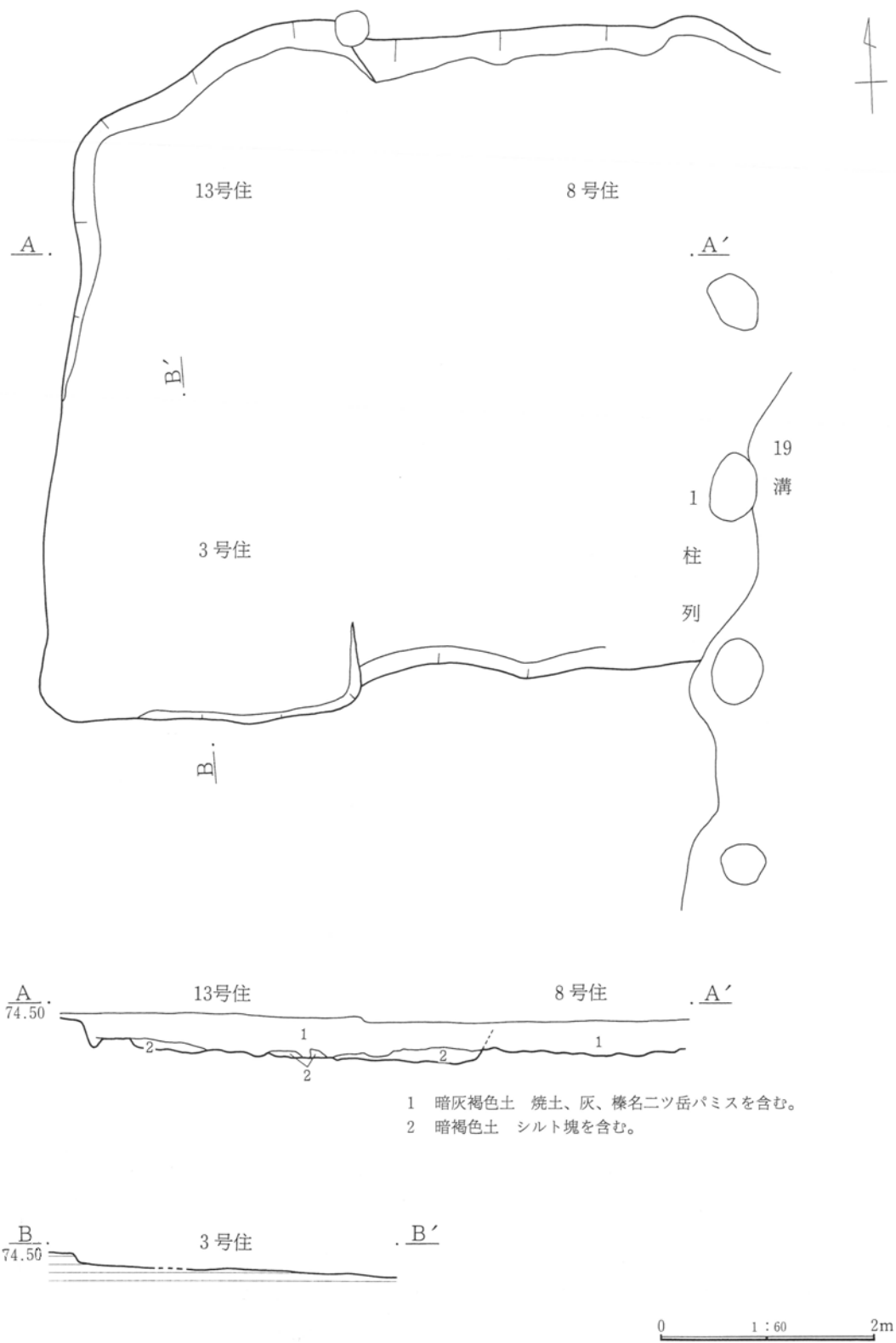
Ｊ区 8号住居跡 (第141・142図 P L.61)

位置 190・195-995・000グリッド

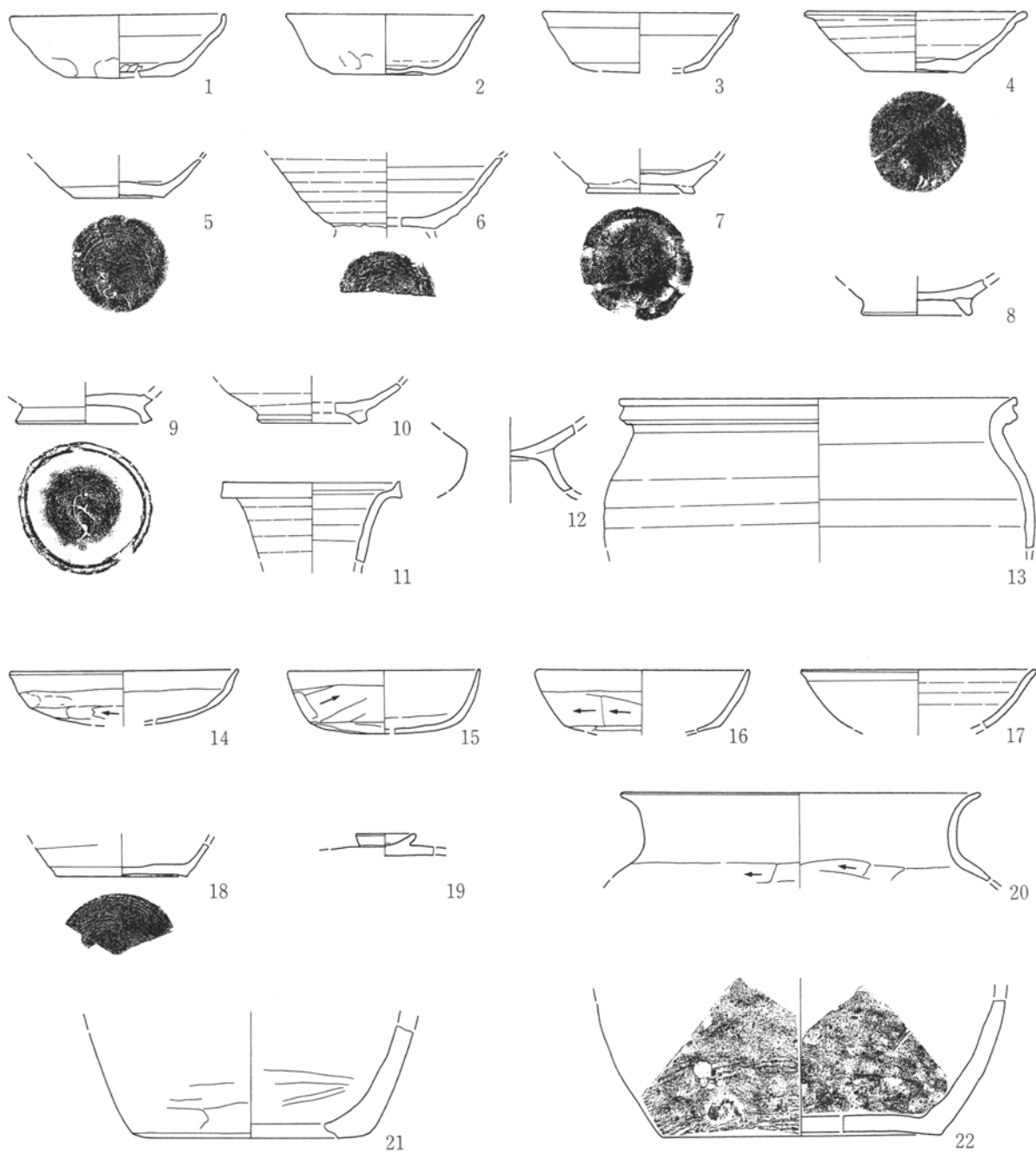
平面形 (長方形) 主軸方位 N-85°-E

規模 6.00×-m 壁高 28cm

竈 不明 床面 レベルはほぼ水平で、小さな凹凸が著しく、硬化面は不明瞭。ピット等 なし。



第141図 J区3・8・13号住居跡



1～13 J区3号住

14～22 J区8号住

第142図 J区3・8号住居跡出土遺物

出土遺物 杯、甕、蓋等が出土したが、重複する3・13号住居跡出土遺物との峻別は不可能。

重複遺構 13号住居跡に切られる。1号柱列・19号溝との新旧関係は不明。

J区13号住居跡(第141図)

位置 190・195-005グリッド

平面形・主軸方位・規模 不明 **壁高** 35cm

竈 不明 **床面** ほぼ平坦な掘方に10cmほどの埋土で床面を整える。

ピット等 西壁に沿って幅15cmの壁溝が検出された。

出土遺物 住居プランからは出土していない。

重複遺構 8号住居跡を切る。

Ⅱ区4号住居跡 (第143図 P L.61)

位置 220-025・030グリッド

平面形 (方形) 主軸方位 N-80°-E

規模 3.35×2.85m 壁高 16cm

竈 東辺の南寄りに位置し、燃烧部底面(火床面)のみ検出した。火床面の範囲は幅55cm、奥行きが60cmを測る。掘方は中央部がくぼむ皿状で焼土塊と炭化物粒を含む暗褐色土が堆積する。焚き口はわずかにくぼんで炭化物粒と灰の薄層がみられる。なお、焚き口部には袖の芯材と思われる焼けた安山岩製の角礫が出土した。**床面** 明確な硬化面は検出できなかった。掘方はおおむね平坦に掘られており、焚き口のレベルと比較しても貼り床のための埋め土は厚くなかったと推測される。

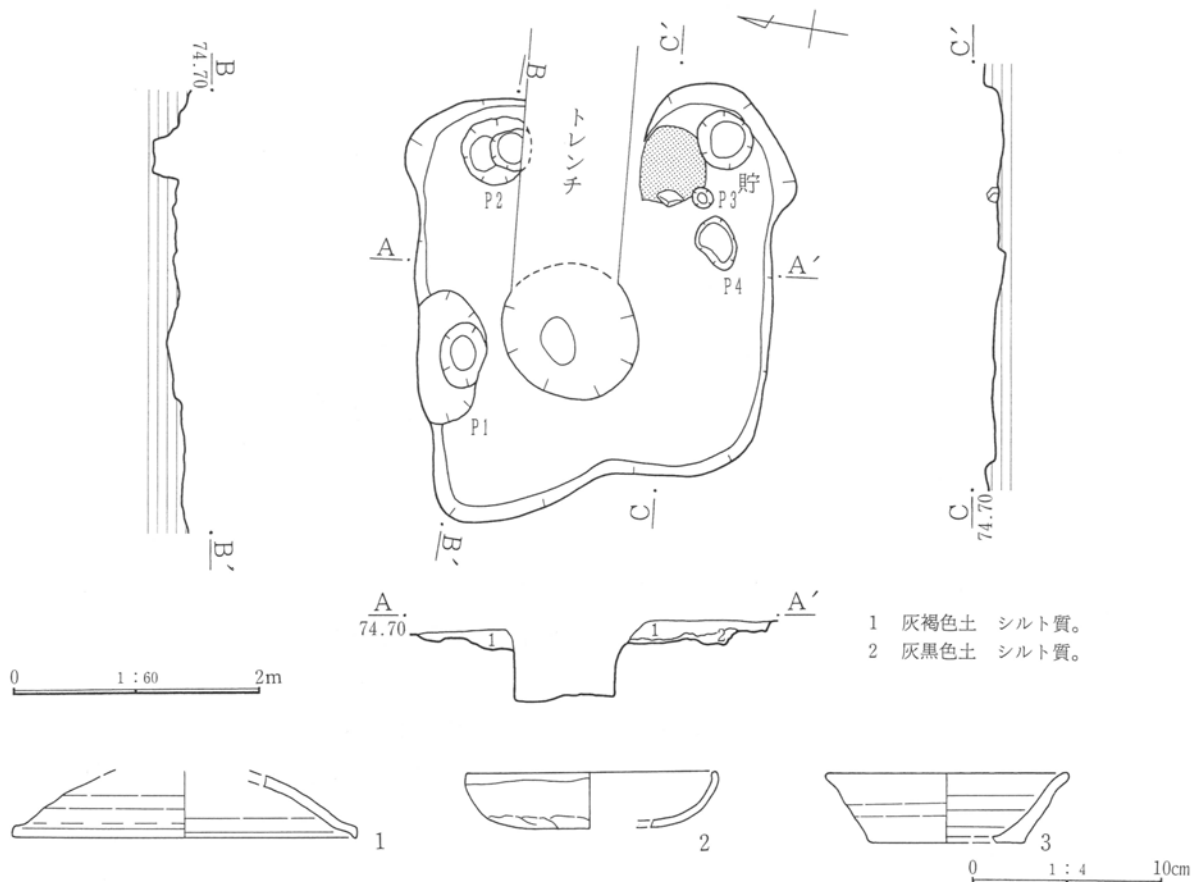
ピット等 南東隅の円形ピットは竈の右脇にあり、貯蔵穴と推測する。規模は径44cm。また、中央部に

径112cm、深さ45cmの円形土坑が検出された。床面との関係は不明だが、底面が平坦であることから床下土坑であった可能性がある。他にP1~P4が検出された。P1は不整形のくぼみで掘方の深い部分と思われる。P2は北東隅にあり平坦な底面から貯蔵穴の可能性も考えられる。P3は竈焚き口脇にあり小規模であることから掘方ないしは重複する遺構と考えたい。P4は土層断面から本住居跡を切る重複遺構と考えられる。

出土遺物 掘方埋土から出土しており、図化できるのは、9世紀前半代の杯と蓋である。

重複遺構 Ⅱ区1号掘立柱建物跡と重複する位置にあるが、新旧関係は不明。

	径 (cm)	深 (cm)		径 (cm)	深 (cm)
P 1	102×56	19.5	P 3	16	—
P 2	52	23	P 4	42×28	—



第143図 Ⅱ区4号住居跡及び出土遺物

Ｊ区 5号住居跡 (第144図 P L.61)

位置 215・220-030グリッド

平面形 (方形) 主軸方位 N-86°-E

規模 不明 壁高 22cm

竈 南辺に位置し、燃烧部から煙道にかけての底面
部が検出された。南半は後世攪乱のため削られてい
る。燃烧部の内面幅は70cm前後、煙道立ち上がり部
までの奥行きは90cm前後を測る。火床面は奥に向か
って緩く傾斜し、急角度で立ち上がって煙道部に続
く。なお、焚き口附近から50cmほど離れて安山岩角
礫3点が出土したが、火を受けた形跡から袖あるい
は天井部に使われた可能性がある。左袖部は地山を
掘り残して、若干住居内に張り出す。ここに粘土や
礫等を積んで袖と天井部を構築したのだろう。

床面 硬化面や貼り床は不明瞭。ほぼ平坦な掘方
のみ検出された。ピット等 北壁際で1基検出さ
れたが、重複する1号掘立柱建物跡の柱穴P8と判
明した。新旧関係は不明。

出土遺物 竈内から2個体分の羽釜片と壁際から皿
が出土。

重複遺構 1号掘立柱建物跡の南西隅と重複。

Ｊ区 6号住居跡 (第145図 P L.61)

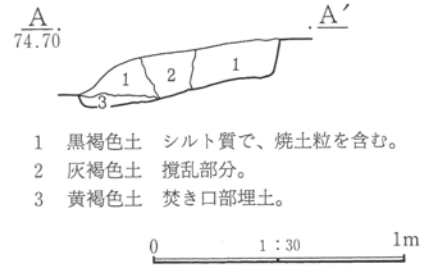
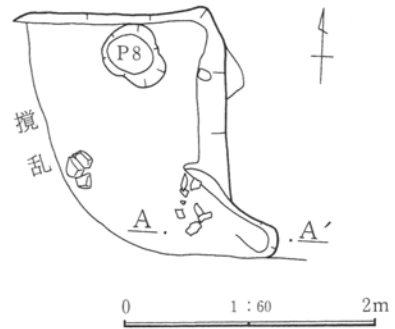
位置 185・190-005・010グリッド

平面形 不整長方形 主軸方位 N-80°-E

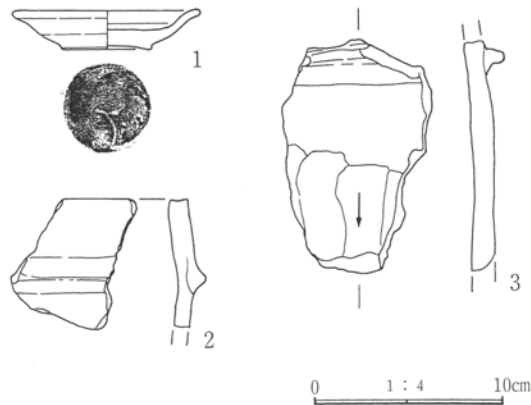
規模 3.58×3.50m 壁高 26cm

竈 東辺南寄りに位置し、燃烧部底面と左袖基部が
検出された。燃烧部は幅55cm、奥行き55cmを測る。
燃烧部奥壁は急傾斜で立ち上がり、段状の部分から
煙道に続く。遺存する左袖は基部が25cm住居内に張
り出す。なお、両袖の外側にそれぞれ18cm大の亜円
礫が1点ずつ出土しており、袖部の芯材に使われた
と考えられる。床面 ほぼ平坦な掘方面に5cm
前後の厚さで埋め土をして貼り床を整える。焚き口
附近以外に明瞭な硬化面はみられない。

ピット等 南壁際から北西にかけてP1・P2・P
3が並ぶが柱穴とは考えにくく、性格は不明。南西
隅に2基の土坑が重複して検出された。床面下から



- 1 黒褐色土 シルト質で、焼土粒を含む。
- 2 灰褐色土 攪乱部分。
- 3 黄褐色土 焚き口埋土。



第144図 J区5号住居跡及び出土遺物

検出されたので床下土坑あるいは掘方面のくぼみと
考えられる。

出土遺物 プラン内埋土から灰釉碗等が出土する。
ただし、重複する7号住居跡との帰属関係は不明。

重複遺構 7号住居跡を切る。

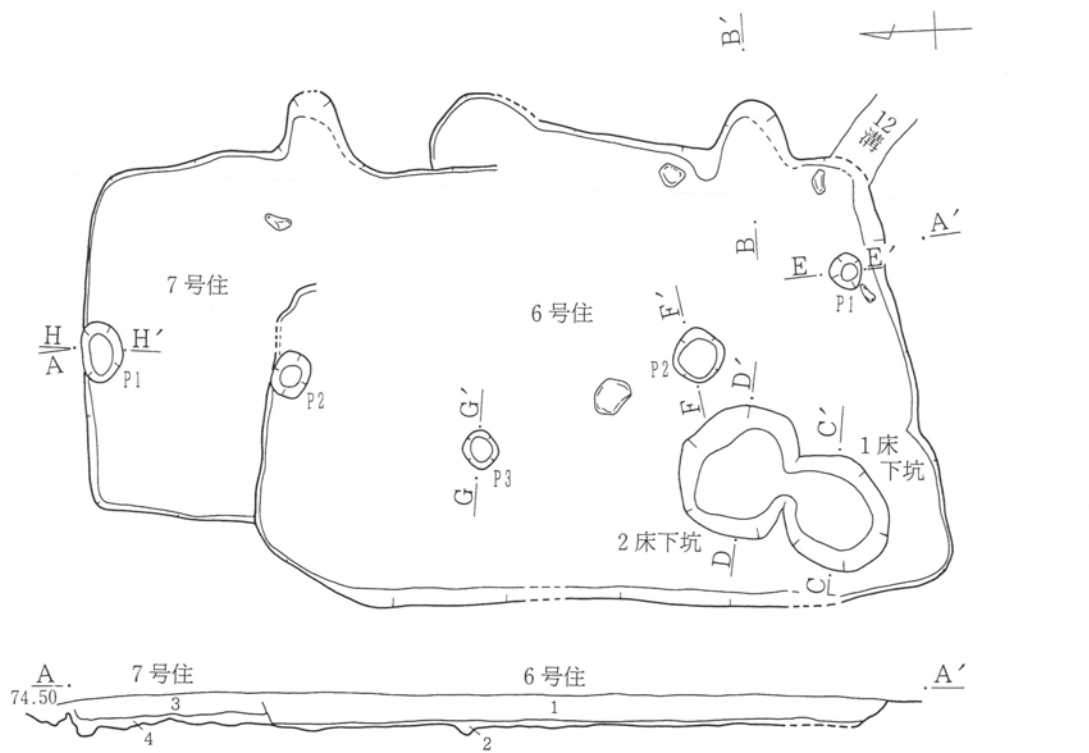
Ｊ区 7号住居跡 (第145図 P L.61)

位置 190・195-005グリッド

平面形 長方形 主軸方位 N-88°-E

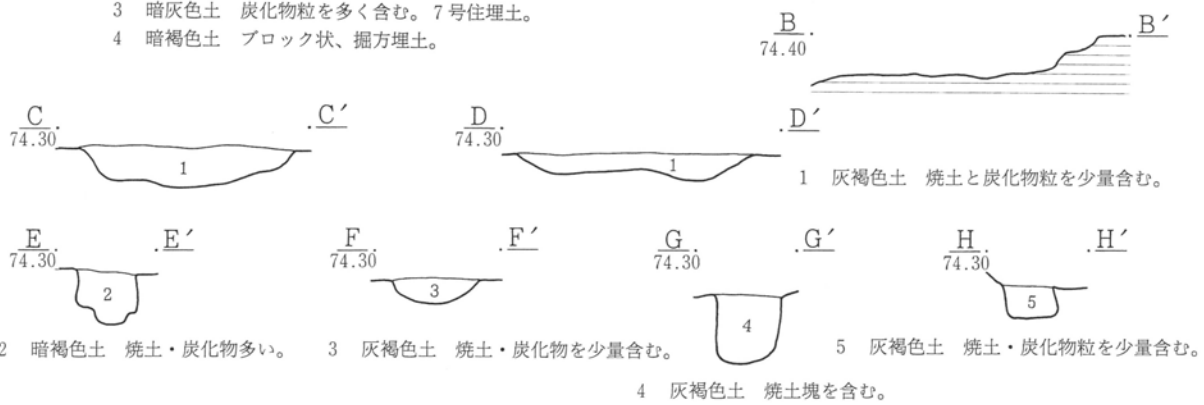
規模 3.30以上×2.95m 壁高 22cm

竈 東辺中央に位置し、燃烧部底面が検出された。
幅50cm、奥行き55cm。火床面は焼けて硬化しており、

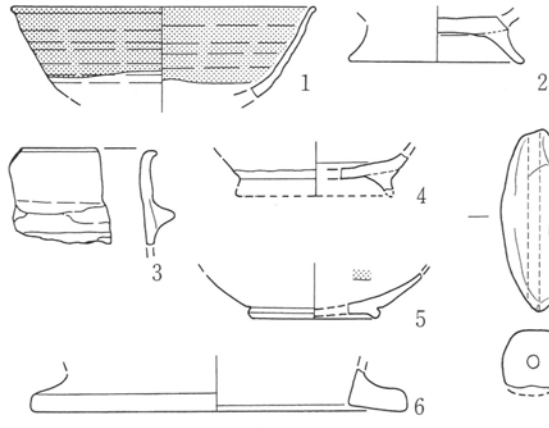


- 1 暗灰色土 6号住埋土。
- 2 暗灰色土 ブロック状、掘方埋土。
- 3 暗灰色土 炭化物粒を多く含む。7号住埋土。
- 4 暗褐色土 ブロック状、掘方埋土。

0 1:60 2m



- 1 灰褐色土 焼土と炭化物粒を少量含む。
- 2 暗褐色土 焼土・炭化物多い。
- 3 灰褐色土 焼土・炭化物を少量含む。
- 4 灰褐色土 焼土塊を含む。
- 5 灰褐色土 焼土・炭化物粒を少量含む。



6号住	径 (cm)	深 (cm)	7号住	径 (cm)	深 (cm)
P 1	28×25	20	P 1	46×32	13
P 2	40×38	10	P 2	35×29	27
P 3	28×26	27			
1床下	90×83	16			
2床下	105×92	11			

0 1:4 10cm

7(1/2) 1~3 J区6号住
4~7 J区7号住

第145図 J区6・7号住居跡及び出土遺物

ほぼ水平にのびて奥壁は急傾斜で立ち上がる。

床 面 やや凹凸のある掘方面に厚さ5~10cmの埋め土で床面を整える。床面レベルは6号住居跡より8cmほど高い。**ピット等** 北壁際と中央にP1・P2の2基が検出されたが、性格は不明。

出土遺物 埋土から灰釉皿や土錘等が出土した。

重複遺構 6号住居跡に切られる。

竈 焼土分布から東辺に位置すると思われるが、削平によりほとんど遺存せず、詳細は不明である。

床 面 掘方面のみ検出。掘方埋土の重複から2棟重複すると想定した。掘方は南半にあたる住居跡がやや深く、凹凸も著しい。**ピット等** なし。

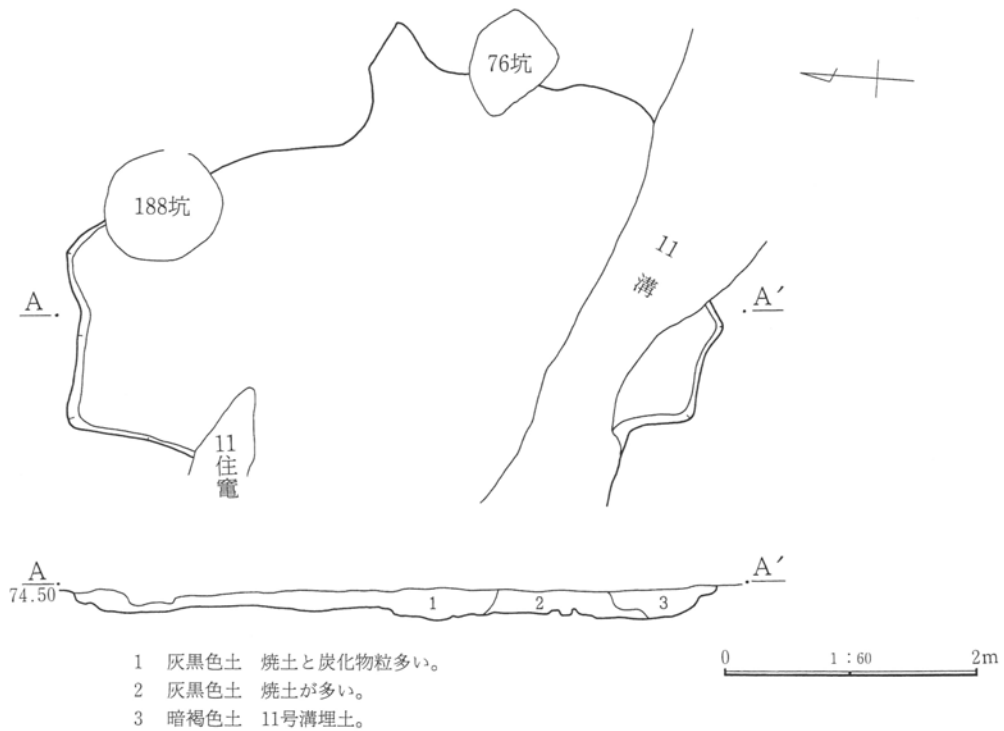
出土遺物 埋土及び掘方面から9世紀後半代の杯、甕等の破片が出土するが、明瞭な時期差は認められない。このため、本来は1棟の住居跡であった可能性もある。

重複遺構 11号住居跡、76号土坑、188号土坑、11号溝に切られる。

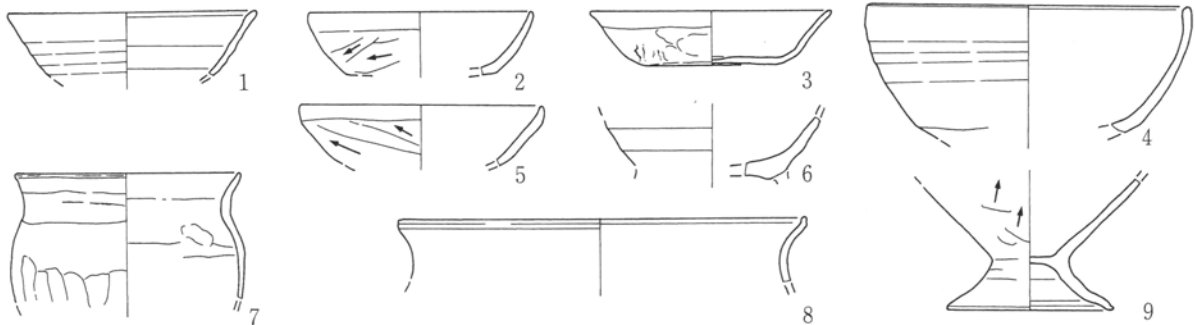
J区9・10号住居跡 (第146図 PL.61)

位 置 195-010グリッド

平面形・主軸方位・規模 不明 **壁 高** 25cm



- 1 灰黒色土 焼土と炭化物粒多い。
- 2 灰黒色土 焼土が多い。
- 3 暗褐色土 11号溝埋土。



2・3・6・7・9 J区9号住

1・4・5・8 J区10号住

第146図 J区9・10号住居跡及び出土遺物

Ⅱ区11号住居跡 (第147~149図 PL.62)

位置 200・205-010・015グリッド

平面形 方形 主軸方位 N-85°-W

規模 3.75×3.45m 壁高 16cm

竈 東辺南寄りに位置し、燃焼部~煙道が検出された。焚き口から煙道端までは170cmを測る。焚き口は25・30cm大の楕円礫を露出したまま直立させて袖とし、高さは20cm前後と推測される。天井部分については不明。燃焼部は細長い箱形で、内幅55cm、奥行き65cmほどである。火床面中央に三角形の角礫を直立させて10cmほどの高さの支脚とする。またそこから20cm奥にも小角礫があり、これも支脚とすれば、土器設置は2個縦列の可能性が高い。煙道は燃焼部から緩やかに傾斜して続き45cmほど延びたところで急角度で立ち上がる。竈底面は掘方に焼土塊、粘土、炭化物、灰を埋めて整えており、特に煙道先端部には粘土を充填して傾斜角を造りだし、さらに竪穴外

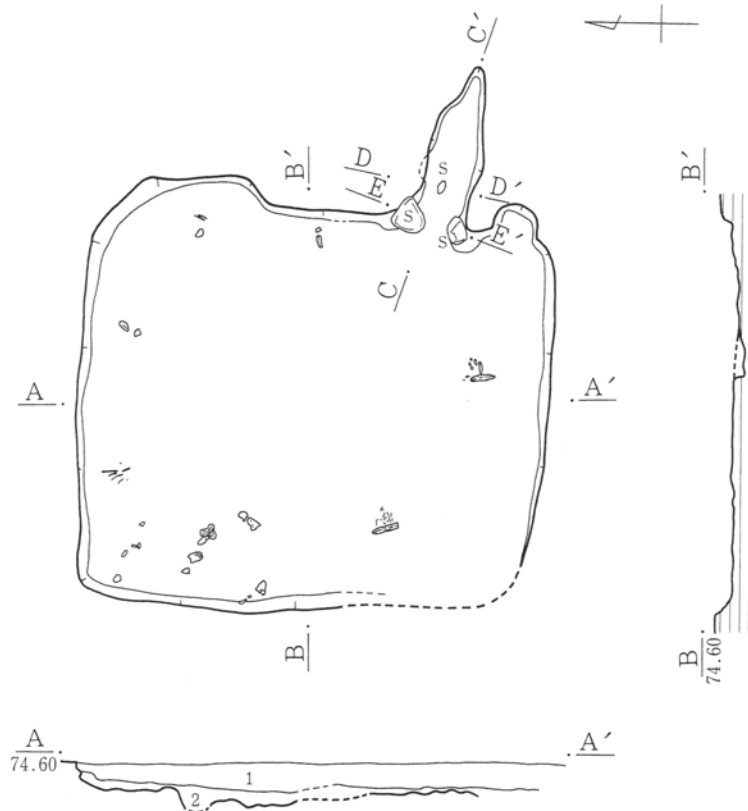
に煙突状に盛り上げた形跡が窺える。

床面 凹凸の多い掘方面面に5~15cmの厚さの埋め土によって床面を整える。部分的に粘土の薄層が認められることから、薄い貼り床の可能性もある。

ピット等 床下から土坑3基が検出された。いずれも不整形で浅く、人為的埋土で充填される。南西隅の2号土坑は焼土主体で、竈造り替え時に竈廃材を廃棄したと思われる。なお、3号土坑は貯蔵穴の位置だが、上位に硬化した灰層面があるため床下土坑と考えた。また、壁に沿って壁溝が幅10cmほどで全周するが、底面状況は不明瞭で、どのような機能をもつか手がかりは得られなかった。

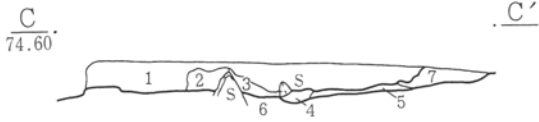
出土遺物 床面上から微量だが炭化材が出土する。このうち木質材は垂木ないし梁桁材、ヨシと思われる細い茎を束ねたものは屋根葺き材であろうか。

重複遺構 10号住居跡、11号溝を切る。

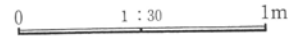
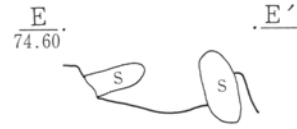
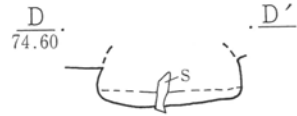


- 1 灰褐色土 焼土粒、炭化物、灰を多く含む。ブロック状で人為的埋土の可能性あり。
- 2 灰黒色土 地山のローム塊を含む。掘方埋土。

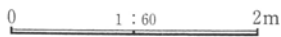
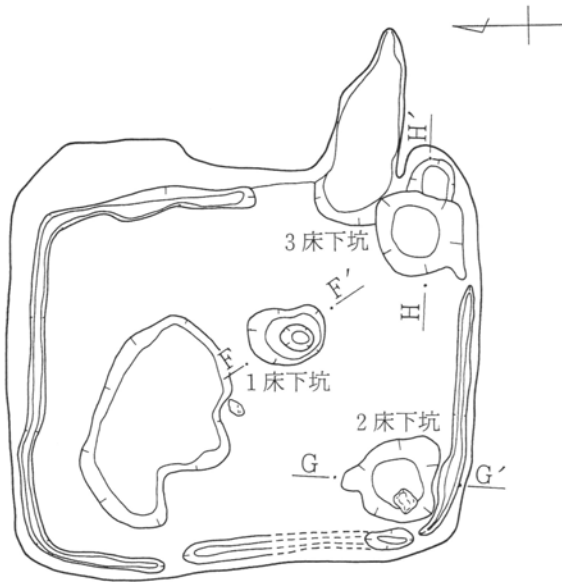
第147図 Ⅱ区11号住居跡 (炭化材出土状況)



- 1 灰黒色土 焼土と炭化物多い、住居埋土1層に同じ。
- 2 褐色土 炭化物が多く、焚き口天井部の崩落したものか。
- 3 褐色土 焼土主体。
- 4 赤褐色土 焼土塊。
- 5 灰層
- 6 暗灰褐色土 焼土と粘土主体。掘方埋土。
- 7 灰褐色粘土 堅くしまる。



第148図 J区11号住居跡竈土層断面



	径(cm)	深(cm)		径(cm)	深(cm)
1床下	60×44	17	3床下	70×67	11
2床下	76×68	16			

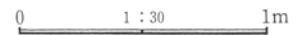
- 1 暗褐色土 焼土、炭化物、粘土を含む。上位に粘土薄層。



- 1 灰褐色土 焼土、炭化物を含む。
- 2 灰褐色土 砂質でブロック状。
- 3 赤褐色土 焼土主体。
- 4 暗褐色土 ローム、炭化物、焼土を含む。
- 5 暗褐色土 炭化物粒を含む。壁溝埋土。



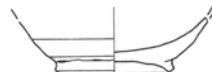
- 1 暗褐色土 焼土、炭化物多い、上位に灰層。
- 2 暗褐色土 粘土粒を多く含む。



1



2



3



4



第149図 J区11号住居跡掘方及び出土遺物

Ｊ区12号住居跡（第150図）

位置 170・175-985・990グリッド

平面形（方形） 主軸方位 N-75°-W

規模 4.25×-m 壁高 20cm

竈 不明 床面 明瞭な硬化面は検出できなかった。土層観察で掘方埋土が認められないことから、地山掘方面をほとんど手を加えずに床面とした可能性が高い。ピット等 なし。

出土遺物 埋土から椀、瓦等の破片が出土する。

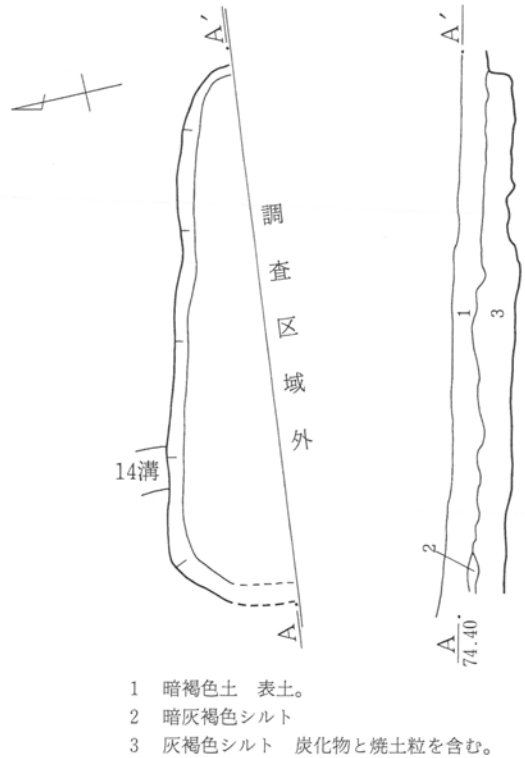
Ｊ区15号住居跡（第151図 P L.63）

位置 225・230-020・025グリッド

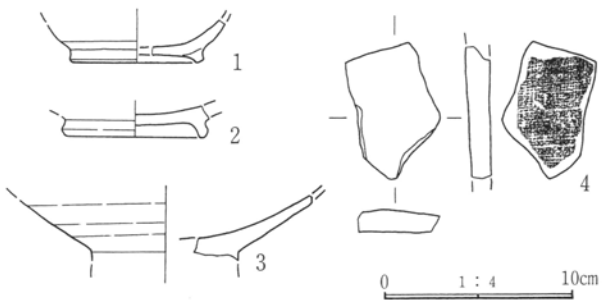
平面形 方形 主軸方位 N-70°-E

規模 3.06×2.70m 壁高 10cm

竈 東辺南寄りに位置し、焚き口から煙道部が検出された。全長180cmを測り、竈軸は住居主軸よりやや南に傾く。焚き口は地山の暗褐色土を掘り残した袖で囲み、内幅48cmを測る。燃烧部は楕円形の平面で、内幅37cm、現存高18cmを測る。奥行きは40cm前後。煙道は燃烧部からほぼ水平に90cm延び、そこから外傾して立ち上がる。煙道部は天井部分が遺っており、その径は20×13cmを測る。燃烧部の焚き口近くの中央に小礫を据えて支脚としている。竈掘方に焚き口から燃烧部にかけては灰、煙道部ではローム塊を含む埋め土を施して火床面を整えている。なお燃烧部と煙道部は重複する19号住居跡埋土内に構築されており、粘土は使われていない。また燃烧部内壁と煙道部内面は焼土化がすすみ、著しく赤変硬化している。なお、煙道部底面下で10cm大の円礫が出土したが、加熱変化がみられないことから、重複する19号住居跡に伴うものと判断される。床面 地山の黄褐色土をそのまま床面として用いる。明瞭な硬化面は認められない。ピット等 4基のピットが検出された。このうち、北壁際中央にあるP1は床下から検出された。他の3基は北西隅に集中しており、支柱穴とは考えにくい。また、壁溝が竈部分を除いて全周しており、幅15~20cm、深さ3~5cmを測る。出土遺物 埋土から破片数点が出土したのみ。



0 1 : 60 2m



第150図 J区12号住居跡及び出土遺物

重複遺構 19号住居跡を切る。

Ｊ区19号住居跡（第151・152図）

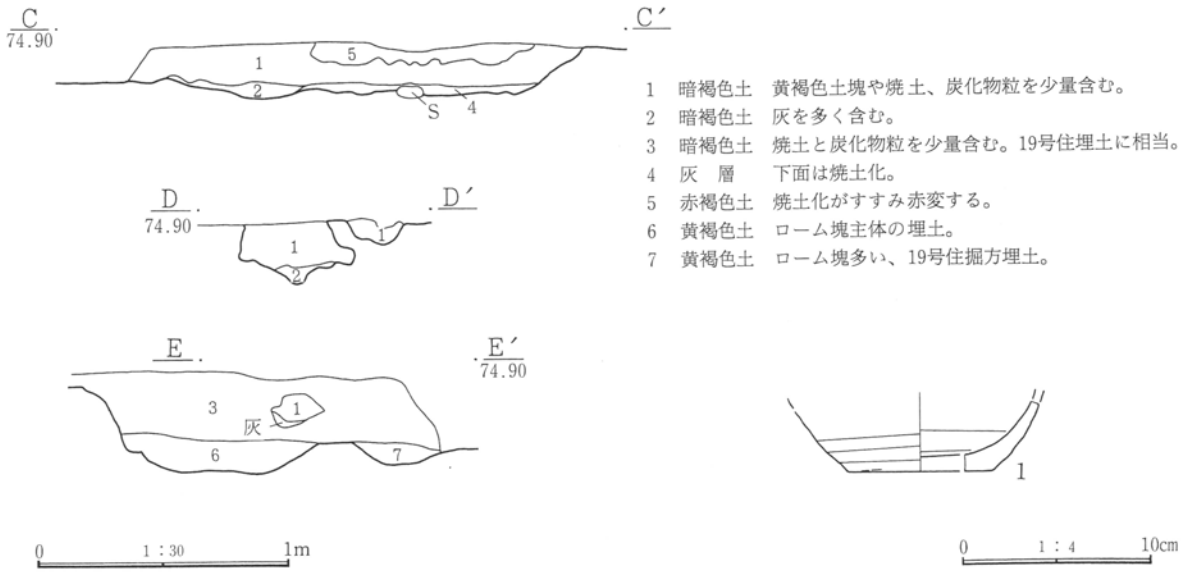
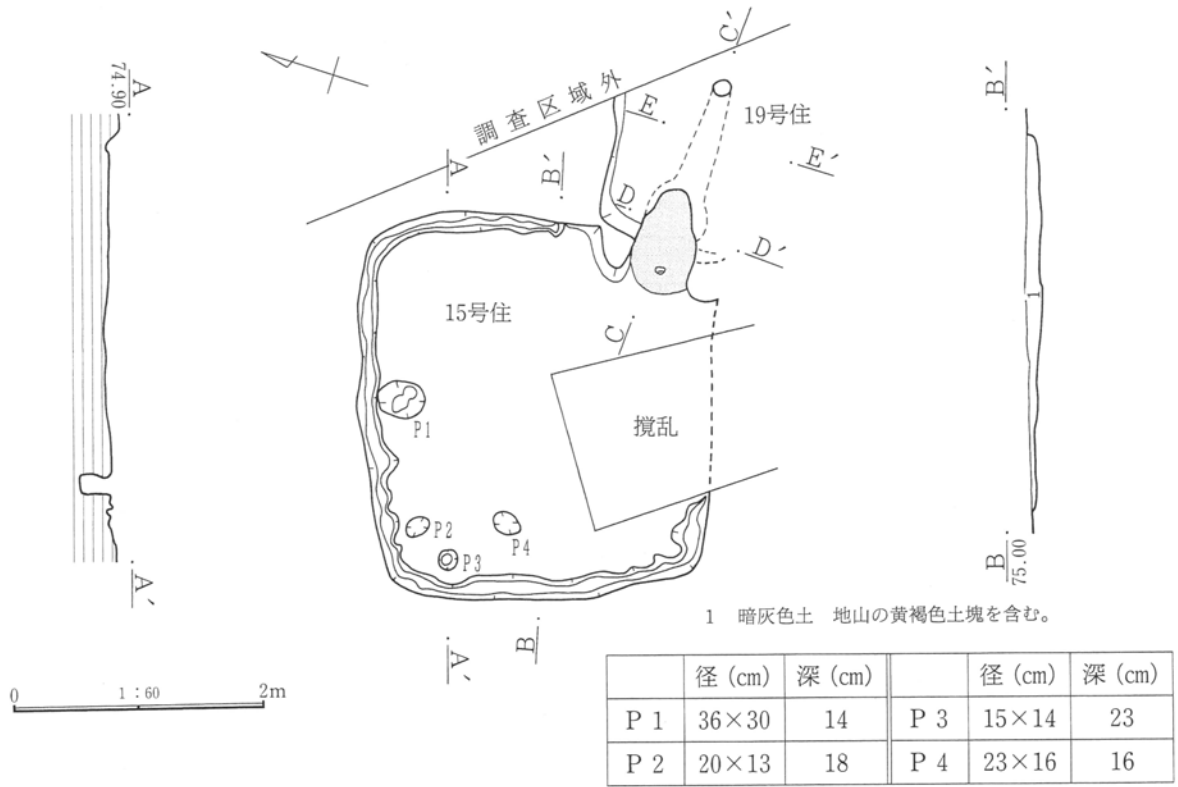
位置 225・230-020グリッド

平面形・主軸方位・規模 不明 壁高 37cm

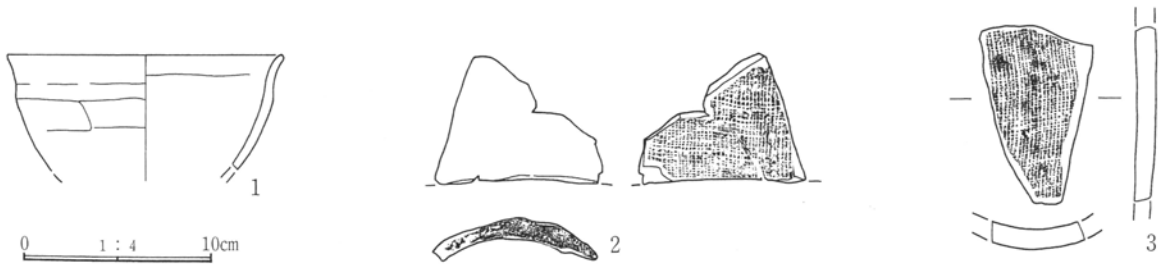
竈 不明 床面 掘方に埋め土で床面を整える。ピット等 なし。

出土遺物 埋土から土師器椀（第152図-1）のほか瓦片が出土する。椀の特徴から古墳時代後期に遡る可能性がある。

重複遺構 15号住居跡に切られる。



第151図 J区15・19号住居跡及び15号住居跡出土遺物



第152図 J区19号住居跡出土遺物

J区16号住居跡 (第153図 PL.64)

位置 230・235-025グリッド

平面形 (方形) 主軸方位 N-7°-E

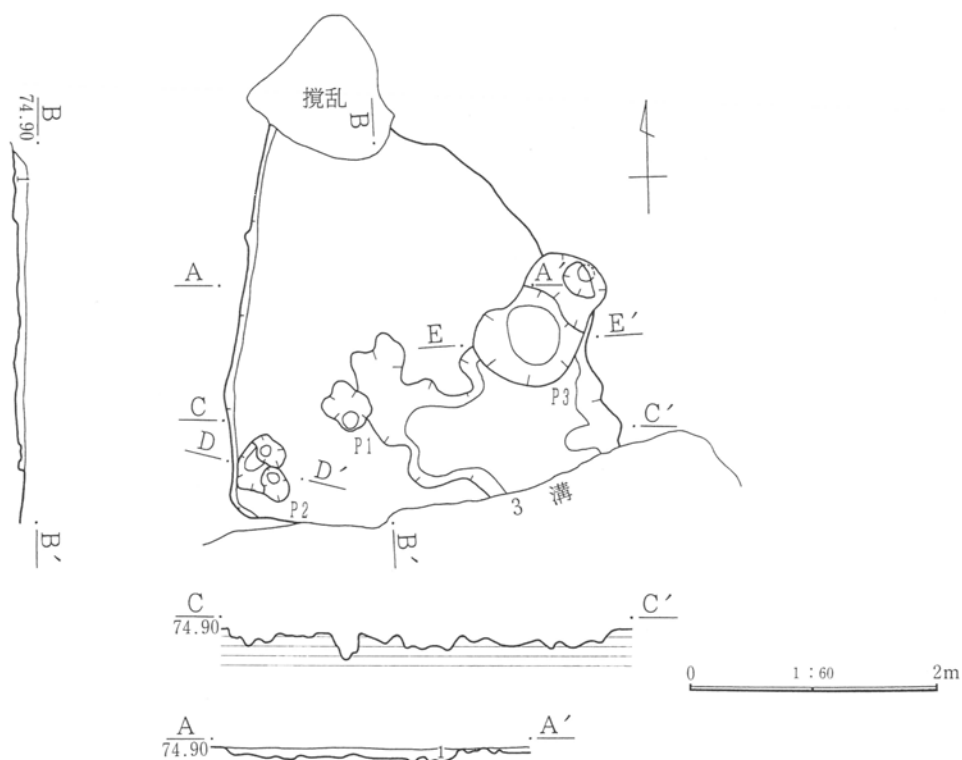
規模 不明 壁高 6cm

竈 不明 床面 掘方のみで硬化面もみられない。掘方は比較的凹凸が著しいが、特に南東半で深く掘り込まれた不定形部分がみられる。掘方埋土の厚さは少なくとも10cmを越える。ピット等 南西

部で西壁から90cm離れてP1、南西隅にP2、東半部でP3の3基が検出された。このうち、P3は規模が大きく、平面が「L」字状に屈曲する形状で底面に根石として礫を置く。このことから、重複する掘立柱建物跡の隅柱穴の可能性はある。ただし、対応する柱列は調査区外のため確認できなかった。

出土遺物 P2から完形杯(3)が出土した。

重複遺構 3号溝との関係は不明。

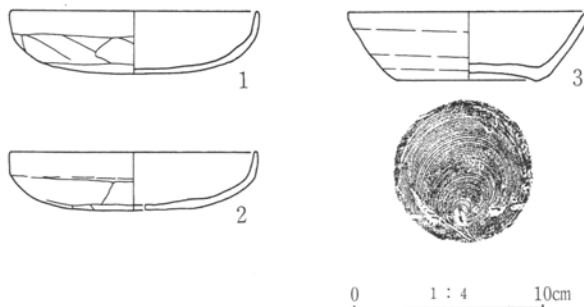
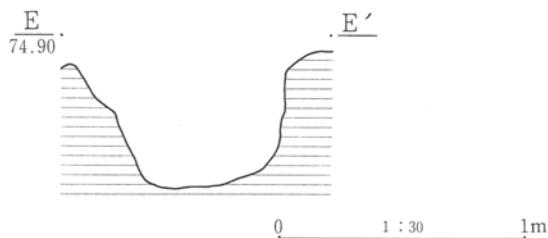


1 暗灰褐色土 シルト質でローム塊を含む。



- 1 暗灰黒色土 炭化物粒と焼土を含む。
- 2 暗灰黒色土 As-Cを含む。地山土の流れ込みか。
- 3 黒色土
- 4 灰黒色土 焼土、灰を含む。

	径 (cm)	深 (cm)		径 (cm)	深 (cm)
P 1	35×30	21	P 3	113×68	55
P 2	53×45	27			



第153図 J区16号住居跡及び出土遺物

Ⅱ区17号住居跡 (第154・155図 PL.64)

位置 185・190-015・020グリッド

平面形 不整長方形 主軸方位 N-65°-E

規模 3.82×2.90m 壁高 22cm

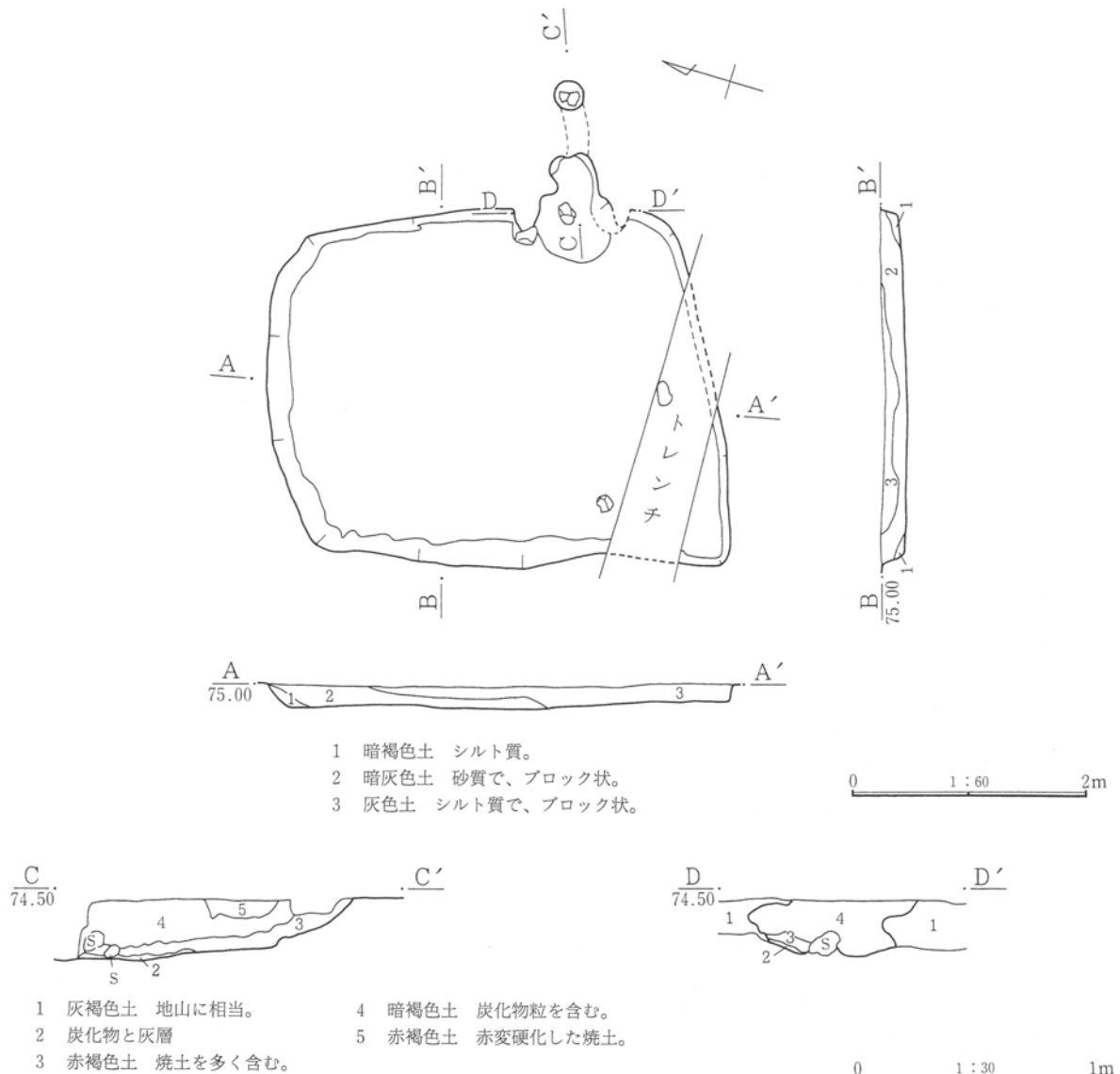
竈 東辺南寄りに位置し、焚き口から煙道部までを検出した。焚き口は角礫を立てて袖とし、開口部内幅は50cmほどを測る。燃焼部は卵形の平面で、内幅50cm現存高24cm奥行き60cmを測る。中央部に円礫を据えて支脚とする。煙道は火床面からそのまま水平に延びて25cmほどの位置で外傾して立ち上がる。煙道の内径は13×18cmで、天井部分は加熱変化により赤色硬化している。焚き口から燃焼部にかけては炭

化物や灰を埋めて火床面としている。本体部に関しては、地山の土を掘り抜くことで構築しており、粘土は特に使用していない。

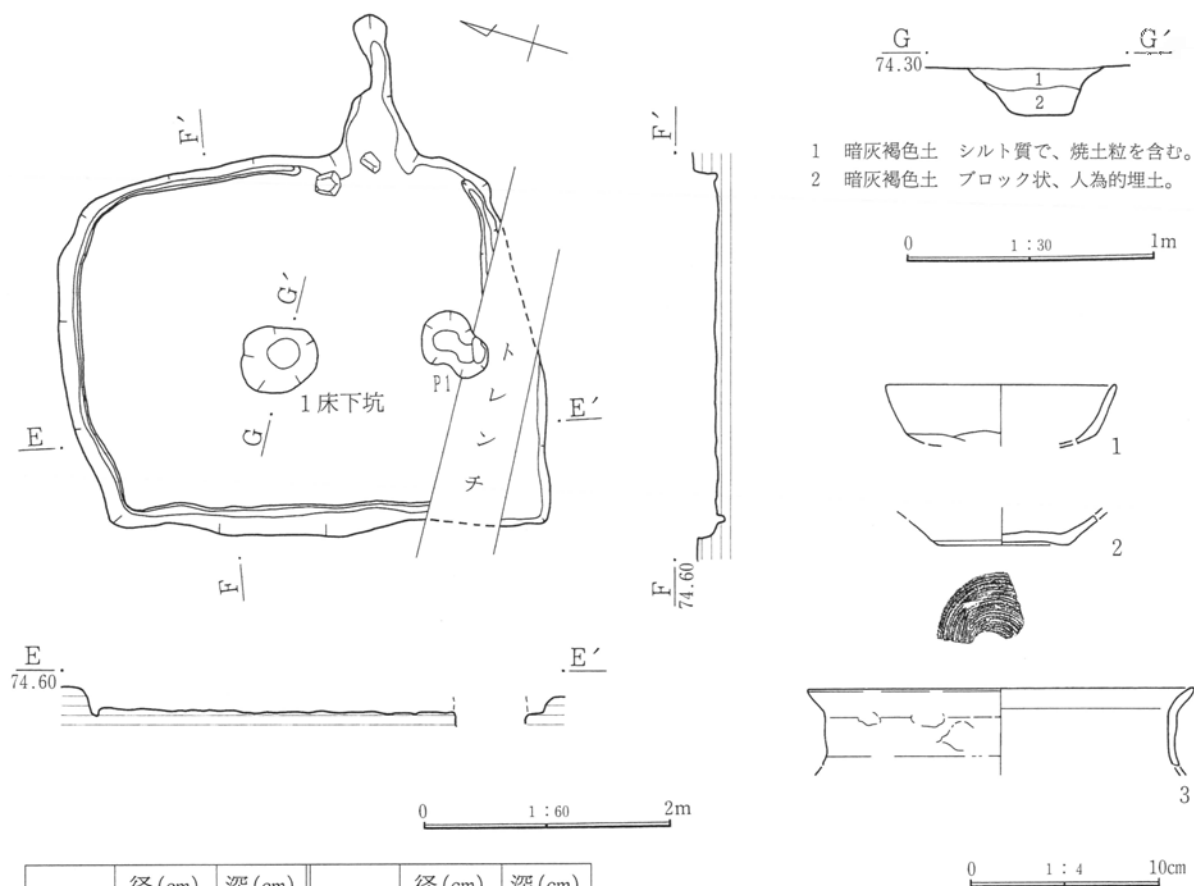
床面 ほぼ平坦な掘方面にわずかな埋め土で床面を整える。ピット等 南壁際でピット1基、中央部で床下土坑1基が検出された。ピットは不整形で、位置的に柱穴というより、出入口施設に伴う支柱穴の可能性がある。掘方調査時に全周する壁溝が検出された。幅5~10cm、深さ5cmを測る。

出土遺物 埋土から杯、甕等、床下土坑から須恵質羽釜片が出土している。

重複遺構 18号住居跡を切る。



第154図 Ⅱ区17号住居跡



	径 (cm)	深 (cm)		径 (cm)	深 (cm)
P 1	60×38	12	1床下	58×53	21

第155図 J区17号住居跡掘方及び出土遺物

J区18号住居跡 (第156図)

位置 185-015グリッド

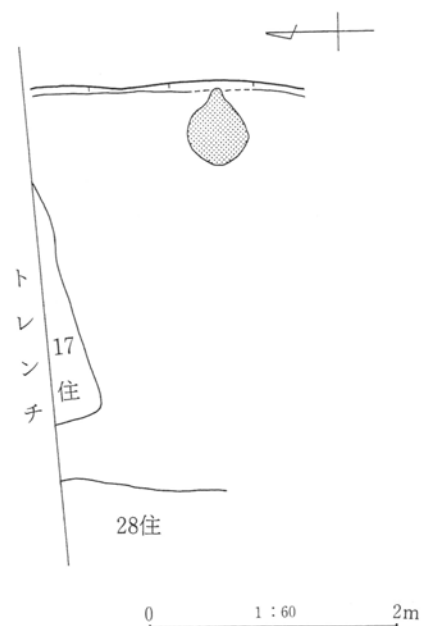
平面形 (方形) 主軸方位 N-88°-E

規模 3.30×-m 壁高 20cm

竈 東辺に位置し、燃烧部底面(火床面)のみ検出された。範囲は60×50cmの円形で、燃烧部本体は竖穴内に存在した可能性が強い。床面 地山をそのまま床面に使用。ほぼ平坦で、硬化面は特に認められなかった。なお、重複する17号住居跡より床面レベルが10cm前後高い。ピット等 なし。

出土遺物 9世紀以降の土器片が埋土中から出土したが、期限定できるだけのものはみられない。

重複遺構 17・28号住居跡に切られる。



第156図 J区18号住居跡

Ⅱ区20号住居跡 (第157・158図 PL.65)

位置 195-020グリッド

平面形 長方形 主軸方位 N-8°-E

規模 3.24×2.70m 壁高 12cm

竈 北辺の東寄りに位置し、燃焼部のみ検出された。平面は半円形で、掘方の規模は、幅70cm、奥行き65cmを測る。内壁や袖部が崩れているため、使用時における内法は不明である。火床面は緩く傾斜しながら煙道方向に上がり、奥壁は急角度で立ち上がる。遺存する左袖部は地山を掘り残してあり、そこに角礫をすえて補強している。火床面下には特に目立った埋土はみられなかった。

床面 掘方はほぼ平坦に整っており、貼り床や埋土は認められなかった。地山面に近い状態で床面として使用したのだろう。

ピット等 床面下の調査で6基のピットが検出された。いずれも人為的埋土が堆積しているが、性格は不明。配置から支柱穴とは考えにくい。竈手前に2基の円形のくぼみが認められたが、灰と焼土の堆積から、掻き出した竈廃棄物の集積の可能性が高い。また、住居中央にも円形及び土坑状のくぼみが認められたが、掘方のくぼみかあるいは重複する他遺構の可能性もある。壁溝は西半の壁に沿って巡り、幅10~15cm、深さ5cm前後を測る。

出土遺物 竈右脇にあたる北東隅に集中して出土し、時期は10世紀代に限られる。

重複遺構 3号掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係は不明。

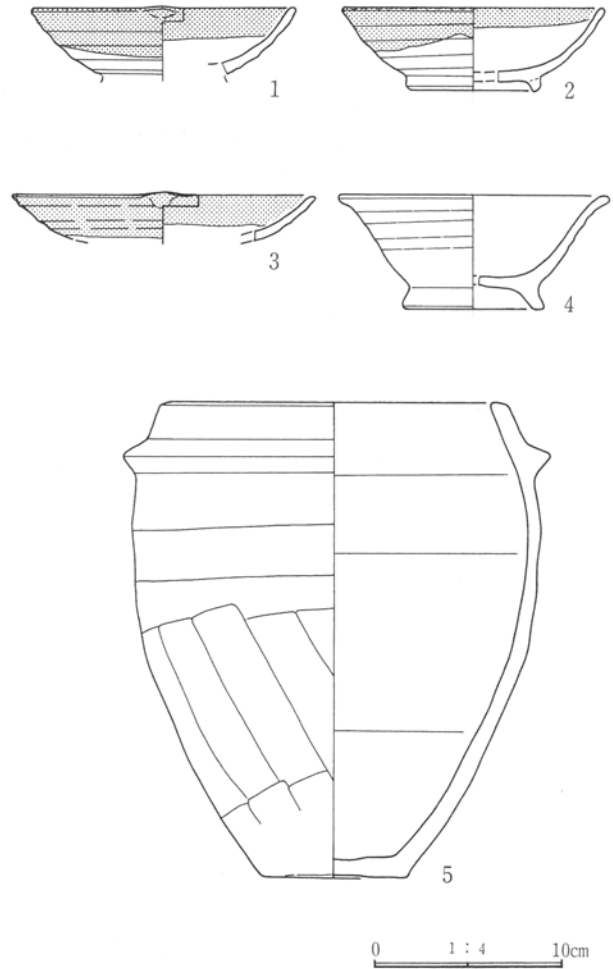
Ⅱ区21号住居跡 (第159・160図 PL.66)

位置 195・200-015・020グリッド

平面形 方形 主軸方位 N-76°-W

規模 3.54×3.26m 壁高 25cm

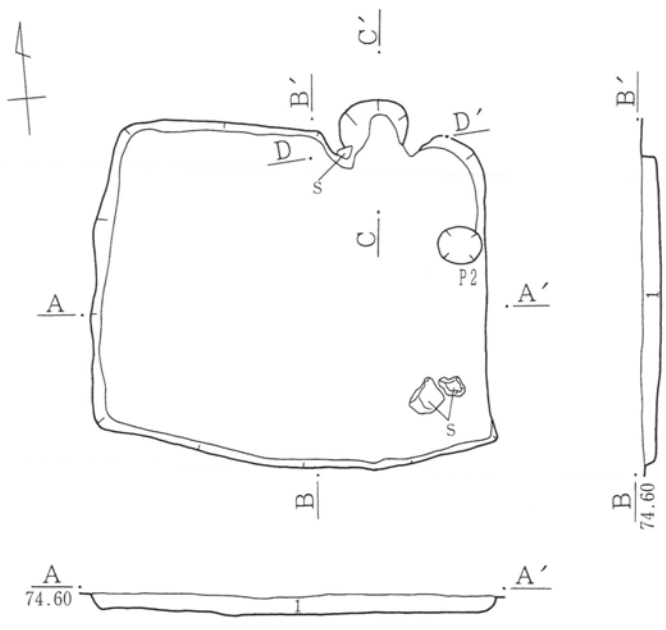
竈 東辺南寄りに位置し、天井部を除くほぼ全体が検出された。袖部は地山掘り残しの部分を芯に粘土主体の土で盛り上げて構築する。焚き口部の開口幅は35cm。燃焼部は平面方形で、幅63cm、奥行き75cmを測る。燃焼部奥壁から10cm立ち上がって、緩い傾



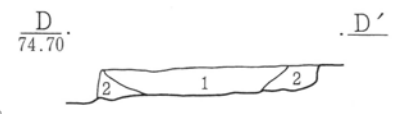
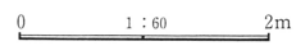
第157図 Ⅱ区20号住居跡出土遺物

斜角で煙道が続く。煙道は長さ80cm、内径20cmで、先端部で次第に立ち上がる。煙道底面は掘方に粘土を多く混入した土を埋めて整えている。焚き口~燃焼部の掘方は比較的浅く、灰や炭化物等の堆積は顕著ではない。床面 南半を主として10cm前後の埋土によって床面を整える。北半は地山に近い状態の床面である。著しい硬化面は認められない。

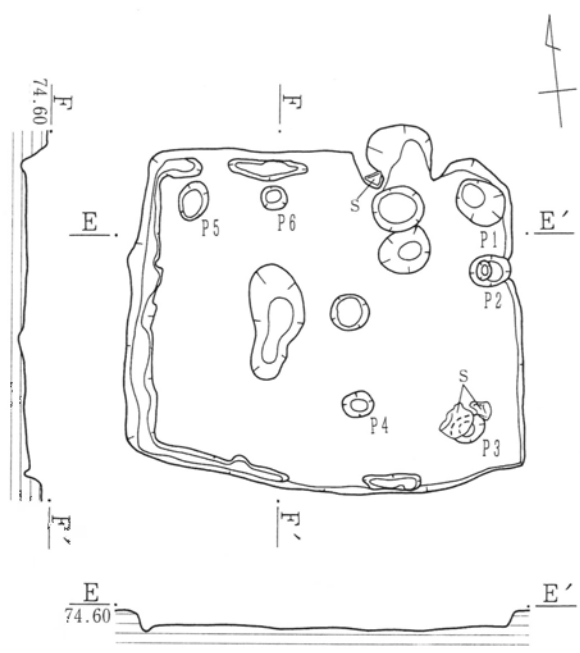
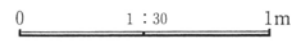
ピット等 床下から円形のくぼみが集合して検出されたが、人為的な埋土と不定形から掘方のくぼみと判断した。これらの掘方埋土には焼土や粘土塊、炭化物が多く含まれることから、最初の住居構築時ではなく、竈改築時に廃材廃棄のために埋められた可能性が高い。壁溝は竈左脇、南壁の一部と南西隅および西壁に沿って検出された。幅は10cm前後、深さ5cm前後を測る。



1 黒褐色土 シルト質でブロック状。

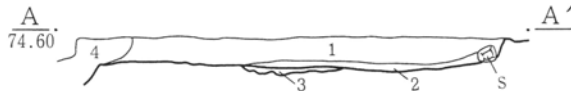
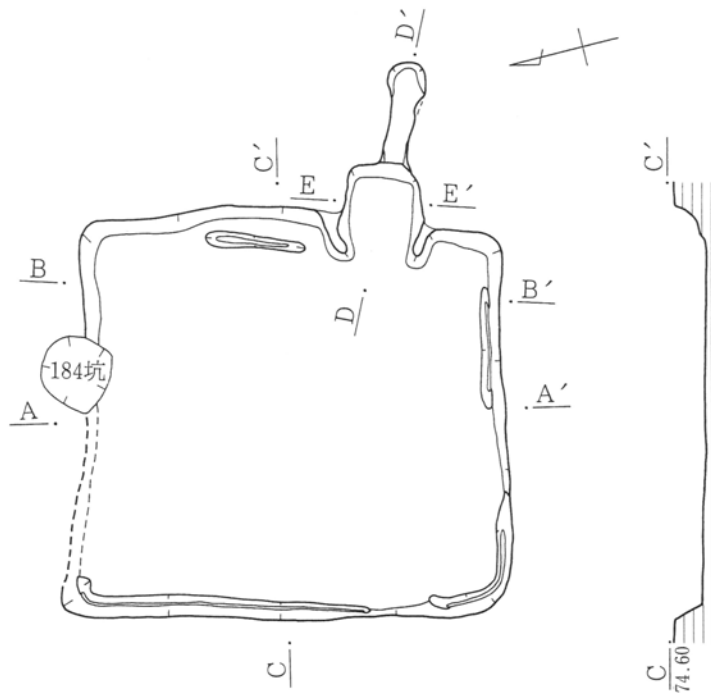


1 暗灰黒色土 焼土と炭化物を含む。
2 赤褐色土 焼土主体で炭化物が多い。

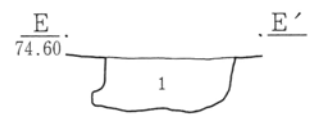
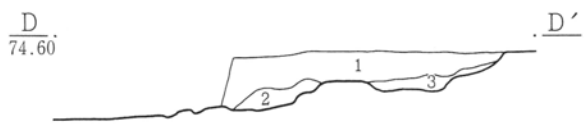
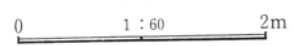


	径 (cm)	深 (cm)		径 (cm)	深 (cm)
P 1	40×35	12	P 4	23×21	4
P 2	31×29	33	P 5	31×24	3
P 3	28×20	6	P 6	21×20	39

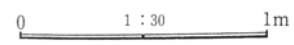
第158図 J区20号住居跡・掘方



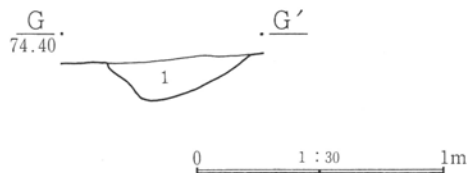
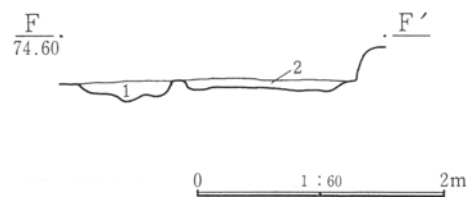
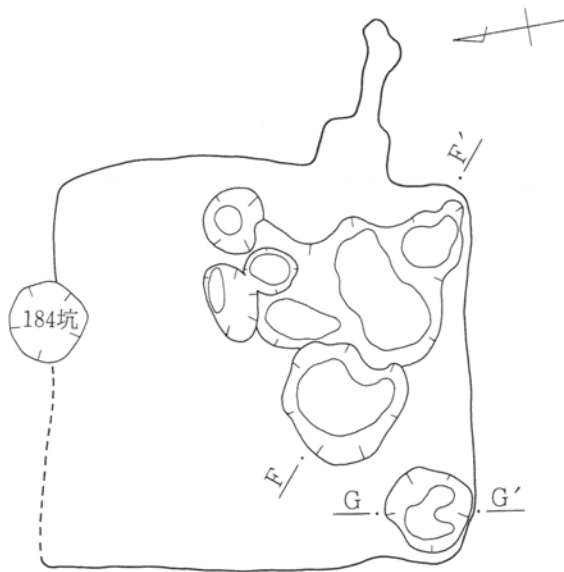
- 1 暗灰褐色土 地山土塊、炭化物、焼土を含む、人為的埋土。
- 2 灰黒色土 均質、自然流入土。
- 3 黒褐色土 ブロック状、人為的埋土。
- 4 11号溝 埋土。



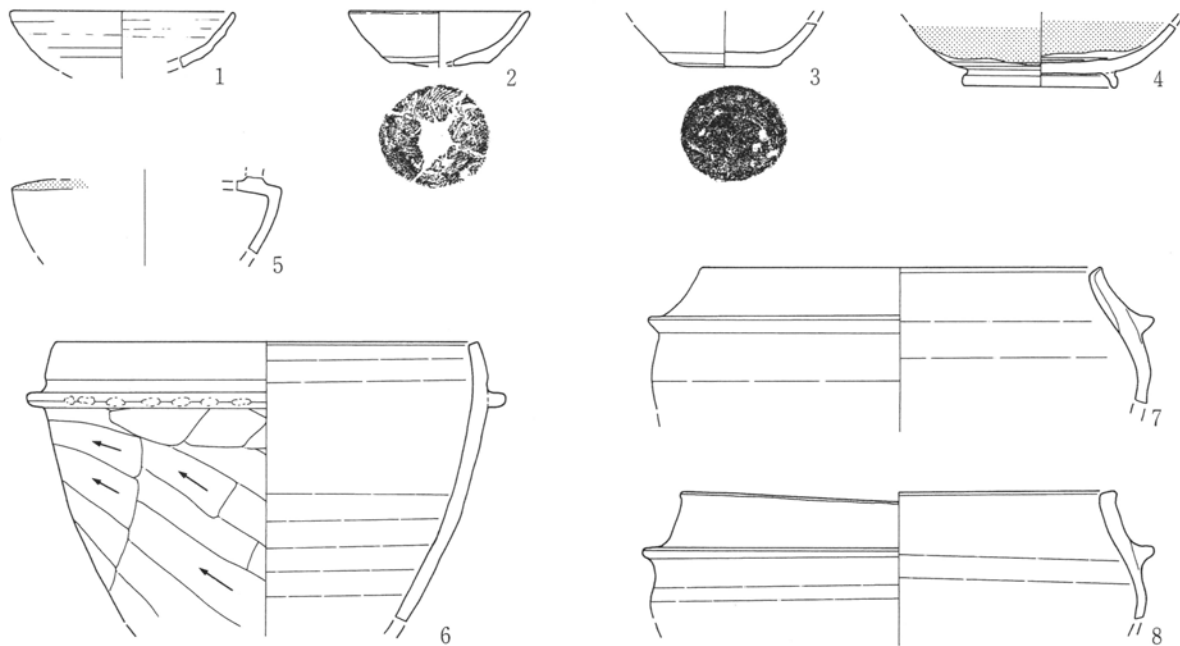
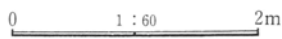
- 1 暗褐色土 炭化物粒、焼土、粘土粒を含む。
- 2 暗褐色土 1層に粘土粒を多く含む。
- 3 暗灰褐色土 粘土粒を主とする、煙道掘方埋土。



第159図 J区21号住居跡



- 1 暗褐色土 粘土塊、焼土、炭化物を多く含む。
- 2 灰褐色土 1層よりも粘土多い。



第160図 J区21号住居跡掘方及び出土遺物

出土遺物 竈燃焼部内から羽釜、杯が出土する。他に床面や埋土から灰釉碗、平瓶、杯等が出土しており、いずれも10世紀前半代を主とする。

重複遺構 37号住居跡を切り、184号土坑に切られる。

Ｊ区22号住居跡（第161・162図 P L.67）

位置 200・205-020グリッド

平面形（方形） 主軸方位 N-90°-E

規模 -×2.66m 壁高 20cm

竈 東辺の南寄りに位置し、燃烧部と煙道一部が検出された。内法の全長は63cm、幅63cmを測る。袖部は地山を掘り残して40cmほど竪穴内に張りだし、平面楕円形の燃烧部を造り出す。煙道部は燃烧部火床面からそのまま続き、外傾して延びる。火床面と焚き口の下面には炭化物層を敷いている。竈埋土の状

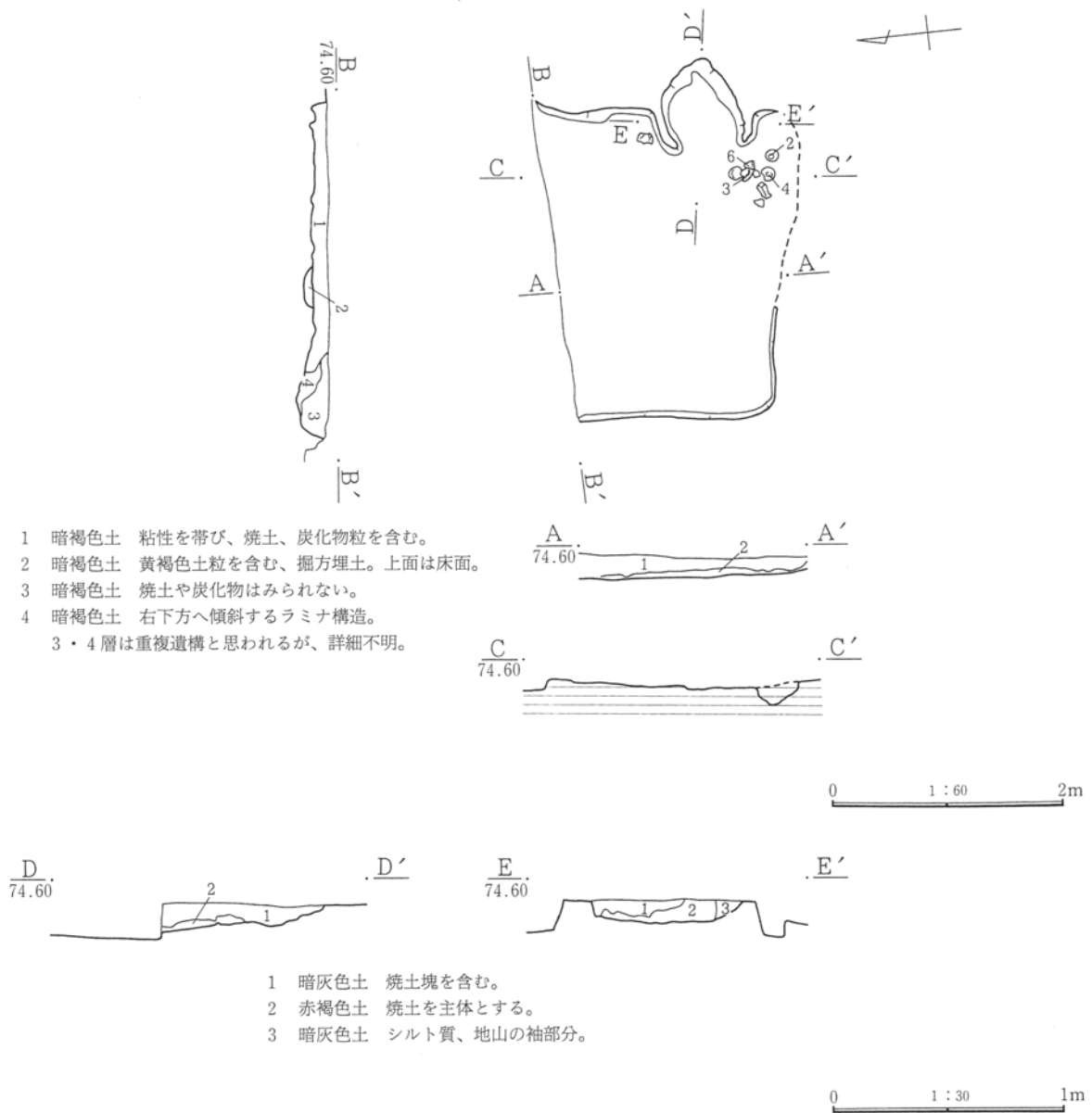
況や遺存部分から粘土は構築材としてほとんど使用されていない。

床面 ほぼ平坦な掘方面に5cm弱の埋土によって整えるが、東半部分ではほぼ地山のままである。

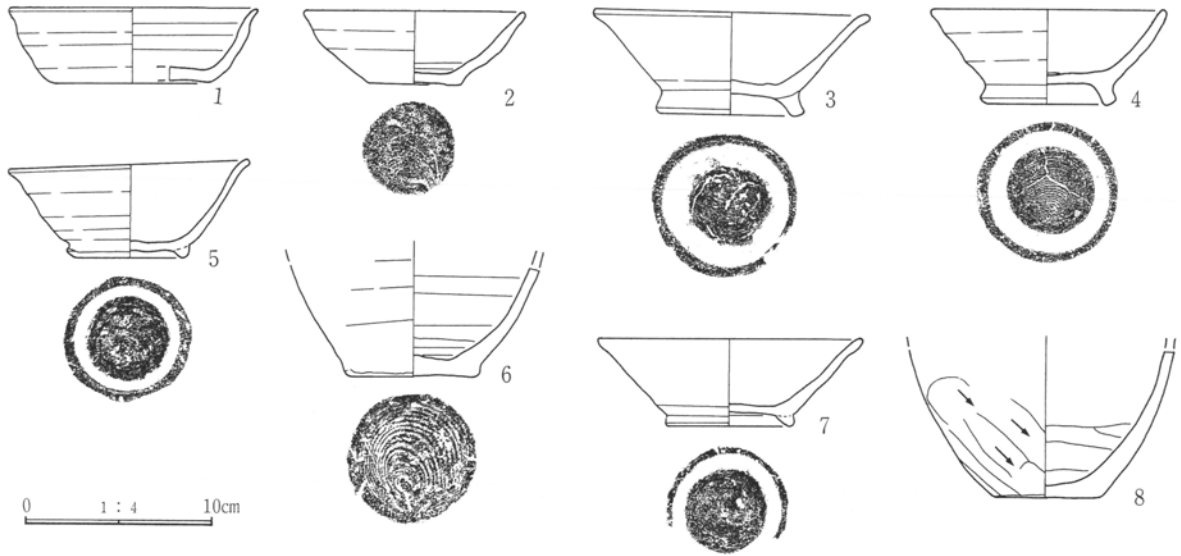
ピット等 掘方調査時に竈右脇手前に、径35cm、深さ15cmの不整形な落ち込みがみられた（セクションC-C'）。人為的埋土で床下土坑の可能性はある。

出土遺物 竈右脇の落ち込み上附近に集中して杯、椀、甕が出土した。一括廃棄と考えられる。

重複遺構 11号溝との新旧関係は不明。



第161図 J区22号住居跡



第162図 J区22号住居跡出土遺物

J区23号住居跡 (第163図 P L.67)

位置 190-025グリッド

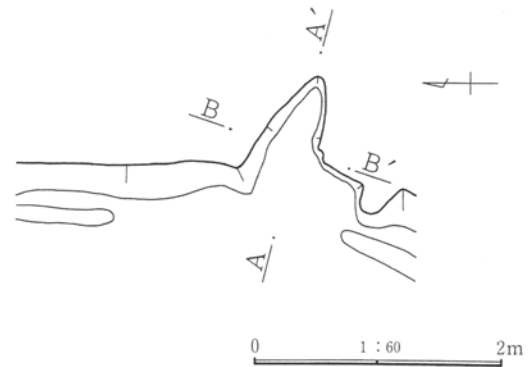
平面形・主軸方位・規模・壁高 検出されたのは竈のみで他はいっさい不明。

竈 東辺に位置し、燃焼部から煙道にかけての下底面が検出された。焚き口に相当すると思われる灰の分布位置から煙道部端までの現長110cm、燃焼部内面の推定幅40cmを測る。火床面はほぼ水平で平坦、煙道は火床面からそのまま続いて奥部で立ち上がる。燃焼部天井面が焼土として硬化した状態のまま堆積しており、この部分の土質によれば、粘土をあまり使わず地山の暗褐色土を主体として構築したようである。右袖部には地山を掘り残して竪穴内に張りだした痕跡が残っている。火床面と掘方面はほぼ一致しており、明瞭な埋め土は認められなかった。

床面 不明 ピット等 東壁際に沿って溝が検出された。深さは3cm前後で、幅は不明瞭。

出土遺物 竈右脇から土師器片が数点出土したが、器種や時期は限定できない。

重複遺構 40号住居跡と1号溝に切られる。



- 1 灰褐色土 As-B少量含む。
- 2 赤褐色土 焼土主体の天井崩落土。
- 3 暗褐色土 焼土と炭化物粒を多く含む。
- 4 灰褐色土 シルト質、左袖部の流入土。



第163図 J区23号住居跡

J区24号住居跡 (第164図 P L.67)

位置 205-015グリッド

平面形 長方形 主軸方位 N-76°-W

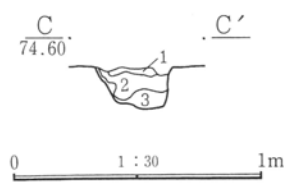
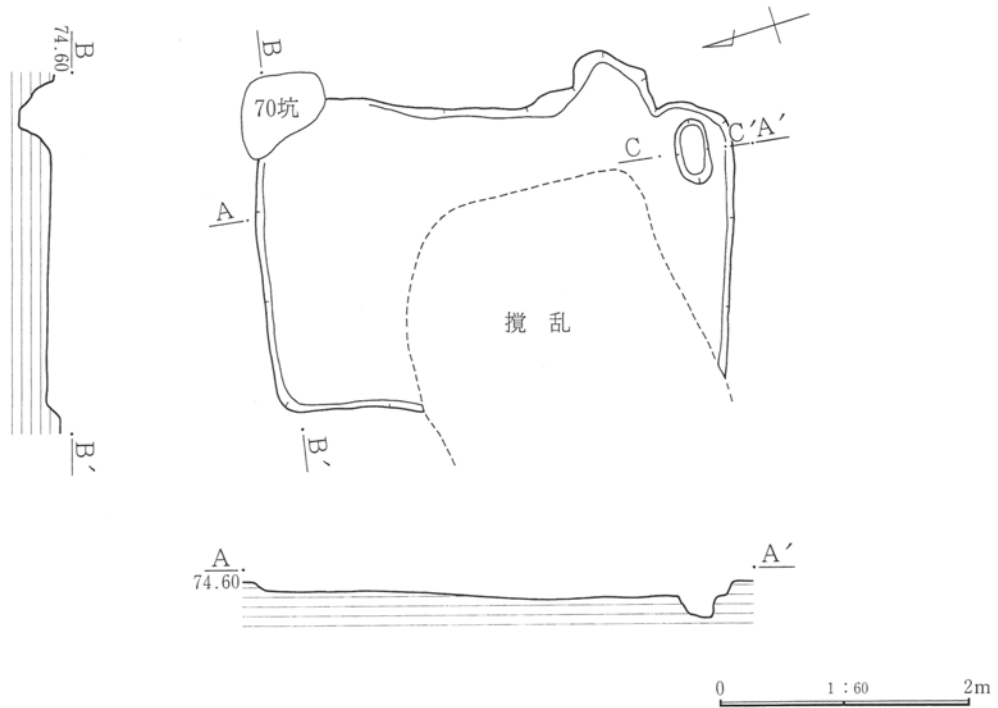
規模 3.80×2.45m 壁高 11cm

竈 東辺の南寄りに位置し、燃焼部のみ検出された。燃焼部掘方内面の幅65cm、奥行き50cmを測る。火床面はほぼ平坦で傾斜はみられない。袖の張り出しはほとんどみられない。床面 地山掘方面をそのまま使用しており、南半部のレベルがやや低い。

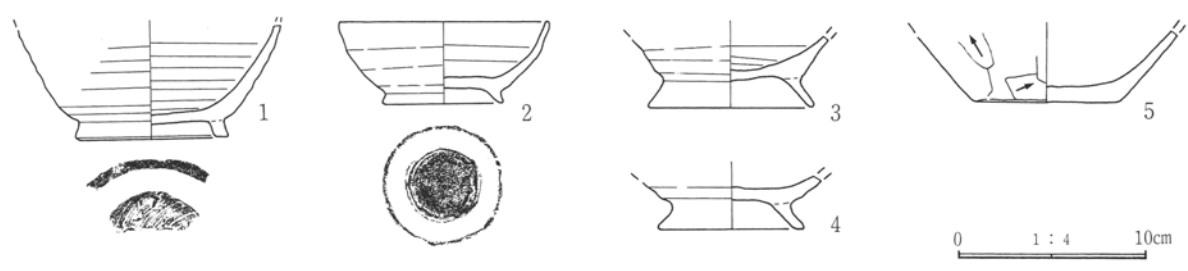
ピット等 竈右脇に貯蔵穴1基が検出された。平面は楕円形で、規模は径50×27cm、深さ17cmを測る。中に粘土塊を主体とする土が堆積しており、上を灰層が覆う状況から、竈廃材を人為的に埋めた床下土坑の可能性もある。

出土遺物 貯蔵穴内から甕底部片、他に床面や埋土から碗、杯などが散在して出土した。

重複遺構 中央部を攪乱により大きく切られており、北東隅で70号土坑と重複するが、新旧不明。



- 1 灰層 粘土粒や炭化物粒を含む。
- 2 灰褐色土 粘土塊を主とし、焼土粒を含む。
- 3 灰白色シルト 地山の崩落土。



第164図 J区24号住居跡及び出土遺物

Ⅱ区25号住居跡 (第165図 P.L.68)

位置 170-015・020グリッド

平面形 (方形) 主軸方位 N-90°-E

規模 3.20×-m 壁高 11cm

竈 東辺の南寄りに位置し、燃焼部下底面部分が検出された。平面は半円形状で、燃焼部中央付近の火床面はややくぼむ。焚き口と推定される位置から奥壁まで65cm、幅は60cmを測る。ただしこの幅は掘方規模であって、使用時における燃焼部内壁の幅は30cm前後ではなかったか。なお、火床面には最下層に

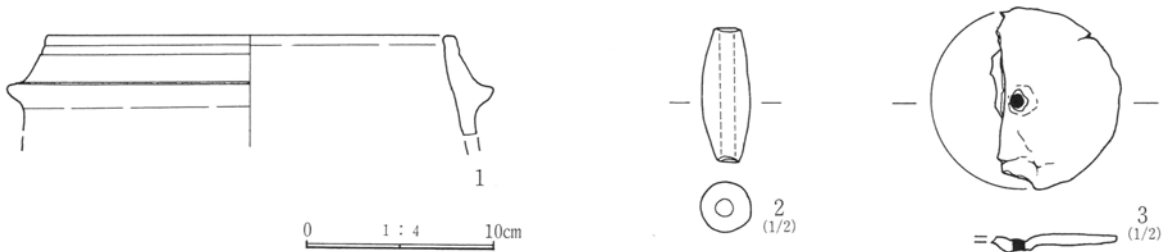
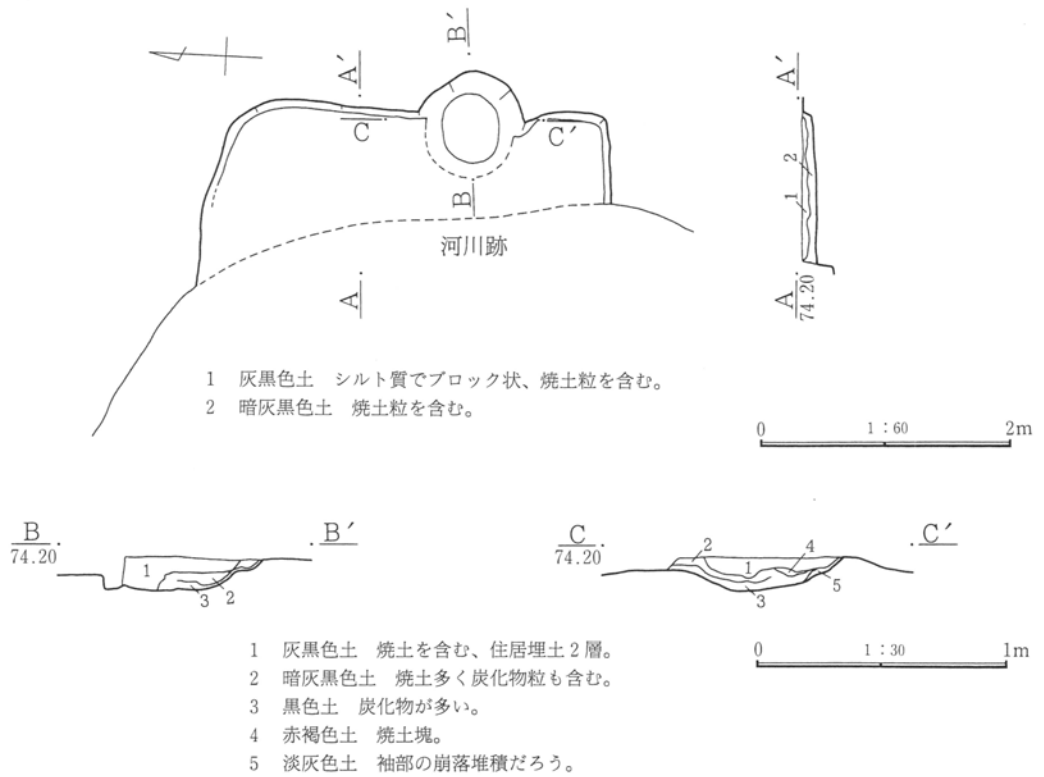
炭化物層が堆積しており、その上に焼土層がのる。

この焼土層の直下が本来の火床面であり、炭化物層はその下に敷かれた掘方充填物ではなかったか。

床面 検出された東半に関する限り、掘方地山面と大差ないことから、明瞭な埋土や貼り床によって床面を整えたのではないようである。特に目立つ硬化面はない。ピット等 なし。

出土遺物 竈から羽釜や甕、碗の破片、焚き口附近の床面から鉄製紡錘車が出土した。

重複遺構 西半を中世以降の河川跡に切られる。



第165図 Ⅱ区25号住居跡及び出土遺物

Ⅱ区26号住居跡 (第166・167図 PL.68)

位置 170・175-045グリッド、藤川旧河道(1号河道)が埋没した後、その埋没層の上に構築される。

平面形 不整形 主軸方位 N-85°-E

規模 4.55×4.04m 壁高 15cm

竈 東辺南端に位置し、燃烧部のみ検出された。内法の長さ82cm、幅60cmを測り、火床面は床面レベルよりやくぼむ。袖部は地山を残してこれに盛り土

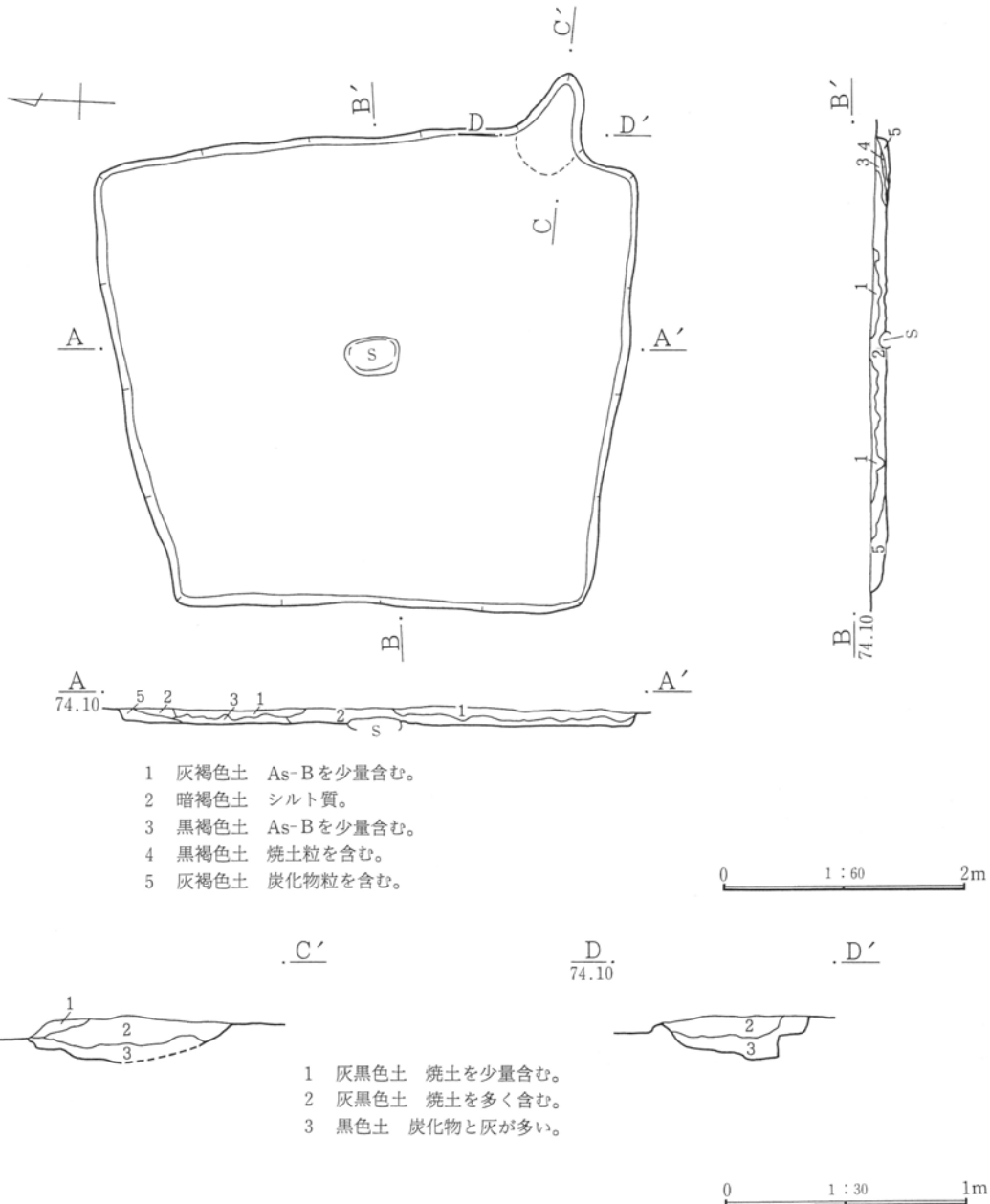
で本体を構築したと思われる。

床面 地山床と思われ、軟質でほぼ平坦。

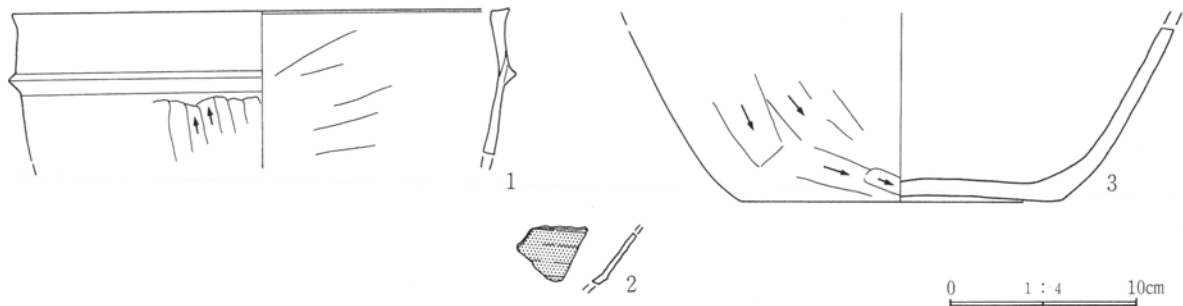
ピット等 なし。

出土遺物 竈の埋土から羽釜片(1・3)が出土している。また、床面中央に据え置かれた状態で、50cm大の扁平礫が検出された。その位置から柱の礎石の可能性もある。

重複遺構 なし。



第166図 Ⅱ区26号住居跡



第167図 J区26号住居跡出土遺物

J区27号住居跡 (第168図)

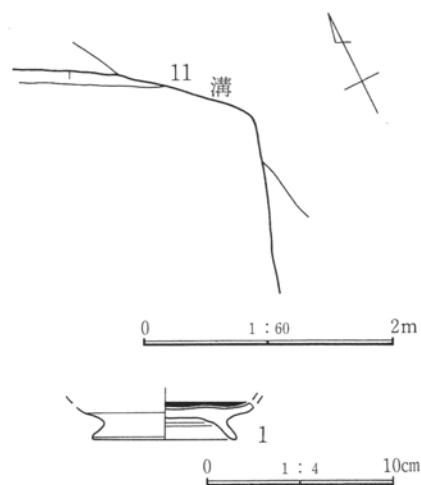
位置 210-025・030グリッド

平面形・主軸方位・規模 不明 壁高 13cm

竈 検出されなかった。床面 地山床と思われる平坦面が検出された。硬化面は明瞭でない。

ピット等 なし。出土遺物 埋土から内面黒色処理を施した碗の底部破片が出土した。

重複遺構 11号溝と重複するが新旧関係は不明。なお、西半を昭和40年代に改修された藤川によって侵食されている。



第168図 J区27号住居跡及び出土遺物

J区28号住居跡 (第169図)

位置 186・190-020グリッド

平面形 (長方形) 主軸方位 N-2°-E

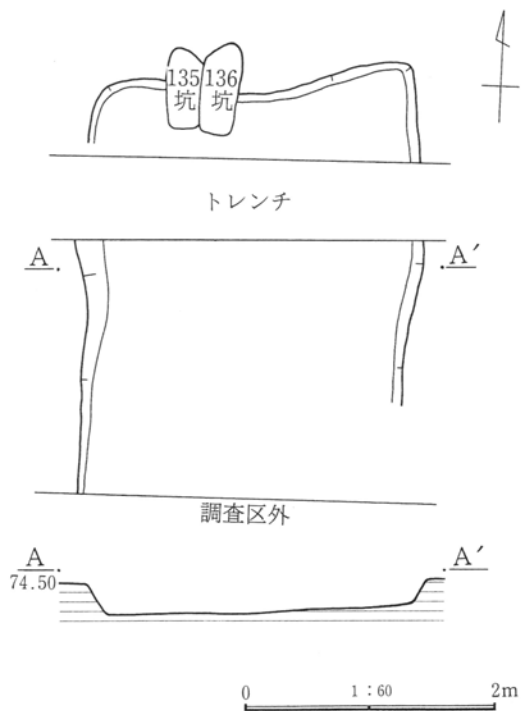
規模 2.78×3.3以上m 壁高 24cm

竈 検出されなかった。

床面 地山床と思われる平坦面を検出した。全体に軟質。ピット等 なし。

出土遺物 なし。

重複遺構 北辺で135・136号土坑に切られる。



第169図 J区28号住居跡

J区29号住居跡 (第170図)

位置 195-995・000グリッド

平面形 (不整形) 主軸方位・規模 不明。

壁高 16cm 竈 検出されなかった。

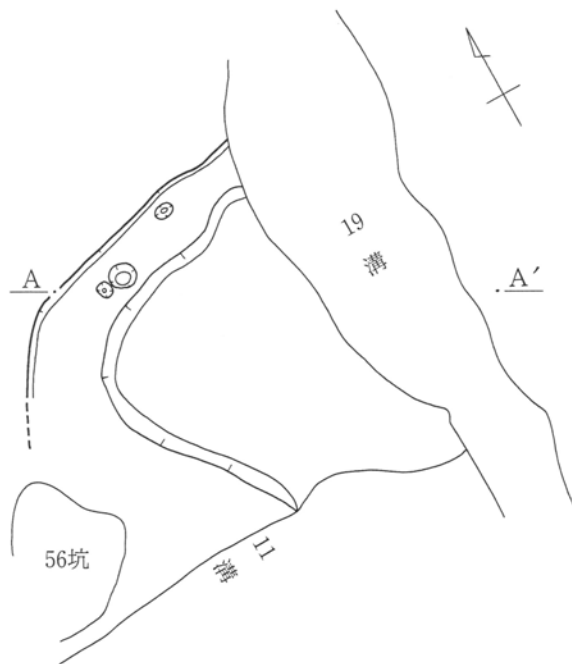
床面 平面プランに沿って内側に隅丸方形のくぼみが検出された。これは掘方と思われ、内部には焼土、炭化物を含む土が堆積し、上面に灰層が見られ

た。当初、これを住居プランと想定して調査を進めたが、周囲に壁と考えられる段差が確認されたこと、くぼみ内埋土が人為的と考えられることから、掘方と考えたい。

ピット等 北辺に沿って、掘方のくぼみとの間に小ピット3基が検出されたが、上位からの攪乱か本住居跡に伴うものかは確認できなかった。規模と配置から、少なくとも柱穴とは考えがたい。

出土遺物 埋土から9世紀中頃の甕・杯・蓋等が出土したが、同時期あるいは前後する時期の遺構が複雑に重複しあっており、本住居跡に帰属するとの確定はできない。

重複遺構 東半は19号溝と重複し、これを切っている。南西半を8号住居跡、11号溝、56号土坑と重複するが、明確な新旧関係は確認できなかった。



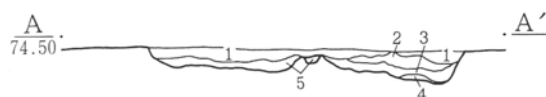
J区30号住居跡 (第171~173図 P L.68)

位置 200・205-000グリッド

平面形 横長長方形 **主軸方位** N-90°-E

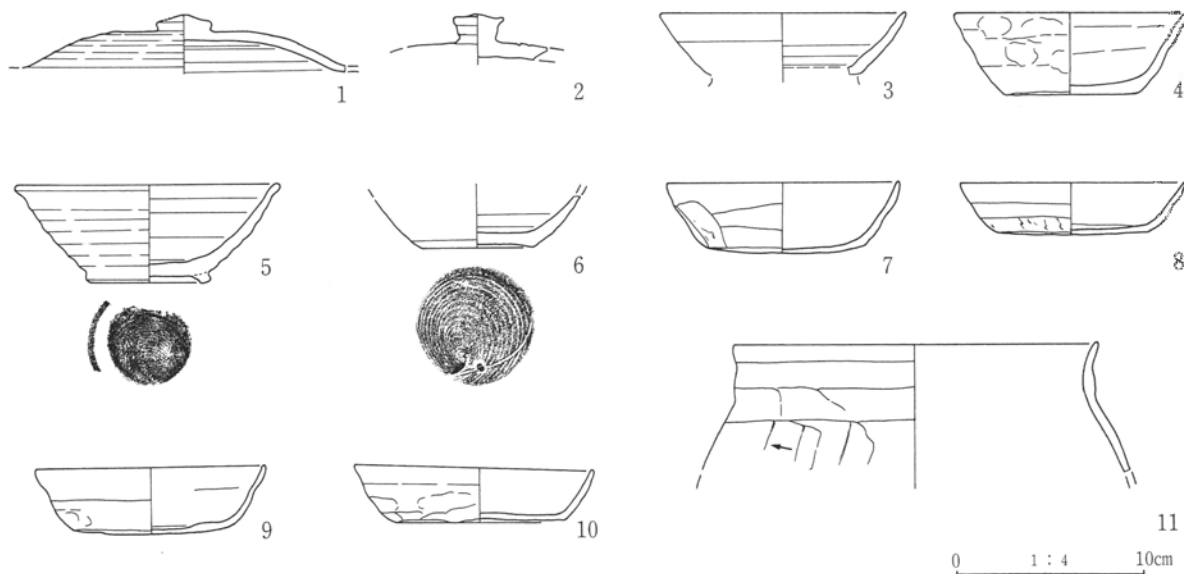
規模 3.48×2.38m **壁高** 26cm

竈 東辺南寄りに位置し、燃焼部と袖基部が検出された。燃焼部は平面楕円形で、奥壁から焚き口まで120cm、燃焼部内面幅60cmを測る。奥壁の掘方は30°



- 1 暗褐色土 焼土、炭化物、灰を含む。
- 2 暗褐色土 1層に黄褐色粘土塊が加わる。
- 3 暗褐色土 粘土、炭化物、焼土の混土。
- 4 灰白色粘土塊
- 5 黒褐色土 粘土粒を含む床下埋土。

0 1 : 60 2m



第170図 J区29号住居跡及び出土遺物

ほどの傾斜で立ち上がり、そこに埋土を行って煙道に続く40°前後の傾斜面を造り出している。火床面は、焼き口部から大きく掘り鉢状に掘りこんだ掘方(第173図参照)に埋土を行って平坦に整えている。火床面上には灰層が薄く残っている。袖部は左袖が地山のロームを掘り残しており、右袖には直径24cm、深さ24cmの小ピットが検出されたことから、ここに袖石等の芯材を埋置したものと推測される。

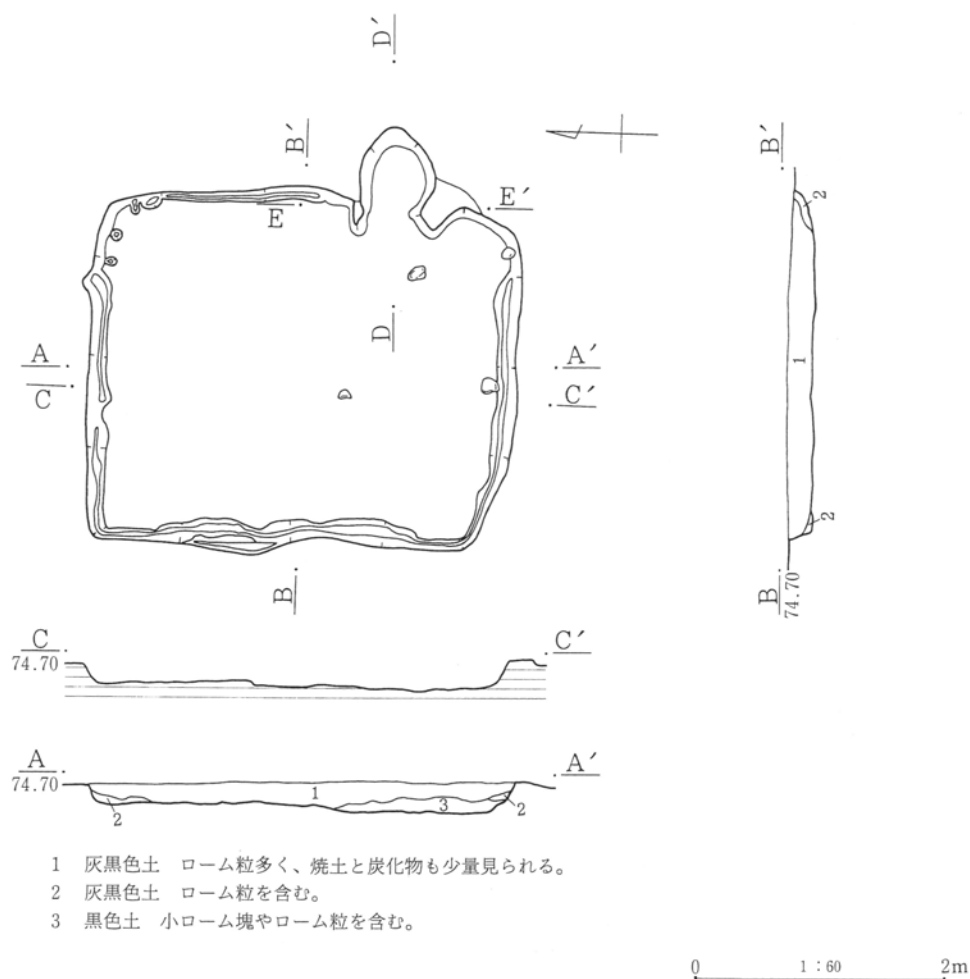
床面 北半部は地山床としているが、南半部から西辺に沿った部分には、浅く凹凸の多い掘方面に埋土を行って床面を整えている。

ピット等 床面精査の段階で、壁に沿って全周する壁溝を確認した。幅15~10cmで、深さは5cm前後である。北東隅には壁溝に連続して小ピット4基ほどが並ぶ。掘方調査時に、北半で3基のピットを検出

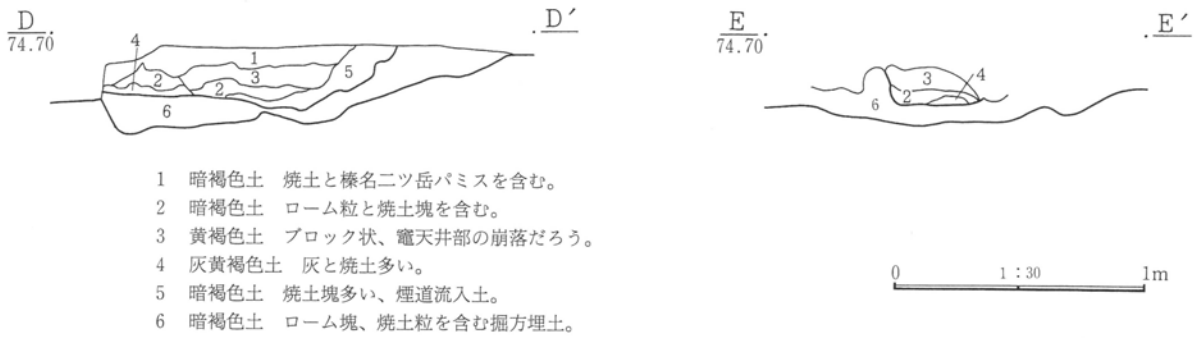
した。P1は東西辺のほぼ中央で、北辺から約70cm離れる。P2は北壁、P3は北西隅に位置する。P1は配置から、南半部に対応する柱があれば、主軸上を通る棟持ち柱の柱穴となり得よう。P2とP3については、上屋の支柱穴とも考えられるが、壁溝内に位置することから、壁補強のための杭穴の可能性もあろう。

出土遺物 竈焼き口右脇から南壁際にかけて楕円礫3点が出土した。加工痕、使用痕、被熱痕等は見うけられない。竈内及び埋土下層から9世紀代の杯・蓋・壺等の破片が出土している。同時あるいは前後する時期の遺構が隣接しないため、これらの遺物は本住居跡に伴うと考えていだろう。

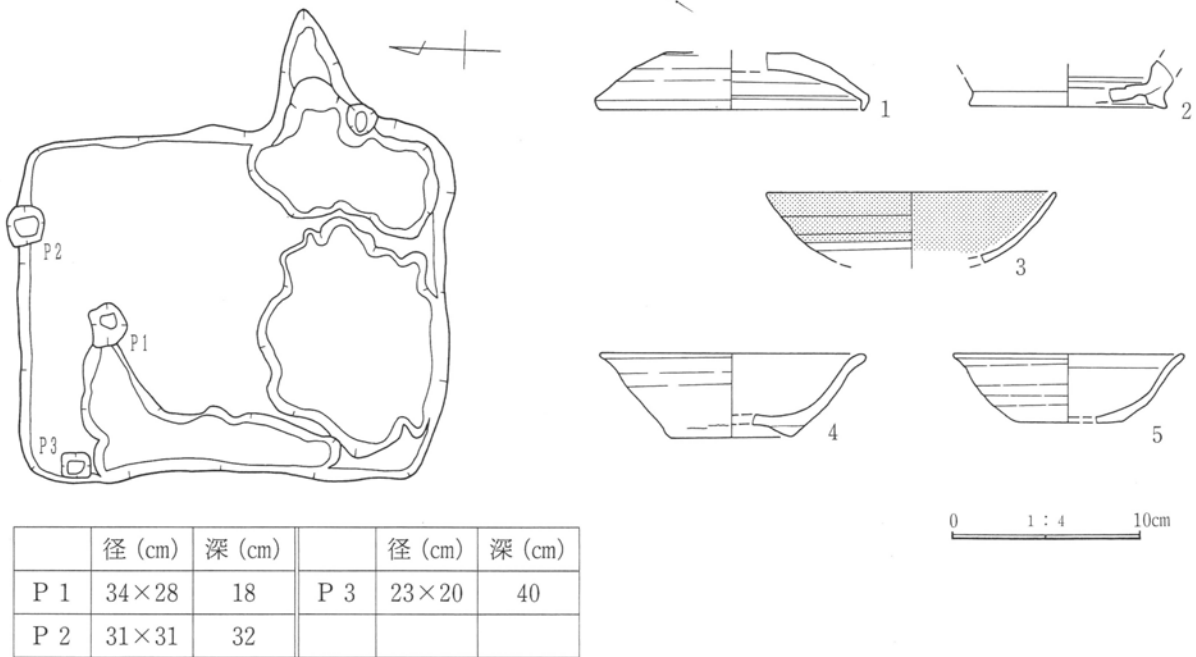
重複遺構 北辺を時期不明の土坑と重複するのみである。



第171図 J区30号住居跡



第172図 J区30号住居跡竈土層断面



第173図 J区30号住居跡掘方及び出土遺物

J区31号住居跡 (第174図)

位置 210-000・005グリッド

平面形 (方形) 主軸方位・規模 不明

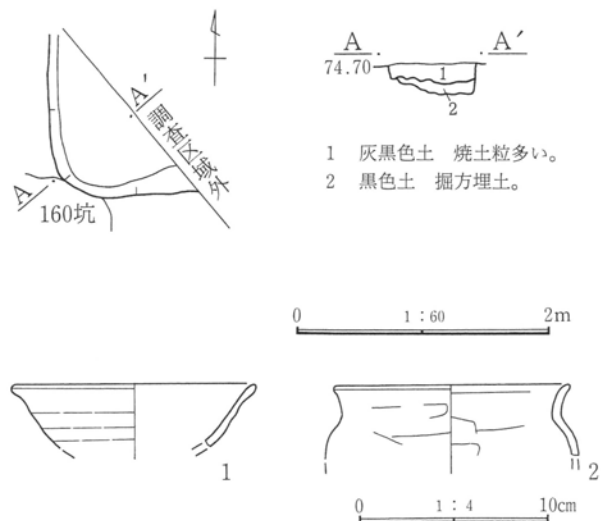
壁高 20cm 竈 検出できなかった。

床面 掘り鉢状にくぼむ掘方に、焼土を含む埋土で床面を平坦に整える。硬化面は明瞭でない。

ピット等 なし。

出土遺物 埋土から9世紀代の杯、甕片が出土する。

重複遺構 160号土坑と重複するが、新旧関係は確認できなかった。なお、住居の大部分を占める北東側は昭和40年代における現藤川の河川改修工事によって掘削されている。



第174図 J区31号住居跡及び出土遺物

Ⅱ区32号住居跡 (第175・176図 P.L.69)

位置 215-005・010グリッド

平面形 (方形) 主軸方位 N-72°-E

規模 (2.70) × -m 壁高 8cm

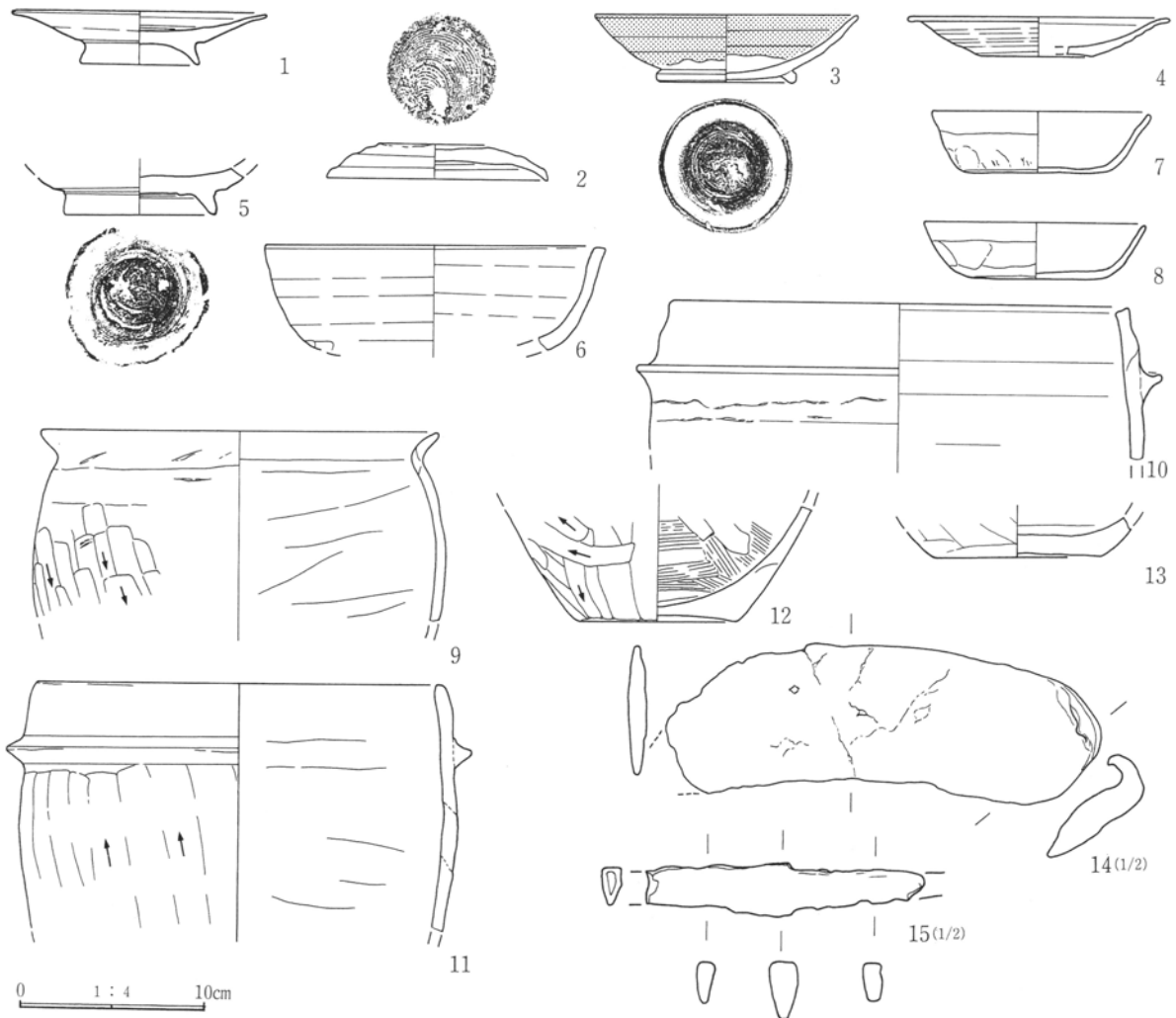
竈 東辺の中央付近に位置し、燃焼部から煙道部にかけての下底面が検出された。掘方の内法は、長さが100cm、幅62cmを測る。さらに南隣に竈が検出された。これは、長さ140cmで、平坦な火床面から弱い段で立ち上がって再び平坦な煙道底面に続く。煙道端は40°前後の傾斜で立ち上がる。右袖部付近には被熱を受けた礫が検出されており、袖芯材に用いられた可能性が高い。これら2基の竈が重複住居のものか、本住居新旧竈か確認できなかった。

床面 平面プラン全体に掘方が広がり、ローム粒の多い埋土で床面を平坦に整えている。全体に軟調で硬化面は確認できなかった。

ピット等 南東隅に貯蔵穴と思われる隅丸長方形のピットが検出された。規模は、53×40cmで深さは21cmを測る。内部には焼土、灰、炭化物が堆積しており、竈からの流れ込みと考えられる。

出土遺物 竈内から羽釜(11)や皿(4)、ほかに住居埋土から灰釉碗、杯、羽釜、土釜、蓋等が出土する。北半の床面上からは鉄鎌(14)も出土。11世紀代まで下る土器類が主体となる。

重複遺構 33・34号住居跡を切っており、さらに中央は近世の173・174号土坑によって切られている。



第175図 Ⅱ区32号住居跡出土遺物

J区33号住居跡 (第176図 PL.69)

位置 210-005・010グリッド

平面形 (長方形) 主軸方位 N-20°-W

規模 2.30×-m 壁高 17cm

竈 32号住居跡竈の南に隣接する竈が本住居跡に伴う可能性がある。その場合、東辺の北寄りに位置することになる。床面 地山床で、軟質。

ピット等 南半に円形の床下土坑1基が検出された。規模は、径139×136cm、床面からの深さ24cmを測る。

埋土には炭化物や焼土が見られることから、竈廃材を廃棄した可能性もあろう。

出土遺物 8世紀代の小土器片が出土。

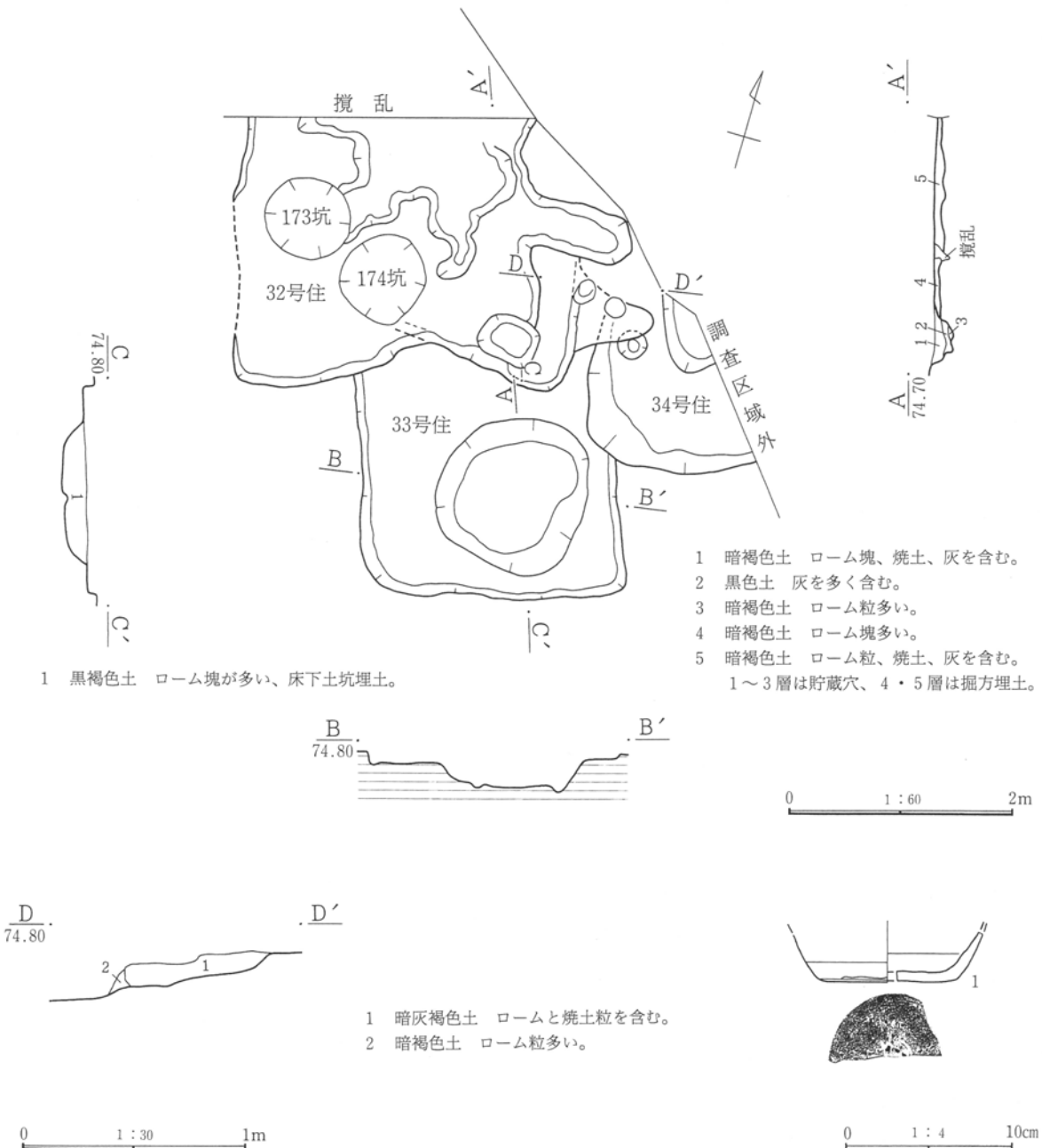
重複遺構 32号住居跡に切られる。

J区34号住居跡 (第176図 PL.69)

位置 210-005グリッド

平面形・主軸方位・規模 不明 壁高 15cm

竈 不明 床面 凹凸のある地山面、2段構造



第176図 J区32・33・34号住居跡及び34号住居跡出土遺物

になっているが、掘方だろう。 **ピット等** 西端に径26cm、深さ19cmの小ピット1基が検出された。

出土遺物 8世紀代の杯片が出土した。

重複遺構 32号住居跡に切られる。33号住居跡との関係は確認できなかった。

J区35号住居跡 (第177図 PL.69)

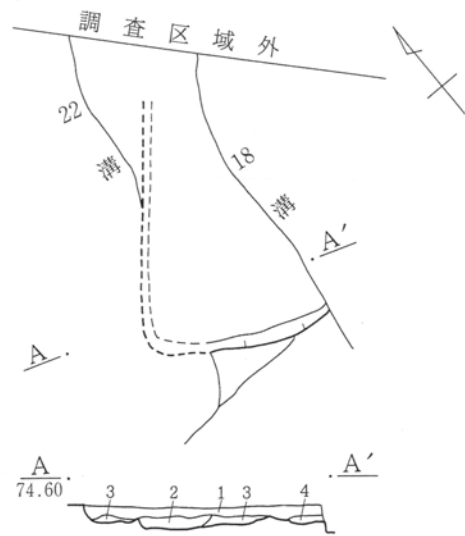
位置 195・200-995グリッド

平面形・主軸方位・規模 不明 **壁高** 15cm

竈 確認できなかった。 **床面** 比較的平坦な掘方に10cm前後の埋土で床面を平坦に整える。

ピット等 なし。 **出土遺物** 8世紀後半の杯が重なる状態で一括出土している (PL.69参照)。

重複遺構 18号溝に切られる。22号溝との関係は不明。



- 1 暗褐色土 榛名ニツ岳パミスを含む。
 - 2 暗褐色土 白色粘土粒を含む。
 - 3 灰褐色土 白色粘土粒多い。
 - 4 暗褐色土 焼土を含む。
- 2・3層は掘方埋土と思われる。

J区36号住居跡 (第178図 PL.69)

位置 165・170-085・090グリッド、旧藤川の右岸に立地する。

平面形 長方形 **主軸方位** N-73°-W

規模 4.16×3.65m **壁高** 27cm

竈 検出できなかったが、東側床面に焼土分布が見られたため、東辺に位置したと想定できる。ただし、17号溝に切られており、痕跡は認められない。

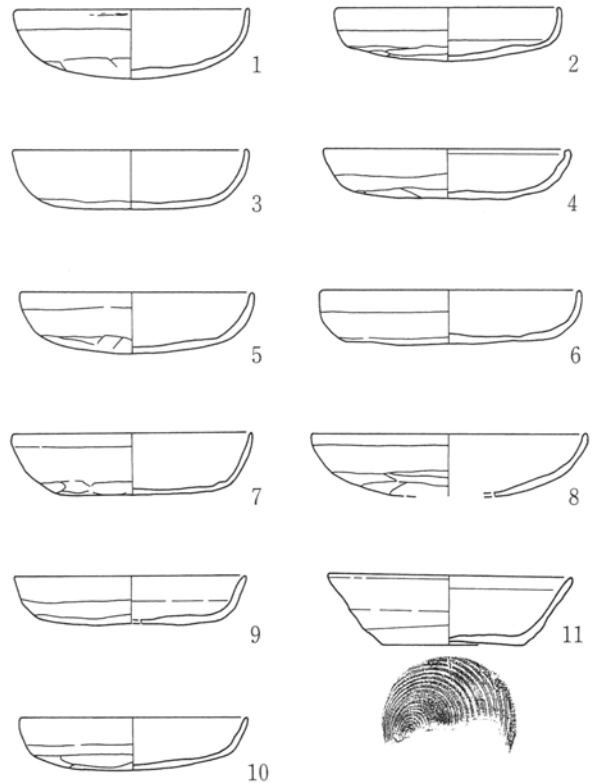
床面 西半に不整形の土坑状の掘方坑があり、これに15cmほどの埋土を行って平坦な床面を整えている。東半は地山のままになっている。

ピット等 南東隅に貯蔵穴が検出された。平面円形で、径64cm、深さ22cmを測る。壁溝は南北と西辺に沿って、断続的にめぐり、幅10cm前後、深さ3~7cmを測る。ピットは西半で3基が検出されたが、浅くまた配置から、柱穴とは考えにくい。中央には床下土坑1基が検出され、径93×83cm、深さ12cmを測る。

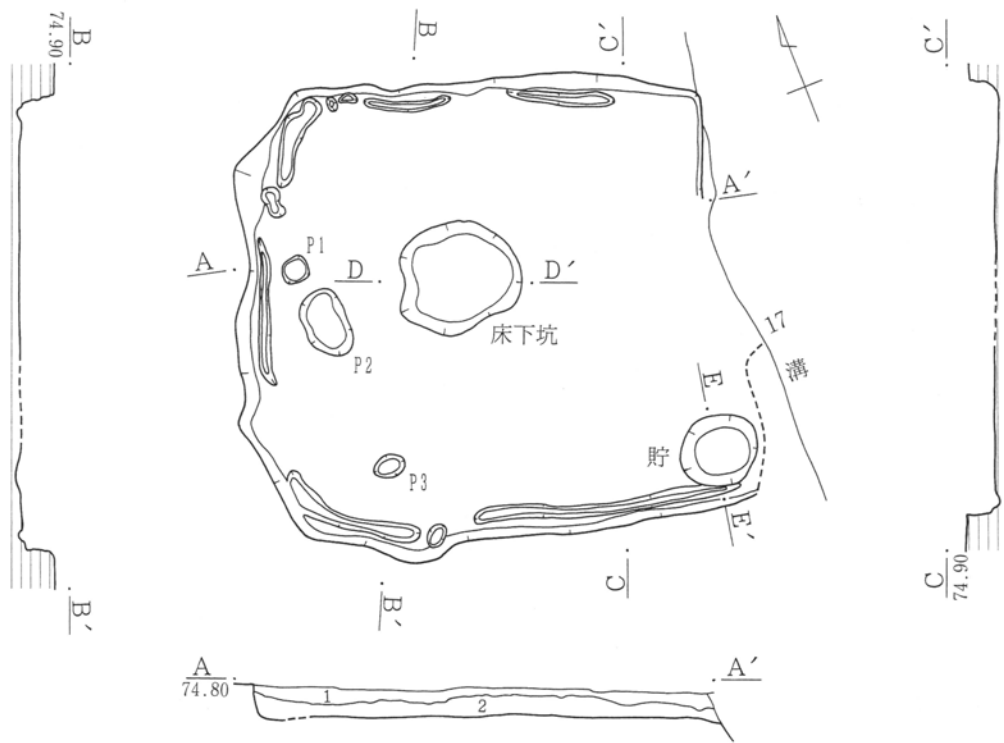
出土遺物 北壁際の床面からやや浮いた位置に、灰釉碗の大型破片が伏せた状態で出土した。

重複遺構 東側を中世以降の17号溝に切られる。西側には3号井戸が隣接する。

0 1:60 2m



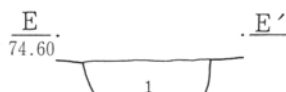
第177図 J区35号住居跡及び出土遺物



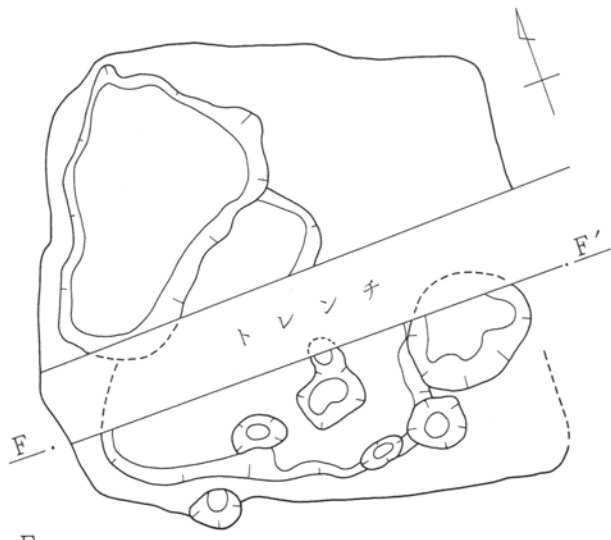
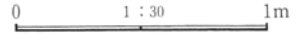
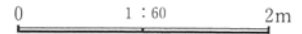
- 1 暗褐色土 ローム塊と榛名二ツ岳パミスを多く含む。
- 2 暗褐色土 ローム塊が非常に多い。



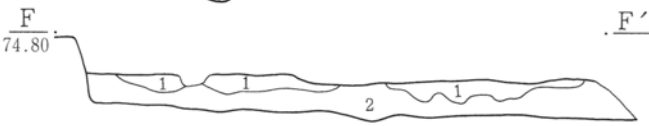
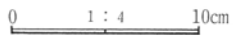
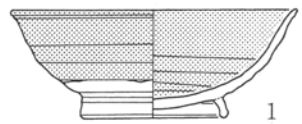
1 暗褐色土とローム塊の混土。



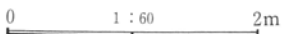
1 暗褐色土 ローム塊多く、軟質。



	径 (cm)	深 (cm)		径 (cm)	深 (cm)
P 1	23×22	6	P 3	25×18	2
P 2	54×35	19			



- 1 暗褐色土とローム塊の混土。
- 2 黄灰色シルト 地山。



第178図 J区36号住居跡・掘方及び出土遺物

Ｊ区37号住居跡（第179図 P L.70）

位置 195-015グリッド

平面形（方形） 主軸方位 N-92°-E

規模 2.70×-m 壁高 20cm

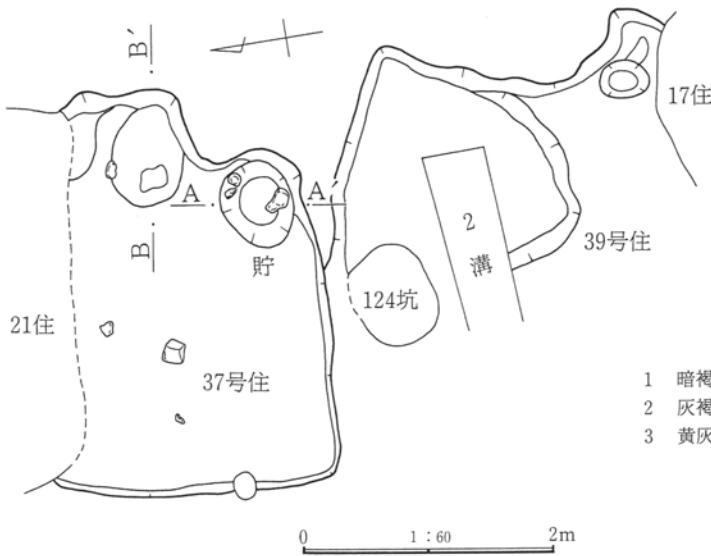
竈 東辺の中央に位置し、燃烧部底面が検出された。内法は、長さ90cm、幅85cmを測る。火床面は床面とほぼ同レベルで、ほぼ水平。奥壁は45°前後の傾斜で立ち上がる。火床面の掘方には灰、炭化物、焼土を埋めている。左袖端と思われる位置に楕円礫が出土しているが、袖芯材かどうか不明。

床面 ほぼ平坦に近い掘方面のくぼんだ部分にのみ若干の埋土を行って平坦な床面としている。

ピット等 南東隅に貯蔵穴検出。平面は楕円形で、径70×56cm、深さ18cmを測る。

出土遺物 貯蔵穴から杯（2）、碗（4）、20cm大の垂角礫が、その他に埋土下層から床面上に杯、碗、甕、鉢等の破片、及びガラス小玉1点が出土している。9世紀代が主体。

重複遺構 39号住居跡を切り、北半を21号住居跡に切られる。



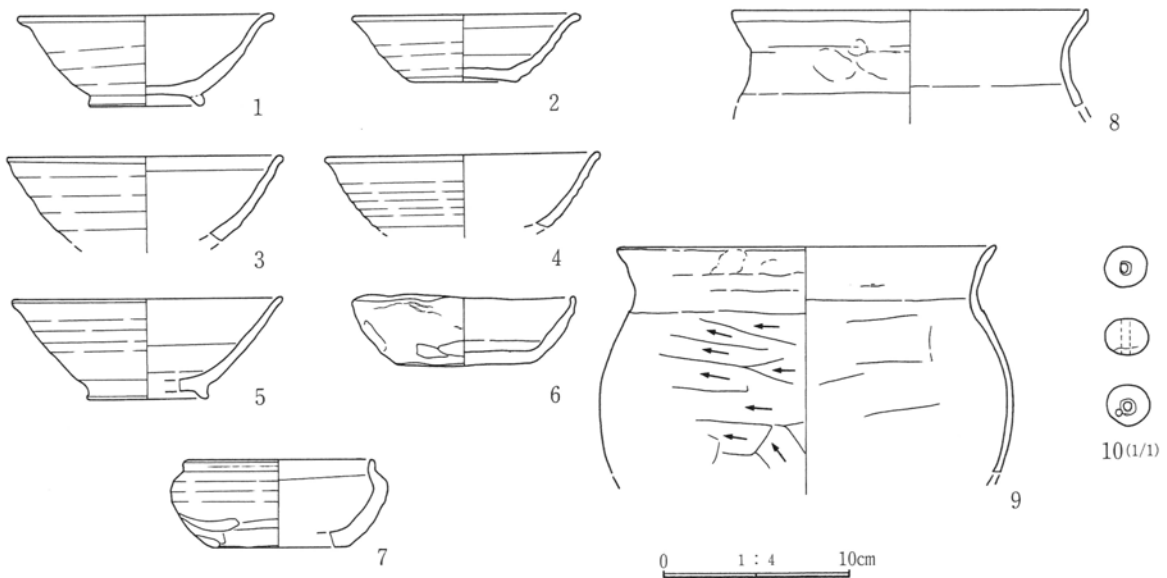
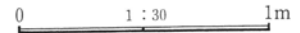
1 暗灰褐色土 シルト質で、焼土と炭化物を少量含む。



1 暗褐色土 ローム粒、焼土、炭化物含み、上は火床面。

2 灰褐色土 灰が主体で、炭化物含む。

3 黄灰色土 粒土多く、焼土と灰を少量含む。



第179図 J区37・39号住居跡及び37号住居跡出土遺物

Ｊ区38号住居跡（第180図）

位置 215-010・015グリッド

平面形・主軸方位・規模 不明 壁高 17cm

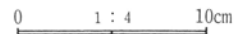
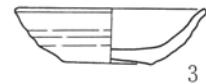
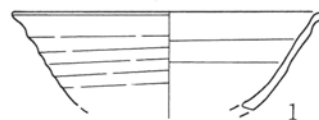
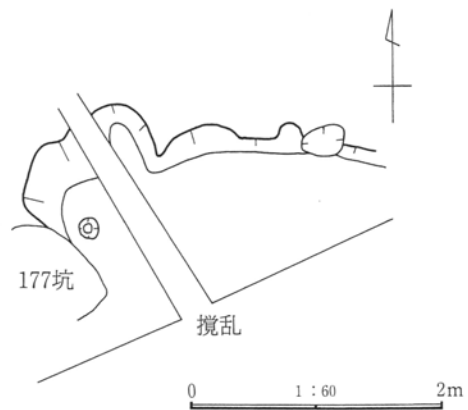
竈 検出されなかった。

床面 ほぼ平坦で、硬化面は明瞭でなかった。

ピット等 北西隅に1基のピットが検出され、径17cm、深さ11cmを測る。北辺のピットは重複する攪乱坑である。

出土遺物 壁際の埋土下層から椀、杯が出土。11世紀代と思われる。

重複遺構 177号土坑と重複し、新旧関係は不明。



第180図 J区38号住居跡及び出土遺物

Ｊ区39号住居跡（第179・181図）

位置 190・195-015グリッド

平面形（方形） 主軸方位・規模 計測不能

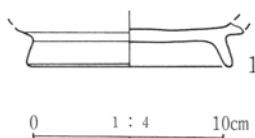
壁高 16cm 竈 検出されなかった。

ピット等 東辺に燃焼部～煙道部の下底面ないし掘方と思われる張り出し部分が検出された。ここにピット1基が位置し、径39×30cm、深さ15cmを測る。張り出し部分は竈の掘方とも見られるが、焼土や炭化物、灰などのそれを推定する痕跡は認められなかった。

床面 北東半をプランに沿った不整形の掘方があり、ここに埋土を行って床面を整えたと考えられる。全体に軟質で、地山のロームが明瞭でないことから、本来の床面は捉えられなかった。

出土遺物 北壁際の掘方埋土から、高台杯と思われる破片を出土した。

重複遺構 南半を17号住居跡、北端を37号住居跡、中央西寄り部分で124号土坑に切られる。また、中央は2号溝に切られる。



第181図 J区39号住居跡出土遺物

Ｊ区40号住居跡（第182図 P.L.71）

位置 190・195-025グリッド

平面形（方形） 主軸方位 N-85°-E

規模 3.40×-m 壁高 33cm

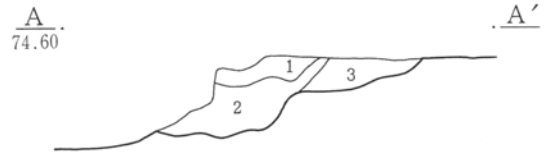
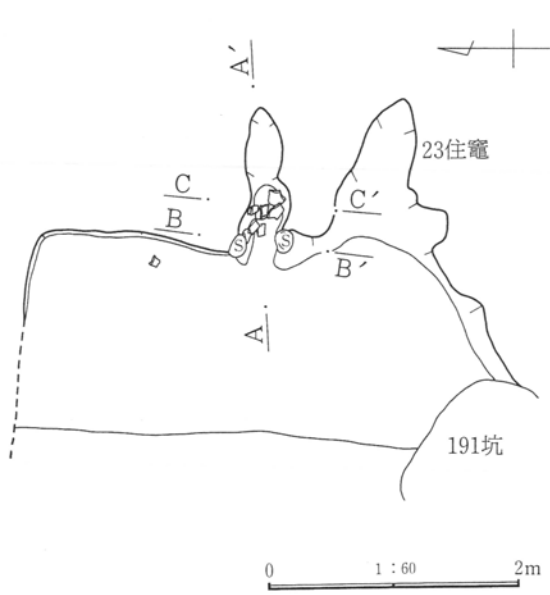
竈 東辺の中央に位置し、燃焼部～煙道部が検出された。焚き口は両袖に20cm大の礫を立てて芯とし粘土等で覆って構築している。焚き口幅は20cm前後と思われる。燃焼部は奥行き50cm、幅30cmで奥壁は50°ほどの傾斜をもつ。そこから煙道掘方が水平にのびるが、使用時の煙道は奥壁からそのまま傾斜したと推測される。なお、火床面中央には楕円礫を立てて10cmほどの高さの支脚としている。

床面 地山の黒色土のままと思われる。

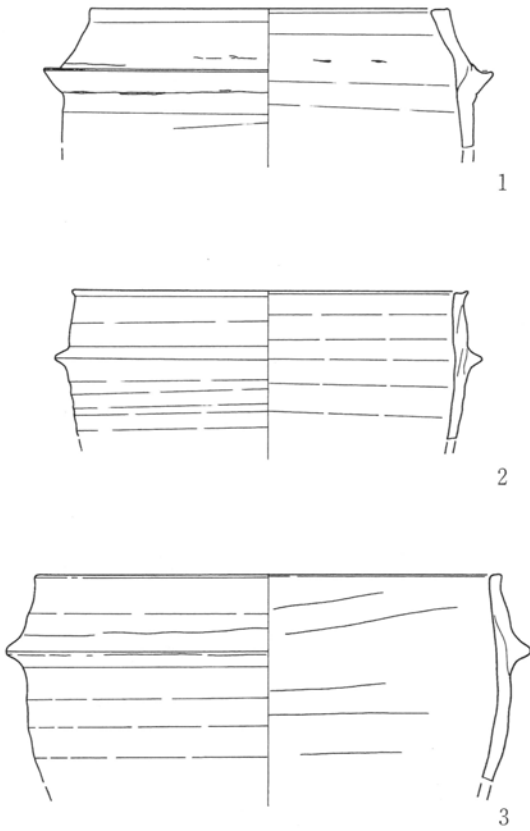
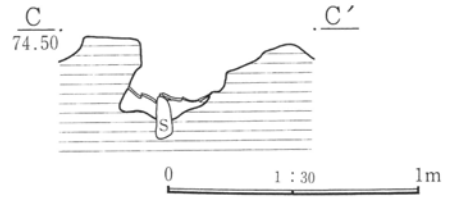
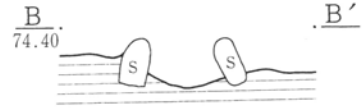
ピット等 なし。

出土遺物 竈内から羽釜、杯が出土。

重複遺構 23号住居跡を切る。



- 1 灰黄褐色土 榛名ニツ岳バミスと焼土を含む。
- 2 暗褐色土 焼土と炭化物を含む。
- 3 暗褐色土 焼土を少量含む、掘方埋土だろう。



0 1:4 10cm

第182図 J区40号住居跡及び出土遺物

(2) 掘立柱建物跡・柱列

H区1号掘立柱建物跡 (第183図 PL.72)

位置 185・190-285グリッド

主軸方位 N-42°-W

規模 2×2間 3.58×2.84m

柱間寸法

P1-P2 1.28m P2-P3 1.34m

P3-P4 3.58m P4-P5 1.64m

P5-P6 1.20m P6-P7 1.76m

P1-P7 1.44m

北東辺の中間柱穴の存否は不明瞭。

柱穴 柱穴は円形ないし隅丸方形の掘方で、柱痕跡は円形平面を呈する。底面規模と柱痕跡の規模から、本来の柱は直径10cm強の円形であったと想定される。東隅柱のP4は底面が双円形であり、柱を据え直した可能性が考えられる。

出土遺物 なし。 **重複遺構** 8号住居跡と重複するが新旧関係は不明。

	径 (cm)	深 (cm)		径 (cm)	深 (cm)
P1	44×41	44	P5	17×13	—
P2	38×32	34	P6	32×32	30
P3	58×40	32	P7	27×27	34
P4	40×33	32			

I区6号掘立柱建物跡 (第184図 PL.72)

位置 195・200-185・190グリッド

主軸方位 N-22°-E

規模 2×3間 6.32×4.84m

柱間寸法

P1-P2 1.94m P2-P3 2.58m

P3-P4 2.10m P4-P5 2.02m

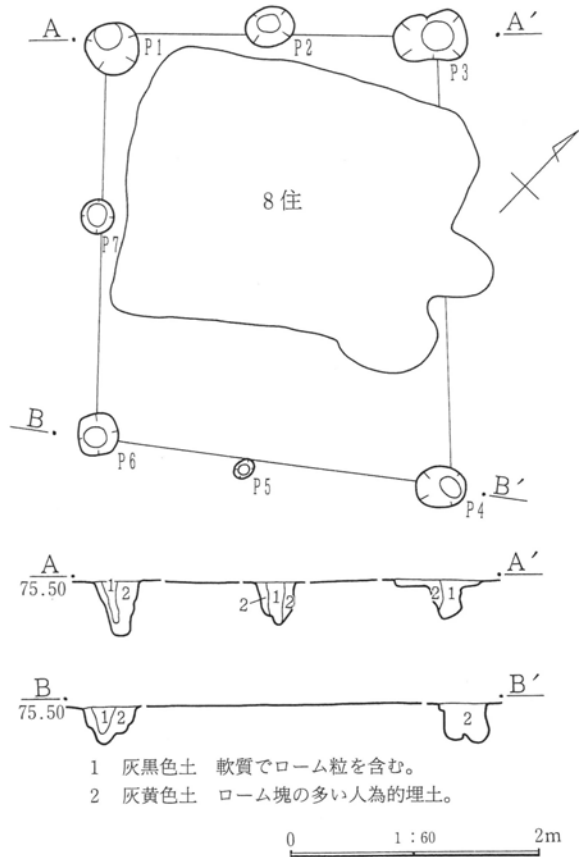
P5-P6 2.20m P6-P7 2.46m

P7-P8 2.38m P8-P9 2.74m

P9-P10 1.88m P1-P10 1.44m

P8-P9が9尺と長く、他は6~8尺でややばらつきがある。南東の桁行はほぼ等間。

柱穴 隅柱の掘方はL字形ないし斜めの楕円形



第183図 H区1号掘立柱建物跡

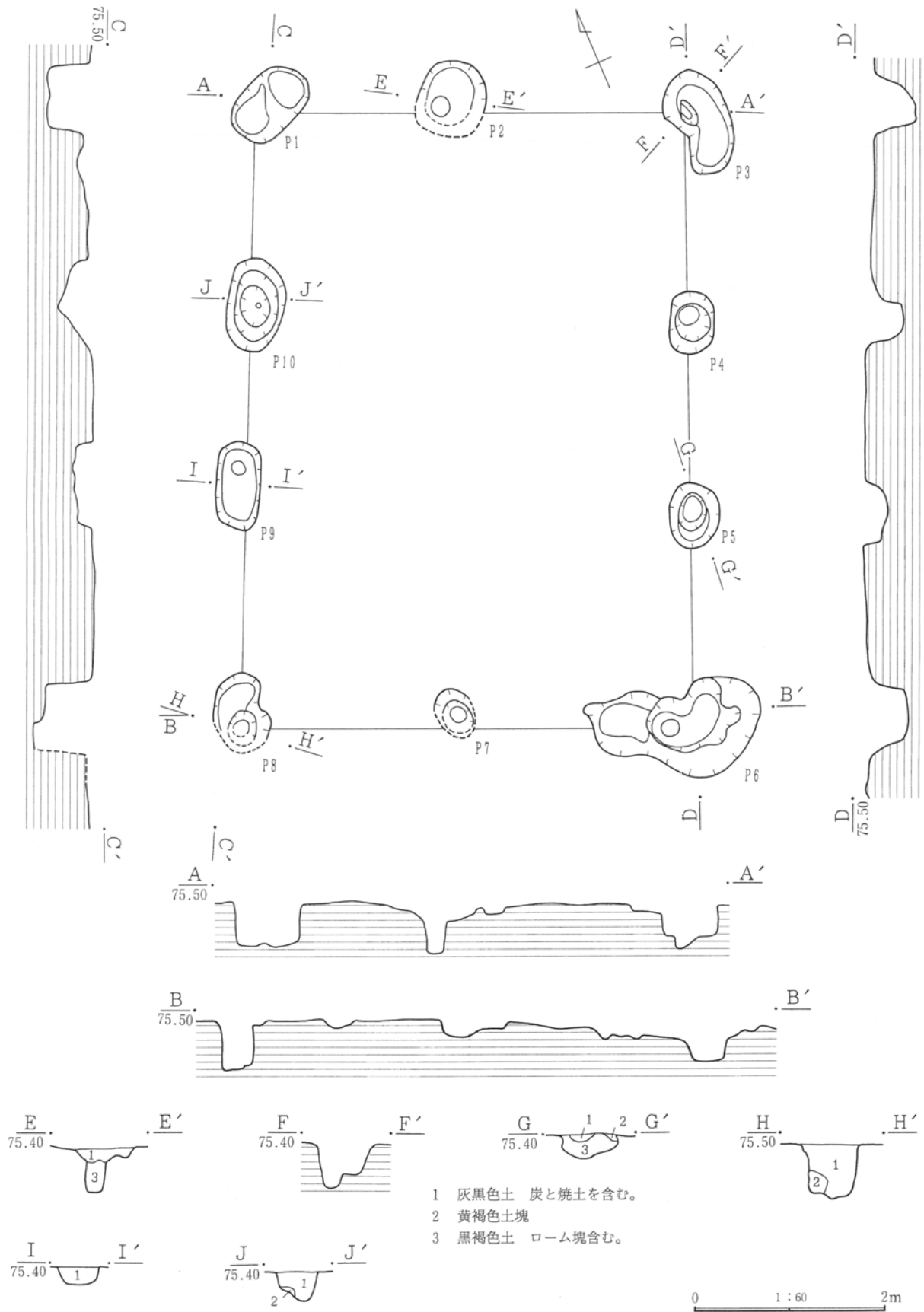
で、側柱の掘方は柱筋に沿った楕円形か円形である。底面に残るくぼみから、円形の柱が据えられた位置と認定した。特に隅柱では強く締まっている。柱穴の深さは、隅柱がほぼ一定で、側柱がやや浅く不均一といえる。

出土遺物 なし。

重複遺構 2号住居跡と4号住居跡を切っている。重複する2・3号溝との新旧関係は不明。

時期 I区2号住居跡よりも新しい9世紀前半以降と思われる。

	径 (cm)	深 (cm)		径 (cm)	深 (cm)
P1	90×58	48	P6	185×100	42
P2	(80)×70	50	P7	(52)×38	20
P3	110×60	45	P8	(80)×50	62
P4	66×46	40	P9	90×46	22
P5	67×52	25	P10	95×60	34



第184図 I区6号掘立柱建物跡

Ｊ区 1号掘立柱建物跡 (第186図 PL.72)

位置 220・225-025・030グリッド

主軸方位 N-83°-E

規模 2×3間 6.34×4.65m

柱間寸法

P 1-P 2 1.88m P 2-P 3 2.18m

P 3-P 4 2.28m P 4-P 5 2.20m

P 5-P 6 2.16m P 6-P 7 2.06m

P 7-P 8 2.00m P 8-P 9 2.30m

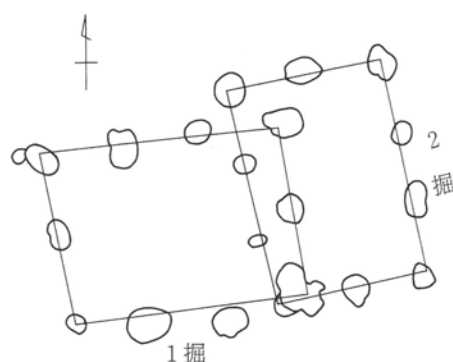
P 9-P 10 2.35m P 1-P 10 2.28m

柱 穴 掘方は円か楕円形で大きさは不均一。

出土遺物 柱穴から、7～11世紀の土器片が出土。

重複遺構 2号掘立柱建物跡と重複し、P 5は共有する位置にある。また、4・5・11号住居跡と重複するが新旧関係は不明。

	径 (cm)	深 (cm)		径 (cm)	深 (cm)
P 1	100×70	58	P 6	96×82	54
P 2	70×60	42	P 7	116×88	58
P 3	85×70	40	P 8	53×42	28
P 4	80×68	34	P 9	82×54	42
P 5	112×70	50	P 10	94×56	55



0 1:200 5m

第185図 J区 1・2号掘立柱建物跡の重複関係

Ｊ区 2号掘立柱建物跡 (第187図 PL.73)

位置 220・225-020・025グリッド

主軸方位 N-13°-W

規模 2×3間 5.96×4.04m

柱間寸法

P 1-P 2 2.00m P 2-P 3 2.04m

P 3-P 4 2.04m P 4-P 5 1.82m

P 5-P 6 1.92m P 6-P 7 1.96m

P 7-P 8 2.00m P 8-P 9 1.80m

P 9-P 10 2.10m P 1-P 10 2.06m

6～7尺のほぼ等間である。

柱 穴 円形掘方が主体。P 2とP 6には硬質な柱痕跡底面が残る。出土遺物 P 10から7～8世紀の土器片が出土する。

重複遺構 1号掘立柱建物跡と直交して重複する。

	径 (cm)	深 (cm)		径 (cm)	深 (cm)
P 1	80×88	30	P 6	70×-	38
P 2	103×68	40	P 7	82×72	39
P 3	94×92	43	P 8	-	30
P 4	63×51	31	P 9	47×27	33
P 5	96×57	38	P 10	61×52	33

Ｊ区 4号掘立柱建物跡 (第188図)

位置 185・190-010・015グリッド

主軸方位 N-81°-W

規模 3×-間 5.40×-m

柱間寸法

P 1-P 2 2.20m P 2-P 3 0.75m

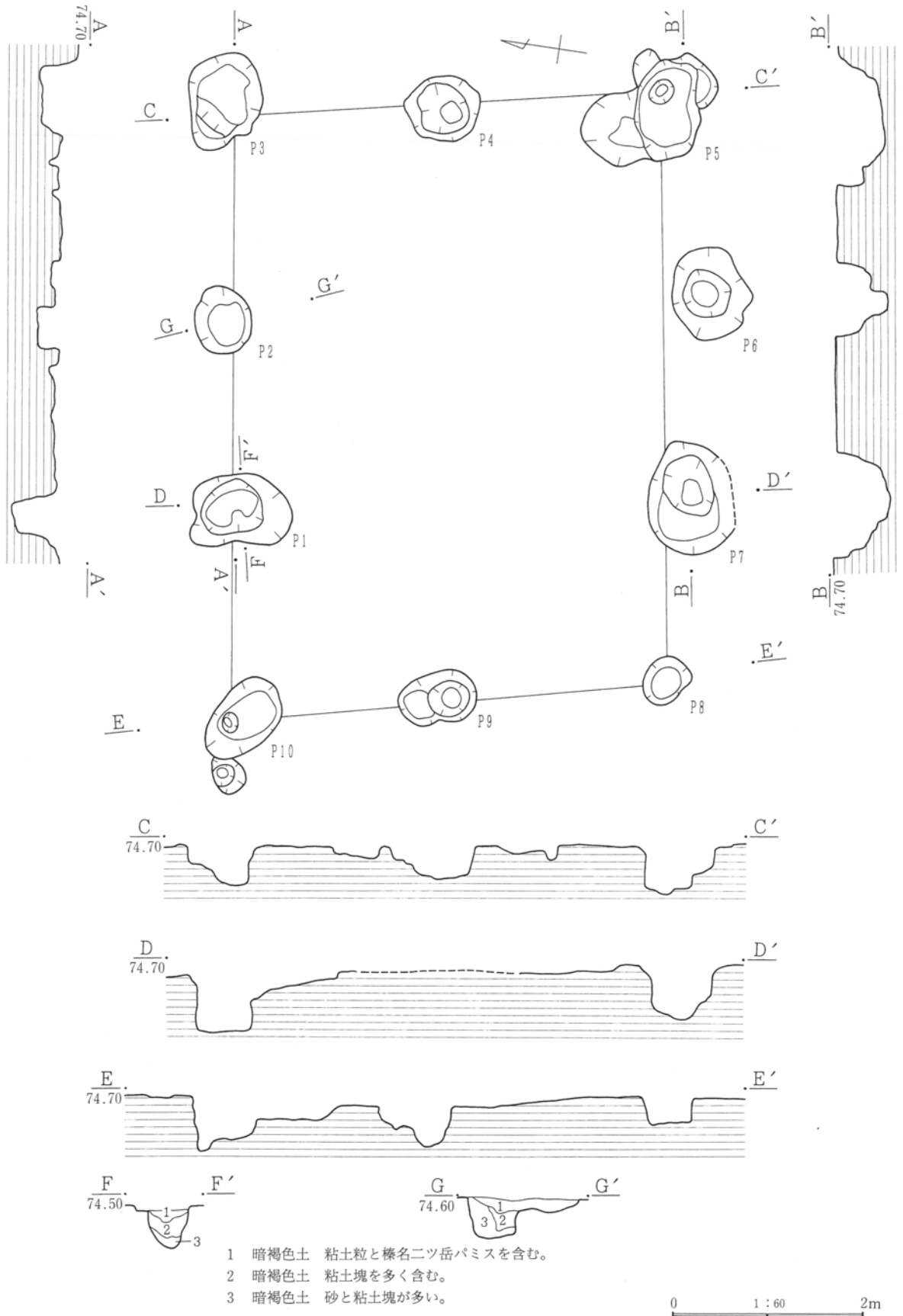
P 3-P 4 0.90m P 4-P 5 1.15m

柱 穴 柱筋に位置するがP 3は別遺構か。

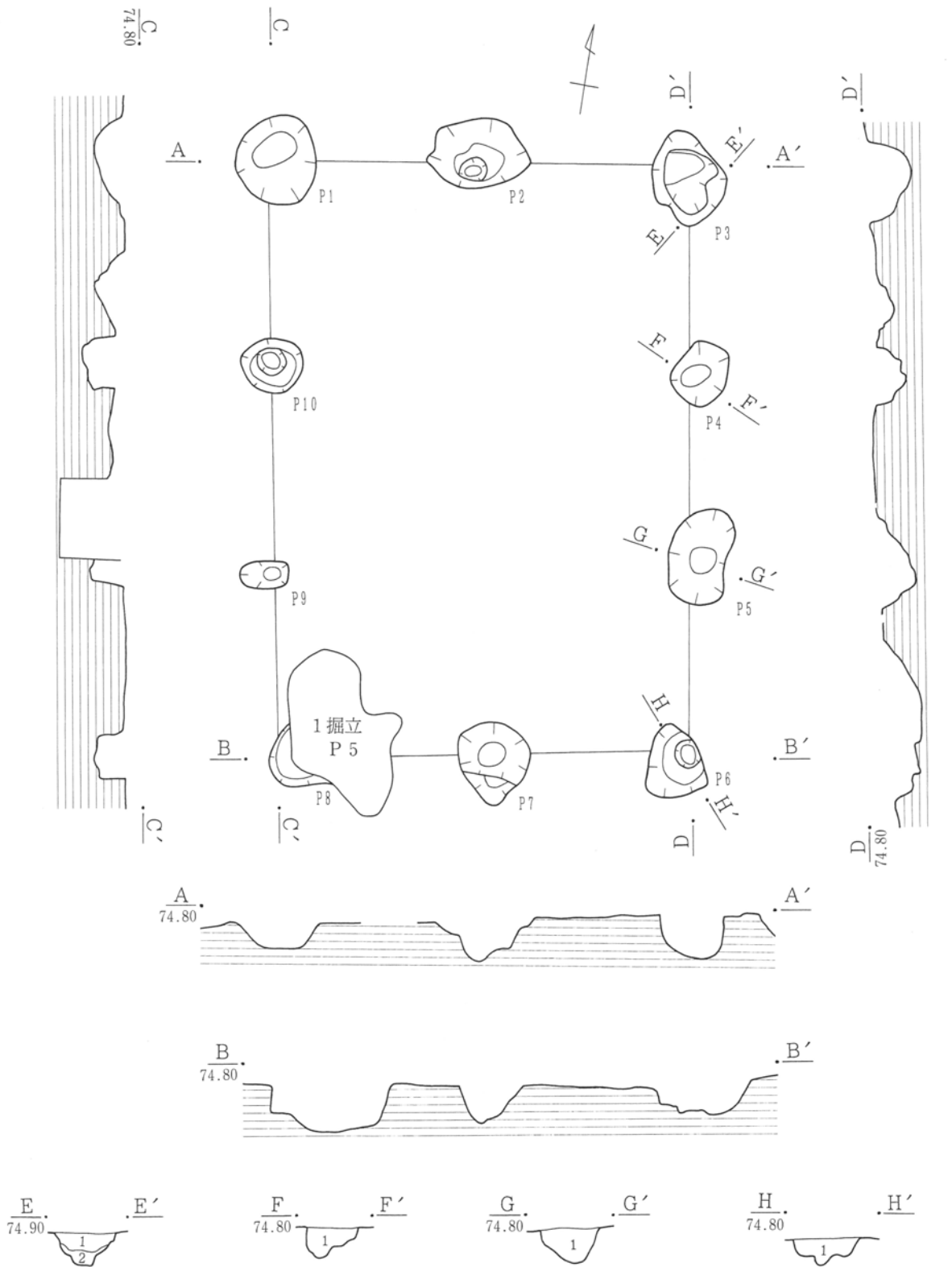
出土遺物 8世紀代の土器小片が出土。

重複遺構 6号住居跡と重複するが、新旧関係不明。

	径 (cm)	深 (cm)		径 (cm)	深 (cm)
P 1	58×30	50	P 4	64×50	33
P 2	75×40	40	P 5	105×53	40
P 3	48×40	48			



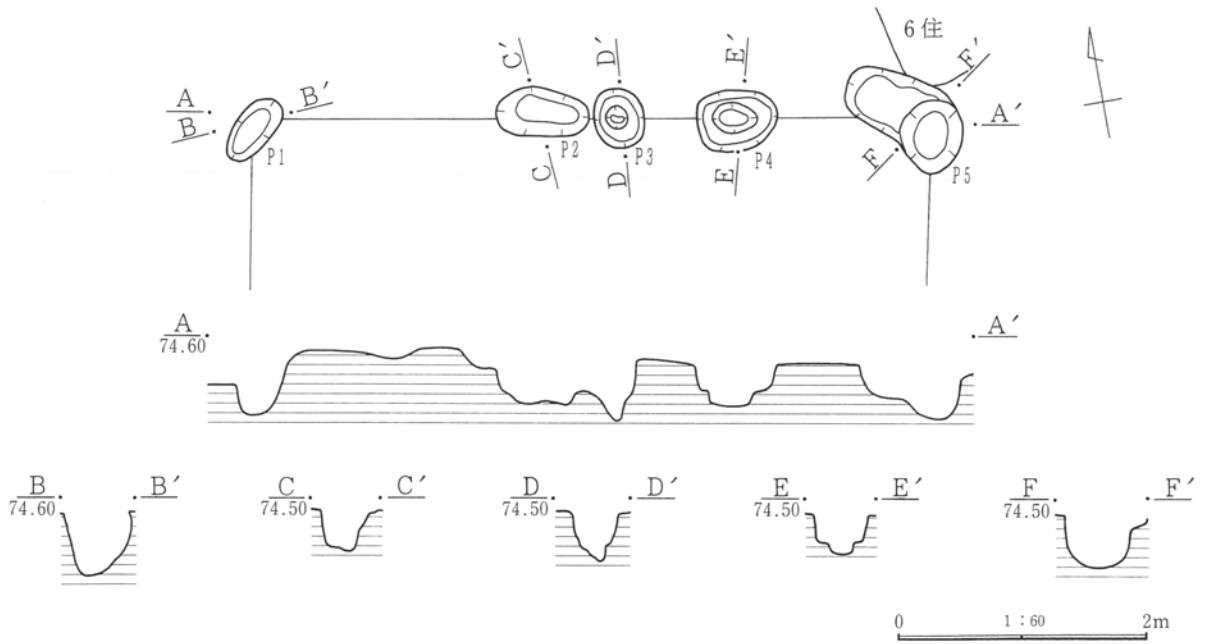
第186図 J区1号掘立柱建物跡



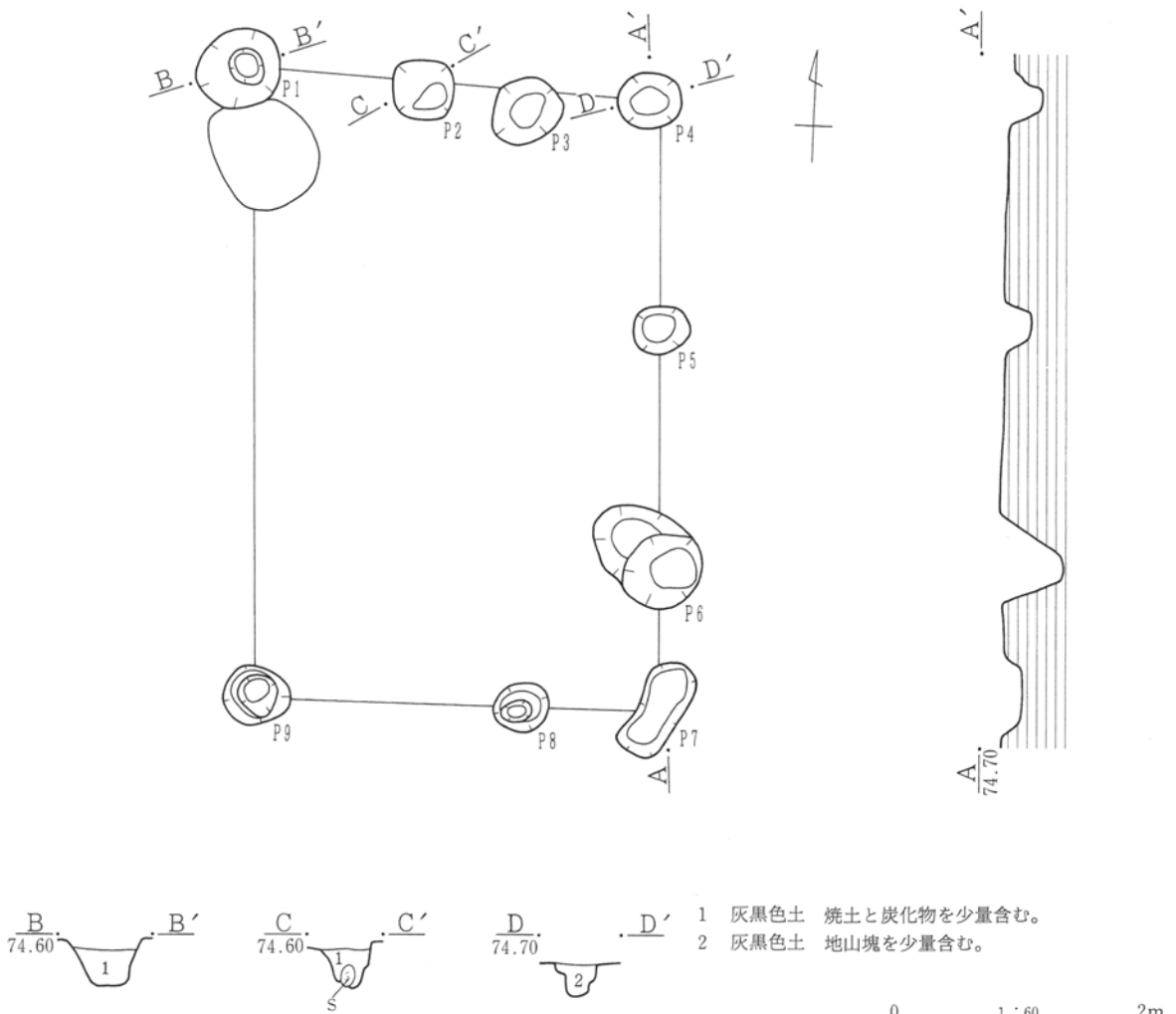
- 1 暗灰色土 シルト質で、焼土と炭化物含む。
- 2 灰黄色土 ローム粒を多く含む。

0 1 : 60 2m

第187図 J区2号掘立柱建物跡



第188図 J区4号掘立柱建物跡



第189図 J区5号掘立柱建物跡

J区5号掘立柱建物跡 (第189図 PL.73)

位置 205・210-020グリッド

主軸方位 N-4°-W

規模 2~3×3間 4.95×3.25m

柱間寸法

P1-P2 1.50m P2-P3 0.75m
 P3-P4 0.97m P4-P5 1.78m
 P5-P6 1.90m P6-P7 1.10m
 P7-P8 1.15m P8-P9 2.05m
 P1-P9 4.95m

柱穴 柱筋は通るが、柱穴掘方の形状と規模は不均一。P2には礎石と思われる円礫が据えられている。

	径 (cm)	深 (cm)		径 (cm)	深 (cm)
P1	68×64	62	P6	94×68	48
P2	56×52	40	P7	82×35	19
P3	58×50	16	P8	42×40	42
P4	52×46	26	P9	54×48	30
P5	46×38	20			

出土遺物 柱穴内から8~11世紀代の土器片が出土。

重複遺構 P9は1号住居跡を切り、西桁行部を後世攪乱に切られる。

J区1号柱列 (第190図)

位置 185・190-995グリッド

主軸方位 N-2°-W

規模 5.20m

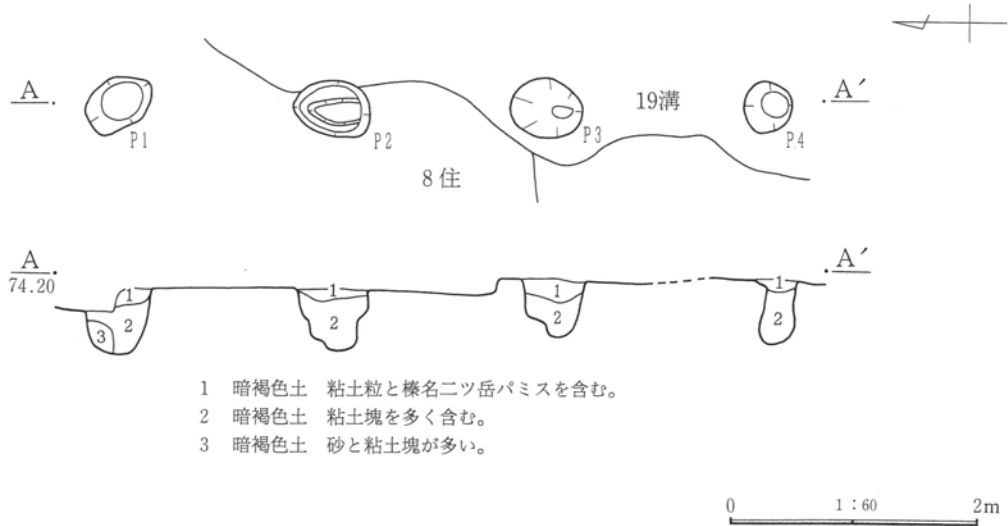
柱間寸法

P1-P2 1.72m P2-P3 1.75m
 P3-P4 1.75m

柱穴 円形ないし楕円形で、規模はほぼ均一。柱痕跡は明瞭でなかった。

出土遺物 P1とP3の埋土から9世紀代の土器片が出土している。

重複遺構 19号溝と同じ走向で重複し、また8号住居跡の東辺と重複するが、いずれも新旧関係は明確にしえなかった。



	径 (cm)	深 (cm)		径 (cm)	深 (cm)
P1	56×40	54	P3	60×48	47
P2	62×54	50	P4	42×38	52

第190図 J区1号柱列跡

(3) 塚

I区1号塚 (第191図 PL.74)

位置 210-175グリッド

形状 円形の溝が巡り、中央に盛土を行ったと推測されるが、後世の削平により確認できなかった。

溝の断面は箱堀状で、底面は平坦で整っている。

規模 周溝外径3.22m、周溝内径1.96m

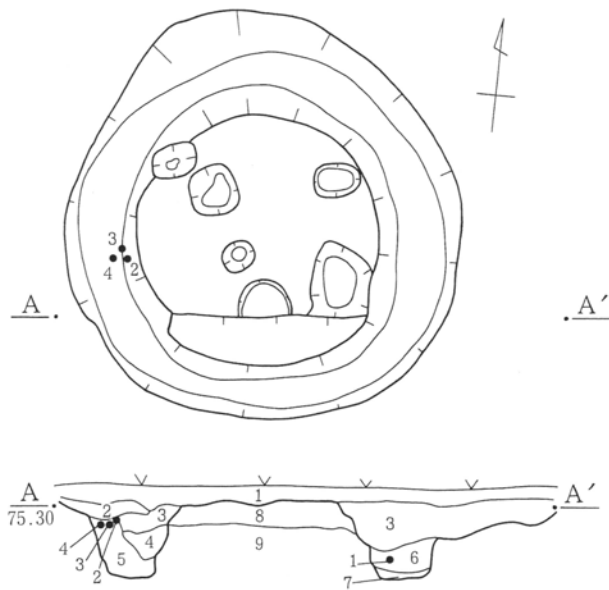
溝の深さは、確認面から60cm。

内部施設 内区部分でピット6基が検出された。中央ピットが整った円形で確認面からの深さ8cmを測

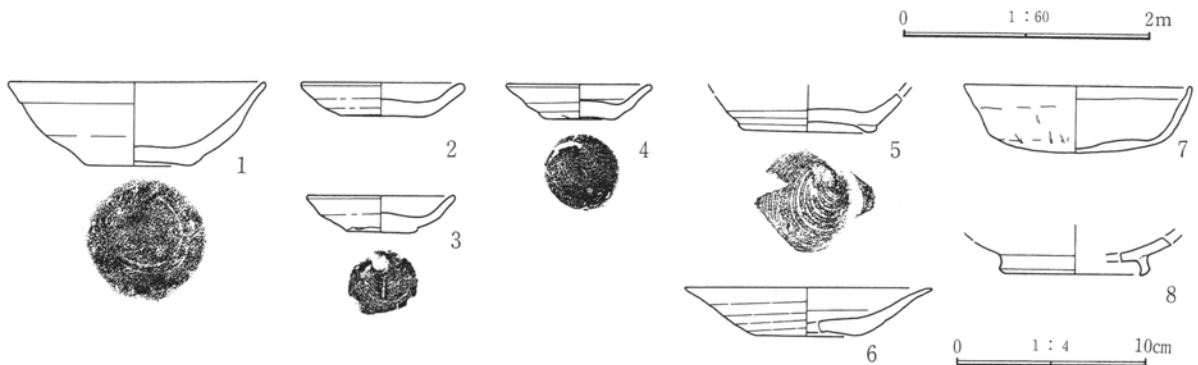
る。他のピットは不整形で深さ20cm前後。ピット内部からは何らの遺物も出土しない。

埋土の状況 溝内に人為的埋土(5・6層)を行い、突き固めたかのように強く締まる。その上に炭化物を多量に含む黒褐色土が堆積する。盛土の流れ込みは確認できない。As-B層との関係は不明瞭だが、溝埋土中にAs-Bが見られないことから、それ以前に埋没していたと考えたい。

出土遺物 下層埋土から杯(1)、上層埋土から小型杯3点(2~4)が重なって出土した。



- 1 暗褐色土 表土。
- 2 暗褐色土 ローム粒とAs-Cと思われるパミスを少量含む。
- 3 黒褐色土 1cm大の炭化物を多く含むが、ただし焼土や灰は見られない。
- 4 黒褐色土 3層とほぼ同質で、ローム粒が多い。
- 5 暗褐色土 ローム塊と黒色土の互層、強く締まっており、版築状につき固めた可能性が高い。
- 6 暗褐色土 ローム塊の多い人為的埋土、5層ほどは堅くない。
- 7 黄褐色土 ローム塊主体。
- 8 黒褐色土 As-Cを少量含む。上位にHr-FAがまばらに堆積する。
- 9 灰黄褐色シルト As-YPを含む。



第191図 I区1号塚及び出土遺物

(4) 竪穴遺構

I区1号竪穴遺構 (第192図 P L.75)

位置 210-180・185グリッド

形状・規模・主軸方位 不明 壁高 12cm

底面の状況 中央部は平坦だが壁に向かってなだらかな傾斜で立ち上がる。

ピット等 大小6基のピットが検出された。これらは深さが10~20cmとまちまちで、柱穴かどうかは不明。後世攪乱の可能性もある。

出土遺物 底面付近から9世紀前半代の完形に近い杯と30cm大の扁平礫が出土。また底面上には灰層が堆積する。

重複遺構 3号井戸、4'・5号溝に切られる。

(5) 井戸跡

I区3号井戸 (第192図 P L.75)

位置 210-185グリッド

形状 平面円形で、断面はやや上位に開く箱形を呈する。底面は中央がややくぼむ。井戸側や痕跡が見られないことから、素掘りと考えたい。

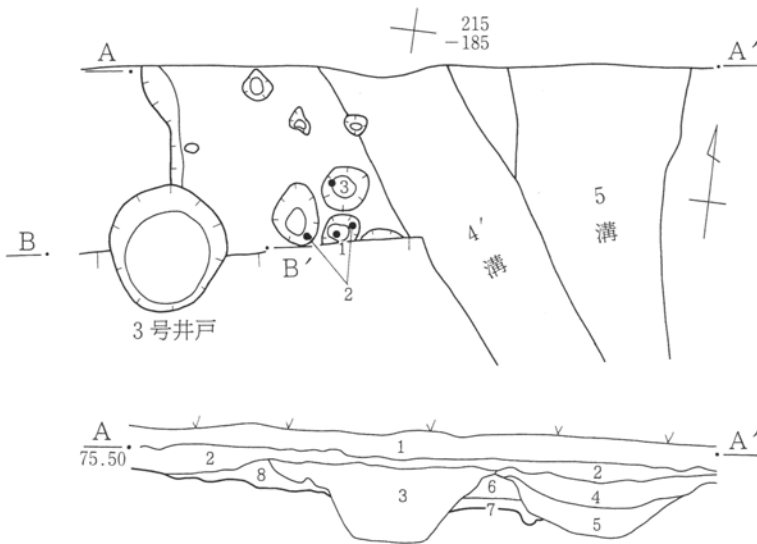
規模 径1.06m、深さ78cmを測る。

埋土の状況 下層は黒色土とロームの互層、その上位には二次堆積と思われるAs-B層が見られる。

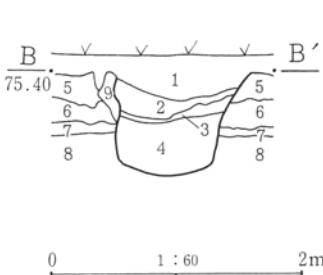
出土遺物 須恵器壺口縁片1点が出土した。

重複遺構 1号竪穴遺構を切る。

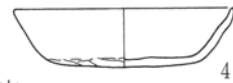
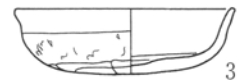
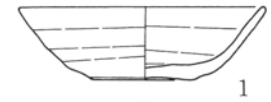
所見 井戸として水量は不十分だったと思われるが、現在でも底面で地下水の湧出が見られる。



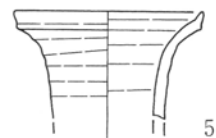
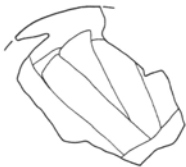
- 1 暗褐色土 表土。
- 2 黄褐色土 1層を耕土とする鋤床層。
- 3 暗褐色土 4'号溝埋土。
- 4 黒褐色土 焼土と炭化物を少量含む。5号溝埋土。
- 5 黒褐色土 粘性強くしまる、5号溝埋土。
- 6 黒褐色土 ローム粒、焼土、炭化物粒を含む。竪穴遺構埋土。
- 7 黒褐色土 粘性が強い、竪穴遺構埋土。
- 8 黒褐色土 焼土多く下に灰が堆積、竪穴遺構埋土。



- 1 暗褐色土 表土。
- 2 As-B二次堆積層 灰は見られない。
- 3 黒褐色土 粘性強く軟質。
- 4 黒褐色土 ロームの流れ込みにより、互層をなす。
- 5 黒褐色土 As-Cとローム粒を含む。
- 6 暗褐色土 粘性帯び、シルト質。
- 7 黄褐色土 白糸パミスが少量見られる。
- 8 黄灰色土 粘性強く軟質、As-YPを含む。
- 9 ローム塊 壁の剝落部分。



1~4 1号竪穴
5 3号井戸



0 1:4 10cm

第192図 I区1号竪穴・3号井戸及び出土遺物

Ｊ区２号井戸（第193図 PL.76）

位置 200-000グリッド

形状 平面円形で、底面は幾分小さな方形状。断面は下位が筒状で、上位は「ラッパ」状に開く。

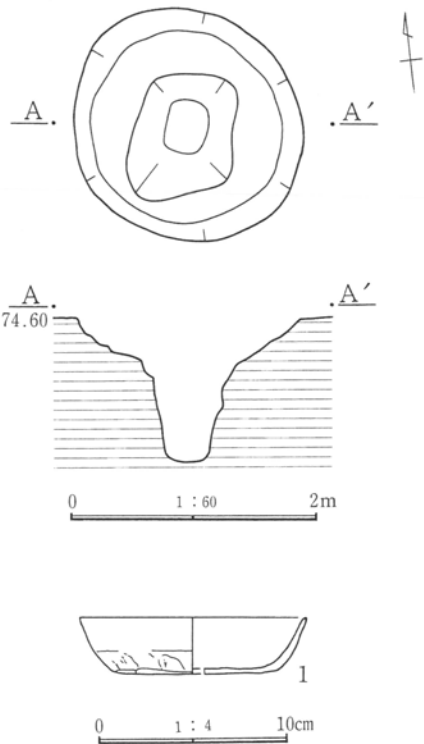
規模 径1.90m、深さ112cmを測る。

埋土の状況 灰黒色土が堆積し、砂も多い。

出土遺物 9世紀代の杯、及び土器小片が出土する。また、円・楕円礫が多く出土することから、上位の法面を礫で補強していた可能性が考えられよう。

重複遺構 なし。

所見 出土した杯から本井戸の時期は9世紀代と想定され、北側に約1.5m離れて同時期の30号住居跡が位置することになる。



第193図 J区2号井戸及び出土遺物

(6) 土坑 (第194~208図)

ここで取り上げた古代の土坑のうち、時期の判明する遺物が出土した土坑を第194~206図に掲げた。第207・208図は埋土の特徴と遺構重複関係から古代と推定した土坑である。計測値等の詳細は第5表に掲げた。

H区34号土坑 (第194図) は、長方形プランで、人為的な埋土の状況と、完形碗・杯類の出土から、墓と認定できよう。人骨は検出されなかった。出土土器のうち、灰釉碗は伏せた状態、杯は正位や割れた状態で出土していることから、副葬品として据え置かれたのではなく、投げ込まれた状態を示すと考えたい。北部で8号住居跡を切っており、また1号掘立柱建物跡と重複するが新旧関係は不明だった。なお、土坑内で検出されたピットは後世攪乱の可能性が高い。時期は10世紀後半。

H区35号土坑 (第195図) は不整形で、底面に小さな凹凸が著しい。埋土にローム塊を含むが、明らかな人為的埋土とは言い難い。埋土から9世紀前半の甕・杯片が出土した。形状・規模・出土遺物の特徴から、墓とは考えにくい。遺構重複関係なし。

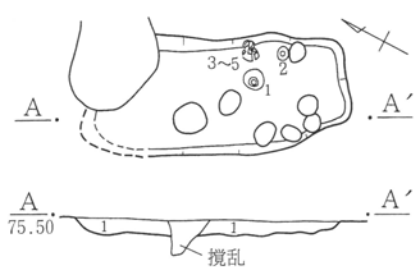
J区21・25・143号土坑 (第196図) は、ほぼ東西方向に並び、約130cmの等間隔で位置することから、143号土坑を隅柱とする掘立柱建物跡を想定して他

の柱穴を探したが、想定される柱筋に同類のピットないし土坑が確認できなかったため、ここに土坑として掲載した。いずれもほぼ同規模の楕円形を呈し、ローム塊を含む黒褐色土が堆積する。柱痕跡は確認できない。25号土坑からは半欠の灰釉皿(2)が出土しており、墓の可能性も考えられる。出土遺物から9世紀後半と思われる。

J区11号土坑 (第197図) は、不定形の浅いくぼみで底面の凹凸が著しい。削平された溝底面か複数の土坑重複の可能性もある。8世紀後半代の杯2点が出土した。

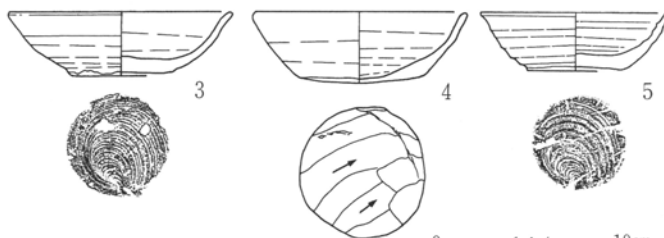
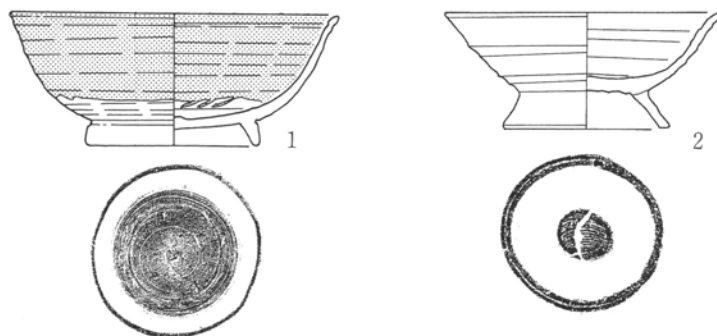
J区46号土坑 (第198図) は、小型の円形ピットというべきだが、周辺に対応するピットがなく、柱穴とは認められなかった。内部から9世紀後半代の甕片が出土している。

J区59号土坑 (第199図) は、長方形プランの両側に円~楕円形の張り出しを持つ。埋土に焼土・炭化物・灰が多量に認められ、杯類がまとまって出土する。焼成土坑というべきか。10世紀前半と思われる。



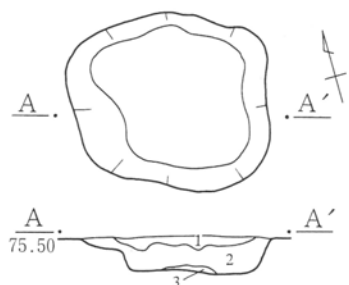
1 黒褐色土 ローム塊と焼土を含む。

0 1:60 2m



0 1:4 10cm

第194図 H区34号土坑及び出土遺物

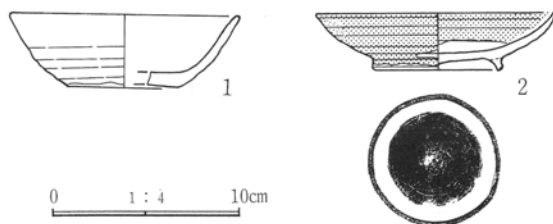
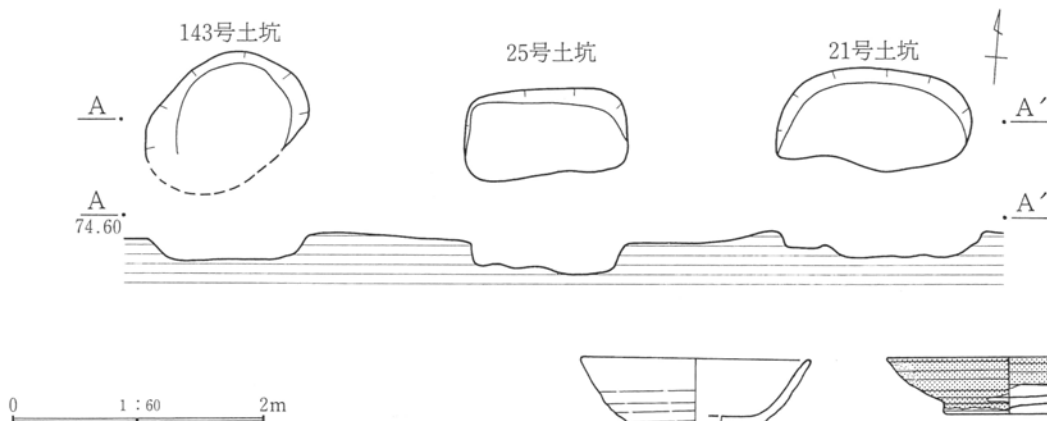


0 1:4 10cm

- 1 黒色土 As-Cと榛名ニツ岳パミス含む。
- 2 黒褐色土 1層にローム塊が加わる。
- 3 黄褐色土 ローム塊主体。

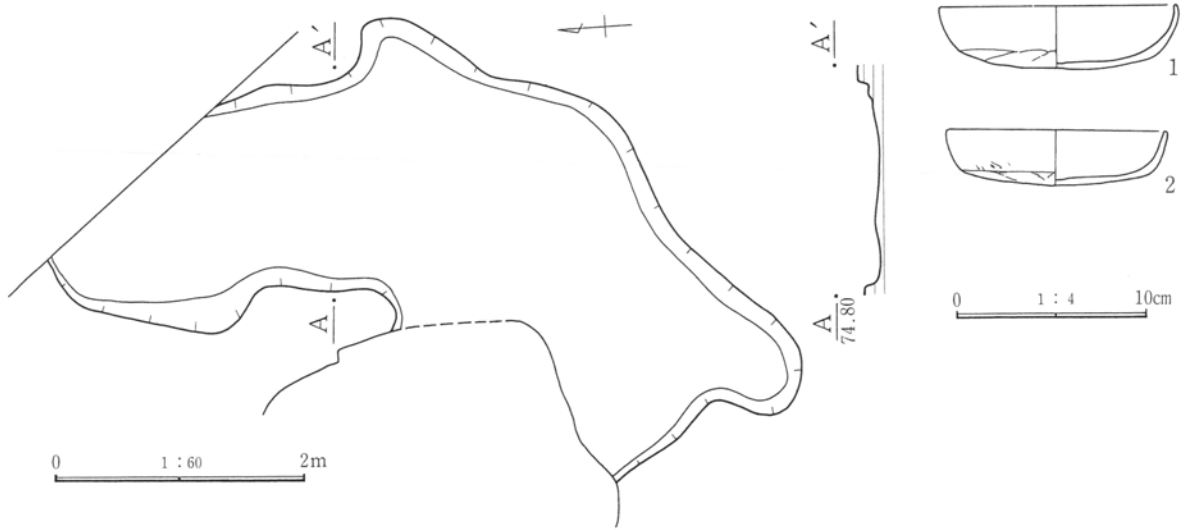
0 1:60 2m

第195図 H区35号土坑及び出土遺物



0 1:4 10cm

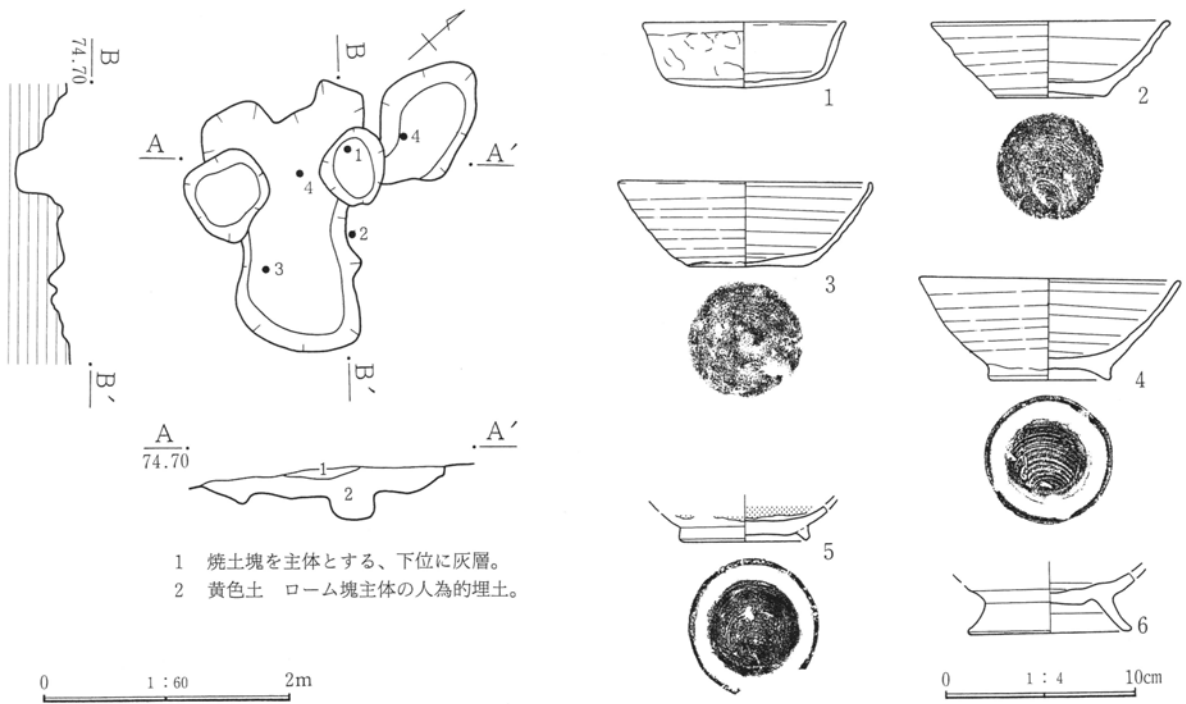
第196図 J区21・25・143号土坑及び25号土坑出土遺物



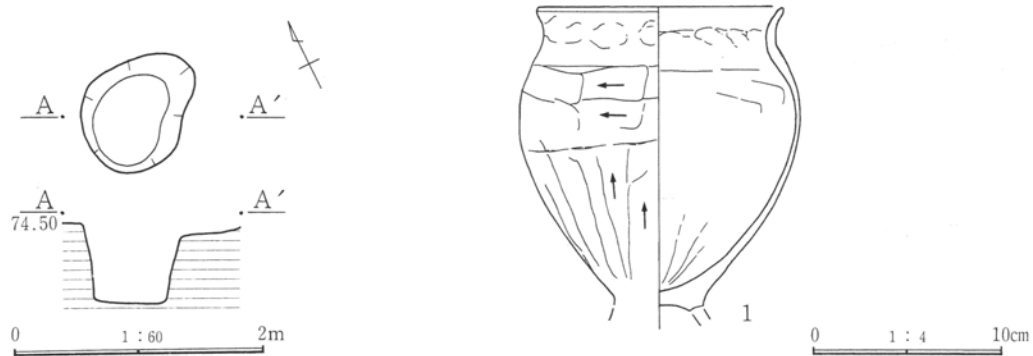
第197図 J区11号土坑及び出土遺物



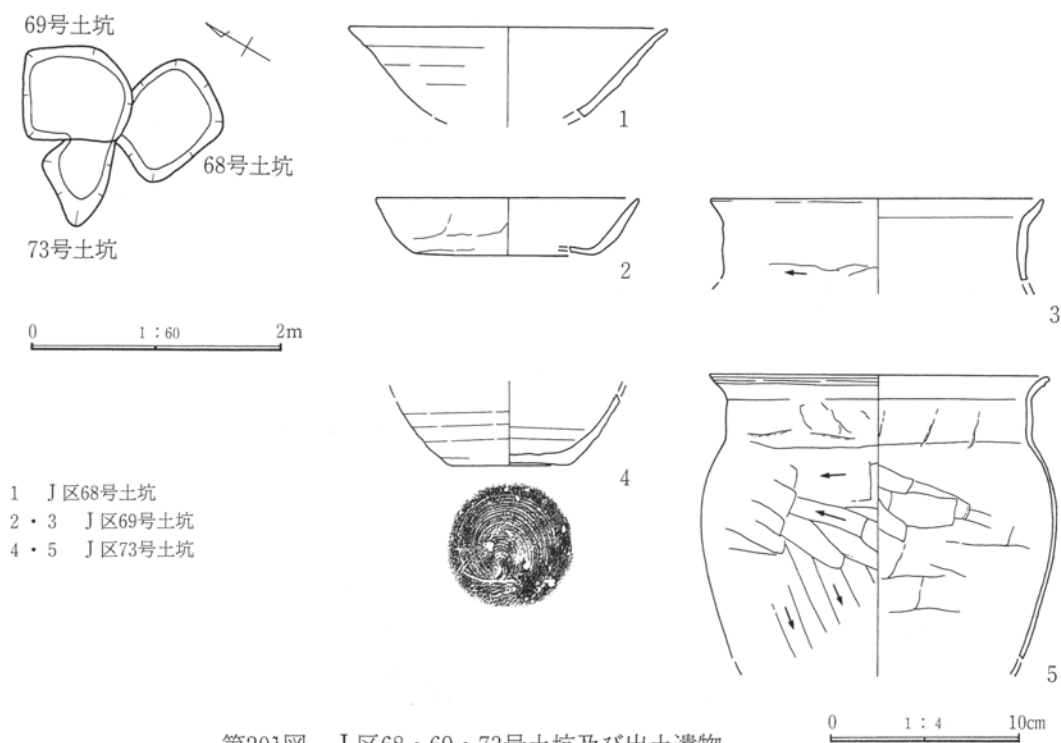
第198図 J区46号土坑及び出土遺物



第199図 J区59号土坑及び出土遺物

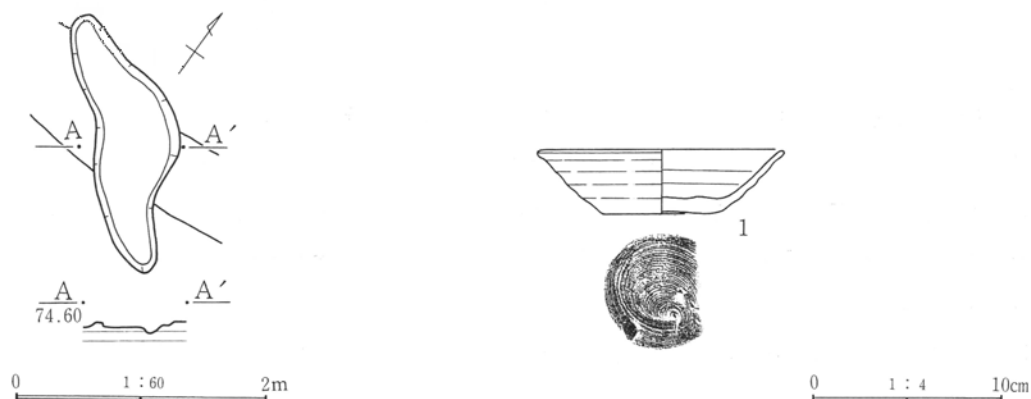


第200図 J区41号土坑及び出土遺物

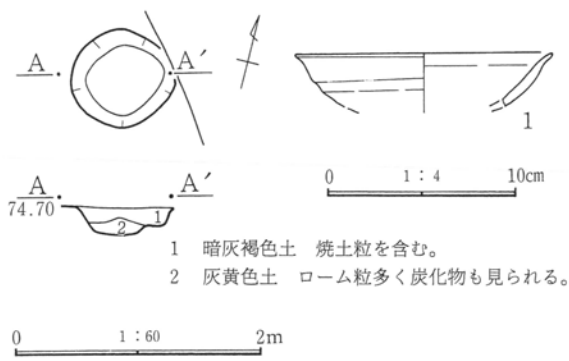


- 1 J区68号土坑
- 2・3 J区69号土坑
- 4・5 J区73号土坑

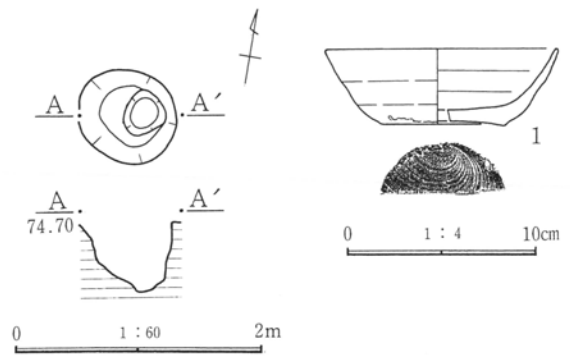
第201図 J区68・69・73号土坑及び出土遺物



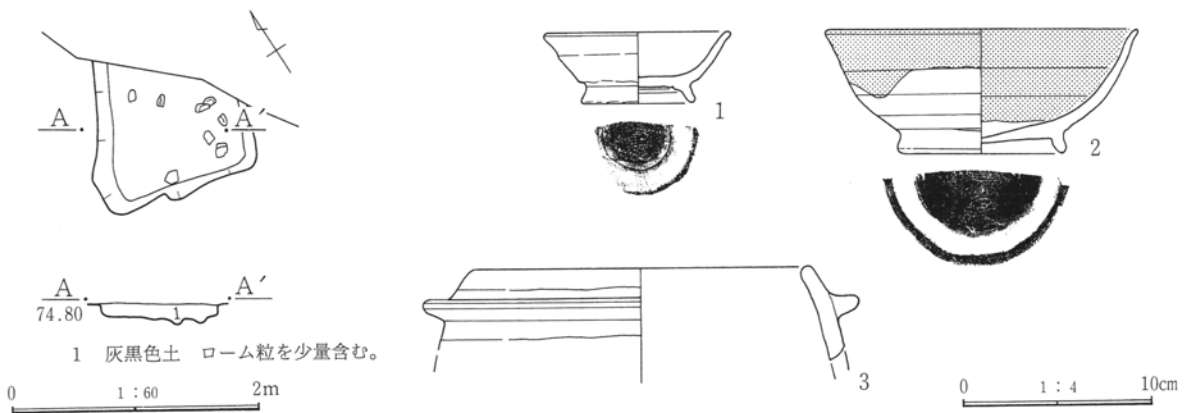
第202図 J区122号土坑及び出土遺物



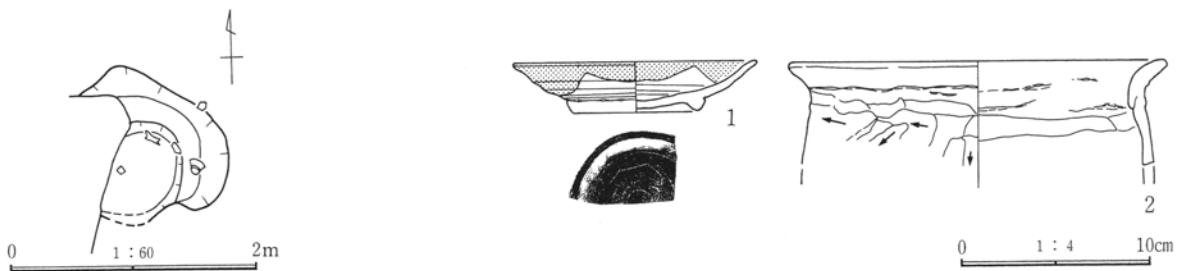
第203図 J区154号土坑及び出土遺物



第204図 J区155号土坑及び出土遺物



第205図 J区181号土坑及び出土遺物

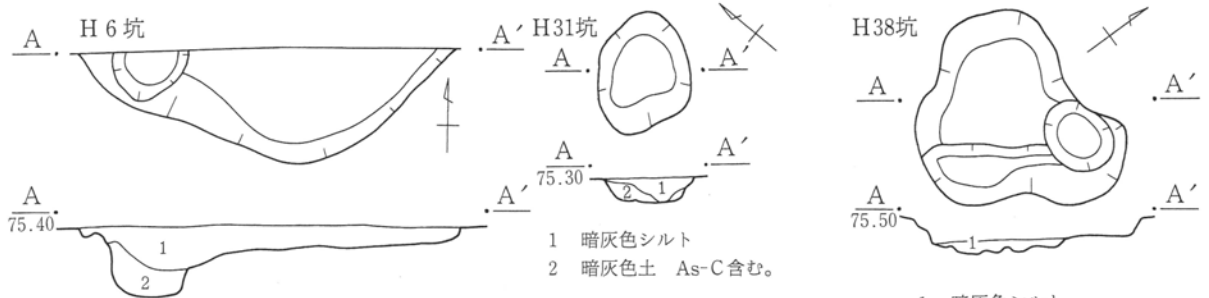


第206図 J区191号土坑及び出土遺物

J区41号土坑 (第200図)、J区68・69・73号土坑 (第201図)、J区122号土坑 (第202図)、J区154号土坑 (第203図)、J区155号土坑 (第204図)、J区181号土坑 (第205図)、J区191号土坑 (第206図) は、8～10世紀代の土器が出土し、時期は確定できるが、性格は不明である。比較的灰釉碗の出土率が高いのが特徴である。

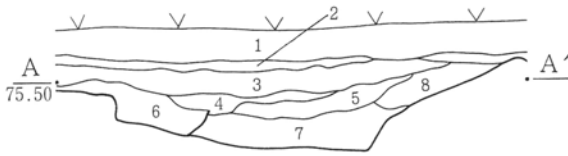
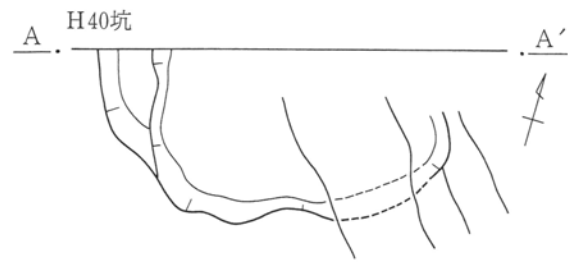
第207・208図の土坑は、古代という以外に時期限

定は困難で性格も不明である。ただし、低地域のB区50～52号土坑は水田耕作痕の可能性はある。他はH・J区の集落域に位置することから、集落内の何らかの施設と考えていだろう。

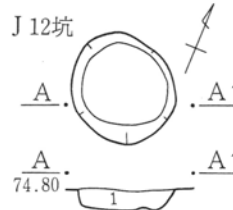


- 1 灰黒色土 シルト質、榛名ニツ岳パミス含む。
2 黒色土 砂質でローム粒を含む。

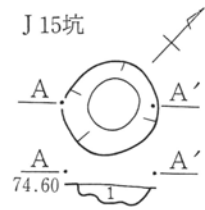
1 暗灰色シルト



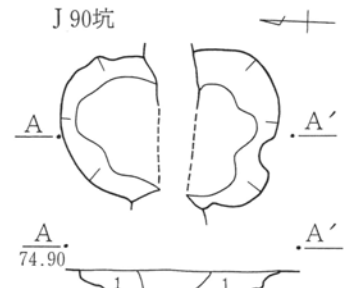
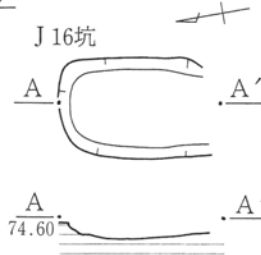
- 1 灰黄色土 表土。
2 灰褐色土 As-B混土。
3 暗灰色シルト 榛名ニツ岳パミス含む。
4 灰黄色土
5 灰黄色土 ローム多い。
6 黒色土 ローム塊多い。40坑埋土。
7 黒色土 ローム塊非常に多い。42溝埋土。
8 黒色土 43溝埋土。



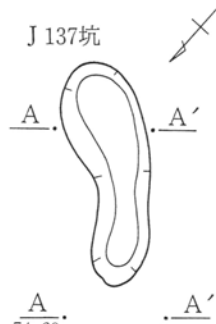
1 暗灰褐色シルト



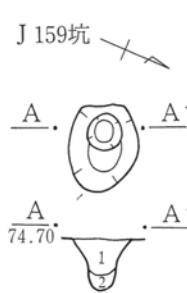
1 灰褐色シルト



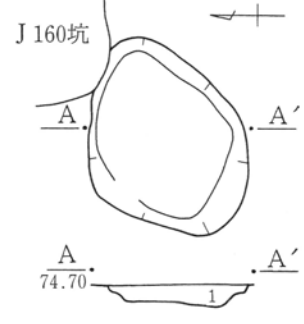
1 暗灰色シルト



1 暗灰褐色シルト



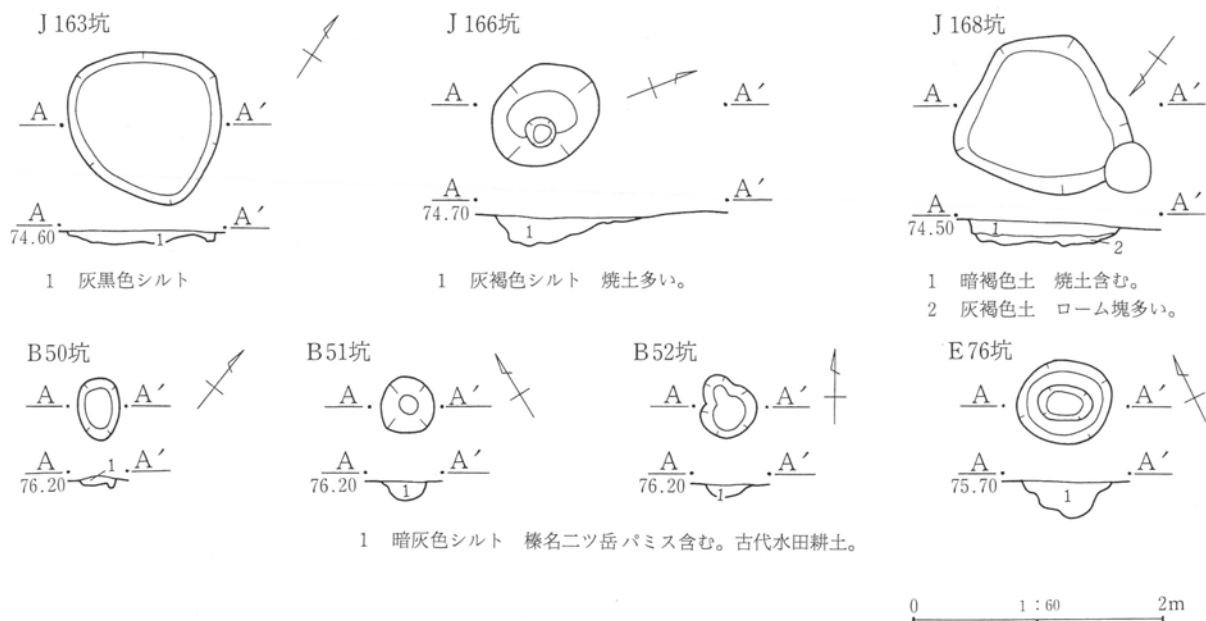
- 1 灰黒色シルト 焼土と炭。
2 黄褐色シルト塊



1 灰黒色シルト 炭含む。

0 1:60 2m

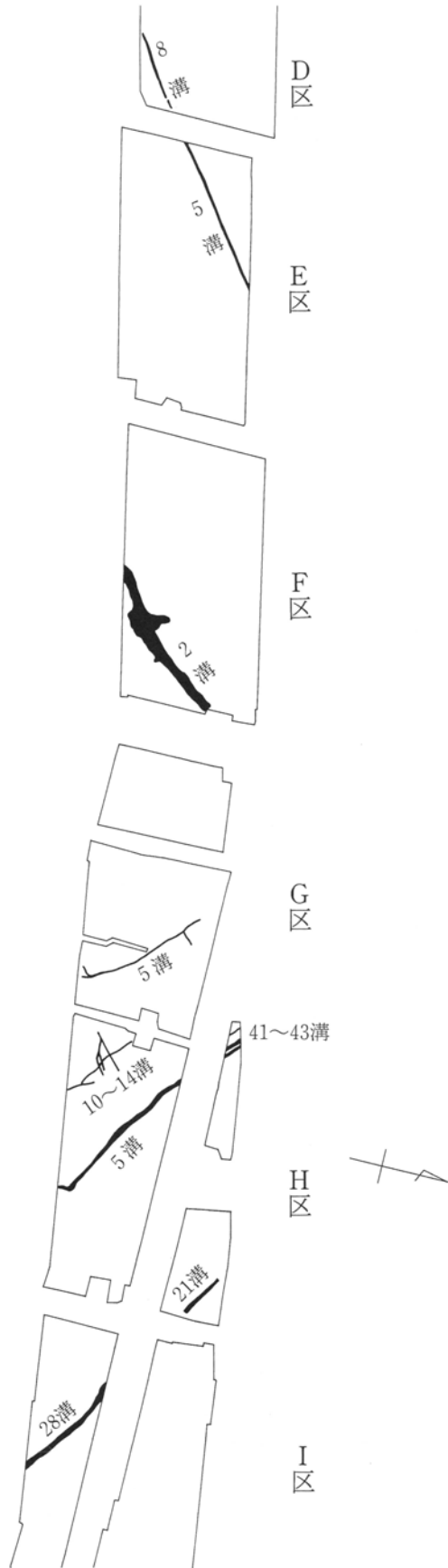
第207図 H・J区古代の土坑



第208図 B・E・J区古代の土坑

第5表 古代の土坑一覧表

遺構番号	グリッド	平面形	長軸×短軸 深(m)	出土遺物	時期
H-34号土坑	185-285、190-285	長方形	(2.1)×0.92・0.13	杯、灰釉碗	10C後
H-35号土坑	190-280、190-285	不定形	1.53×1.45・0.3	甕、杯	9C前
J-21号土坑	205-015・020	楕円形	1.52×0.76・0.24		9C後
J-25号土坑	205-020	長方形	1.28×0.68・0.26	灰釉皿、杯	9C代
J-143号土坑	205-020・025	楕円形	(1.35)×0.95・0.21		8C～
J-11号土坑	225-030、230-030	不定形	(4.8)×1.95・0.14	杯	8C後
J-46号土坑	200-010	楕円形	0.4×0.28・0.33	甕	9C後
J-59号土坑	205-005・010、210-010	長方形?	1.85×0.82・0.25	杯、碗	10C前
J-41号土坑	200-000・005	楕円形	1.0×0.82・0.61	台付甕	9C前
J-68号土坑	200-000	方形	0.85×0.72・0.23	碗	10C代
J-69号土坑	200-000	方形	0.85×0.72・0.39	杯、甕	9C中
J-73号土坑	200-000・005	不整形	(0.7)×0.55・0.24	杯、甕	9C中
J-122号土坑	195-015、190-015	不定形	2.1×0.7・0.13	杯	9C後
J-154号土坑	205-000、210-000	円形	0.78×0.78・0.22	杯	10C代
J-155号土坑	205-000	円形	0.8×0.72・0.55	杯	10C前
J-181号土坑	220-010・015	(長方形)	-×1.2・0.16	灰釉碗、羽釜	10C後
J-191号土坑	190-025	円と楕円合成	-×1.2・0.13	灰釉皿、土釜	10C後
H-6号土坑	170-295	?	3.0×-・0.57		
H-31号土坑	190-210	楕円形	0.9×0.73・0.20		
H-38号土坑	185-270、190-270	不定形	1.68×1.46・0.30		
H-40号土坑	190-310	不定形	2.82×-・0.52		
J-12号土坑	230-035	円形	0.85×0.80・0.18		
J-15号土坑	210-020	円形	0.75×0.75・0.15		
J-16号土坑	210-020	長方形	-×0.8・0.14		
J-90号土坑	225-020	楕円形	1.73×1.15・0.22		
J-132号土坑	200-015・020	楕円形	1.18×0.64・0.65		
J-137号土坑	200-020	楕円形	1.78×0.62・0.26		
J-159号土坑	205-005	楕円形	0.7×0.56・0.4		
J-160号土坑	205-005、210-000・005	方形	1.32×1.28・0.17		
J-163号土坑	200-000・995	円形	1.2×1.17・0.1		
J-166号土坑	205-005	円形	0.92×0.75・0.24		
J-168号土坑	200-000	不定形	1.3×1.28・0.2		
B-50号土坑	020-910	楕円形	0.5×0.34・0.09		
B-51号土坑	020-900	円形	0.44×0.44・0.15		
B-52号土坑	020-900	不定形	0.52×0.45・0.17		
E-76号土坑	120-535	円形	0.75×0.66・0.29		



第209図 古代の水路分布図 (1/2500)

(7) 水路と水田跡

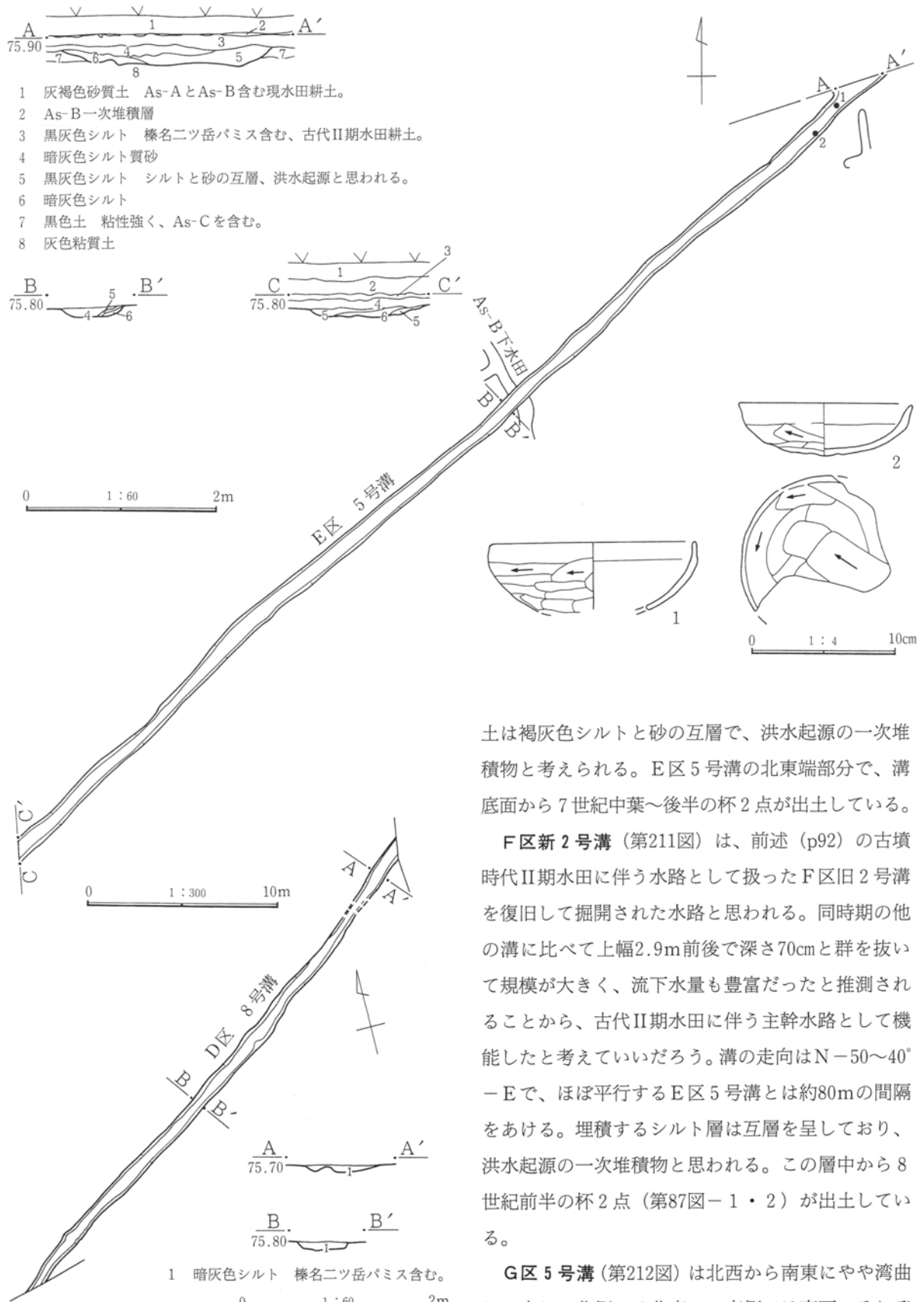
A～I区にかけての低地部分で、水路跡と水田跡が広範な分布をみせて検出されている（第209・220図）。奈良・平安時代と想定される水路・水田跡は主に上下で2面あり、下面は褐灰色シルトに覆われた水路群、上面では1108年（天仁元年）の浅間山噴火による火山灰As-Bによって覆われた水田跡と水路群である。

ここでは、前節で記載した『古墳時代Ⅰ・Ⅱ期水田』に続けて『古代Ⅰ・Ⅱ期水田及び水路跡』と呼称する。

古代Ⅰ期水田と水路群

ここで扱う古代Ⅰ期の水田と水路群は、主に洪水堆積物からなると考えられる褐灰色シルト層を削除することによって検出された。ただし、このシルト層は次の古代Ⅱ期水田の耕土と考えられ、約10cm前後の層厚で人為的な攪拌がみられる。一次堆積物としての洪水層はくぼんだ地形や遺構内にしかみられない。従って、このシルト層を剝除した面は、当時の地表面そのものではなく、大部分を占める平坦面は古代Ⅱ期水田の耕作がおよんで平準化されていると考えてよい。古代Ⅰ期水田と称しながらも畦畔や田面が検出できなかったのはそのためである。ただし、これから述べる溝群はほぼ同じシルト層によって埋没しており、すべてが同時存在とはいえないもの、一定の時間幅のなかで有機的な関連をもって機能した水路群と思われる。D区8号溝・E区5号溝・F区新2号溝・G区5号溝・H区5号溝・H区13～14号溝・H区41～43号溝がそれである。

D区8号溝（第210図）はE区5号溝（第210図 P L.79）と連続する直線的な溝で、走向はN-50～55°-E。上幅は100～70cmで、深さ20～10cmを測る。断面は浅い台形状で、底面は幅広の平坦面となっている。総長105mの間で規模や形状にほとんど変化がなく、底面レベルもほぼ同じである。水流は地形の傾斜から、北東から南西に流下すると考えられるが、流下速度はかなりゆっくりしたものだったろう。埋

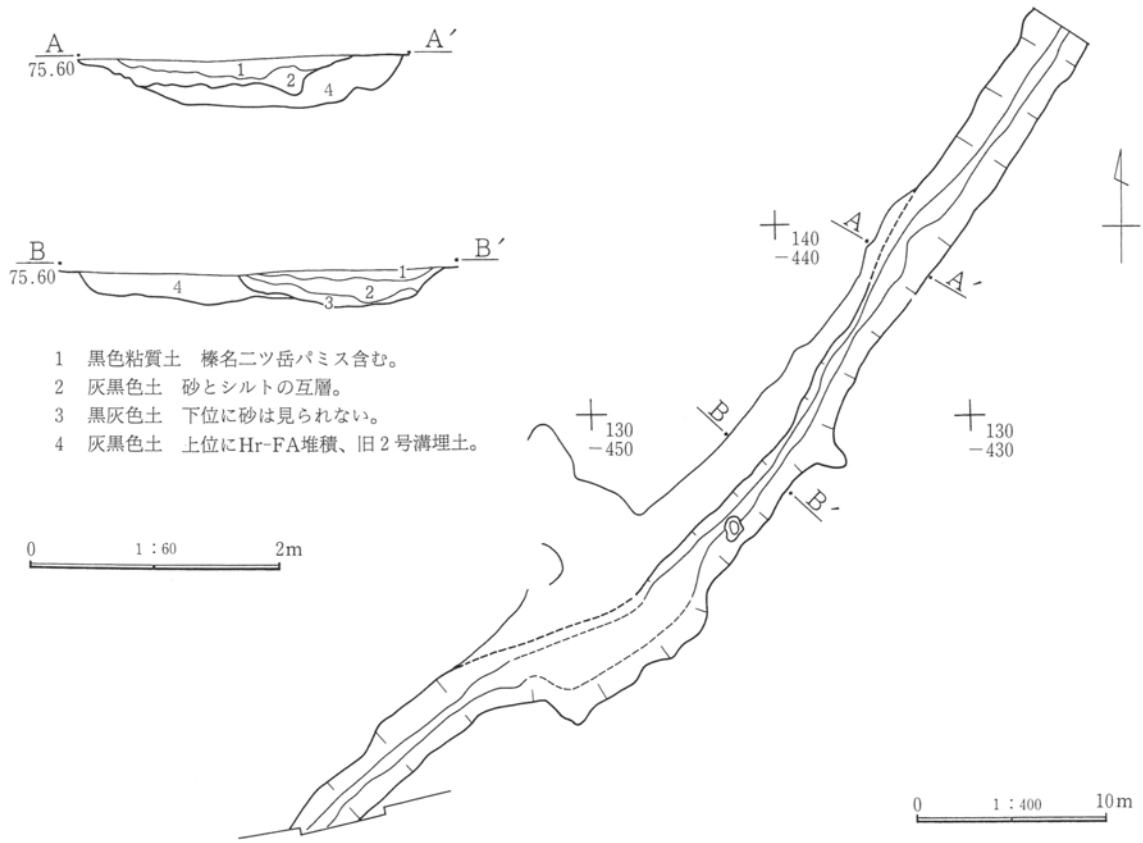


第210図 D区8・E区5溝及びE区5溝出土遺物

土は褐灰色シルトと砂の互層で、洪水起源の一次堆積物と考えられる。E区5号溝の北東端部分で、溝底面から7世紀中葉～後半の杯2点が出土している。

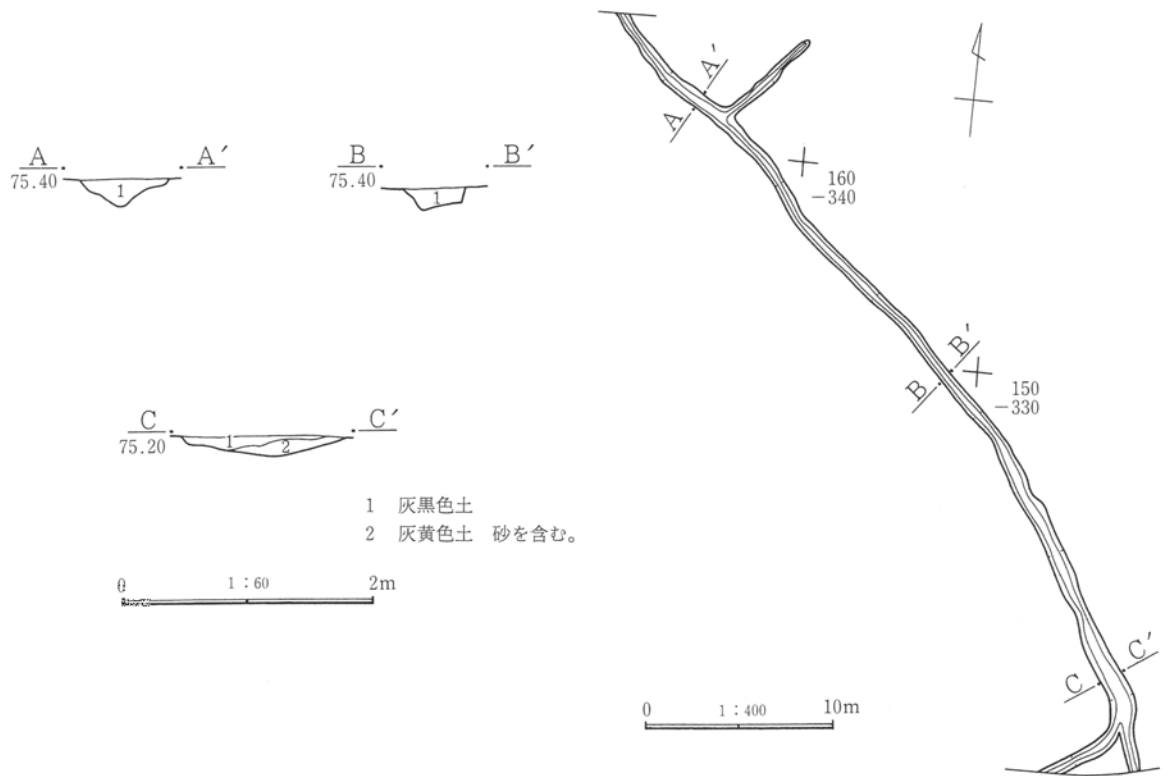
F区新2号溝 (第211図) は、前述 (p92) の古墳時代II期水田に伴う水路として扱ったF区旧2号溝を復旧して掘開された水路と思われる。同時期の他の溝に比べて上幅2.9m前後で深さ70cmと群を抜いて規模が大きく、流下水量も豊富だったと推測されることから、古代II期水田に伴う主幹水路として機能したと考えていいだろう。溝の走向はN-50~40°-Eで、ほぼ平行するE区5号溝とは約80mの間隔をあける。埋積するシルト層は互層を呈しており、洪水起源の一次堆積物と思われる。この層中から8世紀前半の杯2点 (第87図-1・2) が出土している。

G区5号溝 (第212図) は北西から南東にやや湾曲して走り、北側では北東に、南側では南西にそれぞれ小溝が分岐する。上幅は130~50cmで、深さ20~15



- 1 黑色粘質土 榛名ニツ岳パミス含む。
- 2 灰黒色土 砂とシルトの互層。
- 3 黒灰色土 下位に砂は見られない。
- 4 灰黒色土 上位にHr-FA堆積、旧2号溝埋土。

第211図 F区2号溝



- 1 灰黒色土
- 2 灰黄色土 砂を含む。

第212図 G区5号溝

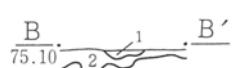
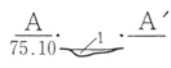
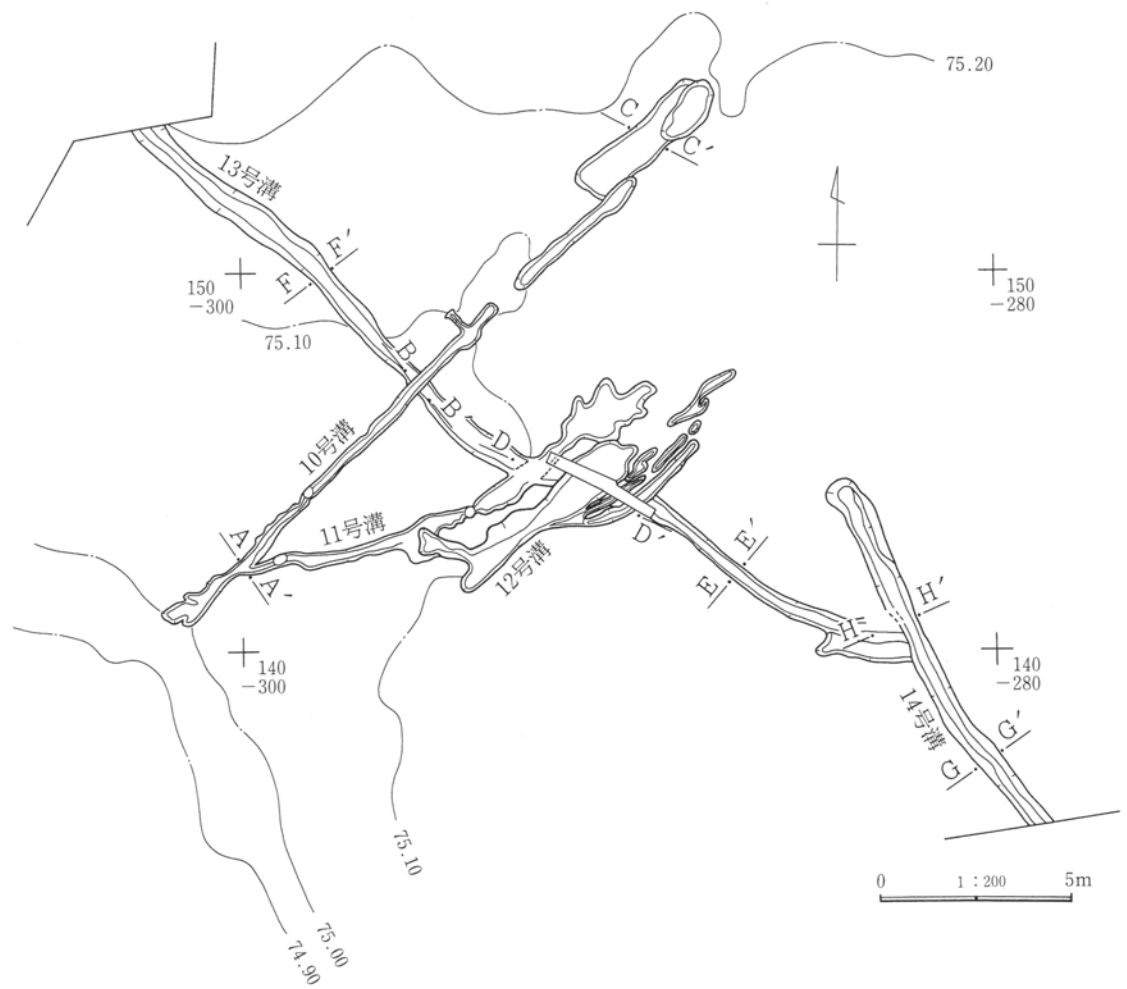
cmを測る。走向はN-30°-50°-Wで、そのまま北西へ遡って延長すると、F区2号溝と直交する位置関係にある。埋土は灰黒色シルト質砂で、E区5号溝やF区新2号溝のようなラミナ状の互層はみられない。出土遺物はない。なお分岐した小溝は直交方向に短く延びており、これは水田区画に沿っていると考えてよからう。

H区13・14号溝 (第213図 P L.80) はG区5号溝に東方20~25m離れて検出された。上幅は90~40cm、深さ20cm前後で底面レベルの差はほとんどない。13号溝はN-50°-70°-W、14号溝はN-30°-Wに走る。14号溝は13号溝を切っていることから後出の重複関係にあったことが知れるが、埋土はいずれも褐灰色シルトが堆積する。出土遺物はない。なお、H区13号溝と直交してH区10・11・12号溝が重複するが、いずれも13号溝よりは新しい。H区10号溝は上幅40cm前後、深さ10cm弱と浅く、中間地点で70cmの長さで途切れる部分が見られる。規模や走向から水田跡に伴う水路と考えられるが、この途切れた箇所は畦の分岐点であった可能性が考えられる。走向からはH区13号溝やG区5号溝とともに、同じ水田区画を形成していた可能性があるが、埋土が褐灰色シルトではなく13号溝を切っていることから、複数回にわたる畦畔や水路網の付け替えが行われたと考えられる。なお、11・12号溝は複数の不整形溝が等高線に直交して北東から南西方向に走るもので、人為的な水路というより、洪水等にもなう自然の流水痕と考えたい。

H区5号溝 (第214・215図 P L.81) は、現行道路によって分断された北側調査区のH区42号溝ないし43号溝と連続する。ここでは便宜的にH区5号溝で代表させる。これは北西端から約80mにわたって直線的にのび南東端で南方に屈曲する。走向はN-50°-W。上幅は2.5~1.0mで、深さ40cmを測る。埋土は下層に耕土の流れ込みと思われるローム塊混土、その上に褐灰色シルト層が堆積する。上層に暗灰褐色土と黒褐色土が堆積した段階で完全に埋没したらしい。耕土の流れ込み(土層断面図の5層)は

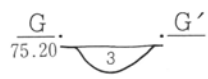
北東側に偏って堆積していることから、溝の北東側(左岸)に畦が造成されていた可能性がある。H区5号溝とH区13号溝とは並行しており、その間隔は20mで、H区13号溝とG区5号溝の間隔とほぼ等しい。遺物は、底面附近から7世紀後半~8世紀初頭の杯(第215図-1・2)など、埋土のシルト層中~上位からは8世紀後半~9世紀代の杯・椀など(第215図-3・4・6・8)が出土している。なお、北西端で検出された**H区42・43号溝**は並行して走っており、規模や断面形状からは42号溝がH区5号溝にそのまま連続すると考えられる。43号溝は深さ5cmと浅く、土層断面の観察から両者が同時存在したとは考え難い。

以上の溝群によって想定される水田区画は、F区新2号溝を主幹水路として、全体に北から南方向に流れる水路網によって灌漑を行っていたと考えられる。水田区画は、南北から40~50°東に振れており、前代の古墳時代I・II期水田や次代の古代II期水田(As-B下水田)とは異なる。畦畔が検出できなかったために、内部小区画の大きさや形状については不明であった。想定される水田跡の上限時期は、6世紀初頭のHr-FA以後になり、E区5号溝やF新2号溝・H5号溝から出土した杯等の年代観から、7世紀後半から8世紀前半には間違いなく営まれていたと考えられる。そして洪水起源と目される褐灰色シルトの一次堆積によって埋没したのではなく、その後も復旧によって営まれ続けたことがH区10号溝の存在によって推測される。また、H5号溝に堆積するシルト層中から9世紀はじめの杯が数点出土することから、この時期までは古代I期水田として継続した可能性を考えておきたい。



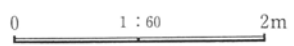
- 1 黒褐色土 灰色シルト塊を含む。
- 2 灰褐色土 地山層。

- 1 黒褐色土 灰色土塊を含む。11溝埋土。
- 2 暗褐色砂質土 12溝埋土。
- 3 灰褐色土 榛名ニツ岳パミス含む。

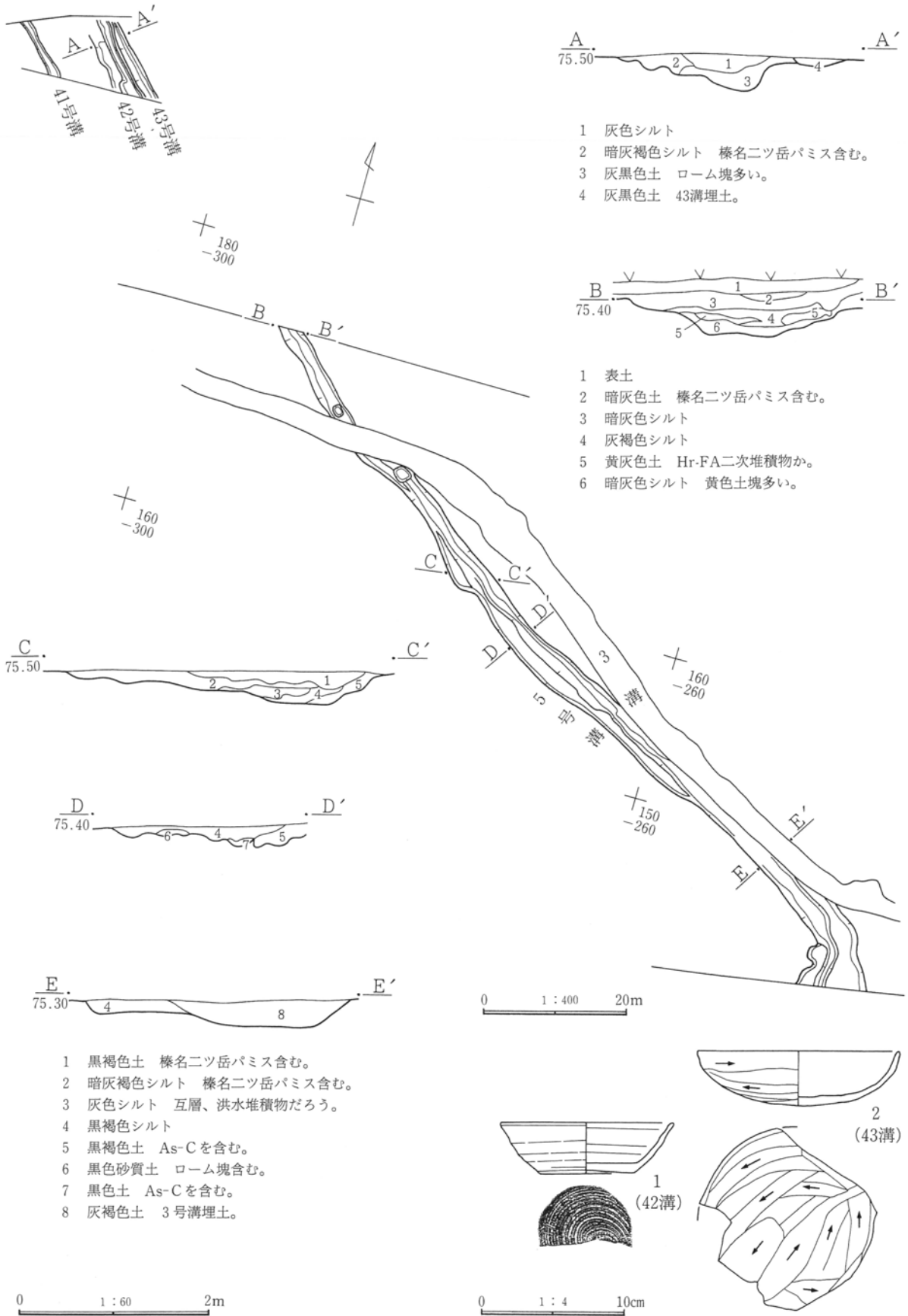


- 1 灰褐色土 榛名ニツ岳パミス含む。

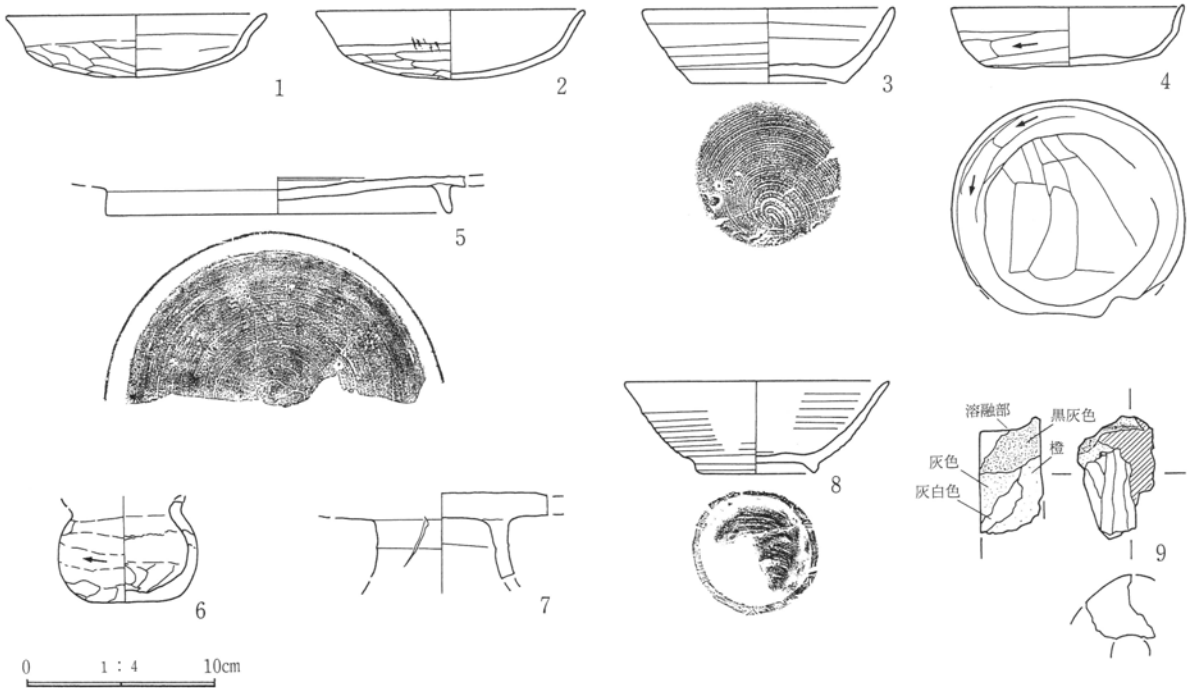
- 1 灰褐色土 As-Bを少量含む。
- 2 灰黒色土
- 3 灰褐色土 榛名ニツ岳パミス含む。



第213図 H区10・11・12・13・14号溝



第214図 H区5・41・42・43号溝及び42・43号溝出土遺物



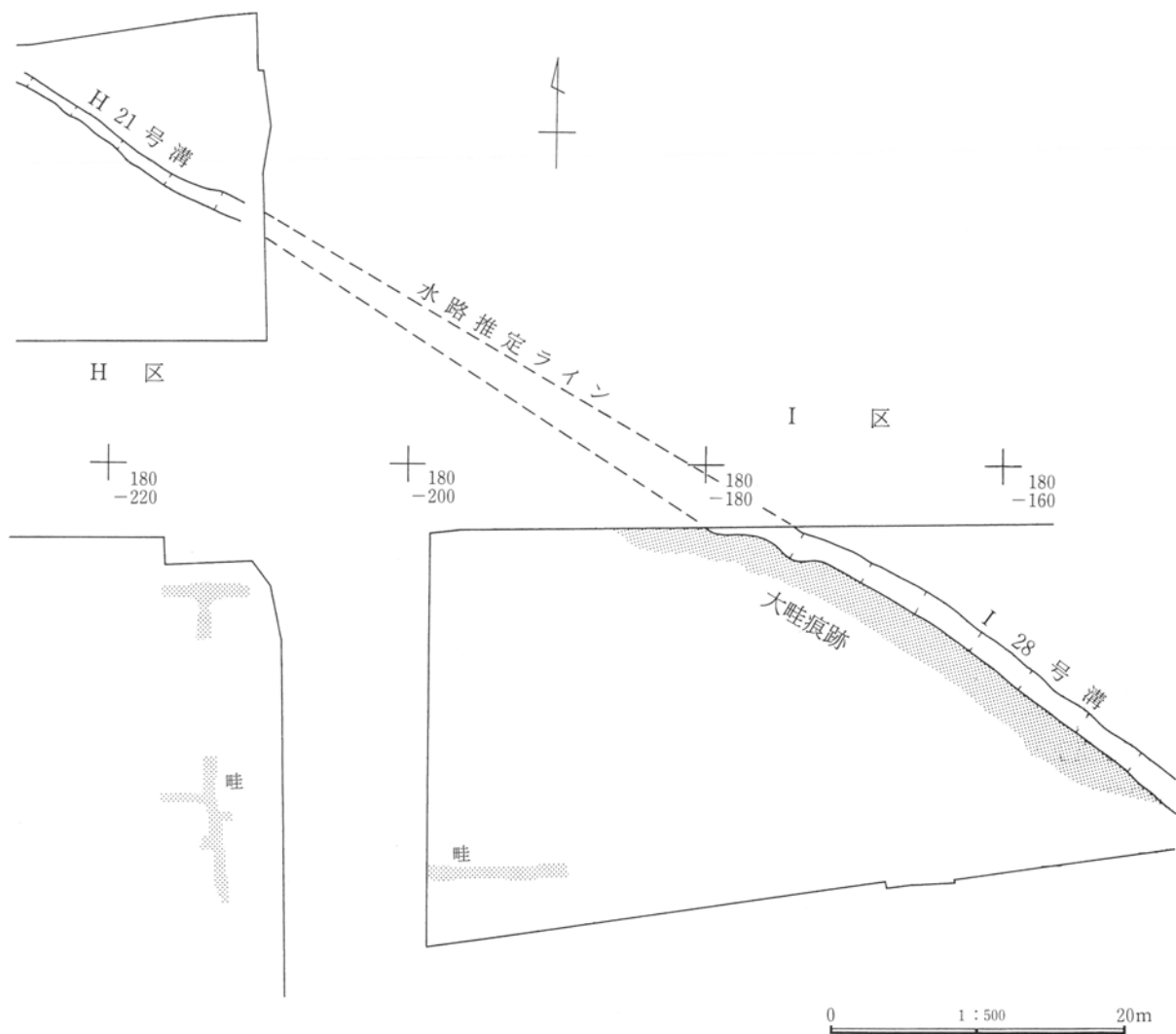
第215図 H区5号溝出土遺物

古代II期水田と水路

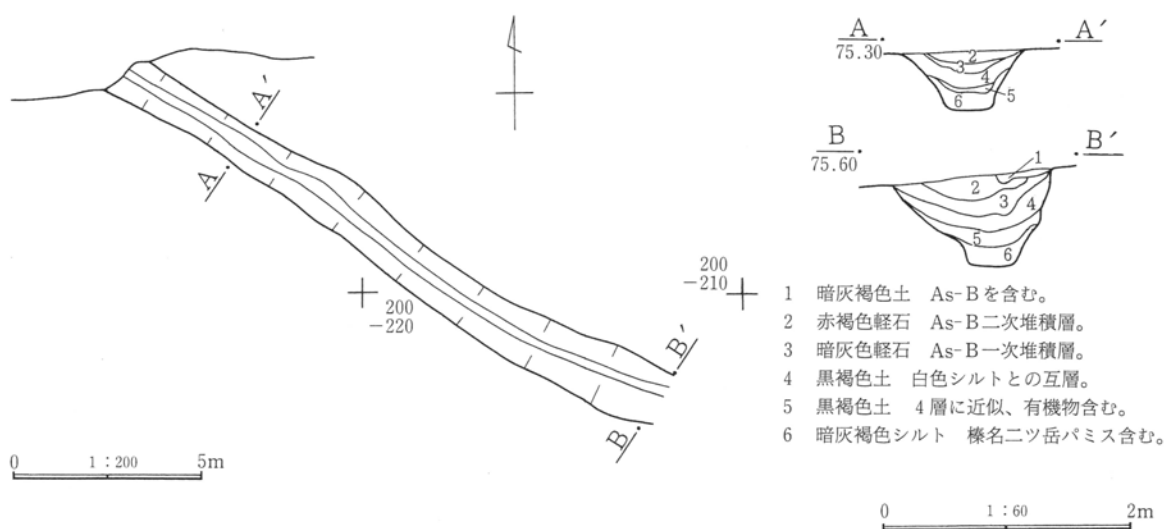
浅間山火山灰As-B（天仁元年、1108年）に直接覆われた水田面と溝群を古代II期水田及び水路として扱う。検出された範囲はA～I区に及ぶ。B・F・H・I区では後世の攪乱等によってAs-Bの堆積状況が不良のため、明瞭な畦畔は検出できなかった。調査対象範囲の最東端にあたるI区東半からJ区にかけては藤川右岸の微高地にあっており、主に居住域として利用されていることから、水田はなかったと考えていだろう。

H区21号溝とI区28号溝（第216～219図 PL.82・83）は、調査区によって区切られているが、本来同一の溝である。これは調査区で検出された古代II期水田の東限を画する水路と考えられる。この溝を境にして東側は緩い傾斜で南東方向に延びる微高地となっており、西側はほぼ平坦な低地となっている。溝の走る地点については微高地の傾斜面にあたるため、As-Bの堆積状況が不良で当時の地表面は検出されていない。中世以降の耕作等による攪乱を受けているのは間違いなく、溝上位部分は不明である。遺構の確認は溝内に堆積したAs-Bによって判明し

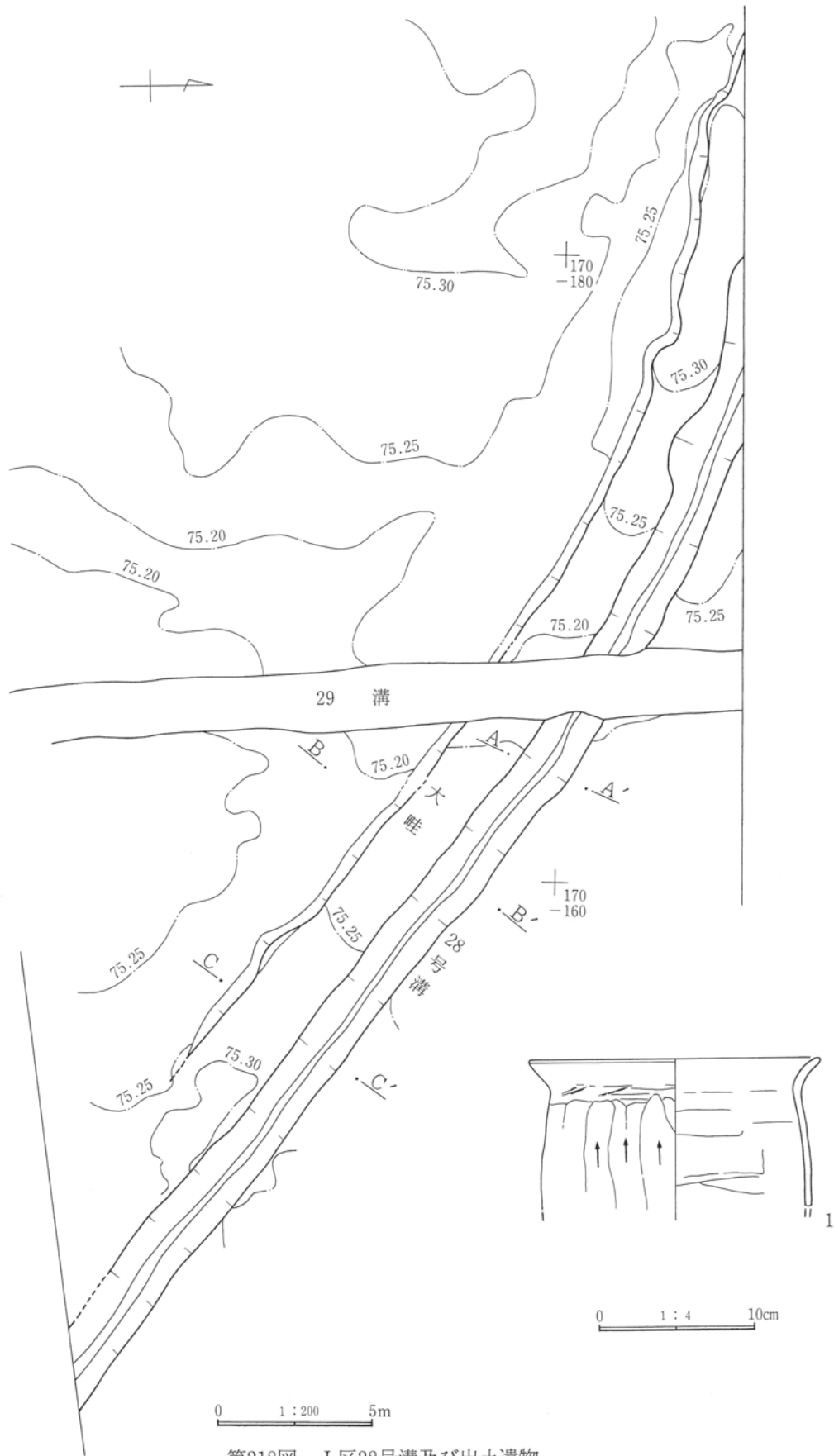
た。検出された溝の総長は約100mで、走向はN-52°-Wを指す。上幅は1.9m、深さ70cm前後を測る。底面標高は74.55～74.60mで、検出された部分においては底面レベルの標高差はほとんどみられない。断面形状は整った逆台形で、底面はやや深くえぐれている。北西から南東へ緩傾斜する周辺地形から、水流は南東方向へ向かったと考えられる。また溝の右岸にそって堤状の高まりが検出された。これは、古代II期水田耕土と同質の土を盛り上げて構築されたと考えられるもので、幅2m前後、高さ10cm前後で上面は後世の攪乱によって失われており、本来はさらに高かったと思われる。検出された上面は平坦であるが、本来どのような断面形だったかは不明である。溝に対してかなり幅の広い施設であることから、溝から西側への溢水を妨げる機能とともに、「畦道」として利用されていたと考えたい。ただしその証拠ともいえる硬化面などは確認されなかった。溝埋土は下層に40cmほどの厚さで有機質を含む黒色土、上層にAs-Bの一次堆積物が覆う。さらに、後世の陥没を考えなければ20cm前後のくぼみとして残っており、中世以降の水田耕土に相当するAs-B混土



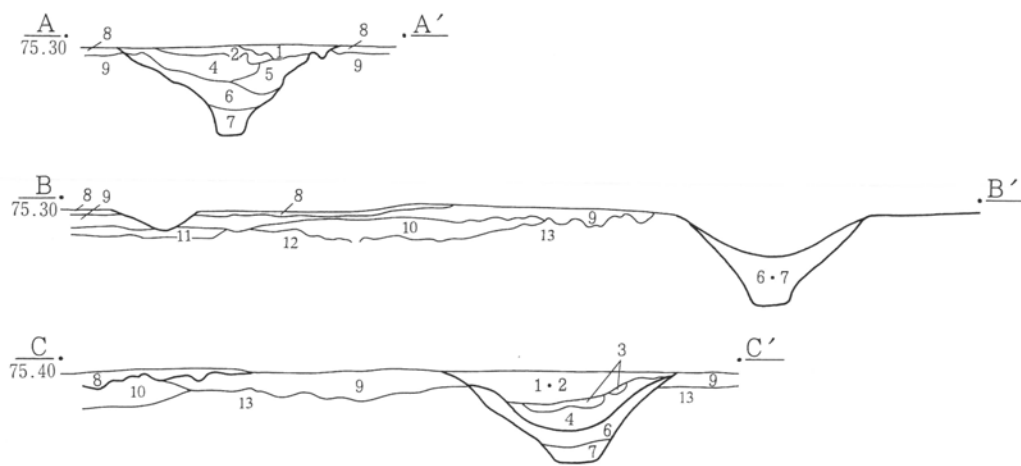
第216図 H区21号溝・I区28号溝とAs-B下水田区画



第217図 H区21号溝



第218図 I区28号溝及び出土遺物



- 1 暗灰褐色土 表土、As-Aを含む。
- 2 暗褐色土 As-Bを含む。
- 3 暗紫色灰 As-B一次堆積。
- 4 灰褐色軽石 As-B一次堆積。
- 5 褐灰色土 灰褐色シルト粒を主とする。
- 6 黒色土 粘性強い、腐食有機物含む。
- 7 灰黒色土 ローム粒含み、粘性強い。
- 8 にぶい黄褐色土 水田耕土中の酸化鉄凝集層。
- 9 褐灰色シルト 榛名二ツ岳パミスを含む。
- 10 褐灰色土 ローム粒含む。
- 11 黒褐色土 榛名二ツ岳パミス含む。
- 12 浅黄橙色土 Hr-FAと思われる。
- 13 黒色土 粘性少ない。As-Cはほとんど見られない。

0 1:60 2m

第219図 I区28号溝土層断面

で最終的に埋没する。このことから、As-B降下後本来の規模に復旧されることはなかったものの、水路としての機能は保っていた可能性が考えられる。出土遺物は7世紀後半～8世紀初頭の甕1点で、これが溝に伴うならば開削時期は7世紀代まで遡り、古代I期水田に伴う水路の可能性も高い。なお、本溝の左岸側には堤状の土盛りがないことから、東側に広がる居住域からの排水機能も兼ねていた可能性も十分考えられよう。

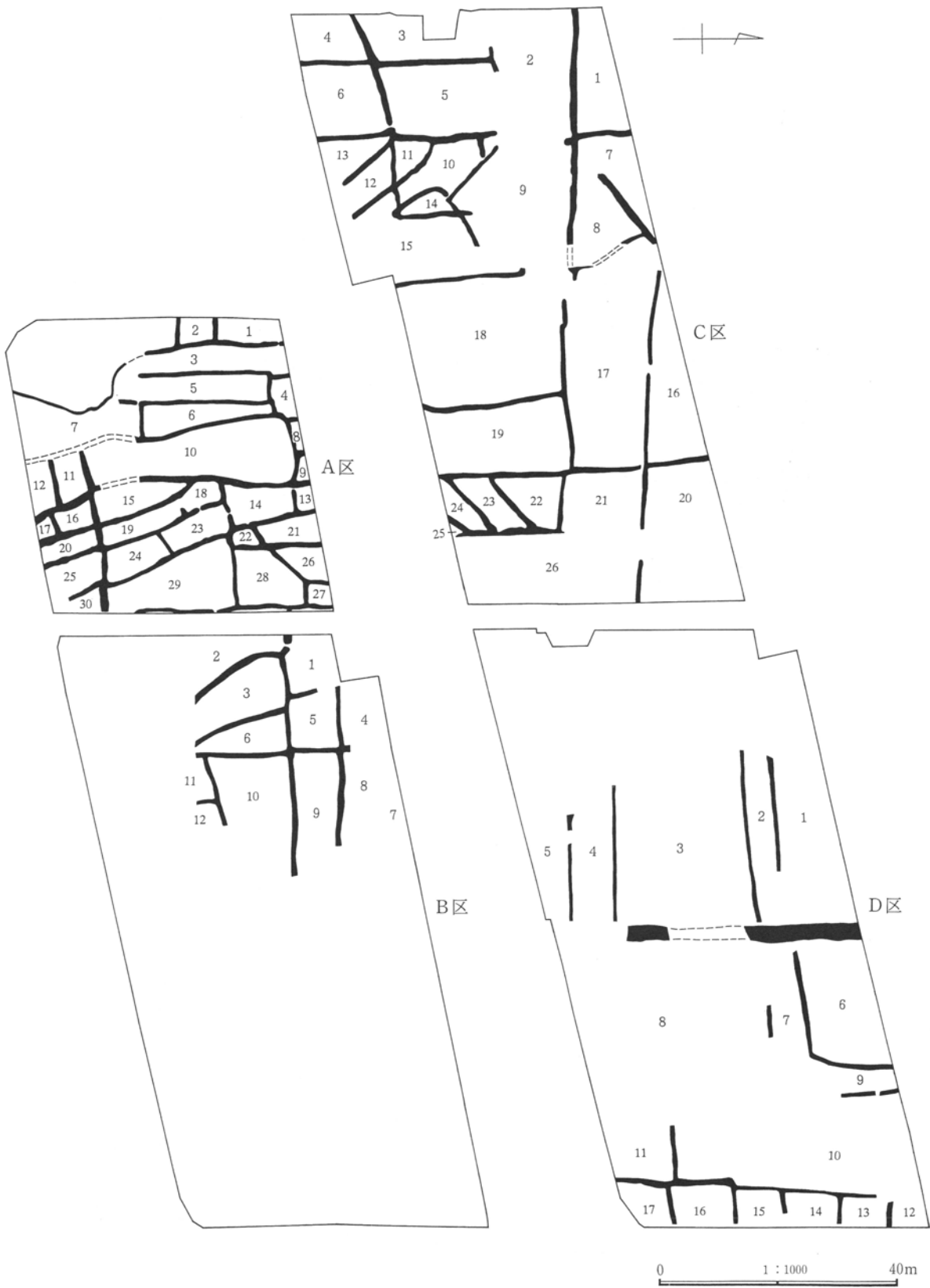
古代II期水田面の検出範囲は、A区からI区にかけて東西870mにわたり、さらに西側に隣接する徳丸高堰遺跡を含めれば900mを越える。畦畔による区画はほぼ正確に東西南北を基準としており、特にD区とG区で検出された南北大畦の間隔は約330m

で、ほぼ三町分(一町109mとして)にあたる。東西方向の大畦はB・C区で痕跡が検出され、その延長線はD区の南北大畦に直交する。大畦による大区画の内区は長方形を基準とした区画がなされるが、その規模と形態は微地形を反映してか、各区によって微妙に異なり、かならずしも画一的ではない。特にA区における縦長(ここでは便宜的に南北方向を「縦」、東西方向を「横」と別称する)と不定形の小区画、E区における横長で整った大きめの区画のあり方が好対照である。なお、水田にともなう主水路は前述のH区21号溝・I区28号溝のみで、他に畦に沿った小規模な溝がみられる。

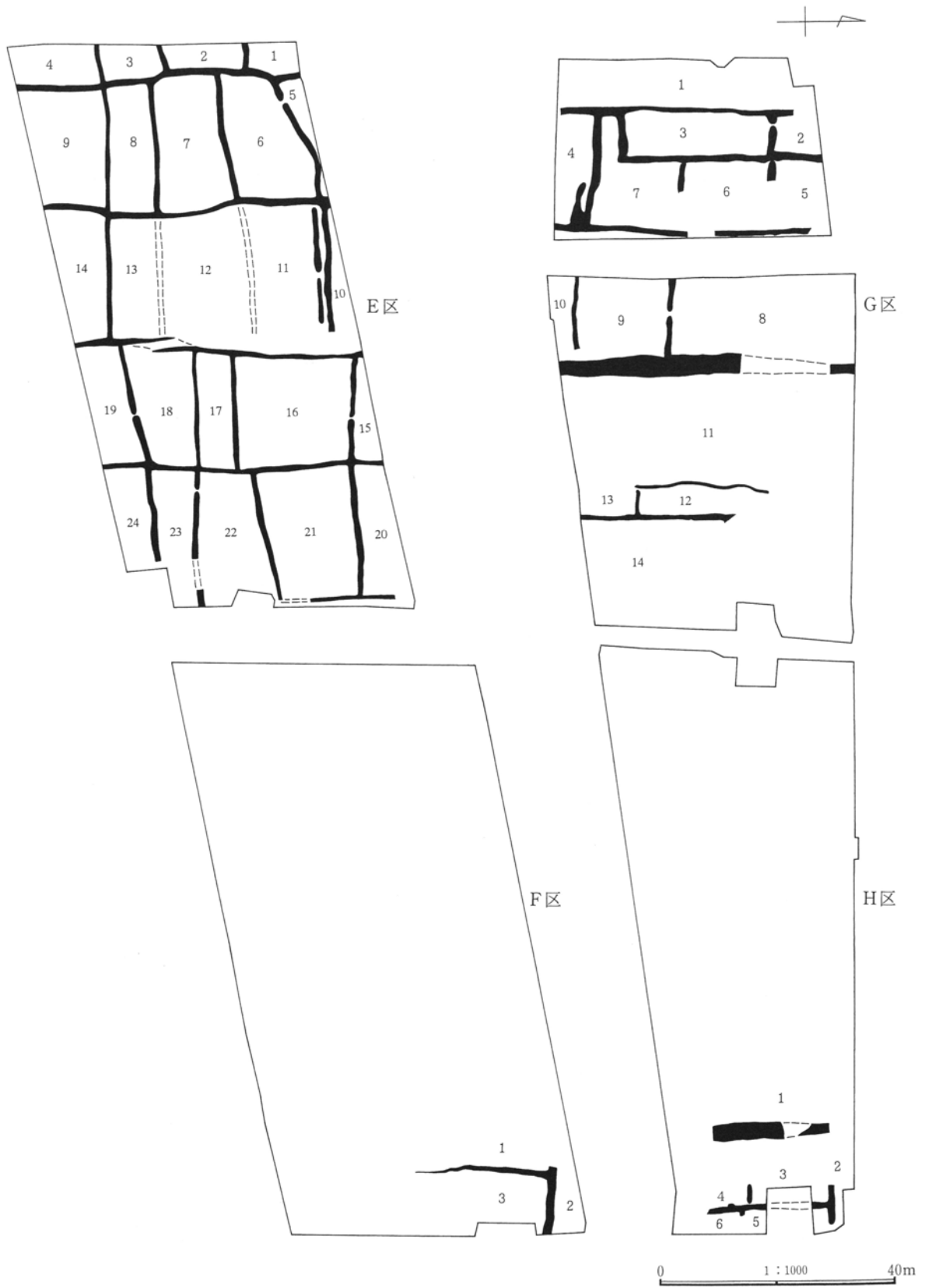
水田区画に関する数値データは第6・7表に譲り、各区毎の古代II期水田の状況について述べる。

第220図 古代II期水田 s = 1/2500





第221図 古代II期水田A~D区概念図



第222図 古代II期水田E~H区概念図

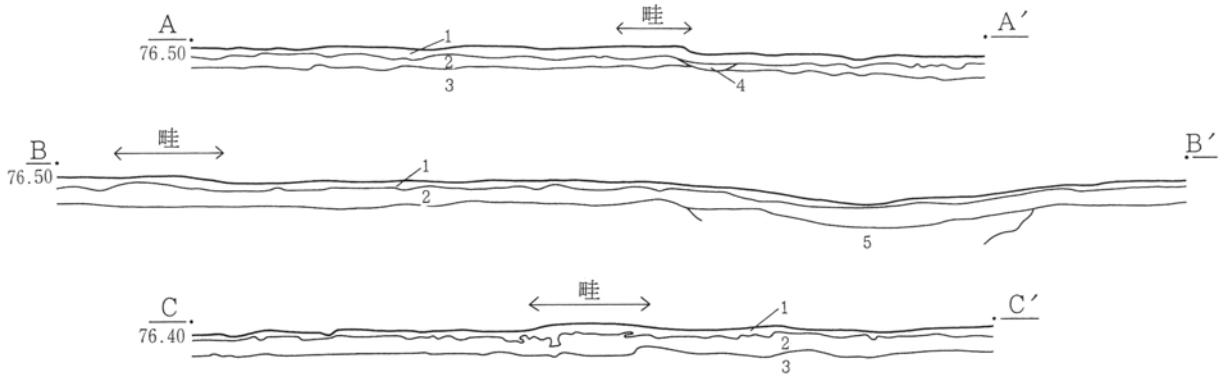
A区の古代Ⅱ期水田(第221・223図 P L84~86)

約50m四方の調査範囲内全域で検出された。西側に微高地が迫っており、わずかに傾斜する地形である。畦や田面の遺存状況は比較的良好であった。畦畔は、南北方向及び西にやや振れた南北畦と、N-80°-Eに振れた東西畦で構成される。畦の幅は80cm前後で、高さは遺存状況の良いもので5cmを測る。南北畦は北半では南北、南東半ではN-23°-Wに傾き、区画は南北方向に長い長方形か台形を呈する。このため、整った方眼区画とはならず、おそらく南西部に張り出した微高地縁辺地形の制約をうけた結果と思われる。なお、この微高地縁辺部はすぐ東に隣接する田面より5~7cm高くなっており、この段は蛇行して北側の南北畦に続くと思われる。この段の上面も水田化されていたかは不明である。ただし、この段が比較的明瞭であることから、人為的に削りだして水平な田面を造り出した可能性が高い。区画の大きさは、南北畦間が5m、東西畦間が22m及び11mを基準とするらしく、部分的に東西畦や斜方向の畦で区切ってさらに小規模な区画とする。水口は1区画→3区画、5区画→7区画、13区画→14区画、14・18区画→23区画、15区画→19区画→24区画と配水するように設けられている。このことから、A区における田面配水は西から東及び南方向に行われたことがわかる。田面の標高は北西端の最高位で76.6m、最低位の東端で76.3mを測る。この比高差30cmを東西方向で8~9区画に分割していることから、隣接する田面の比高差を5cm以下になるよう配慮していたことが窺える。なお、15区画→19区画→24区画と通る水口を結んで浅い溝が設けられており、この三区画の配水を効率的にする必要があったものと推測される。同じように、5・6区画の西側南北畦に沿って浅いくぼみ状の溝が走っており、南北方向の配水に気を遣った結果と考えていいだろう。また、A区東端で南北方向に走る浅いくぼみがみられるが、これは下層に存在する古墳時代前期の9号溝が陥没した結果であり、古代Ⅱ期水田経営時にはフラットであったと思われる。東端にあたる29区画は調査時

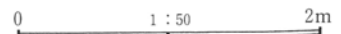
点での田面レベル差が15cmと大きいのが、区画自体が比較的大きいのは当時の田面レベルがほぼ水平だったためだろう。なお、田面には10~20cm大の浅いくぼみが全体にみられ、一部ではヒトと推定される足跡も認められるが、大部分は性格不明とせざるを得ない。A区における耕土は洪水起源と思われる暗灰色シルト層であり、層厚は20~15cmで、表層の5cm前後が粘性の強い黒色土になっている。この暗灰色シルト層のうち下位では砂の多い部分がみられ、耕作が及んでいない可能性がある。また、耕土中及びその下位には目立った鉄分凝集層はみられず、鋤床面は確認できない。その他に水田に伴う施設、出土遺物等は認められなかった。

B区の古代Ⅱ期水田(第221・224図 P L87・88)

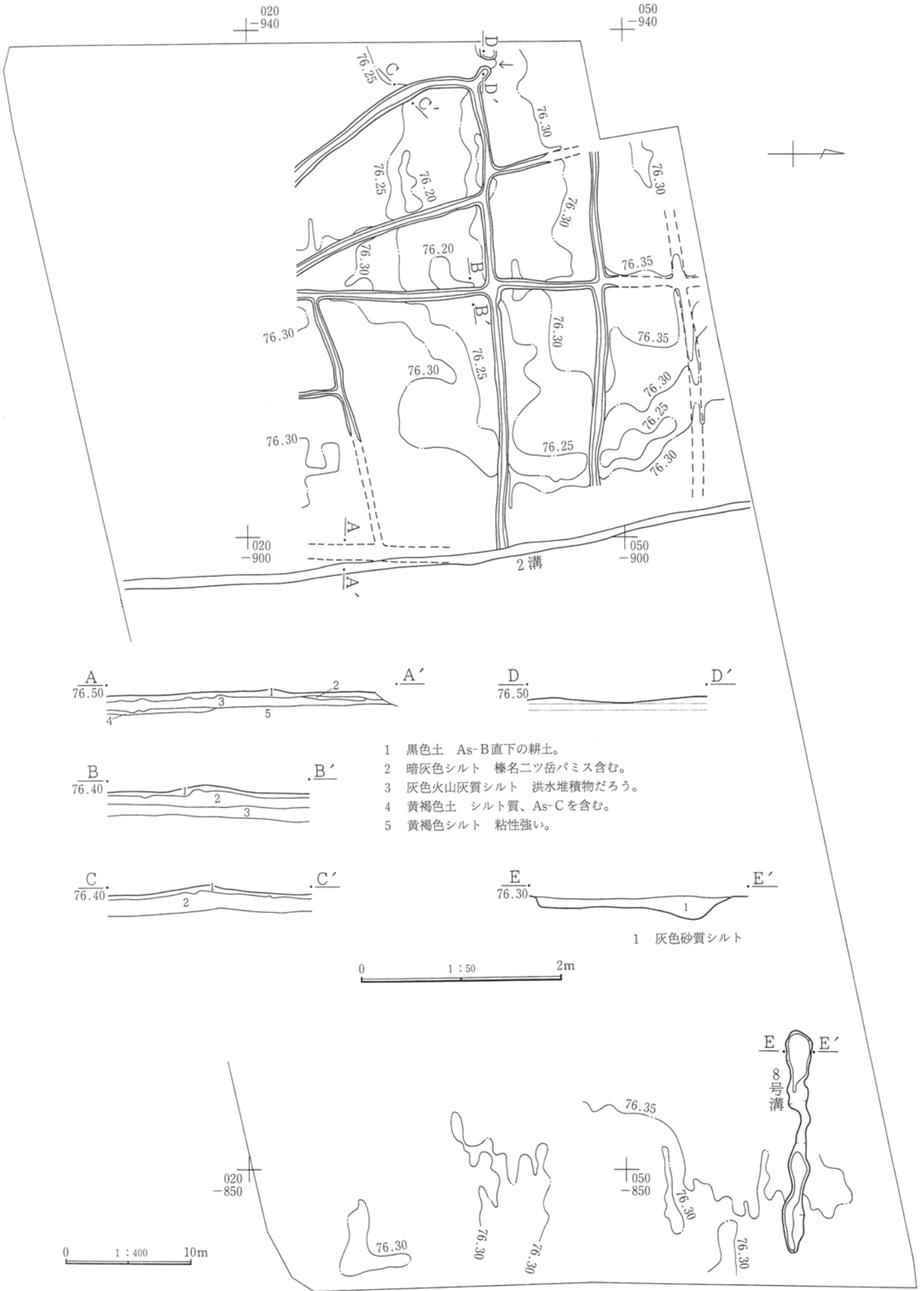
北西部でのみ約1500m²の範囲で水田が検出された。東半部及び南西部はAs-Bの堆積が薄いかほとんど認められないため、当時の田面及び畦は残っていない。南北畦はほぼ南北方向とN-60~75°-Wに傾き、東西畦はほぼ東西方向とN-70°-Eに傾く。畦幅は1m弱、高さは8~10cmを測る。区画は南西の8・9・10区画がA区から連続して、傾斜する台形区画を呈し、それ以外は横長の長方形区画となる。特に3・4・6・7区画は整った長方形となっており、この地点では微地形の影響を受けていないことが察せられる。区画規模は、南北間8.5mないし14m、東西間7・8・9・20m前後とA区よりも区画面積が大きくなっている。田面標高は76.35~76.25mであるが、北から南西にかけて蛇行する浅いくぼみは、前述した下位に存在する古墳時代前期の河川跡の陥没した箇所であり、水田経営時にはフラットだったと考えられる。水口は西端の5区画→8区画と配水する箇所に1箇所確認された。東半部の田面と畦が後世の耕作等による攪乱を受けて確認できなかったこと、耕土上層に相当すると思われる調査面での標高が76.30~76.35mであることから、本来の田面標高は西半部に比べてやや高かった可能性が高い。この想定から、田面配水は西→東ではなく、北



- 1 黒色土 シルト質で有機物含む。古代II期水田耕土。
- 2 暗灰色シルト
- 3 暗灰色シルト質砂
- 4 灰色火山灰質砂
- 5 灰黒色土 As-Cを含む。



第223図 古代II期水田A区



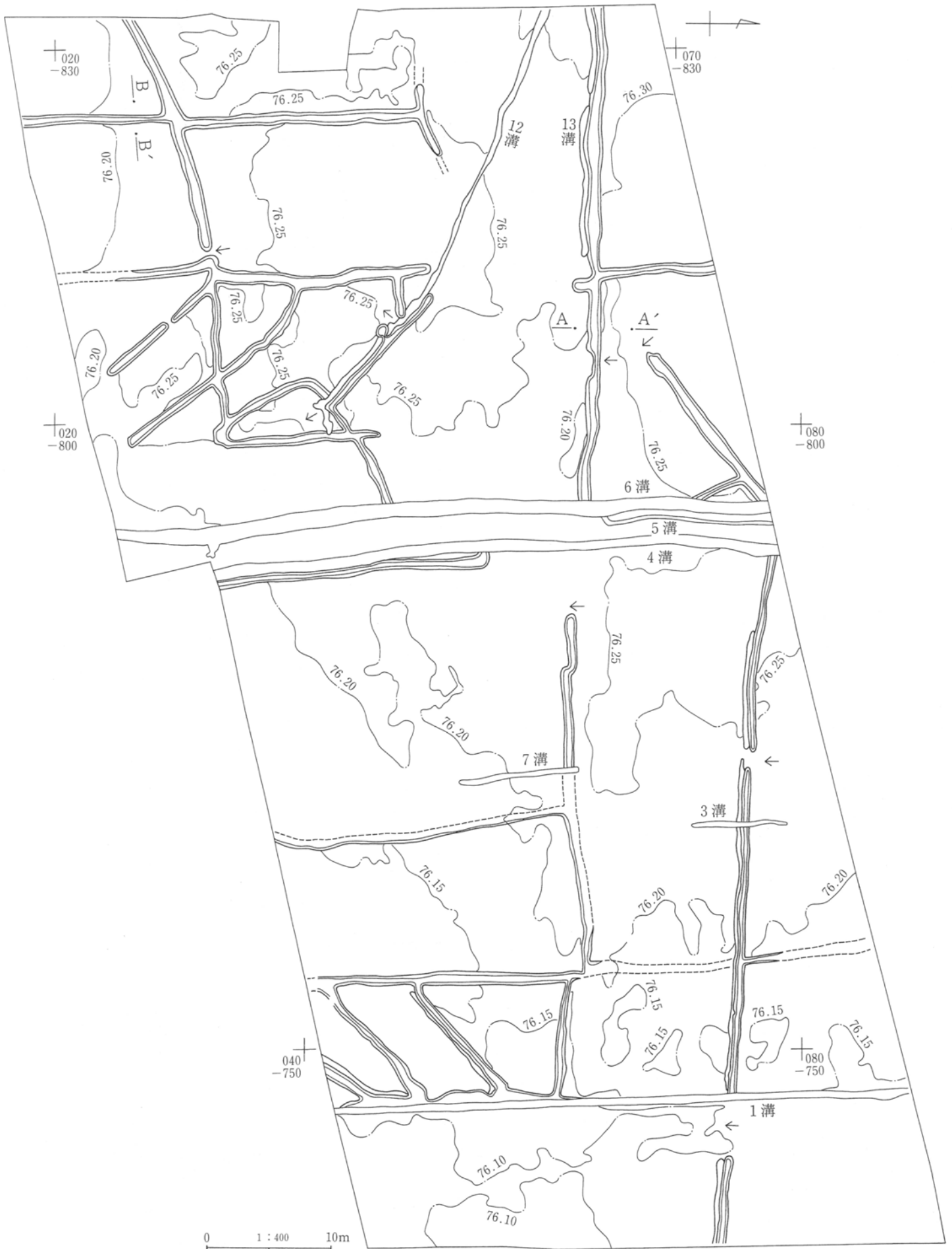
- 1 黒色土 As-B直下の耕土。
- 2 暗灰色シルト 榛名二ツ岳パミス含む。
- 3 灰色火山灰質シルト 洪水堆積物だろう。
- 4 黄褐色土 シルト質、As-Cを含む。
- 5 黄褐色シルト 粘性強い。

1 灰色砂質シルト

0 1 : 50 2m

0 1 : 400 10m

第224図 古代II期水田B区



第225図 古代II期水田C区

→南が主であったと考えられる。B区北東端で確認された東西方向に走る浅い8号溝は、上幅1.95m深さ20cmを測り、水田耕土と同様の土が堆積する。これは東隣するC区で確認された東西方向の畦に沿った溝の延長と考えられる。B区における耕土の状況はA区と同様である。その他に水田に伴う施設や出土遺物は認められなかった。なお、D区で確認された南北方向の大畦から2町分の距離を測るB区のほぼ中央部分で、大区画の基準となるような畦の存在を想定したが、近世の2号溝が走るのみで、痕跡等も確認できなかった。

C区の古代II期水田

(第221・225～227図 P L .89～91)

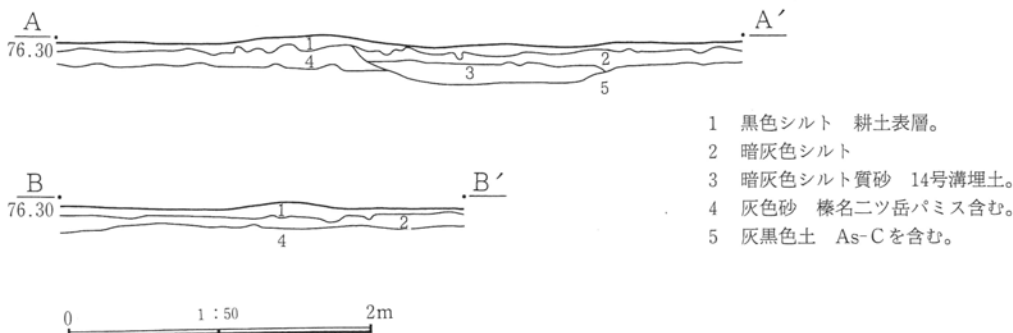
調査区全域で畦と田面が確認された。畦方向はほぼ南北方向の畦、東西方向の畦を基準に構成されている。畦は幅100～80cm、高さは5～10cmを測る。区画は整然とした長方形を基準とし、北半中央部を通る南北畦を境にして北側が横長、南側が縦長の長方形を呈する。7・8区画、10～14区画、22～25区画では斜方向の畦を設けて、さらに三角形・平行四辺形・台形の小区画としている。区画の規模は、南北間14.5・15・20・32m以上、東西間10・12.5・13・20m前後で、北半の横長長方形区画、南半の縦長長方形区画とも長辺が30mを越える区画が存在する。水口は5→6区画、16→17→18区画、25→26区画の配水箇所へ設けられ、全体に北から南方向への田面配水が行われたようである。田面標高は、北西端で

76.3m、南東端で76.2mと約100m間で10cmの比高差をもつ。隣接する区画同士の田面標高差は1～2cmで全体的にはほぼ水平といえる。D区の南北大畦から1町分離れたC区中央部分は、大区画の基準となる南北畦が存在したと想定できるが、中世～近世の溝が集中しており、その存在が確認できなかった。なお、2・9・17・21・23・26区画の北側東西畦に沿って浅い溝が設けられており、配水に配慮した様子がうかがえる。2→9区画へ南東方向にはしる小規模な溝もこれと同様の意味を持つと考えられる。水田耕土下面の調査で、中央部を通る東西畦に沿って14号溝が検出された。これは平面と断面形が不整形で、耕土と同じ暗灰色シルトが堆積する、幅3mに達する浅い溝状のくぼみで、位置関係から、東西畦造成時の掘削痕か、畦脇の溝であったと考えたい(第226図土層断面参照)。他の畦にこのような痕跡は伴わないことから、水田造成時に基準となり、大区画を構成する大畦の痕跡ではないだろうか。

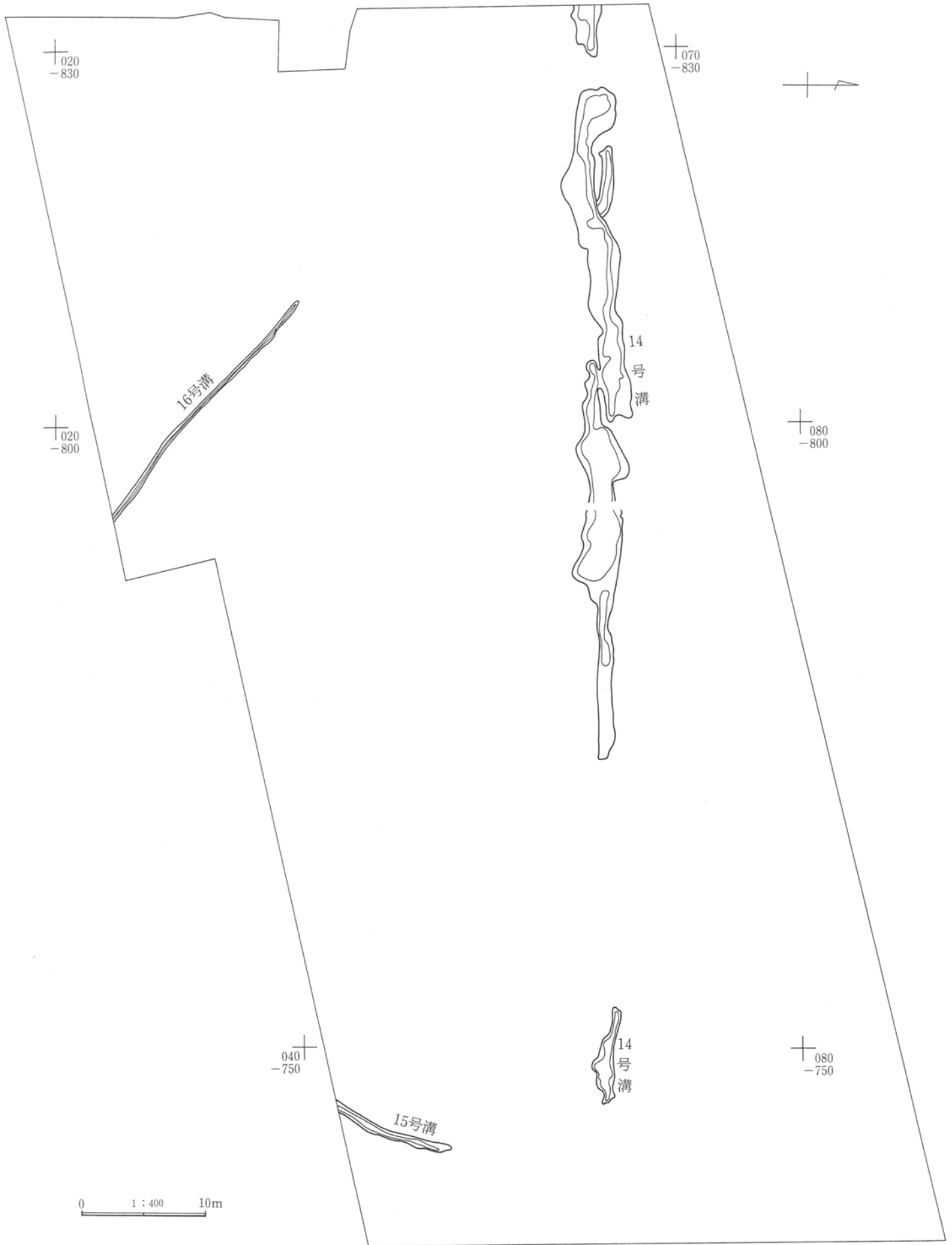
D区の古代II期水田

(第221・228・229図 P L .92～94)

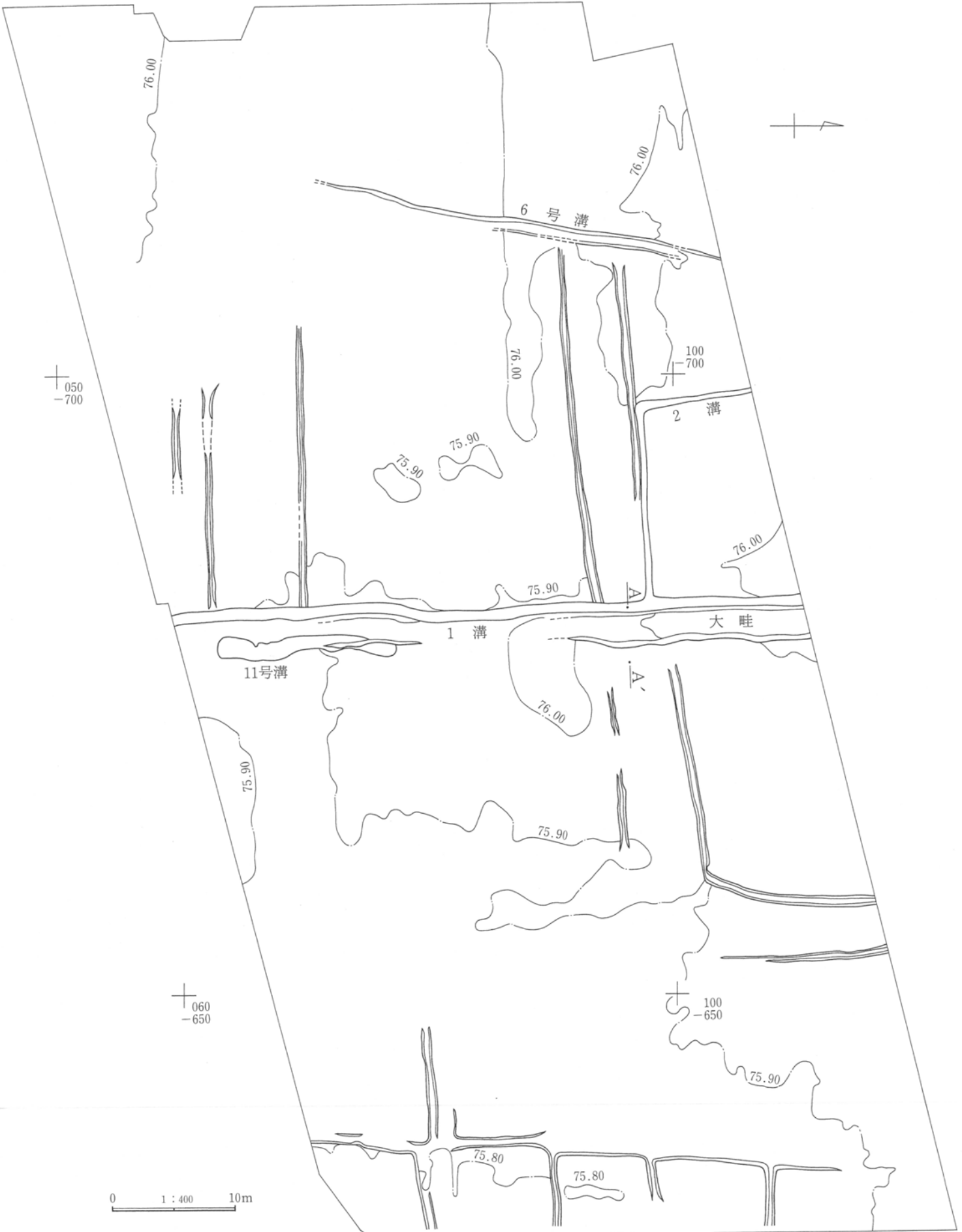
後世の耕作が及んでいるため明確な畦と田面の検出は困難であった。ほぼ東西南北方向に走る畦によって、横長長方形を基準とする区画で構成される。D区中央に南北方向の南北大畦が検出されたことが特筆される。幅は2.8m前後で高さは2cmほどで、上部は削平されている。耕土及び畦下面の調査で、この大畦の東側に沿って、浅い溝状のくぼみである11



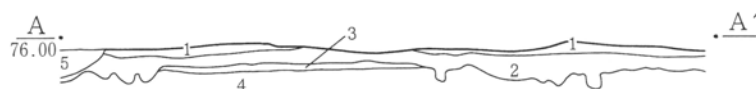
第226図 古代II期水田C区断面



第227图 古代II期水田C区耕土下面



第228图 古代II期水田D区



- | | |
|---------------------|-----------------------|
| 1 黒色シルト質粘土 水田耕土表層。 | 4 暗灰色粘質土 |
| 2 暗灰色シルト | 5 灰褐色土 As-Bを含む。1号溝埋土。 |
| 3 暗灰色シルト As-Cを少量含む。 | |

0 1 : 50 2m

第229図 古代II期水田D区大畦断面

号溝が検出された。この大畦から東方42mの位置に幅1mの南北畦がある。この間をさらに区画した可能性が考えられるが、南北畦は不明であった。一方、横畦は北から順に12・5・24・7mの間隔で確認される。これから、東西に比べ南北方向に小刻みに区画されたことが窺える。東端部では畦の遺存状況が良好で、8m及び10m間隔で東西畦を設けている。水口は不明であった。田面標高は76.0～75.8mで、3区画のような広い区画内では7cmの標高差がある。田面配水は区画の形状と田面標高差から、主に北から南方向に行われたと推測される。なお、耕土に相当する11号溝埋土中から須恵器大甕の頸部片が出土した。

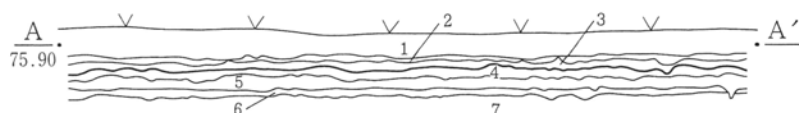
E区の古代II期水田

(第222・230～233図 P L.95～101)

調査区全域から良好な状態で畦と田面が検出された。南北畦はやや緩く蛇行しながらも、ほぼ直線的に延び、東西畦は部分的にN-60～70°-Eに傾く斜方向の畦をまじえている。南北畦の間隔は、西から順に22・26・20・23mとほぼ等間隔を目指した区割りを示し、東西畦の間隔は6・8～12mとばらつきがあり、前者に比べて1/2から1/3の規模で、

隣接する畦同士が段違いになる部分もみられる。このことからE区では南北方向の畦を基準とし、その間を適宜東西畦で区切ることによって構成されたと考えられる。このうち、11～13区画は東西に走る二条の畦状の高まりで、西隣する6～8区画と同様に区分されるが、これは本来的に存在した畦の痕跡で、水田経営の最終形態であるAs-B降下時には東西26m南北36mの大きな区画であった可能性がある。水口は5→6区画、15→16区画、18→19区画、22→23区画の配水箇所のみられる。田面標高は、北西端で75.9m南西端で75.6mと最高30cmの標高差がある。東西方向の区画同士で大きな差はないが、南北方向では南方にいくに従い田面レベルが階段状に下がっている。水口と田面標高差から配水は南方向に行われたと考えて良い。

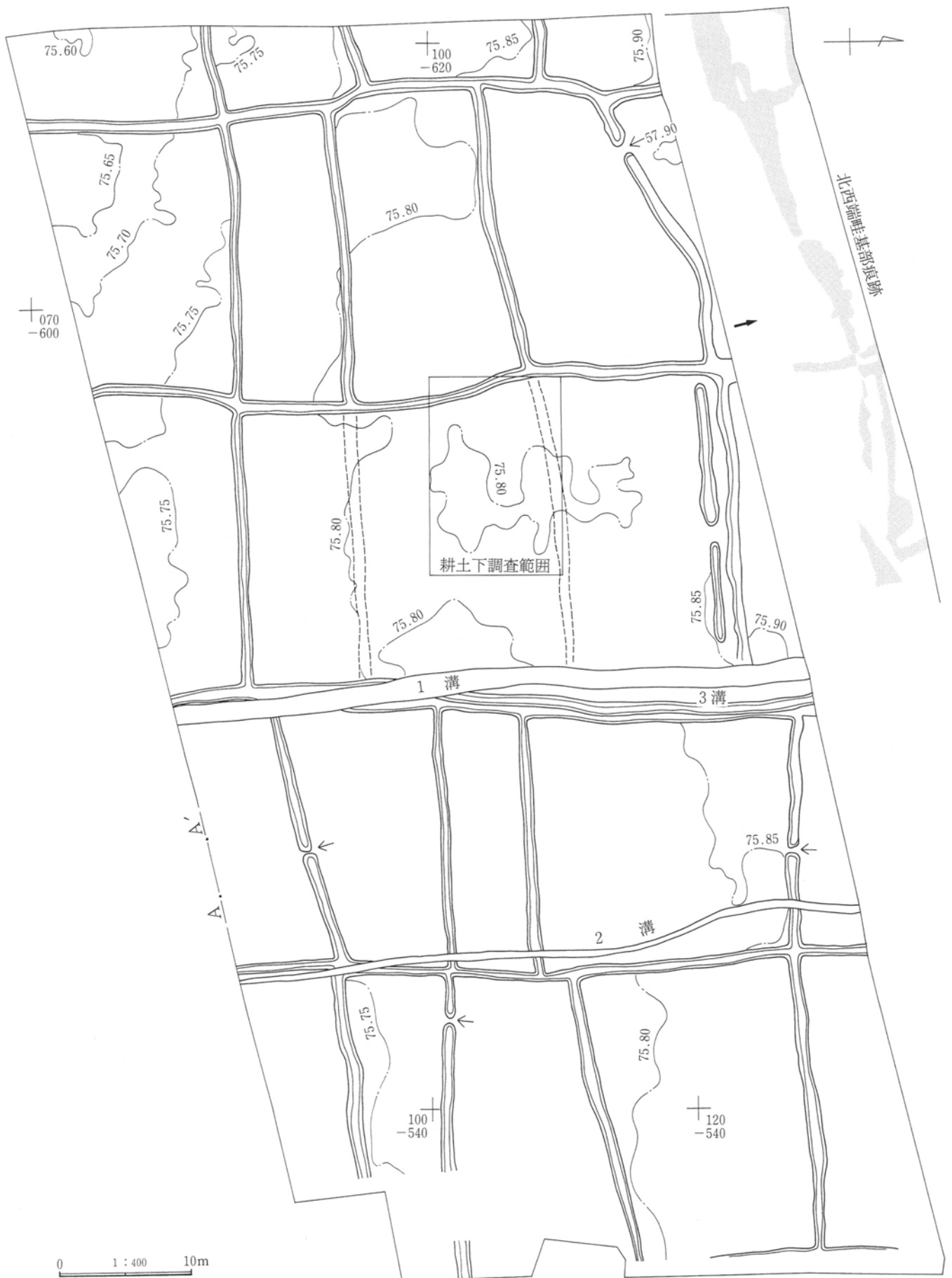
E区では部分的に耕土下面の精査を行い、畦基部の状況及び耕作痕の検出を試みた。北西部の1・5・6・10・11区画の間を走る東西畦の基部調査では、畦の走向そのままに掘り残された地山部分(As-C混黒色土)が存在することが判明した(第231図右上)。これは、対象とした東西畦が途中で屈曲すること、一部で二重構造になることから、水田造成以降に付け替えられた可能性を確認することが目途であ



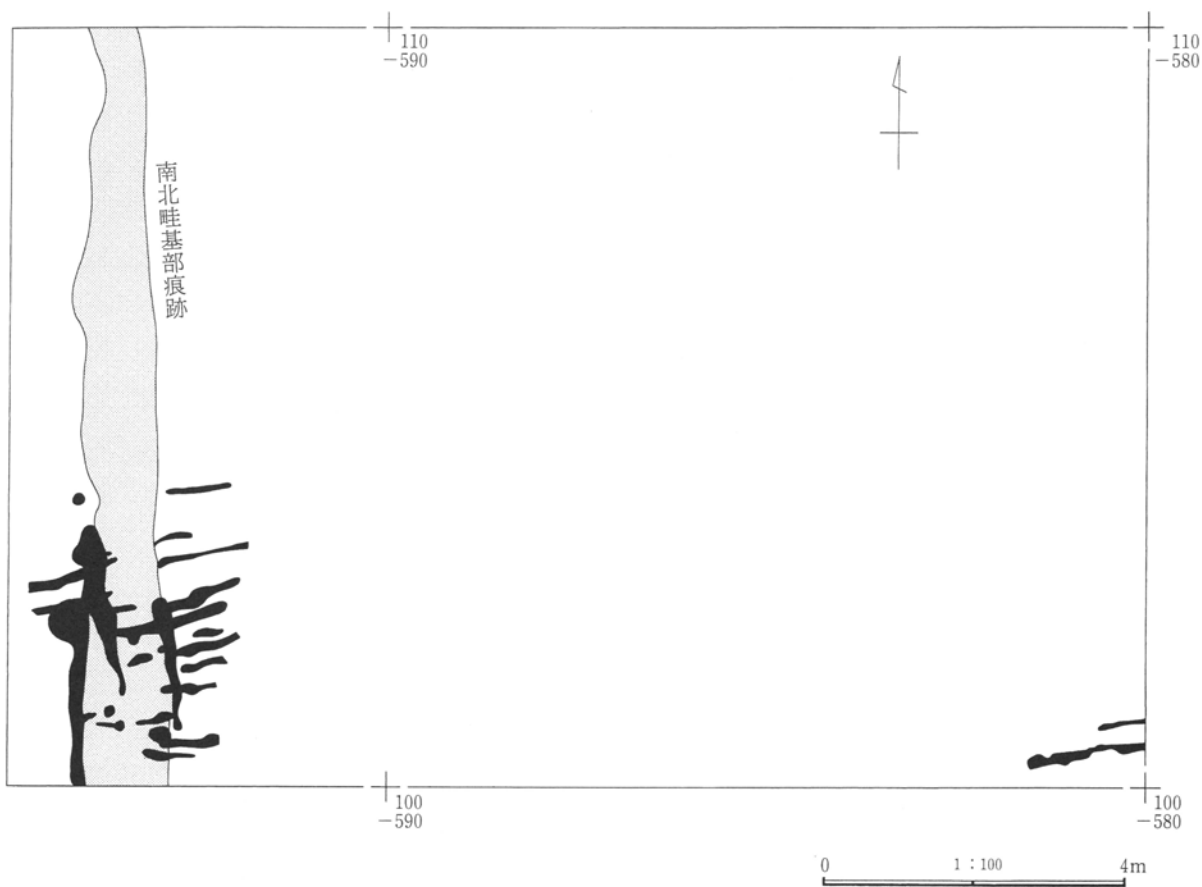
- | | |
|--------------------------|----------------------|
| 1 灰褐色シルト質土 表土。 | 5 灰色シルト 古代II期水田耕土下層。 |
| 2 暗褐色砂質土 As-Bを含む。 | 6 黒色土 As-Cを含む。 |
| 3 灰褐色シルト質砂 As-B主体、酸化鉄凝集。 | 7 黒色粘質土 |
| 4 暗灰黒色シルト 古代II期水田耕土上層。 | |

0 1 : 50 2m

第230図 古代II期水田E区土層断面



第231図 古代II期水田E区



第232図 古代Ⅱ期水田E区耕土下面の状況



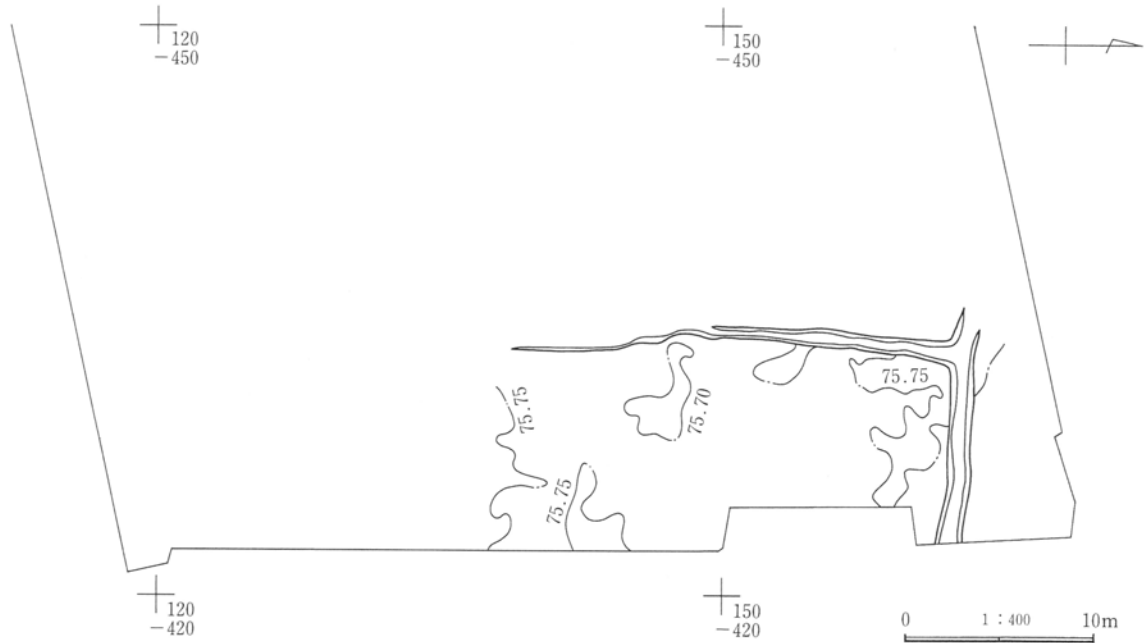
第233図 古代Ⅱ期水田E区(100-580グリッド)耕作痕 (西から)

った。しかし、毎年の荒起こし等の耕作が及べば残るはずのない畦基部が確認されたことは、少なくともこの箇所に関しては、造成当初から検出されたような畦構成であったことを証することになろう。また7区画と12区画にまたがる100-580グリッド、150㎡について行った耕土下面の調査では、東西方向(N-80°-E)に密集して走る細い溝群が全面に検出された(第232・233図)。単一の溝は幅10~30cm、深さ5cm以下で、横断面が箱状・三角形・蒲鉾形等さまざま、縦断面はスパンの長い鋸歯状ともいふべき形状で、断続的に水平に土をすくった痕跡と思われる。不連続な部分もみられ、また溝群が平行線とならないことから「馬鍬」の耕作痕ではなく、人力による鋤あるいは鍬による耕作痕と推測されるが、今後の類例の増加をみて耕具や作業の復元などを再検討する必要を感じる。また南北畦の基部痕との関係では、一部で耕作痕が切っている箇所が認められた(第232図)。畦基部が明瞭に残るということは、毎年行われる耕作が畦を除いて区画内だけで行われたことを示す。これを前提とするならば、畦痕跡を切る耕作痕は盛り土によって畦畔を造成する以前の耕作痕、すなわち水田造成時の痕跡とみることも可能だろう。また、精査区全域にみられた耕作痕についても、例年の荒起こしがほぼN-80°-Eの走向で行われたと想定しない限り、このような平行溝群のあり方は説明できまい。しかも、この角度の微妙な振れが東西畦の走向と必ずしも平行しないことは重要だ。例年行われたであろう荒起こし作業から、ここでみられる耕作痕をうまく説明しえないとするならば、むしろ、この耕作痕はほとんどが水田開墾時まで遡りうるものとの想定も成り立つ。大畦や機軸となる畦の基部が残るのは、造成段階から掘り残したためではなかろうか。特に大畦基部などに攪拌されていない洪水層の堆積が往々にして認められることは、その証左としてあげることができよう。その一方で、本来畦として機能したと考えられる、精査区北辺にそった11-12区画間の東西畦状の高まりの下部には、地山掘り残しによる基部が全く認めら

れず、溝群による耕作痕が展開していることから、耕土の造成以後に盛り土によって造成された畦も存在したのだろう。残念ながら他地点での耕作痕精査を行えなかったために、その分布の広がりについては明らかにし得なかった。なお、精査地点での暗灰色シルト質の耕土層は10~18cmの厚さをもち、下層にはAs-Cを多く含む黒色土層が堆積する。従って、耕作痕が下層の黒色土層にまで及んでいる場合には、この上下層の境界での確認は容易である。暗灰色シルト層が厚い地点では、同質の土層のなかで攪拌された耕作土を識別しなければならないので、現実には不可能に近い。したがって、条件の整った場所であれば耕土下面での調査は難しいが、最終的な姿であるAs-B直下水田面の調査におとらず、開田段階の痕跡をとどめる耕土及び下面の調査により多くの比重をかける必要が有るだろう。

F区の古代II期水田(第222・234図 P.L.102)

調査区の大部分が後世の削平により、As-Bの堆積がみられず、従ってこれに覆われた水田面と畦畔の検出は、東端の限られた部分のみであった。畦の走向はほぼ東西南北にそっており、区画は比較的整った長方形と思われる。北東端にみられる東西畦は幅1.2mで、他の畦と同規模であるが、前述のC区で検出された東西大畦の延長線からほぼ100m離れて北側に平行する。方1町の方眼区画が施行されていたと仮定するならば、この東西畦もその基準となっていた可能性が考えられる。田面標高は75.75~75.70mで、西隣するE区の最も低い南東部にほぼ匹敵する。このことから、検出できなかったF区大部分の田面標高はE区とほぼ同じと推測していいだろう。ただし、東隣するG区が後述のように南北に長い長方形区画であることから、東西に長い区画を呈するE区との中間にあたるF区で区画の変化があった可能性もある。東方への緩い傾斜をもつ地形の影響を受けたと捉えておきたい。



第234図 古代II期水田F区東部

G区の古代II期水田

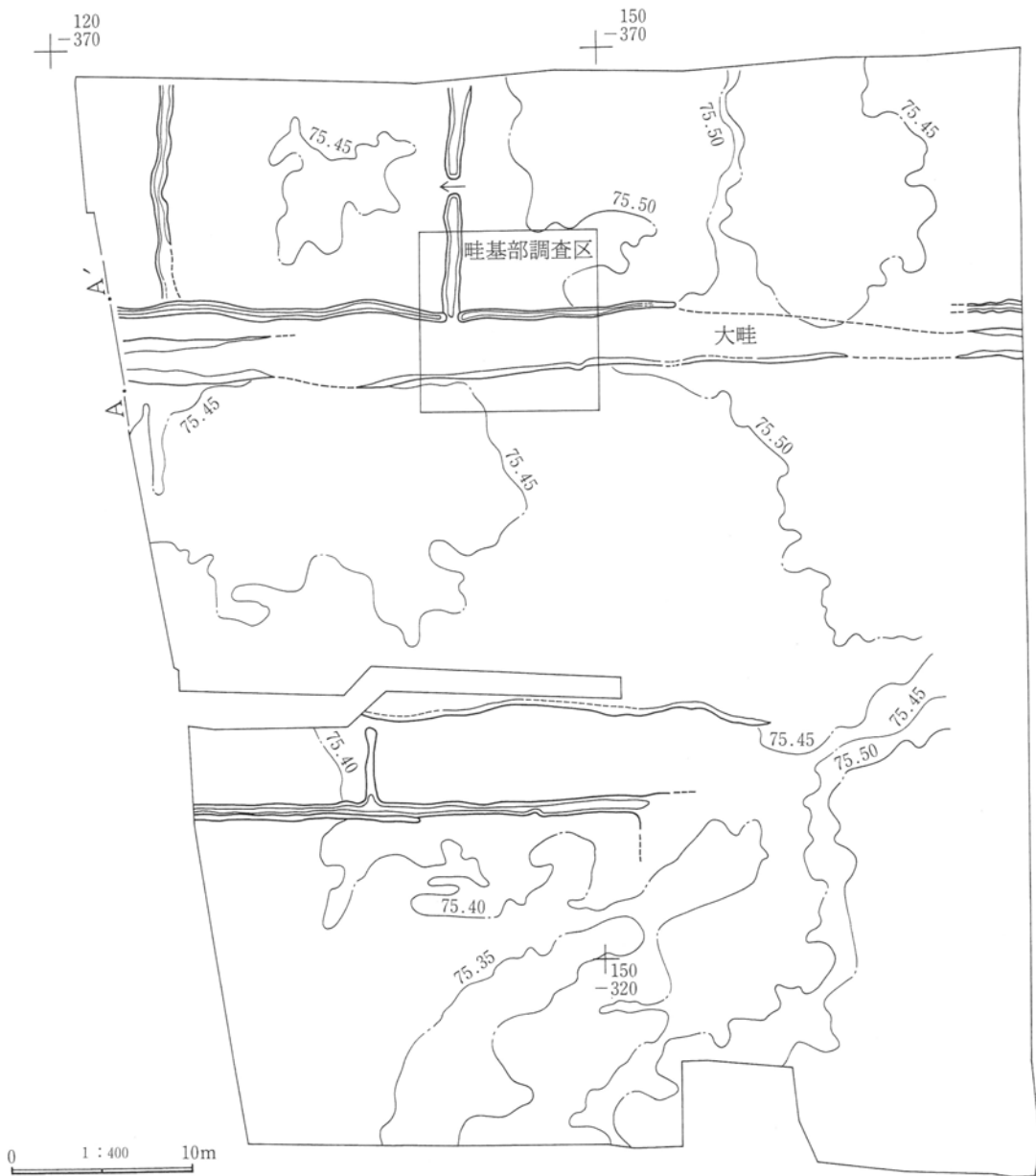
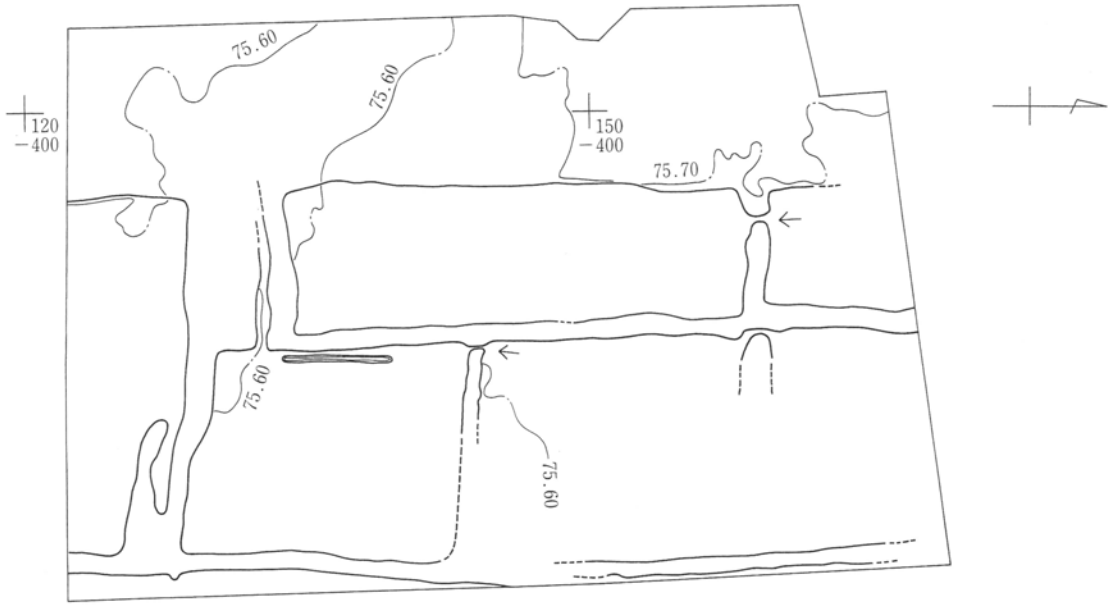
(第222・235～237図 P L .102～105)

As-Bの堆積がきわめて薄いか、後世の削平によって失われている部分が多く、田面と畦の遺存状況は良くない。As-B堆積面の平面精査で、As-Bがみられず地山の黒色土が浮き上がった帯状プランによって、畦の存在が推定できるのみであった。従ってここで検出された畦痕は本来の形状ではない。畦の走向はほぼ東西南北に沿っており、区画は全体的に南北方向に長い長方形を呈する。規模は、東西方向の間隔が西から順に8・12.5・20・20・6mで、基本的にはE区と同様に約20m間隔で南北畦を通し、部分的に細分を行ったと考えたい。東西畦は不明瞭であるが、遺存部分を見るかぎり方眼状に走っており、A・C区のような斜方向の畦はみられない。なお、8区画は等高線の分布状況から東西畦2条によって、同じように14区画では南北方向に三分割される可能性がある。水口は2→3区画、5→6→7区画、8→9区画と東西畦の西寄りないし中央に設けられ、南方向への配水としている。田面標高は、西端75.70m、南東端75.35mと東西約100m間で35cmの

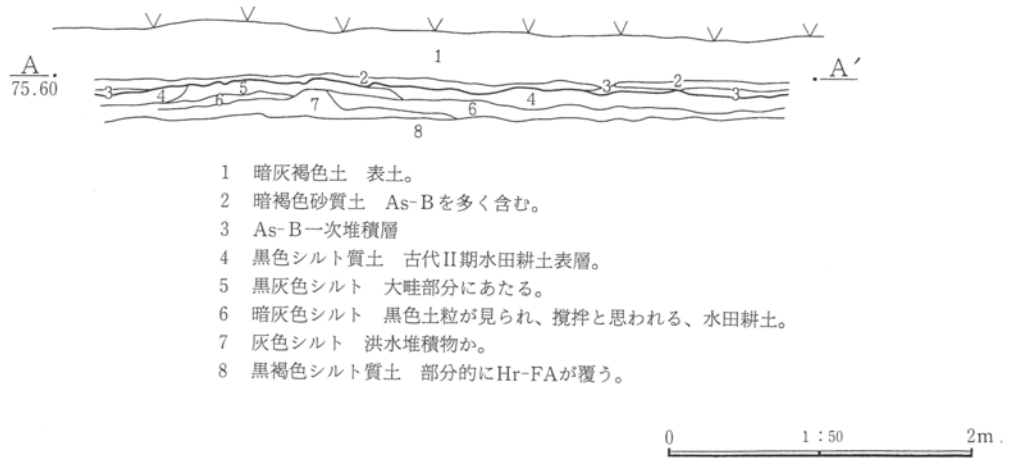
標高差がある。特に南東部分での地形のくぼみが目立ち、中央付近ではほとんどフラットといってよい。G区中央に南北方向の大畦が検出されており、幅2.5～1.8mで西側に浅い水路を伴う。遺存する大畦の高さは10cm弱で、上面は後世に削平された可能性が高く、「道」としての機能を証する痕跡はない。D区の南北大畦との距離は330m(約3町分)で、条里型区画の基準と考えて良い。大畦の基部調査では、畦盛り土のためと推測される不整形の掘削溝のほか、平行する二条の溝が検出された(第237図)。水田の「鋤床」ともいえる耕土下面で幅30～40cm、田面からの深さ10cm前後を測る。このうち大畦から1.5m離れた溝は田面で検出された溝と同一である。このことから、大畦際の溝は造成当初の水路で、後に大畦からやや離して付け替えられたと考えられる。

H区の古代II期水田(第222・238図 P L .106)

地形的に低い東端の部分で薄いAs-Bの堆積がみられ、部分的にであるが田面と畦を検出した。畦の走向はほぼ東西南北で、区画は方形ないし長方形と思われる。南北畦は二条検出され、西側のものは幅



第235図 古代II期水田G区



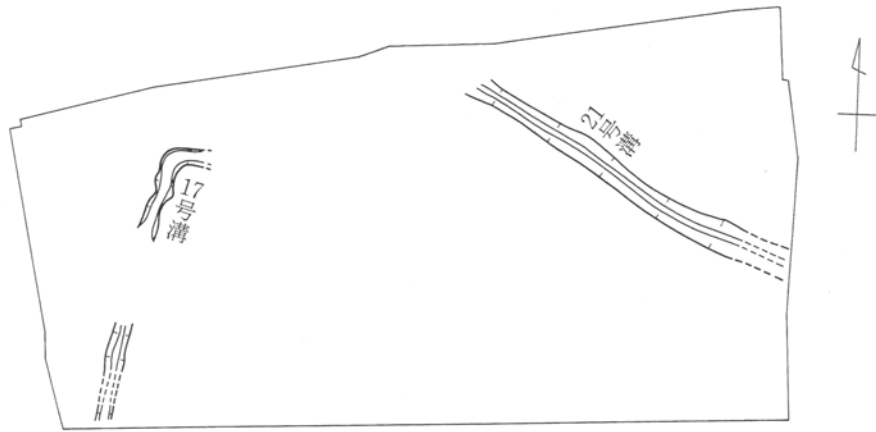
第236図 古代II期水田G区土層断面



第237図 古代II期水田G区大畦基部痕跡

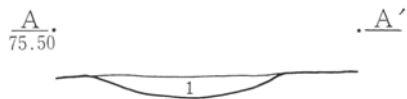
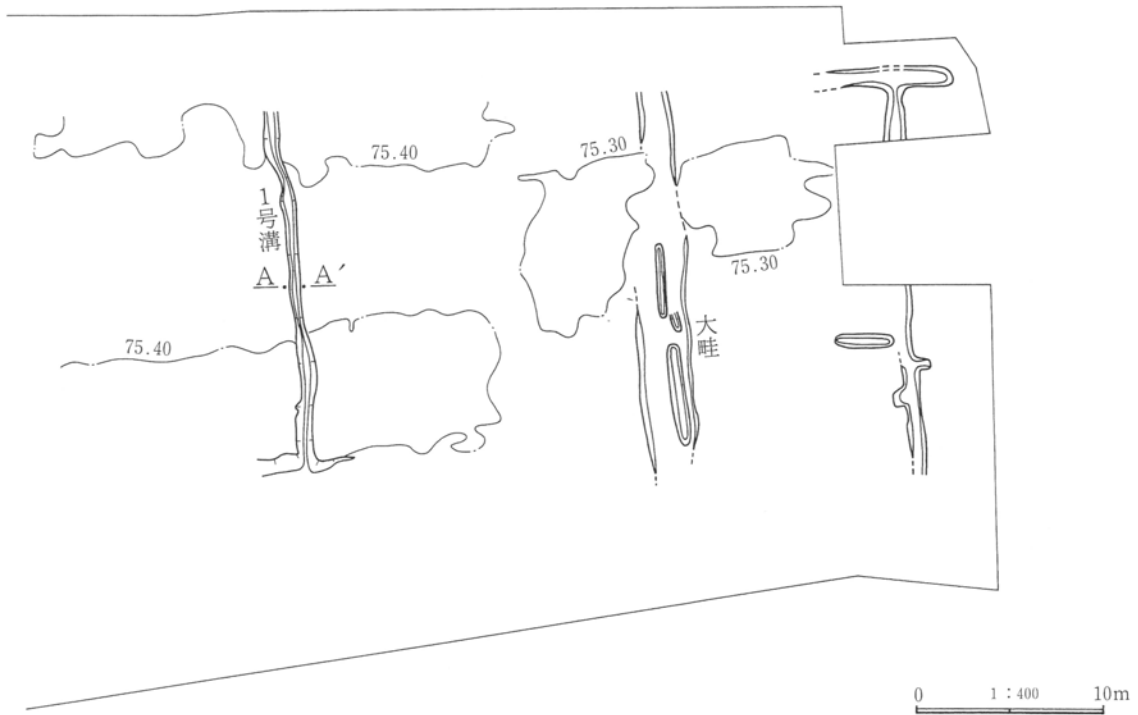
2.8~1.5mを測る大畦である。大畦の中央に断続する溝状のくぼみがみられるが、水路とは考えにくい。東側の南北畦との間隔は13mで、また西隣のG区大畦とは約130m離れる。田面標高は75.3~75.4mで、G区より若干低いといえる。なお、大畦の西側に20m離れて水路とみられる南北方向の1号溝(=17号溝)が検出された。幅50cm、深さ5cmで、一次堆積

のAs-Bによって埋まる。北端では東方に屈折して、主要灌漑水路と思われるI区28号溝に向かうが、近世遺構に切られてこの部分の詳細は不明であった。前述したように、このI区28号溝が古代II期水田の東限を画すと思われる、これ以東では水田遺構は確認されなかった。



180
-250

180
-210



1 As-B一次堆積層

0 1:20 50cm

第238図 古代II期水田H区及び1号溝土層断面

第6表 古代II期水田計測値(1)

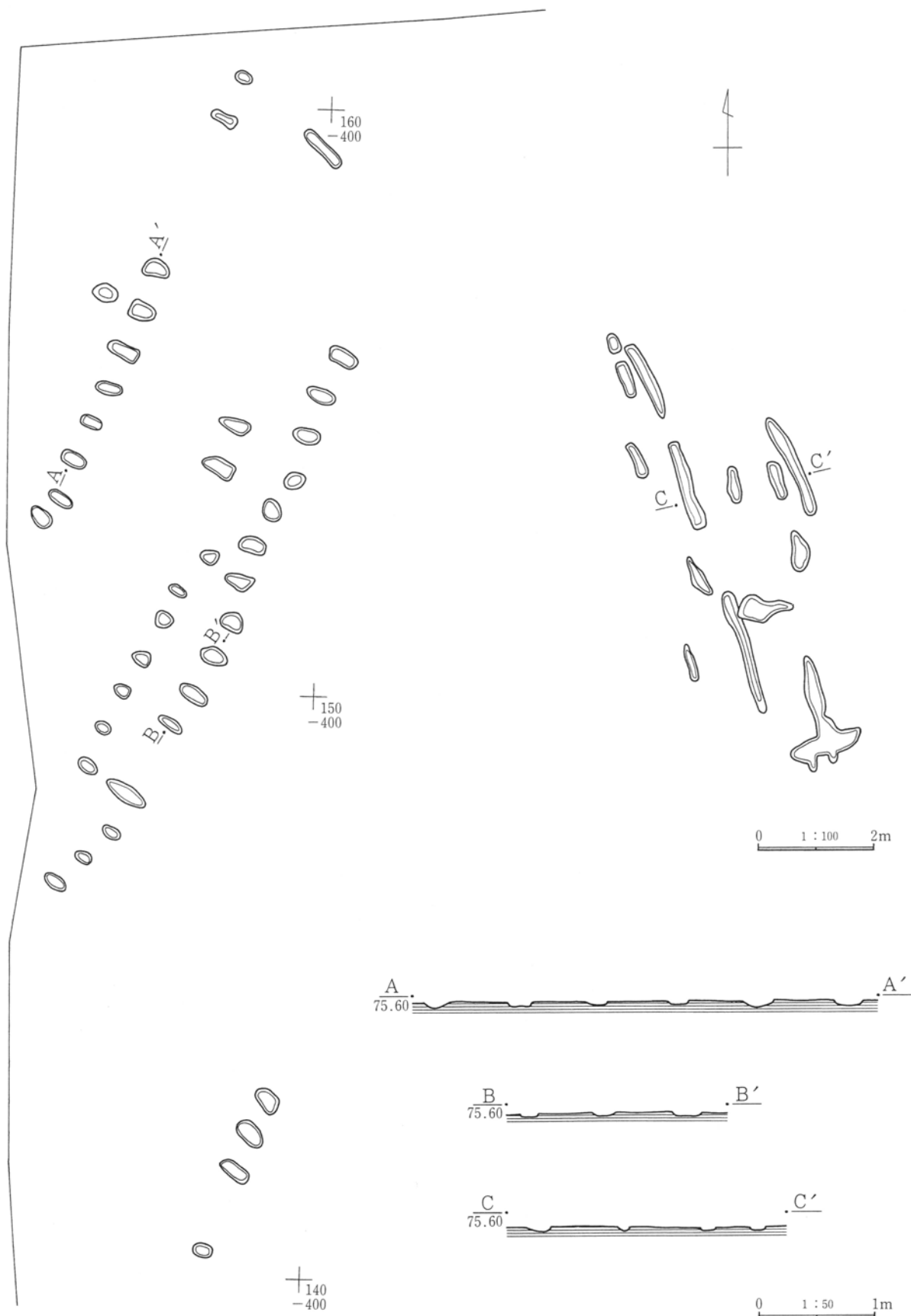
区	番号	平面形	面積(m ²)	中心標高(m)
A	1		—	76.60
A	2		—	76.61
A	3		—	76.55
A	4		—	76.52
A	5	長方形	(90.8)	76.50
A	6	台形	73.4	76.45
A	7		—	76.47
A	8		—	76.50
A	9		—	76.48
A	10	長方形	(272.3)	76.38
A	11	長方形	(34.1)	76.45
A	12		—	76.45
A	13		—	76.45
A	14	台形	61.5	76.41
A	15	三角形	(65.7)	76.40
A	16	長方形	23.7	76.41
A	17		—	76.37
A	18	五角形	24.8	76.36
A	19	長方形	45.0	76.34
A	20	(長方形)	—	76.38
A	21	(長方形)	—	76.41
A	22	台形	10.7	76.38
A	23	長方形	50.0	76.35
A	24	台形	50.4	76.33
A	25	(長方形)	—	76.33
A	26		—	76.25
A	27		—	76.36
A	28	五角形	88.0	76.34
A	29	台形?	(168.8)	76.30
A	30		—	76.33
B	1		—	76.23
B	2		—	76.23
B	3	(長方形)	—	76.26

区	番号	平面形	面積(m ²)	中心標高(m)
B	4	(長方形)	—	76.33
B	5	正方形?	(74.5)	76.28
B	6	三角形	(67.0)	76.25
B	7		—	76.30
B	8	(長方形)	—	76.25
B	9	長方形	—	76.25
B	10		(222.6)	76.30
B	11		—	76.30
B	12		—	76.30
C	1		—	76.27
C	2		—	76.25
C	3		—	76.25
C	4		—	76.19
C	5	長方形	(218.0)	76.24
C	6	長方形	—	76.19
C	7		—	76.28
C	8	三角形	(108.0)	76.25
C	9	(三角形)	—	76.25
C	10	多角形	73.9	76.24
C	11	三角形	25.5	76.25
C	12	平行四辺形	—	76.25
C	13	三角形	—	76.23
C	14	三角形	21.5	76.25
C	15		—	76.20
C	16		—	76.20
C	17	(台形)	(482.0)	76.25
C	18	長方形	—	76.20
C	19	長方形	—	76.15
C	20	—	—	76.15
C	21	長方形	(132.9)	76.15
C	22	台形	65.6	76.15
C	23	平行四辺形	52.0	76.12
C	24		—	76.11

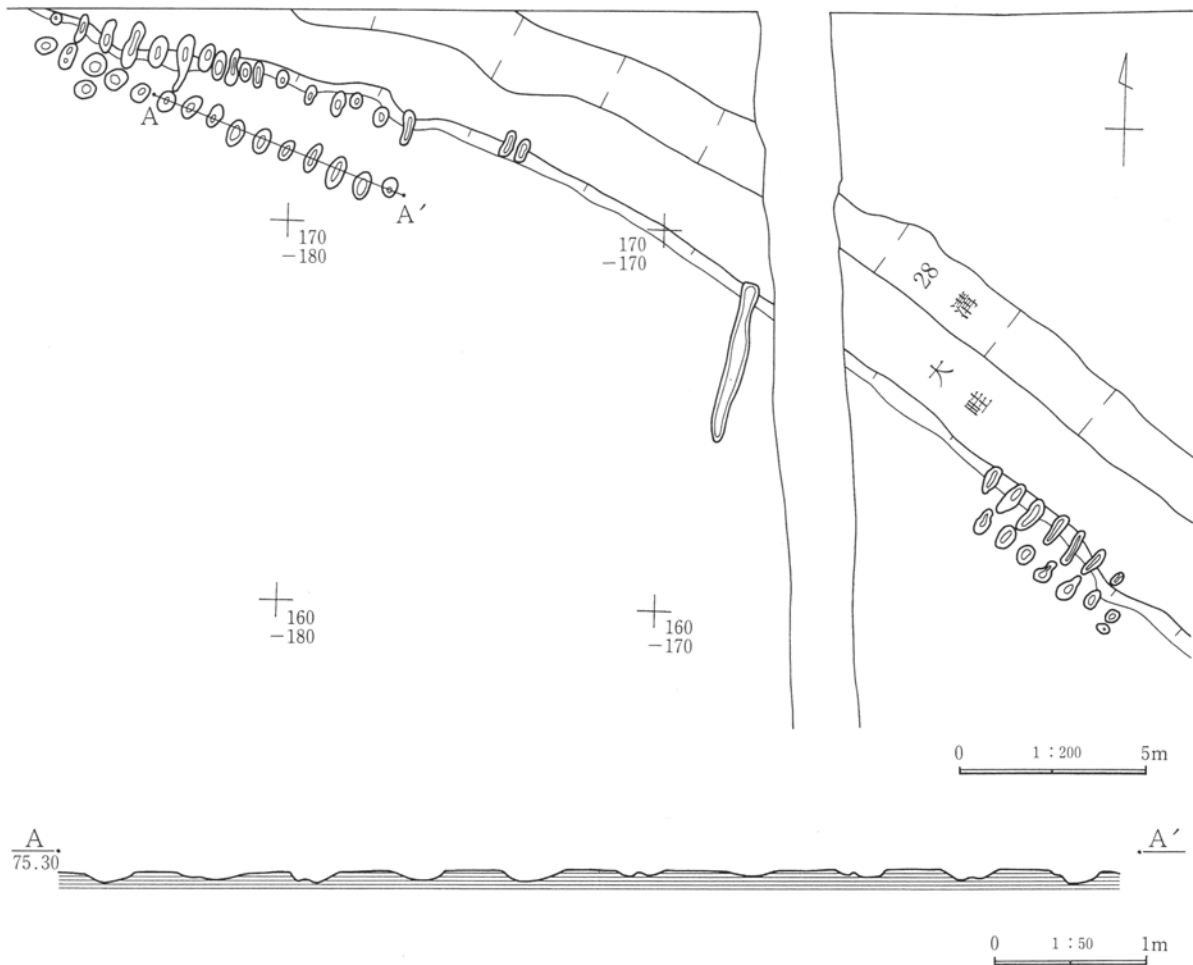
第7表 古代II期水田計測値(2)

区	番号	平面形	面積(m ²)	中心標高(m)
C	25		—	—
C	26		—	76.10
D	1	(長方形)	—	75.99
D	2	(長方形)	—	76.00
D	3	(長方形)	—	75.96
D	4		—	75.92
D	5		—	75.90
D	6		—	75.96
D	7		—	75.95
D	8		—	75.90
D	9		—	75.90
D	10		—	75.90
D	11		—	75.83
D	12		—	—
D	13		—	75.85
D	14		—	75.84
D	15		—	75.80
D	16		—	75.80
D	17		—	75.76
E	1		—	76.89
E	2		—	76.85
E	3		—	76.76
E	4		—	75.60
E	5		—	75.90
E	6	台形	243.0	76.82
E	7	長方形	252.2	75.80
E	8	長方形	158.7	75.79
E	9		—	75.70
E	10		—	75.90
E	11	長方形	(257.5)	75.80
E	12	長方形	(314.3)	75.80
E	13	長方形	(160.0)	75.80
E	14		—	75.75

区	番号	平面形	面積(m ²)	中心標高(m)
E	15		—	75.88
E	16	正方形	347.6	75.82
E	17	長方形	109.5	75.77
E	18	台形	185.0	75.76
E	19		—	75.72
E	20		—	75.83
E	21	長方形	(318.9)	75.82
E	22	(長方形)	—	75.76
E	23	(長方形)	—	75.75
E	24		—	75.72
F	1		—	—
F	2		—	75.74
F	3		—	75.75
G	1		—	75.70
G	2		—	75.68
G	3	長方形	175.6	75.64
G	4		—	75.58
G	5		—	75.65
G	6	長方形	(169.6)	75.65
G	7	長方形	(154.5)	75.57
G	8		—	75.50
G	9		—	75.45
G	10		—	75.48
G	11		—	75.45
G	12		—	75.45
G	13		—	75.45
G	14		—	75.35
H	1		—	75.40
H	2		—	75.20
H	3		—	75.30
H	4		—	75.35
H	5		—	75.30
H	6		—	75.30



第239図 G区古代II期水田耕土下の耕作痕



第240図 I区古代II期水田耕土下の耕作痕

古代II期水田耕土下の耕作痕

G区西半部とI区南半部で検出された。検出面は古代II期水田耕土である暗灰褐色シルト層を除去したAs-C混黒色土面で、列状に並んだピットないし断続する溝として確認される。

G区の耕作痕は、N-25°-Eの方向に並ぶピット列四条と、N-22°-Wに走る断続する溝列である。ピット1基の規模は、幅が20~30cmとほぼ共通し、長さは30~80cmとばらつきが大きい。深さは検出面から3~5cmで、断面形は中央がくぼむ皿形か箱形である。各ピット間の間隔は40~50cmとほぼ等間隔といい。埋土はいずれも耕土と同じ暗灰褐色シルトである。断続する溝列は、間隔が20・50・80cmとばらつき、断面形と埋土はピット列と共通する。**I区の耕作痕**は、前述の28号溝右岸の大畦の南西側

にそった二条のピット列である。列の方向はN-80°~60°-W。ピット1基は細長い楕円形で、規模や断面形状はG区例と同じである。間隔は広い部分で30~40cm、北西部では間隔を置かず隣接する箇所もある。

これらの耕作痕は、本来は列方向に直交する平行溝群の末端部分と考えられる。当時の地表面における溝群の間隔はかなり狭いはずで、場所によってはほぼ隙間なく掘られた可能性が高い。ここで想定される溝群の走向から、整った東西南北の古代II期水田とは異なり、むしろ古代I期水田に伴う可能性を考えた方がよい。ただしI区ではII期水田には存在していた大畦の下端から溝列が掘られたと想定されることからII期水田開田時の耕作(洪水堆積物に覆われた水田復旧もふくめて)の可能性もある。

古代居住域の溝

ここでは、竪穴住居跡等の立地する微高地上における溝について記述する。その多くは水田にともなう灌漑水路ではなく、区画溝や配水施設、道に伴う側溝等の性格が考えられるものである。

H区44号溝 (第242図 P L.108)

H区北東端で検出。弱く屈曲してN-55°-Wに走向する。長さ23mで幅4m前後、深さ36cmを測る。断面は中央部が平坦な皿形で、埋土には古代II期水田耕土と同じ暗灰褐色シルト及び下層に人為的埋土の可能性のあるブロック状のシルトが堆積する。南西に位置するH区5号溝と平行するので地形に沿った水路の可能性もあるが、延長溝がみられないことや、水路と想定できるH区5号溝やI区28号溝と断面形が異なることから否定的である。むしろ、西に隣接して主軸を同じくするH区8~11号住居跡や1号掘立柱建物跡などの建物群を画するような機能をもつものか。出土遺物はない。

I区2号溝 (第243・244図 P L.108)

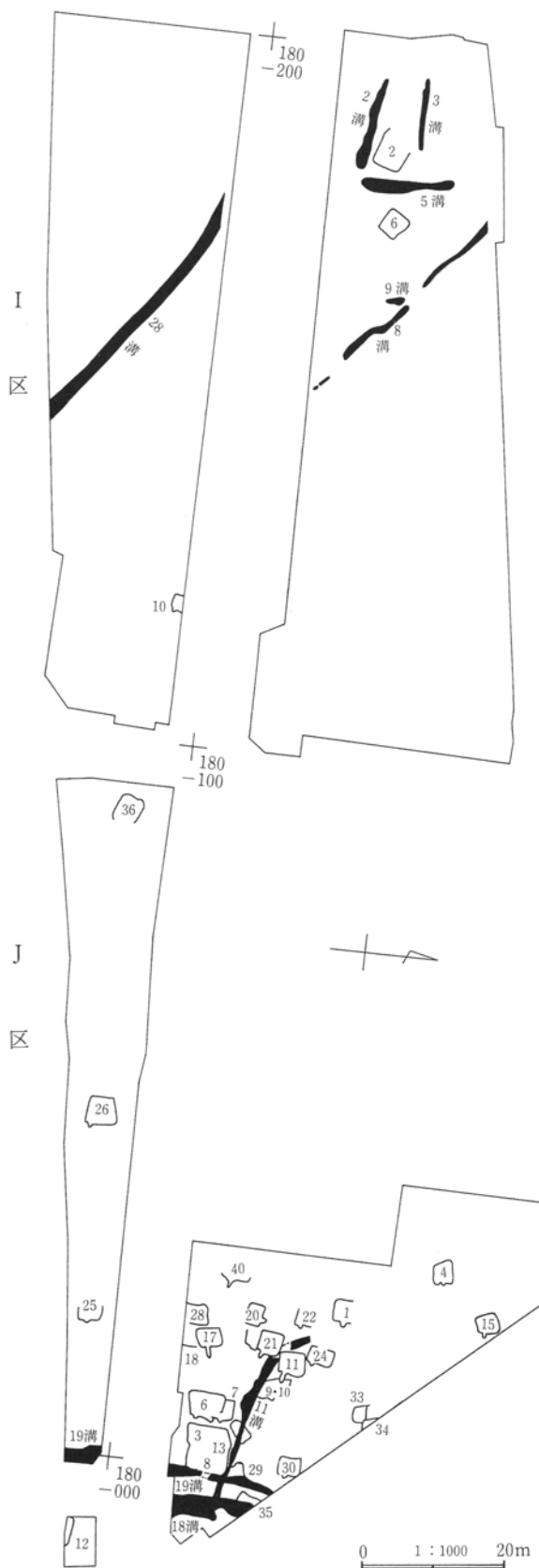
I区北半の南西部で検出。走向はN-80°-Wで、長さは13m。幅は176~64cmと一定しない。深さは33cmで、断面は皿形にくぼむ。埋土はシルト質砂。9世紀後半の皿、杯、椀が出土。6号掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係は不明。

I区3号溝 (第243・244図 P L.108)

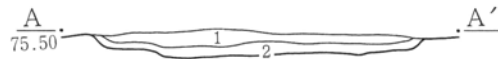
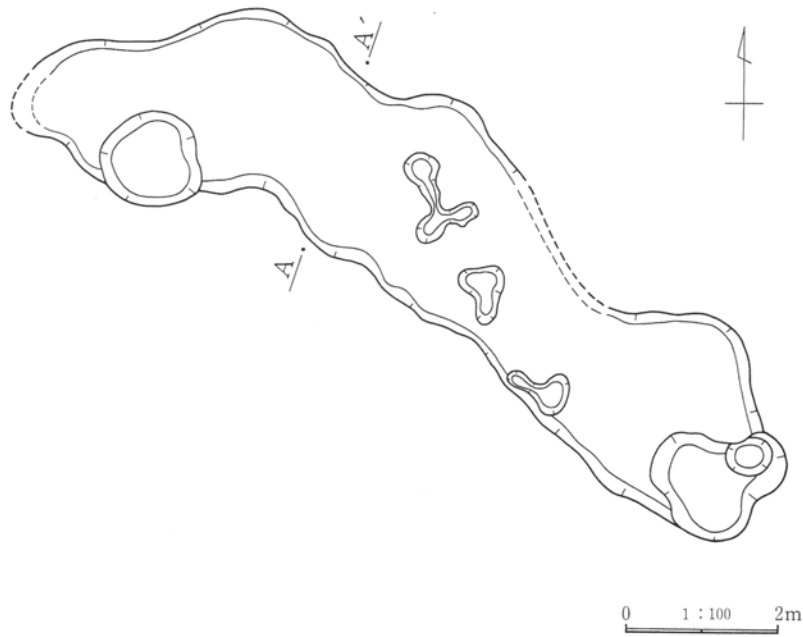
2号溝の北方約5.6m離れて並行して検出された。走向はほぼ東西方向をさす。長さ9.9m、幅70cm前後、深さ25cmを測る。断面形は皿形~台形で不整形。埋土はシルト質砂。9世紀後半の杯が出土。6号掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係は不明。

I区5号溝 (第243・244図 P L.108)

2号溝東端附近からL字を構成する位置で検出された。走向はN-5°-W。長さ16m、幅192~96cm、深さ1m前後を測る。断面形は浅い「蒲鉾」形で、



第241図 I・J区古代住居域の溝と住居群



- 1 灰褐色土 榛名二ツ岳パミスを含む。
- 2 灰色シルト ローム塊少量含む。



第242図 H区44号溝

南半が深くくぼむ。埋土はシルト質砂で榛名二ツ岳給源と思われる軽石が見られることから、古代II期水田耕土の暗灰色シルトに相当すると考えられる。全体にブロック状堆積で、人為的埋土あるいは盛り土の流れ込みと思われる。9世紀代の台付甕と須恵器大甕片が出土。中世以降の4・6号溝に切られる。

I区8号溝 (第243・244図 PL.108)

調査区北半の中央部分で斜行して検出され、走向はN-50°-W。全長33.6m分が確認された。南半では遺構検出面が低いので、検出できなかった。幅58~80cm、深さ30cmを測り、断面は浅い「蒲鉾」形で、部分的に中央がややくぼむ。埋土は榛名二ツ岳軽石を混入するシルト。断続する溝だが、等高線と直交方向に長く続いていくことから、水流機能をもって

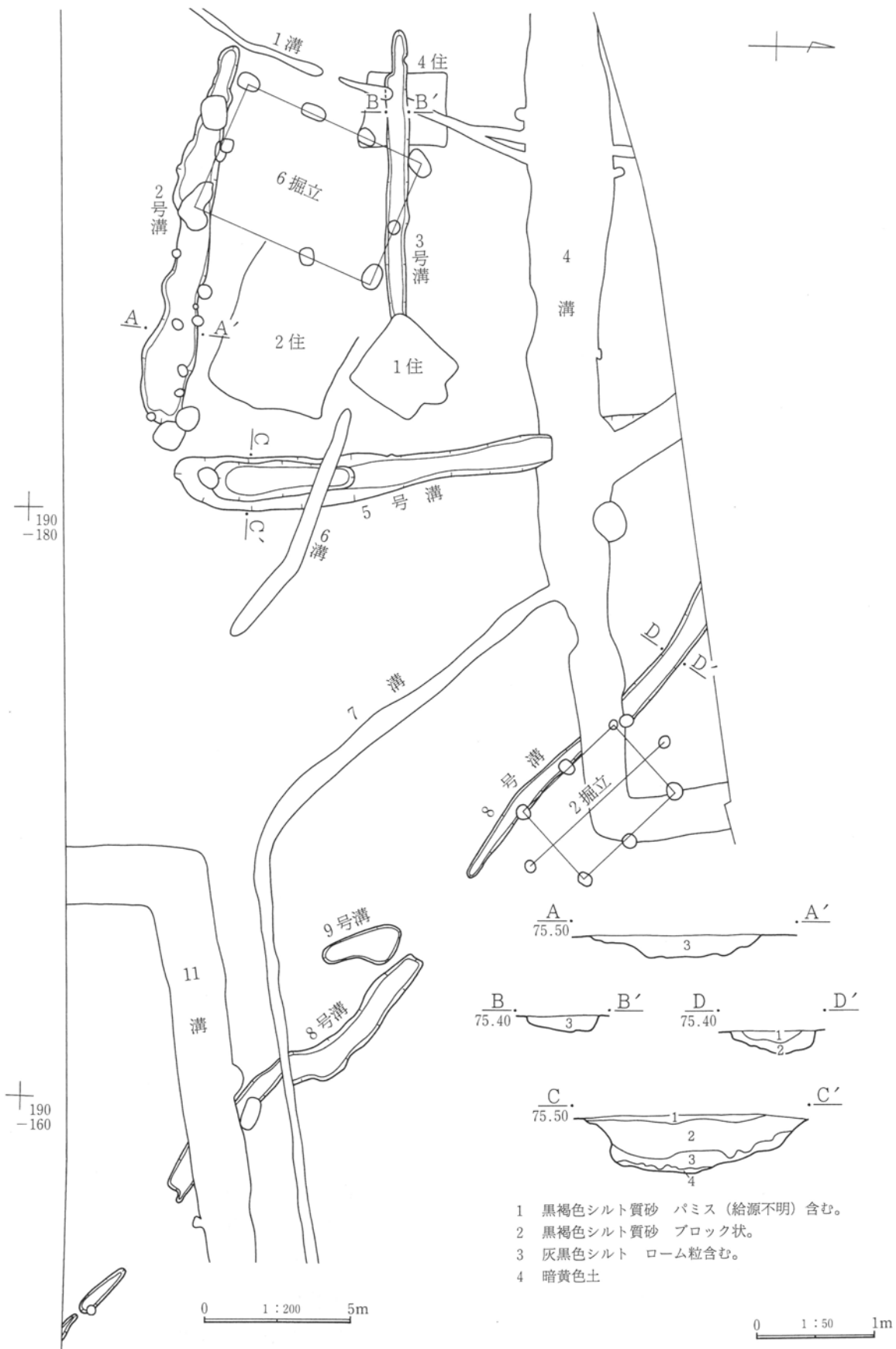
いた可能性が高い。9世紀半ば~後半の杯が出土。4・7・11号溝に切られる。

I区9号溝 (第243・244図)

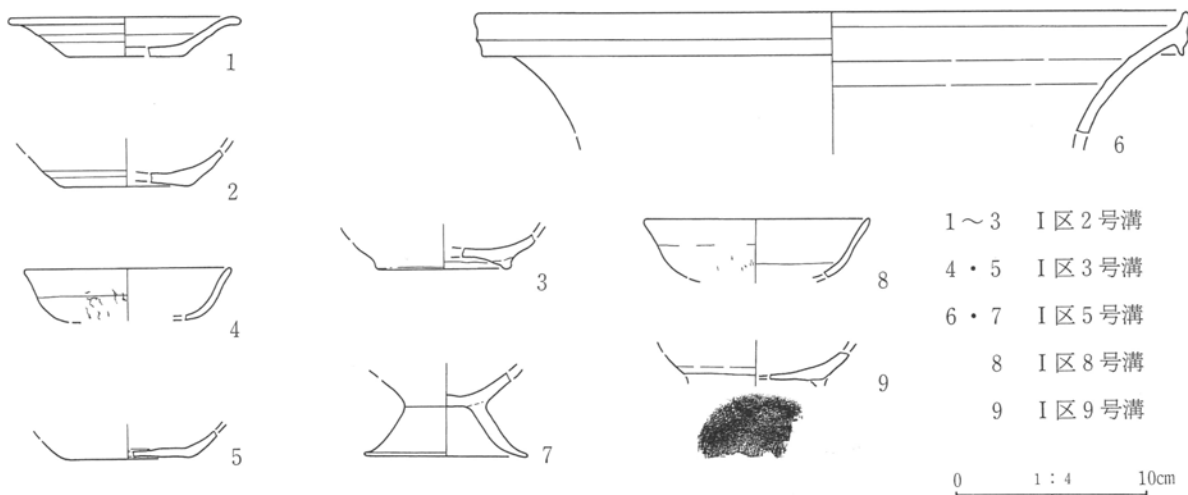
8号溝の西側で検出された不整楕円形のくぼみ。溝というより土坑とすべきか。長さ2.7m、幅1.8m、深さ5cm弱を測る。埋土はシルト。9世紀代の杯片が出土。

J区11号溝 (第245・246図 PL.109)

J区の竪穴住居跡群を横断するように北から南東に走向する。総長21.5m分を検出した。北端と東端は攪乱と他遺構に切られて不明。幅は広い部分で180cm、狭い部分で60cm、深さは25~40cmを測る。断面形は「弓」形、箱形と一定しない。埋土は榛名二ツ



第243図 I区2・3・5・8・9号溝



第244図 I区2・3・5・8・9号溝出土遺物

岳軽石を含むシルト質砂で、部分的にラミナ構造をみせる。地山もこれと近似することから洪水堆積物か地山の流入か判断が難しい。多くの遺構と重複し、21号住居跡と18・19号溝に切られることが判明している。8世紀後半代の蓋と杯が出土する。

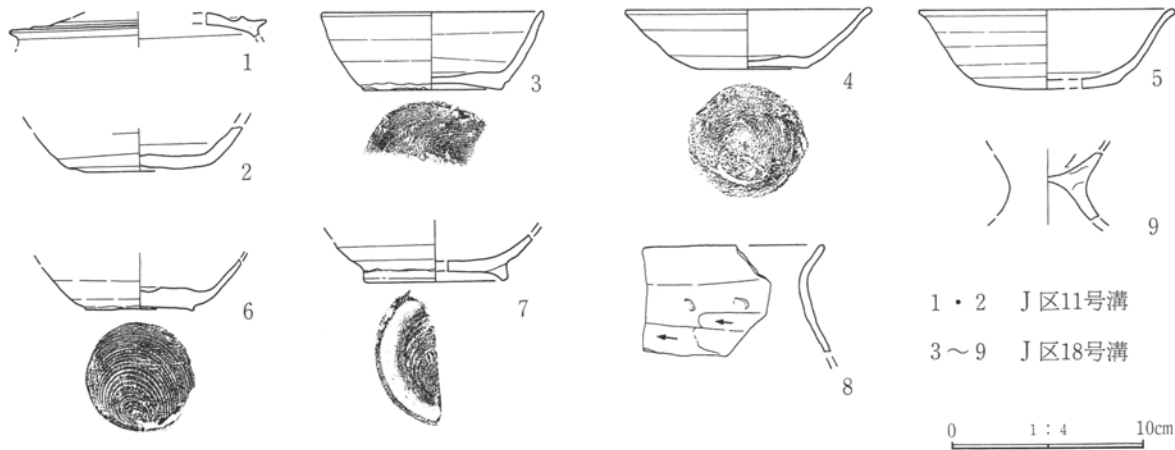
J区18号溝 (第245・247図 PL.109)

J区的最東端で長さ11.5m分が検出され、走向はほぼ南北方向で北端部でやや東へ曲がる傾向をみせる。幅は280~150cmで、南半の広い部分は土層断面から掘り直しの可能性がある。深さは30cm前後で、断面形は浅い箱形に近く底面に凹凸が多い。埋土は地山流れ込みあるいは洪水堆積物と思われるシルト

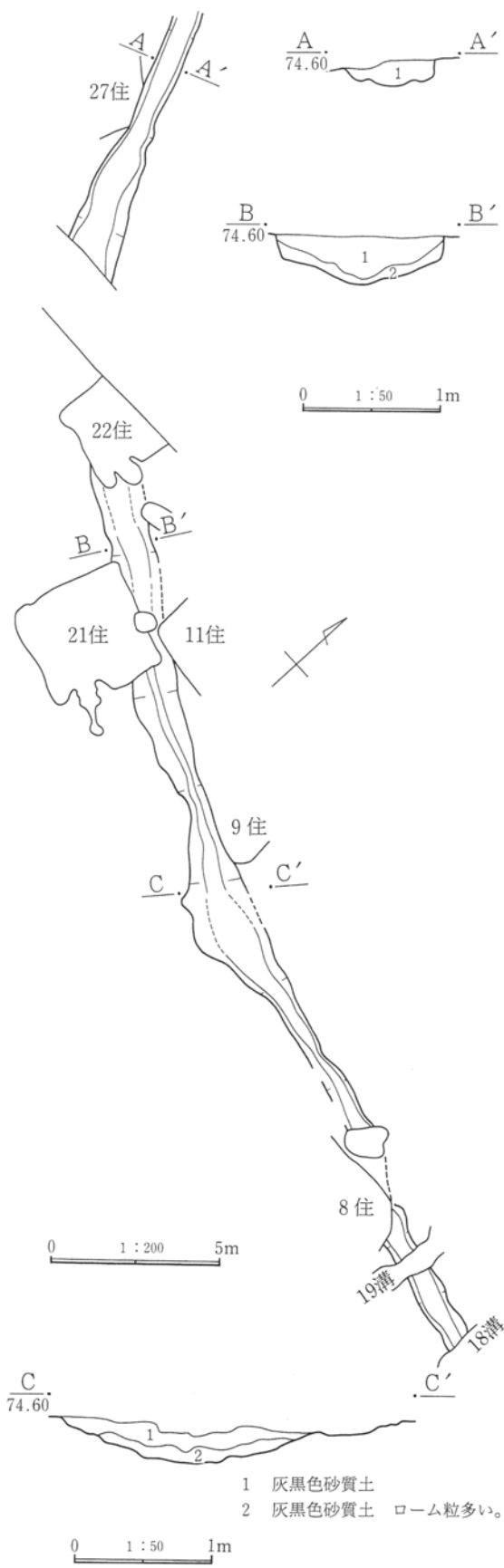
質砂。35号住居跡と重複するが新旧関係は不明。埋土から8世紀後半と9世紀代の二時期の遺物が出土している。

J区19号溝 (第247・248図 PL.109)

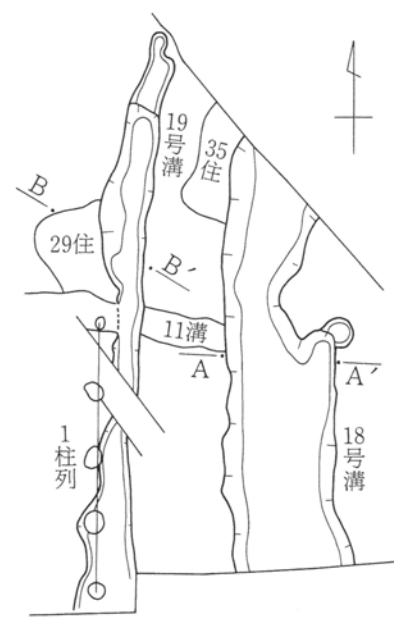
18号溝の西側に2mの間隔をあけて併走する。幅は130~50cmで、深さは25~30cm。断面形は不整形な箱形。埋土は18号溝と同じ。29号住居跡に切られる。出土遺物は、9世紀代の土器が主体で杯が多い。



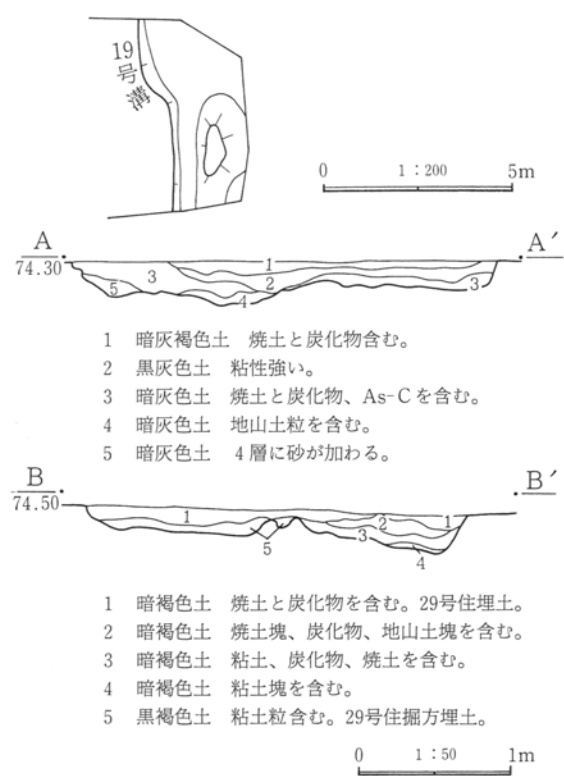
第245図 J区11・18号溝出土遺物



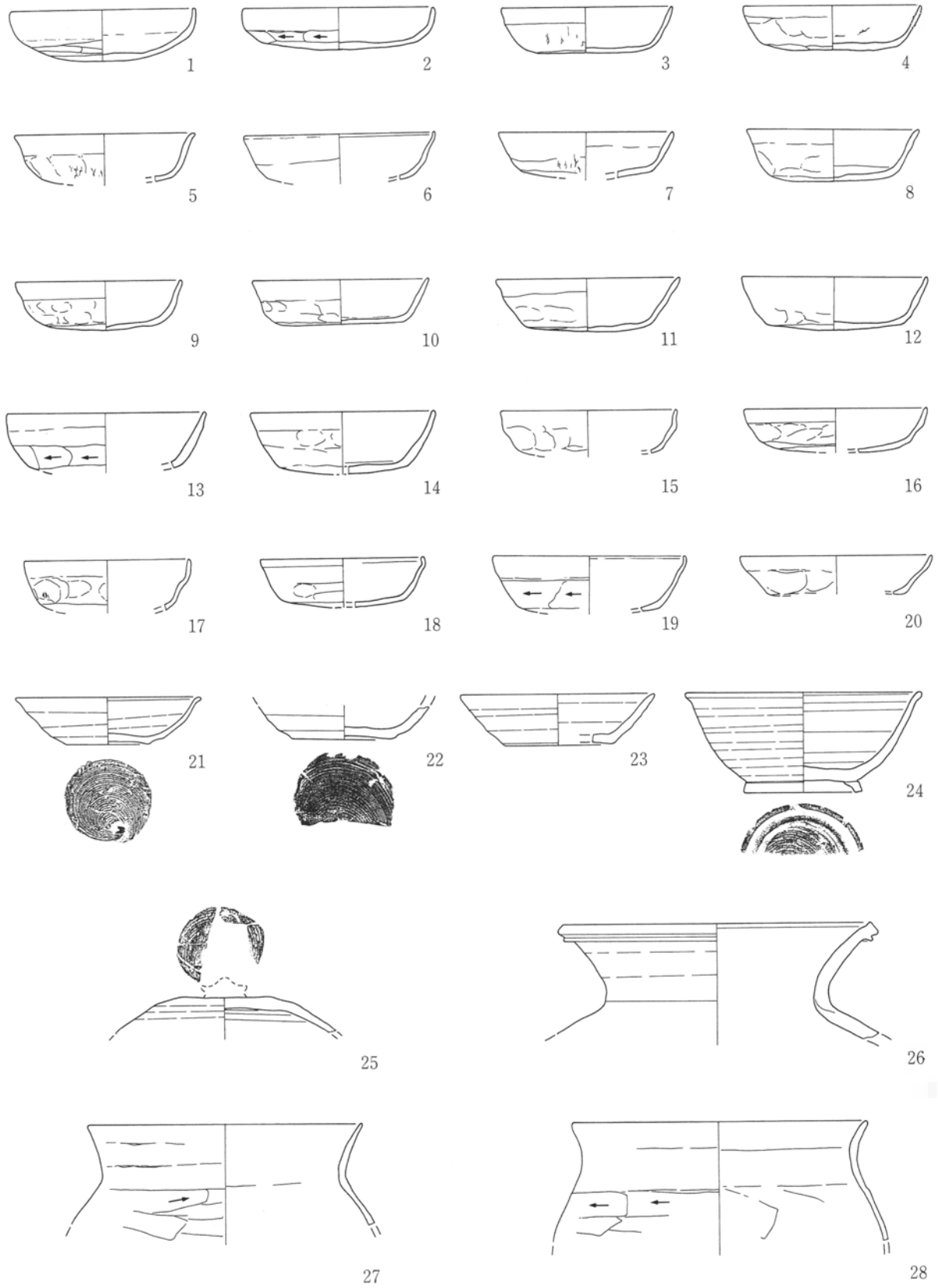
第246図 J区11号溝



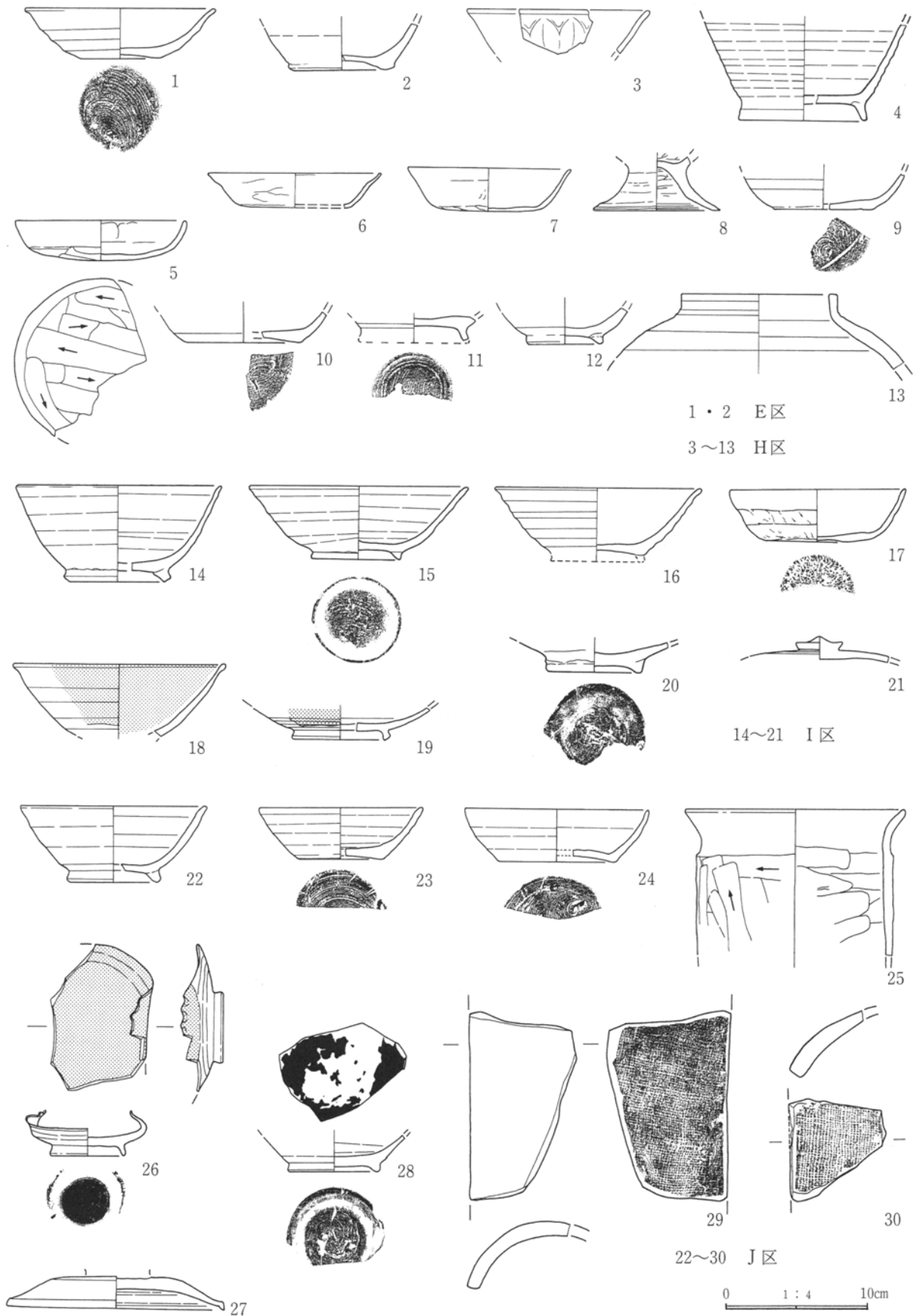
現行道路



第247図 J区18・19号溝



第248图 J区19号沟出土遗物



第249図 奈良～平安時代の遺構外出土遺物

4 中・近世の遺構と遺物

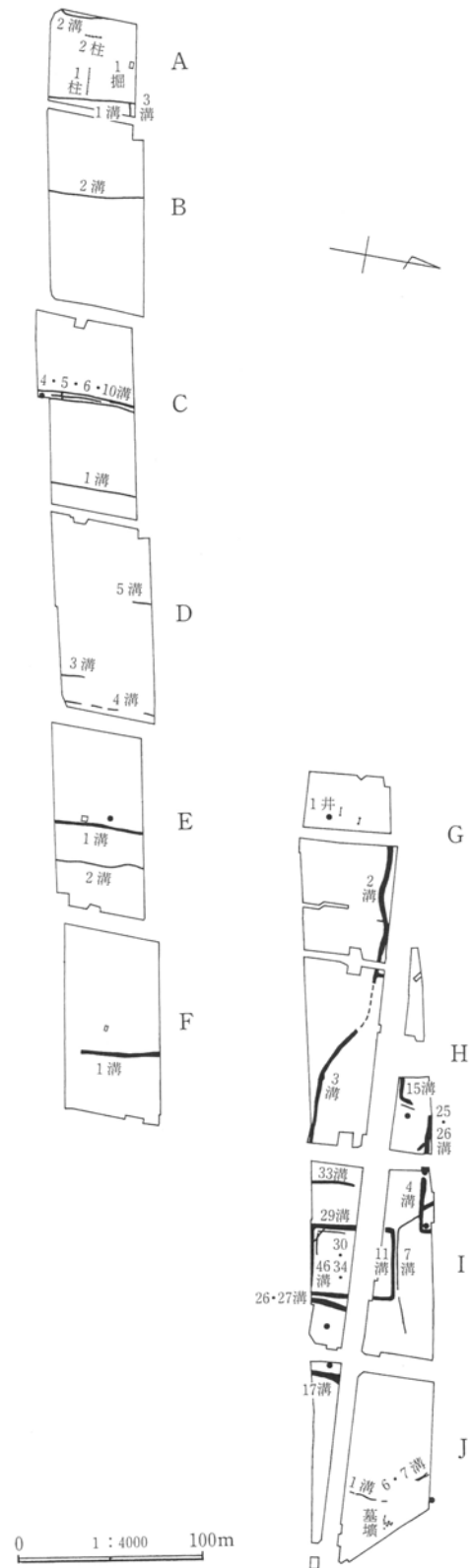
天仁元年(1108年)に降下した浅間B軽石(As-B)以降に属する遺構と遺物について扱う。ただし、出土遺物が量、質ともに貧弱で、時期認定の困難なものが多い。その場合は、遺構埋土の特徴と遺構重複関係を参考にした。

遺構の種類は、屋敷跡三カ所、墓塚、井戸、水路群である。

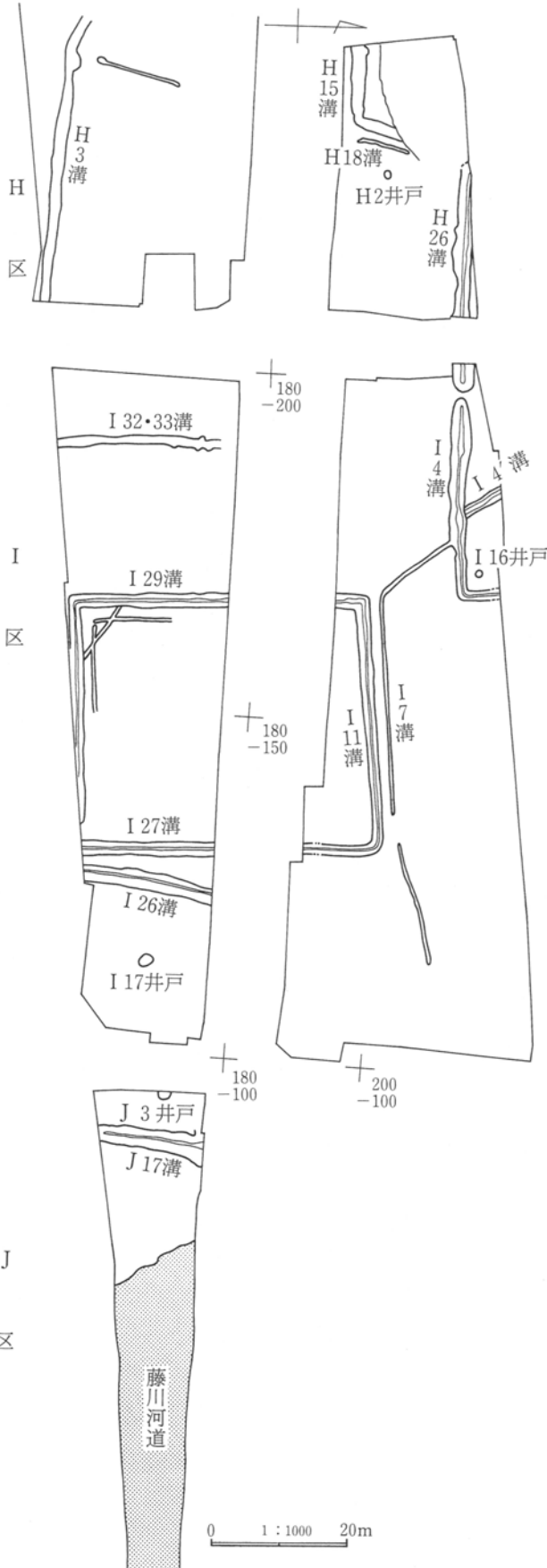
(1) 屋敷跡(第251~259図 PL.111~115)

H区26号溝と**I区4号溝**は方形区画堀の南辺にあたる。長さは60mを越え、中央付近に幅1m弱の狭い土橋部分がある。堀の断面は「箱堀」で、上端幅170~110cm、深さは最深部で70cm、東半は浅く平均して40cm前後を測る。土橋の東脇と斜に走る**4号溝**の合流部分は深くくぼむ。なお、埋土の堆積状況からは、土累の有無は確認できなかった。4号溝埋土からは、内耳土鍋口縁、石臼、砥石、板碑、硯片が出土しており(第259図)、屋敷跡の上限年代が15世紀代まで遡りうることを示す。昭和43年の地形図(第252図)によれば、「新井家」の敷地は方90mの堀と道で区画されており、東側の堀は灌漑水路として現在まで残っている。なお、元禄年間の検地に関わる絵図(以下「元禄絵図」と呼ぶ)によれば、この屋敷区画(『新井屋敷』と記載してある)は東西に分割する溝によって本家と分家に分かれていたようである。**I区7号溝**は、4号溝から派生して南東へ下り、**I区11号溝**に沿って東方へのびる小規模な溝である。「元禄絵図」によれば、南側に隣接する井野家の敷地との境界を走る。

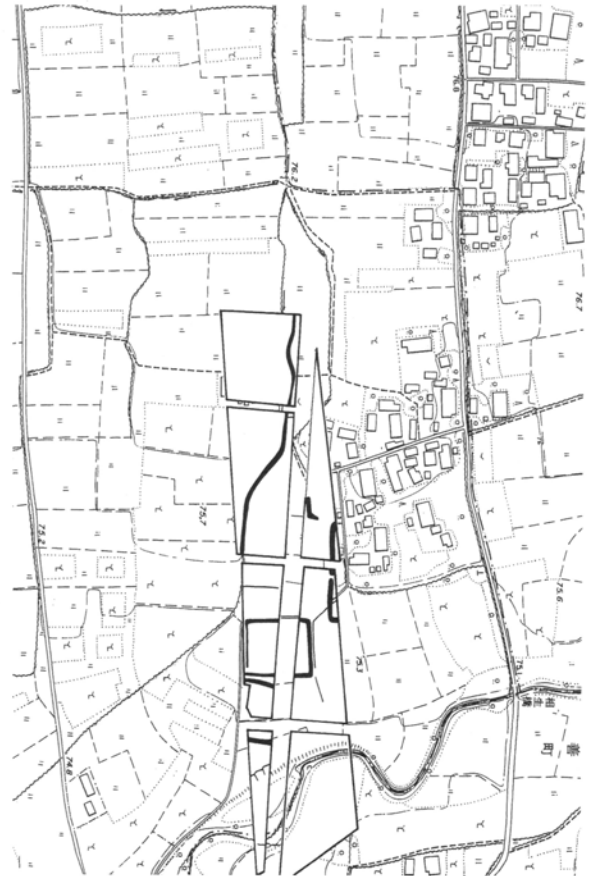
I区11号溝(第254図)は、調査区南半で検出した**I区27・29号溝**(第255図)と連続する方形区画の堀(第251図)である。規模は、東西40m、南北45mを測り、『新井屋敷』に比べて1/4ほどの面積である。これは「元禄絵図」によると、井野家の敷地であるが、屋敷ではなく田地になっている。このことから、元禄以前にすでに埋没していたことが明らか



第250図 中・近世の遺構分布図



第251図 H・I・J区の環濠屋敷跡



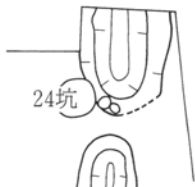
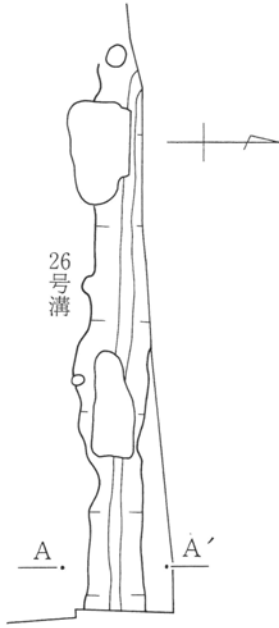
昭和43年作成都市計画図より(1:5000)

第252図 環濠屋敷と周辺地形

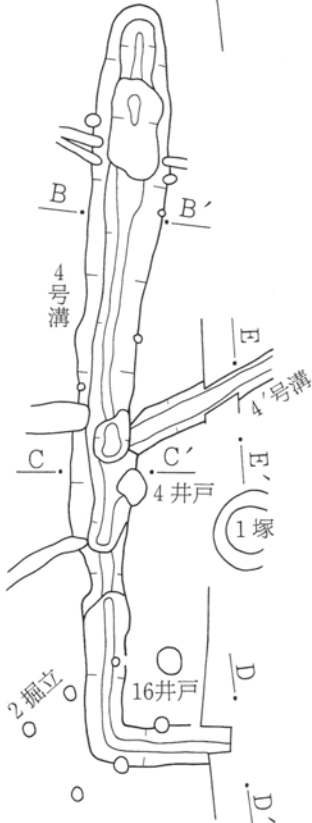
である。ちなみに、『井野屋敷』本家はここより南東300mにある環濠遺構群に含まれる。堀の規模は、上端幅4.0m、深さ1.05mで、断面は葉研、一部箱堀状をなす。内部施設としては、南西隅で堀の内側に沿って、約1.2mの間隔をあけて30・34・46号溝(第255図)が走るのみである。建物跡や井戸などの検出に努めたが、全く痕跡が確認できなかった。堀の埋土にはAs-B混土が堆積し、出土遺物はない。なお、「元禄絵図」には屋敷区画の西辺に沿った位置に道が通っていることから、埋没後も新井家と井野家の土地を分ける区画として認知されていたらしい。

I区26号溝とJ区17号溝(第256図)も、方形区画の屋敷を構成する東西辺の堀にあたる。堀の規模は、上端幅2.70~3.10m、深さ70~90cmで、断面は葉研堀に近い。堀の走向は西側に隣接する屋敷区画よりやや東に振れている。堀間の東西規模は40mである。内部施設として井戸二基(I区17号井戸・J区3号

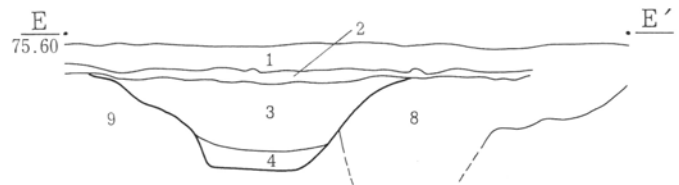
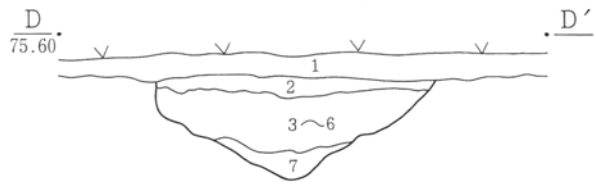
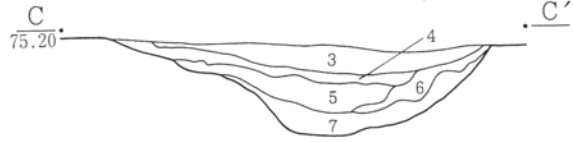
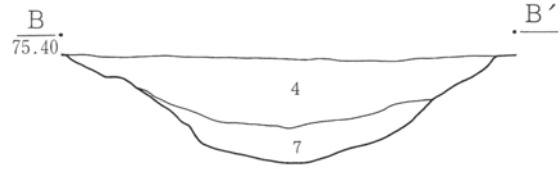
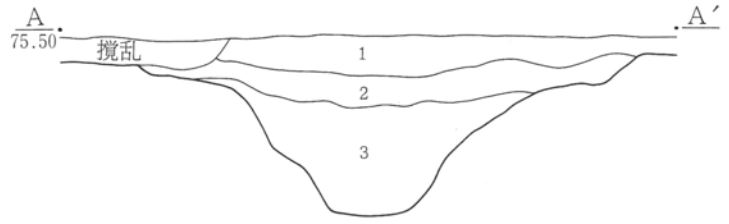
H
区



I
区



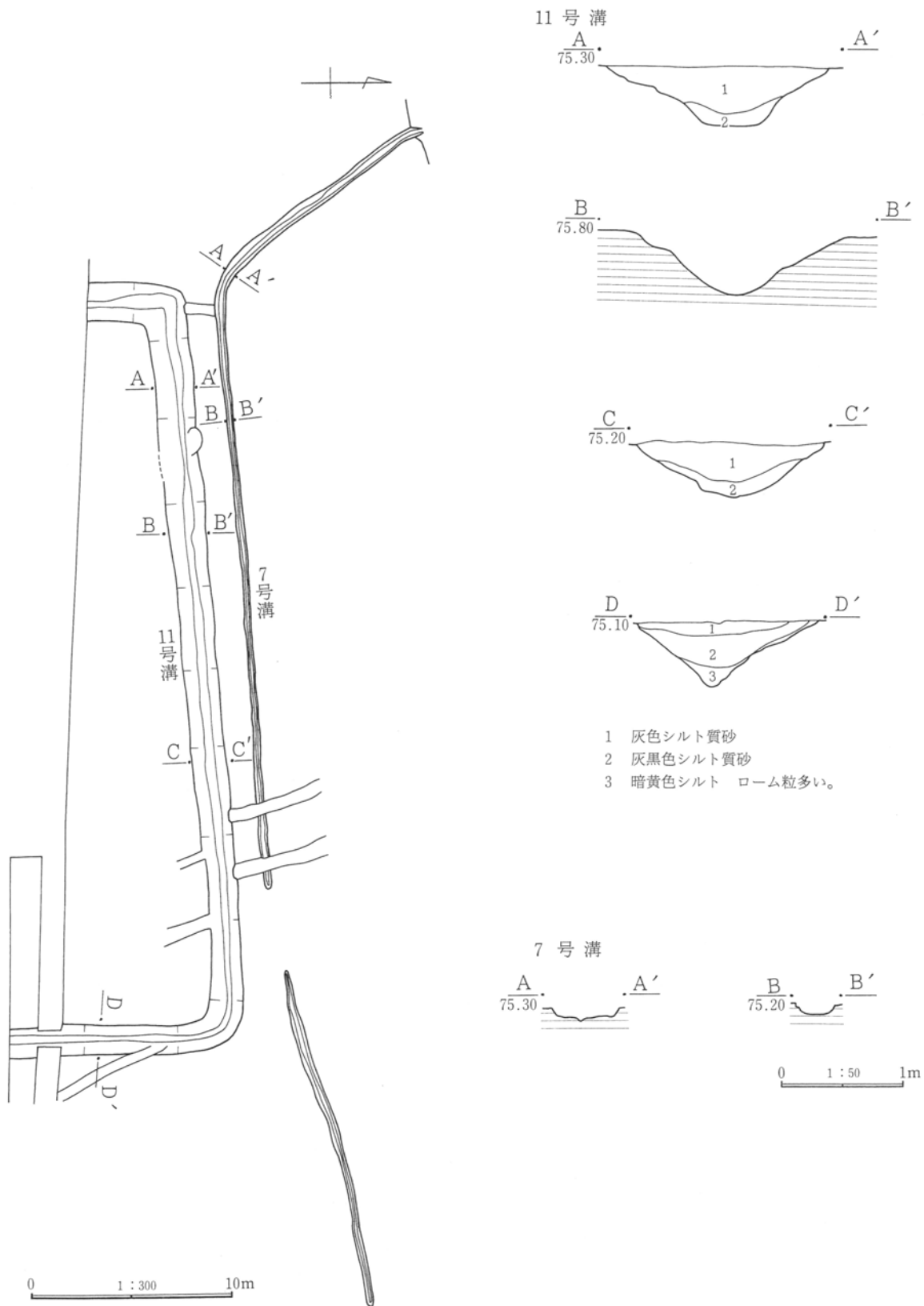
0 1 : 300 10m



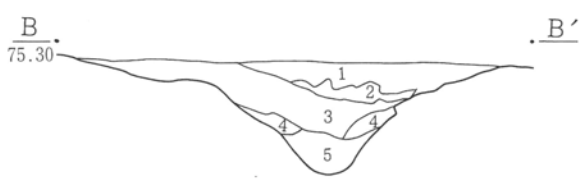
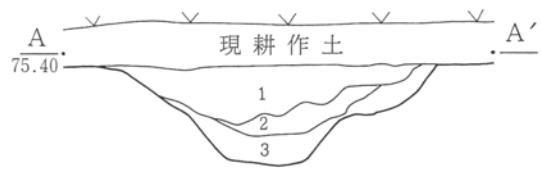
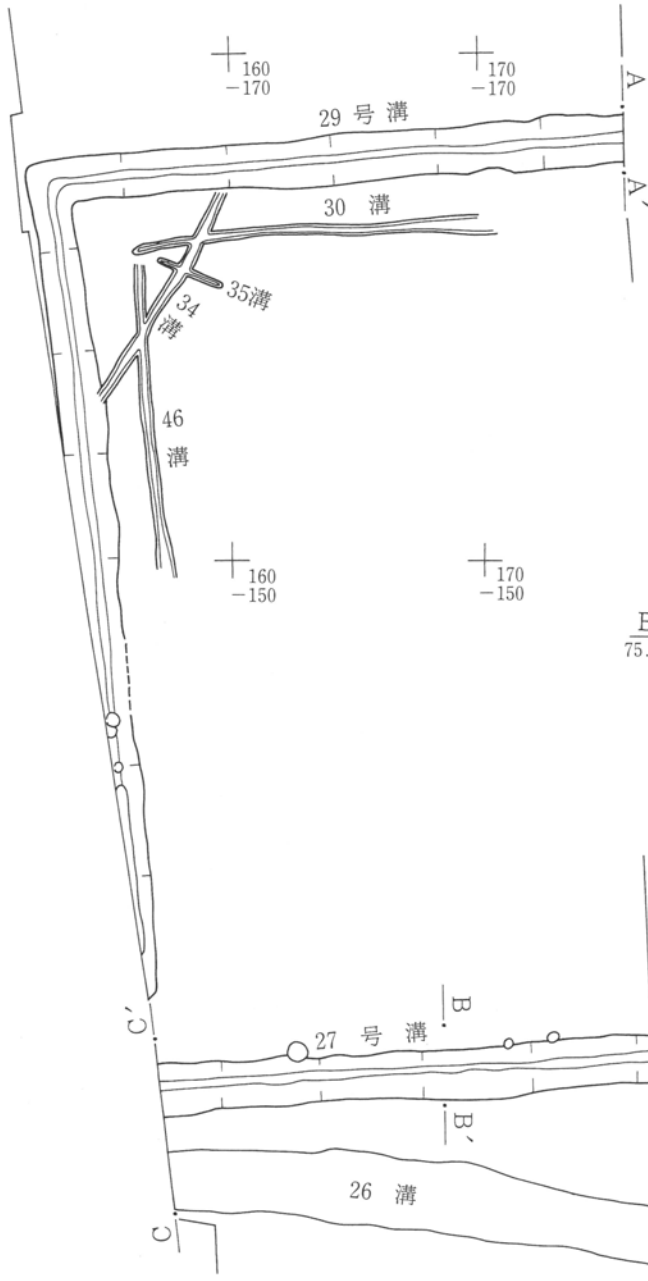
- 1 暗褐色土 表土。
- 2 黄褐色土 酸化鉄凝集著しい。
- 3 黒褐色土 ブロック状でしまる、砂とパミスを塊状に含む。
- 4 黒褐色土 砂との互層。
- 5 黒褐色土 ローム塊を含む。
- 6 黒褐色土 浅間山系パミス (As-Aか) を含む。
- 7 黒灰色土 粘性強くローム粒含む。下位に砂層。
- 8 黒褐色土 粘性帯び、炭化物粒含む。5号溝埋土。
- 9 黒褐色土 1号竪穴遺構埋土。

0 1 : 50 1m

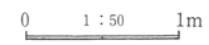
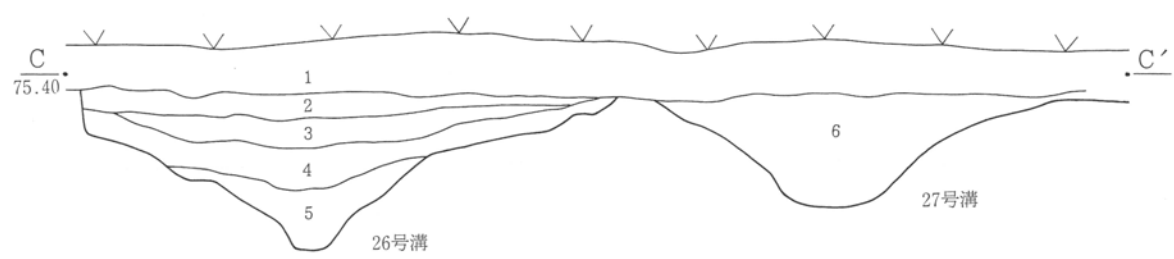
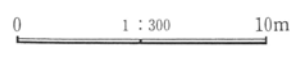
第253図 H・I区4・4'号溝



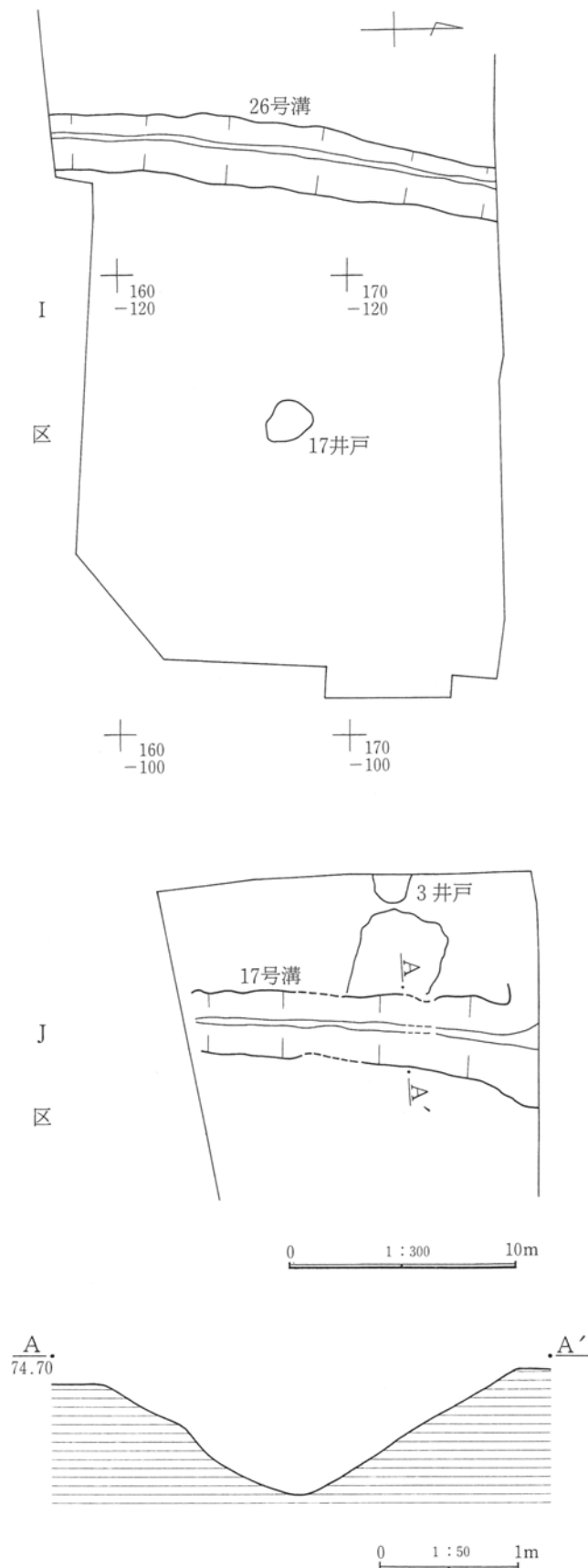
第254図 I区7・11号溝



- 1 暗灰褐色土 表土、As-Aを含む。
- 2 暗褐色土 As-Bを含む。
- 3 黒褐色土 As-Bが多い。
- 4 黒褐色砂質土 As-B多く、ブロック状。
- 5 黒褐色砂質土 砂とローム塊の混合土。
- 6 暗褐色土 ローム塊が多く、As-Bはない。



第255図 I区27・29号溝

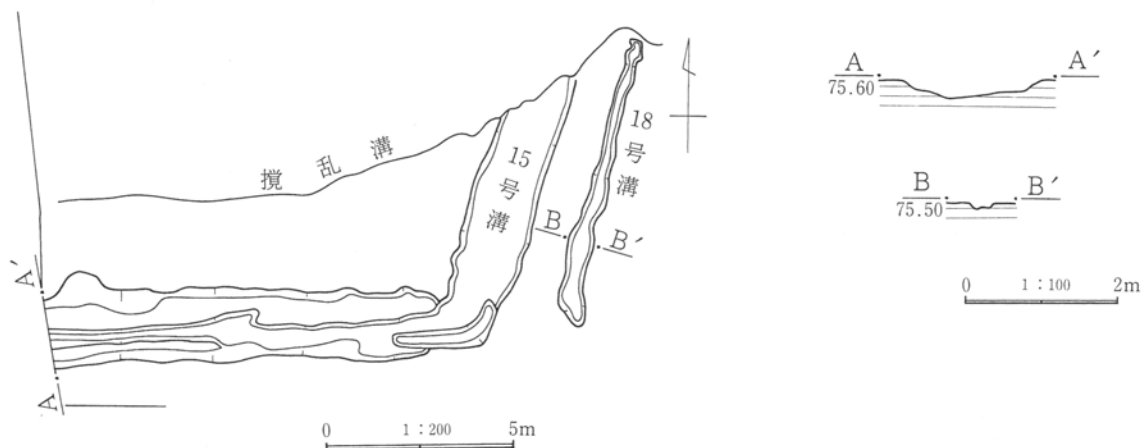


第256図 I区26・J区17号溝

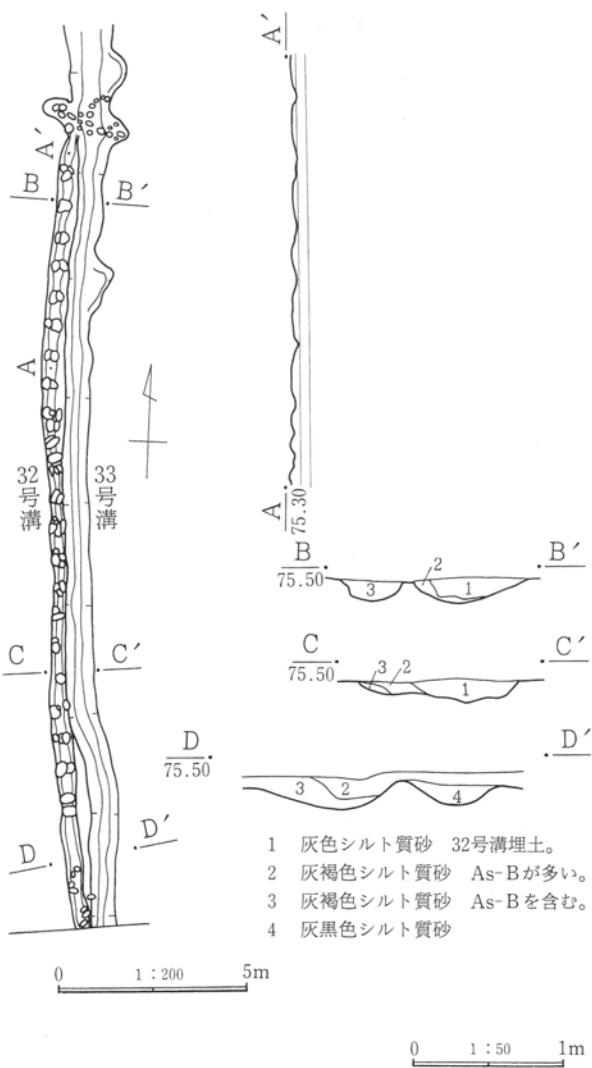
井戸)がある。この屋敷跡は「元禄絵図」では井野家の田地となっており、元禄検地頃には埋没していたことがうかがえる。堀はローム塊の多い土のみが堆積しており、人為的に埋められた可能性が高い。方形区画の北東部は調査できなかったが、旧藤川流路と接するほどに近いと思われる(第251図)。以上のことから、当初は藤川右岸にあった屋敷を、藤川の侵食あるいは流路の移動に伴って、西側に同規模の屋敷を移動したのではないかと推察する。その際に、屋敷堀が埋められたと考えられよう。

H区15号溝(第257図)は、『新井屋敷』の南堀であるH区26号溝とやや斜めに交差し、その南側18m地点で折れて西方向に向かう堀である。交差点は後世の攪乱で確認できなかったが、「元禄絵図」によれば、そのまま北に延びて『新井屋敷』を縦断する堀につながる。また、西は南西方向に延びてH区3号溝と合流する(第252図参照)。幅は90cmと広いが検出面からの深さは15cmほどで、防衛的な堀でないのは明らかである。東には平行して**H区18号溝**が走っており(第257図)、両溝間は1.2mほどの間隔がある。これは「元禄絵図」に記された道であろう。

I区32号溝と**I区33号溝**(第258図)は重なって南北方向に走る二条の溝で、土層断面の観察から、33号溝が新しい。32号溝は幅50cm前後、深さ10cm強を測り、底面には50~70cm間隔で浅く小規模なピット列が配される。この構造から、水路と考えられる33号溝西側の護岸施設ではないかと考えられる。ちなみに「元禄絵図」では水田区画の水路しか記されていない。調査当初は、屋敷跡の西側に約10m離れて平行して走ることから、屋敷跡に関わる柵状施設とも想定したが、「元禄絵図」との対比から水路に伴う施設と推測した次第である。ただし、その場合、なぜこの部分にのみこのような施設が設けられたかが判明しないままである。なお、本溝と屋敷区画の間は何ら遺構は確認されなかった。



第257図 H区15・18号溝



第258図 I区32・33号溝

(2) 掘立柱建物跡・柱列

A区1号掘立柱建物跡 (第260図)

位置 035-965・970グリッド

規模 2×1間 3.87×1.85m

主軸方位 N-81°-E

柱間寸法

P1-P2 3.87m P2-P3 0.65m

P3-P4 1.20m P4-P5 3.58m

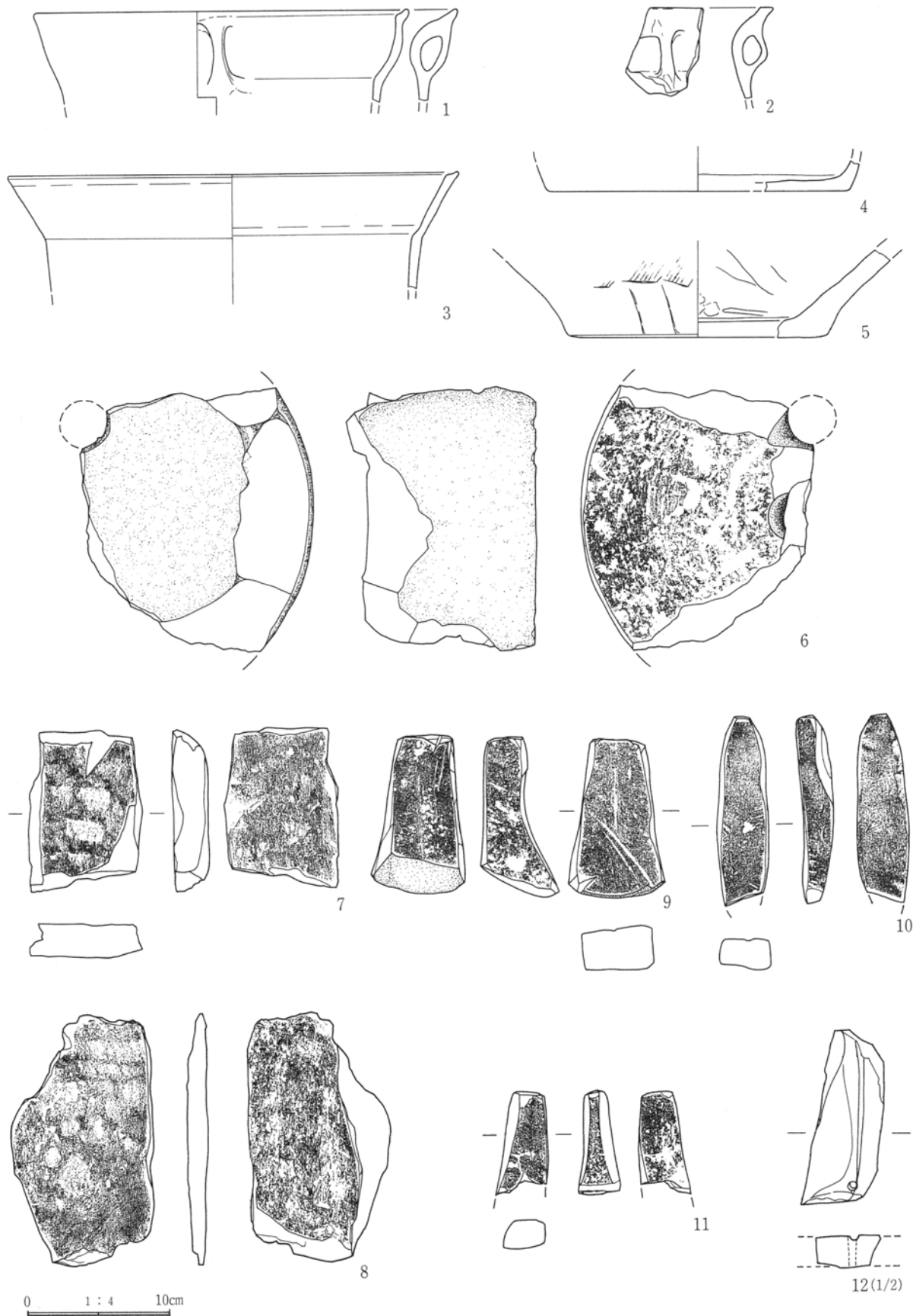
P5-P6 1.20m P1-P6 1.15m

梁間のP2-P3とP1-P6が狭く、これが棟を支えるとするれば、北側に偏った屋根構造が想定される。

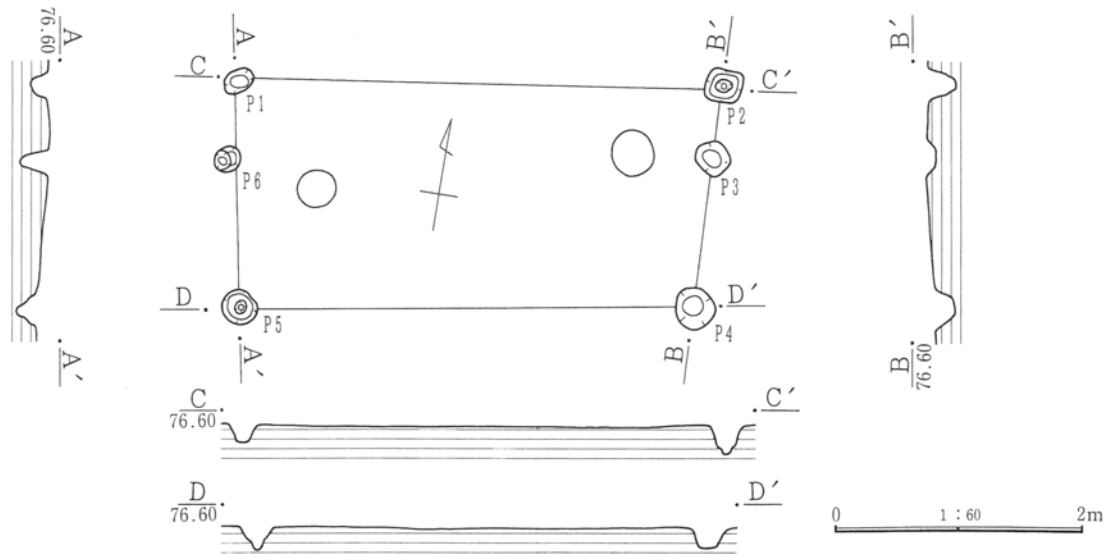
柱穴 P3が7cmと浅いが、他は概ね同一規模である。掘方の平面形は方形のP2以外は円形だが、柱痕跡と思われる底面のくぼみはすべて円形で、その直径は5~8cmを測る。埋土はAs-Bを含む砂質土である。

出土遺物 なし。重複遺構 古代II期水田の上に構築される。

所見 本建物跡は、古墳時代以降一貫して水田として営まれてきた低地であり、東端のI・J区と異なって住居等の永続的な建物を建てるには相応しくない場所に立地し、また平面規模や構造が中世以降の一般的民家建築とは著しく異なることから、水田



第259图 I区4号沟出土遗物



	径 (cm)	深 (cm)		径 (cm)	深 (cm)
P 1	24×17	14	P 4	33×31	16
P 2	28×26	22	P 5	28×24	18
P 3	28×25	7	P 6	21×20	22

第260図 A区1号掘立柱建物跡

あるいは畠での農作業に関わる構造物の可能性を考えておきたい。

A区1号柱列 (第261図 PL.110)

位置 015-950~960グリッド

規模 14.0m

主軸方位 N-85°-E

柱間寸法

P 1-P 2 1.40m P 2-P 3 1.50m

P 3-P 4 2.60m P 4-P 5 1.40m

P 5-P 6 1.40m P 1-P 9 2.70m

P 7-P 8 1.40m P 8-P 9 1.40m

P 1~P 3、P 4~P 6、P 7~P 9がそれぞれ3本組で構成され、その柱間は1.4mと一定している。また、この3本組の間は2.6m及び2.7mと、各柱間寸法の約2倍の長さである。

柱穴 いずれも径30cm前後を測る円形で、中には20cm大の扁平な礫を据えてある。おそらく礎石としたものだろう。ちなみに、礎石上面の標高は76.35mでほぼ水平を保っている。柱筋も直線上にぴったり

と乗っており、狂いが無い。埋土はAs-B混土である。P 3が7cmと浅いが、他は概ね同一規模である。掘方の平面形は方形のP 2以外は円形だが、柱痕跡と思われる底面のくぼみはすべて円形で、その直径は5~8cmを測る。埋土はAs-Bを含む砂質土である。

出土遺物 なし。

重複遺構 古代II期水田を切る。

A区2号柱列 (第261図)

位置 010・015-980グリッド

規模 7.50m 主軸方位 N-S

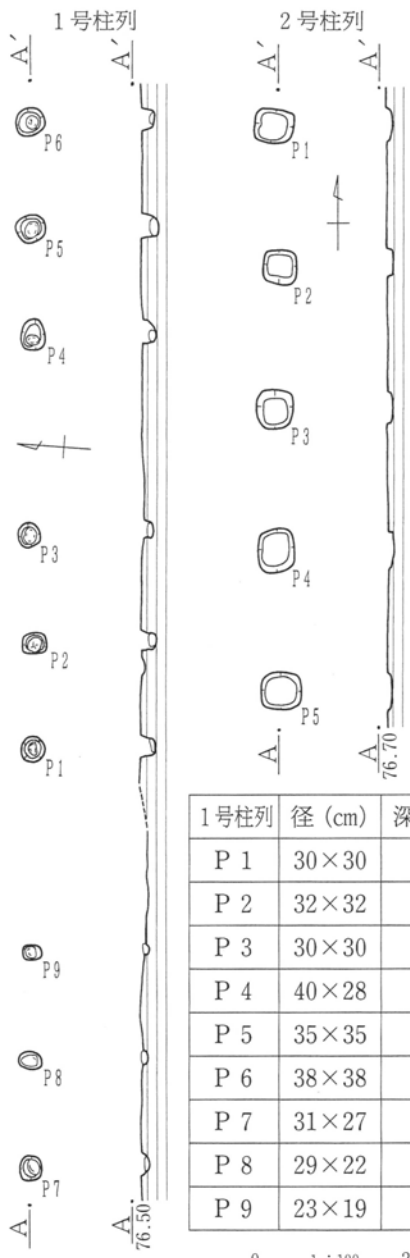
柱間寸法

P 1-P 2 1.80m P 2-P 3 1.95m

P 3-P 4 1.90m P 4-P 5 1.95m

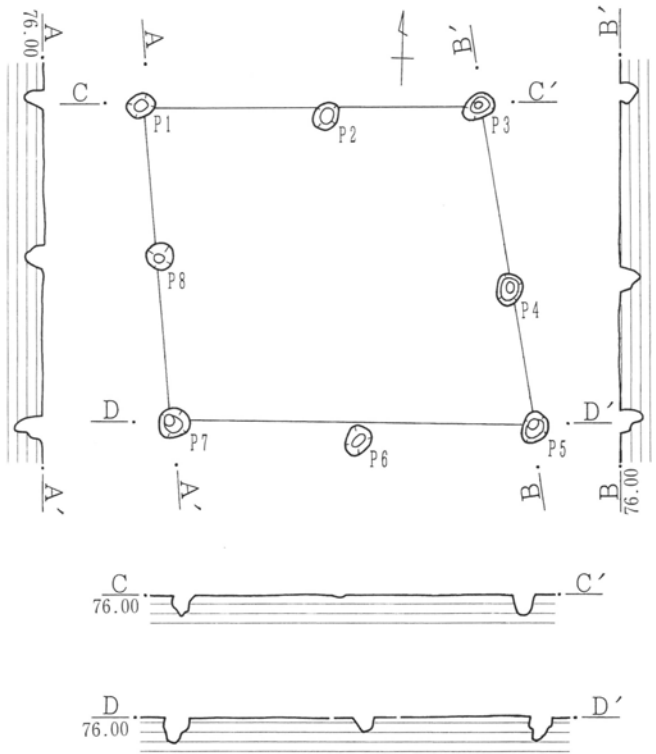
柱穴 掘方平面は方形で、いずれも深さが8cm前後と浅く、底面標高は76.55mほどで水平を保つ。埋土はAs-B混土である。柱痕跡や礎石は確認できなかった。

出土遺物 なし。



1号柱列	径 (cm)	深 (cm)	2号柱列	径 (cm)	深 (cm)
P 1	30×30	21	P 1	52×44	7
P 2	32×32	20	P 2	44×44	8
P 3	30×30	13	P 3	52×49	9
P 4	40×28	18	P 4	58×48	8
P 5	35×35	24	P 5	53×50	6
P 6	38×38	18			
P 7	31×27	10			
P 8	29×22	8			
P 9	23×19	7			

第261図 A区1・2号柱列跡



	径 (cm)	深 (cm)		径 (cm)	深 (cm)
P 1	22×18	16	P 5	24×21	19
P 2	21×20	7	P 6	24×20	11
P 3	24×21	16	P 7	24×22	22
P 4	24×20	16	P 8	22×21	15

第262図 E区1号掘立柱建物跡

P 5 - P 6 1.36m P 6 - P 7 1.56m
 P 7 - P 8 1.35m P 1 - P 8 1.26m

柱 穴 掘方の平面形は円形で、柱痕跡と思われる底面のくぼみは径5cm前後を測る。底面レベルはまちまち。埋土はAs-Bを含む砂質土である。

出土遺物 なし。

重複遺構 古代II期水田を切る。

重複遺構 古代II期水田を切る。

E区1号掘立柱建物跡 (第262図 PL.110)

位置 095-570・575グリッド

規模 2×2間 2.92×2.60m

主軸方位 N-89°-E

柱間寸法

P 1 - P 2 1.28m P 2 - P 3 1.46m
 P 3 - P 4 1.48m P 4 - P 5 1.12m

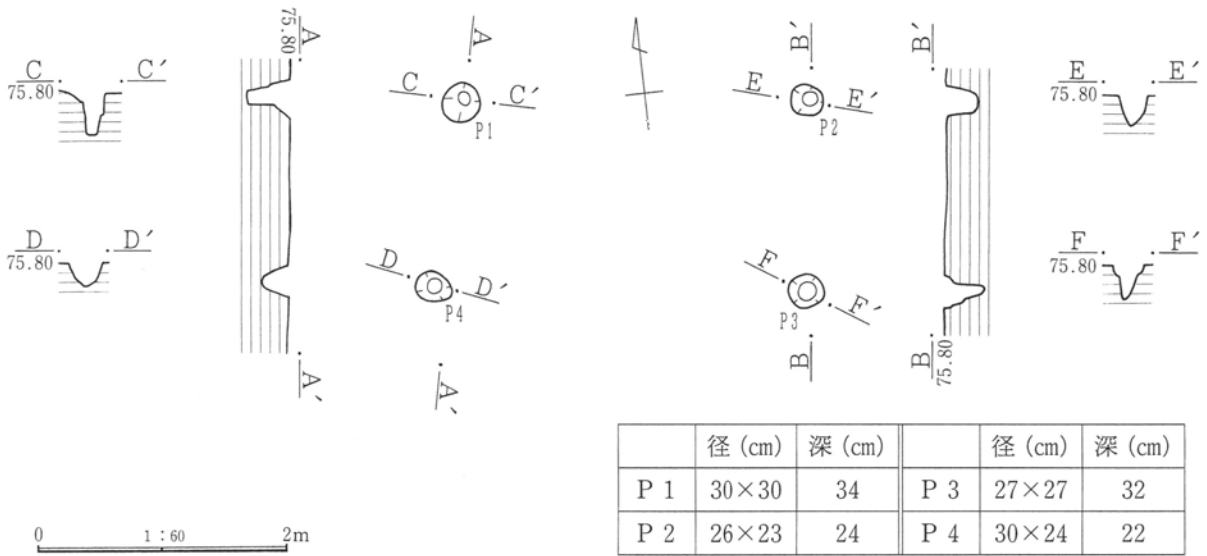
F区1号掘立柱建物跡 (第263図 PL.110)

位置 130-465グリッド

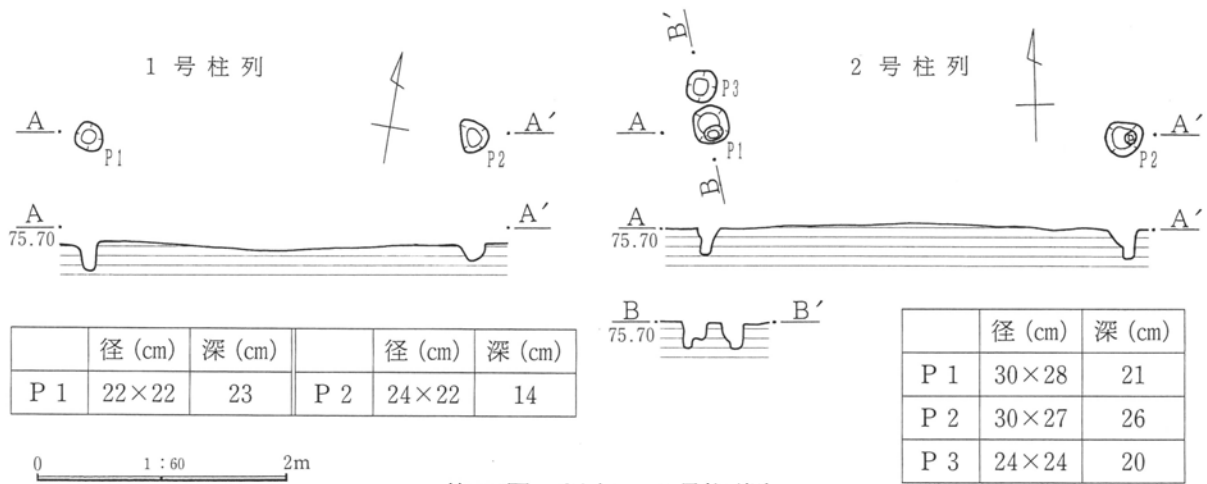
規模 1×1間 3.00×1.48m

主軸方位 N-83°-W

柱 穴 掘方平面は円形で規模はほぼ均一。柱痕跡



第263図 F区1号掘立柱建物跡



第264図 G区1・2号柱列跡

は径5~10cm。埋土はAs-Bを含む砂質土である。

出土遺物 なし。

重複遺構 古代II期水田を切る。

所見 低地に建てられた東西棟の小規模な建物という点で、A区1号掘立柱建物跡と同性格か。

G区1号柱列 (第264図)

位置 140-380グリッド

規模 3.05m 主軸方位 N-80°-E

柱穴 掘方平面は円形と不整楕円形で、深さは9cmの差がある。埋土はAs-Bを含む砂質土である。

出土遺物 なし。

重複遺構 古代II期水田を切る。

G区2号柱列 (第264図)

位置 150-380グリッド

規模 3.35m 主軸方位 N-89°-W

柱穴 掘方平面は円形で規模はほぼ均一。柱痕跡と思われる底面のくぼみは径5~10cm。埋土はAs-Bを含む砂質土である。

出土遺物 なし。

重複遺構 古代II期水田を切る。

(3) 井戸跡 (第265・266図 P L.116・117)

C区1号井戸 (第265図 P L.116)

位置 025-785グリッド

形状 平面は隅丸方形、断面は箱形。

規模 1.34×1.14m、深さ76cm

出土遺物 拳大の礫9点が出土。

重複遺構 なし。

E区1号井戸 (第265図 PL.116)

位置 105-575グリッド

形状 平面は隅丸方形、断面は箱形。

規模 0.64×0.50m、深さ57cm

出土遺物 なし。

重複遺構 なし。

G区1号井戸 (第265図 PL.116)

位置 130-380グリッド

形状 平面は隅丸長方形、断面は箱形。

規模 1.77×1.10m、深さ73cm

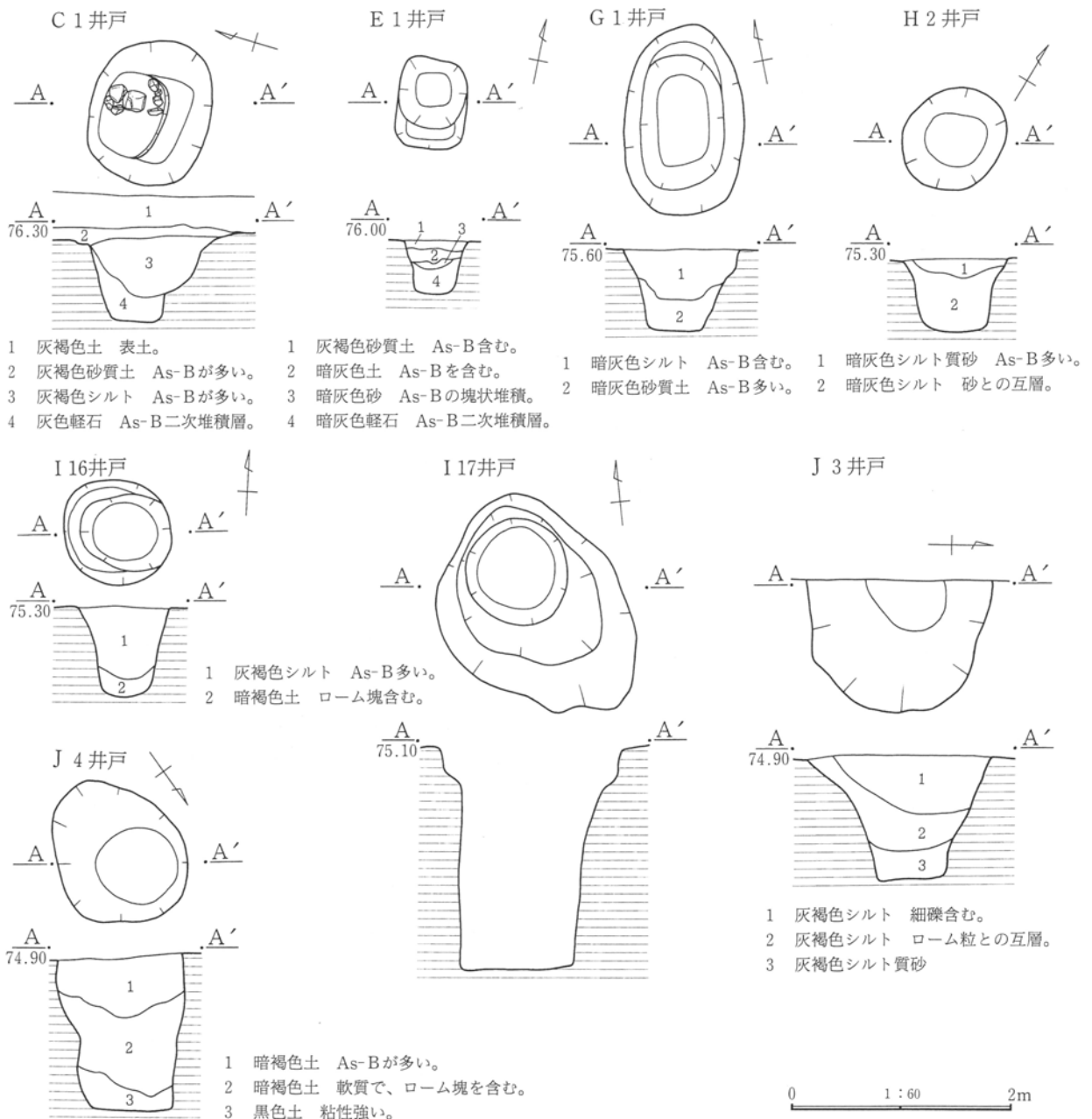
出土遺物 なし。 重複遺構 なし。

H区2号井戸 (第265図 PL.116)

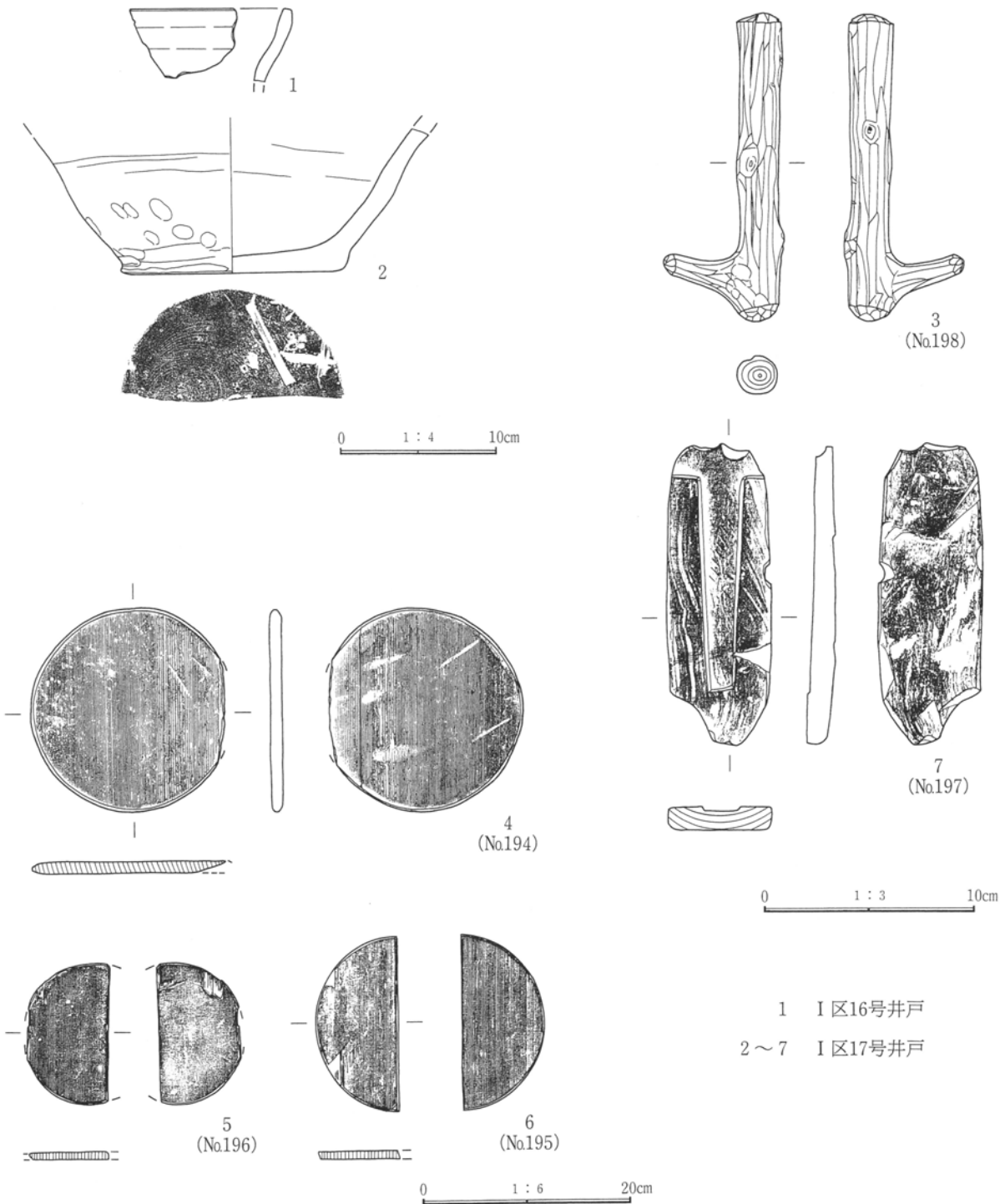
位置 190-225グリッド

形状 平面は円形、断面は箱形。

規模 1.02×0.92m、深さ70cm



第265図 中・近世の井戸跡



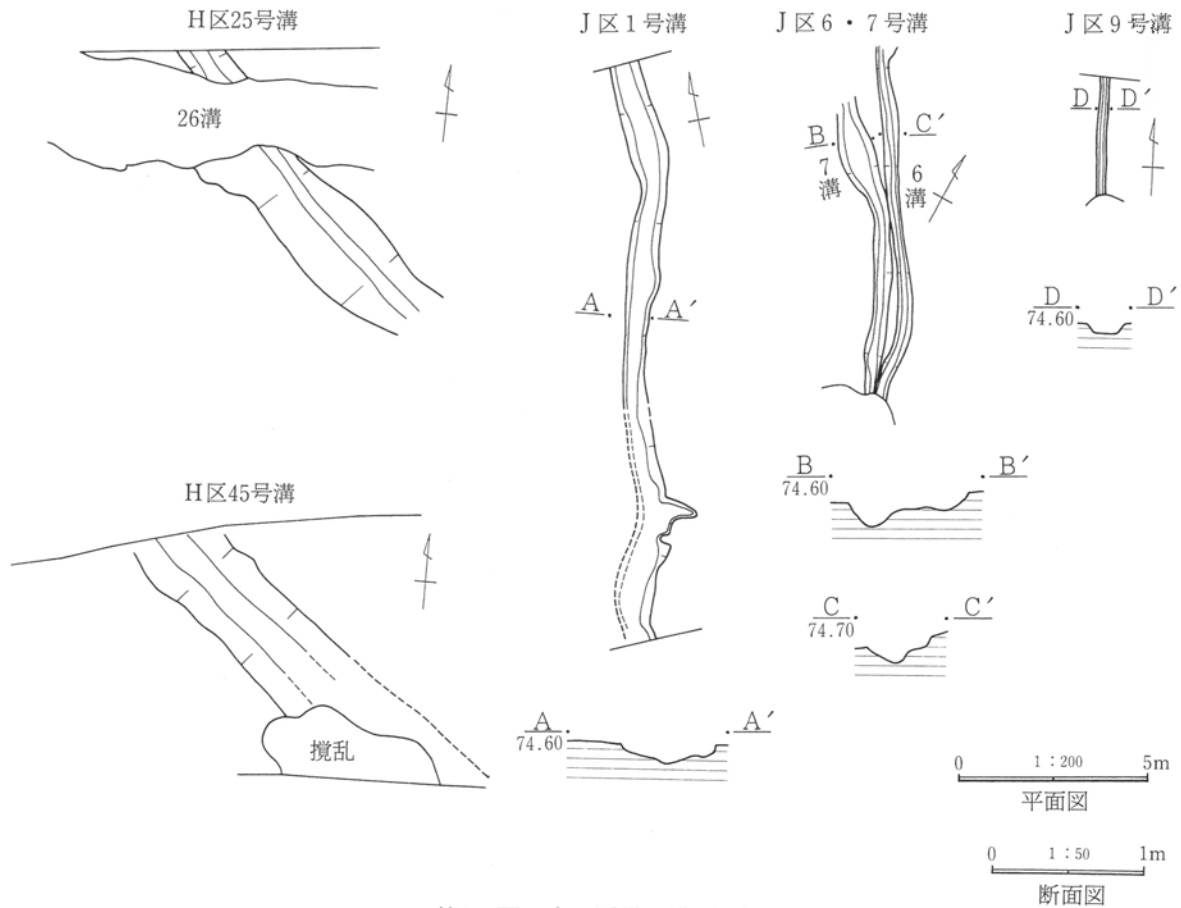
1 I区16号井戸
2~7 I区17号井戸

第266図 中・近世の井戸跡出土遺物

出土遺物 なし。
重複遺構 なし。

I区16号井戸 (第265・266図 P L.116)
位置 210-170グリッド、4号溝 (屋敷跡) 内区

の南東隅にある。
形状 平面は円形、断面は筒状。
規模 0.96m、深さ82cm
出土遺物 軟質陶器の鍋片一点が出土。
重複遺構 なし。



第267図 中・近世の溝 (1)

I 区17号井戸 (第265・266図 PL.116)

位置 165-110グリッド、26号溝の東 (屋敷跡) 内区にある。

形状 平面は楕円形、底面は円形、断面は筒状。

規模 2.14×1.65m、深さ205cm

出土遺物 甕か鉢 (2)、曲げ物の底板 (4~6)、手かぎ状木製品 (3) などが出土。重複遺構 なし。

J 区3号井戸 (第265図 PL.117)

位置 170-090グリッド

形状 平面は楕円形、断面は上部が開く。

規模 1.14×-m、深さ115cm

出土遺物 なし。重複遺構 なし。

J 区4号井戸 (第265図 PL.117)

位置 230-025グリッド

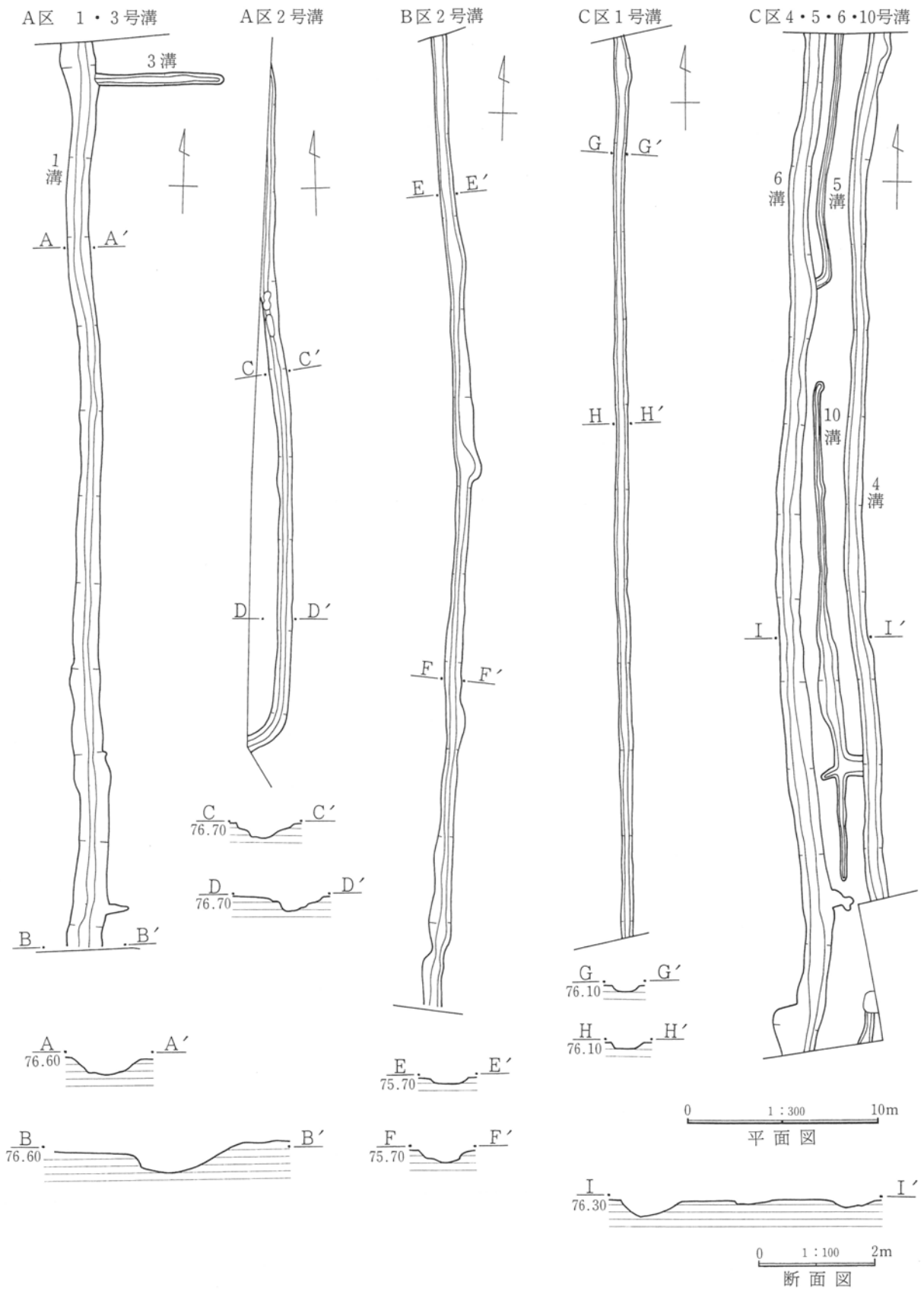
形状 平面は円形、断面は筒状。

規模 1.38m、深さ140cm

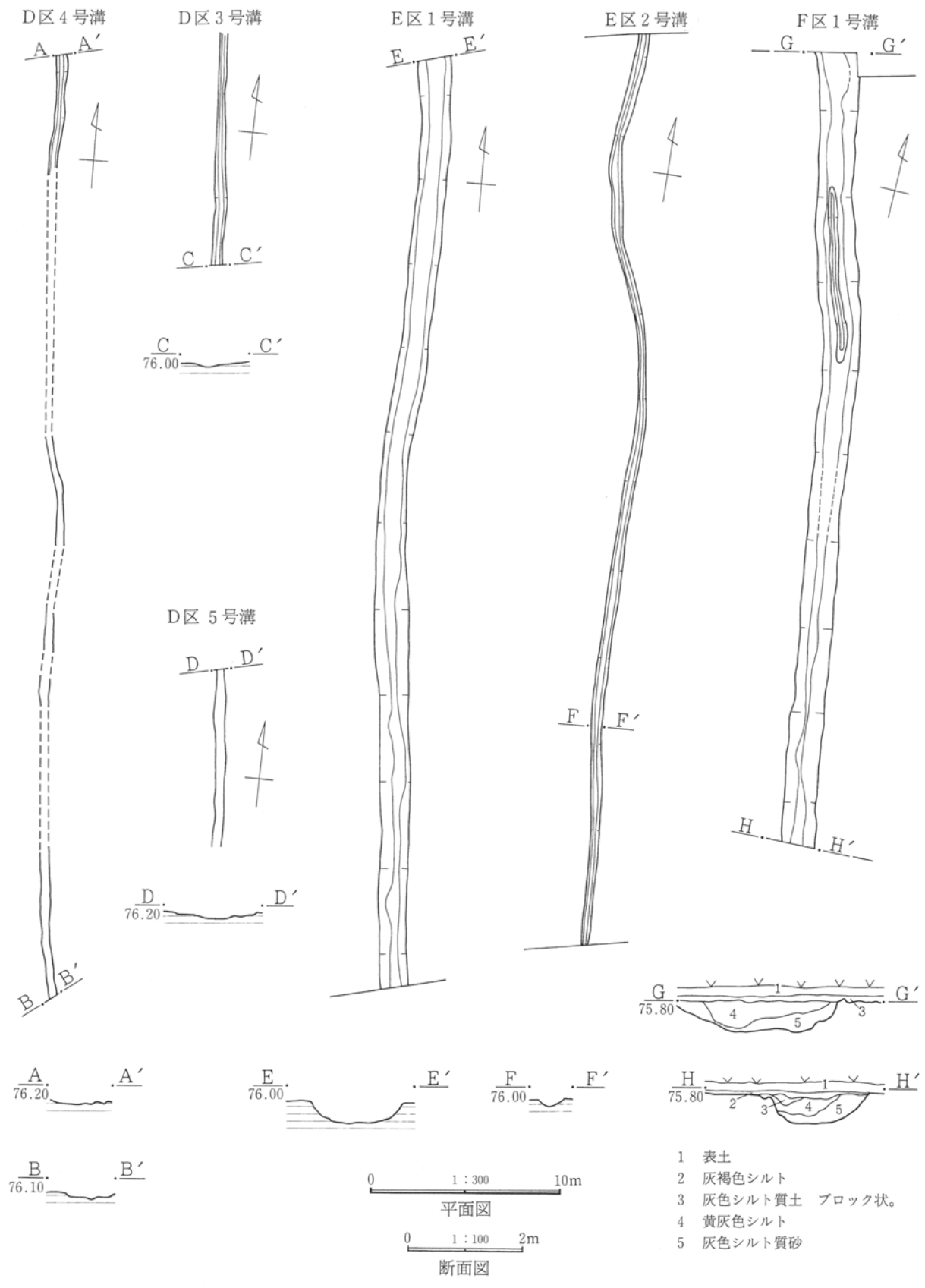
出土遺物 なし。重複遺構 なし。

(4) 溝 (第267~271図 PL.124~127)

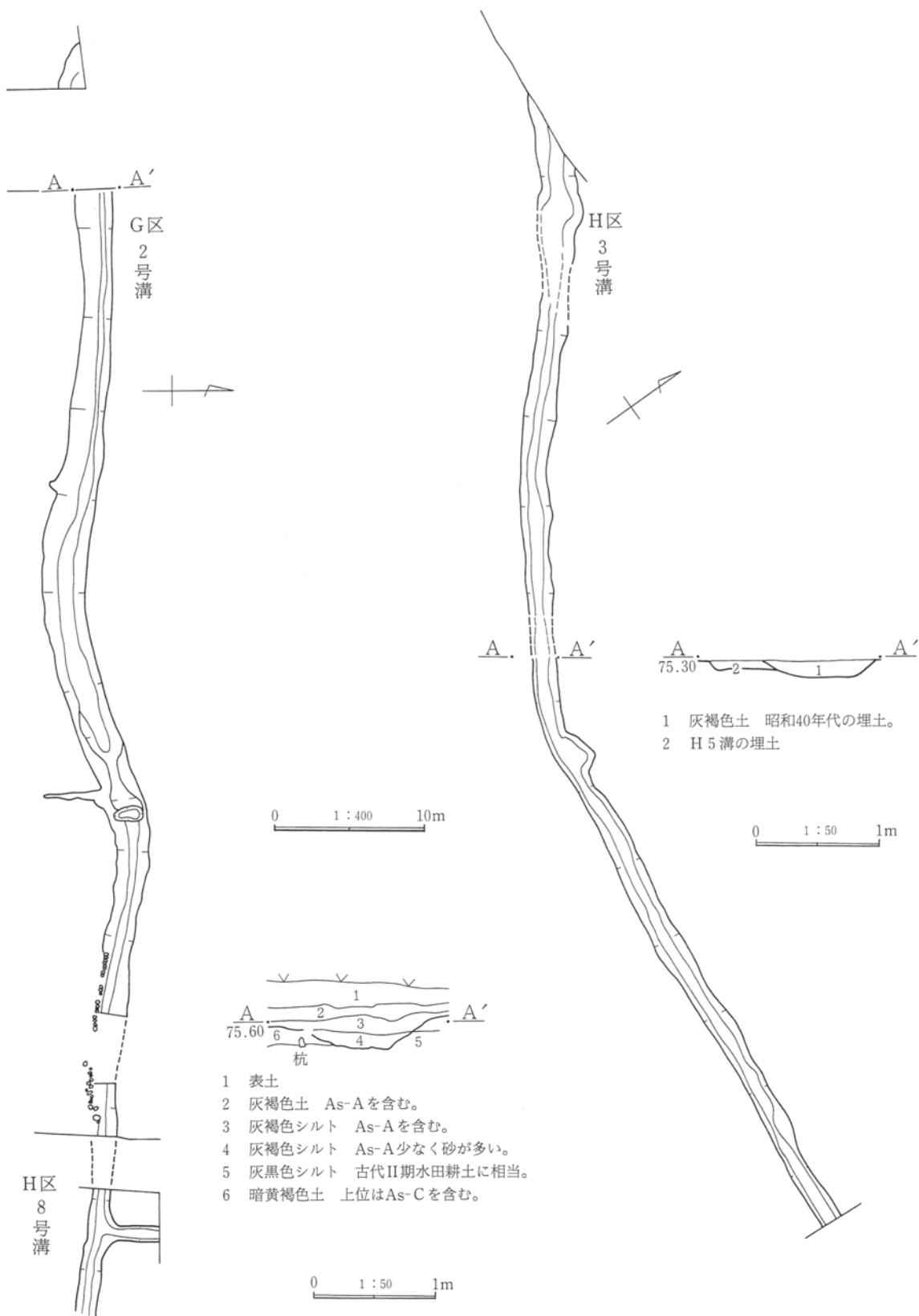
ここに掲げた溝は、いずれも水田に伴う水路群で、H区3・25・45・G区2号溝は西から東南東方向へ流れ、他は調査区北方を東西に流れる溝 (おそらくH区3号溝の延長) から南方向に分流した水路であろう。南北方向の水路間隔は、ほぼ90mから120mで、昭和43年測量の地形図に残る水路とほぼ一致する。ただし、上限時期については「元禄絵図」に記されており、元禄年間までは遡りうる。また、古代II期水田の大畦とは一致せず、継承されていないことがわかる。出土遺物 (第271図) は16世紀以降の陶磁器、下駄、蓋か底板が出土する。



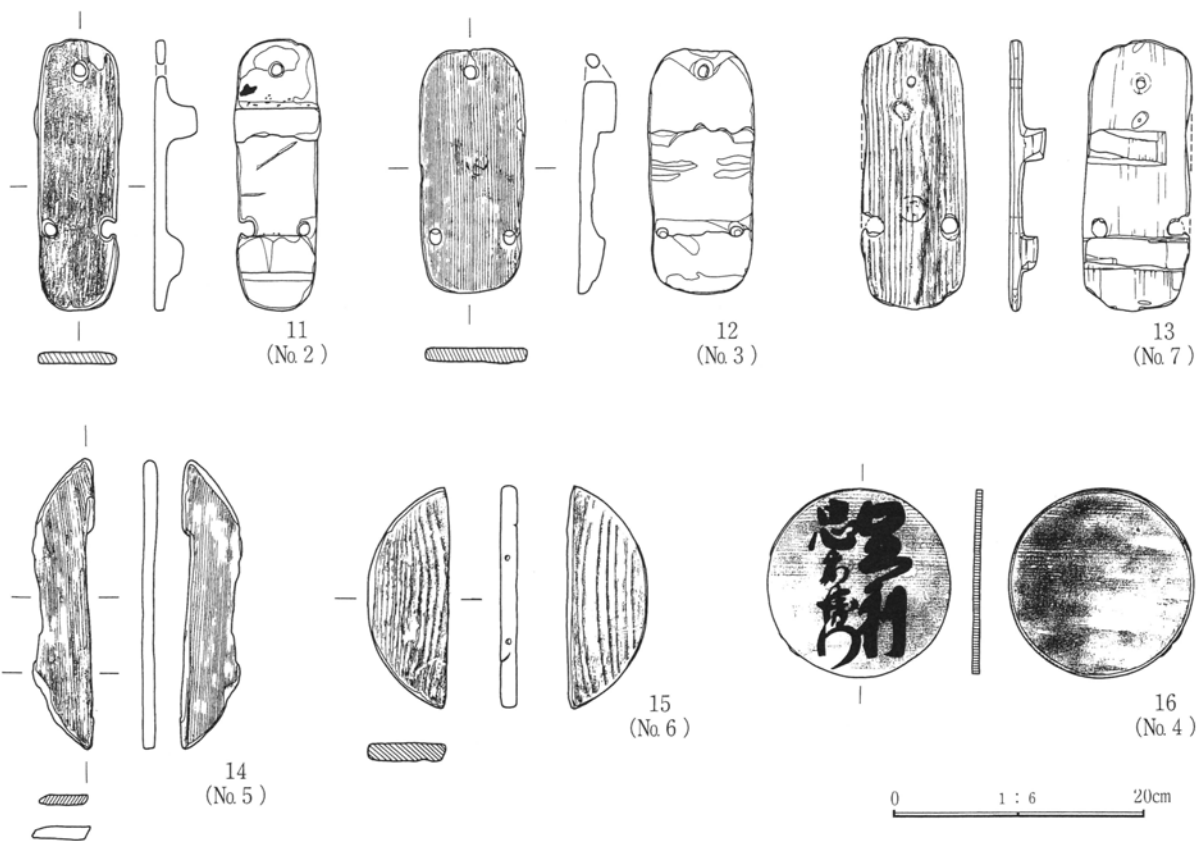
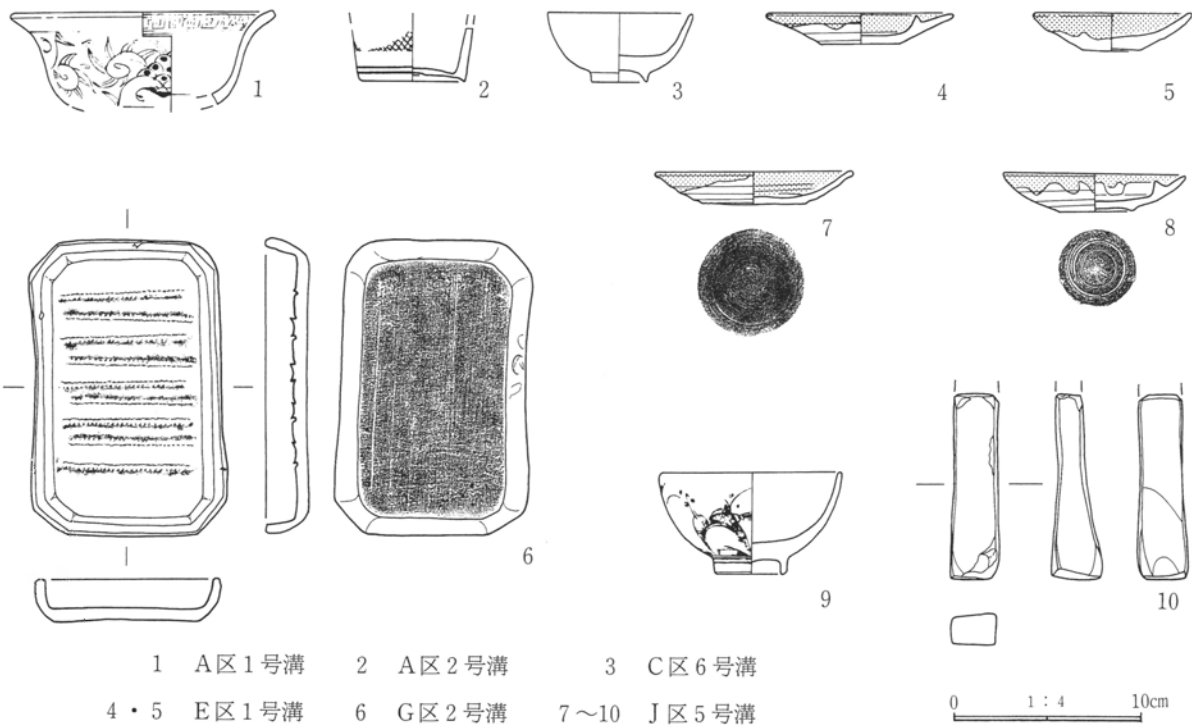
第268図 中・近世の溝 (2)



第269図 中・近世の溝 (3)



第270図 中・近世の溝 (4)



11・12・14~16 B区2号溝 13 H区3号溝

第271図 中・近世の溝出土遺物